

博 士 論 文

日中語の特殊受動構文に関する認知言語学的研究

—構文的特徴及び事態把握を中心に—

李 麗萍

2015 年

# 目次

<b>第 1 章</b>	<b>序 論</b> .....	<b>1</b>
1.1	研究動機 .....	1
1.2	研究の背景と目的 .....	4
1.3	研究対象及びその位置づけ .....	6
1.3.1	日本語における研究対象 .....	8
1.3.2	中国語における研究対象 .....	9
1.4	研究方法 .....	12
1.5	本論文の構成 .....	14
1.6	用語の定義 .....	15
<b>第 2 章</b>	<b>先行研究及び研究課題</b> .....	<b>24</b>
2.1	はじめに .....	24
2.2	先行研究 .....	24
2.2.1	使役受動構文に関する日中対照研究 .....	24
2.2.2	新型受動構文に関する先行研究 .....	27
2.2.3	間接受動構文に関する日中対照研究 .....	30
2.2.4	まとめ .....	31
2.3	本論文の課題 .....	33
2.3.1	本論文の立場 .....	33
2.3.1.1	本論文の受動構文の捉え方 .....	33
2.3.1.2	本論文の受動構文の分類 .....	35
2.3.1.3	本論文で扱う特殊受動構文 .....	38
2.3.2	本論文の研究課題 .....	60
<b>第 3 章</b>	<b>本論文の理論的枠組み</b> .....	<b>61</b>
3.1	はじめに .....	61
3.2	構文及び構文スキーマ .....	61
3.3	使用基盤モデル .....	63

3.4	プロトタイプ .....	65
3.5	事象構造 .....	68
3.6	事態把握 .....	70
3.7	まとめ .....	76
<b>第4章</b>	<b>中国語の新型受動構文の構文的特徴及び事態把握 .....</b>	<b>78</b>
4.1	はじめに .....	78
4.2	先行研究 .....	79
4.2.1	新型受動構文の構文的特徴に関する先行研究 .....	79
4.2.2	新型受動構文の事態把握に関する先行研究 .....	80
4.2.3	まとめ .....	81
4.3	新型受動構文の構文的特徴 .....	82
4.3.1	新型受動構文の形式的特徴 .....	82
4.3.2	新型受動構文の意味的特徴 .....	86
4.3.2.1	新型受動構文の意味分類 .....	86
4.3.2.2	新型受動構文の意味的ネットワーク .....	91
4.3.3	まとめ .....	94
4.4	新型受動構文の事態把握 .....	94
4.4.1	認定類の事態把握 .....	95
4.4.2	強迫類の事態把握 .....	98
4.4.3	まとめ .....	102
4.5	おわりに .....	103
<b>第5章</b>	<b>日中語の使役受動構文に関する対照研究 .....</b>	<b>105</b>
5.1	はじめに .....	105
5.2	先行研究 .....	107
5.2.1	日本語の使役受動構文に関する先行研究 .....	107
5.2.2	中国語の通常の使役受動構文に関する先行研究 .....	108
5.2.3	中国語の新型の使役受動構文に関する先行研究 .....	111
5.2.4	まとめ .....	112
5.3	日中語の使役受動構文の構文的特徴 .....	113
5.3.1	形式的特徴 .....	113

5.3.2	意味的特徴.....	120
5.3.2.1	強制類.....	121
5.3.2.2	原因類.....	123
5.3.2.3	指示・許容類.....	137
5.3.3	使役行為と使役結果の明示化.....	140
5.3.4	まとめ.....	143
5.4	日中語の使役受動構文の事態把握.....	145
5.4.1	強制類の事態把握.....	145
5.4.2	原因類の事態把握.....	149
5.4.3	指示・許容類の事態把握.....	152
5.4.4	まとめ.....	155
5.5	対訳データによる日中語の使役受動構文の対応関係.....	156
5.5.1	日本語の使役受動文とその中国語訳.....	157
5.5.2	中国語の使役受動文とその日本語訳.....	173
5.5.3	まとめ.....	183
5.6	おわりに.....	184
<b>第6章</b>	<b>日中語の持ち主受動構文に関する対照研究.....</b>	<b>190</b>
6.1	はじめに.....	190
6.2	先行研究.....	192
6.2.1	日本語の持ち主受動構文に関する先行研究.....	193
6.2.2	中国語の持ち主受動文に関する先行研究.....	200
6.2.3	日中語の持ち主受動構文に関する対照研究.....	202
6.3	日中語の持ち主受動構文の構文的特徴.....	205
6.3.1	日中語の持ち主受動構文に見られる所有関係.....	206
6.3.2	主体-活動関係にある日中語の持ち主受動構文.....	209
6.3.2.1	状況活動の持ち主受動構文.....	209
6.3.2.2	非状況活動の持ち主受動構文.....	213
6.3.3	相互依存関係にある日中語の持ち主受動構文.....	221
6.3.3.1	対格の属格類の持ち主受動構文.....	222
6.3.3.2	主格の属格類の持ち主受動構文.....	224

6.3.4	同一関係にある中国語の持ち主受動構文 .....	225
6.3.5	その他の所有関係にある日中語の持ち主受動構文 .....	228
6.3.5.1	全体-部分関係にある日中語の持ち主受動構文 .....	228
6.3.5.2	本体-属性関係にある日中語の持ち主受動構文 .....	239
6.3.5.3	一般所有関係にある日中語の持ち主受動構文.....	243
6.3.6	まとめ .....	247
6.4	日中語の持ち主受動構文の事態把握 .....	249
6.4.1	全体-部分関係の持ち主受動構文の事態把握 .....	249
6.4.2	主体-活動関係の持ち主受動構文の事態把握 .....	251
6.4.3	同一関係の持ち主受動構文の事態把握 .....	256
6.4.4	相互依存関係の持ち主受動構文の事態把握.....	257
6.4.4	まとめ .....	260
6.5	対訳データによる日中語の持ち主受動構文の対応関係 .....	262
6.5.1	日本語の持ち主受動文とその中国語訳 .....	263
6.5.2	中国語の持ち主受動文とその日本語訳 .....	293
6.5.3	まとめ .....	310
6.6	おわりに .....	311
<b>第7章</b>	<b>日中語の第三者受動構文に関する対照研究.....</b>	<b>319</b>
7.1	はじめに .....	319
7.2	先行研究 .....	322
7.2.1	日本語の第三者受動構文に関する先行研究.....	322
7.2.2	日中語の第三者受動構文に関する対照研究.....	325
7.3	日中語の第三者受動構文の構文的特徴.....	327
7.3.1	形式的特徴 .....	327
7.3.2	意味的特徴 .....	333
7.3.3	まとめ .....	352
7.4	日中語の第三者受動構文の事態把握 .....	354
7.4.1	有情物主語の第三者受動構文の事態把握 .....	354
7.4.2	無情物主語の第三者受動構文の事態把握 .....	356
7.4.3	まとめ .....	357

7.5	対訳データによる日中語の第三者受動構文の対応関係 .....	357
7.5.1	日本語の第三者受動文とその中国語訳 .....	358
7.5.2	中国語の第三者受動文とその日本語訳 .....	368
7.5.3	まとめ .....	373
7.6	おわりに .....	374
<b>第8章</b>	<b>結論 .....</b>	<b>381</b>
8.1	本論文のまとめ .....	381
8.2	日中対照研究の結果 .....	389
8.3	本論文の意義及び今後の課題 .....	393
	<b>参考文献 .....</b>	<b>397</b>
	<b>謝辞 .....</b>	<b>412</b>

## 表目次

表 2-1 日本語受動構文の分類 .....	36
表 5-1 日中語の使役受動構文の形式的特徴における異同点 .....	113
表 5-2 中国語における通常の使役受動構文の事態把握 .....	155
表 5-3 日本語の使役受動文に対応する中国語訳(365) .....	157
表 5-4 中国語の使役受動文に対応する日本語訳(235) .....	173
表 6-1 各研究者の「持ち主受動構文」への分類 .....	193
表 6-2 主体-活動関係にある日中語の持ち主受動構文の異同点 .....	221
表 6-3 日本語の持ち主受動文に対応する中国語訳(516) .....	263
表 6-4 中国語の持ち主受動文に対応する日本語訳(116) .....	293
表 7-1 日中語の第三者受動文における述語動詞の成立条件 .....	342
表 7-2 日中語における第三者受動構文の述語動詞 .....	351
表 7-3 日本語の第三者受動文に対応する中国語訳(121) .....	358
表 7-4 中国語の第三者受動文に対応する日本語訳(17) .....	368

## 目次

図 1-1 本論文での受動構文の分類及び研究対象の位置づけ .....	7
図 2-1 本論文での受動構文の分類及び研究対象の位置づけ(図 1-1 再掲) .....	38
図 2-2 本論文での日本語の受動構文の分類 .....	39
図 2-3 本論文での中国語の受動構文の分類 .....	45
図 3-1 構文間の継承関係 .....	62
図 3-2 スキーマと事例の関係 .....	63
図 3-3 使用基盤モデル .....	64
図 3-4 メタファー .....	66
図 3-5 プロトタイプ及び放射状カテゴリー .....	67
図 3-6 ビリヤードボール・モデル .....	68
図 3-7 行為連鎖 .....	69
図 3-8 プロトタイプの他動事態 .....	69
図 3-9 因果連鎖モデル .....	69
図 3-10 合成記号 lipstick maker の合成経路 .....	72
図 3-11 参照点関係 .....	76
図 4-1 中国語における受動構文の事象構造 .....	81
図 4-2 原因と結果への拡張 .....	91
図 4-3 新型受動構文の意味的ネットワーク .....	92
図 4-4 典型的な他動詞の意味表示 .....	93
図 4-5 自動詞の下位分類 .....	93
図 4-6 形容詞の表す非プロセス関係 .....	95
図 4-7 名詞の表す非プロセス関係 .....	95
図 4-8 普通 A 類の新型受動構文の事象構造 .....	96
図 4-9 特殊 A 類の新型受動構文の事象構造 .....	97
図 4-10 普通 B 類の新型受動構文の事象構造 .....	98
図 4-11 特殊 B 類の新型受動構文の事象構造 .....	99



図 4-12 名詞による普通 A 類の新型受動構文の事象構造 .....	101
図 4-13 形容詞による特殊 B 類の新型受動構文の事象構造 .....	102
図 5-1 中国語における使役・受動標識 .....	109
図 5-2 使役受動事態を表す複合的な構文の融合過程 .....	115
図 5-3 日本語の使役受動構文の融合過程 .....	117
図 5-4 中国語における通常の使用受動構文の融合過程 .....	118
図 5-5 中国語における新型の使用受動構文の融合過程 .....	119
図 5-6 日本語の使用受動構文の事象構造(強制類).....	146
図 5-7 中国語における通常の使用受動構文の事象構造(強制類).....	147
図 5-8 中国語における新型の使用受動構文の事象構造(強制類).....	148
図 5-9 日本語の使用受動構文の事象構造(原因類).....	149
図 5-10 中国語における通常の使用受動構文の事象構造(原因類).....	150
図 5-11 中国語における新型の使用受動構文の事象構造(原因類).....	151
図 5-12 中国語における通常の使用受動構文の事象構造(指示類).....	153
図 5-13 中国語における通常の使用受動構文の事象構造(許容類).....	154
図 5-14 日中語の使用受動構文の拡張過程 .....	187
図 6-1 部分全体関係の被害受動文の参照点関係 .....	197
図 6-2 所有関係の被害受動文の参照点関係 .....	197
図 6-3 ターゲット拡張:被害受動文の参照点関係 .....	198
図 6-4 所有傾斜 .....	207
図 6-5 日中語の持ち主受動構文に見られる所有関係の分類 .....	208
図 6-6 全体-部分関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造 .....	250
図 6-7 全体-部分関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造 .....	250
図 6-8 主体-活動関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(状況活動).....	251
図 6-9 主体-活動関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(非状況活動).....	252
図 6-10 主体-活動関係にある中国語の通常の使用受動構文の事象構造(非状況活動).....	253
図 6-11 主体-活動関係にある中国語の新型の使用受動構文の事象構造(一重受動)....	254
図 6-12 主体-活動関係にある中国語の新型の使用受動構文の事象構造(二重受動)....	255
図 6-13 同一関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造 .....	256
図 6-14 相互依存関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(対格の属格類).....	257

図 6-15 相互依存関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造(対格の属格類).....	258
図 6-16 相互依存関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(主格の属格類).....	259
図 6-17 相互依存関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造(主格の属格類).....	260
図 6-18 日中語の持ち主受動構文の拡張過程 .....	315
図 7-1 日本語の被害受け身文の事態把握 .....	323
図 7-2 日本語における有情物主語の第三者受動構文の事象構造 .....	355
図 7-3 中国語における有情物主語の第三者受動構文の事象構造 .....	355
図 7-4 日本語における無情物主語の第三者受動構文の事象構造 .....	356
図 7-5 中国語における無情物主語の第三者受動構文の事象構造 .....	357
図 7-6 日中語の第三者受動構文の拡張過程 .....	377
図 8-1 日中語母語話者の受動事態に対する把握の仕方の相違 .....	382
図 8-2 日中語の特殊受動構文の拡張過程 .....	384
図 8-3 日中語の特殊受動構文の拡張過程(続) .....	385
図 8-4 日中語母語話者の行為連鎖の参与者に対する際立ちの選択の相違 .....	387

## 本論文の表記法

### 1. 「○」

例文が文法的に正しい場合には普通何もつけずに示すが、特に例文の一部を文法的に正しくない形と比較する形式で示すときには○をつけて文法的に正しい形式を示す。

### 2. 「×」

その例文または例文の一部が文法的に正しくないことを表す。

### 3. 「?/??」

その例文または例文の一部が、全く文法的に正しくないわけではないが、不自然であることを示す。

### 4. 「#」

その例文が求められている意味と異なっている表現であることを示す。

### 5. { / } 例文の一部について、比較する形を示す場合に使う。

### 6. 「Φ」 ゼロ、すなわちそこには形式がないことを意味する。

### 7. 下線 例文中、本論文の考察対象となる部分には下線を引く。

### 8. 波線

例文中または本文中、考察対象となる部分の他に、強調したい形式がある場合用いる。

### 9. ( )

本論文中の中国語の例文・用語、または日本語の例文には、その和訳、または中訳を後続の( )内に入れて示す。「被」などの文法形式には基本的に初出の場合のみ、その語彙的意味を付す。

### 10. [ ]

本論文中の例文の出所を示す。[ ]内「訳」がついているのはその中訳、または和訳の出所を示す。「訳」がついていないのはその中訳が筆者によるものである。

### 11. その他の記号については、その都度説明を行うことにする。

# 第1章 序論

## 1.1 研究動機

日本人の中国語学習者には(1)~(3)のように、中国語受動文の誤用がよく見られる(陶琴 2007、郭栩 2013、车純蓮 2012)。

- (1) 小时候我{ ×被/○被迫 }学钢琴。

(子供の頃、私はピアノを習わされました)

[车純蓮 2012:17]<使役受動>

- (2) { ×我被弟弟抢了玩具/○我的玩具被弟弟抢了 }

(私は弟に玩具を奪われた)

[车純蓮 2012:18]<持ち主>

- (3) { ×因为被孩子来/○因为孩子来了 }，简直没法看书了。

(子供に來られて、勉強できなくなった)

[车純蓮 2012:16]<第三者>

一方、中国人の日本語学習者には(4)~(6)のように、日本語受動文の誤用がよく見受けられる(佐治 1992、張麟声 2001、中村 2002、李彦 2009、宋春雨 2014)。そのうち、とりわけ日本語の使役受動文、持ち主受動文、及び第三者受動文に関する誤用が挙げられる。

- (4) 私はこの事に{ ×感動された/○感動させられた }

[佐治 1992:234]<使役受動>

- (5) { ×田中さんの財布は/○田中さんは財布を }すりにすられた。

[張麟声 2001:134]<持ち主>

- (6) 台所には{ ×腐られた/○腐った }野菜しか残っていない。

[宋春雨 2014:22]<第三者>

そして、日本語母語話者には不自然に聞こえるような使役受動文や間接受動文の発話は

中国で編纂され、広く使用されている日本語の教科書における会話にさえ観察される(近藤他 2008、池上他 2009)<sup>1</sup>。その不自然さは、(7)~(9)に示すように、多くの場合文法的な問題というより、母語話者に不自然に感じられる、いわゆる日本語の「好まれる言い回し」を逸脱していると感じられるものである(近藤他 2008:296)。すなわち、どの言語の話者であっても、ある一つの事態をいくつかの違ったやり方で把握し、それに応じていくつかの異なるやり方で言語化する能力を有しているが、たとえ同じ事態であってもそれを認知的に異なるように把握し、異なるように意味づけすることができるという一方で、どの把握の仕方による意味づけをもっとも自然に感じ、もっとも好んで採るかという点では、言語が異なると差があるということなのである<sup>2</sup>(池上他 2009:18-19)。

(7) 私たちはその映画を見て{ ×感動させられ/○感動し }ました。

[近藤他 2008:299]<使役受動>

(8) 教師：元気がありませんね。どうしましたか。

タン：満員電車で{ ×私の財布が/○財布を }取られました。

教師：そうでしたか…。

[池上他 2009:90]<持ち主>

(9) リー：昨日、頭が痛くていで横になっていたんですが、外で道路工事を{ ×始めて/○始められて }、寝られませんでした。

山田：あ、そうでしたか。

[池上他 2009:92]<第三者>

---

<sup>1</sup> 以上の研究は、中国で編纂された日本語教科書の一部に不自然な受動文が存在することを指摘しているが、日本語教育の立場から、ある特定の教科書に出てくる受動文すべて(使役受動文も含む)を精査し、不自然な受動表現があるか否か、どれぐらい存在するのかを明らかにした研究はないようである。そこで、筆者は、中国で編纂され、日本語を(主)専攻としている学生に対して広く使用されている日本語教科書『新編日語(1-4)』(改訂版 周平、陈小芬 2009-2011 上海外语教育出版社)を調査対象とし、その中に使われている受動表現、特に近藤他(2008)、池上他(2009)が指摘したような日本語母語話者にとって不自然に感じられる例文が存在するかどうかを調べた。その結果、『新編日語』には、先行研究で指摘された不自然な使役受動文・持ち主受動文・第三者受動文は存在しないことがわかった。詳しくは、李麗萍(2015)を参照のこと。

<sup>2</sup> 日中事態把握の相違に関して、日本語母語話者は<主観的把握>を志向する傾向が強いのに対し、中国語母語話者は<客観的把握>に傾く傾向が強いという従来の見方がある。これについて、詳しくは池上(2009a)、近藤他(2007,2009,2010,2014)、梁爽(2009)、守屋他(2012)、王忻(2012)などを参照のこと。

(1)-(9)のような受動構文に関する誤用を見ると、次のような疑問が浮かぶ。中国語には本当に日本語の使役受動構文、間接受動構文に対応する受動構文が存在しないのか、存在するとすれば、形式的及び意味的に両言語はいかなる共通点と相違点を持っているのであろうか。同じ受動事態であっても、日本語母語話者と中国語母語話者は必ずしも同じタイプの受動構文によって表さない。受動事態に関して、日本語母語話者と中国語母語話者はいかなる<好まれる言い回し>を有し、そのような好まれる表現にどのような把握の仕方の相違を反映するののかについては十分には検討されていない。

また、中国語において(10)-(11)のように、2008年から見られるようになった、主に自動詞から構成された「新型受動構文」と呼ばれるものはあるが、その中で、自動詞による受動構文は日本語に特有と言われる自動詞<sup>3</sup>の第三者受動構文とは本質的に同じものなのか、両者は事態把握の面においてはどのような相違があるのか、などの問題が問われなければならない。

(10)被 自杀 其实 就 是 他杀。

受動 自殺する 実は 絶対に である 他殺

(自殺したことにされたという意味の「被自殺」とは実は他殺である)

[名城新闻网 2014-05-16]<新型受動>

(11)我 是 在 不明真相 的 情况 下 “被 就业” 的!

私 である で 真相を知らない の 状況 下 受動 就職する の

(本当のことを何も知らされないまま(就職していないが)就職していることにされたのだ)

[南方都市报 2009-07-20]<新型受動>

典型的な他動詞の受動構文あるいは直接受動構文に対して、以上三種類の受動構文、いわゆる日中語の使役受動構文と間接受動構文、及び中国語の新型受動構文を、本論文では「特殊受動構文」と一括して呼ぶことにする。こういった特殊受動構文はプロトタイプである直接受動構文からの拡張であると見なすことができると考えられる。それでは、それ

---

<sup>3</sup> 日中語において、自動詞と認定する基準は異なる。詳しくは相原他(1990)を参照のこと。

らの拡張はどのように事態把握のレベルで動機付けられているのか。言い換えれば、直接受動構文から使役受動構文、間接受動構文及び新型受動構文へと拡張できるのはなぜであろうか。

このように、日中語の特殊受動構文が習得しにくく、誤用されやすい現状から、これらの構文的特徴及び事態把握における差異を解明し、その成果を日本人の中国語学習者及び中国人の日本語学習者の学習に役立てることが望まれる。

## 1.2 研究の背景と目的

ヴォイスは一つの出来事をどの参与者から捉えるかに関わる文法カテゴリーであるが、受動態<sup>4</sup>がその典型的な一つとされてきた。受動構文に関して、これまで日本語においても中国語においても、多くの研究者によってさまざまな分析がなされてきており、いずれにしても受動構文は能動構文と対立した文型として捉えられてきた。しかし、工藤(1990)、林青樺(2009)、志波(2015)、王力(1944,1954,1958)が指摘するように、日中語において対立関係にある能動文を想定しにくく、しかも従来の基準によって間接受動文にはならない受動文が存在する。このような言語事実を無視して、日中語の受動構文に関する研究のほとんどが、対立する能動文の有無を基準とする二分法に縛られ、受動文の主語は動作対象だというプロトタイプ的な考え方で捉えられてきた(陸艺娜 2011:9)。受動構文の日中対照研究はそのような捉え方を援用し、日本語の使役受動構文及び中国語において日本語の使役受動構文と間接受動構文に対応する受動構文の存在が等閑視されてきた。このような考察方法では、日中語の受動構文における異同点を正確に確認できるとは考えられない。

受動構文に関しては、日本語において構文的特徴のみならず、事態把握の面からの研究(堀川他 2003、町田 2004,2005,2007,2011、谷口 2005、林青樺 2009)も少ないものが見られる。一方、中国語においては、構文的特徴からの研究を除外すれば、事態把握からの考察は極めてまれである(张媛 2012)。さらに、日中語の対照研究においては、そのほとんどは受動構文の構文的特徴に関する研究であり、事態把握と関連して分析するものは極めて少ない(星 2011、陸艺娜 2011、王黎今 2012)。よって、従来の研究は、文法的あるいは意味的に問題がある受動文については説明できるが、文法的にも意味的にも誤りとは言えない受

---

<sup>4</sup> 受動態には多くの研究の蓄積がある。例えば、Stein(1979)、Shibatani(1985)、Klaiman(1991)、Sansò(2003)、Givón(2006)などが挙げられる。

動文の不自然さに対しては、適切な説明を与えることができない。このように、受動構文に関する研究の成果を教育の場で生かすために、単に当該構文の構文的特徴の相違を解明することだけでは不十分であり、母語話者と学習者それぞれの事態把握のあり方、つまり意味づけから、言語化に至る過程、及び両者における違いまでを明らかにしなければならない。

日中語の受動構文に関する対照研究においては、そのほとんどが直接受動構文に関するものであり、使役受動構文と間接受動構文に関する対照研究はほとんどなされていない。また、これまでの日中対照研究における使役受動構文と間接受動構文の考察は、そのほとんどが構文的特徴に関するものであり、日本語母語話者と中国語母語話者との受動事態に対する事態把握の相違にはあまり言及していない。また、構文的特徴に関する先行研究の中でも、検討すべき点が多く残っている。例えば、中国語に日本語の使役受動文に対応する文型はないという定説、中国語における自動詞の第三者受動文の成立条件に関する仮説、及び日本語に中国語の第一人称行為主体による受動文に対応する受動表現が存在しないという視点制約などである。

本論文は以上のような問題意識の上に立ち、日本語・中国語教育への応用を視野に入れ、実例に基づき、日中語の特殊受動構文を研究対象とする。従来の対照研究と異なり、認知言語学の立場から、受動を再定義し、日中語の受動構文の体系を捉え直す。その上で、日中語における特殊受動構文の構文的特徴を対照観察することにより、それぞれの事態把握の相違を明らかにする。

本論文の目的は以下の三つである。

- 1) 日中語の特殊受動構文の構文的特徴を明らかにする。
- 2) 特殊受動構文の構文的特徴に反映する日中語の各構文の事態把握の特徴を解明し、事態把握のレベルで典型的な直接受動構文から特殊受動構文へと拡張する動機付け及びその拡張過程を明らかにする。
- 3) 同じ事態を捉える際、日中語母語話者はどのような<好まれる言い回し>を有し、そのような<好まれる言い回し>がいかなる事態把握の相違を表すのかを解明する。

また、考察する際に体系性、及び実用性を重視する。ここでの「体系性」とは、日中語の受動構文の体系全体を考慮に入れることをいう。研究の対象は直接受動構文を除外した



特殊受動構文ではあるが、事態把握のレベルで直接受動構文から特殊受動構文へとどのように拡張するのか、日中語の受動構文の体系において、特殊受動構文の三種類はいかなる位置づけになっているのか、といった問題を解明するため、直接受動構文と関連しつつ、日中語の特殊受動構文について考察を行う。

「実用性」とは、本論文の成果が日本人・中国人向けの中国語・日本語教育に応用できることをいう。前述したように、単に日中語の受動構文の構文的特徴の相違を解明することだけでは(1)-(9)のような誤用に対して十分に説明できず、母語話者と学習者それぞれの事態把握のあり方を解明しなければならない。そこで、本論文は日中対訳コーパスを十分に利用し、統計データをもって同一の事態に対して日中語母語話者における<好まれる言い回し>の選択の相違を考察し、それに反映する事態把握の傾向を明らかにする。こういった研究成果を日本人・中国人向けの中国語・日本語教育において生かしていただきたいと思う。

### 1.3 研究対象及びその位置づけ

日中語対照研究においては、受動構文、特に典型的な他動詞の直接受動構文に関する研究は、数多く行われているが、持ち主受動構文と第三者受動構文といった間接受動構文<sup>5</sup>に関する論述はほとんどなく(中島 2007:80)、特に使役受動構文に関する考察は極めて少ない。また、2008年に中国語に現れた、主に自動詞から構成される新型受動構文は、日本語に特有と言われる自動詞の間接受動構文との対照研究を行うものは管見の限り存在しない。

したがって、本論文は、日中語の受動構文の全体ではなく、そのうち、特に検討の余地が大に残るもの、すなわち、日中語の使役受動構文と間接受動構文、及び中国語の新型受動構文という三種類を研究対象とし、日中対照の角度からそれらの構文的特徴及び事態把握について考察を試みる。

本論文は、受動構文が能動構文と対立した文型であるといった捉え方ではなく、行為連鎖のエネルギー源ではなく、エネルギー源からのエネルギーを直接または間接的に受ける

---

<sup>5</sup> 日本語において、能動文の対応関係の有無という形式的側面による二分法、つまり「直接受動文」と「間接受動文」はよく知られている。また、「被害・迷惑」の意味が含意するか否かという意味的側面によって、以上の二種類はそれぞれ「中立受動文」、「被害受動文」と呼ばれることもある(谷口 2005:296-297)。谷口(2005:307)によると、中立受動文の持つ意味的機能をプロトタイプと考え、被害受動文はプロトタイプからの拡張であるとみなし、その拡張は事態解釈のレベルで動機付けられているという。

ものをもっとも際立つ参加者(tr)として選択し、そのものに生じた変化過程または結果状態を捉える認知的営みであるという立場を取る。それゆえ、対応する能動文を持つかどうかによる従来の受動構文の分類と異なる分類方法を考えなければならない。本論文では、まず構文的特徴を考察し次に事態把握の特性を探るため、主語の意味役割及び構文的特徴を基準にして日中語の受動構文を再定義し、再分類することにする。

本論文での日中語の受動構文の分類、研究対象の位置づけ、及び従来の分類との対応関係を図に示すと、次のようになる。

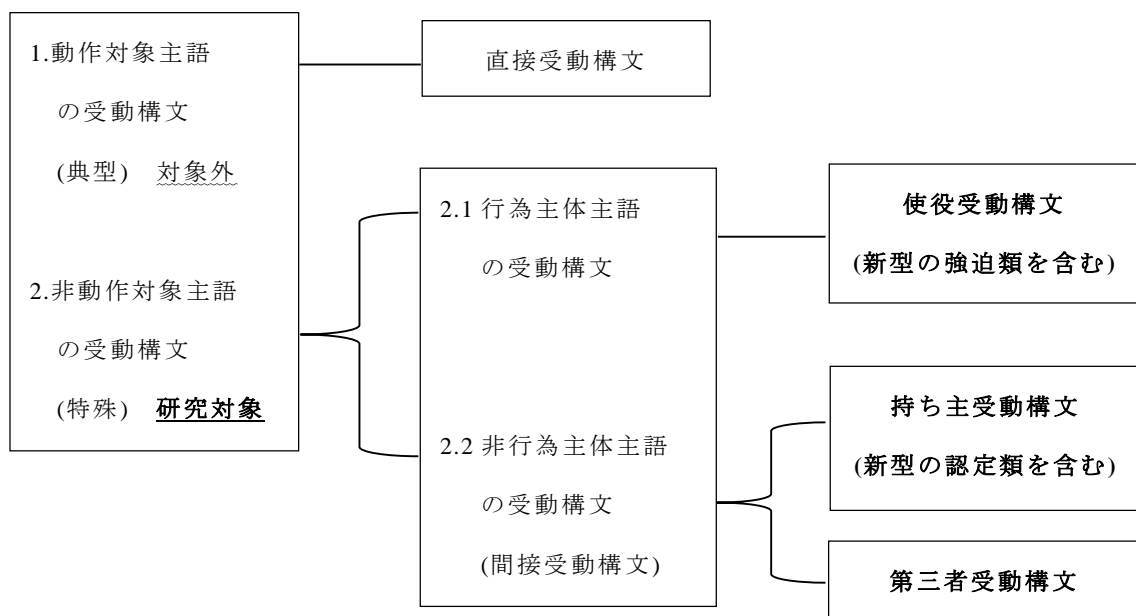


図 1-1 本論文での受動構文の分類及び研究対象の位置づけ

すなわち、典型的な動作対象主語の直接受動構文を受動構文の全体から除外したものが本論文の対象となる。後述するように、中国語の新型受動構文は大きく認定類と強迫類に分けられ、そのうち、強迫類は日本語の使役受動構文、認定類は日本語の持ち主受動構文に対応するものである。つまり、従来の受動構文に関する分類では、使役受動構文、持ち主受動構文及び第三者受動構文との三つのタイプが本論文の考察対象になる。詳しくは第2章を参照のこと。本節では、例を挙げながら簡単に紹介することにとどめる。

### 1.3.1 日本語における研究対象

まず、日本語において使役受動文は意味的に強制と原因と二分することができる。以下のような例文が本論文の考察対象になる。

(12) テレビを見ていたのにお使いに行かされた。

[庵他 2001:133]

(13) 植物は環境によってその形を変化させられてしまうというのも多くあります。

[丁 2005:228]

また、持ち主受動文は主語名詞と述語動詞に関わる名詞句または名詞節とが広義的な所有関係にある受動文である。持ち主受動文は所有関係によって詳しく下位分類することができる。これについて、第6章で論じる。

(14) 次郎は頭を太郎に殴られた。

[仁田 1997:231]

(15) 私は、花子にあめを口の中へ押し込まれた。

[山内 1997:122]

(16) 太郎は母に死なれた。

[山内 1997:122]

(17) 彼は(中略)だから、昨日戻ったところを殺された、ということになりますかね。

[仁田 1992:327]

(18) 隣の家が突風に屋根を吹き飛ばされた。

[影山 2006:205]

ここで注意すべきなのは、従来第三者受動構文の典型例とした(16)のような例文は所有関係(太郎の母)が存在するため、本論文では第三者受動構文ではなく、持ち主受動構文とするところである。また、(18)のような無情物主語の持ち主受動文も考察の対象にする。

さらに、第三者受動文は主語名詞と述語動詞に関わる名詞(句/節)の間に広義的な所有関係が存在しない受動文である。(20)のように無情物主語のものもあることに注意されたい。

(19)私は彼に先に論文を発表された。

[仁田 1997:231]

(20)風に吹かれて、ひらひらしている貼紙もある。

[対訳 黒い雨]

### 1.3.2 中国語における研究対象

中国語において、まず新型受動構文が対象となる。新型受動文には上に挙げた(10)-(11)のような自動詞によるもの以外に、他動詞、形容詞及び名詞によるものもある。こういった新型受動文は否定の意味、元の述語動詞及び動作主が明示されていないのが特徴的である。意味的に大きく非事実性を表す認定類と非意図性を表す強迫類との二種類に分けられる。詳しくは第4章を参照のこと。

(21)手術 台 上 动手脚 患者 无奈 被 消費

手術 台 上 小細工をする 患者 仕方がない 受動 消費する

(手術時に(医者が)余計なことをするため、患者は(そう望んでいないのに)しかたなく出費を強いられる)

[广东电视台 2013-09-06]<他動詞 非意図性>

(22)中国人 又 一次 “被 幸福” 了 吗?

中国人 また 一度 受動 幸福 完了 のか

(中国人はまた(外国のメディアによって、幸福ではないのに)幸福であることにされたのだろうか)

[腾讯网 2014-11-27]<形容詞 非事実性>

(23)鲁能 终于 没有 “被 冠军”，万幸 万幸。

チーム名 とうとう ない 受動 優勝者 幸甚 幸甚

(鲁能チームが最後に受動的に優勝者になっていないのが、誠に幸いであった)

[大众网生活日报 2010-10-28]<名詞 非意図性>

また、使役受動文は外的な使役者の影響によって、主語指示物が何らかの行為を行う、

またはある状態になることを表す受動文である。例えば、以下のようなものである。

(24) 东大 同学 刚刚 游行 回来, 就 被 集合 去 听  
東北大学 学生 したばかり デモ 帰ってくる すぐに 受動 集合する 行く 聞く  
学校 当局 的 堂皇 的 训话……

学校 当局 の 堂々としている の 訓話

(東北大学の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

[対訳 青春之歌]

(25) 方丹 被 自己 美好 的 想象 激动 着, 亮闪闪 的 眼睛里 现  
人名 受動 自分 美しい の 想像 感激する 持続 きらきら光る の 目 に 浮べる  
出 了 泪 光。

て来る 完了 涙 光

(方丹は自分の夢に心を動かされて涙を浮かべた)

[対訳 轮椅上の夢]

(26) 倪藻 走 进 一个 宽敞 的、同样 昏暗 的 客厅, 他 被 让  
人名 歩く 入る 一つ 広々としている の 同様 暗い の 客間 彼 受動 使役  
坐 在一个 不 新 的 暗 红色 沙发 上。

座る に 一つ ない 新しい の 暗い 赤色 ソファ 上

(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、彼は古びたエンジ色のソファに案内された)

[対訳一部修正 活动変人形]

さらに、持ち主受動文は主語名詞と述語動詞に関わる名詞句または名詞節とが広義的な所有関係にある受動文である。

(27) 我 被 他 抱 着 两只腿, 动弹 不得。 我 呆呆地 看 着 他。  
私 受動 彼 抱える 持続 両足 動く できない 私 ぼんやりと 見る 持続 彼  
(両足にしがみつかれて動けないまま、私はぼんやりと彼を見ていた)

[対訳 天云山传奇]

(28) 彰 被 他 的 儿 子 把 自 己 的 家 产 花 干 净 了。

人名 受動 彼 の 息子 処置 自 分 の 家 産 使 っ け り 完 了

(彰さんは子供に自分の家の財産をすっかり使い果たされた)

[黒田訳 2013:390]

(29) 阿 巧 不 敢 做 声 ， 心 里 却 万 分 怔 忡 …… 还 是 刚 才

人名 する 勇 気 が ない 立 てる 声 心 の 中 と ころ が 極 め て 動 悸 それ と も 先

被 她 看 见 了 她 对 阿 寿 做 了 两 次 的 手 势 。

受動 彼女 見 える 完 了 彼女 に 人名 する 完 了 二 回 の 手 真 似

(阿巧は震え上って、声も出せなかった……それとも、さっき阿寿に手真似をした

のが見つかったのか、どちらとも見当がつかなかった)

[対訳 霜叶红似二月花]

(30) 苹 果 被 削 了 皮 。

りんご 受動 剥 け 完 了 皮

(リンゴは、皮を剥かれた)

[于康訳 2012:2]

ここで注意すべきなのは、(28)のような「把」を伴う形式のもの、及び(30)のような無情物主語のものもあることである。

最後に、第三者受動文は主語名詞と述語動詞に関わる名詞(句/節)の間に広義的な所有関係が存在しない受動文である。(32)のように無情物主語のものもあることに注意されたい。

(31) 我 坐 庄 ， 又 被 他 自 摸 了 。

私 親 になる また 受動 彼 つ も る 完 了

((マージャンで)親になり、また彼につもられた)

[C.-T. James Huang 他 2009:140]

(32) 秦 始 皇 惹 了 孟 姜 女 ， 刚 修 的 长 城 被

秦 始 皇 帝 逆 ら っ け り 完 了 人名 した ばかり 修 築 する の 万 里 の 長 城 受 動

哭 倒 了 。

泣 け る 倒 れ る 完 了

(秦の始皇帝が孟姜女を怒らせたため、修築されたばかりの万里の長城は彼女に泣か

れて倒れた)

[月亮島教育 2015-04-17]

## 1.4 研究方法

話者の事態に対する把握は、その話者が使用する言語表現から探ることができる(中村2004:5)。したがって、話者の事態把握を明らかにする前に、話者の使用する言語表現の特徴を解明しなければならない。

本論文は、日中語の特殊受動構文の構文的特徴及び事態把握における相違を明らかにするという目的に従い、以下のような手順で研究を進めていく。まず、両言語における特殊受動表現の形式的・意味的相違を考察し、その構文的相違に反映する事態把握の差異を解明する。次に、日中対訳コーパスのデータに基づき、日中語の特殊受動構文の対応関係を分析し、日中語母語話者の同一事態に対する<好まれる言い回し>を考察し、そのような表現の違いに反映する把握の仕方の差異を解明する。

本論文での中国語の新型受動構文のデータについては、北京大学漢語語言学研究センター語料庫や日中対訳コーパスなどから抽出できないため、百度<sup>6</sup>からインターネットで実際に使用されている例を収集することにする。

日中語の特殊受動表現が実際にどのように用いられるのかを見るために、本論文では、できる限り作例を避け、以下のソースから実例を収集することにする。以下のように、用例の後、[ ]の中に出所を明示する。

### 1) 日本語

- a. 日中対訳コーパス [対訳 作品名]
- b. 現代日本語書き言葉均衡コーパス「小納言」 [小納言 作品名]
- c. インターネット検索: グーグルから検索する [出所を明示する]
- d. 先行研究から用例を引用する [論文の著者名、出版年と頁数を明示する]

---

<sup>6</sup> 百度とは、中国の百度会社が提供している検索エンジンの名称である。中国語を中心とした全文検索を提供しており、「中国の Google」の異名をとる(<http://www.sophia-it.com/content/%E7%99%BE%E5%BA%A6> 2015/11/28 参照)。

e.本稿による作例 [出典が明示されていない]

2) 中国語

a.日中対訳コーパス [対訳 作品名]

b.北京大学汉语语言学研究センター語料庫(北京大学漢語語言学研究センター語料庫)

[北京 作品名]

c.インターネット検索: 百度から検索する [出所を明示する]

d.先行研究から用例を引用する [論文の著者名、出版年と頁数を明示する]

e.本稿による作例 [出典が明示されていない]

なお、構文的特徴においては、主に文法形式や言語形式の表出、結果の意味の明示化などの形式面、及び主語の有生性、述語、情意性という意味面から考察を行う。

また、事態把握においては、主に詳述性、焦点化、際立ち、視点という四つから分析する。事態把握について、詳しくは第3章で紹介する。

ここでは、受動構文に関する従来の日中対照研究と異なり、本論文は認知言語学の理論及び事態把握の観点を用いて分析する必要性とメリットについて述べる。

第一に、受動構文に関する従来の日中対照研究は、受動構文は能動構文と対立した文型であるという考え方で、受動事態における動作対象以外の参加者を主語とする受動構文の分析を抜きにしており、このように、日中語の受動構文の体系間の真の不均衡を看出すことができない(陸艺娜 2011:9)。本論文は、受動構文を、従来の先行研究のように能動構文からの変形操作により意味を変えずに派生された構文とするのではなく、受動構文独自の意味機能、いわゆる「有標の状態」を持つもの(谷口 2005:40-41)と規定し、行為連鎖のエネルギー源からのエネルギーを直接または間接的に受けるものをもっとも際立つ参加者として選択し、そのものに生じた変化過程または結果状態を捉える認知的営みである(陸艺娜 2011:10)という認知言語学の立場を取る。その上で、動作対象を主語とする受動構文、いわゆる直接受動構文をプロトタイプとし、その他の非動作対象を主語とする受動構文、本論文でいう特殊受動構文をプロトタイプからの拡張だというプロトタイプ理論を援用する。このように、日中語の受動構文の体系を捉え直し、両言語の受動構文の体系における異同点を正確に確認することができると思う。

第二に、日中語の対照研究においては、その大部分が受動構文の構文的特徴に関する研究であり、事態把握と関連して分析するものはほとんどなされていない。よって、従来の



研究は、第 1 章で挙げた例文(1)-(4)のような文法的あるいは意味的に問題がある受動文については説明できるが、例文(7)-(9)のような文法的にも意味的にも十分な受動文の不自然さに対しては、適切な説明を与えることができない。このように、受動構文に関する研究の成果を教育の場で生かすために、単に当該構文の構文的特徴の相違を説明することだけでは不十分であり、母語話者と学習者それぞれの事態把握のあり方を明らかにしなければならない。本論文は研究成果を日本人・中国人向けの中国語・日本語教育へ応用することを目指すため、日中語の特殊受動構文の構文的特徴のみならず、事態把握をも考察する。

第三に、受動構文に関する従来の日中対照研究では、中国語に日本語の使役受動構文に対応する文型はないというのが今までの定説である。しかしながら、本論文は事態把握の面から見ると、機能的に中国語にも日本語の使役受動構文に対応する受動構文が存在し、両言語は使役事態のうち、結果事態の言語化において大きな相違が存在することを明らかにする。

## 1.5 本論文の構成

本論文は 8 つの章によって構成される。第 1 章では本論文の研究動機、研究の背景と目的、研究対象及びその位置づけ、研究方法及び用語の定義について述べる。

第 2 章では先行研究を概観し、その問題点を指摘した上で、本論文の立場及び研究課題を提示する。

第 3 章では、本論文の論述の支えとなる認知言語学の諸概念を紹介し、本論文の理論的背景を提示する。

第 4 章では、日中語の特殊受動構文に関する対照研究に入る前に、中国語の新型受動構文について紹介する。その構文的特徴及び事態把握を考察することによって、新型受動構文は述語の表す動作・性質・属性の主体、つまり行為主体が主語に立つ受動構文であると位置づけを行い、日中対照の観点から見ると、新型受動構文の強迫類は日本語の使役受動構文、新型受動構文の認定類は日本語の持ち主受動構文と対応するものである、ということを指摘する。

第 5 章から第 7 章にわたり、それぞれ使役受動構文、持ち主受動構文及び第三者受動構文という順を追って、日中語の特殊受動構文に関する対照研究を行う。考察の手順としてまず、先行研究を紹介し、その問題点を指摘する。次に、形式及び意味の面から特殊受動

構文の構文的特徴を考察し、日中語の共通点と相違点を解明する。また、そのような構文的特徴における差異に反映する事態把握の相違を認知モデルで表す。さらに、日中対訳コーパスより収集したデータに基づき、日中語の特殊受動文の対応関係を明らかにし、同一事態に対する異なる<好まれる言い回し>に反映する日中語母語話者の事態把握の傾向を解明する。最後に、以上の分析によって日中語において、事態把握のレベルで直接受動構文から特殊受動構文へと拡張する動機付け及び過程を明らかにし、日本人・中国人の中国語・日本語学習者の誤用について説明する。

最後の第8章では、本論文で明らかになったことをまとめ、日中対照の結果を述べ、今後の研究課題を展望する。

## 1.6 用語の定義

ここで、本論文で用いる「主語/行為主体/述語」、「使役/使役動詞」及び「結果/結果補語」という用語について説明しておく。

### 1) 主語、行為主体、述語

日中語の受動構文の研究では、受動構文の表す事態に関与するもっとも重要な参加者の二つを「主語」と「行為主体(動作主)」という呼称で呼んでいる。両者のうち、主語とは、ある名詞句の文内における成分としての機能であり、行為主体とは、名詞句の述語動詞に対する関係的な意味、つまり意味役割のことで、観点の異なる呼称である(志波 2015:31)。受動構文の場合、主語は意味的に「動作対象」であるとは限らず、いわゆる使役受動や、持ち主の受動、第三者の受動では、対象以外の名詞句が主語に立っている。ゆえに、こうしたさまざまな関係的な意味を有する参加者を統一的に指示するには、「主語」と呼ぶのが便宜的に都合がよいのである。他方、行為主体(動作主)のほうは、文内では補語であったり修飾語であったりするため、これは「行為主体(動作主)」と呼ぶことにする。本論文では、志波(2015)と同様に、意志の有無や有情物か否かに関わらず、広く行為連鎖(action chain)の始点と考えられるものを「行為主体」と呼ぶ。

なお、中国語の新型受動構文における「行為主体」は日本語の受動構文及び中国語の通常の受動構文における「行為主体」と異なる参加者を指す場合がある。中国語の新型受動構文では、否定の意味、元の述語動詞及び動作主が明示されないため、形式上「被」に後

続する動詞(句)・形容詞(句)・名詞(句)が述語になる。その主語指示物はこういった述語に関連する主体<sup>7</sup>であるため、明示されない動作主と区別して、「行為主体」と呼ぶことがある。よって、新型受動構文において、「行為主体」いうカテゴリーの指す範囲には、動作主体のみならず、属性主体及び経験主体も含まれることになる。つまり、本論文では便宜上、中国語の新型受動構文において、明示されない述語動詞の表す動作の主体を「動作主」と呼び、それと区別して述語の動詞(句)・形容詞(句)・名詞(句)に関連する主体、つまり主語指示物を「行為主体」と一括して呼ぶことにする。要するに、日本語の受動構文及び中国語の通常受動構文(使役受動構文を除く)においては、「主語」と「行為主体」はそれぞれ別のものを指すが、中国語の新型受動構文においては、「主語」と「行為主体」は「動作主」以外のもう一つの参与者、つまり述語に関わる主体のことをいい、実は同じものを指す。

また、「述語」とは文の支配的な要素であり、品詞によって、動詞述語・形容詞述語・名詞述語に分けられる(日本語記述文法研究会 2010:54)。形態変化を伴う活用を持つ日本語において、受動は動詞のみに関わる文法的カテゴリーである。それに対し、活用を持たない中国語においては、動詞以外、形容詞及び名詞も新型受動構文に入る。よって、中国語の新型受動構文における「述語」には、通常受動構文と異なり、品詞的に動詞・形容詞・名詞という三つがある。

中国語における受動構文の述語は普通は、単純な一つの動詞だけではないということはいしばしば指摘されている(刘月华他 1991、范晓 2006)。范晓(2006)は(33)のように、述語 VP に二つの動詞「吓(驚かす)」、「住(止まる)」がある場合、一方は主要動詞であり、他方は結果を表す副次動詞であるとしている<sup>8</sup>。

(33) 咱们 可 别 被他给吓住啊。

私たち 必ず てはいけない 受動 彼 助詞 驚かす 止まる 感嘆詞

(あいつに驚かされてはいけない)

[刘月华他訳一部修正 1991:452]

<sup>7</sup> 林璋(2010)は、こういった新型受動文における主語の位置に動作主のみならず、経験者や対象も生起し、通常受動文と区別するため、「動作主主語受動文」と呼んでいる。

<sup>8</sup> 张国宪(2006:164)によれば、こういった中国語の動補構造について、海外の学者は複合動詞だとみなすのに対し、大陸の学者は動詞フレーズだとみなす傾向があるという。つまり、例文(33)では、前者によれば、主語の「私たち」は「吓住」という複合動詞の表す動作の対象であるが、後者によれば、「吓住」という動詞フレーズのうち、「吓」という主要動詞の表す動作の対象である、とうことである。

本論文は、日中語の受動構文の構文的特徴を解明するため、范晓(2006)の意見に従い、述語が二つまたは二つ以上の動詞からなる場合、主要動詞だけを「述語動詞」と呼ぶことにする。

## 2) 使役、使役動詞

「使役」とは、二つの出来事間の関係を単一の節によって明示的に表すための言語的手段である(Lindsay 1997:193)。使役については多岐にわたる議論があるが、Shibatani(1976a:239,1976b:1)は特定の言語形式に囚われず、かつ通言語的にも適用できるような使役構文の定義を求め、二つの出来事間以下のような関係が存在すれば、使役構文だとみなす。本論文は Shibatani(1976a,1976b)の見解に従い、ある構文が①②の条件を満たせば、使役構文だと判定する。

① The relation between the two events is such that the speaker believes that the occurrence of one event, the “caused event,” has been realized at  $t_2$ , which is after  $t_1$ , the time of the “causing event.”

(二つのイベントの関係について、話者は、被使役事態が起こった時間  $t_2$  は、使役事態が起こった時間  $t_1$  の後である、と信じる。)

② The relation between the causing and the caused event is such that the speaker believes that the occurrence of the caused event is wholly dependent on the occurrence of the causing event; the dependency of the two events here must be to the extent that it allows the speaker to entertain a counterfactual inference that the caused event would not have taken place at that particular time if the causing event had not taken place, provided that all else had remained the same.

(使役事態と被使役事態の関係について、話者は、被使役事態の生起はすべて使役事態の生起に依存している、と信じる。すなわち、この二つのイベントの依存関係について、話者は、他のすべての状況が同じであった場合、もし使役事態が起こらなければ被使役事態も起こらない、という反事実的推論に基づく確信を抱くものでなければならない。)

Shibatani(1976b:1)[日本語訳は鄭(2006:100)による]

本論文では、使役状況の特徴づける二つのイベント、つまり「使役事態」と「被使役事

態」をそれぞれ「原因事態」と「結果事態」と呼ぶことにする<sup>9</sup>。鄭(2006)によると、使役は使役状況によって二分することができ、原因事態と結果事態を X、Y と表記すると、これら二種類の使役は次のように示すことができる。

#### X CAUSE Y

①.[ x DO SOMETHING ] CAUSE [ BECOME [ y BE ]]

②.[ x DO SOMETHING ] CAUSE [ BECOME [ y DO ]]

鄭(2006:103)

すなわち、一つは、「x が何かをする」ことが「y がある状態にある」ように引き起こすことである。もう一つは、「x が何かをする」ことが「y がある行為をする」ように仕向けることである。この二分類はほぼ「直接使役」、「間接使役」といった分類に等しい。Lindsay(1997:196-197)によると、直接使役は使役者の行為が被使役者の行為に直接の影響をもった状況を指し、間接使役は因果性の隔たりが大きい状況を指すが、この区分は絶対的なものというよりは、直接-間接の間にさまざまな段階を認めるものである。換言すれば、影響には性質の異なるものがあるものの、直接的なものから間接的なものへと連続体をなしていると考えられる。

使役の意味を表す表現のことを「使役構文」という。使役構文は従来、使役を表す形式あるいは手段によって、形態的使役、分析的使役と語彙的使役の三つに分けられている(早津 1997:164、Lindsay 1997:193-195)。それぞれ例を挙げると、以下のようになる。

① 形態的使役: a. ~させる b. -dir(トルコ語)

② 分析的使役: a. make/cause/compel/force+(to) do;

b.使(使う)/叫(呼ぶ)/让(譲る)/令(命じる)+NP+VP(使役兼語式<sup>10</sup>)

<sup>9</sup> 三宅(2004:20)によると、使役とはそもそも、二つの出来事の因果連鎖を表し、つまり原因となる出来事が起こり、結果となる出来事を引き起こすという事態である。よって、本論文は便宜的に、このような使役的事態を「原因」と「結果」との二つに分けて、それぞれ「原因事態」、「結果事態」と呼ぶことにする。

<sup>10</sup> 兼語式に関する先行研究は、「NP1+V1+NP2+VP2」という形式における V1 の動詞、つまり「使役動詞」についての認定において一致する意見が見つからないが、本論文は楊凱榮(1989:166)と同様、胡附、文煉(1990)の意見に従い、以下 1)-4)という四つの条件を満たすものを「使役兼語式」とし、その使役動詞 V1 として 5)のような動詞が挙げられる。

③ 語彙的使役: a. kill, destroy b. 殺す、壊す c. 杀(殺す), 毁(壊す)

また、彭利貞(1996)は世界の言語を考察し、使役を表現する形式、つまり使役形式(causative form)を、①のような形態的レベル、②のような文法構造のレベル及び④のようなゼロ形式のレベルとの三つのレベルに分けている。

④ ゼロ形式の使役: a. The noise of the traffic worried me. <英語>

(直訳:交通の騒音が私を悩ませた)

b. 泪水模糊了她的眼睛。<中国語>

(直訳:涙が彼女の目をぼやけさせた)

c. Tränen verschleierten ihre Augen. <ドイツ語>

(直訳:涙が彼女の目をぼやけさせた)

彭利貞(1996:105-106)

すなわち、④のような使役動詞(下線)は、③のような語彙的使役の他動詞と同様に、「NP1<sub>主語</sub>+VP+NP2<sub>目的語</sub>」という形式を取るが、NP2<sub>目的語</sub>がVPの表す動作・行為の対象ではなく、主体であるという点においては、普通の他動詞とは本質的に異なる(彭利貞 1996:105)。

本論文は彭利貞(1996)と同じ立場を取り、動詞のうち、①、②、④の形式を取るものを「使役動詞」、③の形式を取るものを普通の語彙的「他動詞」と呼び分けることにする。ただし、中国語の「使/叫/让/令」は先行研究に従い、「使役標識」と呼ぶこともある。

さらに、彭利貞(1993)によると、中国語では、④bのような「使宾动词(使役動詞)」は意味的に見ると、主に以下の五つに分けられる。

- 1) V1 が使役の意味を表す。
- 2) 「NP1+V1+NP2+VP2」のうち、V1 と NP2 との間に他の成分を付け加えたり、ポーズを置いたりすることが不可能である。
- 3) 「NP1+V1+NP2+VP2」の「NP2+VP2」を「NP1+V1」の前に移動し、「NP2+VP2+NP1+V1」のように置き換えられない。
- 4) V1 の動作と VP2 の動作との結び付きが強く、原因と結果の関係にある。
- 5) 使役兼語式における「使役動詞」  
使(～させる) 促使(促す) 迫使(余儀なくさせる) 致使(至らせる) 逼(迫る)  
强迫(むりやりにさせる) 托(託する) 委托(頼む) 唆使(唆す) 派(派遣する)  
打发(よこす) 差(よこす) 催(せかす) 请(～てもらう) 请求(お願いする)  
求(せがむ) 要(～てほしい) 劝(すすめる) 鼓励(励ます) 命令(命令する)  
吩咐(言いつける) 叫(～させる) 让(～させる)

1) 人間の心理あるいは感情を表すもの

可憐(哀れむ), 悪心(嫌がらせる), 愁(悩ませる), 急(いらだたせる)

2) ある動作を表すもの

活動(動かす), 休息(休ませる), 閉(閉まらせる), 交流(交流させる),  
関(閉まらせる), 迁移(移らせる), 留(留まらせる), 动摇(動揺させる)

3) ある変化を表すもの

変化(変化させる), 改善(改善する), 増長(増大させる), 降低(下げる),  
恢复(回復させる), 扩大(拡大する), 冷却(冷却させる), 振奋(奮い立たせる)

4) ある状態を表すもの

分裂(分裂させる), 开始(開始する), 陶醉(陶醉させる), 解放(解放する),  
发展(発展させる), 歪曲(歪曲する), 集合(集合させる), 颠倒(転倒する),  
分解(分裂させる), 落实(実行する), 暴露(暴露する), 激怒(怒らせる)

5) ある変化とある状態の両方を表すもの

感动(感動させる), 繁荣(繁栄させる), 累(疲れさせる), 完善(完全なものにする),  
激动(感激させる), 端正(正しくする), 暖(暖まらせる), 稳定(安定させる)  
満足(満足させる), 孤立(孤立させる), 松(柔らかくする), 兴奋(興奮させる)

彭利贞(1993:127-129)

1)-5)のような動詞は本論文では中国語の使役動詞の一種となる。

### 3) 結果、結果補語

本論文でいう「結果(caused event)」とは受動構文の表す使役事態、つまり原因事態と結果事態のうち、結果事態のことを指す。行為連鎖を見ると、Cause-Change-State 節のうち、Cause 節は原因事態を表し、Change-State 節は結果事態を表す。よって、「結果」は実は Change-State 節を指すが、単に Change 節(変化)または State 節(結果状態)のみを指す場合もある。

また、本論文でいう「結果補語」とは受動構文の表す使役事態の結果事態を表す補語のことを指す。一般的に言われる「結果補語」よりも範囲が広い。中国語では、「補語」とは動詞または形容詞の後に置かれ、主に動詞または形容詞に対して補充説明を行う成分であ

る(刘月华他 1991:447)。中国語の補語は数が多く、活用範囲が広い。刘月华他(1991)によれば、補語は以下の六種に分けられる。

- 1) 結果補語:a.看见(見て目に入る) b.站在我面前(私の目の前に立っている)
- 2) 方向補語:a.拿来(持って来る) b.走进剧场(劇場に入った)
- 3) 可能補語:a.出得来(出て来られる) b.忘不了(忘れられない)
- 4) 様態補語:a.辛苦得很(とても骨が折れる) b.写得很认真(まじめに書いてある)  
c.急得哭了起来(せっぱ詰まって泣き出した)  
d.压得粉碎(押しつぶされて粉々になった)
- 5) 数量補語:a.看过几次(何回読んだ) b.走了三天了(行ってから3日になる)
- 6) 介詞フレーズ補語:a.生于1881年(1881年に生まれた) b.驶向目的地(目的地へ向かう)

刘月华他(1991:447-531)

これら六種類の補語のうち、1)、2)、4)のcとd、5)及び6)のbはいずれも使役事態の結果事態、つまり「変化(Change)」または「結果状態(State)」を表すことができるため、本論文では「結果補語」となる<sup>11</sup>。

ほかに、アスペクト助詞「了」も「結果補語」の一種とする。なぜなら、「了」は「変化」を表すからである。アスペクト助詞「了」は、機能上、構造上の特徴の違いに基づき、さらに「完了」を表す「了<sub>1</sub>」と、「状況の変化」を表す、「語気助詞」とも呼ばれる「了<sub>2</sub>」の二つに分けられる<sup>12</sup>。刘月华他(1988:300)によると、「完了」を表す「了<sub>1</sub>」はいくつかの動詞につくと、(34)のように動作の受け手に対して何らかの結果(例:「壊された、なくなった」など)が生じることを表す、いわゆる「補語寄り」の用法を有する。

- (34) 小妹 不小心 打 了 一个 杯子。 <打了≡打破>  
妹 うっかりする 壊す 完了 一つ コップ

<sup>11</sup> 刘月华他(1991:645)によると、「被」受動文の述語は普通、単純な一つの動詞だけではだめで、その前か後に何かが必要であり、述語動詞の後に結果補語か方向補語、程度を表す様態補語、動量補語、時量補語、介詞フレーズ補語があるという。

<sup>12</sup> アスペクト助詞「了」の意味機能について、詳しくは刘月华他(1988)、吴凌非(2002)、陈小红(2007,2011)、宋绍年他(1999)、萧国政(1999)、方霁(1999)、张黎(2006)などを参照のこと。



(妹はうっかりして茶碗を割ってしまった)

[刘月华他訳 1988:300]

「了<sub>2</sub>」の表す変化は多種多様であり、主に以下の六つが挙げられる。

- 1) 事柄が「未発生」から「発生」になること:上课了(授業が始まった)
- 2) 動作が「未完了」から「完了」になること:作业写完了(宿題はやり終えた)
- 3) 動作が「進行」から「停止」になること:火车停了(汽車が止まった)
- 4) 事物の性質・状態に変化が生じたことを表す:张滨觉悟过来了  
(張濱は自覚するようになった)
- 5) 願望に変化が生じたを表す:他又想去了(彼はまた行きなくなった)
- 6) 数量の変化を表す:他三天没回家了(彼は三日間家に帰っていません)

刘月华他(1988:301-307)

さらに、文末の「了」が完了の意味を表していれば、それは普通「了<sub>1</sub>+了<sub>2</sub>」である(刘月华他 1988:312)。例えば、(35)のようなものである。

(35)经过几个月的努力,这头野象基本上被驯服了。

通す 数ヶ月の努力 この助数詞 野生象 ほぼ 受動 馴らす 完了  
(数ヶ月の努力の末、この野生の象はほぼ馴らされた)

[刘月华他訳 1988:312]

中国語では、動詞述語にアスペクト助詞「了」がつくと、(36)-(37)のように自然な受動文になるとされている(刘月华他 1991:312、木村 2000:23)。これはまさに、受動文文末の「了」はただ「動作の完了」を表すだけでなく、「変化」をも表すためだと考えられる。

(36)董大贵被小燕真挚诚恳的态度感动了。

人名 受動 人名 真挚 誠実な 態度 感動する 完了  
(董大貴は小燕の真挚で誠実な態度に感動した)

[刘月华他訳 1991:645]

(37) 他 的 房 子 被 地 痞 烧 了。

彼 の 家 受 動 ご ろ つ き 焼 く 完 了

(彼の家はごろつきに焼かれてしまった)

[木村 2000:23]

このように、本論文では、「変化」または「結果状態」を表すため、受動文の文末にあるアスペクト助詞「了」を、上に挙げた結果補語、方向補語、様態補語、数量補語、及び介詞フレーズ補語とあわせて、「結果補語」と呼ぶことにする。

## 第2章 先行研究及び研究課題

### 2.1 はじめに

本章では、本論文と関連する日中語の特殊受動構文の先行研究を紹介し、問題点を指摘した上で、本論文の研究課題を提示する。

以下、2.2.1 では日中語の使役受動構文に関する対照研究とその問題点を、2.2.2 では中国語の新型受動構文に関する先行研究とその問題点を、2.2.3 では日中語の間接受動構文(持ち主受動構文と第三者受動構文を含む)に関する対照研究とその問題点を見ていく。最後に、2.2.4 でまとめを行う。

### 2.2 先行研究

#### 2.2.1 使役受動構文に関する日中対照研究

日本語において、使役で言い表されたことがさらに受動の形で表現された「V-させられる」という形式を使役受動形という。日本語の使役受動構文に関する研究はこれまでその構文的特徴を中心に行われてきたが、事態把握の面からの研究は管見では存在しない。構文的特徴に関する代表的なものとして、森田(1977)、前田(1989)、丁(2004,2005)、高見他(2006)、山内(2007)などが挙げられる。

森田(1977)は、使役受動表現の表す意味には「強制」と「誘発」の二つがあり、後者のほうが多く用いられると述べている。前田(1989)は使役受動を独立したカテゴリーとする立場に立ち、「被役」といった意味用法の中に持ち主受動という間接受動による使役受動態も存在し、使役受動表現は迷惑以外に、「恩恵的」、「中立的」な意味合いもあると指摘している。

また、丁(2005)では、日本語の使役受動は、表面構造を基準にする際、受動の下位タイプの設定の場合と同様、直接使役受動、間接使役受動、持ち主の使役受動の三つの下位タイプが設定できるとし、その三つのタイプのうち、間接使役受動と持ち主の使役受動を中心に、意味の面からその特性とそれぞれの細部タイプ及び連続性などについて考察を行っ

ている。

なお、高見他(2006)は使役受動文となる条件を考察し、強制使役と原因使役の二つしか使役受動文にならず、使役受動文に課される意味的・機能的制約を提案した。すなわち、使役受動文は、使役者が、当該の使役事象を引き起こす直接的要因になっており、被使役者・主語指示物はその使役事象の直接的対象になっている場合にのみ、適格となる。明らかに、高見他は、丁(2005)でいう間接使役受動文を視野に入れずに、直接使役受動文のみを考察対象とし、このような意味的・機能的制約を提案した。つまり、この制約は直接使役受動構文にしか適用できないのである。

一方、日中翻訳の面においては、黄晓兵他(2008)では、中国語に日本語の使役受動文に対応する文型は存在しないとし、日中機械翻訳における使役受動構文の「被役」と「誘発」の二つの意味の翻訳規則を作成した。梁麗平(2013)では、使役受動表現「-させられる」の史的発展とそれが表す「強制・誘発・使役・可能・使役可能・尊敬・中立的」という七つの意味合いを考察し、各意味合いに対応する中国語訳を検討し、コーパスから抽出した例文を日中機械翻訳の観点から分析し、規則を作成し、その有効性を評価した。

従来の研究は、主に日本語の使役受動構文の二種の意味用法「強制」と「原因」に関するものであり、これらは本論文の土台となっている。また、日中対照及び翻訳の面からの研究では、中国語に日本語の使役受動構文に対応する文型はないというのが今までの定説であるが、林璋(2010:19)が指摘したように、近年中国語に見られる、(1)のように新型受動構文「被+X」は日本語の「Vさせられる」と同様に、動作主が他者の関与で不本意に行為をすること、つまり「強制使役」の意味を表す。林璋の指摘は非常に有益であるが、後述するように、新型受動文には、「強制使役」のみならず、「原因使役」の用法もあり、原因と強制的のいずれにしても、日中語は使役事態のうち、結果事態の言語化においては大きく異なる。

(1) 小心 “被 会员” 和 “被 消费”。

気をつける 受動 会員 と 受動 消費する

(会員にさせられ、消費させられることに注意する)

[[www.jryh.com.cn/html/2...](http://www.jryh.com.cn/html/2...) 2010-11-17 2014/12/13 参照]

さらに、(2)-(3)のように通常の使役受動構文はこのような使役受動の意味も表す。しか

し、使役受動事態を表すこれら三つの構文に関する対照研究はいまだにないようである。

- (2) 倪藻 走 进 一个 宽敞 的、同样 昏暗 的 客厅，他 被 让  
人名 歩く 入る 一つ 広々としている の 同様 暗い の 客間 彼 受動 使役  
坐 在一个 不 新 的 暗 红色 沙发 上。  
座る に 一つ ない 新しい の 暗い 赤色 ソファ 上

(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、彼は古びたエンジ色のソファに案内された)

a.使役能動文:(史太太)让他坐在一个不新的暗红色沙发上

(史太太が彼に古びたエンジ色のソファに座らせた)

[対訳一部修正 活動変人形]

- (3) 东大 同学 刚刚 游行 回来， 就 被 集合 去 听  
東北大学 学生 したばかり デモ 帰ってくる すぐに 受動 集合する 行く 聞く  
学校 当局 的 堂皇 的 训话……  
学校 当局 の 堂々としている の 訓話

(東北大学の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

a.使役能動文:(老师)叫东大同学集合去听学校当局的堂皇的训话

(先生が東北大学の学生を学校当局の訓話を聞くよう集合させた)

[対訳 青春之歌]

従来、「使役+受動」という形式にこだわるゆえに、日中対照及び翻訳の面からの研究では、中国語に日本語の使役受動構文に対応する文型はないというのがこれまでの定説である。しかし、本論文は、日中語において使役受動事態に関する把握の相違点を解明するために、以上のような研究と異なり、「使役+受動」という形式的特徴にこだわらず、孤立語である中国語においては、実質的な意味を持たない機能語を二つ繋ぎにくい(使役標識がついている使役受動文は極めて少ないということはまさにその証拠の一つであろう)ため、形式上使役標識がなくても、日本語の使役受動構文と同じ文法的振る舞い(対応する使役能動文が存在する)及び「使役+受動」の意味を表す受動文、つまり新型の使役受動文を通常の使役受動文とともに「使役受動構文」というカテゴリーに入れておく。

## 2.2.2 新型受動構文に関する先行研究

インターネット上において 2007 年に起きたある事件がきっかけとなり、この新しい「被+X」構文<sup>13</sup>が 2008 年から盛んに使われるようになったと言われている(王学群 2012)。これによって、新型受動構文に関する研究は研究者の関心を集めている。これまでさまざまな角度から、研究がなされてきた。

まず、新型受動構文の構文的特徴に関する代表的な研究として、彭咏梅,甘于恩(2010)、郑庆君(2010)、沈家煊(2010)、刘杰,邵敬敏(2010)、张建理,朱俊伟(2010)、林璋(2010)、王寅(2011)、池昌海,周晓君(2012)、王学群(2012)、张媛(2012)、施春宏(2013)、杨炎华(2013)などが挙げられる。これらの研究によれば、新型受動構文には、「被(被る)/叫/让/给(与える)<sup>14</sup>」などの受動標識のうち、「被」という受動専用の標識しか用いられず、また、他動詞のみならず、通常は受動構文にならない自動詞、名詞、形容詞も入ることができる。

当該構文の意味構造に関しては、一致する意見がいまだに見当たらない。NP<sub>受動者</sub>+被+X<sub>V·A·N(P)</sub>という意味構造を持つという見解<sup>15</sup>がある一方、NP1<sub>受動者</sub>+被+(NP2<sub>動作主</sub>+VP+)<sup>16</sup>X<sub>V·A·N(P)</sub>という意味構造を持つという指摘<sup>17</sup>もある。

すなわち、前者は新型受動構文「被+X」の「X<sub>Vi·A·N(P)</sub>」がすべて他動詞化あるいは動詞化の操作を経て、通常受動構文「被+VP」の他動詞と同じ振る舞いになると考えている。それに対し、後者は新型受動構文「被+X」の「X<sub>Vi·A·N(P)</sub>」には品詞変化が起こら

<sup>13</sup> この新型構文の呼び名に関しては、いまだに統一していない。「被 V<sub>双</sub>」(彭咏梅,甘于恩 2010、任荣华 2011)、「被+XX」(郑庆君 2010、汪敏峰 2011、杨炎华 2013)、「被 XX」(沈家煊 2010、刘杰,邵敬敏 2010、张建理,朱俊伟 2010、刘红妮 2010、刘宗开 2011、王春杰 2012、吕佩 2013、马静 2013)、「被+X」(陈文博 2010、池昌海,周晓君 2012、杨巍 2012)、「被 X」(何洪峰,彭吉军 2010、徐来娟,杨炳钧 2012)、「新被字句」(方林刚 2011、赵艳梅 2012)、「特殊·变异·新被字结构」(王开文 2010、丁力 2011、王寅 2011、张媛 2012、施春宏 2013)などがあげられる。「被」に後続するのが二音節動詞や二音節構造に限らないので、本論文では、構文文法の立場を取り、便宜上「被+X」構文を「新型受動構文」と呼ぶことにする。

<sup>14</sup> 中国語において、「被(被る)」は動詞の前に用い、受動の動作であることを表す受動標識の一つである。これ以外の受動標識として、「叫/让/给(与える)」などがある。「叫/让/给」は、「される」という受動の意味及び「させる」という使役の意味の両方を表すことができるが、どちらの意味を表すかは文脈によって決まる。

<sup>15</sup> 王寅(2011)、杨朝丹(2011)、张媛(2012)などが挙げられる。

<sup>16</sup> ここでの( )は、明示しないことを意味する。

<sup>17</sup> 何洪峰,彭吉军(2010)、陈文博(2010)、池昌海,周晓君(2012)、杨巍(2012)、陈长书(2012)、施春宏(2013)、杨炎华(2013)などである。

ず、ただ前後の文脈によってもう一つの「NP2<sub>動作主</sub>」及びその動作「VP」が明示されていないだけで、本質的には通常の受動構文と同様の意味構造を持っているとしている。では、新型受動構文の意味構造はいったいどのようになっているのであろうか。

新型受動構文を意味から分類すると異なる二つのタイプがあり、(4)のような非事実性(死んだというのは事実ではない)を表す認定類及び、(5)のような非意図性(手術を受けたくない)を表す強迫類がある(王淑华,杨仁君 2011:47、池昌海,周晓君 2012:60、杨巍 2012:91-92)<sup>18</sup>。王淑华,杨仁君(2011:47-48)によれば、非事実性とは「NP1<sub>主語+被+X</sub>」の「X」が表す出来事が事実ではないことであり、非意図性とは「X」の表す出来事がそれに関連する主体の意図によるものではないことであるという。

(4) 最近, 章子怡 也 遭遇 “被 死亡”。

最近 人名 も 遭遇する 受動 死亡する

(最近、章子怡も(生きているのに)死んだことにされた)

[法律常识 2010-08-27]<認定類 非事実性>

(5) 看病 “被 手术” ? 患者 心 慌慌

診察を受ける 受動 手術 患者 心 慌てる

(病院で(そう望んでいないのに)手術を受けさせられた?患者は不安がっている)

[民生论坛 2013-04-24]<強迫類 非意図性>

確かに、王淑华,杨仁君(2011)の意見は(4)-(5)のような典型的な用法については説明できるが、(6)-(7)のような周辺的な用法については説明できない。すなわち、(6)の「被信用卡(クレジットカードを(自分で申し込んでいないのに)申し込んだことにされた)」は、後続文脈「入手した時にはすでに年会費 50 元を払わなければならないことになっていた」からわかるように、「NP1<sub>主語+X</sub>」の表す出来事が事実ではないが、「X」の表す出来事が事実である。また、(7)の「被增长(住民の消費額は増加させられた)」は「X」の表す行為「増加した」が何かに強迫されたものとは言えないのではないだろうか。なぜなら、「住民の消費額」が意図性を持たない無情物であるからである。(7)のような用法は、日中対照の立場からの研究、例えば林璋(2010)でも「強制使役」であるとしている。それでは、非事実性と非意図性

---

<sup>18</sup> 林璋(2010)は中日対照研究の立場から、これら二つの意味用法「認定類」、「強迫類」をそれぞれ「被伝聞」、「被使役」と呼んでいる。

はどのように再定義するのか、認定類と強迫類はどのように下位分類を行うことができるのか、当該構文の意味的ネットワークはどのようになっているのであろうか。

- (6) 千名 学生 遭遇 “被 信用卡” 到手 已 欠 50 元 年费  
千人 学生 遭遇する 受動 クレジットカード 入手する すでに 負債 50 元年会費  
(千人の学生が、クレジットカードを(自分で申し込んでいないのに)申し込んだこ  
とにされ、入手した時にはすでに年会費 50 元を払わなければならないことになっ  
ていた)

[凤凰网 2010-12-19]

- (7) 北京 房价 物价 高涨 不止, 居民 消费 被 增长。  
地名 住宅価格 物価 騰貴する ない 止まる 住民 消費 受動 上がる  
(北京の住宅価格と物価が騰貴して止まらないため、住民の消費額は増加させられ  
た)

[地产中国网 2010-11-24]

一方、新型受動構文の表す事象構造や事態把握に関する研究は極めて少なく、一致した意見が見つからない。

陈长书(2012)は新型受動構文が「原因-動作-結果(原因-動作-結果)」といった使役事態を表し、「X」がその中の「結果(結果)」を表すと述べている。また、施春宏(2013)は新型受動構文がある「操控事件(支配する出来事)」を被るといった「蒙受事件(被る出来事)」<sup>19</sup>、言い換えれば、主語指示物が「X」に関連する出来事を受けることを表し、「X」がその中の「施为事件(実行する出来事)」を表すと分析している。陈长书(2012)のいう「結果(結果)」と施春宏(2013)のいう「施为事件(実行する出来事)」は異なるもののように見えるが、第4章で論じるように、両者はともに主語指示物の行う活動(動的な動き及び静的な属性・状態を含む)を表す。

また、张媛(2012)は通常受動構文の表す事態を典型的な他動事態とし、「X」が自動詞、名詞、形容詞である新型受動構文の表す事態を図式で表しているが、他動詞による新型受

<sup>19</sup> 施春宏(2013:18)は、新型受動構文の表す事態を、[E蒙受 A+被+[E操纵 B+V+[E施为~X~]]と表示している。そのうち、Eは事態、Aは影響を受けるもの、Bは事態を支配するもの、VはBの支配の仕方、~X~は支配の内容を表す。詳しくは施春宏(2013)を参照のこと。



動構文の事象構造が言及されず、自動詞、名詞、形容詞による新型受動構文の事態構造が統一しておらず、当該構文の表す事態の「非事実性」、「非意図性」といった「否定」の意味が表示されていないといった問題点が存在している。新型受動構文の事象構造に関する張媛(2012)の論述を4.2.2で詳しく紹介するが、ここではその問題点を指摘しておくことにとどめる。それでは、新型受動構文はいったいどのような事態を表すのか、「X」の部分が事態の中にどのように位置づけられているのであろうか。

本論文では、これらの問題に対して、認知言語学の理論を用い、使用基盤モデルによりボトムアップ的に新型受動構文の意味構造を分析し、下位分類を行い、メタファーとメトニミーの面から当該構文の意味的ネットワークを構築する。その上で、新型受動構文の構文的特徴に反映する事態把握を解明する。

### 2.2.3 間接受動構文に関する日中対照研究

日本語の間接受動構文に関する研究はこれまで構文的特徴と事態把握の二つに分けて行われてきた。構文的特徴の面では、代表的な研究として、寺村(1982)、益岡(1982)、Shibatani(1985,1990)、森山(1988)、工藤(1990)、仁田(1991,1992,1997)、村木(1991)、丁(1995,1996,1997)、柴谷(1978,1997)、山内(1997)、村上(1997)、仁田他(2000)、山下(2001)、影山(2006)、高見他(2000a,2000b,2000c)、高見(2011)、川村(2012)などが挙げられる。また、事態把握の面からの研究としては、主に堀川他(2003)、町田(2004,2005,2007)、谷口(2005)が挙げられる。

一方、中国語の間接受動構文に関する研究は日本語と比べて、それほど多くはなく、しかも構文的特徴の面からの研究しか見られない。まず、持ち主受動構文のうち、目的語残存のタイプに関する研究としては、李臨定(1980,1994)、徐杰(1999)、鵜殿(2005)、范晓(1998,2006)、勝川(2013)などが挙げられる。また、「把」を伴うタイプに関する研究としては、邵敬敏(1983)、李臨定(1986)、李珊(1993)、闫娇莲(2008)、柴东英(2012)などが挙げられる。さらに、第三者受動構文に関する研究は、そのほとんどは数例を挙げることにとどまっている。例えば、李臨定(1986)、楊凱榮(1989)、李珊(1993)、鵜殿(2005)などである。

さらに、間接受動構文に関する日中対照研究では、構文的特徴からの研究がこれまで中心的なテーマとなっている。対訳資料によるものとして、中島(2007,2012)、凌蓉(2005)が

挙げられる。そのうち、中島(2007,2012)はただ志賀直哉の『暗夜行路』とその中国語訳本を資料とし、日中語の間接受動文の対応の諸相を考察し、中国語の間接受動文が成立する条件とは何かを仮説として提起した。一方、凌蓉(2005)は日中対訳コーパスや辞書、新聞などから用例を集めて、日中語の間接受動文の文法的成立条件及び語用的特徴を全面的に検討した。このように、前者は対訳資料に限りがあるため提起した成立条件の仮説には問題があること、後者は日本語の間接受動文とそれに対応する中国語の受動表現が成立するか否かといった分析に偏っており、日中語の間接受動文とそれぞれの中国語・日本語訳との対応関係については特に言及していないこと、及び両者はともに事態把握と関連せず、単に日中語の間接受動構文の構文的特徴を検討しただけであること、という三点の不足が挙げられる。

日中語の持ち主受動構文に関する対照研究として、ほかに于康(2012,2013)がある。以上、持ち主受動構文に関する日中対照研究では、中国語にも日本語の持ち主受動文に対応するものが存在するという意見が見られるが、それらはすべて目的語残留の持ち主受動文に限られ、「把」を伴うタイプには言及していない。また、日中語の持ち主受動構文のそれぞれの使用要因において検討すべき点が多く、両言語の持ち主受動構文の体系に関する対照研究もまだ少ない。さらに、日中語の持ち主受動構文の構文的特徴、対応関係及びそれらに関連する事態把握における異同点に関する研究はほとんどないといってよい。

日中語の第三者受動構文に関する対照研究として、ほかに大河内(1974,1983)、金田一(1988)、王亜新(1990)、張麟声(2001)、杉村(2003)、星(2011)などがある。以上の日中対照研究では、中国語に第三者受動文が成立しないという定説に反する意見が見られるが、日中語の第三者受動構文の構文的特徴、対応関係及びそれらに関連する事態把握における異同点に関する研究はほとんどなされていないのが現状である。

#### 2.2.4 まとめ

以上、日中語の特殊受動構文に関する先行研究を概観してきたが、以下の問題はまだ分析が不十分であり、更なる考察が必要である。

- 1) 日本語の使役受動構文に対応する文型は中国語において存在しないとされているが、実は受動形式及び使役形式の両方を伴う通常の使役受動文すらもまれながら見

られる。また、第4章、第5章で述べるように中国語において、新型受動構文の強迫類は日本語の使役受動文と同様に、行為主体が主語に立つ、「使役受動」の意味を表す受動文であるため、使役受動構文として位置づけられると考える。このように、使役受動事態を表す日中語の三つの構文の間には、構文的特徴及び事態把握の面において、どのような共通点と相違点があるのか。

- 2) 日本語の持ち主受動構文に関する研究はこれまで、構文的特徴及び事態把握との二つの面に分けて行われてきたが、中国語の持ち主受動構文に関する研究は、構文的特徴の面からの考察しか見られない。また、日中語の持ち主受動構文に関する対照研究は、「把」を伴う持ち主受動文を除外し、目的語残存の持ち主受動文のみを対象に、それらの構文的特徴についての考察がなされているが、事態把握からの研究はほとんどないといってよい。さらに、第4章で述べるように中国語において、新型受動構文の認定類は行為主体、あるいは埋め込み文中の主格が受動文の主語位置に来る、という特徴を持っているので、持ち主受動構文として位置づけられると考える。よって、中国語における持ち主受動構文としての三つのタイプ、つまり、目的語残留のタイプ、「把」を伴うタイプ及び新型受動文の認定類は、構文的特徴において日本語の持ち主受動構文といかなる異同点が存在するのか。また、事態把握の面においては、日本語の持ち主受動構文と同様に、参照点関係を用いて説明することができるのか。
- 3) これまで、構文的特徴及び事態把握との二つの面から日本語の第三者受動構文について研究がなされてきたが、中国語の第三者受動構文に関する研究のほとんどは数例を挙げることで、日本語の第三者受動文に対応する受動文も存在すると指摘することにとどまっている。また、日中語の第三者受動構文に関する対照研究は、述語動詞、主語と行為主体の有生性などの面から、それらの文法的成立条件及び語用的条件についての考察が見られるが、日中語の第三者受動構文の構文的特徴において検討すべき点が多く残っている。さらに、構文的特徴のみならず、事態把握も含め、日中語の第三者受動構文を体系的かつ全面的に分析するものはない。
- 4) 町田(2004)、谷口(2005)は日本語において、第三者受動構文が直接受動構文からの拡張であるとみなし、事態把握のレベルでその拡張は動機付けられていると論じているが、それらに関する検証研究はいまだにないようである。使役受動構文をも受動構文の体系に入れて、日中対照の観点から見ると、それらの論述には問題がある。

日中語の受動構文の体系において、特殊受動構文はどのような動機付けによって、どのように直接受動構文から拡張するのであろうか。この問題に関する研究は管見の限り存在しない。

## 2.3 本論文の課題

### 2.3.1 本論文の立場

#### 2.3.1.1 本論文の受動構文の捉え方

従来、日本語においても、中国語においても、受動構文は能動構文と対立した文型として捉えられてきた。しかし、王力(1944,1954,1958)が夙に指摘するように、すべての能動文は変形操作により受動文になるわけではなく、「被」に代表される中国語の有標識の受動文は対立関係にある元の能動文を想定しにくい。一方、志波(2015)は、日本語において第三者の受動構文を除外し、心理・生理状態を表す動詞による受動構文では、対応する能動文が不自然な表現になるか、成立しない場合が多いと述べている。このような言語事実を無視して、日中語の受動構文に関する研究のほとんどが、対応する能動文の有無を基準とする二分法に縛られ、受動文の主語は動作対象であるという考え方で捉えられてきた。受動構文の日中対照研究はそのような捉え方を援用し、日本語の使役受動構文及び中国語において日本語の使役受動構文と間接受動構文に対応する受動構文の存在が等閑視されてきた。このような考察方法では、日中語の受動構文における異同点を正確に確認できるとは考えられない。

よって、本論文は従来の研究と異なり、認知言語学の立場を取り、Langacker(1982,2008)、谷口(2005)などに基づき、受動文を能動文からの変形操作により意味を変えずに派生された文ではなく、受動文独自の意味機能、いわゆる「状態化」あるいは「有標の状態」を持つものと規定する(谷口 2005:40-41)。換言すれば、受動文は主語指示物が何らかの有標な状態を新たに得たことを表す。その上で、陸艺娜(2011:10)で提案された両言語に共通した受動の定義及び受動文の定義 1)、2)を修正し、それぞれ 1)'、2)'のように再定義する。

1) 受動ヴォイスとは、アクションチェーンのエネルギー源ではなく、エネルギーを直接または間接的に受ける要素に焦点を置き、その要素に生じた変化過程または結果状態を捉える認知方式である。

2) ある文において、文の主語に位置するものがエネルギー源になりうる他者による動作行為の影響下にある場合、その文を受動文と認定する。

陸艺娜(2011:10)

1)' 受動とは、行為連鎖のエネルギー源ではなく、エネルギーを直接または間接的に受ける参加者に焦点を置き、それをもっとも際立つ要素(tr)として選択し、その参加者に生じた変化過程または結果状態を捉える認知的営みのことである。

2)' 受動文とは、ある文において、主語に立つものがエネルギー源になりうる他者による動作または事態の影響下にあり、しかも述語が受動の形式をしている場合、その文のことをいう。

高見(2011)は日本語受動文の成立条件として、「状態変化」、「特徴づけ」及び「利害表明」といった要因が挙げられるが、楊彩虹(2009)は、楊凱榮(1992)、木村(1992)、李珊(1993)などの論考に基づき、「結果性」が含まれるリアリティと外的「影響性」は中国語受動文の成立条件であると結論付けており、そして凌蓉(2005)は、「影響性」や、「被害などの意味特徴」、「結果化」などが日中語の受動文の成立条件として挙げられている。これらの要因は「有標の状態」という意味機能に由来すると考えられる。谷口(2005:42-43)によると、「被害」などの利害といった心理的な影響を含める「影響性」は、典型的他動関係またはそれに等しい行為連鎖の構造においては自明の条件となり、動作主・使役者からのエネルギー伝達を受けて受動者・被使役者に変化が生じることが「影響性」に相当すると言える。

また、陸艺娜(2011)は受動文マークを持たない文、つまり迂言的受動文や、語彙的受動文、自然受動文、存現文なども日中語の受動構文の体系に位置づけている。寺村(1982:213)は「何らかの一般的な形態的特徴を具えていることを受身の認定条件の一つとすることは、文法的形式の問題と表現の問題とを明確に分けて記述するために、特にいろいろな言語を対照して研究するさいに重要である」と述べている。本論文はこの寺村の意見に従い、第一焦点参加者が他者の動作または出来事によって影響を受ける主体であるという意味的特徴、及び述語が受動の形式をしているという形態的特徴の二つを日中語受動

構文の認定条件とする。つまり、陸艺娜(2011)でいう迂言的受動文や語彙的受動文、自然受動文などが受身的意味を表すにもかかわらず、述語が受動の形式を持たないため、それらを受動文と認定しない。

以下では、この定義に従って、主語の意味役割によって本論文の考察対象である「特殊受動構文」を定め、それぞれ定義を行い、従来の受動構文の全体における本論文での特殊受動構文の位置づけを明らかにする。

### 2.3.1.2 本論文の受動構文の分類

日中語における特殊受動構文を考察対象とする本論文では、中国語の受動構文に関しては、まず出現順序によって、「通常の受動構文」と「新型受動構文」との二つに分けられる。後者は2008年から使用されるようになった、主に自動詞から構成される受動構文のことをいう。これに対し、前者は、新型受動構文を除外した現代中国語に存在する受動構文の全般を指すものである。

本節では、日中語の受動構文に関する従来の分類方法を紹介した上で、主語の意味役割、つまり当該事態に関わるいずれの参加者が主語に立つのかを基準にして、両言語の受動構文を再分類し、従来の受動構文に関する分類との対応関係を解明し、本論文での考察対象を明らかにする。

既に述べたように、日本語の受動構文に関する多くの先行研究は、受動構文は能動構文と対立したものとして捉えられてきたので、使役受動構文は受動構文の一員としての存在を認められないか、無視されている。本論文は、以上の受動に関する定義により、使役受動構文は行為連鎖のエネルギー源ではなく、エネルギーを間接的に受ける要素をもっとも際立つ参加者(tr)として選択し、その要素に生じた変化過程または結果状態を捉える認知的営みであるとするため、通常の受動構文の下位分類として位置づける。

日本語の受動構文について、さまざまに分類が提案されてきた。その分類基準は研究者によって異なる。構文特徴によるもの(寺村 1982)もあれば、意味特徴によるもの(三上 1953)もある。表 2-1 は田中(2010:117)の表に三上(1953)を追加・修正したものである。

表 2-1 日本語受動構文の分類(田中 2010:117 より 一部修正・追加)

	三上 (1953)	寺村 (1982)	森山 (1988)	工藤 (1990)	Shibatani (1990)	仁田 (1991)	山内(1997)	
太郎が花子に殴られた	まとも	直接	まとも		Direct	まとも	斜格昇格型	
太郎が花子に足を踏まれた	はた 迷惑	間接	部分	当事者	Passive	持ち主	属	不可譲渡
太郎がすりに鞆を裂かれた			所有				格	可譲渡
太郎が妻に死なれた			第三者	関係者	Indirect Passive	第三者	昇格型	不可譲渡
太郎が雨に降られた							新規主格型	

寺村(1982:212-217)は、使役受動構文に言及せず、日本語の受動構文を対応する能動構文を持つかどうかといった構文的特徴によって、直接受動構文と間接受動構文に分類し、「持ち主受動構文」を間接受動構文に入れているが、氏自身が述べているように、この直接・間接の区別は基本的に三上のものを継ぐ。また、仁田(1991:231)は、寺村(1982)の分類基準に基づき、「まどもの受動」、「持ち主の受動」及び「第三者の受動」の三分類とすることを提案している。仁田(1991)のいう「持ち主の受動」の範囲は、一般に認識されているものよりも狭い。さらに、山内(1997)は「持ち主の受動」を独立させ、それが可譲渡かどうかによって下位分類を行っている。表 2-1 からわかるように、寺村(1982)以来の分類は、すべて受動構文は能動構文と対立したものであるという前提に立っている。

一方、中国語の通常受動構文も日本語のように「直接被动(直接受動)」と「间接被动(間接受動)」に分けることが可能ではあるが(李人鉴 1980、黄伯荣,廖序东 2002、廖真辉 2002)<sup>20</sup>、この分類は広く認められてはいないようである。受動標識の「被/叫/让/给」があ

<sup>20</sup> 中国語における「直接被动(直接受動)」と「间接被动(間接受動)」は日本語の「直接受動」及び「間接受動」と一対一の関係ではないが、共通点はある。中国語の「直接被动(直接受動)」とは、主語名詞の表すものは動詞述語の表す動作から直接的に影響を受けるものである。一方、「间接被动(間接受動)」とは、主語名詞の表すものは動詞述語の表す動作から間接的に影響を受けるものであり、直接的に影響を受けるものは動詞後の目的語の位置に残り、影響を受ける二つのもの間に領属・所有関係を持っている(李人鉴 1980、黄伯荣,廖序东 2002)。主語名詞の述語動詞によって表された動作からどのように影響を受けるかという意味的特徴から見れば、日中語の「直接受動」と「間接受動」はそれぞれ対応している。しかしながら、対応していない部分も存在している。中国語の「直接被动(直接受動)」は寺村(1982)のいう「直接受動」、仁田(1997)のいう「まどもの受動」に

るか否かによって、「有標の受動構文」と「無標の受動構文(受事主语句)」という二種類に分けられるのが一般的である(刘月华他 1991:641、李珊 1993:1-2、林晓玫 2007:14)。通常の受動構文においては、受動標識のうち、「被」がもっとも典型的であり、唯一の受動専用の標識である(李珊 1993:2、林晓玫 2007:14-15、楊彩虹 2009:4)。また、新型受動構文においては、「被」という受動標識しか用いられない。そこで、本論文では、中国語の受動構文を受動標識「被」で構成されるものに限ることとする。そして、日中対照研究を行うため、中国語の通常の受動構文を日本語の受動構文の分類基準にしたがって、両言語に共通した受動構文の分類を行うことを試みる。

本論文は、日中語において、寺村のいう「直接受動構文」には対応する能動文が不自然、または存在しないものがあるといった言語事実を認め、使役受動構文も受動構文の下位分類として位置づけ、受動文の主語の意味役割、すなわち、主語と述語動詞の語幹(日本語の場合)、または述語との関係的な意味によって、まず日中語の受動構文を大きく「動作対象主語の受動構文」と「非動作対象主語の受動構文」との二つのタイプに分類する。前者は典型的な他動詞の受動構文であり、ほぼ従来の「直接受動構文」と呼ばれるものに対応する。つまり、本論文では、後者の「非動作対象主語の受動構文」といった「特殊受動構文」を考察対象とし、前者の「動作対象主語の受動構文」を研究対象から外す。また、非動作対象主語の受動構文は、その主語が行為主体であるか否かによって、行為主体主語の受動構文と非行為主体主語の受動構文とのサブタイプを立てる。さらに、行為主体主語の受動構文は出現の順序によって、通常の使役受動構文と新型の使役受動構文(中国語にしかない)と二分類する。一方、非行為主体主語の受動構文は構文的特徴によって、持ち主の受動構文と第三者の受動構文に分ける。

以上、本論文での日中語の受動構文の分類及び考察対象の位置づけを図にまとめると、次のようになる。

---

対応しているのに対し、中国語の「間接被动(間接受動)」は仁田(1997)のいう「持ち主の受動」にしか対応せず、仁田(1997)のいう「第三者の受動」に対応するものが存在しない。



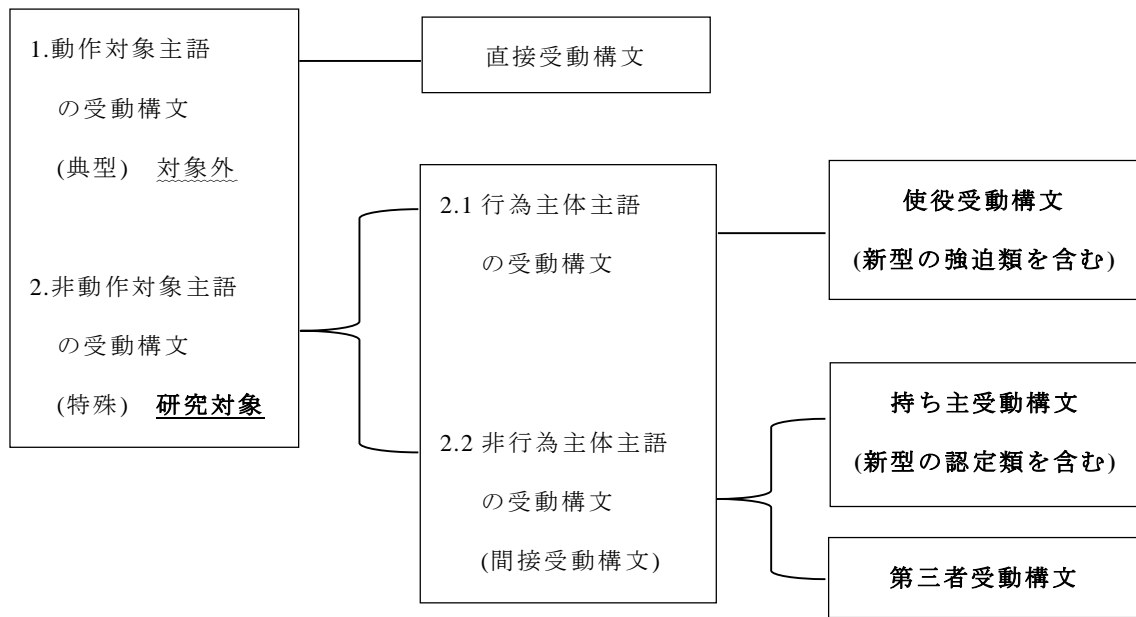


図 2-1 本論文での受動構文の分類及び研究対象の位置づけ(図 1-1 再掲)

すなわち、本論文では動作対象(Im)が主語に立つ典型的な他動詞の受動構文、いわば「直接受動構文」を除外したものを「特殊受動構文」と呼び、それを考察の対象とする。図 2-1 からわかるように、本論文の考察対象はそれぞれ従来の受動構文に関する分類のうち、使役受動構文、持ち主受動構文及び第三者受動構文(両者を合わせて「間接受動構文」という)に対応する。

### 2.3.1.3 本論文で扱う特殊受動構文

本節では、従来の分類を参照に、日本語、中国語の順で、例文を挙げながら特殊受動構文の下位分類、つまり本論文の考察対象について、その定義及び中身を詳しく述べていく。

#### 1.日本語の特殊受動構文

前節で述べたように、本論文では、日本語の受動構文の下位分類を図にまとめると、以下のようになる。なお、受動構文の呼び方に関しては、表 2-1 からわかるようにさまざまな呼び方が用いられている。本論文ではそのうち、最も広く使用されている寺村(1982)、仁田(1991)の呼び方にしたがって、それぞれ「直接」と「間接」、「間接」をさら

に分類して、「持ち主」、「第三者」と呼ぶことにする。

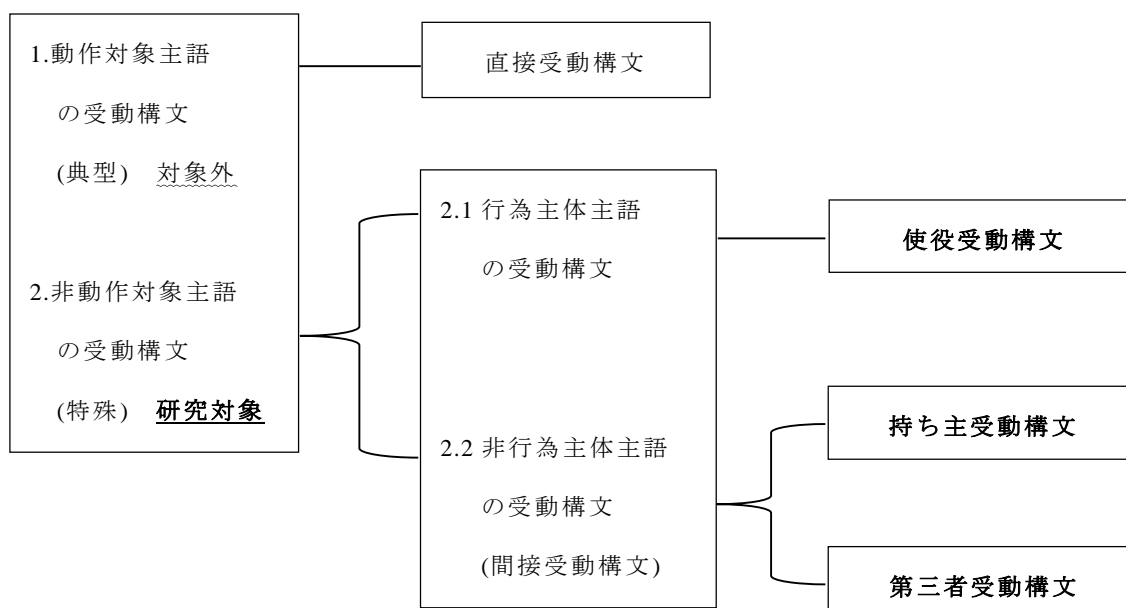


図 2-2 本論文での日本語の受動構文の分類

以下、日本語の受動構文の下位分類に関しては、構文的特徴を基準にした寺村(1982)及び山内(1997)の分類に基づき、それぞれ以下のように定義する。

**1)直接受動構文**とは、動作対象(lm)が主語に立ち、それが述語動詞の語幹によって表される動作から直接的な影響を受け、動詞の語幹に受動の接辞「-(r)are-ru」をつけて作られる構文のことである。例えば、以下のような例文が挙げられる。

(8) 花子が太郎に殴られた。

a.対応する能動文:太郎は花子を殴った

[仁田 1997:231]

(9) 源氏物語は紫式部によって書かれた。

a.対応する能動文:紫式部は源氏物語を書いた

[日本語記述文法研究会 2009:218]

(10) 山本は仏像の魅力に強く惹きつけられた。

a.対応する能動文: ?仏像の魅力は山本を惹きつける

[日本語記述文法研究会 2009:219]

(11)この国は海に囲まれている。

a.対応する能動文:海はこの国を囲んでいる

[志波 2015:35]

(12)優勝者には主催者からメダルが贈られた。

a.対応する能動文:主催者は優勝者にメダルを贈った

[日本語記述文法研究会 2009:218]

(8)-(12)からわかるように、対応する能動文が不自然、あるいは存在しなくても((10)-(11))、動作対象を持つ他動詞であれば、二価動詞((8)-(11))でも三価動詞((12))でも、直接受動構文の述語になるのである。

**2)使役受動構文**とは、行為主体(tr)が主語に立ち、それが外的な使役者(無情物を含む)から間接的な影響を受け、動詞語幹の表す行為を実行する、または動詞語幹の表す結果状態になり、動詞の語幹に使役形態素「-(s)ase」にさらに受動形態素「-(r)are-ru」が加えた「-(s)ase-(r)are-ru」という形式、あるいは五段活用動詞の場合、「-(s)as-are-ru」という縮約形(以下、使役受動形を「～させられる」と一括して呼ぶことにする)をつけて作られる構文のことをいう。例としては、以下のようなものがある。

(13)テレビを見ていたのにお使いに行かされた。

a.元の能動文:(私は)お使いに行った

b.使役能動文:(母は私を)お使いに行かせた

[庵他 2001:133]

(14)子どもにクリスマスプレゼントを買わされた。

a.元の能動文:(私は)クリスマスプレゼントを買った

b.使役能動文:子どもは(私に)クリスマスプレゼントを買わせた

[庵他 2000:301]

(15)私は父に上着を脱がせられた。

a.元の能動文:私は上着を脱いだ

b.使役能動文:父は私に上着を脱がせた

[丁 2005:228]

(16)我々は人員の不足に悩まされている。

- a.元の能動文:我々は人員の不足に悩んでいる
- b.使役能動文:人員の不足は我々を悩ませている

[志波 2015:29]

(17)ドキュメンタリー番組を見て、自らの生活を反省させられた。

- a.元の能動文:(私は)ドキュメンタリー番組を見て、自らの生活を反省した
- b.使役能動文:ドキュメンタリー番組を見て、自らの生活を反省させた

[日本語記述文法研究会 2009:251]

(18)二人の話によると、遭難の報が営林署の巡回員{ ○に依って/×に/○の行動によつて }走らされたのは、六日夜、つまり一昨夜の九時ごろであった。

- a.元の能動文:遭難の報は営林署の巡回員に依って走った
- b.使役能動文:営林署の巡回員は遭難の報を走らせた

[対訳 あした来る人]

(19)植物は環境によってその形を変化させられてしまうというのも多くあります。

- a.元の能動文:植物の形は環境によって変化する
- b.使役能動文:環境は植物の形を変化させる

[丁 2005:228]

動詞語幹の表す行為や状態が主語指示物の意図によるものであるか否かによって、使役受動構文は、意味的に「強制」と「原因」との二つに分けられる。前者は(13)-(15)のように、動詞語幹の表す動作は有情物主語の意図に反して、有情物使役者によって行うものであるが、後者は(16)-(19)のように、動詞語幹の表す行為や状態は主語指示物(有情物と無情物の両方を含む)の意図性と関わらず、使役者(無情物を含む)が原因となって生じたものである。こういった主語指示物の意図性は使役受動構文にとって、重要な要因となる。

使役受動文は元の動詞による能動文の表す事態を含み、対応する使役能動文が存在する。自動詞((13)、(16)、(18)、(19))であれ他動詞((14)、(15)、(17))であれ、そして意志動詞((13)-(15))でも非意志動詞((18)-(19))でも、使役受動構文の述語としては用いられるが、非意志動詞は原因類の使役受動文にしかないのである。また、使役者に関しては、(18)のように、使役者の格標識「によって」が「に」に置き換えられないことから、形式上使役者が有情物であっても、実はその有情物による何らかの行動などを表し、(19)のような無情物使役者に等しいということがわかる。

3)間接受動構文とは、当該事態に関わる動作対象(Im)や行為主体(tr)以外のもの、つまりプロファイル以外の参加者が主語に立ち、それが動詞語幹の表す事態から間接的に影響を受け、動詞の語幹に受動の接辞「-(r)are-ru」をつけて作られる構文のことである。

間接受動構文はすべて対応する能動構文を持たないが、主語名詞と述語動詞とは格関係を持つかどうかによって、さらに「持ち主の受動構文」と「第三者の受動構文」に分けられる。すなわち、持ち主の受動構文は、主語名詞は述語動詞のヲ格・二格・カラ格・へ格・デ格・ト格・ガ格名詞(句)の持ち主、または埋め込み文中の主語の役割を担うガ格、二格、つまり主語名詞は元の動詞による能動文中の属格、または主格であるが、第三者の受動構文は、主語名詞は述語動詞といかなる格関係も持たない。以下、この二つのタイプについて、例文を挙げながらそれぞれの構文的特徴を述べていく。

まず、本論文は、山内(1997)の分類に基づいて、所有関係の譲渡可能性によって、日本語の持ち主受動構文を「不可譲渡」の持ち主受動構文と「可譲渡」の持ち主受動構文に大別し、より広範的に扱う。例文を挙げると、以下のようなものがある。

(20)次郎は頭を太郎に殴られた。

a.元の能動文:太郎が次郎の頭を殴った

[仁田 1997:231]

(21)居眠りをしていた田中さんが、佐藤さんに肩に触れられて、目を覚ました。

a.元の能動文:佐藤さんが田中さんの肩に触れた

[日本語記述文法研究会 2009:243]

(22)毎月の給料から税金を天引きされているサラリーマンからすれば、どうしてそんなことができるのか、腹立たしさを乗り越えて、ただあきらめるばかりだ。

a.元の能動文:サラリーマンの毎月の給料から税金を天引きしている

[山内 1997:122]

(23)私は、花子にあめを口の中へ押し込まれた。

a.元の能動文:花子が私の口の中へあめを押し込んだ

[山内 1997:122]

(24)君、直にまた四番目サ。仕方が無いから、今度は留吉とした。まあ、五人の子供に側で泣き立てられて見たまえ。なかなか遣りきれた訳のものでは無いよ。

a.元の能動文:五人の子供が君の側で泣き立てる

[山内 1997:122]

(25) 私は田中に前妻と結婚された。

a.元の能動文:田中が私の前妻と結婚した

[山内 1997:122]

(26) 太郎は母に死なれた。

a.元の能動文:太郎の母が死んだ

[山内 1997:122]

(27) 彼は(中略)だから、昨日戻ったところを殺された、ということになりますかね。

a.元の能動文:彼が戻ったところを殺した

[仁田 1992:327]

(28) 私は非常に素直に言った。泣いているのを見られても平気だった。

a.元の能動文:私が泣いているのを見る

[山内 1997:123]

(29) 正岡子規は、俳句と短歌の改革者として、名前を知られている。

a.元の能動文:私たちは、俳句と短歌の改革者として、正岡子規の名前を知っている

[日本語記述文法研究会 2009:246]

(30) パパロッティは世界中のファンから高く美しい声を愛された。

a.元の能動文:世界中のファンがパパロッティの高く美しい声を愛した

[日本語記述文法研究会 2009:245]

(31) そのチームは相手チーム{ に/によって }守備の隙をつかれた。

a.元の能動文:相手チームがそのチームの守備の隙をついた

[日本語記述文法研究会 2009:242]

(32) 鈴木は、受験前の不安で、胸を締め付けられるように感じた。

a.元の能動文:受験前の不安が鈴木の胸を締め付けた

[日本語記述文法研究会 2009:246]

(33) 名前を盗まれた橋をみたことがある。

a.元の能動文:誰かが橋の名前を盗んだ

[対訳 日本戦後名詩百家集]

(34) 敷地は広く、まわりを高いコンクリートの塀に囲まれていた。

a.元の能動文:高いコンクリートの塀が敷地のまわりを囲んでいた

[対訳 ノルウェイの森]

(35) その物質はほとんどの部分を水素と酸素で構成されている。

a.元の能動文:水素と酸素がその物質のほとんどの部分を構成している

[陳潔羽 2013:68]

(22)を除いて、以上挙げた例文はすべて「不可譲渡」の持ち主受動文である。所有関係の譲渡可能性及びその下位分類については、第6章では詳しく述べる。(20)-(35)に示すように、持ち主受動文は対応する能動文が存在しないが、元の能動文からわかるように、主語名詞と述語動詞に関わる名詞(句)とが広義的な所有関係にあれば、自動詞((21)、(24)-(26))でも他動詞((20)、(22)、(23)、(27)-(35))でも述語になるのである。

ただし、(27)-(28)のように、仁田(1992)のいう「状況のヲ格を持つ持ち主の受動」は所有関係を持つ、典型的な持ち主の受動とは性質が異なるが、本論文では、便宜上このような持ち主受動文は主語指示物が埋め込み文中の動詞の表す動作の主体であるため、「主体-活動関係」の持ち主受動文と呼び、持ち主受動構文の周辺に位置付けておく。

続いて、本論文では、第三者受動構文としての例文を見てみよう。

(36) そうかしら。信じないわ。あなたはわりあい女から騒がれる方だと思うわ。

a.元の能動文:女は騒ぐ

[対訳 青春の蹉跎]

(37) 私は彼に先に論文を発表された。

a.元の能動文:彼は先に論文を発表した

[仁田 1997:231]

(38) 僕は雨に降られた。

a.元の能動文:雨が降った

[仁田 1997:231]

(39) 風に吹かれて、ひらひらしている貼紙もある。

a.元の能動文:貼紙がひらひらしている

[対訳 黒い雨]

第三者受動構文の主語指示物は、述語動詞が表す事態に含まれないものの、概念化者で

ある話者によって主体的にその事態と関連付けられ、何らかの影響を受ける存在である。このような存在は、(36)-(38)のように、基本的に有情物である。しかし、(39)のように、無情物である例文も見られる。ただし、無情物主語の場合は、有情物主語と異なり、その行為主体が無情物、特に自然現象を表すものに限られる。

上に挙げた例文からわかるように、第三者受動文は対応する能動文が存在せず、しかも主語名詞と述語動詞に関わる名詞(句)との間に所有関係も存在しない。自動詞の述語((36)、(38)-(39))は多いが、他動詞((37))でも述語になるのである。また、情意性においては、ほとんどは(36)-(38)のように、主語指示物にとって当該事態が被害・迷惑となるが、(39)のように主語指示物が迷惑を感じられない無情物であるものもある。

## 2.中国語の特殊受動構文

上に述べたように、中国語の受動構文は出現の順序によって、まず「通常受動構文」と「新型受動構文」に二分することができる。次に、日本語の受動構文と同様に、主語の述語の表す事態における参与者意味役割によって、下位分類を行うことができる。上述した中国語の受動構文の下位分類を図にまとめると、次のようになる。

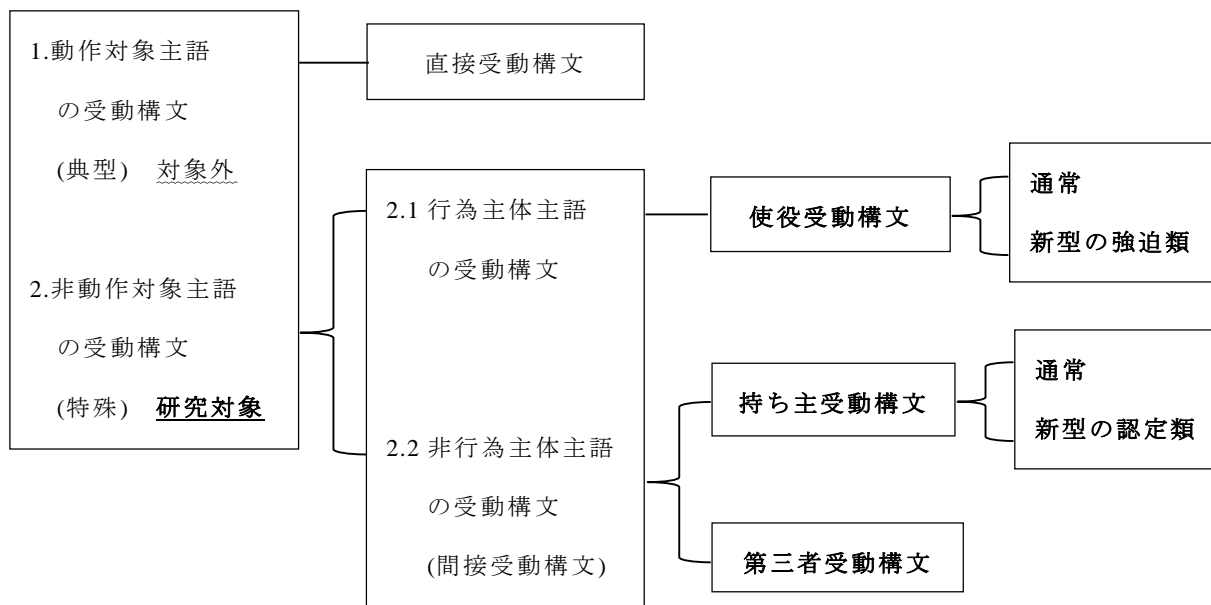


図 2-3 本論文での中国語の受動構文の分類

以下では、実例に基づき、新型受動構文について紹介した上で、日本語と同様の基準、つまり構文的特徴によって、中国語における通常受動構文を分類し、それぞれ定義してみる。



1) **新型受動構文**とは、行為主体が主語に立ち、それが外的な使役者(動作主体を含む)から影響を受け、述語になる動詞(句)、形容詞(句)及び名詞(句)の前に非事実性または非意図性の意味(中国社会科学院语言研究所词典编辑室 2012:52)を表す「被」が用いられ、2008年から使用されるようになった構文のことである。非事実性とは、「NP1<sub>主語</sub>+X<sub>述語</sub>」の表すことが事実ではないということである。また、非意図性とは、「NP1<sub>主語</sub>+X<sub>述語</sub>」の表すことが事実ではあるが、それがX<sub>述語</sub>に関連する主体NP1<sub>主語</sub>の意図によるものではないということである。以下では、先行研究での呼び方に従い、それぞれ「認定類」、「強迫類」と呼ぶことがある。

(40) 去 領 结婚证 才 知道 被 结婚。

行く 受け取る 結婚証明書 やっと わかる 受動 結婚する

(結婚届を出しに行った時に、やっと結婚していることにされていることがわかった)

a.元の能動文:(民政局)认定(实际上没有结婚的我)结婚了

[凤凰网 2013-04-18]<自動詞 非事実性>

(41) “被 相亲” “被 结婚” “被 离婚” 80 后 的 婚姻 谁 做主  
受動 見合いをする 受動 結婚する 受動 離婚する 1980 年後 の 婚姻 誰 決める  
(お見合いをさせられ、結婚させられ、離婚させられ 1980 年以後生まれた人たちの婚姻は誰が決めるの?)

a.元の能動文: 80 后相亲、结婚、离婚

b.使役能動文:(父母)强迫/叫(不想相亲、结婚、离婚的)80 后相亲、结婚、离婚

[新华网 2012-08-23]<自動詞 非意図性>

(42) 北京 房价 物价 高涨 不 止, 居民 消费 被 增长。

地名 住宅価格 物価 騰貴する ない 止まる 住民 消費 受動 上がる

(北京の住宅価格と物価が騰貴して止まらないため、住民の消費額は増加させられた)

a.元の能動文:居民消费增长了

b.使役能動文:北京房价物价高涨不止, 这使得居民消费增长了

[地产中国网 2010-11-24]<自動詞 非意図性>

(43) 他们 完全 是 “被” 媒体 悔婚。

彼ら 完全に のだ 受動 メディア 婚約を解消する

(彼らは(婚約を解消していないのに)メディアに婚約を解消したとされているのだ)

a.元の能動文:媒体認定(实际上没有悔婚的)他们悔婚了

[华体网 2009-12-16]<他動詞句 非事実性>

(44)哈尔滨 女子 建设银行 卡 1 万元 莫名 “被 消费”

地名 女性 銀行名 カード 1 万元 不思議に 受動 消費する

(ハルビン女性の建設銀行カードにある 1 万元は(本当は使われていないのに)銀行員によって)使われたことにされた)

a.元の能動文:(銀行工作人员)说(没有被消费的)1 万元被(哈尔滨女子)消费了

[东北新闻网 2013-12-05]<他動詞 非事実性>

(45)手術 台上 动手脚 患者 无奈 被 消费

手術 台上 小細工をする 患者 仕方がない 受動 消費する

(手術時に(医者が)余計なことをするため、患者は(そう望んでいないのに)しかたなく出費を強いられる)

a.元の能動文:患者消費了

b.使役能動文:(医生)强迫/叫(不想消费的)患者消费了

[广东电视台 2013-09-06]<他動詞 非意図性>

(46)中国人 又 一次 “被 幸福” 了 吗?

中国人 また 一度 受動 幸福 完了 のか

(中国人はまた(外国のメディアによって、幸福ではないのに)幸福であることにされたのたろうか)

a.元の能動文:(外国媒体)说(实际上不幸福的)中国人很幸福

[腾讯网 2014-11-27]<形容詞 非事実性>

(47)女生 送 关怀, 独苗 男孩 “被 幸福”。

女子学生 送る 配慮 一人っ子 男の子 受動 幸福

(女子学生(全員)が至れり尽くせりの配慮をしたためクラスで唯一の男子は幸せに思った)

a.元の能動文:独苗男孩感觉很幸福

b.使役能動文:女生送关怀, 这使得独苗男孩感觉很幸福

[江苏新闻网 2013-03-08]<形容詞 非意図性>

(48)被小三和 被 人 当作 假想敌 的 女生 就 在 我们 身边。

受動 愛人 と 受動 人 と思う 假想敵 の 女性 絶対に いる 私たち 身の回り

((愛人ではないのに)愛人であることにされてしまう、あるいは假想敵にされてしま  
う女性たちが私たちの身の回りにいる)

a.元の能動文:(別人)说(实际上不是小三的)女生是小三

[北方网文化娱乐 2012-09-29]<名詞 非事実性>

(49)如果 申花 主场 未能 击败 陕西, 鲁能 就  
ならば チーム名 ホーム できない 打ち負かす チーム名 チーム名 すぐ  
将 被 冠军。

であろう 受動 優勝チーム

(もし申花チームがホームで陝西チームを負かせなかったら、鲁能チームはチャンピ  
オンにならされるであろう)

a.元の能動文:鲁能将成为冠军

b.使役能動文:如果申花主场未能击败陕西, 这将使得鲁能成为冠军

[搜狐体育 2010-10-23]<名詞 非意図性>

(43)からわかるように、新型受動構文には、「媒体(メディア)」のような使役者・動作主  
体がほとんど明示されず、しかもその動作を表す「認定/説成(とされる)」のような他動詞  
及び「没有(ない)」のような否定の意味が言語化されない。新型受動構文の構文的特徴に  
ついては、第4章で詳しく取り上げる。ここでは、否定の意味、当該事態に存在している  
動作主体及びその動作を表す他動詞が明示されないことを指摘するだけにとどめる。ま  
た、(44)のように、主語「1万元」は述語他動詞「消費(使う)」の行為主体ではなく、行  
為対象である例文もまれに見られる。本論文では、こういったものは、非事実性を表すこ  
とから、(43)のような典型的事例から逸脱する周辺的事例として位置づける。さらに、元  
の能動文や対応する使役能動文からわかるように、中国語における新型受動構文の強迫類  
は日本語の使役受動文と同様の意味的特徴を持つ、つまり「強制」と「原因」の意味を表  
す受動文である。一方、第6章で述べるように、中国語における新型受動構文の認定類は  
日本語の持主受動文と同じ構文的特徴を持つものだと考えられる。よって、本論文で  
は、新型受動構文の強迫類及び認定類はそれぞれ「新型の使役受動構文」、「新型の持主受  
動構文」と呼ぶことがある。

上述したように、動作主は(43)のように名詞句で明示されるのが極めて少ないが、(42)、(45)、(47)、(49)のように節で表されることもある。また、新形受動文は動作主の動作を表す他動詞が言語化されないため、対応する能動文が存在せず、自動詞((40)-(42))であれ、他動詞((43)-(45))であれ、または形容詞((46)-(47))でも名詞((48)-(49))でも述語になるのである。さらに、修飾語の面においては、(40)-(42)、(47)-(48)のように、述語の前後にいかなる修飾語も現れない例は基本的であるが、(44)-(45)、(49)のように述語の前に、(46)のように述語の前後に何らかの修飾語が共起するものも見られる。

続いて、「通常受動構文」の下位分類及びそれぞれの定義について紹介していく。

**2)通常受動構文**とは、現代中国語において、2008年から使用されるようになった新型受動構文を除外した、受動の意味(中国社会科学院语言研究所词典编辑室 2012:52)を表す「被」が用いられる構文のことである。通常受動構文は、新型受動構文と異なる点は二つ挙げられる。一つには、「被」の表す意味である。すなわち、前者では、「受動」を表すのに対し、後者では「非事実性・非意図性」を表す。二つには、述語になる品詞の範囲である。つまり、前者は動詞しかないのに対し、後者は動詞のみならず、形容詞及び名詞もよい。

中国語の通常受動構文は、日本語の受動構文と同様に、主語の意味役割によって、直接受動構文、使役受動構文及び間接受動構文といった三つのタイプに分けられる。

**2-1)直接受動構文**とは、動作対象(Im)が主語に立ち、それが述語他動詞によって表される動作から直接的に作用を受け、他動詞の前に受動標識「被」をつけて作られる構文のことである。例えば、以下のような例文が挙げられる。

(50)他 的 花 招 被 我 识破 了。

彼 の ペテン 受動 私 見破る 完了

(私は彼のペテンを見破った)

a.対応する能動文:我识破了他的花招

[張麟声訳 2001:125]

(51)九 岁 的 妹 妹 被 卖 给 了 别 人 。

九 歳 の 妹 受動 売る に 完了 他人

(九歳の妹が人に売られてしまった)

a.対応する能動文:(人贩子){ ?卖妹妹给了别人/○把妹妹卖给了别人 }

[刘月华他訳 1991:646]

(52)他的钱包被小偷偷去了。

彼の財布 受動 すり する 行く 完了

(彼の財布はスリに取られてしまった)

a.対応する能動文:小偷{ ?偷去了他的钱包/○把他的钱包偷去了 }

[刘月华他訳 1991:646]

(53)我的衣服被钉子挂了一个大口子。

私の服 受動 釘 引っ掛かる 完了 一つ 大きい 穴

(私の服は釘に引っかかって大きな穴が開いてしまった)

a.対応する能動文:钉子{ ×挂了我的衣服一个大口子/○把我的衣服挂了一个大口子 }

[刘月华他訳 1991:646]

(54)画家住在一个小角落里，门口鸡鸭转来转去，……

画家 住む に 一つ 小さい 隅 中 入り口 鶏 家鴨 回る 来る 回る 行く

門 前 又 被 许多 晒 着 的 衣 褲 布 单 遮 住。

ドア 前 また 受動 たくさん 干す 持続 の 服 ズボン シーツ 遮る 補語

(画家は路地の奥に住んでいた。門口にはニワトリやアヒルが歩きまわり、…シャツだのパンツだのシャツだの、洗濯物が戸口をふさいでいる)

a.対応する能動文:许多晒着的衣裤布单{ ×遮住了门前/○把门前遮住了 }

[対訳一部修正 棋王]

(55)他被这种病整整折磨了两年。

彼 受動 この 種 病気 丸々 苛む 完了 2年

(彼はこの病気にまるまる2年さいなまれました)

a.対応する能動文:这种病整整折磨了他两年

[李臨定,宮田訳 1993:277]

(56)被误会是一件很痛苦的事情

受動 誤解する である 一つ とても 苦しい の 事

(誤解されることはとても苦しいものである)

a.対応する能動文:(别人)误会自己

[河池高中吧 百度贴吧 2010-04-03]

直接受動文は対応する能動文が「把」処置文ほど自然ではない((51)-(52))、あるいは存在しなくても((53)-(54))、動作対象を持つ他動詞であれば、二価動詞((50))でも三価動詞((51)-(52))でも述語になるのである。また、修飾語の面においては、(50)-(53)、(55)のように述語の後に、または(54)のように述語の前後に何らかの修飾語を接続する例は基本的であるが、(56)のように従属節<sup>21</sup>においては、述語の前後にいかなる修飾語も共起しないものもまれに見られる。

**2-2)使役受動構文**とは、行為主体(tr)が主語に立ち、それが外的な使役者(無情物を含む)から影響を受け、動詞の表す行為を実行する、または動詞の表す結果状態になり、動詞の前に受動標識「被」をつけて作られる構文のことである。「新型の使役受動構文」と区別するために、本論文では、「通常の使役受動構文」と呼ぶことにする。例としては、以下のようなものがある。

(57) 东大 同学 刚刚 游行 回来, 就 被 集合 去 听

東北大学 学生 したばかり デモ 帰ってくる すぐに 受動 集合する 行く 聞く  
学校 当局 的 堂皇 的 训话……

学校 当局 の 堂々としている の 訓話

(東北大学の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

a.元の能動文:东大同学集合去听学校当局的堂皇的训话

b.対応する使役能動文:(学校当局/老师)叫东大同学集合去听学校当局的堂皇的训话

[対訳 青春之歌]

(58) 方丹 被 自己 美好 的 想象 激动 着, 亮闪闪 的 眼睛里 现

人名 受動 自分 美しい の 想像 感激する 持続 きらきら光る の 目 に 浮べる  
出 了 泪 光。

て来る 完了 涙 光

(方丹は自分の夢に心を動かされて涙を浮かべた)

a.元の能動文:方丹激动着

<sup>21</sup> 従属節は、大きく補足節、連体節、副詞節の三つに分かれる。複文の分類について、詳しくは益岡他(1992:181-214)を参照。

b.使役能動文:自己美好的想象使方丹激动着

[対訳 轮椅上的梦]

(59)好久 没 被 冻 醒 了

長いこと ない 受動 凍える 醒める 語気助詞

(長いこと寒さで目を覚ましたことはなかった)

a.元の能動文:(我)冻醒了

b.使役能動文:(天气冷)使我冻醒了

[百度贴吧 2012-08-23]

(60)敌人 已经 被 { 民兵/民兵 的 进攻 } 消灭 了。

敵 すでに 受動 民兵 民兵 の 進攻 殲滅する 完了

(敵はすでに{ 民兵に/民兵の進攻によって }殲滅させられた)

a.元の能動文:敌人消灭了

b.使役能動文:民兵(的进攻)使敌人消灭了

[刘月华他訳 1991:648]

(61)设想 一下, 如果 当时 父亲 被 {  $\Phi$ /上级/上级 下 令 } 留 在 了

想定する てみる もし 当時 父 受動 上司 上司 出す 命令 留まる に 完了

中央 苏区, 那 他的 革命 生涯, 将 会 走

中央 ソビエト根拠地 それでは 彼の 革命 生涯 まもなく するであろう 歩く

出 另外 一条 道路 来。

出る 別の ひと筋 道 て来る

(考えてみると、あのとき、父が{ 上司のために/上司に命じされたため }中央ソビエト根拠地に留まっていたならば、革命家としての生涯は別の道をたどったことだろう)

a.元の能動文:父亲留在了中央苏区

b.使役能動文:(上级/上级下令)使父亲留在了中央苏区

[対訳 我的父亲邓小平]

(62) “不。” 她 简单 地 吐 出 一个字, 又 用 细长 的 手臂

いいえ 彼女 簡単 に 出す て来る 一言 また 用いる 細長い の 腕

掠 开 了 前额 上 一绺 被 汗水 湿 了 的 头发。

なでつける 開く 完了 額 に 一束 受動 汗 湿る 完了 の 髪

(「うん」彼女はそっけなくそう言うと、また細い手を上げて汗で額に貼りついた髪をかきあげた)

a.元の能動文:头发湿了

b.使役能動文:汗水使头发湿了

[対訳 轮椅上の夢]

(63)这 是 无疑 的, 敌人 的 第一、二、三、四 次

これ である 疑いを入れない のだ 敵 の 一回目 二回目 三回目 四回目

“围剿” 不是 实实在在地 被 { 我们/我们的 进攻 } 粉碎 了 吗?

包围討伐 ではない 本当 に 受動 我々 我々 の 進攻 粉碎する 完了 か

(これは疑いのないところである。敵の一回目、二回目、三回目、四回目の「包围討伐」はまぎれもなせよく{我々に/我々の進攻によって}粉碎されだてではないか)

a.元の能動文:敌人的第一、二、三、四次“围剿”粉碎了

b.使役能動文:(我们/我们的进攻)使敌人的第一、二、三、四次“围剿”粉碎了

[対訳 毛泽东选集一]

(64)倪藻 走 进 一个 宽敞 的、同样 昏暗 的 客厅, 他 被 让

人名 歩く 入る 一つ 広々としている の 同様 暗い の 客間 彼 受動 使役

坐 在一个 不 新 的 暗 红色 沙发 上。

座る に 一つ ない 新しい の 暗い 赤色 ソファ 上

(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、彼は古びたエンジ色のソファに案内された)

a.元の能動文:倪藻坐在一个不新的暗红色沙发上

b.使役能動文:(史太太)让倪藻坐在一个不新的暗红色沙发上

[対訳一部修正 活动变人形]

(65)他们 请求 进去 参观, 立刻 被 让 进 客厅。

彼ら 願う 入っていく 見学する すぐに 受動 使役 入る 客間

(中に入って見学させていただきようお願いした後、すぐに客間に入らせていただいた)

a.元の能動文:他们进了客厅

b.使役能動文:(管理者)让他们进了客厅

[北京 傲慢与偏见]



動詞の表す行為や状態が主語指示物の意図によるものであるか否かによって、通常の使役受動構文は、意味的に「強制」、「原因」及び「指示・許容」の三つに分けられる。「強制使役」は、(57)に示すように、意志動詞の表す動作は有情物主語の意図に反して、有情物使役者によって行うものであるが、「原因使役」は、(58)-(63)のように、動詞の表す行為や状態は主語指示物(有情物と無情物の両方を含む)の意図性に関わらず、使役者(無情物を含む)が原因となって生じたものである。「指示使役」は、(64)のように、ホストと客といった人間関係から、使役者である人間が何らかの指示(「ソファに座りなさい」)をして、被使役者である主語「倪藻」は、その指示を当然のこととして、意図的に動詞「坐(座る)」の表す行為を実行することを表す。「許容使役」は、(65)のように、主語の「彼ら」は、意図的に動詞「进(入る)」の表す行為を実行したいのを、使役者である人間が許可することによって、被使役者の希望とおりにその行為を行うことを表す。こういった主語指示物の意図性は使役受動構文にとって、重要な要因となる。

ただし、(60)-(61)、(63)のように、使役者である有情物「民兵(民兵)/上级(上司)/我们(我々)」が「民兵的进攻(民兵の進攻)/上级下令(上司が命じた)/我们的进攻(我々の進攻)」に置き換えられても基本的に意味が変わらないことから、形式上使役者が有情物であっても、実はその有情物による何らかの行動などを表し、(58)-(59)のような無情物使役者に等しいということがわかる<sup>22</sup>。また、述語動詞に関しては、自動詞((57)、(64)、(65))であれ他動詞((58)-(63))であれ、そして意志動詞((57)、(64)、(65))でも非意志動詞((58)-(63))でも述語になるが、非意志動詞は原因類の使役受動文にしかないのである。換言すれば、強制類と指示・許容類の使役受動文は意志動詞しか入らないのである。

**2-3)間接受動構文**とは、当該事態に関わる動作対象(1m)や行為主体(tr)以外のもの、つまりプロファイル以外の参加者が主語に立ち、それが動詞の表す事態から間接的に影響を受け、動詞の前に受動標識「被」をつけて作られる構文のことである。

間接受動構文はすべて対応する能動構文を持たないが、主語名詞と述語動詞に関わる名

---

<sup>22</sup> 三宅(2004:21)によると、中国語において、(60)b、(63)bのように、「使」による使役能動文における主語名詞句(例:民兵、我々)は、実はメトニミー的にそれに関連するある事態を指すという。同様に、王安(2008:313)は、感情動詞(例:感動する、失望する)を使役文の述語にとった場合、たとえ仕手の位置に意図性の持つ<有情物>、例えば人称代名詞が来るとしても、それも動作主としてではなく、その人が行った行為やその人に関連する出来事・事柄が自動的に感情対象として解釈されると述べている。

詞とは広義的な所有関係を持つかどうかによって、さらに「持ち主の受動構文」と「第三者の受動構文」に分けられる。すなわち、持ち主の受動構文は、主語名詞と述語動詞に関わる名詞とは広義的な所有関係にあるが、第三者の受動構文は、主語名詞と述語動詞に関わる名詞との間にはそのような所有関係が存在しない。

(66)我 被 他 抱 着 两只腿，动弹 不得。 我 呆呆地 看 着 他。

私 受動 彼 抱える 持続 両足 動く できない 私 ぼんやりと 見る 持続 彼

(両足にしがみつかれて動けないまま、私はぼんやりと彼を見ていた)

a.元の能動文:他抱着我的两只脚

[対訳 天云山传奇]

(67)你 被 小偷偷 过 手机 吗?

あなた 受動 泥棒 盗む 経験 携帯 か

(あなたは、泥棒に携帯を盗まれたことがある?)

a.元の能動文:小偷偷过你的手机吗?

[于康訳 2012:1]

(68)女子 被 儿子 吵 醒 将 其 残忍 杀死

女性 受動 息子 騒ぐ 醒める 処置 彼 残酷 殺す 死ぬ

(女性は息子に騒がれて目が覚めたので、彼を残酷に殺した)

a.元の能動文:女子的儿子吵

[华东在线 2015-04-16]

(69)刘世奇……被 徐良 抄 了 他的 店房。

人名 受動 人名 家宅捜査をする 完了 彼の 宿泊先の部屋

(劉世奇は徐良に彼の宿泊先の部屋を捜査され、差し押さえられた)

a.元の能動文:徐良抄了刘世奇的店房

[于康訳 2012:7]

(70)彰 被 他的 儿子 把 自己的 家产 花 干净 了。

人名 受動 彼の 息子 処置 自分の 家産 使う すっかり 完了

(彰さんは子供に自分の家の財産をすっかり使い果たされた)

a.元の能動文:彰的儿子{ 花干净了他的家产/把他的家产花干净了 }

[黒田訳 2013:390]

(71)她 被 树枝 挂 破 了 衣服。

彼女 受動 枝 掛ける 破る 完了 服

(彼女は、枝によって服を破られた)

a.元の能動文:树枝刮破了她的衣服

[于康訳 2012:5]

(72)苹果 被 削 了 皮。

りんご 受動 剥く 完了 皮

(リンゴは、皮を剥かれた)

a.元の能動文:(有人)削了苹果的皮

[于康訳 2012:2]

(73)帆布 篷 裂 了 几条 大 口, 舵楼 坏 了 半边, 左舷  
ブック 苦 裂ける 完了 いくつか 大きい 裂け目 操舵室 壊れる 完了 半分 左舷  
被 桥洞 的 石壁 擦 去 了 一片 皮……

受動 橋脚間の空洞 の 石壁 擦れる ていく 完了 一切れ 皮

(カンバスは数カ所で大きく裂け、操舵室は半分がこわれ、左舷の鉄板が一枚、橋の石の壁でこすれてはがれていた)

a.元の能動文:桥洞的石壁{ ?擦去了左舷的一片皮/○把左舷的一片皮擦去了 }

[対訳 霜叶红似二月花]

(74)阿巧 不敢 做 声, 心里 却 万分 怔忡……还是

人名 する勇気がない 立てる 声 心の中 ところが 極めて 動悸 それとも

刚才 被 她 看见 了 她 对 阿寿 做 了 两次 的 手势。

先 受動 彼女 見える 完了 彼女 に 人名 する 完了 二回 の 手真似

(阿巧は震え上って、声も出せなかった……それとも、さっき阿寿に手真似をしたのが見つかったのか、どちらとも見当がつかなかった)

a.元の能動文:她刚才看见了阿巧对阿寿做了两次的手势

[対訳 霜叶红似二月花]

(66)のように人間-身体部位、(68)のように親族関係、及び(72)-(73)のように全体-部分関係、(74)のように主体-活動関係を除いて、以上挙げた他の例文はすべて「可譲渡」の所有関係にある持ち主受動文である。所有関係の譲渡可能性及びその下位分類については、

第6章で詳しく述べる。ここで注意すべき点は、従来第三者受動構文の典型例とした(68)のような例文も、本論文では、主語「女性」と動作主体である「息子」との間に親族関係といった所有関係が存在するため、持ち主受動構文とするところである。

(66)-(74)に示すように、持ち主受動文は対応する能動文が存在しないが、元の能動文から明らかなように、主語名詞と述語動詞に関わる名詞(句)との間に所有関係があれば、自動詞((68))でも他動詞((66)-(67)、(69)-(74))でも述語になるのである。ただし、(74)のように、本論文では、主体-活動関係を持つため、日本語と同様に、持ち主受動構文の周辺に位置付けておく。

続いて、本論文では、中国語の第三者受動構文としての例文を見てみよう。

(75)侯 老太 气愤 地 说, 等 警察 来 这段 时间 里, 一 不 留  
苗字 老婦人 怒る に 言う 待つ 警察 来る この 間 に すると ない つける  
神 被 小偷 跑 了。

気 受動 すり 逃げる 完了

(侯ばあさんは、警察を待っている間ちょっと油断した隙にすりに逃げられちゃったと怒って言った)

a.元の能動文:小偷跑了

[南方都市报 2014-06-12]

(76)我 想 逃, 没 逃 脱, 被 他们 抓 回去, 又 打。

私 したい 逃げる ない 逃げる 離れる 受動 彼ら 捕まえる ていく また 殴る  
后来 到 了 河南 才 被 我 逃 出来 了。

その後 着く 完了 地名 やっと 受動 私 逃げる 出てくる 完了

(私は逃げたかったが、逃げきれず、また彼らに捕まえられて殴られた。やがて、河南に着いてからやっと私が逃げることができた)

a.元の能動文:我逃出来了

[魔方格 2015-06-09]

(77)我 坐庄, 又 被 他 自摸 了。

私 親になる また 受動 彼 つもる 完了

((マージャンで)親になり、また彼につもられた)

a.元の能動文:他自摸了

- (78)我 反正 是 不 赛 了，被 人 作 了 交易，倒  
私 いずれにせよ のだ ない 試合する 完了 受動 他人 する 完了 取引 逆に  
象 是 我 沾 了 便宜。  
のようだ である 私 こうむる 完了 うまい汁  
(いずれにせよぼくは出ないよ。人の取り引きに便乗するみたいなものな)

a.元の能動文:(別)人作了交易

[対訳 棋王]

- (79)这个 单位 有 了 这样 一位 先 是 工作人员 后 是 退休人员  
この 機関 いる 完了 このような 一人 初め である 職員 次 である 退職者  
最后 临死 前 几个月 被 “落实 政策”从“历史 反革命”又 变成 了  
最後 臨終 前 数ヶ月 受動 実行する 政策 から 歴史 反革命 また となる 完了  
“离休 老 同志”的 人士，确实 是 这个 单位“倒 了 血 楣”。  
離職休養 敬意 同志 の 人士 確かに のだ この 機関 倒れる 完了 血 まぐさ  
(彼らにしてが、倪吾誠のような初めは職員、次は定年退職者、やっと死ぬ数ヶ月  
前『名誉回復』政策によって『歴史的な反革命』から『特待定年退職者』の身分に切  
変わった人士を抱えていては、いい迷惑なのだ)

a.元の能動文:(政府)落实政策

[対訳 活动変人形]

- (80)话音 未 落， 车轮 猛 地 撞 在 一个 土坎 上，我 被  
話し声 ない 落ちる 車輪 激しい に ぶつかる に 一つ 土手 上 私 受動  
剧烈 地 颠 了 一下， 忽地 摔 了 出去， 跌 在 地上。  
激しい に 揺れる 完了 ちょっと 突然 投げつける 完了 ていく 転ぶ に 地面  
(そう叫んだとたん、車椅子は地面のでっばりに乗り上げて私は宙に放り出された)

a.元の能動文:(车)颠了一下

[対訳 轮椅上的梦]

- (81)秦 始皇 惹 了 孟姜女，刚 修 的 长城 被  
秦 始皇帝 逆らう 完了 人名 したばかり 修築する の 万里の長城 受動  
哭 倒 了。  
泣く 倒れる 完了

(秦の始皇帝が孟姜女を怒らせたため、修築されたばかりの万里の長城は彼女に泣かれて倒れた)

a.元の能動文:(孟姜女)哭了

[月亮岛教育 2015-04-17]

(82)今天 我 掏 钱 买 水 喝。刚 掏 出来 五块钱 被 风  
今日 私 取り出す 金 買う 水 飲む たところ 取り出す てくる 五元 金 受動 風  
给 刮 跑 了 找 不到 了。

助詞 吹く いなくなる 完了 探す できない 完了

(今日は水を買う時に5元を取り出したところ、風に吹かれてしまって、探し当てられなかった)

a.元の能動文:风刮了(起来)

[百度知道 2014-08-29]

(83)但是 夏天 风 太 大, 广告 旗 很 容易 被 风 吹 得  
でも 夏 風 すぎる 大きい 広告 旗 とても やさしい 受動 風 吹く 助詞  
卷 起来。

反り返る 立ち上がる

(夏は風が強いから、のぼり旗は巻き上がってしまうことが多い)

a.元の能動文:风吹了(起来)

[百度知道 2011-06-26]

第三者受動構文の主語指示物は、述語動詞が表す事態に含まれないものの、概念化者である話者によって主体的にその事態と関連付けられ、何らかの影響を受ける存在である。このような存在は、(75)-(80)のように、基本的に有情物である。しかし、(81)-(83)のように、無情物である例文も見られる。ただし、無情物主語の場合は、(81)のようにその無情物主語「万里の長城」に何らかの関わりを持つ有情物「秦の始皇帝」が想起できる、または(82)-(83)のようにその行為主体が無情物、特に自然現象を表すものに限られる。

第三者受動文は、対応する能動文が存在せず、(75)-(83)の元の能動文からわかるように、主語名詞と述語動詞に関わる名詞(句)との間に広義的な所有関係が存在しない。自動詞の述語((75)-(77)、(80)-(83))は多いが、他動詞((78)-(79))でも述語になるのである。また、情意性においては、ほとんどは主語指示物((75)-(78)、(80))、あるいはそれ(無情物の

場合)に関連する有情物((81)-(82))にとって当該事態が被害となるが、(79)のように主語指示物にとって利益さえを感じられるものも見られる。

### 2.3.2 本論文の研究課題

本論文は以上のように、受動及び受動文をそれぞれ再定義することによって日中語の受動構文の体系を捉え直し、本論文の研究対象の位置づけ及び従来分類との対応関係を明らかにすることができる。

その上で、2.2.4で述べた先行研究の問題点をふまえて、本論文の目的に応じて、本論文の研究課題として、以下の四つを挙げることができる。

- 1) 形式面及び意味面から、日中語の特殊受動構文の構文的特徴を考察する。
- 2) そのような構文的特徴に反映される日中語の特殊受動構文の事態把握を、詳述性、焦点化、際立ち、視点といった点から分析する。
- 3) 直接受動構文を含んだ日中語受動構文の体系全体を視野に入れて、事態把握のレベルで、プロトタイプである直接受動構文から特殊受動構文へと拡張する動機付け及びその過程を究明する。
- 4) 日中対訳コーパスのデータに基づき、同じ受動事態を捉える際、日中語母語話者の<好まれる言い回し>及びそれに反映する事態把握の仕方の傾向を明らかにする。

## 第3章 本論文の理論的枠組み

### 3.1 はじめに

認知言語学では、外部世界の対象は言語表現から独立した存在として解釈されるのではなく、言語表現は認知主体が外部世界を概念化していく認知プロセスの反映として捉えられている。ある事態を言語化するとき、話者がその事態をどのように認識し把握するかによってさまざまな表現が可能となる。このような認知言語学の基本的観点を元に、本論文では、認知言語学において極めて重要な概念である「構文文法」、「認知文法」を理論の枠組みとし、日中語の特殊受動構文の構文的特徴及び事態把握における違いを解明することを目的とする。

本章では、研究課題について具体的な分析を行うための前提となっている認知言語学における構文文法、認知文法、特に事態把握に関連する諸概念を紹介していく。

### 3.2 構文及び構文スキーマ

構文文法によれば、一つの構文の存在が定義されるのは、すでに文法に存在する他の構文についての知識から、その性質の一つまたはそれ以上を厳密に予測することができない場合である。Goldbergによると、「構文」とは以下のように定義されている。

Cが形式と意味のペア $\langle F_i, S_i \rangle$ である時に、 $F_i$ のある側面あるいは $S_i$ のある側面が、Cの構成部分から、または既存の確立した構文から厳密には予測できない場合、かつその場合に限り、Cは一つの「構文」である。

Goldberg(1995)[河上他(訳)2001:5]

構文は言語における基本単位であると考えられる。構文はネットワークを形成し、特定の構文の持つ特性の多くを動機づけることになる「継承関係」によって結びつきを持つ。継承関係に基づくネットワークによって、構文間に見られる一般性を捉えることができるとともに、準規則性や例外も認めることができる。



二つの構文、 $C_1$ と $C_2$ の間で、 $C_2$ が $C_1$ を継承するという継承関係は、以下のように表示される。

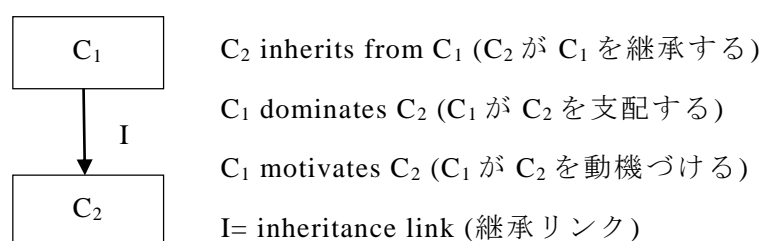


図 3-1 構文間の継承関係(Goldberg(1995)[河上他(訳)2001:99-100]より)

Goldberg(1995)によると、継承リンクは、「多義性のリンク」、「メタファー的拡張のリンク」、「部分関係のリンク」及び「具体例のリンク」の四種類に大別される。例えば、多義性のリンクとは構文の持つある特定の意味と、その意味からの拡張との間に意味的関係の性質を捉えるものであり、例としては移動使役構文が挙げられる。また、部分関係のリンクとは、ある構文が独立して存在する別の構文の「真部分」である場合に想定されるものである。例えば、自動詞移動構文が移動使役構文の真部分である。

本論文では、日中語において受動構文は多義性を持つ構文であり、特殊受動構文と直接受動構文は構文的多義のネットワークを構築しており、実例に基づく考察により中国語の新型受動構文は通常の直接受動構文と部分関係といった継承関係にあると考える。

スキーマとは、概略、知識を過去の経験に基づいて抽象化し、構造化することによって鑄型・規範の状態に組み替えられた知識のあり方をいう(吉村 2002a:77)。より抽象的な上位カテゴリーをスキーマという、より具体的な下位カテゴリーを事例という。スキーマと事例の関係を一般的に図 3-2 で示す。

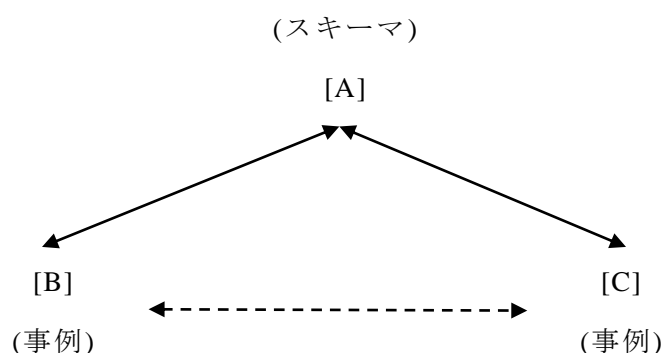


図 3-2 スキーマと事例の関係(テイラー他 2008:62 より)

これと同様に、構文スキーマは、スキーマと事例の関係に立つ。いくつかの構文スキーマがひとまとまりになってスキーマ性のより高い構文スキーマの下に置かれることがある。他方、ある構文スキーマが内容的により充実したいくつかの構文スキーマをその事例として従えることがある。例えば、英語表現 **Something happened./Someone did something.** などは一つの具象化された表現例であるとともに、スキーマ度の高い表現であるとも言える。多くの場合、**Something** や **Someone** に当たる変項に **the truck** や **John** などの具体的指示対象を入れたり、**happened** や **did something** を **moved, kissed Mary** などに置き換えたりすることで、より情報性の高い表現(**The truck moved**(トラックが動いた)/**John kissed Mary**(ジョンがメアリーにキスした))に具象化される。

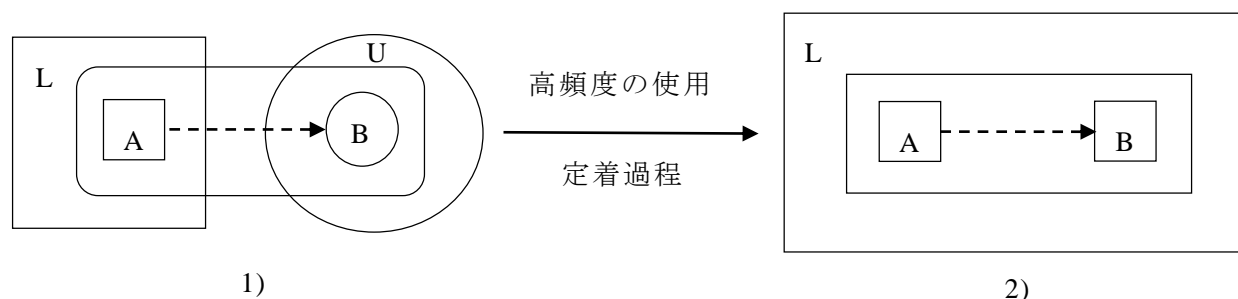
本論文では、新型受動構文には多義性が認められ、実例に基づき、その構文スキーマ、意味的ネットワークを明らかにする。

### 3.3 使用基盤モデル

使用基盤モデル<sup>23</sup>は、生成文法のように言語を現実の使用から切り離された静的な規則の体系として見るのではなく、具体的な発話の場における使用に本質的な重要性を認める言語モデルのことをいう(坪井 2002:250)。Langacker(2000)によれば、使用基盤モデル(図 3-

<sup>23</sup> 使用基盤モデル(usage-based model)は、また「動的使用基盤モデル(dynamic usage-based model)」、「(動的)用法依存モデル((dynamic) usage-based model)」と呼ばれる。本論文では、言語の現実の使用に重要性を認めるという点で、このモデルを「使用基盤モデル」と呼ぶことにする。

3)は、言語使用に応じてカテゴリーが新たな拡張例を取り込み、その拡張例が定着した段階で新たにスキーマが作られていくとみなすモデルである。



A, B 言語単位      [A] 慣例的な言語単位 A      (B) 非慣例的な言語単位 B  
L 言語体系      U 言語使用状況

図 3-3 使用基盤モデル(Langacker 2000:11 より 一部修正)

すなわち、図 3-3 の左側 1)では、言語体系 L に慣例的な言語単位[A]がすでに存在しており、それから逸脱した拡張(B)が、言語使用状況 U に生じている。(B)は[A]を直接的に具体化した事例ではないため、[A]のカテゴリーに属さない非適格な表現と判断されるであろう。しかし、拡張事例である(B)が繰り返し使用されることにより言語体系 L に次第に取り込まれ定着化すると、図 3-3 の右側 2)となる。つまり、言語単位(B)自体が慣例化されたユニットとしての地位を得て、[B]となるとともに、[A]から[B]の拡張もユニットとしてその言語体系に取り込まれることになる。

本論文は、使用基盤モデルの立場に基づき、実際の受動文に関する使用例を観察することを通して、受動構文の構文的特徴を分析するという帰納法を用いる。そして、中国語の新型受動構文は通常の直接受動構文から逸脱した表現であるが、高頻度の使用によって慣例化されたユニットとしての地位を得て、直接受動構文から新型受動構文への拡張もユニットとして現代中国語の体系に取り込まれることになったと考える。

### 3.4 プロトタイプ

認知言語学的研究の特徴として、それが適用するカテゴリー論を挙げなくてはならない。「カテゴリーが素性の集合から規定され、属する成員はすべてその素性を所有する」と見なす古典的カテゴリー観を否定し、その代わりにプロトタイプカテゴリーの理論を適用する。カテゴリーとは、そのカテゴリーにとって中心的で典型的な事例であるプロトタイプと、プロトタイプから何らかの側面において逸脱する周辺的事例から構成されていると見なされる。例えば、「鳥」のカテゴリーではスズメ、カラスなどが典型的とみなされるプロトタイプであるのに対し、ペンギン、ダチョウなどは周辺的である。簡単に言えば、プロトタイプとはカテゴリーにおける代表例のことをいう。心理的な処理過程において、プロトタイプは次のような特徴を持つ(吉村 2002b:224)。1)瞬時に思い出すことができる、2)長期にかつ安定的に記憶されている、3)多くの人が画一的に認定できる、4)幼少時から身近に親しんでいる。

意味的カテゴリーが中心的事例から拡張する場合、メタファーとメトニミーという二つの意味的要因が主要な役割を担っている。谷口(2005:18)によると、実際に意味拡張のすべては何らかの点でこのいずれかに還元されるといっても過言ではないという。伝統的定義によれば、メタファーは「類似性に基づく比喩」、メトニミーは「近接性に基づく比喩」であるが(谷口 2003:2-3)、認知言語学でのメタファー及びメトニミーはレトリックとしての比喩ではなく、より根源的に、人間の思考や概念の体系を形成する基盤として機能しているとみなされる。これが「概念メタファー」の見方である。例えば、**LOVE IS JOURNEY** は概念メタファーの一つの具体例である。Lakoff and Johnson(1980)は、私たちが恋愛を旅として概念化しており、その反映として①のような一連の言語表現が生じていると述べている。

#### ① LOVE IS JOURNEY (恋愛は旅である)

- a. Look *how far we've come*. (ごらん**ぼくらの愛が乗り越えてきた幾山河を**)
- b. We're *at a crossroads*. (二人は**岐路に立っている**)
- c. We're *stuck*. (ぼくらは**行き詰まってしまった**)
- d. It's been a *long, bumpy road*. (**長いでこぼこ道だった**)
- e. Our marriage is *on the rock*. (ぼくらの結婚は**暗礁に乗りあげている**)

f. We've gotten *off the track*. (ぼくらは脱線してしまった)

Lakoff and Johnson(1980)[渡部他(訳)1986:68]

図 3-4 に示すように、「旅」と「恋愛」という異なる概念が対応づけられるのは、メタファーの見方に基づくと、起点領域にある「旅」という空間的移動と、目標領域にある「恋愛」という抽象的経験とが、ともに「出発点(恋愛関係の始まり)」、「終点(恋愛関係の終わり)」という類似している構造を持っているためである。すなわち、起点領域の「経路」のイメージスキーマが目標領域に対応づけられているのである。このとき、旅人は恋人に、旅に用いられる乗り物は恋愛関係に、旅の終点は恋愛の目的に対応づけられる。

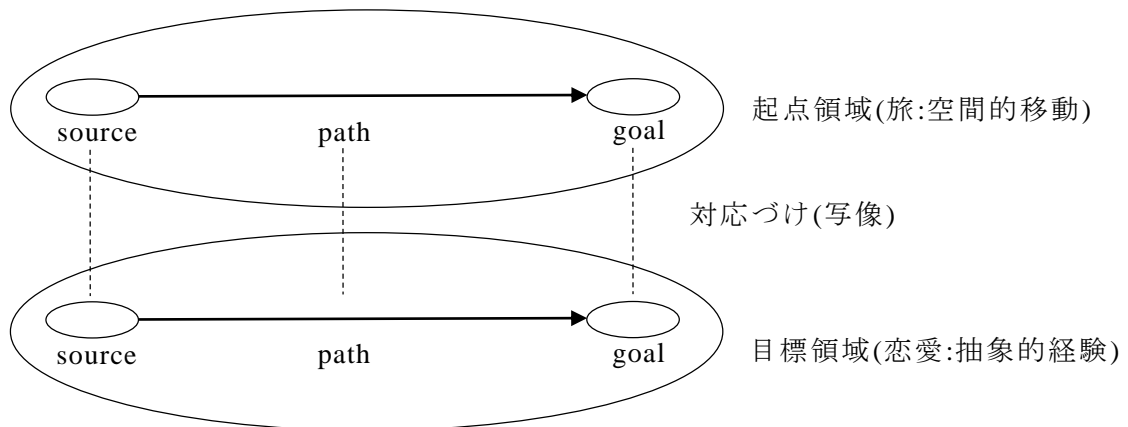


図 3-4 メタファー(谷口 2005:18 より 一部修正)

一方、メトニミーの例として、主に②に示すようなものが挙げられる。例えば、「電話を取った」と言った場合、「電話」という全体で、その部分である「電話器」を指していると言える。

- ② 全体-部分： 電話 (>電話器) を取った
- 容器-中身： やかん (>水) が沸騰する
- 製作者-産物： 漱石 (>作品) を読んだ
- 原因-結果： 八時間寝た (>眠った)

野村(2002:35)

すでに明らかなように、メタファーを支える類似関係とメトニミーを支える隣接関係は、認識基盤が異なる。前者は異なる領域の二者の間に存在するとみなされる意味的共通性を取り出し、この共通の意味成分がスキーマを形成する。しかし、後者は単一領域内の二者の間に存在するとみなされる指示的接触に基づく。メタファーは意味が似ているのに対して、メトニミーは指示対象が隣接する。ゆえに、前者はスキーマを形成するが、後者はスキーマを形成しない(テイラー他 2008:316)。

プロトタイプ理論では、カテゴリメンバーの間に典型性に関する相違があり、カテゴリの内部は決して均一ではないと特徴づけられる。このように、プロトタイプを中心として拡張する構造を「放射状カテゴリ」と呼ぶ。そして Langacker(1993)は、カテゴリが「プロトタイプ」とその「拡張」に加え、それらの共通性を抽出した「スキーマ」から適正に特徴づけられている。三者の関係を「家具」というカテゴリを挙げてみると、図 3-5 のように示すことができる。

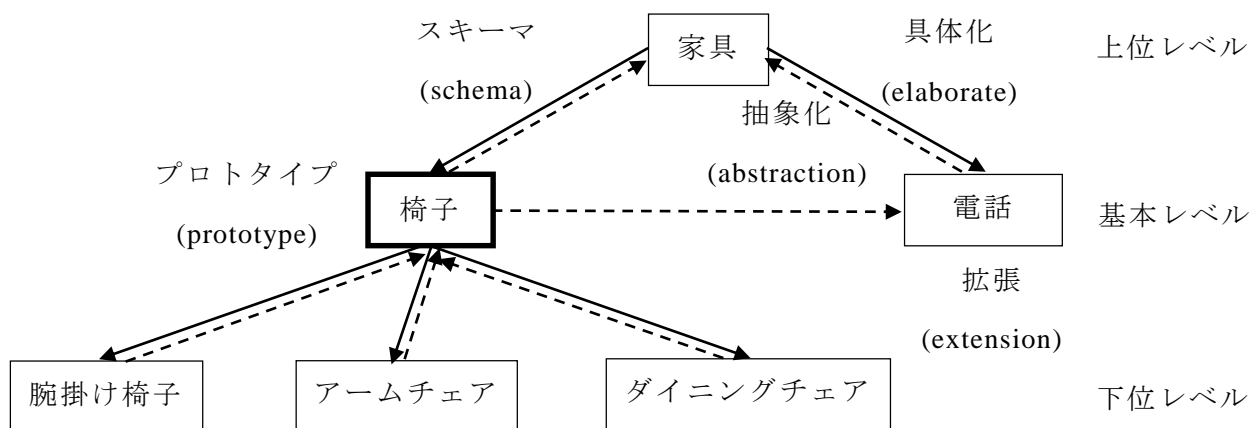


図 3-5 プロトタイプ及び放射状カテゴリ

すなわち、「家具」のプロトタイプである「椅子」とその拡張「電話」の共通性として「家に備え付け、日常使用する道具である」というスキーマが得られる。しかし、家具は椅子、電話など基本レベル・カテゴリに属する事例ばかりではない、椅子の下位レベルのカテゴリをなす事例として腕掛け椅子、アームチェア、ダイニングチェアなどいろいろある。このように、カテゴリを構成する事例間には、プロトタイプから周辺事例までの拡張と

いったヨコ関係、基本レベル・カテゴリーとその上下に位置する上位レベル・カテゴリー、下位レベル・カテゴリーといったタテ関係が存在する。こうした縦横の関係のように、プロトタイプに関わって副次的に生じる効果をプロトタイプ効果と呼ぶ。

本論文では、日中語の受動構文は直接受動構文であれ、特殊受動構文であり、いずれもこのようなプロトタイプ効果を持ち、特殊受動構文はプロトタイプである直接受動構文からメタファーなどの意味的要因によって拡張すると考える。

### 3.5 事象構造

人間が認知し、脳の神経組織に痕跡が残された認知上の事象を「事態」という。Langacker(1987)は、従来外部世界に起こった客観的事実として使われていた「事態」を人間の能動的な心的経験として捉えている。認知言語学のもとでは、一つの文、あるいは節が記述するのは一つの事態である。こうした「事態」は、行為や動作などプロセス的な事象だけではなく、状態や属性を述べる静態的な状況も指す。

このようにして捉えられた事態が、どのように言語の文法に反映されるかに関してはいくつかのモデルがある。例えば、Langacker(1991)のビリヤードボール・モデル、Croft(1991)の因果構造に基づく因果連鎖モデルなどである。

Langacker(1990)は事態が「個体である参加者が相互作用を行うことによって成立する」とみなし、球状の物体がエネルギー伝達し合うように事象を理想化するビリヤードボール・モデル(図 3-6)という事態認知モデルを提唱している。この中から、一区切りのエネルギー伝達の連鎖を取り出したものが、行為連鎖(図 3-7)と呼ばれている。

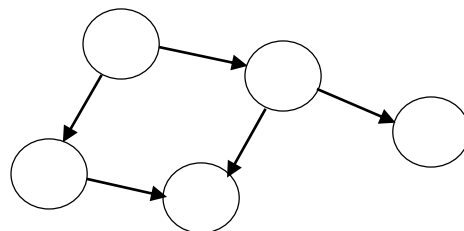


図 3-6 ビリヤードボール・モデル(谷口 2005:31 より)

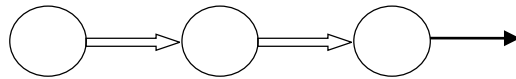


図 3-7 行為連鎖(同上)

この認知モデルに即して考えると、John broke the window という、二つの参加者からなるプロトタイプの他動事態を図 3-8 のように示すことができる。

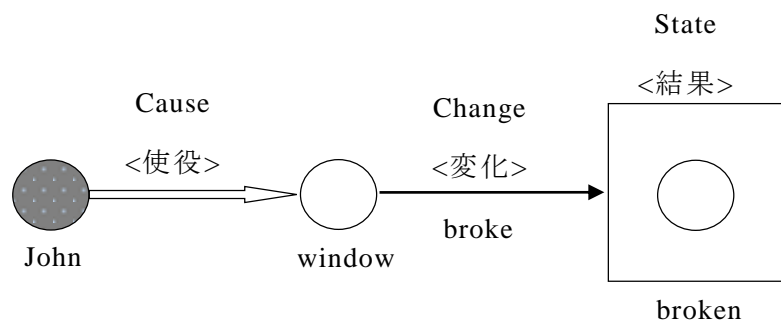


図 3-8 プロトタイプの他動事態(谷口 2005:34 より 一部修正)

ビリヤードボール・モデルは事態の参加者間によるエネルギーの伝播という視点から文法記述及び説明を行うとするものであるが、因果連鎖モデル(図 3-9 The rock broke the window を例に)は事態を参加者間の因果関係から分析し、主に動詞の意味の認知モデルが構築されている。因果連鎖モデルは、ビリヤードボール・モデルと同様、力の伝達から事態生起の特徴を捉えようとするモデルであるが、それに加えて、特に因果の概念と動詞の意味特徴を視点にしている点が特筆される。

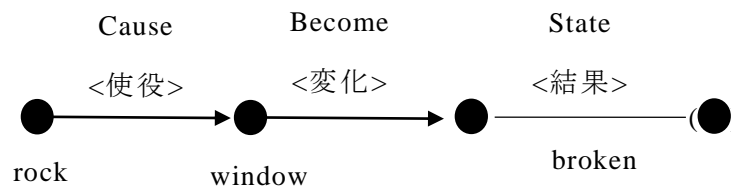


図 3-9 因果連鎖モデル(吉村 2002c:15 より 一部修正)



図 3-8 と図 3-9 は、同じく一つの参加者が他の参加者に作用し、その状態を変化させるという事態を認知モデルで表す。この二つの認知モデルを比較すると、構造がほとんど同様であり、表記の仕方が少し異なるだけであることがわかる。本論文は、表記の仕方がより精緻化され、広く使用されている行為連鎖モデルを援用し、具体的な受動文を例に、構文として日中語の受動構文の表す事象構造を図で表示する。

### 3.6 事態把握

認知言語学では、意味は認知現象と見なされ、その特性は認知過程に求められ、意味と概念化とを区別しない立場を取る(Langacker 1987)。したがって、表現の意味とは、概念主体であるところの「言葉の使い手」が、ある対象・出来事をどのように捉えているか、つまり概念化そのものであると言ってよい。認知主体である発話主体が外部世界を捉える際、どのような視点から、どの部分に焦点を当て、どのレベルで捉えるかは、認知主体の主観的な認知的な営みによってさまざまな捉え方ができる。Langacker はこのような概念化する認知能力のことを「事態把握・解釈」と呼ぶ。

事態把握は、経験世界の事実関係に基づきながらも、概念主体である話者の主観や経験的背景、あるいは個別言語の慣習に大きく依存する。菅井(2002a:20)の例を借りていうと、「風が吹く」というとき、まず「風」が存在して、それが「吹く」という事象を引き起こすものと描写しているが、物理現象としては「吹く」という事象の結果として生じたものが「風」と呼ばれるのであって、その意味で「風が吹く」の意味構造は物理現象を正確に反映したものではない。しかし、それにもかかわらず日本語で「風が吹く」という構造が認められるのは、まさに、当該の事態をそのように「解釈」しているからにほかならない。一方で、英語では虚辞的な主語を立てて *It blows.* のような構造が慣習化していることから、日本語と英語では同じ現象に異なる「解釈」が与えられていることになる。

#### 1) 詳述性

詳述性とはある状況がどの程度正確に、そして詳細に記述することである。詳述性の逆はスキーマ性である。

③ rodent → rat → large brown rat → large brown rat with halitosis

Langacker(2008)[山梨他(訳)2011:73]

例えば、rodent は large brown rat のスキーマ表現である。スキーマ的な特徴は、多くのより詳細な特性によって事例化されていき、その詳細な特性それぞれが大まかな記述を精緻化している。さまざまな方法や程度によって rodent を精緻化して行くと、③に示しているように際限なく続いていく。

## 2)焦点化

### 2-1)「前景」対「背景」

言語表現に見られる多くの非対称性は、「前景」対「背景」という形で比喩的に記述される。この両者はともに、認知能力の非常に一般的な特性を表している。知覚において際立っている現象は、前景となる図に対して背景となる地として捉えられる。

④ a.親が子を抱く

b.子は親に抱かれる

池上(2009b:70)

④の a と b は同じく、「親」と「子」という二つの参与者からなる事態を表すが、概念化者である話者は両者のいずれかを前景にするのか、という点においては異なる。すなわち、④a では「親」が前景化されるのに対し、④b では「子」が前景化される。

### 2-2)記号合成

lipstick のように、構成要素の lip と stick から構成される構造は合成記号構造と呼ばれる。構成要素と合成構造の関係は、前景化と背景化の具体事例である。すなわち、合成構造は前景、構成要素は背景となる。合成表現の分析可能性の程度はさまざまである。ある言語表現の合成構造を構成していく段階において、合成構造の意味が構成要素とどのように関連しているのかを表すのが合成経路である。例えば、図 3-10 は lipstick maker の合成経路を表している。前景化の相対的な程度を線の太さにより表している。

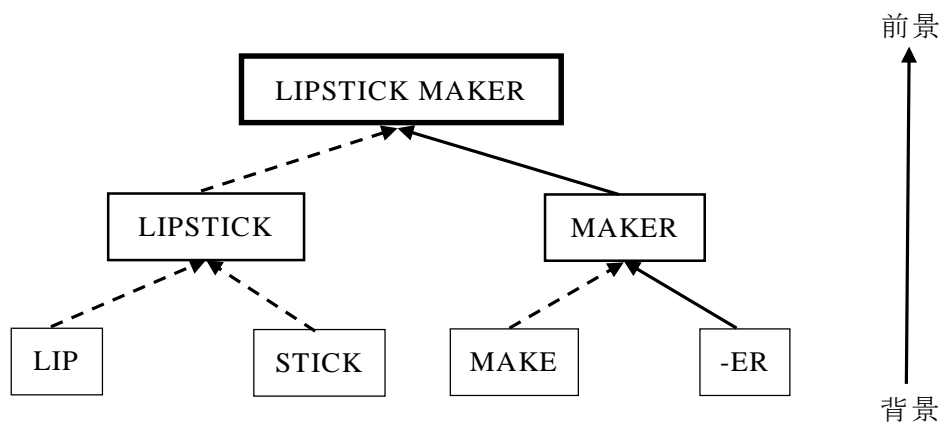


図 3-10 合成記号 lipstick maker の合成経路(Langacker (2008)[山梨他(訳)2011:78]より)

認知文法は、ある言語表現の意味は、合成される意味構造だけではなく、合成経路と前景化・背景化の関係にある二つの要素も含んでいると主張している。lipstick と maker は lipstick maker の直接構成要素であり、合成経路においても lipstick maker は、構成要素は lipstick と maker に分析することができる。以上のことから、合成構造と構成要素の近接性の観点から LIPSTICK と MAKER は、非常に際立っている構成要素であると言える。また合成構造 MAKER のレベルにおいて、構成要素である MAKE と -ER は背景化されているため際立ちは低い。一方、lipstick もやはり分析可能性が低いため、構成要素 LIP と STICK は際立ちが低いと言える。このように合成経路も語の意味に関与していると考え

る。

本論文では、使役受動構文は使役構文と受動構文によって合成された複合構造であると考え、日中語においてそれらの合成経路が異なるため、日中語の使役受動構文は異なるふるまいをするのであると考える。

### 2-3) スコープ

焦点化は前景化だけでなく、どの概念内容を言語として表示するのかという最初の選択とも関連している。概念基盤内の各々ドメインにおいて、ある言語表現は、ドメイン内でその言語表現が扱う範囲、つまりスコープを規定している。

我々が瞬時に心的に取り込める範囲はそれほど広くはない。ある言語表現が規定するスコープとは、その言語表現のスコープの理解に本来備わっている言語主体自身の心的・主観的な「視野」に現れる概念内容である。

Langacker(2008)[山梨他(訳)2011:73]によれば、スコープは最大スコープと直接スコープとの二つに分けられる。あるドメインにおける言語表現の最大スコープすなわちスコープの範囲が最大の場合と、ある言語表現の理解に直接関係している部分にスコープが限られる直接スコープを区別しなければならない場合がある。直接スコープは、最大スコープに対して前景化される。このように注目されている領域をメタファー的に「オンステージ領域」と呼ぶことができる。

最大スコープと直接スコープを区別することは、部分-全体関係を構成する階層を考える上で非常に重要である。⑤のような身体部位を表す語は、部分-全体関係を表すもっとも典型的な例であるが、ほかの経験ドメインにも同様の階層性が見られる。

⑤ body > arm > hand > finger > knuckle

Langacker(2008)[山梨他(訳)2011:83]

このような階層性の注目すべき特徴は、各部分が次に続く語の直接スコープとなっている点である。腕の概念は手の直接スコープであり、手は指の、指は指関節の直接スコープとして機能している。

### 3)際立ち

#### 3-1)プロファイル

プロファイルとは表現が指示する対象であり、喚起された内容の中にある注意の焦点である。例えば、「斜辺」という表現は、その概念ベースとして三本の直線からなる直角三角形の概念を喚起するが、その形状全体ではなく、その部分構造である斜めの直線のみを指し示し、プロファイルする。

言語表現は、モノか関係のどちらか一方をプロファイルする<sup>24</sup>。概念ベースは同じであるが、プロファイルの選択が異なるために、意味に違いが生じるケースがよく見られる。

---

<sup>24</sup> ここでいう「モノ」は物理的な物体のみに限られず、また、「関係」は必ずしも複数の参加者が関与することを意味するわけではない。Langacker (2008 [山梨他(訳)2011:126])によると、モノは概念的に具象化することにより生じるすべての産出物としてかなり抽象的に特徴づけられ、図式では円か楕円により表される。関係にはプロセス関係と非プロセス関係との二つに分けられる。プロセス関係は時間軸上に展開し、図式では矢印  $t$  によって表されるのに対し、非プロセス関係は時間軸上の展開が焦点化されていない。名詞はモノ、動詞はプロセス関係、形容詞、副詞、前置詞、分詞などは非プロセス関係をプロファイルする表現である。

実質的には概念内容は同じであるのに意味の違いが生じるのは、解釈が異なるためであり、モノや関係への注意の向け方により、言語表現の概念的な指示対象が選択されるからである。

### 3-2)トラジェクターとランドマークの配列

ある関係がプロファイルされると、程度も多様なさまざまな際立ちが、関係性を有する参与者に与えられる。もっとも際立っている参与者は、トラジェクターと呼ばれ、ある場に位置づけられたり、評価されたり、記述される対象として解釈される。トラジェクターは、プロファイル関係において第一のもっとも重要な焦点である。ほかの参与者は二番目に際立っている焦点となり、これはランドマークと呼ばれる。ある言語表現が同じ概念内容を持ち、同じ関係をプロファイルすることがあるが、トラジェクターとランドマークの選択の違いが意味の違いを生じさせている。

例えば、前置詞の **above** と **below** は、同じ概念内容を持ち、垂直軸に並ぶ二つの対象間の相対的な位置関係を表し、同じ関係をプロファイルしている。しかし、関係を有する参与者に与えられる際立ちの程度には違いがある。より高い位置の参与者 **X** の位置を特定するために **X above Y** を用い、より低い位置の参与者 **Y** の位置を特定するために **Y below X** を用いる。二つの語の意味が異なるのは解釈の違い、つまりトラジェクターとランドマークの配列が異なるからである。

多くの関係性を表す言語表現において、焦点参与者は一つである。このデフォルトとして定められる唯一の焦点参与者は、もっとも重要な参与者でなくてはならない。この唯一の焦点参与者がトラジェクターである。トラジェクターとランドマークは、特定の意味役割や概念内容としてではなく、もっとも、もしくはその次に焦点化され際立っている対象と規定している。そして、焦点化され際立っているのは、モノに限定されておらず、関係にもトラジェクターやランドマークとして焦点を置くことができる。

本論文では、使役受動構文のコト使役者の原因類及び主体-活動関係にある持ち主受動構文はともに直接受動構文と異なり、モノではなく関係をランドマークとしていると考える。

### 4)視点

概念化が比喩的に言って場面を視覚的に捉えることだとすれば、視点とは視点の配置であると言える。視点が配置される際に想定される立脚点・視座が存在していることは明らかである。

#### 4-1)視点の配置

視点の配置とは「観察者」と「観察されている状況」の全体的な関係のことである。認知文法における観察者とは、言語表現の意味を理解する概念化者であり、また話し手であり聞き手でもある。

認知文法において主観性対客観性として知られている、事態把握において重要な役割を果たす現象もこの視座と関連している。認知主体による事態把握には、基本的に二つの対立する視座がある。一つは、認知主体が自らの身をその事態の中において事態を捉えるという「主観的把握」の事態内視座であるが、もう一つは、認知主体が自らの身をその事態の外において事態を捉えるという「客観的把握」の事態外視座である。客観的把握の視点配置は、観察者と観察される対象との間の非対称性が最大になっており、観察する主体はもっとも主観的に、観察される対象はもっとも客観的に解釈される。

#### 4-2)参照点関係

参照点関係と呼ばれる種類のメンタル・スキニングは、知覚の事例から正しく裏づけられる。例⑥のように、位置づけることが困難なもの「アヒル」の特定を助けるために、知覚的に際立っているもの「ボート」を参照点として、聞き手の注意をそこに向けさせることがある。

⑥ Do you see that boat out there in the lake? There's a duck swimming right next to it.

Langacker(2008)[山梨他(訳)2011:109]

我々は、あるものとの「メンタル・コンタクト」を作り上げるために、他のものの概念を喚起する能力を備えている。最初に喚起されるものは参照点と呼ばれ、その参照点を経由して指示されるのがターゲットである。ある特定の参照点は、多くの異なるターゲットへアクセスする可能性を持つ。潜在的にターゲットとなるものはまとまりをなし、参照点のドミニオンを構成している。このように、参照点関係は図 3-11 に示される要素からなる。例えば、⑥の場合、参照点はボート、ターゲットはアヒル、ドミニオンはアヒルを含めボートの近辺すべてとなる。

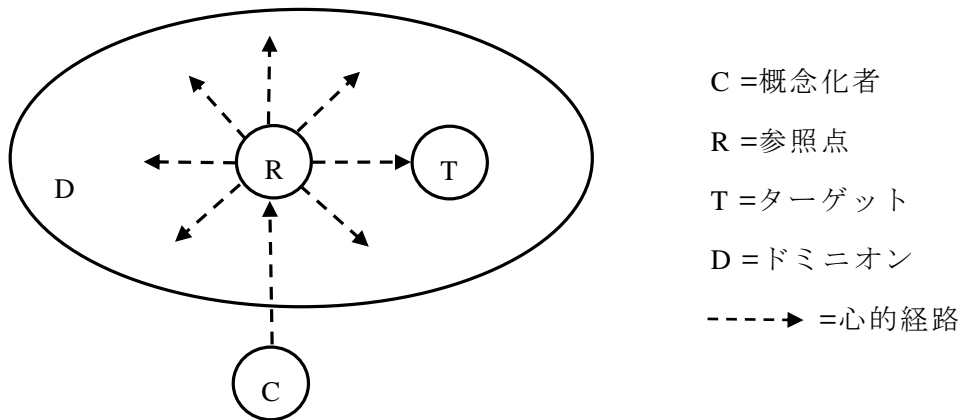


図 3-11 参照点関係(Langacker(2008)[山梨他(訳)2011:109]より)

参照点関係が基本的には所有構造という本質的な意味を持っている。所有構造では、所有者と所有物を逆転すると、大半の言語表現が不適切になるのは所有関係の不可逆性のためであると考えられる。ここでいう所有関係の不可逆性は、まず参照点に心的にアクセスし、そして参照点を基にしてターゲットの理解が可能となるという、参照点関係の本質的な非対称性を反映している。スキーマ的で、かつ一般的な記述においては、参照点としての所有者の機能とターゲットとしての所有物の機能が明確にされなければならない。本論文は参照点関係によって日中語の持ち主受動構文について分析を行う。

日中語における特殊受動構文の事態把握に関する先行研究は、詳述性、スコープ、視点及び際立ちからの分析(王黎今 2012)に限られており、日中語の母語話者は同一の受動事態に対する把握における相違を明らかにするために、参照点関係、記号合成なども考慮に入れなければならない。よって、本論文は Langacker(2008)で提案された四つの面、つまり詳述性、焦点化、際立ち、視点という四つから、日中語の特殊受動構文の表す事態把握を詳細に考察していく。

### 3.7 まとめ

以上のように、本節では、認知言語学における構文文法、認知文法、特に事態把握に関連する重要な諸概念を概説した。

言語表現形式が異なるのは意味の違いの表れであり、言語表現の意味は認知主体である

話者が事態を把握する際の視点、捉え方の反映である。すなわち、認知文法では、「意味と形式の一対一対応」原則を採用することで、形式の異同から意味の異同を探り、そこから事態把握の異同を探るということである。要するに、構文的特徴と事態把握はそれぞれ独立しているものではなく、密接に結び付いているということである。本論文は、このような認知言語学の観点を用いて、日中語の特殊受動構文の構文的特徴及びそれに反映される事態把握の異同を考察する。

本論文において、受動構文はプロトタイプである動作対象主語の直接受動構文と、それからメタファーなどの意味的要因により拡張した非動作対象主語の特殊受動構文からなるネットワークを形成し、合成経路も受動構文の意味に関与すると考える。形式的特徴から、意味的特徴、さらに事態把握の特徴を考察することによって、日中語の特殊受動構文の異同点を明らかにする。



## 第4章 中国語の新型受動構文の構文的特徴及び事態把握

### 4.1 はじめに

現代中国語において、2008年から下記例(1)、(2)のように、「被自杀(自殺したことにされる/自殺させられる)」、「被就业(就職したことにされる/就職させられる)」など主に自動詞<sup>25</sup>から構成された「被+X」構文、いわゆる新型受動構文の新用法がよくインターネットや新聞に現れるようになった(王学群 2012)。

- (1) 我 是 在 不明真相 的 情况 下 “被 就业” 的!  
私 である で 真相を知らない の 状況 下 受動 就職する の  
(本当のことを何も知らされないまま(就職していないが)就職していることにされたのだ)

[南方都市报 2009-07-20]

- (2) 在 監視 下 上吊 自杀 和珅 原 是 “被 自杀”  
ある 監視 下 首をつる 自殺する 人名 なんだ である 受動 自殺する  
(なんだ和珅が(自殺したくなかったが)監視の下で首をつって自殺させられたのか)

[博宝艺术网 2009-11-27]

このような新型受動構文はどのような構造及び意味合いを持っているのか。また、事象構造の面から見て、どのような特徴があるのであろうか。

そこで、本章では構文文法と認知文法の観点から、現代中国語における「被+X」という新型受動構文を対象に、その構文的特徴及び事態把握を明らかにすることを試みる。

まず、4.2で中国語の新型受動構文に関連する研究を概観し、先行研究の問題点を指摘する。次に、4.3では使用基盤モデルの視点から、新型受動構文の形式的・意味的特徴を考察

---

<sup>25</sup> 先行研究では、「被就业(就職していないのに就職したことにされる)」、「被捐款(寄付したくないが、寄付させられる)」、「被结婚(結婚したくないが結婚させられる)」などの「离合词(周上之 2006:1)によると、典型的な離合詞は語義上、普通の単語のように分離できなく、形態的には連語と同様に拡張可能な中国語の「動詞+目的語」構造である)」は全て自動詞としているが、本論文ではこの観点に従う。

し、当該構文の意味的ネットワークを構築する。4.4 で実例に基づき、新型受動構文の事態把握を明らかにする。最後に 4.5 では結論を述べる。

## 4.2 先行研究

インターネット上において 2007 年に起きたある事件<sup>26</sup>がきっかけとなり、新型受動構文が 2008 年から盛んに使われるようになったと言われている(王学群 2012)。これによって、新型受動構文に関する研究は研究者の関心を集めている。本節では、新型受動構文の構文的特徴及びその事態把握に焦点を当てたものの中から代表的なものを選んで検討し、本論文との関連を述べながら、先行研究の問題点を指摘してみたい。

### 4.2.1 新型受動構文の構文的特徴に関する先行研究

形式の面においては、新型受動構文は通常の受動構文と比べて、次の二点が大きく異なる。一つは、受動標識に後続する「X」の位置に入るものとして、語のみならず、句もよく見られ、また、品詞から見ると、動詞(自動詞と他動詞<sup>27</sup>)のみならず、形容詞及び名詞(代名詞、数量詞、字母詞などを含む)も可能である(彭咏梅, 甘于恩 2010、林璋 2010、王寅 2011、池昌海, 周晓君 2012、杨巍 2012、施春宏 2013)ということである。もう一つは、当該構文のほとんどは、「X」に「着/了/过」という助詞や結果補語(例:「得」補語)など何も付いていない形で現れる(何洪峰, 彭吉军 2010、王淑华, 杨仁君 2011)ということである。

また、新型受動構文の意味構造に関しては、一致する意見がいまだに見当たらない。NP 受動者+被+X<sub>V</sub>・A・N(P)という意味構造を持つという見解(王寅 2011、杨朝丹 2011、张媛 2012)がある一方、NP1 受動者+被+(NP2 動作主+VP)+X<sub>V</sub>・A・N(P)という意味構造を持つという指摘(何洪峰, 彭吉军 2010、陈文博 2010、池昌海, 周晓君 2012、杨巍 2012、陈长书 2012、施春宏 2013、杨炎华 2013 など)もある。すなわち、前者は新型受動構文の「X<sub>Vi</sub>・A・N(P)」がすべて他動詞

---

<sup>26</sup> この社会的事件とは、当事者である李国福は死亡し、各種の形跡が他殺であることを示しているにも関わらず、政府当局に自殺したと判断されてしまった、ということである。

<sup>27</sup> 現代中国語において、他動詞は通常の直接受動構文のみならず、新型受動構文の述語としても用いられる。動作主名詞が明示されないと、通常の直接受動構文と新型受動構文はいずれも「NP1 主語+被+Vt」という形になり、形式的には区別がつかない。両者を区別する方法について、詳しくは李麗萍他(2014)を参照のこと。

化あるいは動詞化の操作を経て、通常の受動構文「被+VP」の他動詞と同じ振る舞いになると考えている。それに対し、後者は新型受動構文の「 $X_{Vi \cdot A \cdot N(P)}$ 」には品詞変化が起これず、ただ前後の文脈によってもう一つの「NP2<sub>動作主</sub>」及びその動作「VP」が明示されていないだけで、本質的には通常の受動構文と同様の意味構造を持っているとしている。新型受動構文の意味構造はいったいどのようになっているのか。

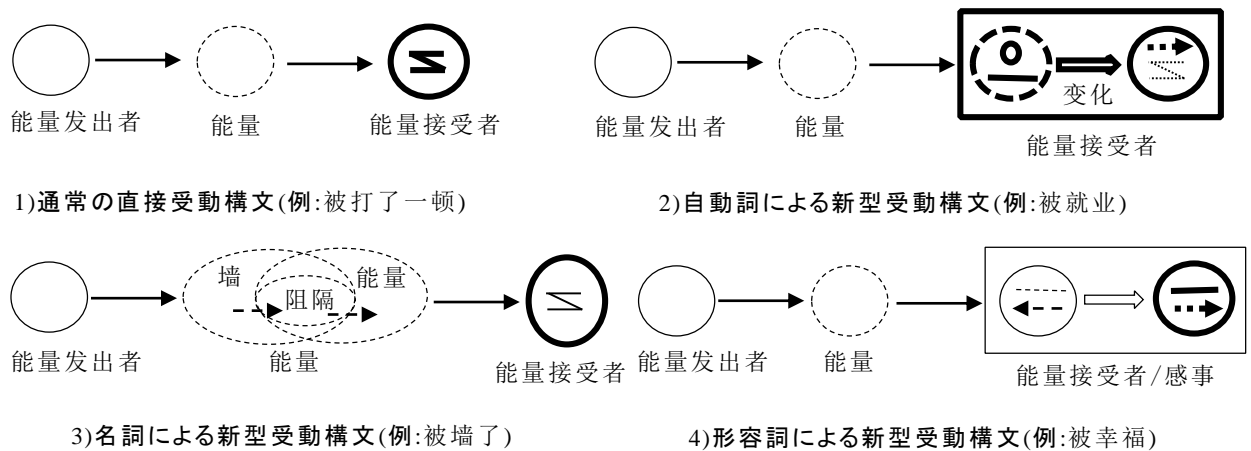
新型受動構文の意味分類については、異なる分類がなされている。そのうち、「非事実性」を表す「被認定(Xだとされる)」類と「非意図性」を表す「被強迫(Xさせられる)」類との二分類法は、研究者の間では呼び方が若干違うものの、他の分類法に比べてより一致している。本論文においては、この二分類法を取るが、2.2.2で述べたように「X」の表す出来事ではなく、「NP1<sub>主語</sub>+X」の表す事態の事実性によって、「非事実性」を表す認定類と「非意図性」を表す強迫類との二つに分ける。日中対照の立場から見ると、認定類と強迫類のいずれにおいても質の異なるものが存在する。よって、この二分類をより詳しく下位分類しなければならない。これまで、認定類と強迫類の下位分類、及び当該構文の意味的ネットワークに関する研究はないようである。

#### 4.2.2 新型受動構文の事態把握に関する先行研究

新型受動構文の構文的特徴に関する研究が盛んになされてきたが、当該構文の表す事象構造や事態把握に関する研究はまれにしか見られない。張媛(2012)は認知文法及び構文文法の角度から、Langacker(1991)の図式を用いて新型受動構文の表す事象構造を説明したが、それに問題点や不足しているところは存在する。

陈长书(2012)は新型受動構文が「原因-動作-結果(原因-動作-結果)」といった使役事態を表し、「X」がその中の「結果(結果)」を表すと述べている。また、施春宏(2013)は新型受動構文がある「操控事件(支配する出来事)」を被るといった「蒙受事件(被る出来事)」、言い換えれば、主語指示物が「X」に関連する出来事を受けることを表し、「X」がその中の「施为事件(実行する出来事)」を表すと分析している。陈长书(2012)のいう「結果(結果)」と施春宏(2013)のいう「施为事件(実行する出来事)」は異なるもののように見えるが、後述するように、両者はともに主語指示物の行う活動を表す。

また、張媛(2012)は通常の直接受動構文の表す事態を典型的な他動事態とし、「X」が自動詞、名詞、形容詞である新型受動構文の表す事態を、以下のように図式で表している。



実線のサークル=参与者    点線のサークル=見えないエネルギー    二重線の矢印=事態の状態変化  
 太線のサークル=tr    サークルの中の曲線=変化    サークルの中の直線=非変化または状態  
 太線の部分=profile    実線の矢印=エネルギーの伝達方向    点線の矢印=メタファーチェーン  
 サークルの中の円=非自主性    太線のサークルの点線=非事実性    サークルの中の直線=非変化  
 サークルの中の点線の矢印=自主性

図 4-1 中国語における受動構文の事象構造(张媛 2012:51-54 より)

上図からわかるように、张媛(2012)では、他動詞による新型受動構文の事態構造が言及されず、自動詞、名詞、形容詞による新型受動構文の事態構造が統一しておらず、当該構文の表す事態の「非事実性」、「非意図性」といった「否定」の意味が表示されていないといった問題点が存在していると考えられる。したがって、新型受動構文の表す事態構造を如実に、統一的に解明することが望まれる。新型受動構文の表す事象構造や事態把握を明らかにすることによって、新型受動構文と通常の直接受動構文との関係や、中国語には日本語の使役受動構文及び間接受動構文に対応する受動構文が存在する、といったことがわかる。

#### 4.2.3 まとめ

以上からわかるように、新型受動構文の構文的特徴が先行研究の中心となっており、認知言語学の視点からそれが表す事象構造や事態把握を論述するものは極めて少ない。新型受動構文の表す事象構造や事態把握を解明しなければ、当該構文の構文的特徴を明らかにしたとは言えない。なぜなら、意味とは概念化、つまり把握であるからである。構文的特

徴に関する研究の中でも、分岐が少なからず存在している。先行研究では、主に以下の問題はまだ分析が不十分であり、更なる考察が必要である。

- 1) 新型受動構文の意味構造はいったいどのようになっているのか。
- 2) 認定類と強迫類はどのように下位分類を行うことができるのか、当該構文の意味的ネットワークはどのようになっているのであろうか。
- 3) 新型受動構文はいったいどのような事態を表すのか、「X」の部分が事態の中にどのように位置づけているのか。

本論文では、これらの問題に対して、使用基盤モデルによりボトムアップ的に新型受動構文の意味構造を分析し、下位分類を行い、メタファーという意味的要因から当該構文の意味的ネットワークを構築する。その上で、新型受動構文の構文的特徴に反映する事態把握を解明する。

### 4.3 新型受動構文の構文的特徴

上述したように、形式的に新型受動構文は通常受動構文と明らかに異なる。このような差異は言語形式の表出・明示化に関わる。このことは新型受動構文の意味構造を解明することによって明らかになる。また、意味的に認定類と強迫類は質の異なるものではあるが、両者はメタファー的な関係にある。それぞれ受動の二重性及び意図性によって下位分類することができる。

#### 4.3.1 新型受動構文の形式的特徴

前節で述べたように、形式的に新型受動構文は通常受動構文と比べて、述語に入る品詞類の範囲及びアスペクト助詞や結果補語など述語に後続するその他の成分の欠如、という二点が特徴的である。これは新型受動構文における動作主及びその動作を表す元の述語動詞が明示されないためであると考えられる。

新型受動構文は NP<sub>受動者</sub>+被+X<sub>V・A・N(P)</sub>という意味構造を持つという見解(王寅 2011、楊朝丹 2011、張媛 2012)がある一方、NP1<sub>受動者</sub>+被+(NP2<sub>動作主</sub>+VP+)<sub>X<sub>V・A・N(P)</sub></sub>という意味構造を

持つという指摘(何洪峰,彭吉军 2010、陈文博 2010、池昌海,周晓君 2012、杨巍 2012、陈长书 2012、施春宏 2013、杨炎华 2013 など)もある。本論文は基本的に後者に賛成し、その理由としては以下の二つが考えられる。ただし、修正するところは、明示されない他動詞の種類及び否定の意味の挿入といった二箇所である。つまり新型受動構文の意味構造は <NP1(X に関連する主体)>+(没/不/无(否定副詞)+X<sub>V</sub>·A·N(P)+)被+「NP2(V の動作主)」+(VP<sub>认定成、为/强迫/弄得、成+</sub>)X<sub>V</sub>·A·N(P)<sup>28</sup>であると主張する<sup>29</sup>。

第一に、置き換え操作によって、新型受動構文「NP1+被+X<sub>V</sub>·A·N(P)」の表す意味は通常の受動構文「NP1<sub>受動者</sub>+没/不/无(否定副詞)+X<sub>V</sub>·A·N(P)+被+NP2<sub>動作主</sub>+VP+X<sub>V</sub>·A·N(P)」のそれと同じであることがわかる。

(3)、(4)からわかるように、明示されない他動詞は、池昌海,周晓君(2012)及び杨炎华(2013)で指摘された「认定(見なす)」類(例:(1))、「强迫(强迫する)」類(例:(2))以外<sup>30</sup>、「弄(手に持って遊ぶ、いじる)」という動詞<sup>31</sup>も挙げられる。

(3) 女生 送 关怀, 独苗 男孩 “被 幸福”。

女子学生 送る 配慮 一人っ子 男の子 受動 幸福

(女子学生(全員)が至れり尽くせりの配慮をしたためクラスで唯一の男子は幸せに思った)

[江苏新闻网 2013-03-08]

<sup>28</sup> ここでは<>はその中の成分が省略できることを意味し、「」はほとんど現れないことを、( )は言語化されないことを意味する。

<sup>29</sup> 先行研究のほとんどは、新型受動構文は認定類と強迫類の他動詞による通常の直接受動構文と同じ意味を表すとしているが、実は両者は「非事実性」、「非意図性」といった「否定」の意味を有するかどうかにおいては異なる。新型受動構文と認定類・強迫類の他動詞による通常の直接受動構文との区別について、詳しくは李丽萍(2014)を参照のこと。

<sup>30</sup> 李伟大(2010)によると、認定類の動詞は认为(と思う)、判定(判定する)、处理(処理する)、看作(見なす)、列入(~の中に入れる)などであり、強迫類の動詞は要求(要求する)、强制(強制する)、强行(強行する)、安排(手配する)、规定(規定する)、内定(内定する)などある。また、杨炎华(2013)によれば、認定類の動詞は认作(と認める)、评为(と評定する)、判定(と判定する)、传成(と伝える)などであり、強迫類の動詞は强迫(強迫する)、逼迫(強制する)、勒令(強制的に執行させる)、要求(要求する)などある。

<sup>31</sup> 山根(2004:45)によると、代動詞機能を果たすと一般的に認識されている「弄」という動詞は、「EVENT<sub>1</sub>+V 得+EVENT<sub>2</sub>」に代表される文において「V」として生起する場合、他の特定の動詞を代行しているとはみなせず、異なる機能を果たしているという。すなわち、この種の「弄」は先行して生起する主述フレーズ全体、つまり「EVENT<sub>1</sub>」全体を原因事態としてプロファイルし、「得」後方の結果事態である「EVENT<sub>2</sub>」へ繋げるという機能語に似た役割を果たしている。

(4) 如果 申花 主场 未能 击败 陕西, 鲁能 就  
ならば チーム名 ホーム できない 打ち負かす チーム名 チーム名 すぐ  
将 被 冠军。

であろう 受動 優勝チーム

(もし申花チームがホームで陝西チームを負かせなかったら、鲁能チームはチャンピオンにならされるであろう)

[搜狐体育 2010-10-23]

また、先行研究では、新型受動表現(1')a、(2')a、(3')a、(4')aの表す意味はそれぞれ、(1')b、(2')b、(3')b、(4')bであるとしているが、例(1)-(4)における前後の文脈からもわかるように、(1')b、(2')b、(3')b、(4')bよりも「否定」<sup>32</sup>の意味を含んだ(1')c、(2')c、(3')c、(4')cの方が適切であろう。なぜなら、(1')b、(2')b、(3')b、(4')bは「就職したことにされた」、「自殺させられた」、「幸せに思った」及び「チャンピオンになった」といった意味を客観的に表すことにとどまり、「本当は就職していないのに」、「本当は自殺したくなかったのに」、「そのようなことがなければ幸せに思うはずがないが」及び「本当は実力でチャンピオンになることができるはずがないが」といった「否定」の含意には特に言及、または強調されていないためである。

(1')a. 我“被就业”了

b. 我被学校说成就业了

c. 我没有就业而被学校说成就业了

(2')a. 和珅“被自杀”了

b. 和珅被皇帝强迫自杀了

c. 和珅不想自杀而被皇帝强迫自杀了

(3')a. 男孩被幸福了

b. 男孩被{ ×说成/×强迫/○弄得感觉 }很幸福了

<sup>32</sup> 林璋(2010)は、この「否定的」と「被害」は、中国語の動作主主語受動文(本論文でいう新型受動構文の認定類)の特徴となり、その後続出する同パターンの言い方(本論文でいう新型受動構文の強迫類)に受け継がれていると述べている。

- c. 男孩本来没有觉得很幸福因为全班女生送关怀而被弄得觉得很幸福了
- (4')a. 鲁能被冠军了
- b. 鲁能被{ ×说成/×强迫/○弄成 }冠军了
- c. 鲁能凭实力无法成为冠军因为申花没有击败陕西而被弄成冠军了

以上のように、(1')a、(2')a、(3')a、(4')a という簡単な新型受動表現は意味的に通常受動表現に置き換えられ、それぞれ(1')c、(2')c、(3')c、(4')c のように複雑な意味を表すが、否定の意味、動作主名詞及び元の述語動詞が明示されず、ただ受動者主語名詞、受動標識の「被」及び結果を表す部分の一部、つまり結果句の意味論的な中心だけが言語化されている<sup>33</sup>。したがって、(3)-(4)のように形式上、新型受動構文はアスペクト助詞などその他の成分がなくても、結果を表す動詞(句)、形容詞(句)、名詞(句)といった実質的な内容を表すものだけで成立するのである。

第二に、テストによって、自動詞、形容詞、名詞の新型受動構文はそれぞれの品詞が他動詞に変化したとは考えられないことが明らかになる。したがって、新型受動構文の意味構造は「NP<sub>受動者</sub>+被+X<sub>V・A・N(P)</sub>」ではないと言える。

周知のように、(5)のような典型的な他動詞の受動表現「被杀(殺される)」は、受動標識「被」が削除されると同時に、主語名詞が目的語として動詞の後に移ると、当該受動文と対応する能動文になる。

- (5) 单廷秀 父子 被 杀, 定 是 你 作为。  
 人名 父子 受動 殺す きっと である あなた 仕業  
 (单廷秀父子の殺害は、おまえの仕業にちがいない)

[対訳 红高粱]

このような操作によって、例(1)-(4)のような自動詞、形容詞、名詞の新型受動表現は、それぞれ主語名詞が目的語として後続することができないことが明らかになる。

- (1'){ ○我 “被就业” /×就业我 }

<sup>33</sup> 林璋(2010)も基本的に同じ意見を述べている。



- (2') { ○和珅 “被自杀” / ×自杀和珅 }
- (3') { ○男孩 “被幸福” / #幸福男孩 }
- (4') { ○鲁能 “被冠军” / #冠军鲁能 }
- (5') { ○单廷秀父子 被杀 / ○杀单廷秀父子 }

このように、王寅(2011)、杨朝丹(2011)、张媛(2012)が主張した、新型受動構文「NP + 被+X」の「X」の位置に来る自動詞、形容詞及び名詞はすべて他動詞と同じような性質・文法機能を持つようになったという見方は、(1')-(5')のような現象を説明できない。これは、簡単に新型受動構文の意味構造を典型的な他動詞受動構文の意味構造と同一視するのは妥当ではないことを示唆している。

以上の考察から明らかなように、新型受動構文は否定の意味、動作主名詞及びその動作を表す元の述語動詞が明示されず、その結果の意味を表す結果句・結果節の一部しか表されない。形式上、述語の位置に入るものは動詞(句)のみならず、形容詞(句)及び名詞(句)も可能であり、述語にその他の成分が後続しなくてもよい。

#### 4.3.2 新型受動構文の意味的特徴

新型受動構文は通常受動構文のように受動の意味を表すが、「事実はそのようではない」(認定類)、「本当はそうしたくない」及び「他の外的な要因がなければそうする、またはそうなるはずがない」(強迫類)という否定の意味をも表す。本節では、新型受動構文の二分類、つまり認定類と強迫類は異なるものの、ともに「X」が主語指示物の行う活動であるという点で共通しており、それぞれ受動の二重性及び意図性によって下位分類を行い、当該構文の意味的ネットワークを明らかにする。

##### 4.3.2.1 新型受動構文の意味分類

新型受動表現がインターネットで現れて以来、一般的な新聞・雑誌へ、さらに人民日報・中央テレビ局へ、最後に日常会話へと広がりを見せている(王学群 2012:270)。収集した例文を分析すると、新型受動構文「NP1+被+X」は、「X」が主語「NP1」の行う活動であることがわかる。例えば、(6)の「我被结婚(私が結婚していることにされている)」では、「结婚

(結婚する)」は主語の「我(私)」が行う活動である。同様に、(7)の「80后被結婚(1980年以後生まれた人たちが結婚させられる)」では、「結婚(結婚する)」は主語の「80后(1980年以後生まれた人たち)」が実行する動きである。つまり、新型受動構文は行為主体が主語に立つ受動構文であると考え<sup>34</sup>。

(6) 去 領 结婚证 才 知道 被 结婚

行く 受け取る 結婚証明書 やっと わかる 受動 結婚する

(結婚届を出しに行った時に、やっと結婚していることにされていることがわかった)

[凤凰网 2013-04-18]

(7) 被 相亲” “被 结婚” “被 离婚” 80后 的 婚姻 谁 做主

受動 見合いをする 受動 結婚する 受動 離婚する 1980年後 の 婚姻 誰 決める

(お見合いをさせられ、結婚させられ、離婚させられ 1980年以後生まれた人たちの婚姻は誰が決めるの?)

[新华网 2012-08-23]

よって、新型受動構文は「NP1+X」の表すことが事実であるか否かによって、二分することができる。すなわち、(6)のように「非事実性(事実ではないこと)」を表す「被認定(「NP1+X」ではないが、「NP1+X」だとされる)」類及び、(7)のように「非意願性(意志ではないこと)」を表す「被強迫(NP1がXしたくないが、やむを得ずXさせられる)」類である。

本章では、便宜的にそれぞれA類、B類といい、「非事実性」と「非意願性」との両者を一括して「話者の否定的判断」と呼び、そして以下のように定義する。

1) A類(認定類)：被認定

A類の表す非事実性とは、「NP1+X」の表すことが事実ではないということである。

2) B類(強迫類)：被強迫

---

<sup>34</sup> 林璋(2010)は本論文と同じ意見を持ち、こういった新型受動文における主語の位置に動作主、経験者及び対象も生起するため、通常受動文と区別して「動作主主語受動文」と呼んでいる。

B 類の表す非意図性とは、「NP1+X」の表すことが事実ではあるが、それが X に関連する主体 NP1 の意図によるものではないということである。

### 3) 話者の否定的判断

話者の否定的判断とは、A 類の「NP1+X」の表すことが事実ではない、及び B 類の「NP1+X」の表すことが関連する主体 NP1 の意図によるものではない、といった話者の真実性、主語名詞の意図性を否定する判断のことである。

換言すれば、新型受動構文は通常受動構文の持つ「受動」の意味に加え、「話者の否定的判断」という否定の意味も有している(林璋 2010:14、王淑华,杨仁君 2011:59、王学群 2012:275、尚来彬 2010:80)。こういった否定の意味を持つため、新型受動構文の「被」は「被动标记(受動標識)」というよりもむしろ「否定标记(否定標識)」と呼んだほうがよいという見方すらも見られる(王淑华,杨仁君 2011:59)。

共時的な使用実態を見れば、A 類は B 類より多く(杨巍 2012)、基本的な用法であり、B 類はそれからの拡張であると考えられる。一方、通時的な面から見れば、これは「被+X」構文の最初の用例<sup>35</sup>と言われる「被自殺(受動標識+自殺する)」と深くかかわる社会的事件、つまり、当事者である李国福は他殺だが、政府に自殺と判断されたということによると考えられる(cf.杨巍 2012、李麗萍 2014)。また、経済性の観点から見れば、B 類は「被+強迫(強迫する)+X」に置き換えられても基本的に意味が変わらないのに対し、A 類はそれと同義かつ簡潔である表現が存在しない(同義の直接受動表現が存在するが、それは複文になる)ため、B 類より多く使用されているのではないかと考える(cf.杨巍 2012)。B 類は、「NP1+X」という事実の否定から「NP1 が X したくない」という関連主体の意図性の否定へと拡張されたものであり、「否定」という意味及び「被害・不如意」というニュアンスはその拡張を動

---

<sup>35</sup> 「被+X<sub>vip</sub>」、つまり自動詞による新型受動構文の最初用例として挙げられるのは、「被自殺(受動標識+自殺する)」、「被就业(受動標識+就職する)」、「被吵架(受動標識+喧嘩する)」などである。しかし、本論文ではインターネットから収集した例文から、最初にネット流行語としての「被+X」構文の最初用例は「被自殺」であることがわかる。この「被自殺」について、林璋(2010:14)は以下のように述べている。

この“被自殺”の成立には、次のような三者がかかわる。まず、A という人が死亡した。次に、A の死亡を B が自殺と断言する。今度は C が、A は“被自殺”とコメントする。つまり、C は受動文を使うことによって、B の判断を否定的にとらえるのである。そして、B の判断で A が「被害」を被るということも前面に出ている。

機付けていると思われる<sup>36</sup>。

前述したように、A類とB類には質の異なるものが存在する。それぞれ受動の二重性と意図性によって下位分類をすることができる。

まず、A類には、(6)のようなものも存在すれば、(8)のような二重の受動性を表すものも存在する。

(8) 郭美美之母自曝 炒股 发家 郎咸平 “被\_\_\_\_\_采访”

人名 の母自ら 暴露する 株の売買 家を富ます 人名 受動 インタビューする  
(株の売買によって金持ちになったと郭美美的母は自ら暴露した。郎咸平は(本当は郭美美にインタビューした側なのだがネットユーザーには郭美美に)インタビューされた(ようなものだ)と言われている)

[凤凰视频 2011-08-04]

沈家煊(2010:94)は新型受動構文の中には、(8)「被采访(受動標識+インタビューする)(被(说成)被采访(インタビューされたことにされた))のような隣接している二つの「被」が一つになっていると考えられる類も存在すると指摘している。この類も非事実を表すため、本論文ではA類に入れることにする。本論文は意味的に「被」を一つしか持たない、非事実性を表す新型受動構文を普通A類と呼び、二つ持つものを特殊A類と呼ぶことにする。すなわち、普通A類は、(6)の「被结婚(結婚していることにされている)」のように一つの「被」の意味しかない。一方、特殊A類は、(8)の「被采访(インタビューされたことにされた)」のように二つの「被」の意味を有している。本論文は、字面上も「被」一つしかない特殊類は実は二つの「被」が一つになっているためであるという沈家煊(2010)の説に従う。例文を調べる限り、意味的に「被」を二つ持つものは少数であり、A類(例:(8))にのみであり、B類(例:(7))にはない。

一方、B類には、(7)「被结婚(結婚させられる)」のような「強制」の意味以外に、(9)「被冠军(チャンピオンに成らされる)」のような「原因」を表す拡張的用法も見られる。本論文では、B類を意図性の有無によって二分する。そして、A類に並行して、「強制」という反

---

<sup>36</sup> 林璋(2010:14)では、この「否定的」と「被害」は、中国語の動作主主語受動文(本論文でいう新型受動文の認定類)の特徴となり、その後続出する同じパターンの言い方(本論文でいう新型受動文の強迫類)に受け継がれている、ということが指摘されている。これは本論文と同じ観点である。

意図性を表す B 類を普通 B 類、「原因」という無意図性を表す B 類を特殊 B 類と呼ぶことにする。換言すれば、B 類の「非意図性」は被使役者の意図性の性質によって、強制類では被使役者の意図に反する「反意図性」と、原因類では被使役者の意図の有無またはその意図の如何に関わらない「無意図性/非意図性」との二つに分けられる。

- (9) 如果 申花 主场 未能 击败 陕西, 鲁能 就  
ならば チーム名 ホーム できない 打ち負かす チーム名 チーム名 すぐ  
将 被 冠军。  
であろう 受動 優勝チーム  
(もし申花チームがホームで陝西チームを負かせなかったら、鲁能チームはチャンピオンにならされるであろう)

[例(4)再掲]

普通 B 類と特殊 B 類との区別は、使役者(出来事を含む)の当該事態への関わり方、あるいは使役者の意図性の有無にある。すなわち、(7)のように「強制」という普通 B 類では、使役者「両親」が、強制の形で主語 NP1 の被使役者「1980 年以後生まれた人たち」に関わり、当該事態「1980 年以後生まれた人たちが結婚する」を意図的に生じさせているのに対し、例(9)のように、「原因」という特殊 B 類<sup>37</sup>では、「申花チームが陝西チームを負かせなかった」という事態使役者が、主語 NP1 の被使役者「鲁能チーム」に意図的には関わっておらず、当該事態「鲁能チームがチャンピオンになる」が生じる原因である。つまり、使役者は当該事態を意図的には生じさせていない。

また、両者の共通点は、「受動」及び「否定」の意味を持つことにあると言える。すなわち、(7)、(9)のように、主語 NP1 の被使役者「1980 年以後生まれた人たち」、「鲁能チーム」は、使役者の「両親」から強制力、または出来事「申花チームがホームで陝西チームを負かせなかった」から影響を受け、「結婚したくなかったのに、強制的に結婚させられる」、または「実力でチャンピオンにならないが、外部の要因によって結果的にチャンピオンにならされる」といった事態になる。このように、「受動」及び「否定」の意味をあわせ持つ

---

<sup>37</sup> 林璋(2010)は、このような新型受動文を意味的に「被伝聞」と「被使役」との二つに分けて、「被使役」の用法には「強制使役」しかないとしているが、実は(9)のような「原因使役」の用法も見られる。

ことは新型受動構文の特徴であり、「受動+否定」の意味は当該構文の構文的意味になると考える。

(9)のように NP2 またはそれに関連する事柄(申花チームがホームで陝西チームを負かせなかった)が原因となって「NP1 が X する・になる」という出来事(魯能チームがチャンピオンになる)を引き起こす場合に、新型受動構文(被冠军(受動標識+チャンピオン))が用いられると、「原因」の意味になる。原因・結果は、図 4.2 に示すように、エネルギーあるいは力の起点・到達点からメタファー的に拡張されたものであると考えられる(山梨 2009:106)。それゆえ、「原因」の意味は「強制」というプロトタイプの意味からの拡張だと言えるであろう。

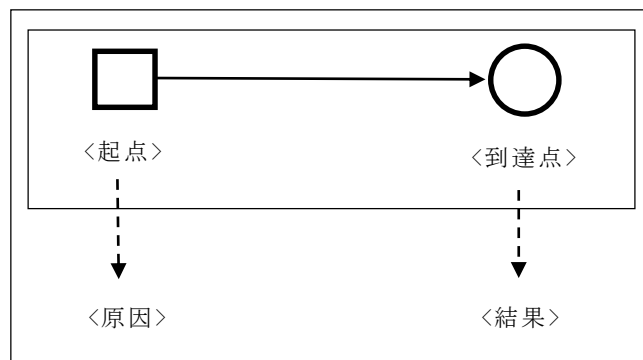


図 4-2 原因と結果への拡張(山梨 2009:106 より)

以上のように、新型受動構文は行為主体が主語に来る受動構文であり、意味的に認定類と強迫類に分けられ、前者がプロトタイプであり、後者がメタファー的に前者から拡張するものだと考えられる。また、認定類は受動の二重性によって普通 A 類と特殊 A 類に分けられ、強迫類は意図性の有無によって普通 B 類と特殊 B 類に分けられる。

#### 4.3.2.2 新型受動構文の意味的ネットワーク

前節で述べたように、本論文での新型受動構文に関する意味分類、及び意味間の関係を図式すると、以下のようになる。太線のボックスは典型的事例、細線のボックスは拡張事例、下に向く実線の矢印は具象化、上に向く点線の矢印は抽象化、右に向く点線の矢印は

拡張関係を表す。

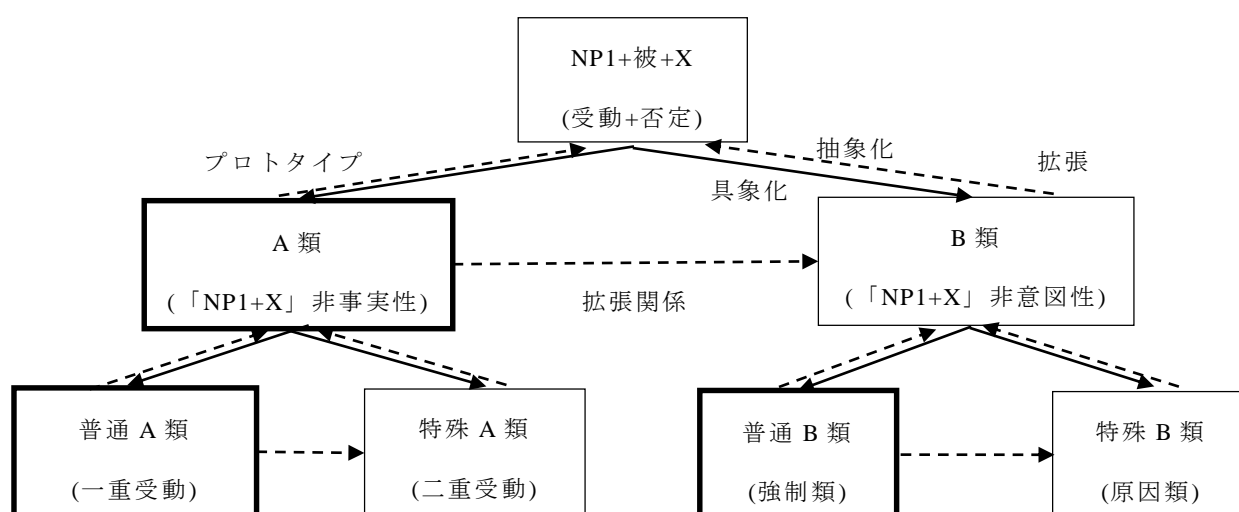


図 4-3 新型受動構文の意味的ネットワーク

すなわち、「受動」及び「否定」をあわせ持つ新型受動構文「NP1+被+X」は、「NP1+X」の表す事態が事実であるか否かによって、まず「非事実性」を表す典型的な用法 A 類と、「非意図性」を表す拡張的な用法 B 類に分けられ、「否定」及び「被害」の意味がその拡張を動機付けていると考える。

次に、意味的に「被」を一つしか持たないかどうかによって、一つしか持たないものを普通類とし、二つ持つものを特殊類とするが、「被」二つ持つものは非常に少なく、A 類にしかない。

また、B 類は、使役者が意図的に使役事態に関わる「強制」類というプロトタイプから、使役者(無情物を含む)が非意図的に使役事態に関わる「原因」類への拡張が見られ、それは力の起点・到達点から原因・結果へのメタファーによるものだと考えられる。

品詞別を見ると、他動詞しか二重受動の用法、つまり特殊 A 類を持たない。また、B 類用法においては、非能格自動詞は普通 B 類の用法及び特殊 B 類の用法のいずれも持つが、非対格自動詞は特殊 B 類の用法しか持たない。これらの差異は認知言語学的観点から説明できる。

まず、谷口(2005:31-34)によれば、典型的な他動詞はある参加者がもう一つの参加者にエネルギーを伝達し、その位置・状態を変化させる、といった二つの参加者間の空間的・状態

的使役関係を表す。こういった典型的な他動的事態を行為連鎖によって表示すると、図 4-4 のようになる。

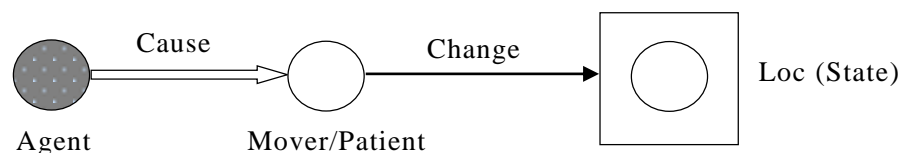


図 4-4 典型的な他動詞の意味表示(谷口 2005:76 より)

二重受動の用法ができるのは、上図のように非対称的な使役関係にある二つの参与者からなる事態を表す品詞に限る。後述するように、自動詞は一つの参与者しか存在しない事態を表す、また、形容詞、名詞は二つの参与者間の非プロセス関係を表すが、両者の間には影響-被影響のような非対称的な使役関係が存在しない。よって、他動詞しか二重受動の用法を持たないのである。

また、谷口(2005:124-134)によると、典型的な非能格動詞は参与者自らのエネルギーによって行為をなすことができ、自律的な事態であるのに対し、典型的な非対格動詞は外部の参与者からエネルギーを受けて生じる依存的事態である。それぞれ認知モデルによって表すと、図 4-5 のようになる。

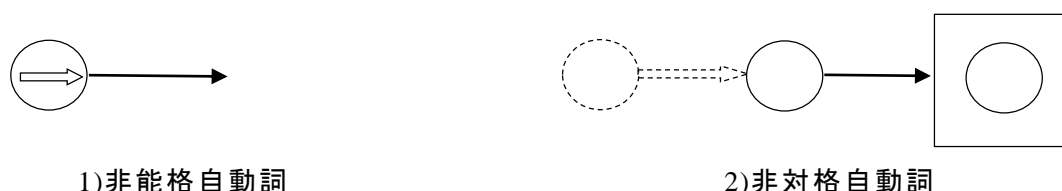


図 4-5 自動詞の下位分類(谷口 2005:123 より)

参与者自らのエネルギーによって行為をなすことができない非対格自動詞は、使役者の作用を受けても、それに強要されるように何かをすることができないため、「強制」の意味を表す普通 B 類にはならないと思われる。



### 4.3.3 まとめ

以上、形式と意味の面から、新型受動構文の構文的特徴について詳しく考察した。要点をまとめると、以下のようになる。

第一に、新型受動構文は<NP1(Xに関連する主体)>+(没/不/无(否定副詞)+X<sub>V・A・N(P)</sub>)被+「NP2(Vの動作主)」+(VP<sub>認定成、為/強迫/弄得、成</sub>)X<sub>V・A・N(P)</sub><sup>38</sup>という意味構造を持つ。そのうち、否定の意味、動作主名詞及びその動作を表す元の述語動詞が明示されず、その結果の意味を表す結果句の一部しか表されない。つまり形式上、述語の位置に入るものは動詞(句)のみならず、形容詞(句)及び名詞(句)も可能であり、述語にその他の成分が後続しなくてもよい。

第二に、新型受動構文は「X」が主語指示物の行う活動であるため、行為主体が主語に立つ受動構文であると考えられる。意味的に新型受動構文は「受動」と「否定」をあわせ持ち、「NP1<sub>主語</sub>+X」の表す事態が事実であるか否かによって、非事実性を表す認定類と非意図性を表す強迫類と二分することができ、前者がプロトタイプであり、後者がメタファー的に前者から拡張するものだと考える。また、認定類は受動の二重性によって普通A類と特殊A類に分けられ、強迫類は意図性の有無によって普通B類と特殊B類に分けられる。

## 4.4 新型受動構文の事態把握

認知言語学は、意味を概念化と見なす。概念化とは、把握事態に対する解釈・捉え方であり、従って、意味とは解釈・捉え方である(菅井 2002b:23)。本論文は、Langacker(2008)、谷口(2005)で提案された事態認知モデルを用い、他動詞、自動詞、形容詞及び名詞による新型受動文(10)-(15)を例に、認定類と強迫類との二つに分けて、構文としての新型受動構文の表す事態把握を図で示す。

新型受動構文の事象構造を検討する前に、認知モデルによって形容詞及び名詞の表す事態をどのように表示するかについて紹介しておこう。

Langacker(2008)によれば、名詞はモノ、動詞はプロセス関係、形容詞は動詞と異なり、非プロセス関係をプロファイルする。「我很高兴(私は嬉しい)」という単純な非プロセス関

---

<sup>38</sup> 注 28 を参照。

係を認知モデルによって表すと、以下のようになる。

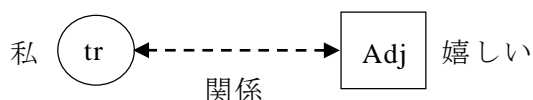


図 4-6 形容詞の表す非プロセス関係

サークルはモノ、四角形は存在、ここでは形容詞の表す感情、点線の双方向矢印は二つの存在、この場合は、「私」と「嬉しい」との両者の関係を表示する。

また、「她是小三(彼女は愛人である)」という単純な非プロセス関係を認知モデルによって表すと、以下のようになる。

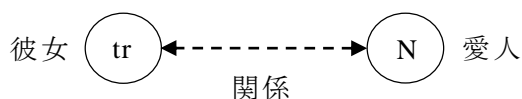


図 4-7 名詞の表す非プロセス関係

サークルはモノ、点線の双方向矢印は二つのモノ、この場合は、「彼女」と「愛人」との両者の関係を表示する。

#### 4.4.1 認定類の事態把握

まず、普通 A 類である「她们天天都在被怀孕(彼女たちは毎日(妊娠していないのにメディアによって)妊娠したことにされてしまう)」の「被怀孕」が表す事象構造は認知モデルによって表示すると図 4-8 のようになる。

(10)周迅 王菲 谢娜！她们 天天 都 在 被 怀孕

人名 人名 人名 彼女たち 毎日 みんな している 受動 妊娠する

(周迅、王菲、謝娜、彼女たちは毎日(妊娠していないのにメディアによって)妊娠

したことにされている)

[新浪网 2015-04-01]

(10)は、メディアは妊娠していない彼女たちが妊娠したと言う、ということを表す。換言すれば、メディアは彼女たちが妊娠していないことを、妊娠したことにする、といった使役事態を表す。図 4-8 では、実線の二重矢印は直接的な影響を表し、点線の四角形は否定の意味、ここでは非事実性、太線の部分はプロファイル、点線の曲線は同一指示を表す。

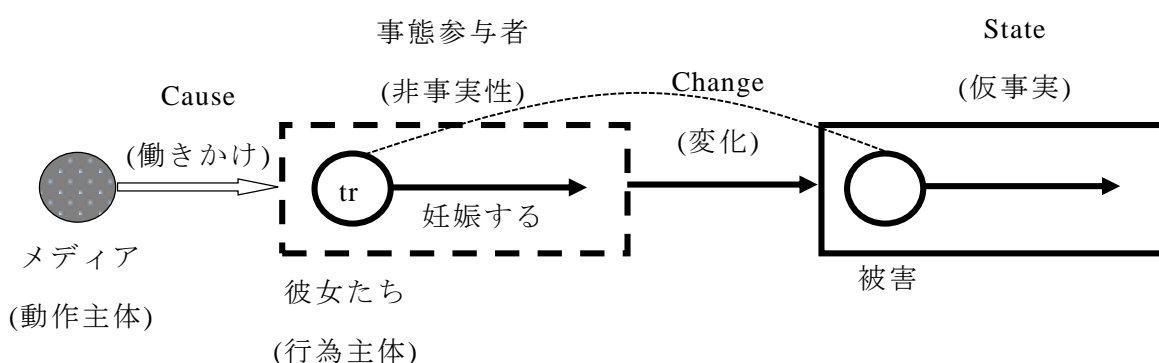


図 4-8 普通 A 類の新型受動構文の事象構造

すなわち、「被怀孕」は一方の参与者である「メディア」が他方の参与者である「彼女たちが妊娠している」という出来事にエネルギーを伝達し、その非事実の状態を変化させるという拡張的な他動事態を表しているが、概念化者である話者は、作用を受ける側である「彼女たちが妊娠している」という出来事の中の行為主体である「彼女たち」に注視し、この事態全体を主語「彼女たち」にとって好ましくないものと捉え、この事態の一部だけを述べている。

(11) 哈尔滨 女子 建设银行 卡 1 万元 莫名 “被 消费”

地名 女性 銀行名 カード 1 万元 不思議に 受動 消費する

(ハルビン女性の建设银行カードにある 1 万元は(本当は使われていないのに銀行員によって)使われたことにされた)

特殊 A 類の新型受動文である(11)「1 万元(没有被女子消费却)被(银行工作人员说成被女子)消费了(1 万元は(本当は女性に使われていないのに銀行員によって)使われたことにされた)」の「被消費」が表す事象構造は図 4-9 になる。

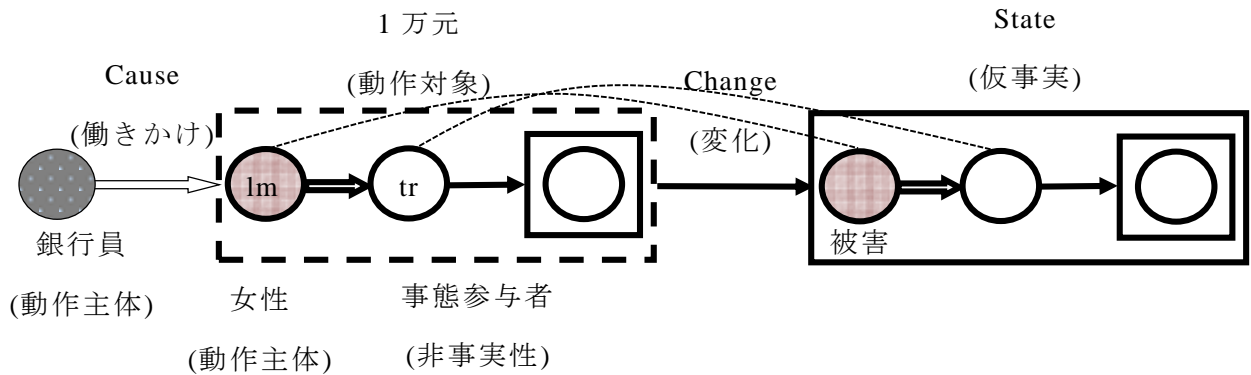


図 4-9 特殊 A 類の新型受動構文の事象構造

つまり、「被消費」は、一方の参与者である「銀行員」が他方の参与者である「女子が 1 万元を使う」という出来事にエネルギーを伝達し、その非事実である性質状態を変化させるという拡張的な他動事態を表しているが、概念化者である話者は影響を受ける側である「女子が 1 万元を使う」という出来事の中、その動作対象である「1 万元」に注視し、この事態全体を動作主体である「女子」にとって好ましくない事態であると捉え、この事態の一部だけを述べている。

このように、新型受動構文の認定類は通常受動構文と同様に、直接的なエネルギーの伝達による、二つの参与者からなる他動事態を表すが、通常受動構文の表す典型的な他動事態(Prototype transitive relation)と異なり、直接的なエネルギーを受けるのはモノ参与者ではなく、コトあるいは事態参与者である、という拡張的な他動事態(Extensive transitive relation)を表す<sup>39</sup>。言語化に際して、話者はこのような拡張的な他動事態の一部しか明示し

<sup>39</sup> ここでいう「典型的な他動事態(Prototype transitive relation)」と「拡張的な他動事態(Extensive transitive relation)」は谷口(2005)によるものである。谷口(2005:292-293)によると、他動事態は全体として Cause-Change-State(Loc)の三分節からなるものであり、物理的物体というモノ参与者が事態参与者の典型であるのに対し、モノ参与者を含む事態、つまりコト参与者がモノ参与者の拡張であると考えられる。また、直接受動構文・中立受動構文と

ない。

#### 4.4.2 強迫類の事態把握

4.4.1 で新型受動構文の認定類の表す事態把握を考察してきたが、本節では新型受動構文の強迫類の表す事態把握を分析していく。

(12) 在 監視 下 上吊 自杀 和珅 原 是 “被 自杀”

ある 監視 下 首をつる 自殺する 人名 なんだ である 受動 自殺する

(なんだ和珅が(自殺したくなかったが)監視の下で首をつって自殺させられたのか)

[例(2)再掲]

(12)「在監視下上吊自杀 和珅原是“被自杀”(なんだ和珅が(自殺したくなかったが)(皇帝の)監視の下で首をつって自殺させられたのか)」の「被自杀」表す事象構造は、認知モデルによって表すと以下のようになる。実線の二重矢印は直接的な影響、点線の二重矢印は間接的な影響を表し、点線のサークルは否定の意味、ここでは反意図性を表示する。

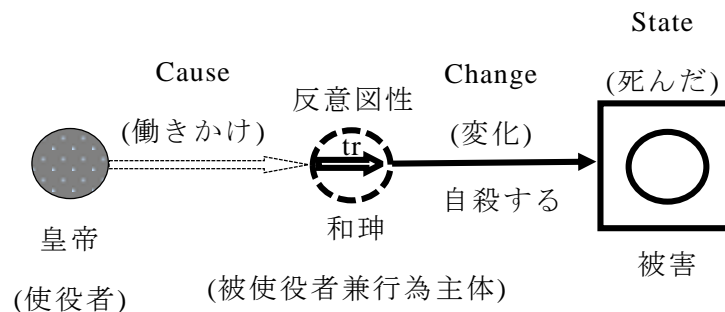


図 4-10 普通 B 類の新型受動構文の事象構造

間接受動構文・被害受動構文の表す事態解釈に関しては、谷口(2005:308)は以下のように述べている。

被害受け身文も中立受け身文も共に、デフォルト的な tr、lm 配列から逸脱した認知的際立ちを課すことを示すという機能は共有しており、両者の相違はベースとなる事態にあると言える。中立受け身文は P-transitive relation をベースとした受け身文であるのに対し、被害受け身文は E-transitive relation という拡張された他動関係をベースとした受け身文であり、その点において中立受け身文からの拡張とみなされるのである。

「被自杀」は、使役者である「皇帝」が間接的に被使役者の「和珅」にエネルギーを伝達し、被使役者の持つ反意図性を変えることによって、被使役者が「自殺する」という行為を実行し、それが生きていた状態から死んだ状態に変わったという典型的な使役事態を表している。概念化者である話者は間接的な影響を受ける側である「和珅」に注視し、この事態全体を主語「和珅」にとって好ましくないものと捉え、この事態の一部だけを述べている。

続いて、特殊 B 類の事態把握を見てみよう。

(13)北京 房价 物价 高涨 不止， 居民 消费 被 增长。

地名 住宅価格 物価 騰貴する ない 止まる 住民 消費 受動 上がる

(北京の住宅価格と物価が騰貴して止まらないため、住民の消費額は増加させられた)

[地产中国网 2010-11-24]

(13)「北京房价物价高涨不止，居民消费被增长(北京の住宅価格と物価が騰貴して止まらないため、住民の消費額は増加させられた)」の「被增长」が表す事象構造は以下のように示すことができると考えられる。点線のサークルは否定の意味、ここでは無意図性を表示する。

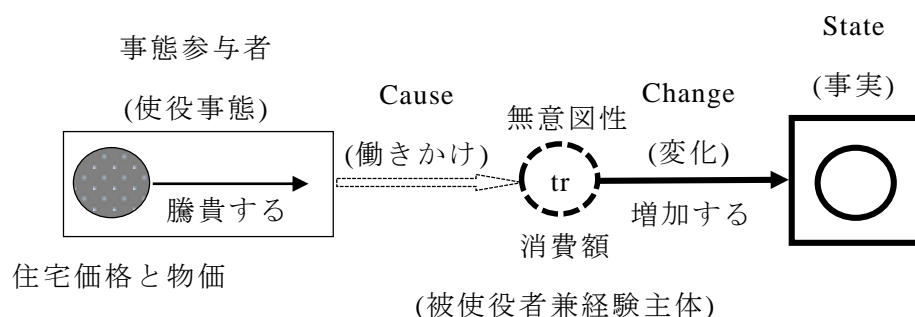


図 4-11 特殊 B 類の新型受動構文の事象構造

すなわち、「被增长」は、一方の参与者である「北京の住宅価格と物価が騰貴する」という出来事が、被使役者である「消費額」に間接的にエネルギーを伝達し、結果として「消

費額」が「増加した」という状態になった、といった拡張的な使役事態を表している。概念化者である話者は間接的な影響を受ける被使役者の「消費額」に注視し、この事態全体を被使役者に関連する有情物「住民」にとって好ましくないことであると捉え、当該使役事態の一部だけを述べている。

このように、新型受動構文の強迫類は、認定類の表す他動事態と異なり、直接的なエネルギーではなく、間接的なエネルギー伝達による使役事態を表す。使役事態は他動事態から拡張するものであると考えられる。新型受動構文の強制類はモノ参加者から間接的な影響を受けるという典型的な使役事態を表すが、原因類はコトあるいは事態参加者から間接的な影響を受ける、といった参加者がモノからコトへと拡張する使役事態を表す。言語化に際しては、強迫類は認定類と同様に、話者がそのような使役事態の一部のみ明示する。

以上、動詞による新型受動構文の表す事象構造を考察してきた。最後に、名詞と形容詞による新型受動構文の事象構造を認知モデルで表すことを試みる。

(14) 被 小三 和 被 人 当作 假想敌 的 女生 就 在 我们 身边。

受動 愛人 と 受動 人 と思う 假想敵 の 女性 絶対に いる 私たち 身の回り

((愛人ではないのに)愛人であることにされてしまう、あるいは假想敵にされてしまう女性たちが私たちの身の回りにいる)

[北方网文化娱乐 2012-09-29]

(14)は、他人は愛人ではない女性たちが愛人であると言う、ということを表す。換言すれば、他人が女性たちは愛人ではないということ、愛人であるということにする、といった使役事態を表す。図 4-12 では、実線の二重矢印は直接的な影響を表し、点線の四角形は否定の意味、ここでは非事実性、太線の部分はプロファイル、点線の曲線は同一指示を表す。

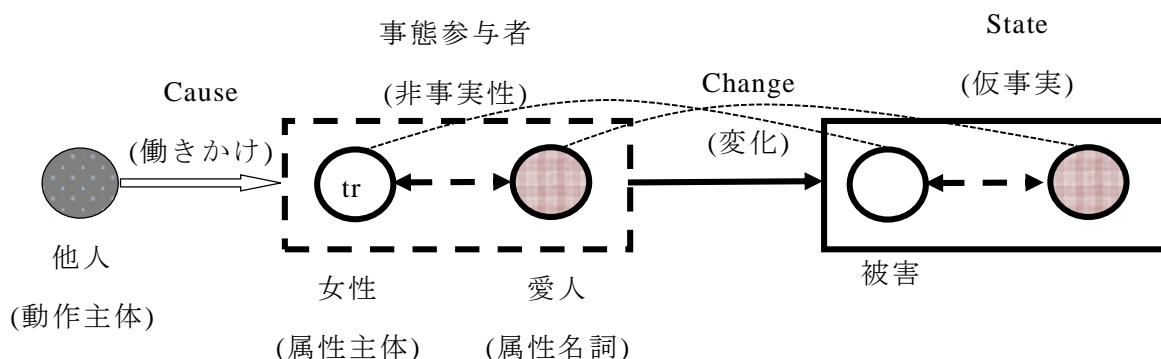


図 4-12 名詞による普通 A 類の新型受動構文の事象構造

すなわち、「被小三」は一方の参与者である「他人」が他方の参与者である「女性が愛人である」という出来事にエネルギーを伝達し、その非事実の状態を変化させるという拡張的な他動事態を表しているが、概念化者である話者は、作用を受ける側である「女性が愛人である」という出来事の中の属性主体である「女性」に注視し、この事態全体を主語「女性」にとって好ましくないものと捉え、この事態の一部だけを述べている。

(15) 女生 送 关怀，独苗 男孩 “被 幸福”。

女子学生 送る 配慮 一人っ子 男の子 受動 幸福

(女子学生(全員)が至れり尽くせりの配慮をしたためクラスで唯一の男子は幸せに思った)

[例(3)再掲]

(15)の「被幸福」が表す事象構造は以下のように示すことができると考えられる。点線のサークルは否定の意味、ここでは無意図性を表示する。



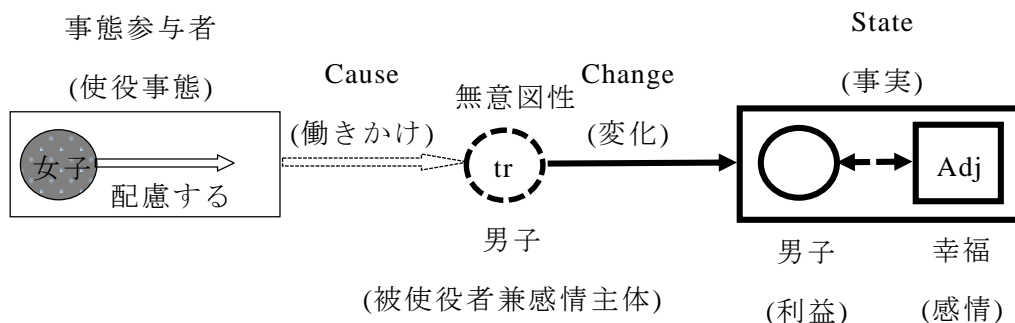


図 4-13 形容詞による特殊 B 類の新型受動構文の事象構造

すなわち、「被幸福」は、一方の参与者である「女子学生が配慮する」という出来事が、被使役者である「男子」に間接的にエネルギーを伝達し、被使役者の持つ意図性の如何に関わらず、結果として「男子」が「幸せに思った」という心理状態になった、といった拡張的な使役事態を表している。概念化者である話者は間接的な影響を受ける被使役者の「男子」に注視し、この事態全体を被使役者兼感情主体の「男子」にとって好ましいことであると捉え、当該使役事態の一部だけを述べている。

以上のように、図 4-12 と図 4-13 はそれぞれ図 4-8 と図 4-11 と同様に、図では非事実性と非意図性といった否定の意味が表示され、動詞、形容詞及び名詞による新型受動構文の表す事象構造と事態把握は統一的に説明することができる。

#### 4.4.3 まとめ

以上、認定類と強迫類との二つに分けて、新型受動構文の表す事態把握を考察した。内容をまとめると、次のようになる。

第一に、新型受動構文の認定類は通常受動構文と同様に、直接的なエネルギーの伝達による、二つの参与者からなる他動事態を表すが、通常受動構文の表す典型的な他動事態と異なり、直接的なエネルギーを受けるのはモノ参与者ではなく、コトあるいは事態参与者である、という拡張的な他動事態を表す。言語化に際して、話者はこのような拡張的な他動事態の一部しか明示しない。

第二に、新型受動構文の強迫類は、認定類の表す他動事態と異なり、直接的なエネルギー

一ではなく、間接的なエネルギー伝達による使役事態を表す。使役事態は他動事態から拡張するものであると考える。新型受動構文の強制類はモノ参加者から間接的な影響を受けるという典型的な使役事態を表すが、原因類はコトあるいは事態参加者から間接的な影響を受ける、といった参加者がモノからコトへと拡張する使役事態を表す。言語化に際しては、強迫類は認定類と同様に、話者がそのような使役事態の一部のみ明示する。

## 4.5 おわりに

本章では実際の使用に基づき、新型受動構文の構文的特徴を詳しく考察し、その上で、当該構文の事態把握における特徴を認知モデルによって表すことを試みた。新型受動構文は有情物主語に限らず、無情物主語も見られるが、いずれも主語またはそれに関連する有情物にとって当該事態が被害または利益になる。元の述語動詞、つまり認定類や強迫類の動詞が明示されないため、新型受動構文は形式的に述語として動詞(句)のみならず、形容詞(句)及び名詞(句)も可能となる。

以上述べたことを要約すると、次のようになる。

### 1) 構文的特徴

- (1) 形式上、新型受動構文は通常の受動構文とはまったく異なるもののように見えるが、前後の文脈からわかるように、明示されない否定の意味、動作主及びその動作が言語化されると、通常の受動構文になる。
- (2) 新型受動構文は<NP1(X に関連する主体)>+(没/不/无(否定副詞))+X<sub>V・A・N(P)</sub>+被+「NP2(V の動作主)」+(VP 認定成、为/強迫/弄得、成)+X<sub>V・A・N(P)</sub>という意味構造を持ち、意味上、通常の受動構文の持つ「受動」の意味以外に、「否定」という意味も含まれており、いずれも当該事態が主語またはそれに関連する主体にとって被害または利益になる。また、意味的に異なる二種類、つまり認定類及び強迫類に分けられるが、両者はメタファー的な拡張関係にある。さらに、認定類と強迫類はそれぞれ受動の二重性と意図性によって下位分類を行うことができるが、これらの意味分類は互いに関連しつつネットワークをなしている。

### 2) 事態把握

- (1) 事象構造に関しては、新型受動構文は Cause-Change-State という三つの節を含ん

だ他動事態または使役事態を表す。

- (2) 事態把握においては、新型受動構文はエネルギー伝達の末尾にある参与者、あるいは影響を受けるものを主語に選択し、その視点から当該事態を捉え、使役事態の一部しかプロファイルしない。

このように、新型受動構文は行為主体が主語に立つ受動構文であると考えられる。第5章、第6章で述べるように、日中対照の観点から見ると、認定類の新型受動構文は主体-活動関係にある持ち主受動構文であると考えられるが、強迫類の新型受動構文は使役受動構文であると考えられる<sup>40</sup>。

---

<sup>40</sup> 林璋(2010)は本論文と同じ意見を持ち、本論文でいう新型受動文を「動作主主語受動文」と位置づけている。そして、日中対照の観点から、中国語における新型受動文の「被伝聞」の用法及び「被使役」の用法を、それぞれ日本語における二種類の「動作主主語受動文」、つまり「余儀なくされる」受動文及び「-させられる」使役受動文と対照研究を行っている。本論文では、新型受動文の認定類(林璋でいう「被伝聞」の用法)は強迫類(林璋でいう「被伝聞」の用法)と同様、行為主体主語の受動文と位置づけているが、厳密的に強迫類と異なり、埋め込み文中の主格名詞が主語に来る持ち主受動文とみなし、日本語の「余儀なくされる」受動文ではなく、主体-活動関係の持ち主受動文と対照研究を行う。

## 第5章 日中語の使役受動構文に関する対照研究

### 5.1 はじめに

日本語において、使役で言い表されたことがさらに受動の形で表現された「Vさせられる」という形式を使役受動形という。日中対照研究や日中翻訳研究では、中国語に日本語の使役受動文に対応する文型はないというのが今までの定説である。しかしながら、中国語の新型受動構文の強迫類、いわゆる本論文でいう新型の使役受動構文は日本語と同様に、使役受動事態を表すことができる。

- (1) サイトを見ようとしたら強制的に会員登録させられました。

[detail.chiebukuro.yahoo.co.jp > ... > 携帯電話 > 携帯サイト 2014/12/13 参照]

- (2) 生産するために消費させられているわけですからね。

[https://books.google.com.hk/books?isbn=4931376371- 2014/12/13 参照]

- (3) 小心 “被 会員” 和 “被 消費”。

気をつける 受動 会員 と 受動 消費する

(会員にさせられ、消費させられることに注意する)

[www.jryh.com.cn/html/2... 2010-11-17 2014/12/13 参照]

例えば、(3)の「被会員(会員にさせられる)」と「被消費(消費させられる)」は、明らかに(1)の「会員登録させられました」、及び(2)の「消費させられている」といった日本語の使役受動表現と同じ意味を表している。(3)のような例文に基づき、林璋(2010)は、新型受動文の被使役の用法は日本語の「V-させられる」と同じように、動作主が他者の関与で不本意に行為をすることを表すと指摘している。林璋の研究はたいへん示唆的であるが、第4章でも述べたように、新型受動文には、「強制使役」のみならず、「原因使役」の用法もある。

また、日中対訳コーパスから収集したデータからわかるように、中国語における通常の受動構文も日本語の使役受動構文によって表された使役受動事態を表すことができる。例えば(4)-(5)のような通常の使役受動文である。

(4) 倪藻 走 进 一个 宽敞 的、同样 昏暗 的 客厅，他 被 让  
人名 歩く 入る 一つ 広々としている の 同様 暗い の 客間 彼 受動 使役  
坐 在 一个 不 新 的 暗 红色 沙发 上。

座る に 一つ ない 新しい の 暗い 赤色 ソファ 上

(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、彼は古びたエンジ色のソファに案内された)

a.使役能動文:(史太太)让他坐在一个不新的暗红色沙发上

[対訳一部修正 活动变人形]

(5) 东大 同学 刚刚 游行 回来， 就 被 集合 去 听  
東北大学 学生 したばかり デモ 帰ってくる すぐに 受動 集合する 行く 聞く  
学校 当局 的 堂皇 的 训话.....

学校 当局 の 堂々としている の 訓話

(東北大学の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

a.使役能動文:(老师)叫东大同学集合去听学校当局的堂皇的训话

[対訳 青春之歌]

同じく使役受動事態を表すが、日中の使役受動構文、すなわち「Vさせられる」、「被+VP」及び「被+X<sub>(V・A・N(P))</sub>」は形式的に異なるのがはっきりしている。意味的にこれら三種類の構文にはいかなる共通点と相違点があるのだろうか。

そこで、本章は、日中語における使役受動事態を表す構文である三つの構文、すなわち、日本語の使役受動構文「Vさせられる」、中国語の通常の使役受動構文「被+VP」及び新型の使役受動構文「被+X<sub>(V・A・N(P))</sub>」を対象に、実例に基づき、これらの構文的特徴を解明し、事態認知モデルを用いてそのような差異に反映される事態把握の相違を考察し、日中語の使役受動事態に関する捉え方の異同点を明らかにする。

本章は以下のように構成されている。まず 5.2 では、日本語の使役受動構文、中国語の通常使役受動構文及び新型の使役受動構文に関連する研究を概観し、先行研究の問題点を指摘する。次に 5.3 で、実例に基づき、日中語における使役受動構文の構文的特徴を考察し、それらの異同点を解明する。その上で、5.4 では事態認知モデルを援用してそのよう

な差異に反映する事態把握の相違を考察し、5.5 で日中対訳コーパスより収集したデータを元に、日中(通常のみ)語の使役受動文とその対訳から、日中語の使役受動構文の対応関係を明らかにする。最後に 5.6 では本章の要点をまとめる。

## 5.2 先行研究

本節では、日本語の使役受動構文、中国語の通常の使役受動構文及び新型の使役受動構文といった順を追って、使役受動構文に関連する研究を紹介し、先行研究の問題点を指摘していく。

### 5.2.1 日本語の使役受動構文に関する先行研究

森田(1977)は、使役受動表現の表す意味には「強制」と「誘発」の二つがあり、後者のほうが多く用いられると述べている。前田(1989)は使役受動を独立したカテゴリーとする立場に立ち、「被役」といった意味用法の中に持ち主受動という間接受動による使役受動態も存在し、使役受動表現は迷惑以外に、「恩恵的」、「中立的」な意味合いもあると指摘している。

また、丁(2005)では、日本語の使役受動は、表面構造を基準にする際、受動の下位タイプの設定の場合と同様、直接使役受動、間接使役受動、持ち主の使役受動の三つの下位タイプが設定できるとし、その三つのタイプのうち、間接使役受動と持ち主の使役受動を中心に、意味の面からその特性とそれぞれの細部タイプ及び連続性などについて考察を行っている。

丁の考察は大変詳しいものであるが、間接使役受動文として挙げられている(6)は、実は持ち主の使役受動文(7)とは同じく、元の能動文や使役能動文の属格が使役受動文の主語に立つものであるため、本論文では、第三者の使役受動文ではなく、持ち主の使役受動文である。言い換えれば、日本語の使役受動構文には直接使役受動構文と間接の持ち主の使役受動構文との二種しかないのである。

(6) 彼女は、2歳の妹が継母にお金持ちの家に行かせられたので、悲しんでいる。

a.元の能動文:彼女の2歳の妹がお金持ちの家に行った

b.使役能動文:継母が彼女の2歳の妹をお金持ちの家に行かせた

[丁 2005:231]

(7) 彼はまだ40年も50年も生きられる命をある一人の男によって断絶させられた。

a.元の能動文:彼の40年も50年も生きられる命が断絶した

b.使役能動文:ある一人の男が彼の40年も50年も生きられる命を断絶させた

[丁 2005:237]

なお、高見他(2006)は使役受動文となる条件を考察し、強制使役と原因使役の二つしか使役受動文にならず、使役受動文に課される意味的・機能的制約を提案した。すなわち、使役受動文は、使役者が、当該の使役事象を引き起こす直接的要因になっており、被使役者・主語指示物がその使役事象の直接的対象になっている場合にのみ、適格となる。明らかに、高見他は、(6)-(7)のような間接使役受動文を視野に入れずに、直接使役受動文のみを考察対象とし、このような意味的・機能的制約を提案した。つまり、この制約は直接使役受動構文にしか適用できないのである。

日中語間の翻訳の面においては、黄晓兵他(2008)では、中国語に日本語の使役受動文に対応する文型は存在しないとし、日中機械翻訳における使役受動構文の「被役」と「誘発」の二つの意味の翻訳規則を作成した。梁麗平(2013)では、使役受動表現「～させられる」の史的発展とそれが表す「強制・誘発・使役・可能・使役可能・尊敬・中立的」という七つの意味合いを考察し、各意味合いに対応する中国語訳を検討し、コーパスから抽出した例文を日中機械翻訳の観点から分析し、規則を作成し、その有効性を評価した。

従来の研究は、主に使役受動構文の二種の意味用法「強制」と「原因」に関するものであり、これらは本論文の土台となっている。また、日中対照及び翻訳の面からの研究では、中国語に日本語の使役受動構文に対応する文型はないというのが今までの定説であるが、前述したとおり、中国語には日本語の使役受動構文に対応する使役受動構文が二種類存在する。しかしながら、使役受動事態を表すこれら三つの構文に関する対照研究はいまだにないようである。

## 5.2.2 中国語の通常の使役受動構文に関する先行研究

望月(1974)は、中国語では、「叫/让/给」がそれぞれ「使役」、「受動」の機能を持っている

が、「使役」と「受動」とが一文中に両立しえず、その理由として、図 5-1 をもって、以下のように述べている。

書面語では「使」、「被」によって、“使役”“被動”の分業が行われている。しかし口頭語では“被動”を“使役”あるいは“給与”を通じて表現するため、“使役”と“被動”を同一文中に表現することができない。書面語は口頭語の反映したものと考えられるから、口頭語のこの事実が書面語に影響して、書面語でも“使役”“被動”の共存が不可能なのだと思う。

望月(1974:184)

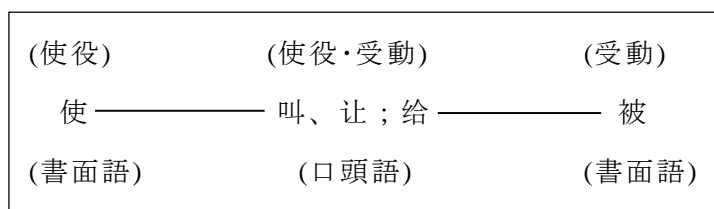


図 5-1 中国語における使役・受動標識(望月 1974:184 より)

しかしながら、斉木他(2012)は諸言語と比較しながら、ヴォイスの複合という角度から考察し、(8)のように日本語では問題のない「使役+受動」が中国語では厳しく制限され、日本語では不自然になることが多い「受動+使役」が逆に中国語では容易に成立すると結論づけている。

(8) ○兵士が将校に子供をぶたせられた。

×兵士 被 将校 让 打 了 孩子。

兵士 受動 将校 使役 毆る 完了 子供

[斉木他訳 2012:26]

さらに、中国語の受動構文に関する研究(刘月华他 1991、李珊 1993、杉村 1994)や、日中受動構文に関する対照研究(凌蓉 2005)などは、(9)のような心理動詞による受動文は、(10)のような典型的他動詞の直接受動文と区別せず、中国語には存在するが、日本語にはない



と論述されてきた。

(9) 道静 被 这 女孩子 的 纯真 热情 深深 感动 着。

人名 受動 この 女の子 の 純真な 熱情 深い 感動する 持続

(この女の子の純真な熱情に、道静は深く感動させられた)

a.元の能動文:道静深深感动着

b.使役能動文:这女孩子的纯真热情使道静深深感动着

[対訳 青春之歌]

(10)他 的 钱包 被 小偷偷 去 了。

彼 の 財布 受動 すり する 行く 完了

(彼の財布はスリに取られてしまった)

a.対応する能動文:小偷偷去了他的钱包

b.使役能動文:#小偷偷他的钱包偷去了

[刘月华他訳 1991:646]

(9)のような受動文は、(10)のような直接受動文と異なるのが、それに対応する使役能動文と同じ事態を表すということである。換言すれば、通常的直接受動文は、それに対応する使役能動文と異なる事態を表し、項が一つ増えるのに対し、この種の受動文は、それに対応する使役能動文と同一の事態を表し、項の増加が起こらない。また、日本語訳からも明らかのように、このような受動文は日本語の使役受動文と同様の事態を表している。

よって、本論文は、元の能動文の表す意味を含み、しかも対応する使役能動文と同一の事態を表す「被」構文を、通常的直接受動構文と区別して新しいタイプを立て、それは(11)のような使役標識がつく受動文と同じ文法的振る舞いをするため、形式上使役の標識がなくても、両者をあわせて「通常の使用受動構文」と呼ぶことにする。要するに、中国語において、通常の使用受動構文には、(11)のように使役標識がつく受動構文と、(9)のように使役標識がつかない受動構文との二種が含まれており、前者は使役形式と受動形式との両方を備えているのに対し、後者は受動形式しかない。本論文では、こういった形式上の相違によって、便宜上それぞれ通常の使用受動構文の「完全形式型」及び「短縮形式型」と呼ぶことにする。

(11)倪藻 走 进 一个 宽敞 的、同样 昏暗 的 客厅，他 被 让  
人名 歩く 入る 一つ 広々としている の 同様 暗い の 客間 彼 受動 使役  
坐 在 一个 不 新 的 暗 红色 沙发 上。

座る に 一つ ない 新しい の 暗い 赤色 ソファ 上

(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、彼は古びたエンジ色のソファに案内された)

a.元の能動文:他坐在一个不新的暗红色沙发上

b.使役能動文:(史太太)让他坐在一个不新的暗红色沙发上

[例(4)再掲]

以上、齊木他(2012)は、中国語では「使役」と「受動」との共存が不可能だという従来の意見に反して、両者の共存が可能であり、「使役受動」は厳しく制限されていると指摘しているが、挙げられた使役受動文(8)は不適格と判断されるものである。また、従来の日中受動構文に関する対照研究は、(9)のような受動文は使役標識がないため、元の能動文の表す事態を含み、それに比べて項が一つ増加し、しかも対応する使役能動文と同一の事態を表すといった日本語の使役受動構文と同様な文法的振る舞いをするにもかかわらず、通常の直接受動構文と同一視されたり、(11)のような受動文は使役標識があっても極めて少ないかのため、受動構文から除外され、あるいは無視されたりしている傾向にある。

言語使用の現状からわかるように、これまで中国語は使役受動を許容しないと言われていたが、改めて調査して見る価値は十分にあると思われる。

### 5.2.3 中国語の新型の使役受動構文に関する先行研究

新型の使役受動構文は「X」の表す事態に関連する主体 NP1 以外に、明示されないものの、文脈から推察できるもう一つの動作主 NP2 及びその行為を表す動詞も存在し、第4章で述べたように、完全な意味構造は<NP1(X に関連する主体)>+(没/不/无(否定副詞)+X<sub>V</sub>·A·N(P)+)被+「NP2(V の動作主)」+(VP<sub>強迫類/弄得、成</sub>)+X<sub>V</sub>·A·N(P)である<sup>41</sup>。

王淑华,杨仁君(2011:47)によると、意志動詞、性質形容詞及び具象名詞が「X」に入ると、

<sup>41</sup> 新型受動構文の意味構造に関して、詳しくは 4.3 節を参照のこと。

非意図性の意味を表す。李偉大(2010:49)は新型の使役受動構文で明示されていない強迫類の動詞は「要求(要求する)、強制(強制する)、強行(強行する)、規定(規定する)」などあるとしている。しかしながら、後述するように、意志動詞のみならず、無意志動詞も非意図性の意味を表し、第4章ですでに述べたように李偉大(2010)の指摘した動詞以外に、「弄(する)+得/成(助詞/なる)」という動詞も挙げられる。

また、林璋(2010)は日中対照研究の立場から、新型受動文の強迫類が「強制使役」の用法しか持たず、それを日本語の「余儀なくされる」という「原因使役」の用法、及び「V-させられる」という使役受動文と対照研究を行っている。林璋(2010)の研究は対照研究の観点から見ると、たいへん有益であるが、後述するように、新型受動文の強迫類には、「強制使役」のみならず、「原因使役」の用法も見られる。

従来の研究は、新型受動構文は非意図性のうち、反意図性という強制的意味を持つという指摘にとどまり、その使役受動の意味の具体的な下位分類に関する研究はないようである。また、日本語の使役受動構文との対照研究は極めて少ないものの存在するが、中国語の通常の使役受動構文との比較研究は管見では存在しない。

#### 5.2.4 まとめ

先行研究が指摘したように、日本語の「V-させられる」という形式は使役受動の意味以外に、他の意味も持っている。本論文では、森田(1977)、高見他(2006)に従って、「強制」と「原因」の意味を持つものを日本語の使役受動構文とする。

以上からわかるように、「使役+受動」という形式にこだわるゆえに、日中対照及び翻訳の面からの研究では、中国語に日本語の使役受動構文に対応する文型はないという定説になっている。しかしながら、本論文は、日中語において使役受動事態に関する把握の相違点を解明するために、従来の研究と異なり、「使役+受動」という形式的特徴にこだわらず、孤立語である中国語において、実質的な意味を持たない機能語を二つ繋ぎにくい(使役標識がついている使役受動文は極めて少ないということはまさにその証拠の一つであろう)ため、形式上使役標識がなくても、日本語の使役受動構文と同じ文法的振る舞い(対応する使役能動文が存在する)及び「使役受動」の意味を持つ受動文、つまり通常の使役受動文と新型の使役受動文を「使役受動構文」というカテゴリーに入れておく。

そこで、本章は使役受動事態を表す構文として、日本語の使役受動構文、中国語の通常

の使役受動構文及び新型の使役受動構文を取り上げ、それらを比較することによりそれぞれの特徴を明らかにし、三構文の構文的相違点及びそのような差異が反映する事態把握の相違を探究する。

### 5.3 日中語の使役受動構文の構文的特徴

第2章で述べたように、使役受動構文は、述語に関連する行為主体(tr)が主語に立ち、それが外的な使役者(無情物を含む)から影響を受けることを表す。つまり、行為主体を被使役者として主語の位置に置く。

本節では、日中語の使役受動構文を大きく形式及び意味という二つの面からそれらの構文的特徴を考察する。まず、形式の面では、主に使役・受動標識の有無、述語の品詞類から検討し、そのような形式的相違点に関しては、認知構文論での融合的ネットワークモデル(山梨 2009:147)によって説明を試みる。また、意味の面においては、強制類、原因類及び指示・許容類という三つに分けて考察を進める。なお、便宜的に例文の後、< >の中に日中語の使役受動構文の三種類のいずれに属するのかを示す。

#### 5.3.1 形式的特徴

結論から先に言うと、形式的に日中語の使役受動事態を表す三つの構文には、表 5-1 が示しているように、大きく異なるところが二点ある。

表 5-1 日中語の使役受動構文の形式的特徴における異同点

形式的特徴	日本語	中国語		
		通常		新型
		完全形式型	短縮形式型	
使役・受動の形式	使役形+受動形	受動形+使役形	受動形のみ	受動形のみ
述語の品詞分類	動詞のみ	動詞のみ	動詞のみ	動詞、形容詞、名詞

以下、例文を挙げて説明していく。

(12) テレビを見ていたのにお使いに行かされた。

[庵他 2001:133]<日本語>

(13) 我々は人員の不足に悩まされている。

[志波 2015:29]<日本語>

(14) 一天，尚 被 蒙在鼓里 的 高肇甫 被 叫 去 谈话。

ある日 まだ 受動 真相を知らされない の 人名 受動 使役 行く 話をする

(ある日に、まだ真相を知らされない高肇甫は(上司に)話をするよう行かされた)

[北京 1994 年 报刊精选]<中国語の通常>

(15) 这时 不管 他 是 工人、农民、公务人员，还是 大 腹

この時 であろうと 彼 である 労働者 農民 公務員 であろうと 大きい 腹

便便 的 商人，人们 的 眼睛 都 被 一种 莫名其妙

肥満しているさま の 商人 人々 の 目 すべて 受動 ある種 わけがわからない

的 困惑 苦恼 着。

の 困惑 悩む 持続

(そうした騒ぎにまきこまれて、労働者だろうと、農民だろうと、はては公務員から腹のつきでた大商人に至るまで、みんないのように、なにがなんだかわからないための困惑と、苦悶の色をその目に浮かべていた)

[対訳 青春之歌]<中国語の通常>

(16) 别 让 孩子 在 父母 的 重压 下 “被 学习”。

するな 使役 子供 で 両親 の 重压 下 受動 勉強する

(子どもを両親の重圧の下で勉強させられるような状態にしてはいけない)

[北京青年报 2011-01-27]<中国語の新型>

(17) 女子 被 小三，直 呼 很 受 伤。

女性 受動 愛人 直接 呼ぶ とても 受ける 傷

(女性は(男性に)愛人にさせられ、ひどく傷ついたと訴えている)

[城通网盘 2013-07-05]<中国語の新型>

(18) 今天，你 “被 幸福” 了 吗？

今日 あなた 受動 幸福 完了 か

(今日、あなたは(中央テレビ局の新聞記者に自分は本当は幸福ではないのに)幸福だと言わされたか)

第一に、「使役」と「受動」の形式をいずれも備えるか否かに関しては、(12)-(13)のように日本語の使役受動構文は、使役形式「～させる」と受動形式「～られる」の両方を伴うが、中国語の通常の使用受動構文は、(14)のように使役標識「叫」と受動標識「被」の両方を伴う完全形式型がある一方、(15)のように受動標識「被」しか伴わない短縮形式型もある。前者のほうがむしろまれであることに注意されたい。一方、新型の使用受動構文((16)-(17))は、通常短縮形式型と同様に、受動形式「被」しか持たない。

第二に、述語になる品詞の種類に関しては、日本語と中国語の通常の使用受動構文には動詞((12)-(15))しか入ることができないが、新型の使用受動構文には動詞((16))のみならず、名詞((17))、形容詞((18))も入ることができる。

日中語の使用受動事態を表す三つの構文はなぜこのような形式的相違を持っているのであろうか。これに関して、本論文では認知構文論での融合ネットワークモデル(山梨 2009:147)によって説明を試みる。使用受動事態を表す日中語の使用受動構文はいずれも基本構文から融合した複合的な構文であると考えられる。その融合過程は図 5-2 のように示される。

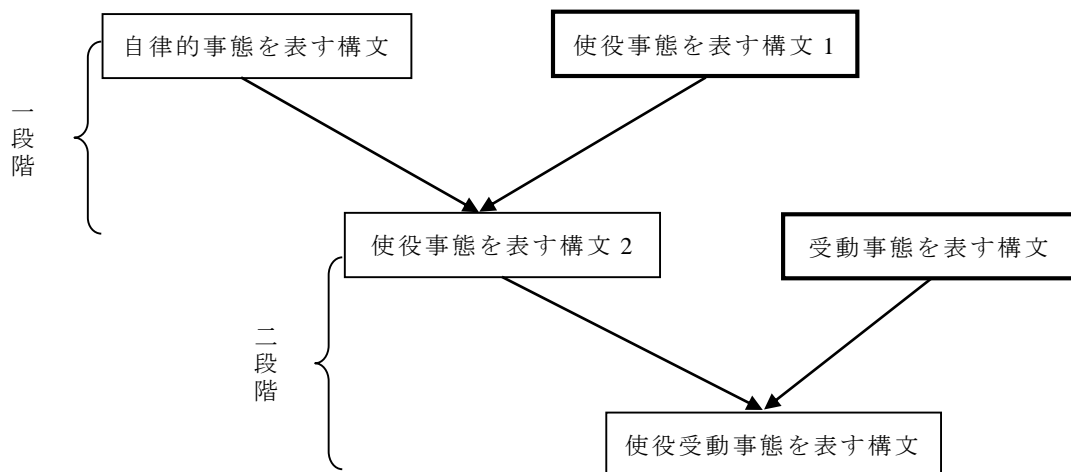


図 5-2 使用受動事態を表す複合的な構文の融合過程

図 5-2 は、使用受動事態を表す複合的な構文の融合過程を示している。ボックスは各種

の構文を表し、ボックスとボックスの間の実線の矢印はスキーマからの拡張を示し、太線は基本構文を表し、細線は副次構文を表す。自律的事態を表す構文は、まず使役構文 1 と複合して新しい使役構文 2 を形成する。新たにできた使役構文 2 はまた、受動構文と結合して、使役受動事態を表す構文を生じる。日中語はいずれもこのような二段階を経て、同様の基本構文から最終的に使役受動事態を表す複合的な構文ができたと考えられる。しかし、基本構文の融合する過程において、日中語の言語類型や言語体系が異なるなどの要因で同じ事態を表す構文は異なる形式的特徴を持つようになった。上に挙げた(12)-(17)を例に、日中語の使役受動事態を表す三構文の具体的な融合過程はそれぞれ図 5-3、図 5-4、図 5-5 のように表せる。

日本語は膠着言語であり、動詞に活用形式を持ち、Bybee(1985a,1985b)の規定した順序に従い、語根を最前に他の形態素が共通してその後ろに続く語順を取り(上原他 2007:116.187)、目的語を動詞の前に置くので動詞述語文は最後の位置に動詞しかない。自律的な動的事態「私がお使いに行く/我々が悩んでいる」を表す構文「NP1 が V1」が使役事態 1「母/人員の不足が V させる」を表す構文「NP2 が V させる」と結合すると、使役事態 1 と異なる新しい使役事態 2「母が行かせる/人員の不足が悩ませる」が生じ、動詞の未然形に使役形式「～させる」が後続する。また、新しくできた使役事態 2「母が行かせる/人員の不足が悩ませる」を表す使役構文「NP2 が V1 させる」が受動構文「NP1 が V される」と融合すると、使役受動事態「私がお使いに行かされる/我々が人員の不足に悩まされている」を表す構文「NP1 が V1 させられる」になる。したがって、使役形式「～させる」に受動形式「～られる」が続く「～させられる」という使役受動形が生じる。このように、使役受動構文の融合過程の二段階において、いずれも主要構文である使役構文 1 と受動構文それぞれの全体が残り、副次構文である自律的事態を表す構文と使役構文 2 それぞれの動詞未然形の部分のみ主要構文の空白に入り、新しい構文ができ上がる。

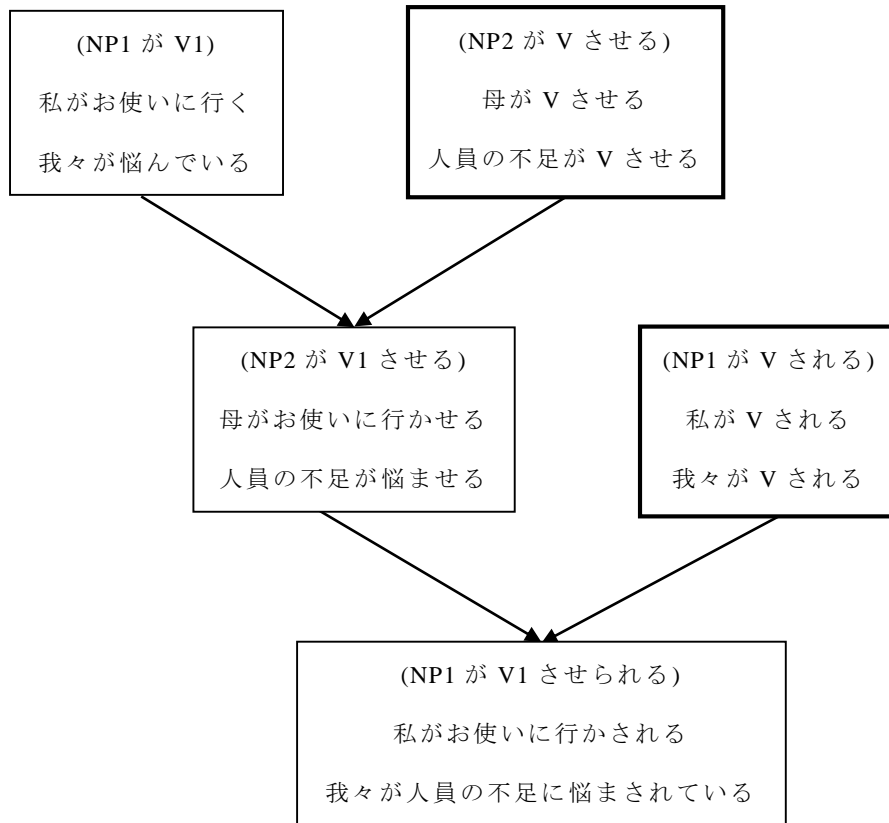


図 5-3 日本語の使役受動構文の融合過程

一方、中国語は孤立語であり、形態変化をもたず、語順と機能語が重要な役割を果たす(石村 2005:142)。刘月华他(1991)によれば、目的語になりうる動詞、形容詞及び名詞は全て動詞の後に来る(377-379)ので、動詞述語文は末尾の位置に動詞、形容詞及び名詞のいずれも可能である(549-551)。自律的事態「高肇甫去谈话(高肇甫が話をしに行く)/人们的眼睛苦恼着(みんなが悩んでいる)」を表す構文「NP1+VP1」と使役事態「上级叫高肇甫 VP (上司が高肇甫に V させる)/困惑使人们的眼睛 VP (困惑がみんなを V させる)」を表す構文「NP2+叫/让/使(使う)NP1+VP」は同一の NP<sub>1</sub>「高肇甫(高肇甫)/人们的眼睛(みんな)」を支点として融合し、兼語式、すなわち前の動目フレーズの目的語 NP1 は後の主述フレーズの主語と重なっている、と言われる新しい使役構文「NP2+叫/让/使+NP1+VP1」(上级叫高肇甫去谈话(上司が高肇甫に話をしに行かせる)/困惑使人们的眼睛苦恼着(困惑がみんなを悩ませている))になる。この使役構文が「被」受動構文「NP1+被+VP」と複合すると、使役受動事態「高肇甫被叫去谈话(高肇甫が話をしに行かされた)/人们的眼睛被困惑苦恼着(みんなが困惑に悩まされている)」を表す「NP1+被+叫/让(/使)+VP1」という通常の使役受動構文が生



じる。この段階において、完全形式型では、「叫/让」使役構文 2 の全体と受動構文の前半部分が融合するのに対し、短縮形式型では、「使」使役構文 2 の中間の部分、つまり「使+NP1」を除外した首尾の部分と受動構文の前半部分を取り融合する。これは、中国語の使役標識として挙げられる「叫/让/使」といった形式のうち、特に指示・許容使役の「叫/让」と誘発使役(楊凱榮 1989)、本論文でいう原因使役の「使」は同じ使役といっても、意味的にも構文的にも性質を異にしていることを表している。要するに、中国語において、指示・許容類の使役受動文には「被」と「叫/让」が共起することはできるのに対し、原因類の使役受動文には「被」と「使」が共起することはできない。

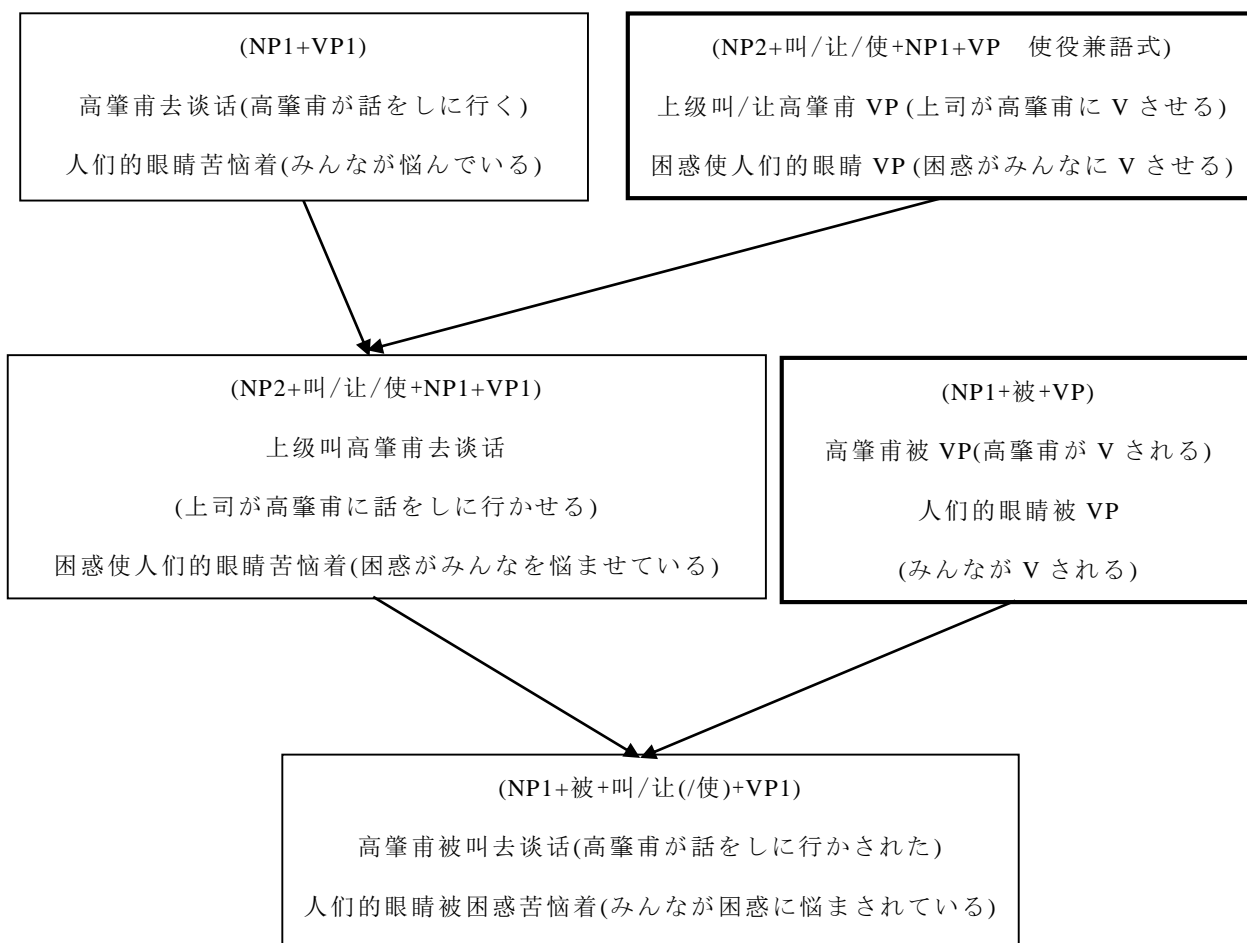


図 5-4 中国語における通常の使役受動構文の融合過程

また、中国語の新型の使役受動構文はどのような融合過程を経てでき上がるのであろうか。通常の使役受動構文と同様に、まず自律的事態「孩子学习(子供が勉強する)/女子成了

小三(女性が愛人になっている)」を表す構文「NP1+VP1<sub>(V/A/N)</sub>」と使役事態「父母强迫孩子 VP(両親が子供を無理やりに V させる)/男子使女子 VP(男性が女性を V させる)」を表す構文「NP2+强迫/叫/让/使+NP1+VP」は同一の NP1「孩子(子供)/女子(女性)」を支点として融合し、兼語式と言われる新しい使役構文「NP2+强迫/叫/让/使+NP1+VP1<sub>(V/A/N)</sub>」(父母强迫孩子学习(両親が子供を無理やりに勉強させる)/男子使女子成了小三(男性が女性を愛人にする))になる。続いて、この使役構文が「被」受動構文「NP1+被+VP」と複合すると、使役受動事態「孩子被学习(子供が無理やりに勉強させられる)/女子被小三(女性が愛人にされる)」を表す「NP1+被+VP1<sub>(V/A/N)</sub>」という新型の使役受動構文が生じる。この段階において、通常の使役受動構文と異なり、「强迫/叫/让/使」使役構文 2 の末尾の部分と受動構文の前半部分だけを取り融合する。要するに、新型の使役受動文において、原因類のみならず、強制類の使役受動文にも「被」という受動標識しか明示されない。すなわち、「强迫/叫/让/使」などの使役動詞(楊凱榮 1989)が「被」と共起すると、新型の使役受動構文でなくなるのである。

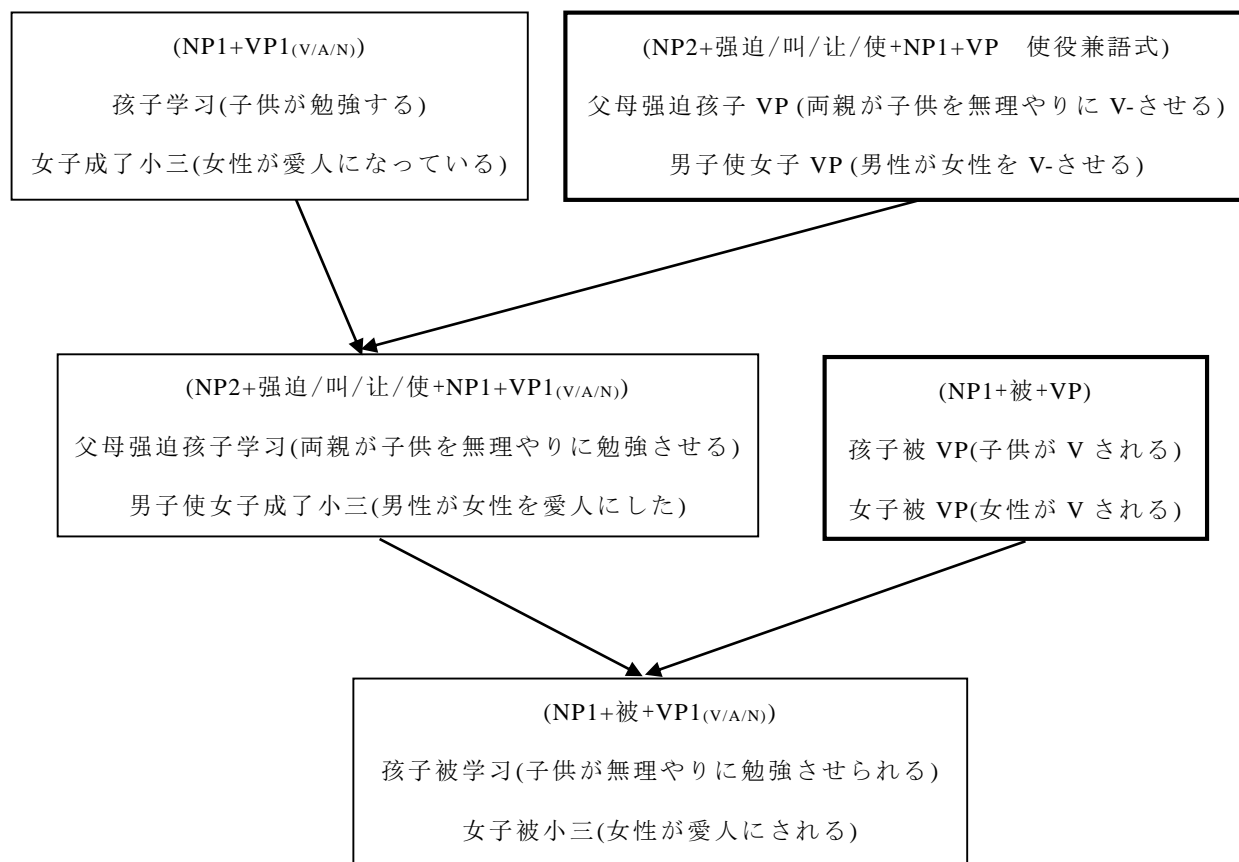


图 5-5 中国語における新型の使役受動構文の融合過程

以上の分析から明らかなように、日中語の使役受動事態を表す三つの構文が異なる形式的特徴を持つのはそれぞれの言語類型及び体系が要因で、同様の基本構文が融合する過程で異なる合成経路を取ったためである。このように、合成経路は日中語の使役受動構文の形式的特徴に関与している。後述するように、合成経路は日中語の使役受動構文の意味的特徴にも関与している。

### 5.3.2 意味的特徴

日中語の使役受動事態を表す三つの構文は、形式的に異なるのがはっきりしているが、意味的にはどのような相違点があるのでしょうか。

前述したように、日本語には直接の使役受動構文のみならず、持ち主の使役受動構文といった間接の使役受動構文も存在する。同様に、中国語の通常の使役受動構文(原因類のみ)においても、持ち主の使役受動構文が存在する。しかしながら、中国語の新型の使役受動構文には直接の使役受動構文しかない。また、中国語の通常の使役受動構文には強制類と原因類以外、指示・許容類もあるが、日本語の使役受動構文及び中国語の新型の使役受動構文にはこのような用法が見つからない。以下、強制類、原因類及び指示・許容類という順に例文を挙げながら、日中語の使役受動構文の意味的特徴を詳しく考察していこう。

分析に入るに先立ってまず「意図性」という言葉について紹介しておこう。

高見他(2006)によると、日本語の使役受動文では、強制の場合は、使役者が被使役者に強制して当該事態を引き起こすことを表すのに対し、原因の場合は、使役者が有情物であっても、被使役者に意図的には関わっておらず、使役者及びその行動が直接的要因となって、その事態が引き起こされることを表す。このような使役者と被使役者との関わり方、いわゆる「意図性」(高見 2011)の有無は、使役受動構文の意味的特徴に関わる重要な要因となる。このことは、中国語における使役受動構文の強制類及び原因類にも当てはまる。また、指示・許容類は、強制類と同様に使役者が当該事態に意図的に関与するが、その具体的な関わり方は異なる。すなわち、強制類は元の動詞の表す事態を生じさせる際に、使役者がそうするよう強制する形で被使役者に関わるが、指示・許容類は元の動詞の表す事態を、使役者が指示したり許容したりする形で被使役者に関わる。要するに、第2章でも述べたように、強制類と指示・許容類はともに使役者と被使役者との両方は意図性を持つ有情物に限

られるが、原因類はそのルールに規制されるどころか、逆に使役者が有情物であっても、その持つ意図性と関わらず、無情物のように扱われる。

### 5.3.2.1 強制類

使役受動構文の強制類においては、日中語の相違としてまず挙げられるのは、日本語には持ち主の間接使役受動構文が存在する一方、中国語にはそのような間接使役受動構文が存在しないということである。

(19)私は父に上着を脱がせられた。

a.元の能動文:私は自分の上着を脱いだ

b.使役能動文:父は私に自分の上着を脱がせた

[丁 2005:228]<日本語 被害>

(19)は私が父に強制されて、自分の上着を脱いだという意味を表し、元の能動文や使役能動文からわかるように、使役受動文の主語指示物「私」は元の動詞の表す動作の対象である「上着」との間に所有関係が存在するため、持ち主の使役受動文になるのである。

また、述語動詞の制限に関しては、日中語の使役受動構文は異なる。

(20)子どもは親に無理やり勉強させられるわけです。

[tyugaku.net/news/bougai.html 2014/12/13 参照]<日本語 被害>

(21)东大 同学 刚刚 游行 回来, 就 被 集合 去 听  
東北大学 学生 したばかり デモ 帰ってくる すぐに 受動 集合する 行く 聞く  
学校 当局 的 堂皇 的 訓話.....  
学校 当局 の 堂々としている の 訓話

(東北大の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

[例(5)再掲]<中国語の通常短縮形式型 被害>

(22)别 让 孩子 在 父母 的 重压 下 “被 学习”。

するな 使役 子供 で 両親 の 重压 下 受動 勉強する

(子どもを両親の重圧の下で勉強させられるような状態にしてはいけない)

[例(16)再掲]<中国語の新型 被害>

(23)幸福 被 問 出来 那 是 “被 幸福”, 发 自 内 心 的 幸 福  
幸福 受動 聞く てくる それ である 受動 幸福 起こる から 心の中 の 幸福  
得 “喊” 出来! ?  
きっと 叫ぶ てくる

((中央テレビ局の記者に「今、あなたは幸福ですか」と)質問されて「幸福です」と答えるのが「幸福にされる」のであるが、本当に幸せな時はきっと大声で自分からアピールするのだ)

[人民网 2012-10-05]<中国語の新型 被害>

(24)消費者 不满 “被 圣诞 \_\_\_\_\_ 套餐”。

消費者 不满 受動 クリスマス 定食

(消費者は(店主に)クリスマス定食を選ばされることに不満である)

[凤凰网 2010-12-19]<中国語の新型 被害>

(20)-(24)はいずれも「強制」の意味を表している。例えば、「無理やり」や「重圧」から分かるように、(20)、(22)はともに子供が勉強するという事態は親が強制的に引き起こしたことを意味する。(21)は前後の文脈から明らかなように、デモから帰ってきたばかりの学生が集合するという事態は、学校当局が強制的に引き起こしたことを表す。

むろん、日本語においても、中国語においても、強制類の使役受動構文は意志動詞に限られるが、日中対訳コーパスから収集したデータを見ると、通常短縮形式型の使役受動文は(21)のように意志的自動詞による例文一つしか見られないのに対し、日本語では、接触、受取り、経験などを表す意志的他動詞や、移動、社会的行為を表す意志的自動詞など、広範囲にわたる意志動詞による使役受動文が見られる。また、前節で述べたように、新型の使役受動構文では、元の述語動詞である強迫類の意志動詞が明示されないため、形式上、述語として動詞((22))のみならず、形容詞((23))及び名詞句((24))も可能である。要するに、強制類の使役受動構文に入る述語の制限は、その厳しさによって、中国語の新型、日本語、中国語の通常短縮形式型という順になり、上から下へより厳しくなるのである。

最後に、情意性に関しては、日中語のいずれであるかに関わらず、人間である使役者が意図的に人間であるもう一人の被使役者にそれ自身にとって嫌がる動作やことを強制的に

させることを表すため、あらゆる強制類の使役受動構文は、直接であるかどうかに関わらず、「被害・迷惑」のニュアンスを持っている。このような被害・迷惑の意味が生じるのは、被使役者・主語指示物が自らの意志に反し、使役者に強制されることから生じるものである(高見他 2006:229)。

### 5.3.2.2 原因類

まず、原因類の使役受動構文では日本語と同様に、中国語の通常の使役受動構文は持ち主の間接使役受動の用法を持つが、新型の使役受動構文はこのような用法を持たない。

(25) 僕でさえ、君の妻になる人として尊敬する気がなかったら心を動かされたかも知れないと思ったよ。

a.元の能動文:僕の心が動いた

b.使役能動文:君の妻になる人は僕に自分の心を動かさせた

[対訳 友情]<日本語 中立>

(26) 我 倒 是 要 劝 劝 孙 悦 同 志 ， 不 要 被  
私 かえって である したい 忠告してみる 人名 同志 してはいけない 受動  
儿女 私情 迷 住 了 眼睛 啊!  
男と女 私情 くらむ 止まる 完了 目 感嘆

(孫悦同志にひとこと忠告します、男女間の私情に目をくらまされてはいけません!)

a.元の能動文:孙悦同志的眼睛迷住了

b.使役能動文:儿女私情使孙悦同志的眼睛迷住了

[対訳 人啊，人]<中国語の通常の短縮形式型 被害>

(25)は君の妻になる彼女のため、僕は心が動いたことを表し、元の能動文や使役能動文から明らかなように、使役受動文の主語指示物「僕」は元の動詞の表す感情の主体である「心」と所有関係にあるので、持ち主の使役受動文になるのである。同様に、(26)は男女間の私情に孫悦同志は目がくらむことを表し、元の能動文や使役能動文から明らかなように、使役受動文の主語指示物「孫悦同志」は述語動詞の表す生理的状态の主体である「目」と所有関係にあるため、持ち主の使役受動文になるのである。

続いて、主語の被使役者を有情物と無情物に分けて、日中語の使役受動構文の述語動詞について詳しく考察していく。

まず、有情物主語の使役受動構文の述語に関しては、日中語はともに主に心理・感情、及び状態、特に生理的状态や位置変化を表す非意志的動詞、または形容詞と名詞(中国語の新型の場合)、自己制御性のない、もしくは低い動作・行為を意味する意志動詞という三つが挙げられる。また、日本語では思考・認知を表す意志動詞による使役受動文も見られるが、中国語ではそのような使役受動文が見つからない。

(27)我々は人員の不足に悩まされている。

[例(13)再掲]<日本語 原因 述語 被害>

(28)这时 不管 他是 工人、农民、公务人员，还是 大 腹  
この時 であろうと 彼 である 労働者 農民 公務員 であろうと 大きい 腹  
便便 的 商人，人们 的 眼睛 都 被 一种 莫名其妙  
肥満しているさま の 商人 人々 の 目 すべて 受動 ある種 わけがわからない  
的 困惑 苦恼 着。  
の 困惑 悩む 持続

(そうした騒ぎにまきこまれて、労働者だろうと、農民だろうと、はては公務員から腹のつきでた大商人に至るまで、みんないのように、なにがなんだかわからないための困惑と、苦悶の色をその目に浮かべていた)

[例(15)再掲]<中国語の通常短縮形式型 被害>

(29)星月 礼品 太多， 玩家们 “被 烦恼”。

ゲーム名 贈り物 すぎる 多い プレイヤー たち 受動 悩む

(星月の景品が多すぎるため、プレイヤーたちが悩まされている)

[手机网易网 2010-07-28]<中国語の新型 被害>

(27)-(29)はいずれも心理・感情を表す非意志的動詞による使役受動文である。(27)の「悩む」、(28)の「苦恼(悩む)」、及び(29)の「烦恼(悩む)」は同じく心理を表す非意志動詞である。(27)は、「我々が悩んでいる」という事態は「人員の不足」という外的要因のため生じたことを意味し、(28)は、「みんなが悩んでいる」という事態は「何がなんだかわからない困惑」によるものであることを表示する。同様に、(29)は「プレイヤーたちが悩んでいる」

という事態は「景品が多すぎる」という外的要因によって起こったことを意味する。いずれも当該の使役事態が外的誘因によって引き起こされたことがはっきりしている。これらはすべて、有情物被使役者の心理的状态変化が外在的な無情物使役者、つまりモノやコトによって生じたことを表す。

先行研究によると、日本語は(27)のように、「悩む、がっかりする、びっくりする」などの消極的に感情を表す無意志動詞の一部に厳しく制限され、「喜ぶ、楽しむ、うきうきする」などの積極的に感情を表す自動詞では使役受動形を用いることができない(庵他 2001:133-134)。だが、先行研究では指摘された感情動詞以外に、下記の(30)に示しているように、少ないものの、プラスの感情を表す自動詞も使役受動文に入ることができる。このことは、中国語の使役受動文にも当てはまる。

(30)私は、思いもしなかった子供からのプレゼントに喜ばされ、とてもうれしい気持ちになった。

[高見他 2006:231]<日本語 利益>

(31)傅家杰 站 在 床 前，瞪 大 眼睛 望 着 她，只见  
人名 立つ に ベッド 前 見張る 大きい 目 見つめる 持続 彼女 目に入る  
她 脸上 放 着 光，她 显然 被 自己的 想法 兴奋 着。  
彼女 顔 に 発する 持続 光 彼女はっきりと 受動 自分の 考え 興奮する 持続  
(傅家傑はベッドの前に立ったまま眼をむくように彼女を見つめている。彼女の顔は、微笑を帯びて自分の考えに興奮しているようだった)

[対訳 人到中年]<中国語の通常短縮形式型 利益>

(32)女生 送 关怀，独苗 男孩 “被 幸福”。

女子学生 送る 配慮 一人っ子 男の子 受動 幸福

(女子学生(全員)が至れり尽くせりの配慮をしたためクラスで唯一の男子は幸せに思った)

[江苏新闻网 2013-03-08]<中国語の新型 利益>

すなわち、(30)は子供からのプレゼントが直接的な要因となって、被使役者である私が喜んで、とてもうれしい気持ちになったという事態が生じたことを表す。また、(31)は自分の考えのため、彼女が興奮しているといった事態が起こったことを表示する。さらに、(32)



は(30)-(31)とは異なり、あるモノではなく、「女子学生(全員)が至れり尽くせりの配慮をした」というコトによって、クラスで唯一の男子は幸せに思ったという事態が引き起こされたことを表す。三例のいずれにしても、当該事態が主語の被使役者にとって、「被害・迷惑」ではなく、「利益」になる。

次に、状態、特に生理的状态や位置変化を表す非意志的動詞は日中語の使役受動構文の述語として用いられる。

(33)ともかく、現在の人類は、そのとき「恐怖の大王」によって、事実上全滅させられるのだと見ておいたほうがよい。

[小嶋 1994:25]<日本語 被害>

(34)私はスケートをしていて、後から走ってきた人に転ばされた。

[高見他 2006:232]<日本語 被害>

(35)敌人 已经 被 民兵 消灭 了。

敵 すでに 受動 民兵 殲滅する 完了

(敵はすでに民兵に殲滅させられた)

[刘月华他訳 1991:648]<中国語の通常の短縮形式型 被害>

(36)在 路上 我 被 石头 绊 了 一 跤。

に 途中 私 受動 石 つまずく 完了 一 転ぶ

(私は帰宅途中に石につまずいて転んだ)

[朱旭的新浪博客 2012-12-24]<中国語の通常の短縮形式型 被害>

すでに、小嶋(1994)が指摘したように、(33)の「現在の人類が全滅させられる」は「現在の人類が全滅する」という自動詞に対応する「現在の人類を全滅させる」という他動詞的な用い方の受動の形と見ることもできる<sup>42</sup>。このことは、(34)にも当てはまると思われる。すなわち、(34)の「転ぶ」という自動詞に対応する他動詞<sup>43</sup>を「転ばせる/転ばす」という使

<sup>42</sup> 小嶋(1994)のほか、野田(1991a)、庵(2012)、高橋(2003)も同様の意見を持つ。例えば、庵(2012:138-139)によると、日本語では、対応する他動詞がない非意志的自動詞(例:腐る、びっくりする)の使役形は、必ずヲ格が使われ、実質的に他動詞の役割を果たしているという。本論文は高橋(2003)と同様、こういった他動詞代用の動詞が形態的に「～させる/さす」といった使役形式がつき、しかも「使役」の意味を表すため、「使役動詞」と呼ぶことにする。

<sup>43</sup> 日本語では、動詞の自他の対応について、さまざまに論じられており、詳しくは奥津

役動詞の形で代用し、その受動の形、つまりもともと使役の意味を含んではいない動詞の受動の形である、と見ることができるのかもしれない。一方、中国語の通常使役受動構文においても、同様のことが言えるのではないかと思われる。例えば、(35)の「消灭(殲滅する)」、(36)の「絆(つまずく)」といった自動詞は、それらに対応する他動詞がなく、他動詞的意味を表すには、(35')のように元の自動詞の表す変化主体を表す名詞句 NP1 が、使役動詞「使」の目的語として(李临定 1990、马庆株 1992、彭利贞 1993,1996、范晓 2000)動詞の後に、しかも外的要因である使役者を表す名詞句 NP2 が主語の位置に来なければならない。

(35)の「消灭(殲滅する)」、(36)の「絆(つまずく)」といった動詞は、先行研究ではほとんど自他同形の他動詞(刘月华他 1991、凌蓉 2005)としているが、使役の意味を持つ一価動詞・自動詞とする意見(范晓 2006)や、普通の他動詞と区別して、「带致使宾语动词(使役対象を目的語とする動詞)」(李临定 1990、马庆株 1992、張瑜 2011)、「使宾动词/使动词(使役動詞)」とする見方(彭利贞 1993,1996、范晓 2000)も見られる。本論文は、以下に示すように典型的他動詞との意味的差異により、彭利贞(1993,1996)、范晓(2000)と同じ意見を持つ。つまり、意味的に(35)のような受動文は使役文に対応するのに対し、(37)のような直接受動文は使役文ではなく、他動詞能動文に対応するということである。よって、(35)のような受動文を(37)のように典型的な他動詞による直接受動文と区別して、使役受動文とするのである。こういった動詞は後に目的語が接続することや、受動文になることができるのは、形式上、日本語のように使役の形態がついていなくても、対応する他動詞を持たない自動詞の他動詞代用としての使役動詞になったからである。

(35') 敌人 被 民兵 消灭 了 (NP1 主語+被+ NP2 目的語+VP)

敵 受動 民兵 殲滅する 完了

(敵は民兵に殲滅させられた)

a. 自動詞文: 敌人 消灭 了 (NP1 主語+VP)

b. 他動詞的用法: 民兵 消灭 了 敌人 (NP2 主語+VP+ NP1 目的語)

c. 使役文: 民兵(的进攻) 使 敌人 消灭 了 (NP2 主語+使+ NP1 目的語+VP)

---

(1967)、島田(1979)、西尾(1982)、早津(1987,1989)、渡辺(1991)などを参照のこと。

(37) 他的钱包被小偷偷去了 (NP1 主語+被+ NP2 目的語+VP)

彼の財布はスリに取られてしまった

(彼の財布はスリに取られてしまった)

a. 他動詞文: 小偷偷了他的钱包 (NP2 主語+VP+ NP1 目的語)

b. 使役文: 小偷使他的钱包偷去了 (NP2 主語+使+ NP1 目的語+VP)

[例(10)再掲]

このように、中国語では、自動詞文の主語名詞が使役対象として動詞の後に来る、という語順変化によって、対応する他動詞を持たない自動詞は、(37)の「偷(盗む)」という典型的他動詞と同様に、「S 主語+V+O 目的語」という形式で他動詞的用法を持つようになると思う。彭利貞(1996)によると、このような現象は他の言語にも見られる。例えば、下記のような英語の例文である。

① Don't worry about trifles. (別为小事烦)

<自動詞用法>

(くだらないことで悩むな)

② The noise of the traffic worried me. (交通的噪音让我烦)

<他動詞的用法>

(交通の騒音が私を悩ませた)

彭利貞(1996:105)

②の「worry」は使役の意味を表すが、形態上、①の「worry」、つまり自動詞的用法とは区別がない。このように、使役を表す形式(例: 「make」、「使/叫/让/令」)がなくても、語順という文法形式によって使役の意味は表されることがある。こういったゼロ形式は形態論的形式(例: 「～させる」)、及び分析的な形式(例: 「make」、「使/叫/让/令」)とは異なるレベルのものではあるが、すべて使役の意味を表現する文法形式であると考えられる(彭利貞1996)。

しかし、(35')と(37)に示しているように、同じく「S 主語+V+O 目的語」という形式であっても、対応する使役文と同様の意味を表すかどうかによって、自動詞の他動詞的用法と典型的他動詞の用法を分けることができる。すなわち、前者は(35')のように、他動詞的用法は対応する使役文と同じ意味を表すのに対し、後者は(37)のように、他動詞文は対応する使役文と異なる事態を表し、つまり対応する使役文は「財布」と「すり」以外に、登場人物

が一つ増えるのである。

なお、(33)-(34)と(35)-(36)からわかるように、このような位置変化・状態変化を意味する自動詞の他動詞代用形式においては、日中語は明らかに異なる。日本語は(33)-(34)のように、使役の意味が使役形式「-させる」によって表されるが、中国語は(35)-(36)のように、使役形式「使」が表れず、使役の意味が動詞の意味として語彙化されている<sup>44</sup>。

(38)一个 普普通通的 乞丐，就这样 一夜 之 间 “被 成 名” 了，估计 一人 普通 的 乞食 这样的 一夜 的 間に 受動 成す 名前 完了 だろう 连 他 自己 一下子 都 没有 适应 过来，成为 了 许多 人 瞩目 的 也 彼 自身 急に さえ ない 慣れる てくる なる 完了 多い 人 瞩目する の 焦点。

焦点

(ごく普通の物もらいがこのように一夜にして(外部の力によって)有名にされたのでは、彼自身も突然多くの人の注目の的となったことに慣れていないだろう)

[荆楚网 2010-03-04]<中国語の新型 中立>

(39)3G 时代：亟待 脱离 “被 进入” 的 尴尬

3G 時代 早急に 抜け出す 受動 入る の 具合が悪い

(3G 時代に(本当はまだ整備が整っていないのに名目だけ)入ったことにされるという不都合は避けねばならない)

[新京报网 2009-08-27]<中国語の新型 被害>

一方、中国語における新型の使役受動構文には、(38)-(39)のように状態や位置変化を表すものもある。(38)はごく普通の物もらいが外部の力によって有名にされたことを表示し、(39)は、我々は本当はまだ整備が整っていないのに外部の力によって 3G 時代に入った、ということを表す。

---

<sup>44</sup> 中国語において、このように使役の意味が動詞の意味として語彙化されている、他動詞代用と考えられる動詞を、本論文では通常他動詞との意味的差異によって、典型的な他動詞と区別して「使役動詞」と呼ぶ。それは、これらの動詞が『現代汉语词典(第6版)』(中国社会科学院语言研究所词典编辑室 2012)では「使+自動詞」という形で解釈されるからである。例えば、「消灭」は「消灭(消滅する)」という自動詞用法以外、他動詞的用法として「使消灭(消滅させる)」と意味的解釈がなされている。

また、日中語の使役受動構文の原因類には、上述した非意志動詞によるもの以外に、有情物主語の被使役者が原因となるモノ・コトといった無情物のために、そうせざるを得ない、あるいは不本意に意志的動詞の表す行為をしてしまったという意味を表す、いわゆる「不本意の使役受動文」と呼ぶものが存在する(小嶋 1994、高橋 2003、丁 2004)。こういった「不本意の使役受動文」について、小嶋(1994:29)は以下のように述べている。

原因となる「もの・こと」は、人の属性、社会現象などさまざまである。この「不本意の使役うけみ文」は、人である使役者に指示されて、強制的に動作主体が意志動詞のうごきをさせられる『強制の使役うけみ文』とは区別される。それは、規則や社会現象などはもちろんであるが、人の性質や行動が原因となっても、動作主体への具体的なはたらきかけがあるなしとは無関係で、次のように動作主体の意志的なうごきの根拠でしかないからである。

小嶋(1994:29)

ここでは、「動作主体」というものは、被使役者のことをいう。例としては、以下のようなものが挙げられている。

(40) なんともないものが骨折りのつきあいで休ませられちゃかなわないやな、退屈したろ。

[小嶋 1994:29]<日本語 被害>

(41) 病院の医師欠乏という理由から帰郷させられるものもいた。

[小嶋 1994:29]<日本語 被害>

(40)は骨折りの付き合いのため休むことを表し、(41)は医師欠乏という理由から帰郷するということを表す。それぞれ原因としての使役者は「デ/カラ」によって表現される。このような文では、使役受動動詞が元の動詞に変えても、その現実の事態の意味は変わらない。しかし、使役受動文のほうは、被使役者が原因となるモノ・コトのために、そうせざるを得ない、あるいは不本意に「休む」、「帰郷する」という動きをしてしまう、という意味合いが非常に強くなる。

こういった不本意の使役受動文における動詞の表す動作は、意志的といっても、自己制

御性のない、もしくは低い行為なので、これは、上述した非意志動詞の表す状態や位置変化と非常に近いと考える。言い換えれば、このような意志動詞は、不本意の使役受動文の中ではその動作主体が自己コントロールできず、無意識にそうするので、非意志的動作を表すと見なすことができる。

このような不本意の使役受動文は、非常に少ないものの、中国語の通常及び新型の使役受動構文にも存在する。

(42) 设想 一下， 如果 当时 父亲 被 留 在了 中央 苏区，  
想定する てみる もし 当時 父 受動 留まる に 完了 中央 ソビエト根拠地  
那 他 的 革命 生涯， 将 会 走 出 另外 一条 道路  
それでは 彼 の 革命 生涯 まもなく するであろう 歩く 出る 別の ひと筋 道  
来。

て来る

(考えてみると、あ那时候、父が中央ソビエト根拠地に留まっていたならば、革命家としての生涯は別の道をたどったことだろう)

[対訳 我的父亲邓小平]<中国語の通常の短縮形式型 中立>

(43) 我 为什么 还 没 被 “自杀” ？

私 なぜ まだ ない 受動 自殺する

(私は(環境によって自殺に迫られる可能性があるのに)どうしてまだ自殺していないのだろうか)

[顾清的日志网易博客 2009-02-20]<中国語の新型 被害>

(44) 北京 流浪 犬 成 城市 顽疾， “被 流浪” 是 谁 之 错。

地名 流浪する 犬 なる 都市 頑固な病気 受動 流浪する である 誰 の 過失

(北京を流浪する犬が都市にとって頑固な病気になり、犬が流浪させられるのは誰の過失か)

[搜狐新闻 2010-05-19]<中国語の新型 被害>

(45) “被 丁克” 80 后 正 递增

受動 ディンクス 1980 年 以降 している 递增する

(ディンクスに迫られる 1980 年以降生まれの人たちが少しずつ増えている)

[新华网 2010-01-11]<中国語の新型 被害>

(42)は通常の使役受動文であり、父が中央ソビエト根拠地に残るという事態は上司が命じるといった人の行動によるものである。(43)-(45)は新型の使役受動文であり、(43)は私が自殺するということは環境によるものであること、(44)は犬が流浪するということは社会に存在する多様な要因によるものであること、また(45)は1980年以降生まれの人たちがデインクスをしているという事態は客観的に存在するさまざまな社会現象によるものであることを表す。このような文では、受動形式「被」がなくても、その現実の事態の意味は変わらない。しかし、受動形式「被」がついている使役受動文のほうは、被使役者が原因となるモノ・コトのために、そうせざるを得ない、あるいは不本意に「留まる」、「自殺する」、「デインクスをする」という動きをしてしまう、という意味合いが非常に強くなる。

周知のとおり、日本語において、(46)-(50)のように、思考・認知を表す意志動詞から使役受動文が作られることがある。

(46)ブランド品ばかり買いあさる観光客の姿に、私は真の豊かさとは何かを考えさせられた。

[庵 2001:133]<日本語 中立>

(47)私は、悪の道に進みかけていたところを、母のすぎるような言葉に改心させられた。

[高見他 2006:229]<日本語 利益>

(48)ドキュメンタリー番組を見て、自らの生活を反省させられた。

[日本語記述文法研究会 2009:251]<日本語 中立>

(49)そこに、私はわかり急ぐ人たちから取り残された人間の孤独を感じさせられたのでした。

[前田 1989:27]<日本語 被害>

(50)私だってそうだよ。思い出したくないときにひとみのこと、思い出させられちゃう。

[志波 2015:159]<日本語 被害>

(46)では、私が真の豊かさとは何かを考えたのはブランド品ばかり買いあさる観光客の姿を見たためであることを表し、(47)では、私が改心したのは母のすぎるような言葉を聞いたからであることを表し、同様に(48)では、自らの性格を反省したのはドキュメンタリー番組を見たためであることを表す。また、(49)と(50)では、私がわかり急ぐ人たちから取

り残された人間の孤独を感じたということ、ひとみのことを思い出したということは、何らかのモノやコトによるものであることを表示する。

このような使役受動文は、それぞれ「考えた」、「改心した」、「反省した」、「感じた」、「思い出した」などと言い換えても基本的な意味が変わらないようである。しかしながら、使役受動表現を用いることによって、(50)からも明らかなように、「～しないわけにはいかない」といった強い気持ちを表し、その強い感情・感覚をある原因によって避けようもなく呼び起こされたことを表している。

つまり、思考・認知を表す意志動詞による使役受動構文は、有情物主語の被使役者が原因となるモノ・コトといった無情物のために、ある強い感情・感覚を避けようもなく呼び起こされたことを表す。こういった思考・認知動詞の表す活動は、意志的といっても、自己制御性のない、もしくは低い行為なので、これも、上述した非意志動詞の表す心理・生理状態変化と非常に近いと考える。換言すれば、このような思考・認知を表す意志動詞は、使役受動文の中ではその思考・認知主体が自己コントロールできず、無意識にそうするので、非意志的動作を表すと見なすことができる。

以上のように、元の動詞文との置き換え、及び意志動詞よりもむしろ非意志動詞に近いという二つの点から見ると、思考・認知を表す動詞による使役受動文は実は不本意の使役受動文のカテゴリーに入れてもよいということがわかる。

ただ、両者が異なるのは以下の二点にあると考える。

一つには、原因となるモノ・コトといった無情物、つまり使役者の性質である。ともに被使役者への具体的な働きかけがあるなしとは無関係ではあるが、いわゆる不本意の使役受動文では、主に他人の属性や性質、行動など、または規則や社会現象などが原因となる一方、思考・認知を表す動詞による使役受動文では、主に思考・認知主体それ自体が知覚・感覚したものや経験したことが原因となる。

二つには、述語動詞の意味である。文字通りに、思考・認知を表す動詞による使役受動文では、述語は人間の心理・知的活動を表すものに限られるのに対し、いわゆる不本意の使役受動文では、述語は主に「休む」、「帰郷する」のように何ならの具体的な行為を表すものである。つまり、区別するために、前者の被使役者は「認知主体」、後者の被使役者は「動作主体」と呼んでもよいのである。

一方、中国語において、日本語のように思考・認知動詞による使役受動文は見当たらない。上で挙げた非意志動詞による新型の使役受動文には、(51)に示しているように、これと近



似する意味を表すものがあると思われがちであるが、実は両者は性質が異なるものである。

(51) 女生 送 关怀, 独苗 男孩 “被 幸福”。

女子学生 送る 配慮 一人っ子 男の子 受動 幸福

(女子学生(全員)が至れり尽くせりの配慮をしたためクラスで唯一の男子は幸せに思った)

[例(32)再掲]<中国語の新型 利益>

(51)のような文は被使役者に外的要因のためその心理・感情の状態変化が生じたことを表すのに対し、(46)-(50)のような文は被使役者に、それ自体の感覚・経験などの要因による知的活動が起こることを表す。

これまで、有情物主語の使役受動構文の述語について考察してきた。続いて、無情物主語の使役受動構文の述語について分析していく。

無情物主語の使役受動構文の述語に関しては、日中語はともに位置変化・状態変化を表す非意志的動詞が挙げられる。また、自然現象を表す非意志的動詞は日本語においては使役受動構文の述語として用いられるが、中国語においては用いられない。

(52) 栃木の死体に付着していた猫の毛は、水沢夫婦によってこなの家から運ばれ、栃木の身体に移動させられたのである。

[小嶋 1994:25]<日本語 中立>

(53) 言語学研究会の言語研究の成果が、とりわけ奥田の構文論の構想が、この若い仲間たちにどのように受けつがれ、具体化されているか、そして、発展させられようとしているか。

[小嶋 1994:25]<日本語 利益>

(54) 人工降雨で多量の雨が降らされた。

[高見他 2006:227] <日本語 中立>

(55) 芳草地 也 被 暴风骤雨 摇撼 着。

芳草地 も 受動 強い風と激しい雨 揺れる 持続

(芳草地も嵐に揺さぶられていた)

[対訳 金光大道]<中国語の通常の短縮形式型 中立>

(56) “不。”她简单地吐出一个字，又用细长的手臂  
いいえ 彼女 簡単 に 出す て 来る 一言 また 用いる 細長い の 腕  
掠 开了 前额 上 一绺 被 汗水 湿了 的 头发。  
なでつける 開く 完了 額 に 一束 受動 汗 湿る 完了 の 髪  
(「うん」彼女はそっけなくそう言うと、また細い手を上げて汗で額に貼りついた髪をかきあげた)

[対訳 轮椅上的梦]<中国語の通常の短縮形式型 被害>

(57)怎样 发表 帖子 不 被 下沉  
どのように 発表する 書き込み しない 受動 沈下する  
(自分の(電子掲示板への)書き込みが他人の書き込みでページの下に行ってしまうな  
いように、どうすればいいの?)

[荆楚网 2015-04-23]<中国語の新型 被害>

(58)烟台 茶， 亟 待 “被 出名”。  
地名 お茶 早急に 待つ 受動 有名になる  
(煙台のお茶は(それに関係する人たちに)有名にさせられることをせっぱ詰まって待  
っている)

[烟台晚报 2010-02-05]<中国語の新型 利益>

上に挙げた例文のうち、(52)、(55)及び(57)は位置変化を表す自動詞によるものであるが、(53)、(56)及び(58)は状態変化を表す自動詞によるものである一方、(54)は、自然現象を表す自動詞によるものであり、日本語に特有のもののように見受けられる<sup>45</sup>。

すでに、小嶋(1994)が指摘したように、(52)の「移動する」という自動詞に対応する他動

---

<sup>45</sup> (54)について、高見他(2006:227)では、強制類の例文として以下のように述べている。

「人工降雨で」という表現からわかるように、気象担当者などの使役主が、人工降雨の装置を用いて、自ら雨を降らせていることが示されている。その点で、雨が降ることが「強制的」に引き起こされていると言える。

本論文は、志波(2015)で定義された強制使役に従って、強制類は主語に立つ有情物が使役の対象となって、有情物である使役者の指定した動作を強制的に実行させられることを表すということをいう。つまり、強制類は使役者と被使役者との両方が有情物である場合に限られる。よって、「人工降雨」、あるいは「気象担当者などの使役主が、人工降雨の装置を用いる」という事態などの無情物によって、「雨が降る」という事態が生じた場合は、強制類ではなく、原因類とする。

詞を、同形の「(猫の毛を)移動する」ではなく、「(猫の毛を)移動させる」という使役動詞の形で代用し、その受動の形、すなわちもともと使役の意味を含んではいない動詞の受動の形である、と見ることができる。このことは、残りの(53)-(56)にも当てはまる。すなわち、日本語において、「発展する」((53))、「降る」((54))、中国語において、「揺撼(揺れる)」((55))、「湿(ぬれる)」((56))は、それらに対応する他動詞がないため、日本語では、それらに対応する「Vさせる」という使役形式、中国語では、それらの同形で代用し、(53)-(56)のような受動形式は、もとより使役の意味を有しない動詞の受動形式であると見なすことができるのである。

このように、他動詞代用形式に見られる日中語の相違、つまり日本語は使役形式を持つが中国語は使役形式が現れず、使役の意味が動詞の意味として語彙化されている、ということは前述した位置変化・状態変化を意味する非意志自動詞による有情物主語の使役受動文と同じである。

日本語においても、中国語においても、原因類の使役受動構文は主に位置変化・状態(心理的状态を含む)変化を表す非意志動詞によるものであるが、制御性のない、あるいは低い行為を意味する意志動詞によるものも見られる。また、日本語では、思考・認知を意味する意志動詞、自然現象を表す非意志動詞による使役受動文も見られるが、中国語ではそのような使役受動文は見つからない。一方、中国語の新型の使役受動文は元の述語動詞「弄(する)+得/成(助詞/なる)」が明示されないため、形式上、述語として動詞のみならず、形容詞及び名詞も可能である。要するに、原因類の使役受動構文に入る述語の制限は、その厳しさによって、中国語の新型、日本語、中国語の通常短縮形式型という順になり、上から下へより厳しくなるのである。

最後に、情意性に関しては、強制類は「被害」しかないのに対し、原因類の使役受動文は当該事態が主語の被使役者にとって、「被害」、「中立」及び「利益」のいずれになることも可能である。この点は、日本語においても、中国語においても適用できる。次に、日本語の(52)と(53)、中国語の(55)と(56)はそれぞれ無情物主語であるが、情意性においてはそれぞれの対が異なる。前者の(52)と(55)は「中立」であるのは、その無情物主語に何らかの関わりを持つ有情物を内在しないためである。後者の(53)と(56)は「利益・被害」になるのは、その無情物主語に持ち主や何らかの関わりを持つ有情物が想定できるからである。

### 5.3.2.3 指示・許容類

前節では、日本語の使役受動構文、中国語における通常の使役受動構文の短縮形式型及び新型の使役受動構文について、それらの強制類及び原因類を考察してきた。このように、日本語においても、中国語においても、NP2 またはそれに関連する事柄が原因となって「NP1 がする/になる」という事態を引き起こす場合に、使役受動文が用いられると、「原因」の意味になる。原因・結果は、エネルギーあるいは力の起点・到達点からメタファー的に拡張されたものであると考えられる(山梨 2009:106)。それゆえ、「原因」の意味は「強制」というプロトタイプの意味からの拡張だと言えるであろう。これに関しては、日中語の三構文は一致している。

本節では、中国語における通常の使役受動構文の完全形式型に関する検討に入る。

中国語における通常の使役受動構文の完全形式型は、上述した強制類及び原因類を持たないが、いわゆる指示・許容類の用法を有する。このような用法は、日本語の使役受動構文、中国語における通常の使役受動構文の短縮形式型及び新型の受動構文には存在しない。言い換えれば、「被-叫/让」という指示・許容類は確かに中国語における、通常の完全形式型の使役受動構文独特のもののように見受けられる。

楊凱榮(1989)によると、中国語の使役標識「使/叫/让」のうち、原因使役を表す「使」と異なり、「叫/让」は許可・放任といった許容使役を表す。そして、「叫」と「让」との違いを以下のように述べている。

「叫」と「讓」との間には、上述した「使」との間に見られるような大きな違いはないが、多少ニュアンスの違いはある。「叫」は「言い付け、あるいは命令して、～させる」という意味が強いのにたいして、「讓」は「許可して～させる」という意味が強い。

楊凱榮(1989:56)

中国語の使役標識「使/叫/让」のうち、使役専用の標識、つまり原因使役を表す「使(-させる)」に比べて、「叫(命令して-させる)」と「让(許可して-させる)」は抽象度が低く、「命令する」、「許可する」といった実質的な意味内容がまだ残っていると考えられる。楊凱榮(1989)が指摘した、「叫」と「让」との違いは、通常の使役受動構文の完全形式型からも窺える。

(59) 昨晚，她 被 叫<sup>46</sup> 到<sup>47</sup> 了 派出所。

昨晚 彼女 受動 使役 行く 完了 派出所

(昨夜、彼女は交番に行かされた)

[北京 绿月亮(13)]<通常の完全形式型 指示 被害>

(60) 一天，尚 被 蒙在鼓里 的 高肇甫 被 叫 去 谈话。

ある日 まだ 受動 真相を知らされない の 人名 受動 使役 行く 話をする

(ある日に、まだ真相を知らされない高肇甫は(上司に)話をするよう行かされた)

[例(14)再掲]<通常の完全形式型 指示 中立>

(61) 昨天 我 被 音乐 老师 叫 去 参加 歌唱比赛， 我们 班

昨日 私 受動 音楽 先生 使役 て行く 参加する 歌唱コンク-ル 私たち クラス

就 选 一个 女的 和 一个 我。

だけ 選ぶ 一人 女の人 と 一人 私

(昨日、音楽の先生に歌唱コンク-ルに出場するよう求められた。クラスで(出場に)選ばれたのは私ともう一人の女の子だけだった)

[<http://cache.baiducontent.com/> 2015/09/08 参照]<通常の完全形式型 指示 利益>

(62) 被 申涛 让<sup>48</sup> 上 了 炕， 老头子 有些 不知所措。

受動 人名 使役 上がる 完了 オンドル 年寄り 少し どうしたらよいかわからない

(申涛にオンドルを譲ってもらってしまって、年寄りは少し困惑気味だった)

---

<sup>46</sup> 石毓智(2006:40)によると、ここでの「叫(するよう命じる)」は「使令/支使(命じてさせる/働かせる)」を意味し、兼語式(S+叫+NP1+V+NP2)における「叫」の持つ「使令義(使役義)」の一種である。兼語式における「叫」の使役義については、詳しくは石毓智(2006:38-50)を参照のこと。

<sup>47</sup> この「到(行く)」は前置詞ではなく、動詞であると考え。なぜなら、前置詞(例:从(から))は「着/了/过」などのアスペクト助詞を伴うことができないからである。刘月华他(1988:231)によると、いくつかの前置詞は、「为了/着(のために)」、「沿着(に沿って)」、「朝着(に向かつて)」、「向着(に向かつて)」、「随着(につれて/に従って/とともに)」、「除了(～を除いて、～のほか/以外)」などのように種々の形を取りうるが、これらの前置詞に含まれる「着/了」はいかなる文法的意味も示さず、「着/了」を使っても使わなくてもその意味・用法は基本的に同じであるため、ここでの「着/了」はアスペクト助詞ではなく、前置詞そのものの構成要素であるという。動詞と前置詞の区別に関して、詳しくは刘月华他(1988:230-231)を参照のこと。

<sup>48</sup> 石毓智(2006:62-64)によると、ここでの「让(譲る)」は「礼让(礼儀を尽くして譲る)」を意味し、兼語式における「让」の持つ「使令義(使役義)」の一つである。兼語式における「让」の使役義については、詳しくは石毓智(2006:61-68)を参照のこと。

[北京 小站的黄昏]<通常の完全形式型 許容 被害>

- (63)倪藻 走 进 一个 宽敞 的、同样 昏暗 的 客厅，他 被 让  
人名 歩く 入る 一つ 広々としている の 同様 暗い の 客間 彼 受動 使役  
坐 在 一个 不 新 的 暗 红色 沙发 上。  
座る に 一つ ない 新しい の 暗い 赤色 ソファ 上  
(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、彼は古びたエンジ色のソファに案内された)

[例(11)再掲]<通常の完全形式型 許容 中立>

- (64)他们 请求 进去 参观， 立刻 被 让 进<sup>49</sup> 客厅。  
彼ら 願う 入っていく 見学する すぐに 受動 使役 入る 客間  
(中を見学させていただきようお願いしたら、すぐさまに客間に案内されてしまった)

[北京 傲慢与偏见]<通常の完全形式型 許容 利益>

(59)-(61)は指示使役を表す例文であり、(62)-(64)は許容使役を表す例文である。例えば、(59)は、彼女は警察に交番に行くよう命令されて、せざるを得ないそうしたことを表すが、(64)は、彼らは中に入ろうとしてお願いし、相手に許可をしてもらって希望とおりに客間に入ったことを表す。

一方、本論文は、このような指示類及び許容類を一つのタイプに入れておいたのは、次に述べるように、両者の間には共通点が三つ挙げられるためである。

まず、使役者と被使役者は、主に警察と住民、上司と部下、先生と学生、主人と客、両親と子供などの人間関係にある。

また、述語動詞、つまり兼語式における二番目の動詞は主に「到(行く)」、「去(行く)」、「上(上がる)」、「进(入る)」などの位置変化あるいは移動を表す自動詞である。

さらに、情意性に関しては、強制類には被害しかないが、指示類、許容類はともに、原因類と同様に、被使役者にとって、当該事態が被害、中立、及び利益のいずれにもなりうる。

---

<sup>49</sup> この「进(入る)」は前置詞ではなく、動詞であるとする。その理由は(59)の「到(行く)」と同じである。すなわち、前置詞(例:从(から))は「着/了/过」などのアスペクト助詞を伴うことができないのに対し、動詞は「着/了/过」などのアスペクト助詞を伴うことができる、ということである。

### 5.3.3 使役行為と使役結果の明示化

以上、強制類、原因類及び指示・許容類といった順に、主に述語と情意性との面から日中語の使役受動構文について述べてきた。本節では、「使役行為明示」か、「使役結果明示」か、または使役行為と使役結果の両方明示かという面から日中語の使役受動構文の相違点を考察する。以下、日中語の使役受動構文を強制類、原因類及び指示・許容類という順を追ってみることにする。

まず、強制類の例文を見てみよう。

(65) 幸せです、そう言われました。

[[www5.atwiki.jp/hmiku/pages/12522.html](http://www5.atwiki.jp/hmiku/pages/12522.html) 2014/12/13 参照]<日本語>

(66) 东大 同学 刚刚 游行 回来, 就 被 集合 去 听  
東北大学 学生 したばかり デモ 帰ってくる すぐに 受動 集合する 行く 聞く  
学校 当局 的 堂皇 的 训话.....  
学校 当局 の 堂々としている の 訓話  
(東北大の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

[例(21)再掲]<中国語の通常の短縮形式型>

(67) 今天, 你 “被 幸福” 了 吗?

今日 あなた 受動 幸福 完了 か

(今日、あなたは(中央テレビ局の新聞記者に自分は本当は幸福ではないのに)幸福だと言わされたか)

[例(18)再掲]<中国語の新型>

(65)は日本語の使役受動文、(66)は中国語における通常の短縮形式型の使役受動文、(67)は中国語の新型の使役受動文であるが、いずれも強制の意味を表す。まず、(65)と(67)を比べてみる。両文の表す意味はほぼ同じであるが、明示されているものは明確に異なる。両者はともに「幸せではないのに、幸せだと強制的に言わされてしまった」という意味を表しているが、日本語の使役受動文では、「言わされた」という動詞の表す使役行為及びその

結果「言うように強制された」がなければ、強制的使役受動の意味はなくなるのに対し、中国語の新型の使役受動文では、「强迫说(言うように強制する)」ではなく、「幸福(幸せだ)」という強制された発話の内容あるいは結果が「被」という受動標識に後続してはじめて、構文全体が強制的使役受動の意味を表すことになる。つまり、「幸せだと言わされた」の中で、日本語の使役受動文は「言わされた」という動詞の表す動作が明示されるのに対し、中国語の新型受動文は「幸せだ」という動作の内容あるいは結果のみが明示される。

中国語における通常の短縮形式型の使役受動文(66)を考察してみよう。(66)は「東北大の学生は学校当局に無理やりに集合するようさせられた」という意味を表しているが、通常の短縮形式型の使役受動文では、「强迫集合(集合するよう強制する)」ではなく、「集合(集合する)」という強制された内容あるいは結果が「被」という受動形式に後続してはじめて、構文全体が強制的使役受動の意味を表すことになる。つまり、新型の使役受動文と同様に、通常の短縮形式型の使役受動文は、「集合するよう強制された」の中で、「集合する」という動作の内容あるいは結果が明示される。

続いて、原因類の例文を見てほしい。

(68) ちょっと生活大変だけど、俺って幸せだなとまた三ツ峠さんに思わされました。

[www.yamareco.com > 山行記録一覧 2014/12/13 参照]<日本語>

(69) 她 被 一种 新奇 的 神秘 似的 感觉 兴奋 得 许久 都  
彼女 受動 一種 珍しい の 神秘的 のように 感覚 興奮する 助詞 長い間 でき  
不能 安静 下来。  
できない 落ち着く てくる  
(もの珍らしさと神秘的な感じが、彼女を興奮させ、いつまでも落ち着かせなかつた)

[対訳 青春之歌]<中国語の通常の短縮形式型>

(70) 女生 送 关怀, 独苗 男孩 “被 幸福”。  
女子学生 送る 配慮 一人っ子 男の子 受動 幸福  
(女子学生(全員)が至れり尽くせりの配慮をしたためクラスで唯一の男子は幸せに思つた)

[例(32)再掲]<中国語の新型>



(68)-(70)からわかるように、強制類のみならず、原因類も同様である。(68)-(70)のいずれも、主語指示物「三ツ峠さん」、「彼女」、「男子」は何かの外的要因で、自分が幸せだと思った、自分が興奮していることを表すが、(68)では、「思わされた」という動詞の表す使役の行為及びその結果「思うようにされた」がなければ、「幸せだ」だけで使役受動の意味にはならない。一方、(69)では、「弄(する)+得(助詞)」の表す使役行為ではなく、「興奮(興奮する)」といった使役の結果、(70)では、「弄得感觉到(思うようにされた)」ではなく、「幸福(幸せだ)」といった思考の内容あるいは結果が「被」に後続してはじめて、構文全体が原因の意味を表すことになる。換言すれば、「興奮させられた」、「幸せだと思わされた」の中で、日本語の使役受動文は「思わされた」という動詞の表す使役の行為及び結果が明示されるが、中国語の通常の使役受動文は「興奮している」という動詞の表す使役結果、新型の使役受動文は「幸せだ」という形容詞の表す使役結果が明示される。

さらに、指示・許容類の分析に入る。

(71) 昨晚，她 被 叫 到 了 派出所。

昨晚 彼女 受動 使役 行く 完了 派出所

(昨夜、彼女は交番に行かされた)

[例(59)再掲]<中国語の通常の完全形式型 指示>

(72) 倪藻 走 进 一个 宽敞 的、同样 昏暗 的 客厅，他 被 让  
人名 歩く 入る 一つ 広々としている の 同様 暗い の 客間 彼 受動 使役  
坐 在一个 不 新 的 暗 红色 沙发 上。

座る に 一つ ない 新しい の 暗い 赤色 ソファ 上

(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、彼は古びたエンジ色のソファに案内された)

[例(63)再掲]<中国語の通常の完全形式型 許容>

結論から先に言えば、中国語における通常の完全形式型の使役受動文に特有の用法として、指示・許容類は日本語の使役受動構文と同様に、使役の行為とその結果の両方が明示されるということである。

まず、指示類の例文である(71)を見てみよう。(71)では、「警察が彼女を交番に行かせた」ということを表すが、使役の意味を表す「叫(命令して-させる)」は「強制」、「原因」では

なく、「指示」を意味する。「叫(命令して-させる)」という使役動詞の表す動作及びその使役の結果「到(行く)」のいずれが明示されないと、「他被到了派出所」、「他被叫了派出所」のように、使役の結果を表す「到(行く)」と使役の行為を表す「叫(命令して-させる)」のいずれが単独で「被」という受動標識に後続する表現は非文になる。つまり、使役の動作及びその結果を表す動詞が同時に明示されないと、使役受動の意味にはならない。

同じことは許容類にも言える。(72)では、「史太太が倪藻を古びたエンジ色のソファに案内した」ことを表すが、使役の意味を表す「让(許可して-させる)」は「強制」、「原因」ではなく、「許容」を意味する。「让(許可して-させる)」という使役動詞の表す行為及びその使役の結果「坐(坐る)」のいずれが明示されないと、「他被坐在一个不新的暗红色沙发上」、「他被让在一个不新的暗红色沙发上」のように、使役の結果を表す「坐(坐る)」と使役の行為を表す「让(許可して-させる)」のいずれが単独で「被」に後続する表現は非文になる。

上にも述べたように、中国語の使役標識のうち、「叫(命令して-させる)」と「让(許可して-させる)」は、「使(～させる)」と比べて、抽象度が低く、実質的な意味内容が残っていると考えられる。したがって、中国語の指示・許容類の使役受動文は通常 of 直接受動文(例: 钱包被偷了(財布がすりに盗まれた))との連続性も見られる。

このように、使役受動構文において、強制類であろうと、原因類であろうと、日本語と中国語の完全形式型は使役行為と使役結果との両方が明示されるが、中国語の新型は使役結果のみ明示される。一方、日本語にない、中国語に特有の短縮形式型は新型と同様、使役結果しか明示されない。つまり、中国語の使役受動構文は通常であれ、新型であれ、結果明示が要請されているということである。

#### 5.3.4 まとめ

以上、形式的特徴及び意味的特徴について、日中語の使役受動事態を表す三つの構文、つまり日本語の使役受動構文、中国語における通常 of 使役受動構文及び新型 of 使役受動構文を分析してきた。5.3 で述べたことを以下のようにまとめることができる。

第一に、形式的特徴に関しては、

- 1) 日中語の使役受動事態を表す三つの構文は形式的に異なるのがはっきりしているが、それらが異なる形式的特徴を持つのはそれぞれの言語類型及び体系が要因で、同様

の基本構文が複合構文である使役受動構文を融合する過程で異なる合成経路を取ったためであると考えられる。

- 2) 日本語の使役受動構文は、「-させられる」という使役受動形式、あるいは五段活用動詞の場合、短縮形式を持たなければならないが、いずれの形式も使役形式と受動形式を備えている。しかし、中国語の使役受動構文は使役・受動形式の両方を備えたほう(指示・許容類)がむしろまれである一方、受動形式しかないものは新型の使役受動構文のみならず、通常の使用受動構文にも見られる。このことは新型の受動構文と通常の使用受動構文との関連性を反映している。中国語における使役受動構文のうち、使役・受動形式の両方を持つものよりも、受動形式しか持たないもののほうが多い、ということは中国語(母語話者)が意味の伝達を重視し、いわば意合<sup>50</sup>を重んじ、文法の形式にとらわれないという特徴を表している。

第二に、意味的特徴に関しては、

- 1) 意味分類において、日本語の使役受動構文は、直接と間接に二分することができ、強制と原因の意味を持ち、使役行為とその結果の意味両方が明示されなければならない。これと同様に、中国語の使役受動構文にも、直接と間接との両方、そして強制と原因の意味、行為と結果との意味の両方が明示されなければならぬ完全形式型は存在する。一方、日本語にはないもの、つまり完全形式型の指示・許容類の用法及び結果だけ明示される短縮形式型と新型の用法も見られる。中国語の使役受動構文は通常であれ、新型であれ、結果明示化が要請されている。
- 2) 使役受動構文の述語に関しては、日本語においても、中国語の通常においても、強制類は意志動詞、原因類は主に位置変化・状態(心理的状态を含む)変化を表す非意志動詞、制御性のない、あるいは低い行為を意味する意志動詞であるが、中国語に特有の指示・許容類は主に「到(行く)」、「去(行く)」、「上(上がる)」、「进(入る)」などの位置変化あるいは移動を表す自動詞である。一方、中国語の新型は、元の述語動詞が明示されないため、形式上、述語として動詞のみならず、形容詞及び名詞も可能である。

---

<sup>50</sup> 中国語の文法学者の説(王力 1957、張黎 1994,1997,2012、袁毓林 2015)によると、中国語の表現が意思の伝達を重視し、文法の形式にとらわれないという。これが中国語の表現でいう「意合(意味の一致)」という特色だということである。中国語文法の「意合(意味の一致)」という特色に関して、詳しく袁毓林(2015)、杉村(2015)を参照のこと。

原因類と強制類の使役受動構文に入る述語の制限は、その厳しさによって、中国語の新型、日本語、中国語の通常の短縮形式型という順になり、上から下へより厳しくなるのである。

- 3) 位置変化・状態変化を意味する非意志的自動詞の他動詞代用の形式においては、日中語の間には明らかな相違が見られる。使役の意味は日本語では使役形式によって明示されるが、中国語では使役形式によって表されず、動詞の意味として語彙化される。
- 4) 情意性においては、日中語の使役受動構文は、いずれも強制類では、被害のみ、原因類では、被害のみならず、中立、利益にもなりうる。一方、中国語に特有の指示・許容類も、原因類と同様に、被害、中立及び利益のいずれにもなり得る。

## 5.4 日中語の使役受動構文の事態把握

5.3 では、日中語の使役受動構文を、形式と意味に分けてそれらの構文的特徴について検討を行ってきた。第2章で述べたように、言語表現形式の違いは意味の違いの表れであり、言語表現の意味は認知主体である話者が事態を把握する際の視点、捉え方の反映である。つまり、構文的特徴と事態把握はそれぞれ独立しているものではなく、密接に結び付いているということである。

本節では、事態把握のモデルを用い、実例によって、強制類、原因類及び指示・許容類という順に使役受動事態を把握する際、日中語における使役受動構文の意味的差異の反映する認知的相違点を解明する。ここでは、例文の中の「NP1 が NP2 に V-させられる」、「NP1+被+NP2+(V1+)V2」と「NP1+被+X」だけを示すことにする。

### 5.4.1 強制類の事態把握

前述したように、意志動詞であれば、自動詞でも他動詞でも日中語の使役受動構文に入ると、強制の意味を表すことができる。以下、意志的自動詞による使役受動文(73)-(75)を例に、日中語の使役受動構文の強制類の事態把握における相違点を図で表すことにする。

まず、日本語の使役受動文(73)の表す事象構造は、認知モデルによって表すと以下のようになる。

サークルは参与者、二重矢印はエネルギーの伝達あるいは影響、一重矢印は影響を与えられた参与者の位置や状態などの変化、四角囲みは影響を与えられた参与者が最終的にある位置や状態になる結果を表す。プロフィールは太線で表記し、そのうち、もっとも際立つものを「tr」、次に際立つものを「lm」で表す。もっとも大きい四角形は存在(entity)、ここでは事態を表す。点線のサークルは反意図性を表示する。

(73)643年に蘇我氏によって自殺させられたのは誰ですか。

[j-history.idea-mix.net/workbook/jhistory\_question.php?no=64 2015/09/09 参照]<日本語>

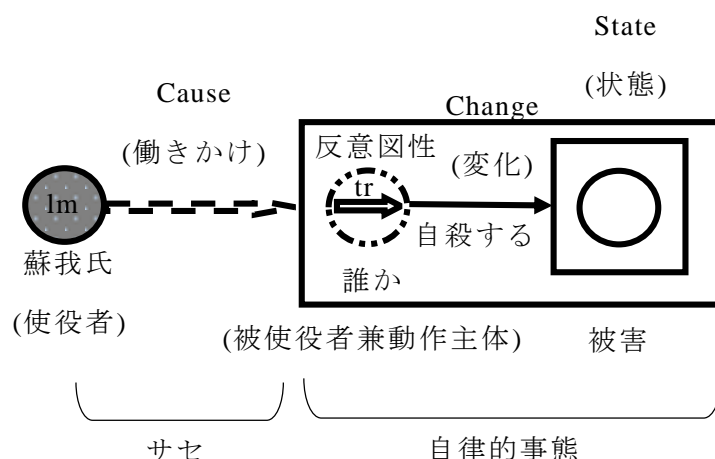


図 5-6 日本語の使役受動構文の事象構造(強制類)

つまり、「自殺させられた」は、使役者である「蘇我氏」が被使役者「誰か」に間接的なエネルギーを伝達し、被使役者の持つ反意図性を変えることによって、被使役者が強制されたとおり、「自殺する」という行為を行い、自分自身に生理的状態変化が起こったという典型的な使役事態を表している。使役者と自律的事態の間には、「引き起こす」といった使役的關係が存在し、「蘇我氏」が自殺するよう強制したため、「誰かが自殺した」という自律的事態が生じたのである。概念化者である話者は影響を受ける側、つまり被使役者兼動作主体<sup>51</sup>である「誰か」に注視し、この事態全体を主語「誰か」にとって好ましくないも

<sup>51</sup> 村上(1986:86)で、使役受動文の主語の位置にあるものは、使役動作にとっては「使役の相手・客体」であり、また現実の動作にとっては「動作のおこし手・動作主体」であるという二重性を持って文の中に入り込んでいる、ということが指摘されている。

のと捉え、この事態の全体を述べている。

次に、中国語における通常の短縮形式型の使役受動文(74)は、「学生が先生に集合させられた」ということを表す。「被集合(集合させられた)」の表す事象構造は、認知モデルによって表すと次のようになる。

(74) 东大 同学 刚刚 游行 回来, 就 被 集合 去 听  
 东北大学 学生 したばかり デモ 帰ってくる すぐに 受動 集合する 行く 聞く  
 学校 当局 的 堂皇 的 训话.....  
 学校 当局 の 堂々としている の 訓話  
 (東北大の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

[例(66)再掲]<中国語の通常の短縮形式型>

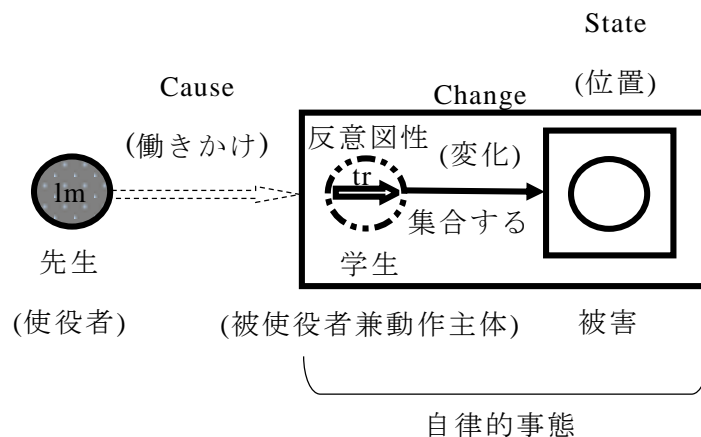


図 5-7 中国語における通常の使役受動構文の事象構造(強制類)

図からわかるように、(74)の表す事象構造は(73)と同様、二つの参与者の間に間接的なエネルギーの伝達が起こる、という典型的な使役事態であるが、二つの文では焦点化される部分は異なる。日本語は(73)のように当該使役事態の全体をプロファイルするが、中国語は(74)のように当該使役事態の一部しかプロファイルしない。

さらに、中国語における新型の使役受動文(75)の表す事象構造を検討する。「在監視下上吊自杀 和珅原是“被自杀”(なんだ和珅が(自殺したくなかったが)(皇帝の)監視の下で首

をつって自殺させられたのか)」では、「被自殺(自殺させられた)」の表す事象構造は、認知モデルによって表すと以下のようになる。

(75) 在 監視 下 上吊 自殺 和珅 原 是 “被 自殺”

ある 監視 下 首をつる 自殺する 人名 なんだ である 受動 自殺する

(なんだ和珅が(自殺したくなかったが)監視の下で首をつって自殺させられたのか)

[博宝艺术网 2009-11-27]<中国語の新型>

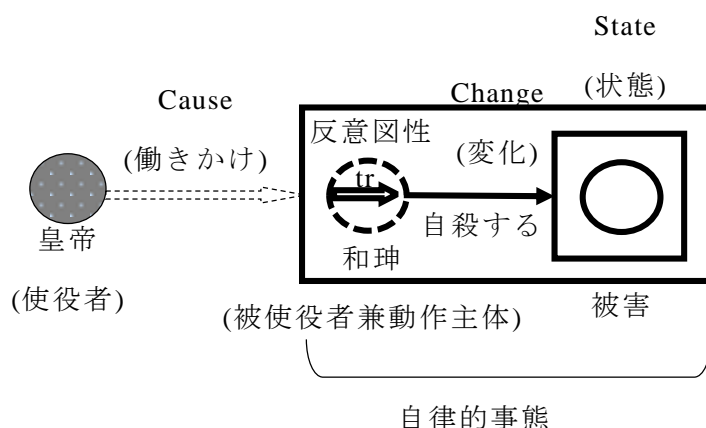


図 5-8 中国語における新型の使役受動構文の事象構造(強制類)

図 5-7、図 5-8 から明らかなように、(75)の表す事象構造は(74)と同様、二つの参加者の間に間接的なエネルギーの伝達が起こる、という典型的な使役事態であるが、二つの文は焦点化される部分は異なる。中国語では、通常の使役受動構文は(74)のように当該使役事態の、エネルギーの伝達を除外した部分をプロファイルするが、新型の使役受動構文は(75)のように当該使役事態の、エネルギーの伝達のみならず、使役者である参加者もプロファイルしない。

以上論述した事象構造、図 5-6、図 5-7、図 5-8 をもとに、使役受動事態を捉える際、日中語の使役受動構文の強制類の事態把握における異同点を以下のようにまとめることができる。

- 1) 共通点に関しては、三構文はいずれもある参加者・使役者の間接的な影響によってもう一つの参加者・被使役者に位置や状態変化が起こるという二つの参加者を含む典

型的な使役事態を、事態外から被使役者を視点人物として捉えることを表す。

- 2) 相違点は際立ちの面においてである。日本語の使役受動構文は使役事態の全体がプロファイルされるが、中国語における通常及び新型の使役受動構文はその一部だけがプロファイルされ、他の部分は背景化される。

次節では、日中語における使役受動構文の原因類の事態把握について考察する。

### 5.4.2 原因類の事態把握

前述したとおり、日中語における使役受動構文の原因類は、主に状態・位置変化を表す非対格自動詞(例:「悩む」、「移動する」など)といった非意志動詞によるものではあるが、意志動詞によるものも見られる。それは動詞の性質によって、大きく二つに分けられる。一つは思考・認知動詞(例:「考える」、「反省する」など 日本語のみ)であり、もう一つは意図性が非常に薄くなり、むしろ非意志動詞に近い性質を持つ、主に状態・位置変化を表す非能格自動詞(例:「休む」、「帰郷する」など)である。

以下、非意志自動詞による使役受動文(76)-(78)を例に、日中語の使役受動構文の原因類の事態把握における相違点を図で表す。

まず、日本語の使役受動文(76)を見てみよう。「私はびっくりさせられた」の「びっくりさせられた」の表す事象構造は、認知モデルによって表すと次のようになる。点線の二重矢印は間接的な影響、点線のサークルは非意図性を表す。

(76)突然、彼が深夜に訪ねてきて、私はびっくりさせられた。

[高見他 2006:221]<日本語>

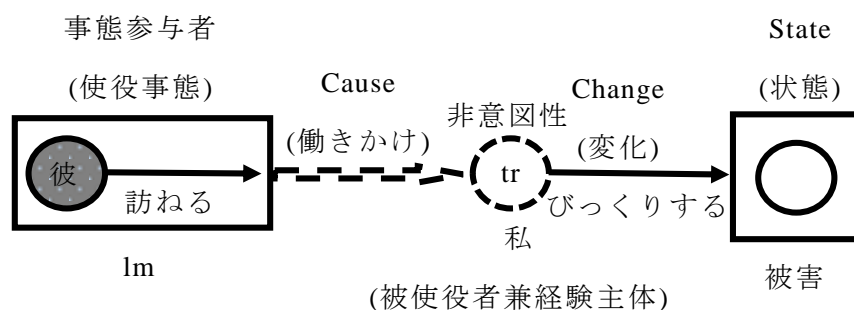


図 5-9 日本語の使役受動構文の事象構造(原因類)



つまり、「びっくりさせられた」は、一方の参与者である「彼が深夜に訪ねてきた」という事態が他方の参与者である「私」に間接的なエネルギーを伝達し、被使役者の持つ意図性に関わらずその心理的狀態を変化させる、という拡張的な使役事態を表しているが、使役事態と被使役者との間には、「引き起こす」といった使役的關係が存在し、「彼が深夜に訪ねてきた」からこそ、「私がびっくりした」という結果事態が生じたのである。概念化者である話者はこの事態の外に立ち、影響を受ける側、つまり被使役者である「私」に注視し、当該事態を経験主体である「私」にとって好ましくないものと捉え、この事態の全体を述べている。

次に、中国語における通常の短縮形式型の使役受動文(77)は、「みんなが何がなんだかわからない困惑に悩まされていた」ということを表す。「被苦恼(悩まされていた)」の表す事象構造は、認知モデルによって表すと以下のようなになる。

(77)这时 不管 他是 工人、农民、公务人员，还是 大 腹  
 この時 であろうと 彼 である 労働者 農民 公務員 であろうと 大きい 腹  
 便便 的 商人，人们 的 眼睛 都 被 一种 莫名其妙  
 肥満しているさま の 商人 人々 の 目 すべて 受動 ある種 わけがわからない  
 的 困惑 苦恼 着。  
 の 困惑 悩む 持続  
 (そうした騒ぎにまきこまれて、労働者だろうと、農民だろうと、はては公務員から腹のつきでた大商人に至るまで、みんないちように、なにがなんだかわからないための困惑と、苦悶の色をその目に浮かべていた)

[例(28)再掲]<中国語の通常の短縮形式型>

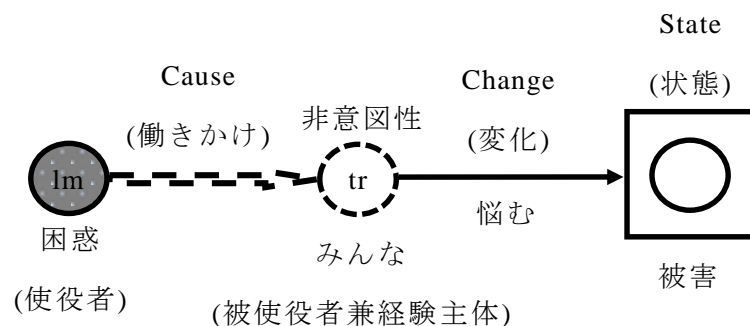


図 5-10 中国語における通常の使役受動構文の事象構造(原因類)

すなわち、一方の参与者である「困惑」が他方の参与者である「みんな」に間接的にエネルギーを伝達し、被使役者の持つ意図性の如何に関わらずその心理的状态を変化させるという典型的な使役事態を表している。概念化者である話者はこの事態の外に立ち、影響を受ける側である「みんな」に注視し、使役者「困惑」のせいで経験主体である「みんな」が「被害」を被ると捉え、この事態の全体を述べている。

さらに、中国語における通常の短縮形式型の使役受動文(78)の表す事象構造は、認知モデルによって表すと図 5-11 のようになる。点線のサークルは非意図性を表示する。太線はプロフィール、細線は背景を表す。

(78) 星月 礼品 太多, 玩家们 “被 烦恼”。

ゲーム名 贈り物 すぎる 多い プレイヤー たち 受動 悩む

(星月の景品が多すぎるため、プレイヤーたちが悩まされている)

[例(29)再掲]<中国語の新型>

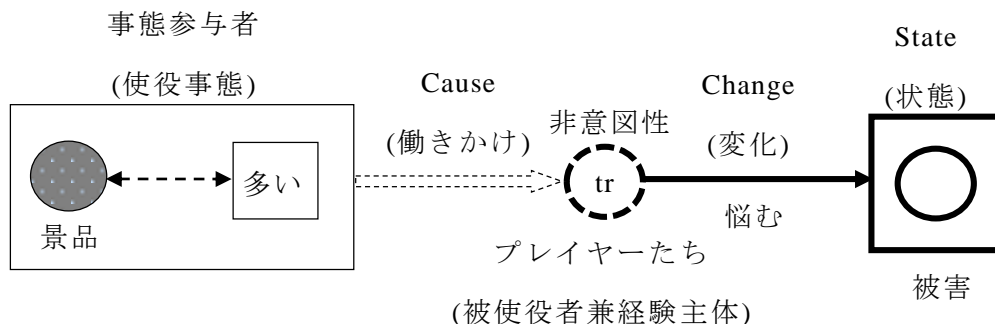


図 5-11 中国語における新型の使役受動構文の事象構造(原因類)

図 5-9 と図 5-11 からわかるように、(78)は(76)と同様、使役者という参与者がモノからコトへと変化した拡張的な使役事態を表すが、両者は際立ちの面においては異なる。日本語の使役受動文(76)は当該使役事態の全体をプロフィールするが、中国語の新型の使役受動文(78)は、Cause-Change-State のうち、Change-State 節のみプロフィールする。

以上論述した事象構造、図 5-9、図 5-10、図 5-11 をもとに、使役受動事態を捉える際、日中語の使役受動構文の原因類の事態把握における差異を次の二点にまとめることができる。

第一に、共通点に関しては、三構文はいずれもある参与者(事態参与者を含む)の間接的な影響によって、もう一つの参与者に位置変化・状態変化が起こった、という二つの参与者を含む使役事態(典型的使役事態と拡張的使役事態を含む)を、事態外から被使役者兼行為主体を視点人物として捉えることを表す。

第二に、相違点は際立ちの面にある。日本語と中国語の通常の使用受動構文は当該使役事態の全体がプロファイルされるが、中国語の新型の使用受動構文はその一部だけがプロファイルされ、他の部分は背景化される。

次節では、日本語と中国語の新型の使用受動構文には見られない用法、つまり中国語における通常の使用受動構文の指示・許容類の事態把握について考察する。

### 5.4.3 指示・許容類の事態把握

上に述べたように、日本語においては、強制使役と原因使役の二つしか使役受動文にならない(高見他 2006)。また、収集したデータを見ると、中国語における新型の使用受動文には、日本語と同様に、強制使役と原因使役との二つしか見つからない。一方、中国語の通常の使用受動文では、「被-叫/让(受動標識+使役標識)」という完全形式型の使用受動文は少ないものの、存在しないわけではない。本節では、意志的自動詞による使役受動文(79)-(80)を例に、このような指示・許容類の使用受動構文の事象構造を検討してみる。

前述したとおり、中国語の使役標識「使/叫/让」のうち、使役専用の標識、つまり原因使役を表す「使(-させる)」に比べて、「叫(命令して-させる)」と「让(許可して-させる)」は抽象度が低く、「命令する」、「許可する」といった実質的な意味内容がまだ残っていると考えられる。また、「强迫(無理やりにさせる)」類の動詞が兼語式という特定の構文の中で、二義的に「命じて-させる」、「頼んで-してもらう」といった使役の意味を派生し、結果的に「叫/让」といった使役標識として機能するものと同じような使役表現と見なすことができる(加納他 1994:92)。よって、中国語の通常の使用受動文では、指示・許容類は強制類と同じ事象構造を表していると考えられる。

まず、指示の意味を表す使役受動文(79)を考察してみよう。

(79) 昨晚，她 被 叫 到 了 派出所。

昨晚 彼女 受動 使役 行く 完了 派出所

(昨夜、彼女は交番に行かされた)

[例(71)再掲]<中国語の通常の完全形式型 指示>

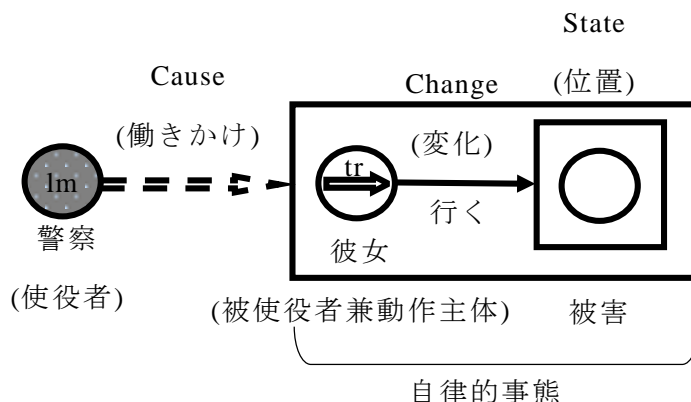


図 5-12 中国語における通常の使役受動構文の事象構造(指示類)

(79)は、警察と市民という人間関係から、使役者である「警察」が被使役者「彼女」に「交番へ来るよう指示する」といった間接的なエネルギーを伝達し、被使役者の「彼女」はその指示に当然のこととして従った、という典型的な使役事態を表している。使役者と自律的事態との間には、「引き起こす」といった使役的關係が存在し、「警察」が来るよう指示したため、「彼女が交番へ行った」という自律的事態が生じたのである。概念化者である話者は影響を受ける側、つまり被使役者である「彼女」に注視し、この事態全体を主語にとって好ましくないものと捉え、この事態の全体を述べている。つまり、指示類は強制類と異なり、使役者は被使役者の意図に反して強制的にある行為をさせるのではなく、ただ指示して被使役者がそれを当然のこととしてする。

また、許容の意味を表す使役受動文(80)を分析する。

(80)他们 请求 进去 参观， 立刻 被 让 进 客厅。

彼ら 願う 入っていく 見学する すぐに 受動 使役 入る 客間

(中を見学させていただくようお願いしたら、すぐさまに客間に案内されてしまった)

[例(64)再掲]<中国語の通常の完全形式型 許容>

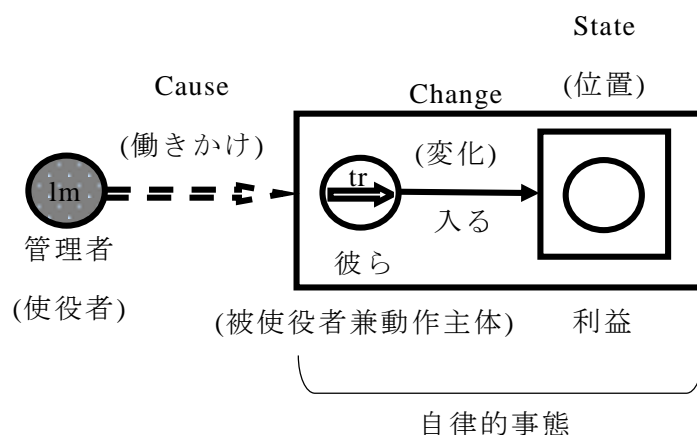


図 5-13 中国語における通常の使役受動構文の事象構造(許容類)

図 5-12、図 5-13 からわかるように、(80)は(79)と同様に典型的な使役事態を表すが、両者は使役者の自律的事態に関与する仕方が異なる。つまり、(79)は指示の形、(80)は許容の形で関わる。具体的に言えば、(80)は、管理者と見学者という人間関係から、使役者である「管理者」は被使役者の「彼ら」が中を見学したかったのを許容した、といった間接的なエネルギーを伝達し、被使役者の「彼ら」は希望どおりにある行為を行った、という典型的な使役事態を表している。使役者と自律的事態との間には、「引き起こす」といった使役的關係が存在し、管理者が許可・承認したため、「彼らが客間に入った」という自律的事態が生じたのである。概念化者である話者は影響を受ける側、つまり被使役者である「彼ら」に注視し、この事態全体を主語にとって好ましいものと捉え、この事態の全体を述べている。このように、許容類は強制類と反して、使役者は被使役者の意図に反して強制的にある行為をさせるのではなく、被使役者の希望に沿ってある行為をさせるのである。

以上論述した事象構造、図 5-12、図 5-13 をもとに、使役受動事態を捉える際、中国語の使役受動構文の完全形式型、つまり指示・許容類は、通常の短縮形式型、強制・原因類と比較して事態把握における特徴を表 5-2 でまとめる。

表 5-2 中国語における通常の使役受動構文の事態把握

	短縮形式型		完全形式型
	強制類	原因類	指示・許容類
事象構造	使役事態	使役事態	使役事態
ベース	典型的な他動関係	典型的・拡張的な他動関係	典型的な他動関係
視点人物	被使役者	被使役者	被使役者
視座	事態外	事態外	事態外
際立ち	事態の一部	事態全体	事態全体

まず、共通点に関しては、中国語における通常の使役受動構文の三種類はいずれもある参加者(事態参加者を含む)の間接的影響によってもう一つの参加者に位置変化・状態変化が起こる、という二つの参加者を含む使役事態を、事態外から被使役者を視点人物として捉えることを表す。

また、相違点に関しては、次の二点が挙げられる。

第一に、ベースとなる事態が異なる。強制類と指示・許容類は、使役者が有情物人間に限るため、典型的な他動関係であるのに対し、原因類は、モノでもコトでも使役者になるので、典型的な他動関係のみならず、拡張的な他動関係も可能である。

第二に、際立ちの面では、原因類と指示・許容類は当該使役事態の全体がプロファイルされるが、強制類はその一部だけがプロファイルされ、他の部分は背景化される。

要するに、中国語における通常の使役受動構文の三種類は使役受動事態を解釈する際、視点人物と視座との二点で共通し、プロトタイプの他動関係と拡張的な他動関係のどちらをベースとするか、事態全体と事態の一部のどちらに焦点をおくかといった点で異なる。

#### 5.4.4 まとめ

以上、日中語の使役受動構文の事態把握における異同点を、事態認知モデルによって表すことを試みた。上に述べてきた内容を以下のようにまとめることができる。

- 1) 日中語の使役受動構文は、強制類、原因類及び指示・許容類のいずれもある参加者(事態参加者を含む)の間接的な影響によってもう一つの参加者に位置・状態変化が起こ

る、という二つの参与者を含む使役事態を、事態外から被使役者を視点人物として捉えることを表す。

- 2) 強制類に関しては、日中語の三つのタイプはいずれも典型的な他動関係をベースとするが、際立ちの面においては異なる。日本語は使役事態の全体をプロファイルするのに対し、中国語は、通常と新型はともに使役事態の一部しかプロファイルしない。
- 3) 原因類においては、日中語の三つのタイプはいずれも典型的な他動関係または拡張的な他動関係をベースとするが、際立ちの面においては異なる。日本語と中国語の通常は事態全体をプロファイルするのに対し、中国語の新型は使役事態の一部のみをプロファイルする。
- 4) 中国語における通常の使用受動構文に特有である指示・許容類に関しては、まず中国語の短縮形式型である強制類と原因類に比べて、強制類と同様に典型的な他動関係をベースとするが、事態の一部ではなく、原因類と同じように、事態全体をプロファイルする。また、日本語の使用受動構文の強制類と原因類と比較して、指示・許容類は日本語の強制類と同様、典型的な他動関係をベースとし、使役事態の全体をプロファイルする。典型的他動関係のみならず、拡張的な他動関係をもベースとするという点で、指示・許容類は日本語の原因類と異なる。

次節では、日中対訳コーパスから収集したデータをもとに、日本語と中国語の通常の使用受動文とそれに対応する中国語・日本語表現を対照することによって、使用受動事態に関する事態把握における日中語母語話者の相違点を解明する。

## 5.5 対訳データによる日中語の使用受動構文の対応関係

前述したように、受動構文に関する日中対照研究では、対訳資料によるものとして、中島(2007,2012)、凌蓉(2005)が挙げられる。それらはいずれも事態把握と関連せず、単に日中語の受動構文の構文的特徴を検討しただけである。また、問題点として、本論文での中国語の使用受動構文(例:被感动(感動させられる))に関する分析は極めて少ない上に、日本語の使用受動構文は考察の対象から除外されたということも挙げられる。

そこで、本節は、日中対訳コーパスから収集した例文をデータとし、日本語の使用受動文とその中国語訳、及び中国語の通常の使用受動文とその日本語訳はどのように対応して

いるか、といった構文的特徴を分析した上で、使役受動事態に関する事態把握における日中語母語話者の相違を明らかにする。

### 5.5.1 日本語の使役受動文とその中国語訳

まず、日中対訳コーパスからとった日本語の使役受動文とその中国語訳との対応関係を下表に挙げておく。なお、全体に占める割合(%)の数値は小数点第二位以下四捨五入とする。

表 5-3 日本語の使役受動文に対応する中国語訳(365)

中訳	受動文(55/15.1%)				非受動文(299/81.9%)				非対応 (11/3%)
	直接	間接		使役受動	能動文		使役文	処置文	
		持ち主	第三者		自動詞文	他動詞文			
数	33	1	1	20	50	201	46	2	11
%	9%	0.3%	0.3%	5.5%	13.7%	55.1%	12.6%	0.5%	3%

表 5-3 を見ると、日本語の使役受動文に対応する中国語の使役受動文の比率はわずか 5.5%であり、直接受動文ほど高くなく、能動文や使役文の比率と比べて、大幅に下回っていることがわかる。言い換えれば、日本語の使役受動文の半分以上は中国語の通常の使役受動文ではなく、能動文、特に他動詞文で表現するのである。

#### 1) 受動文

日本語の使役受動文 365 例のうち、受動文は 55 例、15.1%を占めている。受動文のうち、直接受動文が 33 例、9%、使役受動文が 20 例、5.5%、間接受動文は 2 例、0.6%と極めて少ない。

第 2 章で述べたように、受動とは影響を受ける参加者に焦点を置き、それをもっとも際立つ要素(tr)として選択し、その参加者に生じた変化過程または結果状態を捉える認知的営みのことである。よって、日本語の使役受動文 365 例のうち、中国語では受動文と訳されるものは 55 例、15.1%を占めているということは、中国語訳文においても、概念化者である話者が影響を受ける参加者の視点から、当該使役事態を述べるという把握を行うものは日本語原文の六分の一にも達しないことを表す。



### 1-1)直接受動文

日本語の使役受動文が中国語の直接受動文に対応するのは主に以下の五つのタイプに分ける。

第一に、自動詞であれ、他動詞であれ、それらによる日本語の使役受動文はほとんど、「強迫(強制する)/吩咐(言いつける)/派(任命する)/領(連れる)」などの使役性を含意する他動詞に元の自動詞や他動詞が後続するという使役兼語形式、つまり「被+使役 V1+V2」で表現する。

(81)土間へ入ると、しんと寒くて、なにも見えないでいるうちに、梯子を登らせられた。

(一走进门口泥土地的房间，就有一阵彻骨的空气，幽暗得什么也看不见，就被领上了楼梯)

[対訳 雪国]

(82)これが為め渠はいつも運命の圏外に立って苦しい味を嘗めさせられるが、世間からは正しい人、信頼するに足る人と信じられている。

(为此，他总是站在命运的圏外，被迫尝够了苦涩的滋味，但人们却因此而认为他是正直的人，是足可信赖的人)

[対訳 布団]

(81)は「登る」という自動詞、(82)は「嘗める」という他動詞による日本語の使役受動表現である。それらは、中国語ではそれぞれ、「被(受動標識)+領(連れる)+上(登る)」、「被(受動標識)+迫(強迫する)+尝(嘗める)」といった形式で表示する。つまり、原文の述語動詞に対応する中国語の動詞は直接受動文で結果の意味を表す結果補語になる。

第二に、日本語の使役受動文は、中国語で「弄(する)」という他の動詞を代用する動詞(以下、仮に「代動詞」と呼ぶ)に元の動詞が結果補語として後続するという動補構造<sup>52</sup>、つまり「被+代動詞 V1+得+結果 V2」で表現する。

<sup>52</sup> 動補構造とは「動詞述語+補語」という構造を取るフレーズのことを指す。中国語では、補語は数多く存在し、一般的に「結果補語」、「方向補語」、「可能補語」、「介詞フレーズ補語」、「程度補語」、「様態補語」及び「数量補語」といった類が挙げられる(刘月华他 1991、侯精一他 2001)。

(83) 小さいうちは好く喧嘩をして、年の少ない私の方がいつでも泣かされた。

(小时候常常吵架，我年纪小，总是被弄得哭起来)

[対訳 ころろ]

(84) 長島二等兵は顔と両手を火傷して、下痢に悩まされておりました。

(长岛二等兵的脸和双手被烧伤，被痢疾弄得苦不堪言)

[対訳 黒い雨]

(83)の「泣かされた」、(84)の「悩まされておりました」という日本語の使役受動表現は、中国語において、「被(受動標識)+弄(代動詞)+得(助詞)+哭(泣く)」と「被(受動標識)+弄(代動詞)+得(助詞)+苦(悩む)」で表現する。このように、原文の述語動詞に対応する中国語の動詞は直接受動文で結果の意味を表す結果補語になる。

第三に、上に挙げた使役動詞や代動詞の代わりに、日本語の使役受動文は、中国語である具体的な意味を有する他動詞に元の動詞を結果補語として接続するという動補構造、つまり「被+V1+(得+)結果 V2」で表現する。

(85) 喧嘩をして、泣いたり、泣かされたりしながら、自己主張、防衛方法、かけひき、妥協の仕方などをおぼえていからです。

(打架时，或自己哭了或被打哭了，这种反复可以使孩子们学会怎样具有独立见解，怎样防卫、怎样竞争又怎样妥协)

[対訳 ひとりっ子の上手な育て方]

(86) 必ずしも梶大助の言葉に動かされているわけではないが(後略)

(这未必是由于被梶大助说动了心(後略))

[対訳 あした来る人]

(85)-(86)の日本語原文及び中国語訳文を比べると、原文にただ使役の結果「泣いた」、「動いた」を表しているだけであるのに対し、訳文には、そのような使役の結果をそれぞれ「哭(泣く)」、「動(動く)」で表示した上で、それらの結果を引き起こした使役の行為も「打(殴る)」、「说(言う)」によって表現されている。したがって、このような中国語訳文は日本語原文より詳しく当該事態を述べていることが窺える。

第四に、非対格自動詞による日本語の使役受動文は、中国語において、それに対応する

他動詞による直接受動文、つまり「被+Vt(元の非対格 Vi に対応する)」で表現する。

(87)(前略)砂はいったん空中に吸い上げられ、再び落下しながら、風下にむかって移動させられるというわけだ。

((前略)但沙子却会一下子被吸上天空，又被抛回地面，迎着风被挪来挪去)

[対訳 砂の女]

(87)の「移動させられる」は、中国語では「移動する」に対応する他動詞「挪(動かす)」による直接受動表現で表されている。中国語の直接受動文では、「挪(動かす)」という他動詞に「来(て来る)」、「去(て行く)」という結果補語がついている。

第五に、非能格自動詞と他動詞による日本語の使役受動文のうち、中国語において、元の動詞と異なる他動詞による直接受動文、つまり「被+Vt(元の V と異なる)」という形式で表現するのも見られる。

(88)(前略)自分ひとりだけ置き去りにされ、呼んでも叫んでも、何の手応えの無いたそがれの秋の曠野に立たされているような、これまで味わった事のない凄愴の思いに襲われた。

((前略)而我象是黄昏时被孤独地遗弃在秋天旷野里，怎么呼喊都没有用，一种从未尝到过的凄愴感觉不由得涌上心头)

[対訳 斜陽]

(89)文芸戦線や戦旗の執筆者たち、左翼演劇の仲間はずべて牢獄を経験させられた。

(《文艺战线》和《战旗》的撰稿人，左翼戏剧界的同人统统都被投进了监狱)

[対訳 青春の蹉跎]

(88)の「秋の曠野に立たされている」を「被遗弃在秋天旷野里(直訳:秋の曠野に見捨てられた)」、(89)の「牢獄を経験させられた」を「被投进了监狱(直訳:監獄に入れられた)」と訳しているように、中国語において、「遗弃(見捨てる)」、「投(入れる)」といった他動詞はそれぞれ「立つ」という非能格自動詞、及び「経験する」という他動詞と異なる意味を表すが、「在秋天旷野里(直訳:秋の曠野にいる)」と「进了监狱(直訳:監獄に入った)」といった結

果補語と共に起ることによって、日本語原文と同様の意味を表すことができる。

### 1-2)間接受動文

日本語の使役受動文が中国語の持ち主受動文及び第三者受動文に対応する例はそれぞれ1例、合計2例しか見つからない。

(90)然し私は何時でも妻に心を惹かされました。

(但是，每次我都被妻夺去心魄)

[対訳 ころろ]

(91)まるで相撲の手か何かで、スポリと背負い投げを喰わされたようなもんですからね。

(就象在相扑时被对方用了什么招数扎扎实实地来了个大背拵似的)

[対訳 痴人の愛]

(90)の「妻に心を惹かされました」という持ち主の使役受動表現を「被妻夺去心魄(直訳:妻に心を奪い去られる)」という持ち主受動文、(91)の「背負い投げを喰わされた」を「被对方来了个大背拵(直訳:相手に背負い投げをされた)」という第三者受動文と対応する。中国語訳文では、(90)のように「去(去る)」、(91)のように「了(助詞)」という結果補語がつくのは一般的である。

### 1-3)使役受動文

上述したように、日本語の使役受動文は中国語の使役受動文と対応する場合もあり、計20例、5.5%を占めている。データでは、中国語の使役受動文に対応するのは、非対格自動詞による原因類の用法に限られる。

(92)僕がその洋画家のところに遊びに行ったのは、それは、さいしょはその洋画家の作品の特異なタッチと、その底に秘められた熱狂的なパッションに、酔わされたせいでありましたが(後略)

(我去那位画家家里玩，起初是被他作品的奇特画法和作品中蕴藏的狂热爱情所迷住)

[対訳 斜陽]

(93)このヒト、一度猫にひどい目にあわされたもんだから、猫が怖くって怖くってしようがないのよ。

(这小家伙，有一次给猫吓个半死，那以后就怕猫怕得什么似的)

[対訳 ノルウェイの森]

中国語の使役受動文に対応する例文 20 例のうち、(92)のように、心理・感情を表す自動詞によるものは 18 例、90%にも達している。(92)の「酔わされた」、(93)の「ひどい目にあわされた」はそれぞれ、中国語の「被(受動標識)+所(ところ 助詞<sup>53</sup>)+迷(迷う)+住(止まる)」、「给(受動標識)+吓(驚く)+个<sup>54</sup>(助詞「得」に等しい)+半死(今にも死にそうだ)」に対応する。このように、中国語の使役受動文も前述した直接受動文と同様、結果補語がつくのが一般的である。

## 2) 非受動文

日本語の使役受動文が中国語では非受動文として対応するものは 299 例、81.9%にも達している。そのうち、自動詞文が 50 例、13.7%、他動詞文は 201 例、55.1%、使役文は 46 例、12.6%、処置文は 2 例、0.5%を占めている。つまり、日本語の使役受動文はもっとも高い比率で中国語の他動詞文と対応している。

### 2-1) 能動文

#### 2-1-1) 自動詞文

自動詞能動文は使役受動文の表す使役事態のうち、その使役者(モノ・コトを含む)を背景として捨象し、ただ行為主体に起こる位置や状態変化といった結果状態を、行為主体の視点から述べるだけである。しかし、その使役事態における、背景化された使役者は前置詞句及び節で表すことができる。

(94)-(95)のように、日本語における強制類の使役受動文は、中国語では自動詞能動文に訳されている。

(94)自分で結婚したなら責任をもつ、いくら親でも他人の意志で結婚させられてはたまらないって。

(如果是自愿结婚，那自己负责。即使是父亲有令，也不能照别人的意志结婚)

[対訳 野火]

<sup>53</sup> 刘月华他(1988:286)によると、「所(ところ)」は構造助詞の一つであり、他動詞の前に用いられて「(名詞+)所+動詞」フレーズを構成する。

<sup>54</sup> 「个」について、詳しくは刘月华他(1988:504)を参照のこと。

(95)私は起ち上った。これが私が他者により、動かされ出した初めである。

(我站起身，这是我第一次在他人左右下行动)

[対訳 野火]

(94)では、「他人の意志で結婚させられる」が「照别人的意志结婚(他人の意志によって結婚する)」と訳し、(95)では、「他者により動かされる」が「在他人左右下行动(他人の左右によって動く)」と訳されている。「結婚(結婚する)」、「行动(動く)」という行為を表す非能格自動詞は、「照别人的意志(他人の意志で)」、「在他人左右下(他者により)」といった前置詞句と共に起ることによって、日本語の使役受動文と同じ事態を表している。

下記の(96)-(98)は日本語の原因類の使役受動文である。

(96)私は御嬢さんの事をKに打ち明けようと思立ってから、何遍齒搔ゆい不快に悩まされたか知れません。

(自从我企图把小姐的事和K说明以后，不知多少次因焦急不快而烦恼)

[対訳 ころろ]

(97)高柳一味の党派は、この風説に驚かされて、今更のように防禦を始めたとやら。

(高柳之流的党羽对此很惊慌，开始采取对策)

[対訳 破戒]

(98)不思議なもので、私は最初から浜田を憎む心はなかったのですが、こんな話をきかされて見ると、寧ろ同病相憐れむ一と、云うような気持にさせられました。

(说来奇怪，开始时对浜田那种憎恶化为乌有，听了他的这番话，倒不由得产生了一种同病相怜的心情)

[対訳 痴人の愛]

(96)-(97)はモノ使役者であるのに対し、(98)はコト使役者である。モノ使役者の場合、強制類と同様に、自動詞が前置詞句と共に起ることによって、日本語の使役受動文と同一の事態を表すことができる。例えば、(96)-(97)では「烦恼(悩む)」、「惊慌(驚く)」という心理・感情を表す非対格自動詞は、「因焦急不快(齒搔ゆい不快に)」、「对此(この風説に)」といった前置詞句と共に起ることによって、「齒搔ゆい不快に悩まされた」、「この風説に驚かされ

ていた」という事態を表している。一方、コト使役者の場合、使役者が前置詞句ではなく、節で表す。例えば、(98)は「こんな話をきかされて見る」ということがゆえに、「私が同病相憐れむ一と、云うような気持になった」という事態を表すが、その中国語訳は、「产生(生じる)」という非対格自動詞節が、「听了他的这番话(彼のこのような話を聞いた)」という節に後続することによって、日本語の使役受動文と同様の事態を表している。

### 2-1-2)他動詞文

対訳コーパスのデータでは、日本語の使役受動文が中国語の他動詞能動文に対応しているのは他動詞によるもののみならず、自動詞によるものもある。中国語の他動詞訳文には、原文の使役受動文の表す使役事態における使役者を捨象して、行為主体の行為または変化のみを述べる例文もあれば、使役者を主語とする例文もある。

(99)そのようなことを、わたしは羅先生といっしょに仕事をする中で考えさせられた。

(我在与罗先生一起工作的过程中思考了这些问题)

[対訳 日本戦後名詩百家集]

(100)私はつまりこの二つのもので歩かせられていた様なものです。

(总之，就仿佛是这两件事催促着我走路似的)

[対訳 こころ]

(99)は他動詞「考える」、(100)は自動詞「歩く」による日本語の使役受動文であるが、中国語ではそれぞれ被使役者、使役者を表す名詞(句)「わたし」、「この二つのもの」が主語に来る他動詞能動文になっている。5.3.2で述べたように、日本語において、知的活動を表す他動詞による使役受動文は、中国語には存在しない。対訳データからわかるように、そのような使役受動文は、中国語では(99)のように、思考・認知を表す他動詞による能動文で表現することはある。また、(100)のように使役者名詞が主語に来る他動詞訳文は、日本語の使役受動文とは同じ事態を二つの異なった視点から述べる関係にある。概念化者である話者の視点が使役者に置かれる表現が他動詞能動文、被使役者に視点を置く表現が使役受動文である。要するに、同じ使役受動事態であっても、原文の日本語は被使役者の視点から述べるのに対し、訳文の中国語は使役者の視点から表現するのである。

日本語の使役受動文は、自動詞でも、他動詞でも、あるいは意志動詞でも、非意志動詞

でも述語になる。その他動詞訳文は、原文の述語動詞との意味関係によって、以下四つのパターンに分けられる。

第一に、原文の動詞と訳文の動詞は「引き起こす」という使役関係にある。

(101)(前略)是非御嬢さんを専有したいという強烈な一念に動かされている私には、どうしてもそれが当然以上に見えたのです。

(但是定要独占小姐的强烈意念支配着的我，无论如何觉得那是超过“当然”的)

[対訳 ころろ]

(102)やあ、そう飲まされちゃ、空き腹だからこたえますなあ。

(哎呀，我还空着肚子呢，你这么灌，可受不了)

[対訳 痴人の愛]

(101)では、「動く」という自動詞を「支配(支配する)」という他動詞に訳しており、二つの動詞は、「私を支配する」ということが「私が動く」ということを引き起こすということから、使役関係にあると考えられる。同様に、(102)では、原文の他動詞「飲む」が訳文の他動詞「灌(飲ませる)」とは引き起こす関係にあると言える。

第二に、中国語の他動詞訳文は、日本語原文の動詞を使役の結果として、その前に使役の意味を有する他動詞が接続するものである。

(103)父親は県会議員をした人だけあって、言葉の抑揚頓挫が中々巧みであった。演説に慣れた田中も時々沈黙させられた。

(正因为父亲是县议会议员，所以巧妙地掌握了谈话的抑扬顿挫，致使惯于演说的田中，也只好保持沉默)

[対訳 布団]

(104)僕は倉庫の高い明りとりからしのび入ってくる淡い月の光に明るまされた黴と小動物の臭いのする湿っぽい空気を静かに呼吸しながら辛抱強く待っていた。

(淡淡的月光从仓库高处的亮窗里无声无息地泻进来，照亮了散发着霉菌和小动物气味的湿润的空气)

[対訳 飼育]



こういったタイプには、主に(103)のように意志的動詞によるものであるが、(104)のように非意志的動詞によるものもまれに見られる。(103)では、「沈黙させられた」を「致使(ならしめる)+沈黙(沈黙する)」と、「使役動詞+元の動詞」という形で表現している。一方、(104)では、「明るまされた」を「照(照らす)+亮(明るむ)」と、「普通の他動詞+元の動詞」という形で表現している。使役動詞であれ、普通の他動詞であれ、いずれも使役の意味を持つものである。

第三に、日本語原文の動詞と中国語訳文の動詞は、「話す/言う-聞く」、「勝つ-負ける」のように、正反対の視点関係にあるものである。

(105)時雄は姉の言葉として、妻から常に次のようなことを聞かされる。

(妻子常对时雄说起从姐姐那儿听到的有关芳子的事)

[対訳 布団]

(105)に示すように、日本語の「聞かされる」は中国語では、「说(言う)」と訳されており、「聞く」と「言う」は同じ事態を正反対の異なった視点から述べる関係にある。

第四には、日本語原文の他動詞は中国語の語彙的他動詞、例えば「受(被る)/挨(受ける)/遭(あう)」に対応する。

(106)神経質でやさしい、感受性が強く、心が動かされやすく、同情心が厚い。他人がどう思っているかなど、周囲の眼に敏感である。

(神经质，对人亲切，感情丰富，容易受感动，富于同情心，对周围很敏感)

[対訳 ひとりっ子の上手な育て方]

(107)一番呑込みが悪いらしく、幾度となく夫人に "No good" とどやしつけられ、鞭でピシリと喰わされます。

(他似乎学得最差，好几次让夫上冲他叫喊“NO good”，挨鞭子)

[対訳 痴人の愛]

(108)凡人なら、こんな屈辱的な目にあわされるとヤケになって酒でもあおり、まわりに不平不満をぶちまけるところだ。

(若是一般人，横遭如此屈辱定会自暴自弃，借酒发泄，或向周围人倾吐内心的不平和不满的)

(106)の「動かされる」、(107)の「喰わされます」及び(108)の「あわされる」は中国語ではそれぞれ「受(被る)+感动(動く)」、「挨(受ける)+鞭子(鞭)」、「遭(あう)+屈辱(屈辱)」と語彙的他動詞文に訳されている。

## 2-2)使役文

日本語の使役受動文が中国語では使役文として対応するのは容易に予測される。つまり、日中語は同じ使役受動事態を表すが、被使役者と使役者との二つの異なった視点から述べる。

対訳データでは、中国語訳の使役文は「使(-させる)」、「叫(命令して-させる)」、「让(許可して-させる)」、「令(-させる)」といった多様の使役標識によるものである。以下、主にいかなる動詞による日本語の使役受動文は、それぞれ中国語の「使」、「叫」、「让」及び「令」による使役文になるのかについて、考察を進めていく。

### 2-2-1)「使」使役文

前述したように、日本語の使役受動文 365 例のうち、中国語では使役文と訳されるものは 46 例、12.6%を占めている。このうち、その半分、23 例は「使」使役文である。そして、感情・心理及び生理状態を表す非対格自動詞による使役受動文が「使」使役文に対応するのは 15 例、65%にも達している。

(109)私はこういう事でよく先生から失望させられた。

(先生往往在这样的情况下，使我感到失望)

[対訳 ころろ]

(110)長い封建社会の因習の中で、人間性は窒息させられており(後略)

(在漫长的封建社会里，旧的传统使人性几乎窒息)

[対訳 近代作家入門]

(109)では、感情・心理を表す自動詞の使役受動表現「失望させられた」は「使(-させる)+失望(失望する)」、(110)では、生理的状态を表す自動詞の使役受動表現「窒息させられる」は「使(-させる)+窒息(窒息する)」と対応している。

また、接触や感情・心理、思考を表す他動詞による使役受動文は、中国語では「使」使

役文に対応するものは6例ある。

(111)私は彼等から受けた屈辱と損害を小供の時から今日まで背負わされている。

(他们使我从小时候直到现在，背负着他们加给我的屈辱和损害)

[対訳 ころろ]

(112)そうだなあと低い声で渋っています。私は又はと思わせられました。

(后来他小声咕嚕着：“是这样呵”。使我不觉一惊)

[対訳 ころろ]

(113)ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春の尽きるに間のない或る晩の事であった。

(使我突然回想起这件事的，是小阳春过后不久的某一天晚上的事)

[対訳 ころろ]

(111)では、接触を表す他動詞「背負う」による使役受動表現は「使(-させる)+背負(背負う)」、(112)では、感情・心理を表す使役受動表現「はつと思わせられました」「使(-させる)+惊(驚く)」、さらに(113)では、思考を表す他動詞「思い出す」による使役受動表現は「使(-させる)+回想(思い出す)」と表現されている。5.3.2で述べたように、思考・認知を意味する動詞は中国語では使役受動構文の述語動詞として用いられない。このような動詞による日本語の使役受動表現は(113)のように、使役文で表されることがある。

### 2-2-2)「让」使役文

原文の使役受動文が「让」使役文に訳されているのは16例ある。そのうち、(114)-(115)のように意志的他動詞や非能格自動詞によるものは10例、62.5%にも達している。

(114)私が子供のころ、田舎では夏になるとクサギの虫を売りに来る木樵がおりまして、私も虫封じのため食べさせられたことがありました。

(我小时候，在乡下，一到夏天就有砍柴的人来卖臭牡丹树的虫子。为了保佑我不闹病，也让我吃)

[対訳 黒い雨]

(115)(前略)黒柳さんの小学校一年生のとき、お宅のお嬢さんがいるとみんなに迷惑がかり、授業にならないからと退学させられるところから物語が始まっています。

(书的开头部分记述了黑柳女士小学一年级时，老师认为她在班上妨碍大家，搞得无法上课而让她退学的情况)

[対訳 ひとりっ子の上手な育て方]

(114)は「食べる」による使役受動表現であり、中国語では「让(するように言う)+吃(食べる)」と対応している。また、(115)は「退学する」による使役受動表現であり、中国語では「让(するように言う)+退学(退学する)」と訳されている。(114)-(115)の中国語訳では、「让(するように言う)」は「叫(命令して-させる)」と置き換えても意味が変わらないということから、「許可して-させる」という許可・許容の意味よりも、むしろ「命令して-させる」という指示の意味に近いということがわかる。つまり、意志動詞による「让」使役文は「叫(命令して-させる)」による指示使役文と連続体を成している。

一方、非意志動詞、特に感情・心理を表す非対格自動詞による使役受動文は訳文では、「让」使役文になっているものが3例ある。

(116)出鱈目にページを開き、その部分をひとしきり読むことを習慣にしていたが、ただの一度も失望させられることはなかった。

(信手翻开一页，读上一段，一次都没让我失望过)

[対訳 ノルウェイの森]

(116)の「失望させられる」は「让(~させる)+失望(失望する)」と対応している。(116)の中国語訳では、「让(~させる)」は「使(~させる)」と置き換えても意味が変わらないということから、「許可して~させる」という許可・許容の意味よりも、むしろ「~させる」という原因・誘発の意味に近いということがわかる。要するに、非意志動詞による「让」使役文は「使(~させる)」による原因使役文と連続体を成している。

以上、中国語の「让」使役文になっている例文のすべては、許可・許容の意味ではなく、指示、原因の意味を表しているということは、間接的に日本語の使役受動文には許容類の用法が存在しないということを示している。

### 2-2-3)「令」使役文

日中語の使役に関する対照研究では、そのほとんどは現代中国語における使役標識「使/令/叫/让」(牛顺心 2004、周红 2004)のうち、「使/叫/让」に限られ(楊凱榮 1989、張志軍

1994、潘宁 2013)、もっとも早く使役標識として用いられてきた「令」(牛顺心 2004)に言及しているもの(孫艶華 2001)は極めて少ない。しかし、対訳コーパスのデータでは、日本語の使役受動文は「令」使役文になっているものは4例ある。

(117)船尾ではためく星条旗に、「アメリカに来たんだなあ」という気分にさせられた。

(看着船尾猎猎作响的星条旗，一种身临美国的现实感令我激动不已)

[対訳 五体不満足]

(118)(前略)子どもたちの質問にはいつも驚かされる。というよりも、笑わされる。素朴  
というか、観点がおもしろい。

(孩子们的提问，总是出人意料，有的会令人感觉可笑却又诚恳实在。他们对问题的朴素  
的看法非常有意思)

[対訳 五体不満足]

(117)は「星条旗」が原因となり、「アメリカに来たんだなあ」という気分になったということを表すが、(118)は「子どもたちの質問」が原因となり、私が「笑う」ということになったということを表す。それぞれ中国語では、「令(～させる)+激动(感激する)」、「令(～させる)+笑(笑う)」と対応している。このように、(117)-(118)の中国語訳では、「令(～させる)」が「使(～させる)」と置き換えても意味に変わりがないということから、「令」は「使」とともに原因・誘発の意味を表すということがわかる。要するに、モノ・コトが使役者になる場合、「令」使役文は「使」による原因使役文と連続体を成している。

#### 2-2-4 「叫」使役文

最後に、日本語の使役受動文は中国語の「叫」使役文になっている例文を見てみよう。

(119)みんな村田銃もたされてます。鉄砲の掃除と、撃ち方をなろてます。

(都叫扛村田枪，学擦枪、射击)

[対訳 雁の寺]

(120)そこに入るとね、まずマルクスを読ませられるの。何ページから何ページまで読んでこいてね。

(刚一进去，就叫读进步书，喝令从第几页读到第几页)

[対訳 ノルウェイの森]

(119)の「もたされてます」は「叫(命令して～させる)+扛(持つ)」、(120)の「読ませられる」は「叫(命令して～させる)+读(読む)」と対応している。このように、日本語の強制類の使役受動文は、中国語では「叫」による指示使役文に対応することがある。

### 2-3)処置文

日中対訳コーパスのデータでは、日本語の使役受動文は中国語では、「把(握る)/将(つかむ)」<sup>55</sup>による処置文と対応するもの、2例も見られる。処置文は上述した使役文と同様に、使役受動文の表す使役受動事態を被使役者の視点ではなく、使役者の視点から述べる。

(121)尤もヒステリーを起されて、怪我でもさせられちゃ大変だけれど。

(不过歇斯底里发起来，把我弄伤可就糟了)

[対訳 痴人の愛]

(122)東京の近衛師団軍医部長という要職にあった鷗外は、小倉の第十二師団軍医部長に転任させられたという。

(听说鷗外原居东京近卫师团军医部长的要职，后不得不将他调离，任小仓第十二师团的军医部长)

[対訳 心の危機管理術]

(121)の「怪我をさせられる」は「把(処置標識)+弄(する)+伤(怪我をする)」と対応しているが、(122)の「転任させられた」は「将(処置標識)+调离(転任する)」と対応している。いずれも「怪我をする」、「転任する」という被使役者の側ではなく、「怪我をさせる」、「転任させる」という使役者の側から当該使役受動事態を述べている。

### 3) 非対応

日本語の使役受動の型として対応のない非対応は 11 例、3%と極めて少ない。そのなか、無対応のものは 4 例、1.1%、名詞などで表示するものは 7 例、1.9%である。

---

<sup>55</sup> 中国語では、「将」による処置文は、「把」による処置文と同様の意味を表すが、前者は主に書き言葉に使用されるのに対し、後者は主に話し言葉に用いられる。「把/将」という処置構文について、詳しくは王力(1958)を参照のこと。

(123)これは、彼をとりマーク B 社側の同僚のほとんどがすでに就職以来長年そこにおいて、社会的資本を蓄積しているのに対して、彼はゼロから出発しなければならないというハンディキャップを負わされるからである。否、ゼロというよりはマイナスの立場にたたされる。

(和他一道工作的同僚，都已在 B 公司工作多年，积累了大量的社会资本，而他必须从零开始，甚至还有更为不利的条件在等待他)

[対訳 タテ社会の人間関係]

(123)の「彼はゼロから出発しなければならないというハンディキャップを負わされる」は、中国語では「而他必须从零开始(彼はゼロから出発しなければならない)」と訳されているので、「負わされる」という使役受動表現に対応する表現がなく、無対応となっている。また、「マイナスの立場にたたされる」は「不利的条件在等待他(直訳:不利な条件が彼を待っている)」と意識されている。このように、日本語原文と中国語訳文の間には対応関係が存在するとは言えないので、非対応とする。

以上、日中対訳コーパスから収集した日本語の使役受動文とその中国語訳との対応関係を考察してきた。要点をまとめると、以下のようになる。

- 1) 日本語の使役受動文は、非対格自動詞による原因類の用法に限って中国語の使役受動文と対応する場合はあるが、ただ 20 例、5.5%に止まっている。
- 2) 同じ使役受動事態は日本語原文では、被使役者の視点から述べるのに対し、中国語訳文では、使役者の視点から述べる、つまり日中語は同一の使役受動事態を二つの異なった視点から捉える関係にあるものは 46 例、12.6%を占めている。
- 3) 中国語の訳文では、原文の表す使役受動事態の一部、つまり使役者を捨象した部分のみを、行為主体の視点から述べるのがもっとも一般的である。捨象された使役者は前置詞句や節などで表すことができるため、結局、中国語における元の動詞による能動文は原文である使役受動文と同じ程度、詳細に当該事態を表現することはできる。
- 4) 日本語の使役受動文が中国語で受動文と対応するものにおいて、結果補語がつくのは一般的である。

## 5.5.2 中国語の使役受動文とその日本語訳

日中対訳コーパスからとった中国語の使役受動文とその日本語訳との対応関係を下表に示す。

表 5-4 中国語の使役受動文に対応する日本語訳(235)

日 訳	受動文(66/28%)			非受動文(137/58.3%)			非対応 (32/13.6%)
	直接	間接	使役受動	能動文		使役文	
		持ち主		自動詞文	他動詞文		
数	43	10	13	113	21	3	32
%	18.3%	4.3%	5.5%	48.1%	8.9%	1.3%	13.6%

表 5-4 を見ると、前節で述べた日本語の使役受動文とその中国語訳との対応関係と同じようなことは、中国語の使役受動文とその日本語訳との対応関係にも言えることが明らかになる。すなわち、中国語の使役受動文に対応する日本語の使役受動文の比率は 5.5%に過ぎず、直接受動文ほど高くなく、能動文や使役文の比率と比べて、大幅に下回っているということである。換言すれば、中国語の使役受動文のほぼ半分は日本語の使役受動文ではなく、能動文、特に自動詞能動文で表現するのである。

### 1) 受動文

中国語の使役受動文 235 例のうち、受動文は 66 例、28.1%を占めている。受動文のうち、直接受動文が 43 例、18.3%、使役受動文が 13 例、5.5%、間接受動文は 10 例、4.3%と極めて少ない。

中国語の使役受動文 235 例のうち、日本語の受動文と訳されているものは 66 例、28.1%を占めているということは、日本語訳文においても、概念化者である話者が影響を受ける参加者の視点から、当該使役・他動事態を述べるという把握を行うものは中国語原文の約四分の一に過ぎないということを示す。

#### 1-1) 直接受動文

中国語の使役受動文 235 例のうち、許容類の用例は 1 例しかなく、残りの 234 例はすべて原因類になっている。(124)に示すように、こういった許容類の使役受動文は日本語では直接受動文と対応している。



(124)倪藻走进一个宽敞的、同样昏暗的客厅，他被让坐在一个不新的暗红色沙发上。应答了几句以后，史太太蹒跚地去给客人端茶，倪藻得以安静一下，打量着这间屋子。

(倪藻は広々とした、やはりほの暗い客間に入り、古びたエンジ色のソファに案内された。二、三言交わしてから、史太々がお茶を取りに立ったので、倪藻は気持のゆとりを取り戻し、部屋の中を見回した)

[対訳 活动変人形]

(124)の「被(受動標識)+让(使役標識)+坐(座る)」という使役受動表現は、日本語では「案内された」と直接受動文に対応している。このことは、日本語において、中国語の許容類に対応する使役受動文が存在しないということを表している。

一方、中国語における原因類の使役受動文は、日本語訳文ではどのように表現されているのであろうか。

まず、状態変化を表す動詞による中国語の使役受動文とその日本語訳を見てみよう。

(125)-(126)のように、このような使役受動文が日本語の直接受動文になっているのは 24 例もあり、55.8%にも達している。

(125)这是无疑的，敌人的第一、二、三、四次“围剿”不是实实在在地被我们粉碎了吗？

(これは疑いのないところである。敵の一回目、二回目、三回目、四回目の「包圍討伐」はまぎれもなせよくわれわれに粉碎されたのではないか)

[対訳 毛泽东选集第一卷]

(126)进步的国家或事物，如果力量不强，常有被大而退步的国家或事物所灭亡者。

((前略)進歩的な国または事物でも、力が強くなければ、大きくて退歩的な国または事物に滅ぼされることはよくある)

[対訳 毛泽东选集第二卷]

(125)の「被(受動標識)+粉碎(粉碎させる)」は「粉碎する」という、原文の動詞と同形のサ変他動詞による直接受動表現、(126)の「被(受動標識)+灭亡(滅びさせる)」は「滅ぼす」という、原文の動詞と同じ意味を表す普通の他動詞による直接受動表現と訳されている。つまり、中国語原文における非対格自動詞による使役動詞から構成される使役受動文は、

その自動詞に対応する他動詞が日本語に存在すれば、訳文では、それに対応する他動詞による直接受動文で表現されることはある。

次に、感情・心理を表す動詞による使役受動文が、日本語では直接受動文と対応するものは14例ある。例えば、以下の例文である。

(127)许宁被道静这种真挚的友好的态度感动了，他望着她，像对一个知心的朋友说起他心里的事(後略)

(道静の真挚な友情に打たれたかれは、古くからの知己に対するように、胸の中をうちあけはじめた)

[対訳 青春之歌]

(128)突然，我的额头上轻轻地印下一个吻。我被这突如其来的幸福惊呆了。

(不意に、額に軽い接吻の感触があった。おれは突如おとずれた幸福にあっけにとられた)

[対訳 人啊，人]

(127)は「道静の真挚、友好的な態度」というモノが原因となり、「彼が感動した」ということを表し、(128)は「額に軽い接吻の感触があった」というコト、あるいは「突如訪れた幸福」というモノが原因となり、「俺が驚いた」ということを意味する。前者は「打たれた」、後者は「あっけにとられた」と日本語の直接受動文で訳されている。

前述したとおり、(127)-(128)のような感情・心理を表す動詞による使役受動文は、日本語においても、中国語においても存在するが、それらは必ずしも一対一の関係ではない。(127)-(128)のような使役受動文は、日本語では直接受動文によって表現することもある。換言すれば、第1章のはじめに挙げた、日中語の使役受動文に関する誤用の例文を借りて言えば、中国語の「被感动(感動させられる)」は日本語の「感動させられる」と同じ意味を表すが、つねに「感動させられる」というわけではない。

以上、中国語では(125)-(128)のように、状態変化、心理・感情を表す動詞による使役受動文はその述語動詞に結果の意味がすでに含まれているため、結果補語がなくても成立する。

### 1-2)間接受動文

前述したように、中国語の使役受動文には、持ち主の使役受動文といった間接の使役受動文が存在する。以下のように分離不可能な所有関係にあるものは日本語では、持ち主の

受動文に訳されているのが2例ある。

(129)梅这许久都因为思念困居在家中的母亲和弟弟感到苦恼，此刻也被眼前的景色暂时分  
了心(後略)

(梅はずっと家にいる母や弟のことを心配していたが、この時ここでこの景色にしばらく心をとらわれて(後略))

[対訳 家]

(130)他想着，看看兴奋谈论的人群，看看刚刚被他们松过土的互助组的青苗地(後略)

(かれは思いにふけりながら、楽しそうに話し合っている人たちをながめ、いましがたその人たちの手で土をほぐされたばかりの、互助組の青々とした苗の植わっている畑を見た(後略))

[対訳 金光大道]

(129)の「梅(人名)+被(受動標識)+分(分かれ-させる)+了(完了)+心(心)」は「梅が心をとらわれた」、(130)の「地(畑)+被(受動標識)+松(柔らかくする)+过(経験 助詞)+土(土)」は「畑が土をほぐされた」と日本語では、持ち主の受動文に対応している。訳文の持ち主受動文は、原文の持ち主使役受動文と同様に、主語名詞と目的語名詞は、それぞれ「梅」と「心」という人間-身体関係、「畑」と「土」という全体-部分関係といった「不可譲渡」の所有関係にある。

また、中国語における直接使役受動文はその日本語訳との対応関係を考察していく。

(131)道静并没有理会迫在眉睫的凶险处境，却被郑德富这真挚的情谊感动了。

(道静は、眼前に迫っているわが身の危険も忘れ、鄭徳富のま心に胸をうたれた)

[対訳 青春之歌]

(132)当最后一个入眠的高大泉刚刚睡安稳，又被铃声惊醒。

(みんなが寝いって最後に眠りにはいった高大泉は、その寝入りばなをベルの音で覚まされた)

[対訳 金光大道]

(131)の「被(受動標識)+感动(感動させる)」は「胸をうたれた」、(132)の「被(受動標識)+

惊(びっくりする)+醒(覚める)」は「覚まされた」と、日本語の持ち主受動文に訳されている。訳文では、主語名詞と目的語名詞との間に、「道静」と「胸」という人間-身体関係、「高大泉」と「その寝入りばな」という主体-活動関係といった所有関係が存在するため、持ち主の受動文となっている。このように感情・心理を表す動詞による中国語の直接使役受動文が日本語の持ち主受動文に対応する例は6例ある。

次に、(133)-(134)のように、生理状態を表す使役動詞による直接使役受動文が日本語訳文では持ち主受動文に訳されている例は2例ある。

(133)她猜度着，忧虑着，也深深地对自己恼恨着——她不相信满屯的话，还以为宋郁彬和他的父亲不同，还以为他善良、仁慈、被家庭所累。

(かの女はあれこれ憶測し、心配し、同時に、満屯のことばを信用せず、宋郁彬は父親とは違う、かれは善良で、情深い人間だ、家庭に足をひっぱられているのだとばかり、思いこんでいたじぶんの馬鹿さかげんを、心から悔んでいた)

[対訳 青春之歌]

(134)爷爷和父亲赶着那只快要被屎憋死的小山羊赶到村子西头的高粱地里时，是墨水河大桥伏击战后第六天下午(後略)

(祖父と父が、尻の穴を塞がれて死にそうな小山羊を連れて村の西はずれの高粱畑にたどりついたのは、墨水河橋の待ち伏せから六日目の昼過ぎだった)

[対訳 紅高粱]

(133)の「被(受動標識)+家庭(家庭)+所(助詞)+累(疲れさせる)」は「家庭に足をひっぱられている」と訳され、(134)の「被(受動標識)+屎(くそ)+憋(つまらせる)+死(死ぬ)」は「尻の穴を塞がれて死にそう」と訳されている。原文の述語動詞「累(疲れさせる)」、「憋((息を)つまらせる)」はそれぞれ訳文では、それらと異なる意味を持つ、普通の他動詞「引っ張る」と「塞ぐ」に対応している。訳文では、主語名詞と目的語名詞は、「彼」と「足」、「小山羊」と「尻の穴」といった人間-身体的所有関係にあるので、持ち主受動文となっている。

### 1-3)使役受動文

中国語原文において、日中対訳コーパスでは一つしか見られない強制類の使役受動文は日本語の使役受動文になっている。

(135) 东大同学刚刚游行回来，就被集合去听学校当局的堂皇的训话(後略)

(東北大の学生は、デモから帰ってくると、すぐに集合させられて、学校当局の、もったいぶった訓話を聞かされた)

[対訳 青春之歌]

(135)は、デモから帰ってきたばかりの学生はすぐに集合したくなかったのに、学校や先生が無理やりにそうさせたため、やむをえず集合したということを表す。原文の「被集合」は「集合させられた」と訳されている。このように、中国語において、移動を表す非能格自動詞による使役受動文は日本語では、それに対応する非能格自動詞の使役受動文になるのはめったにない。

また、中国語において感情・心理を表す動詞による原因類の使役受動文は、日本語では容易に元の非対格自動詞による使役受動文に訳される。例えば、以下のようなものである。

(136) 道静被这女孩子的纯真热情深深感动着。

(この女の子の純真な熱情に、道静は深く感動させられた)

[対訳 青春之歌]

(137) 她还不能够明白鸣凤为什么要这样伤心。但是她已经被这个少女的哭声感动了。

(彼女は鳴鳳がなぜこんなに悲しんでいるのかわからなかったが、この少女の泣き声に心を動かされて(後略))

[対訳 家]

(136)-(137)の「被(受動標識)+感动(感動させる)」は、日本語ではそれぞれ「感動させられた」、「心を動かされた」と訳されている。つまり、中国語の「被感动」は、(136)のように「感動させられた」という直接の使役受動文と対応する場合もあれば、(137)のように「心を動かされた」という間接の使役受動文に対応する場合もある。

## 2) 非受動文

中国語の使役受動文が日本語では非受動文として対応するものは 137 例、58.3%に達している。そのうち、自動詞文が 113 例、48.1%、他動詞文は 21 例、8.9%、使役文は 3 例、1.3%を占めている。つまり、中国語の使役受動文はもっとも高い比率で日本語の自動詞文と対応している。

## 2-1)能動文

### 2-1-1)自動詞文

自動詞文は使役受動文の表す使役事態のうち、その使役者(モノ・コトを含む)を背景として捨象し、ただ行為主体に起こる位置や状態変化といった結果状態を、行為主体の視点から述べるだけである。しかし、その使役事態における、背景化された使役者は二名詞句、及び節で表すことができる。

中国語において、感情・心理を表す非対格自動詞による使役動詞(例:感动(感動させる)、吓(びっくりさせる)、兴奋(興奮させる)など)から構成された中国語の使役受動文は、原文の非対格自動詞に対応する自動詞(例:感動する、びっくりする、興奮するなど)が日本語に存在するため、その自動詞による能動文と訳される傾向が強い。日中対訳コーパスからとったデータでは、このような例は 88 例もある。例えば、以下のような例文である。

(138)小女儿继芳也被府里的闹烘烘的空气所兴奋，到这时光还不肯去睡觉。

(娘の継芳も、屋敷のただならぬ空気に興奮したまだ寝ようとしなかった)

[対訳 霜叶红似二月花]

(139)李槐英在人群中忽然用激昂的尖声高喊起来，许多的同学都被感动了。

(その李槐英が、人群れの中で、激昂したかん高い声で、こう叫びだしたとき、学生は感動した)

[対訳 青春之歌]

(138)の「被(受動標識)+兴奋(興奮させる)」は「興奮した」、(139)の「被(受動標識)+感动(感動させる)」は「感動した」と対応している。そのうち、(138)では背景化された使役者(無情物を含む)は二格名詞句で表すのに対し、(139)では節で表現している。

また、中国語において下記(140)-(142)のように、位置・状態(生理的状态を含む)変化を表す使役動詞による使役受動文は日本語ではそれに対応する自動詞が存在するため、その自動詞による能動文と訳されるのが一般的である。

(140)地下室的门“咣当”一声被摔上了。随着一阵踢踢沓沓的脚步声，通往上边楼梯的门也被关上了，周围陷入一片死一般的沉寂。

(地下室の扉がバタンと叩きつけられ、パタパタと足音が階段を駆け上がり、階上の

扉も閉まると、あたりは死んだように静まり返っ)

[対訳 轮椅上の夢]

(141)(前略)彻夜未眠的黎江靠着一根木杆坐下来，捶着酸胀的双腿，他这才发现，内衣早被冷汗湿透了几回。

((前略)一睡もできなかつた黎江は囲いの杭に寄りかかって座りこみ、しびれてはれあがった足をたたいた。その時、ようやく彼は、冷や汗で下着がびっしょりぬれているのに気がついて)

[対訳 轮椅上の夢]

(142)祥子象被一口风噎住，往下连咽了好几口气。

(祥子はぐとつまり、こみあげる怒りをつづけざまに飲みくだした)

[対訳 骆驼祥子]

(140)は位置変化を表す使役動詞「关(閉まらせる)」による使役受動文であるが、(141)は物理的状态変化を表す使役動詞「湿(ぬれさせる)」、(142)は生理的状态変化を表す使役動詞「噎(詰まらせる)」による使役受動文である。原文の使役動詞「关/湿/噎」に対応する非対格自動詞「閉まる/ぬれる/詰まる」が日本語に存在するので、訳文では、それらの非対格自動詞による能動文になっている。

## 2-1-2)他動詞文

対訳コーパスのデータでは、中国語において、他動詞による使役受動文が日本語の他動詞能動文に対応しているものは21例ある。これらの例文は、原文と訳文の述語動詞の意味関係によって三つのタイプに分けられる。

第一には、日本語訳文の他動詞は中国語原文の使役動詞と同じ意味を有するものである。このような例文は7例ある。例えば、以下のような例文が挙げられる。

(143)(前略)但是，在这寂静的黎明时分，在这战斗的烽火前面，她们却仿佛第一次听见一般，心头忍不住被撼动了！

(けれども、この静寂な黎明前の空のもとで、戦闘の烽火をまえにして聞くこの歌声は、まるで初めて耳にするように、ふたりの心を強くゆさぶった！)

[対訳 青春之歌]

(144)一九三八年进行了三次反“扫荡”作战，其中尤以敌人调兵会攻徐州之前九路围攻晋东

南之被粉碎为最激烈(後略)

(一九三八年には反「掃討」作戦を三回おこなった。なかで、徐州集中攻撃直前の敵軍による九つのル-トからの山西省東南部包圍作戦を粉碎した戦闘がもっとも激しかった)

[対訳 邓小平文选第一卷]

(143)では、「被(受動標識)+撼动(感動させる)」は「感動させられた」という感情・心理状態の変化を表すが、中国語の使役受動文は被使役者「彼女」の視点から述べているのに対し、日本語の他動詞能動文は使役者の役割を担う行為主体「歌声」の視点から当該事態を述べている。こういった原文と訳文における視点の違いということは、(144)にもあてはまる。すなわち、(144)では、「被(受動標識)+粉碎(粉碎させる)」と「粉碎した」はともに「砕けさせられた」という状態変化を表すが、中国語の使役受動文は被使役者「包圍作戦」の視点から述べているのに対し、日本語の他動詞能動文は動作主体「我々」の視点から当該事態を述べている。

第二には、日本語訳文の他動詞は中国語原文の使役動詞と異なる意味を有する普通の他動詞である。このような例文はもっとも多く、計 21 例のうち、13 例もある。

(145)泪水在他布满皱纹的脸上横流，他的一只袄袖子都被泪水湿得发亮了(後略)

(しわだらけの顔をべとべとに涙でぬらして、その涙をぬぐう裕の袖も光っている)

[対訳 轮椅上的梦]

(145)の「被(受動標識)+湿(ぬれ-させる)」は「涙をぬぐう」と、他動詞文に対応しており、訳文の他動詞は原文の述語動詞と異なる意味を表す。

ここで、原文と訳文における主語となる名詞句の関係について、一点指摘する。

上述したタイプの場合、原文と訳文における主語となる名詞句は異なり、それは当該使役受動事態のうち、原文の使役受動文は被使役者の視点から述べるのに対し、訳文の他動詞能動文は使役者の視点から述べる、という事態把握の相違を表している。一方、このタイプの場合、上述したタイプと違って、原文と訳文における主語となる名詞句は同じであり、これは原文と訳文は同じ視点から当該使役受動事態を述べる、という事態把握を表しているのではない。訳文の他動詞は原文の使役動詞と異なる意味を有する普通の他動詞で



あるため、原文の表す使役受動事態のうち、使役者を捨象した部分、つまり影響を受けた参加者の動作の実行のみをその動作主体の視点から述べるが、背景化された使役者は、(145)のようにヲ格名詞句で表すことがある。

第三には、中国語の使役動詞は日本語訳文では、「受ける」という語彙的受動動詞に対応している。このような例文は1例しか見られない。

(146)美变成了丑，爱变成了亵渎。我被震惊了，也沉默了。

(美が醜に変わり、愛が冒瀆に変わった。おれはショックを受け、沈黙した)

[対訳 人啊，人]

(146)の「被(受動標識)+震惊(驚かせる)」は日本語では「ショックを受けた」と訳されている。語彙的受動動詞が当該語彙、つまり他動詞によって受動の意味を表すため、日本語の他動詞文は原文と同様に、影響を受ける参加者の視点から、当該事態を述べている。よって、原文と訳文における主語となる名詞句は同じものになっているのである。

## 2-2)使役文

中国語の使役受動文が日本語では使役文として対応するのは容易に予測される。つまり、日中語は同じ使役受動事態を表すが、被使役者と使役者との二つの異なった視点から述べる。しかし、日中対訳コーパスのデータでは、中国語の使役受動文が日本語の使役文になっているものは3例しかなく、極めて少ない。

(147)她被信中洋溢着温柔情意和热烈而又含蓄的告白深深感动了，年轻的心沉浸在爱情的喜悦中，忘掉了一天的疲劳。

(文面にあふれる優しい思いやりと、熱烈で深みのある告白は、かの女を感動させずにはおかなかった)

[対訳 青春之歌]

(148)她被一种新奇的神秘似的感觉兴奋得许久都不能安静下来。

(もの珍らしさと神秘的な感じが、彼女を興奮させ、いつまでもおちつかせなかった)

[対訳 青春之歌]

(149)她的嗓子突然被噎住了，成串的泪水滴落到捏在手里的糖块上。

(彼女は急にのどをつまらせ、アメを握りしめた拳の上に涙がポロポロしたたった)

(147)の「被(受動標識)+感动(感動させる)」は「感動させた」、(148)の「被(受動標識)+兴奋(興奮させる)」は「興奮させた」、そして(149)の「被(受動標識)+噎(つまさせる)」は「つまらせた」と対応している。つまり、中国語原文は被使役者の視点から当該事態を述べるのに対し、日本語訳文はそれと反して、使役者の視点から述べる。

以上、日中対訳コーパスから収集した中国語の使役受動文とその日本語訳との対応関係を考察してきた。要点をまとめると、以下のようになる。

第一に、中国語の使役受動文は、非対格自動詞による使役動詞から構成される原因類、及び意志動詞による強制類の用法(強制類の例文は一つしかない)が日本語の使役受動文と対応する場合はあるが、ただ 13 例、5.5%に止まっている。

第二に、非対格自動詞による使役動詞から構成される原因類が中国語の使役受動文 235 例のうち、強制類の 1 例及び指示・許容類の 1 例を除外し、計 233 例、99%にも達している。このような原因類の場合、同じ使役受動事態は中国語原文では、被使役者の視点から述べるのに対し、日本語訳文では、使役者の視点から述べる、つまり原文使役受動文-訳文使役文といった関係にある例文は 3 例にすぎない。

第三に、中国語の原因類の使役受動文は日本語の訳文では、原文の表す使役受動事態の一部、つまり使役者を捨象した部分のみを、行為主体の視点から述べるのがもっとも一般的である。捨象された使役者は二格名詞句や節などで表すことができるため、結局、日本語における自動詞能動文は原文である使役受動文と同じ程度、詳細に当該事態を表現することはできる。

### 5.5.3 まとめ

以上、日中対訳コーパスから収集した日中語の使役受動文とそれらの中国語・日本語訳との対応関係を考察してきた。要点をまとめると、次のようになる。

- 1) 感情・心理及び状態変化を表す動詞による原因類の用法において、日中語の使役受動構文は対応する場合があるが、それぞれの例文総数に対して比率が低く、ともに 5.5%に止まっている。

- 2) 同じ使役受動事態は原文では、被使役者の視点から述べるのに対し、訳文では、使役者の視点から述べる、つまり日中語は同一の使役受動事態を二つの異なった視点から捉える関係にあるものは、日本語原文の場合は46例、12.6%を占めているが、中国語原文の場合はただ3例、1.3%に止まっている。
- 3) 訳文では、原文の表す使役受動事態の一部、つまり使役者を捨象した部分のみを、行為主体の視点から述べるのがもっとも一般的である。捨象された使役者は、中国語訳文の場合は、前置詞句や節など、日本語訳文の場合は二格名詞句や節などで表すことができるため、結局、それぞれ中国語と日本語の訳文における自・他動詞による能動文は、視点が異なるものの、原文である使役受動文と同じ程度、詳細に当該事態を表現することはできる。
- 4) 日中語の使役受動文はともにそれぞれの訳文では、能動文になっているのが一般的であるが、日本語の使役受動文が中国語の他動詞能動文に対応しているのはもっとも多いのに対し、中国語の使役受動文が日本語の自動詞能動文に対応しているのはもっとも多い。換言すれば、原文では当該使役受動事態の全体を述べている一方で、訳文では当該使役受動事態の一部しか述べていない。しかしながら、日本語は自動詞文が多用されるのに対し、中国語は他動詞文が多用されるということである。これは、つまり日中語母語話者は行為連鎖の末尾と先頭とのいずれかを際立つ要素とする選択の傾向を表す。すなわち、日本語母語話者は行為連鎖の末尾にある参与者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にあるが、中国語母語話者は行為連鎖の先頭にある参与者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にある。
- 5) 日本語の使役受動文が中国語で受動文と対応するものには、結果補語がつくのは一般的である。

## 5.6 おわりに

本章では、使役受動事態を表す日中語の三構文、つまり日本語の使役受動構文、中国語の通常の使役受動構文及び新型の使役受動構文について、それぞれの構文的特徴及び事態把握における異同点を考察した。その結果は、以下のようにまとめられる。

- 1) 言語データを考察した結果、中国語は使役受動文を許容しない、または中国語に日

本語の使役受動文に対応する文型はないといった定説には問題があるということがわかった。つまり、文法的振る舞い及び意味において、日本語の使役受動文に対応する文型は中国語に存在していると本論文は主張する。

- 2) 形式的特徴においては、中国語では、日本語のように使役形式と受動形式の両方を備えた完全形式型の使役受動文は極めて少ないが、存在しないわけではない。一方、受動形式のみによって、使役受動の意味を表す、短縮形式型の通常の使役受動文及び新型の使役受動文のほうが一般的である。このような形式的特徴における日中語の相違は、むしろ日中語の属する言語類型によるものであると考えられる。すなわち、日本語は膠着語であり、述語の後にさまざまな形態素をつけることによって文法的な意味を表す。よって、中国語のように、受動形式のみで使役受動の意味を表すことはできない。一方、中国語は孤立語であり、形態変化を伴う活用を持たず、機能語と語順によって文法的関係を示し、文法が「意合法」を主とし、文法的形式にとらわれない。ゆえに、受動形式しか伴わないものは、使役形式と受動形式両方を伴うものと同様に、使役受動の意味を表すことができる。さらに、日本語の使役受動は動詞に限るという制限もなくなり、動詞のみならず、形容詞及び名詞の使役受動文もできるのである。
- 3) 意味的特徴に関しては、中国語の使役受動構文において、日本語と同様に、直接と間接に二分することができ、強制と原因の意味を表し、使役行為とその結果の両方が明示されなければならないものは存在する。一方、日本語に見当たらない用法、すなわち、完全形式型の持つ指示・許容類の用法、及び結果だけ明示されればよいもの、つまり短縮形式型と新型の用法も見られる。そのうち、特に指示・許容類の用法が中国語の使役受動文に特有のもののように見受けられる。日本語に比べて、中国語の使役受動構文は通常であろう、新型であろう、使役事態のうち、原因事態が表されなくてもよいが、結果事態が明示されなければならない、という特徴を有する。
- 4) 位置・状態変化を意味する非対格自動詞(例:移動-移動する、発展-発展する、感動-感動する)による他動詞の代用形式(例:移動-移動させる、発展-発展させる、感動-感動させる)においては、日中語の間に明らかな相違が見られる。つまり日本語は使役形式を持つが、中国語は使役形式が現れず、使役の意味が動詞の意味として語彙化されている、ということである。このような形式的特徴における日中語の相違も日中

語の属する言語類型によるものであると考えられる。

- 5) 事態把握において、まず強制類では、日中語の使役受動構文はいずれも典型的他動関係をベースとするが、際立ちの面で異なる。日本語は当該事態の全体をプロファイルするのに対し、中国語は、通常であれ、新型であれ、いずれも日本語と異なり、当該事態の一部のみをプロファイルする。次に、原因類では、日中語の使役受動構文はいずれも典型的・拡張的他動関係をベースとするが、焦点化においては異なる。日本語と中国語の通常は当該事態の全体をプロファイルするのに対し、中国語の新型は、それと異なり、当該事態の一部しかプロファイルしない。さらに、日本語にない、中国語特有の指示・許容類では、日本語の使役受動構文の強制類と同様に、典型的他動関係をベースとし、事態全体をプロファイルする。
- 6) 日中対訳コーパスから収集した日中(通常のみ)語の使役受動文とそれらの中国語・日本語訳との対応関係を考察することによって、原因類の用法において、その事態把握の仕方が同じであるため、日中語の使役受動構文は低い比率で対応する。両言語の使役受動文はともにそれぞれの訳文では、能動文になっているのが一般的であるが、日本語は自動詞文、中国語は他動詞文が多用される、ということが明らかになった。このことは、日中語母語話者は同一事態に対する把握の仕方の相違、つまり日本語母語話者は行為連鎖の末尾にある参与者、中国語母語話者は行為連鎖の先頭にある参与者をもっとも際立つ要素とする選択が異なる、ということの一つの表れとなる。

また、以上の考察によって、使役受動構文はプロトタイプである直接受動構文からの拡張であると見なすことができ、その拡張は事態把握のレベルで動機付けられている、ということがわかった。事態把握のレベルで直接受動構文から使役受動構文へと拡張する動機付けにおいては、日中語はともに使役・影響が直接的なものから間接的なものへと拡張することであると考えられる。日中語において、直接受動構文から使役受動構文へと拡張する過程は次のように図式することができる。

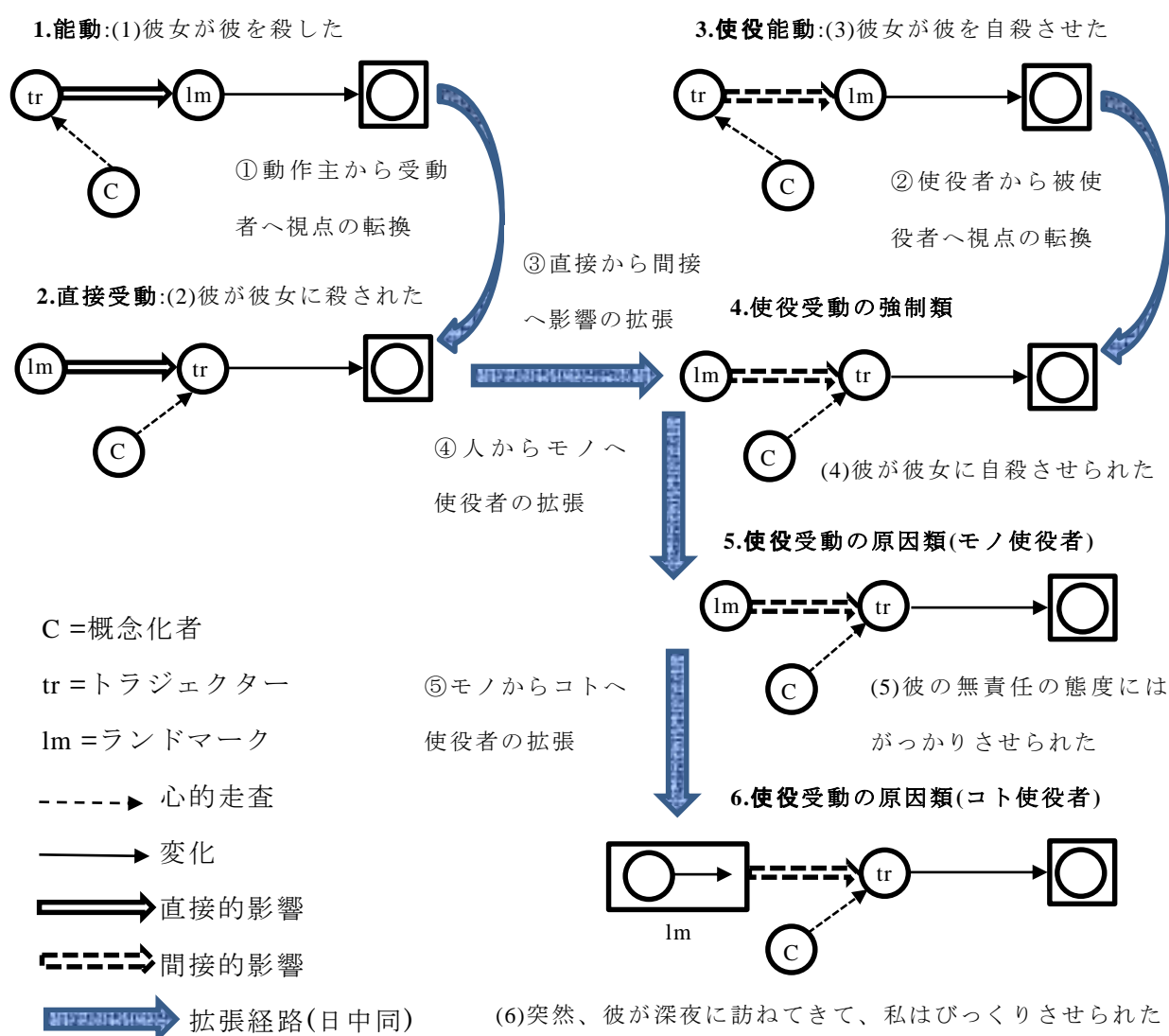


図 5-14 日中語の使役受動構文の拡張過程

図 5-14 に示すように、日中語の使役受動構文は使役あるいは影響が直接的なものから間接的なものへと拡張する(③)ことによって、直接受動構文から拡張すると考える。直接受動構文は視点が動作主から受動者へ転換する(①)ことによって、能動構文から拡張すると考えられる(王力 1954:172、久野 1978:130-131、谷口 2005:40、富田 2007:9、日本語記述文法研究会 2009:214)。同様に、使役受動構文は視点が使役者から被使役者へ転換する(②)ことによって、使役能動構文から拡張すると考えられる(小嶋 1994:35)<sup>56</sup>。また、使役

<sup>56</sup> 小嶋(1994:35)に、「使役うけみ文を、単に『使役+うけみ』の文にとらえるのではな

受動構文の下位分類を詳しく見ると、前述したようにモノ使役者の原因類は、使役者が人からモノへと拡張する(④)ことによって強制類からの拡張だと考えられる。さらに、コト使役者の原因類は使役者の拡張(⑤)によって、モノ使役者の原因類から拡張すると考える。なお、こういったコト使役者の原因類の使役受動構文は事象構造のレベルで、第7章で述べる第三者受動構文と連続体をなしている<sup>57</sup>と思われる。

本章の分析により、論文の最初に挙げた使役受動文に関する日本人・中国人学習者の誤用や中国で編纂される日本語の教科書に見られる不自然な受動表現(150)-(152)に対して、以下のように説明することができる。

(150)小时候我{ ×被/○被迫 }学钢琴。

(子供の頃、私はピアノを習わされました)

[車純蓮 2012:17]<日本人の中国語学習者の誤用>

(151)私はこの事に{ ×感動された/○感動させられた }

[佐治 1992:234]<中国人の日本語学習者の誤用>

(152)私たちはその映画を見て{ ×感動させられ/○感動し }ました。

[近藤他 2008:299]<中国で編纂される日本語の教科書に見られる不自然な受動表現>

中国語では、(150)のように、日本語の強制類の使役受動文に対応する通常受動文はめったに用いられず、ほとんどは「被(受動標識)+迫(強迫する)」という形式の直接受動文で表される。しかしながら、現代中国語、特にインターネットなどで日本語の「ピアノを習わされました」の表す意味が「被(受動標識)+学钢琴(ピアノを習う)」という新型の形式によって表されることはないわけではない。

また、(151)のように、中国語では、「感动(感動する、感動-させる)」は自動詞的用法のみならず、他動詞的用法をも持っているため、受動文の述語として用いられる。それに対し、日本語では「感動する」は自動詞的用法しかなく、他動詞的用法を有するには「-させる」という使役形式の助けを借りなければならない。使役形式による他動詞の代用「感

---

く、能動文とうけみ文の対立と同じように、使役能動文に対立するもの」だという指摘があり、参考になった。

<sup>57</sup> 寺村(1982:289-290)は使役と間接受動が「ある点から見ると表裏の関係にある」ことを指摘している。また、使役と受動の対称性について、益岡(1987)、野田(1991b)などが挙げられる。

動させる」は受動文の述語として使用することができる。なお、周知のとおり、日本語において自動詞も受動文になるが、それは第三者受動文に限られる。ただし、「感動する」という自動詞による第三者受動文はめったに見られない。

さらに、日本語において、「私たちはその映画を見て感動させられました」と「私たちはその映画を見て感動しました」との両方もできるが、それらの使用は若干違いがある。前述したとおり、「感動させられた」という使役受動表現は、「感動した」という元の自動詞表現と言い換えても基本的な意味が変わらないようである。しかしながら、使役受動表現を用いることによって、「-しないわけにはいかない」といった強い気持ちを表し、その強い感情・感覚をある原因によって避けようもなく呼び起こされたことを表している。(152)の場合は、特に「-しないわけにはいかない」といった強い気持ちを表すわけではないため、元の自動詞文によって表されるのがより自然である。つまり、日本語では自動詞文と受動文はともに行為連鎖の末尾にある参加者をもっとも際立つ要素として選択するが、特別な語用論的要因がなければ、無標形式である自動詞文のほうが用いられる。



## 第6章 日中語の持ち主受動構文に関する対照研究

### 6.1 はじめに

(1)-(2)に示すように、日本語においても、中国語においても、元の能動文の目的語名詞が主語の位置に来なく、そのまま元の位置に残り、しかも主語指示物と目的語指示物は広義的所有関係にある受動文、いわゆる「持ち主受動文」が存在する。

(1) 私は父を殺された。

[于康 2012:1]

(2) 张三 被 杀 了 父亲。

人名 受動 殺す 完了 父

(張三さんは、父を殺された)

[于康訳 2012:2]

目的語残存の持ち主受動文以外に、中国語において、実は日本語の持ち主受動文に対応する受動文、つまり「把」を伴う受動文も挙げられる。

(3) 彰 被 他的儿子把 自己的家产花 干净 了。

人名 受動 彼の息子 処置 自分の家産 使う すっかり 完了

(彰さんは子供に自分の家の財産をすっかり使い果たされた)

[黒田訳 2013:390]

(3)は明らかに(2)と同様に、述語動詞の目的語名詞が主語の位置に来ずに、しかも主語名詞と広義的所有関係にある受動文である。(2)と異なるのは、目的語名詞が元の位置に残るのではなく、「把」によって述語動詞の前に置かれるところである。しかし、日本語訳からもわかるように、「把」を伴う受動文は日本語の持ち主受動文と同じ意味を表す。よって、本論文では、(3)のような「把」を伴う形式の受動文を(2)のような目的語残存の受動文と並立させ、両者を中国語の通常の持ち主受動文の下位二分類とする。

さらに、(4)のような仁田(1992)でいう状況のヲ格を持つ持ち主受動文、あるいは(5)のような山内(1997)でいう埋め込み文中の主格名詞が受動文の主語に来る持ち主受動文は中国語においては存在するのであろうか。

(4) だから、(彼は)昨日戻ったところを殺された、ということになりますかね。

a. 彼が戻ったところを殺された

[仁田 1992:327]

(5) 私は非常に素直に言った。泣いているのを見られても平気だった。

a. 私が泣いているのを見られる

[山内 1997:123]

最近、中国語においても、(4)-(5)のような持ち主受動文と同様の構文的特徴を示しているように見える新型の受動文が見られる。例えば、(6)のような例文である。

(6) 白岩松 网上 “被 自杀” 回应 称 “生活 还 那样”

人名 ネット上 受動 自殺する 返事 言う 生活 まだ あのように

(白岩松が(元気でいるが)ネットで(記者に)自殺して死んだといわれてしまい、「生活は変わっていない」と返事をした)

a. 白岩松が自殺したと言われる

[东楚网 2013-07-06]

(6)の「白岩松被自杀」は(4)-(5)と同様に、受動文の主語名詞「白岩松」は埋め込み文中の主格であるため、埋め込み文中の主格が受動文の主語に立つ持ち主受動文だと見なすことができる。

このように、中国語において、日本語の持ち主受動文と同様の構文的特徴を示す受動文は三つのタイプもある。そのうち、目的語残存の持ち主受動文に限って、日本語の持ち主受動文と対照する研究はなされているが、「把」を伴う形式のタイプ、及び新型受動文の認定類(以下「新型の持ち主受動文」と呼ぶ)が日本語の持ち主受動文とどのような共通点と相違点があるのかについての研究はいまだにないようである。本章では、実例に基づき、日中語の持ち主受動構文の構文的特徴及び事態把握を明らかにすることを試みる。

本章では、日中語における三つの構文、すなわち、日本語の持ち主受動構文「NP1 が NP2 に NP3 を V られる」<sup>58</sup>、中国語の通常の持ち主受動構文「NP1+被+NP2+VP+NP3」と「NP1+被+NP2+把+NP3+VP」（以下それぞれ「目的語残存形式」、「『把』を伴う形式」と呼ぶ）、及び新型の持ち主受動構文「NP1+被+X<sub>(V・A・N(P))</sub>」を対象に、実例に基づき、三構文の構文的特徴を解明し、事態認知モデルを用いてそのような差異に反映される事態把握の相違を考察し、最後に対訳コーパスのデータに基づき、日中(通常のみ)語の持ち主受動文の対応関係を明らかにする。

本章は次のように構成されている。まず 6.2 では、日中語の持ち主受動構文に関連する研究を概観し、先行研究の問題点を指摘する。次に 6.3 で、実例に基づき、日中語の持ち主受動構文に見られる所有関係を分類し、その上で所有関係の下位分類別に日中語の持ち主受動構文の構文的特徴を考察し、それらの異同点及びそれぞれの使用要因を解明する。6.4 では事態認知モデルを用いてそのような差異に反映される事態把握の相違を考察し、6.5 で日中対訳コーパスから収集したデータを元に、日中(通常のみ)語の持ち主受動文とその対訳から、日中語の持ち主受動構文の対応関係はどのようになっているのかを考察する。最後に 6.6 では結論を述べる。

## 6.2 先行研究

本節では、日中語の持ち主受動構文に関する従来の研究及びその指摘を概観しておく。ただし、中国語における新型の持ち主受動構文に関する先行研究は第 4 章ですでに紹介したので、第 6 章ではそれについて再び紹介しないことにする。

まず 6.2.1 では、日本語の持ち主受動構文に関する先行研究を概観する。次に 6.2.2 では中国語の通常の持ち主受動構文に関連する先行研究を紹介する。さらに、6.2.3 で日中語の持ち主受動構文に関する対照研究を概観し、その問題点を指摘する。

---

<sup>58</sup> 日本語の持ち主受動文においては、第 2 章で述べたように、ヲ格、ニ格、カラ格、ヘ格、デ格、ト格、ガ格名詞の属格や、埋め込み文中にある属格、さらに埋め込み文中の主語の役割を担うガ格・ニ格の、受動文の主格への転換が可能である。よって、日本語の持ち主受動構文の形式としては、「NP1 が NP2 に NP3 を V られる」のみならず、「NP1 が NP2 から/で/ために NP3 に/から/へ/で/と V られる」及び「NP1 が NP2 に(NP3 を)V られる」なども挙げられる。ここでは、その典型的な形式として、「NP1 が NP2 に NP3 を V られる」を日本語の持ち主受動構文の形式とする。

## 6.2.1 日本語の持ち主受動構文に関する先行研究

日本語においては、(7)-(8)のような持ち主の受動あるいは所有の受動と呼ばれている受動文がある。

(7) 私は、友人にいきなり後ろから肩を叩かれた。

a.元の能動文:友人がいきなり後ろから私の肩を叩いた

[日本語記述文法研究会 2009:243]

(8) 父は風に帽子を飛ばされた。

a.元の能動文:風が父の帽子を飛ばした

[日本語記述文法研究会 2009:244]

このような受動文の特徴は、ガ格名詞がヲ格名詞の広い意味での持ち主になっているということと、元の能動文の属格(ノ格)が受動文の主格(ガ格)になっているということである(山内 1997:119)。

下表に示すように、(7)-(8)のような持ち主受動構文は各研究者の分類によって異なる。

表 6-1 各研究者の「持ち主受動構文」への分類

	私は、友人にいきなり後ろから肩を叩かれた	父は風に帽子を飛ばされた
三上(1972)	第三者の受動	
寺村(1982)	間接受動	
森山(1988)	身体部分の受動	所有物の受動
工藤(1990)	当事者受動文	
仁田(1991)	持ち主の受動	第三者の受動
張麟声(1997)	直接受動	持ち主の受動
山内(1997)	持ち主の受動(斜格昇格型)	
	不可譲渡所有(部分・親族の受動)	可譲渡所有(所有物の受動)
町田(2004)谷口(2005)	被害受動文	

山内(1997:120)が指摘したように、持ち主受動が直接受動と間接受動との間に位置し、さらにそれが直接受動に近いものから間接受動に近いものまで広がりを見せているというプロトタイプ論的な考え方は基本的に、寺村(1982)、森山(1988)、工藤(1990)、仁田(1991)という四つの先行研究に共通しているようであるが、持ち主受動が中間的な存在であることを認めた上で、さらに、その持ち主受動が直接・間接のいずれに属するのかという点については、統一した見解が得られているわけではない。例えば、寺村(1982)、森山(1988)においては、それが間接受動の方に分類されているが、工藤(1990)、仁田(1991)、丁(1995,1996)においては、直接受動に近い性質を持つ存在であることが論じられている。

このように、先行研究の間で持ち主受動構文の定義及びその位置づけについてゆれが見られる。このような現状を踏まえて、山内(1997)は、従来の研究と異なる基準、つまり主格の由来という分類基準によって、改めて持ち主受動構文を「属格昇格型受身」としっかり定義し直し、その内部での下位分類を行い、これらを考え合わせることにより、持ち主受動構文の位置づけを明らかにしている。つまり、これまでの先行研究と異なり、持ち主受動が直接受動・間接受動と完全に対等な形で並立し、さらに、三者の連続性を考える場合には、持ち主受動がその中でも特に重要な役割を果たしているとして山内(1997:129)が主張している。

山内(1997)による持ち主受動構文の定義、属格の範囲、及びヲ格名詞の属格が昇格してできた「XガYニZヲ〜ラレル」というタイプの持ち主受動構文の下位分類は以下のとおりである。

#### 1) 属格昇格型受身の定義

能動文中の属格が昇格して作られる受身文のことである。

#### 2) 属格の範囲

主文の動詞句に直接支配されている名詞句内の属格ばかりでなく、埋め込み文中の名詞句内にある属格、さらに埋め込み文中のガ格あるいはニ格も持ち主受動文の主格になり得る。

例:ヲ格、ニ格、カラ格、へ格、デ格、ト格、ガ格などの属格、及び埋め込み文中のガ格、ニ格

#### 3) ヲ格の属格による属格昇格型受身の下位分類

① 部分の受身(物理的に分離不可能)

例:太郎は犬に手をかまれた。

② 所有物の受身(物理的に分離可能)

例:花子は太郎に日記を読まれた。

③ 親族の受身(物理的に分離可能)

例:太郎は先生に弟をほめられた。

山内(1997:121-127)

以上からわかるように、山内(1997)は、持ち主受動構文を独立させ、それが可譲渡かどうかによって下位分類を行っており、森山(1988)、仁田(1991)などの研究と比べてかなり広く持ち主受動構文を扱っている。

山内(1997)の考察は興味深いものであり、本論文にたいへん示唆的である。本論文は日中語の持ち主受動構文の構文的特徴及び事態把握における異同点を解明するために、山内(1997)と同様に、持ち主受動構文を広範的に扱うことにする。しかし、山内(1997)の研究には、以下のような問題点が存在すると考えられる。

第一に、受動文を能動文・基本文から変形・派生の操作によって出てきたものだとしていることである。第2章で述べたとおり、本論文は従来の研究と異なり、認知言語学の立場をとり、Langacker(1982,2008)、谷口(2005)などに基づき、受動文を能動文からの変形操作により意味を変えずに派生された文ではなく、受動文独自の意味機能、いわゆる「状態化」あるいは「有標の状態」を持つものと規定する(谷口 2005:40-41)。換言すれば、受動文は主語の指示物が何らかの有標な状態を新たに得たことを表す。よって、本論文は「属格昇格型受身」という呼称ではなく、主語の意味役割によって持ち主受動構文と呼ぶことにする。

第二に、従来の研究と異なり、山内(1997)は持ち主受動構文を独立させ、属格をより広く規定するのはたいへん示唆的であるが、実際に考察対象としたのがヲ格の属格による持ち主受動文に限られている。つまり、ニ格、カラ格、ヘ格、デ格、ト格、ガ格などの属格、及び埋め込み文中のガ格、ニ格による持ち主受動文に関する研究はほとんどなされていない。

第三に、ヲ格の属格による持ち主受動文は可譲渡かどうかによって下位分類を行うのが参考価値の高いものであるが、実際に「部分」、「所有物」及び「親族」のほか、仁田(1992)でいう「側面」や「状況のヲ格を持つ」持ち主受動文も存在する。また、ヲ格のみならず、ニ格、カラ格、ヘ格、デ格、ト格、ガ格などの属格による持ち主受動文も可譲渡かどうか

によって下位分類を行うことができるのか。山内(1997)の研究はこれらの問題については言及していない。

また、持ち主受動構文の構文的特徴に関する代表的な研究として、寺村(1982)、森山(1988)、工藤(1990)、仁田(1991, 1992, 1997)、丁(1995, 1996)、柴谷(1997)などが挙げられる。これらの研究は本論文でいう持ち主受動構文の一部しか考察対象としないが、持ち主受動文の下位分類や述語動詞の特徴などに関する論述はたいへん有益である。本論文は以上の先行研究を参照しつつ、主に所有関係の種類及び述語動詞の特徴といった点から持ち主受動構文の構文的特徴を詳しく考察する。

一方、認知言語学の観点から持ち主受動構文の表す事態把握に関する研究として、町田(2004, 2005, 2007, 2011)と谷口(2005)との二つが挙げられる。そのうち、特に町田(2004)の研究が示唆的である。以下、それについて紹介する。

町田(2004:400)は認知文法のアプローチから、日本語の被害受身文(ほぼ本論文でいう「持ち主受動文」と対応する)を、参照点関係を用いて分析することにより、項の数が増加する現象、他動詞または受影性が高すぎると逆に容認性が下がってしまう現象、被害解釈の文脈依存性、概念化者の主体的な事態解釈が強く反映されるという事実の説明を与えることができることを示している。受影性の分離による参照点とターゲット間の関連性の不足を補うため、概念化者は積極的に被害の意味づけを行うようになる。その結果、受影性を共有しないような拡張の最終段階に位置づけられる事態認知において、概念化者が主体的に被害の読み込みを行うようになると考えられる。

例えば、(9)のような部分全体の関係を持つ持ち主受動文の表す参照点関係を図 6-1 のように図式することができる。

(9) その侍が敵に腕を斬られた。

[町田 2004:394]

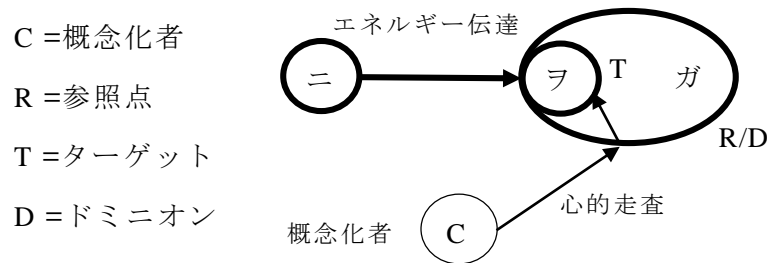


図 6-1 部分全体関係の被害受動文の参照点関係(町田 2004:394 より 一部修正)

図 6-1 は、ガ格名詞句を参照点、ヲ格名詞をターゲット、ニ格名詞句を動作主とした参照点関係をなしている。さらに、図 6-1 はニ格名詞句からのエネルギーがヲ格名詞とガ格名詞句に等しく伝達されている事実も捉えている。言い換えると、ヲ格名詞が影響を受けることは、そのままガ格名詞句が影響を受けることを意味しているのである。これはヲ格名詞句とガ格名詞句間の「受影性の共有」ということである。

また、(10)-(12)のような所有関係を持つ持ち主受動文の表す参照点関係は図式すると図 6-2 になる。

- (10) 太郎が先生に息子を殴られた。(太郎の息子)
- (11) 太郎が誰かに車を壊された。(太郎の所有物である車)
- (12) 太郎が次郎に学校を馬鹿にされた。(太郎の通っている学校)

[町田 2004:395]

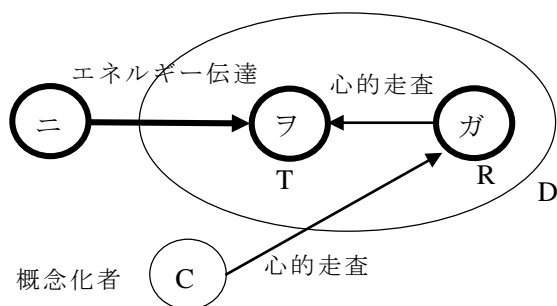


図 6-2 所有関係の被害受動文の参照点関係(町田 2004:395 より 一部修正)

これは(9)のような譲渡不可能な所有から、(10)のような中間段階を経て、(11)のような譲



渡可能な所有、さらに、(12)のような所有として周辺的な事例へと拡張する。このように、所有関係が拡張していくにしたがってヲ格名詞句とガ格名詞句間に成立していた受影性の共有も次第に解消されていく。ただし、(12)ではまだ受影性の共有が完全に解消されたとは言えない。太郎の「学校」が馬鹿にされたことは「太郎」が馬鹿にされたことと解釈できるからである(町田 2004:395)。

さらに、町田(2004)によると、参照点関係のターゲットはモノからコトへと拡張していく。例えば、(13)のような持ち主受動文の表す参照点関係は図 6-3 のようになる。

(13) 太郎が娘に学校を辞められた。(太郎の娘が通っている学校)

[町田 2004:395]

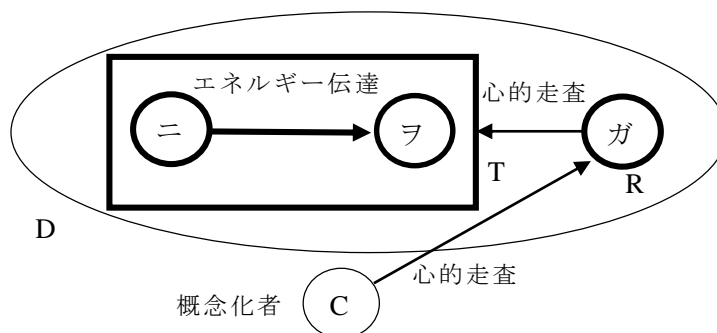


図 6-3 ターゲット拡張:被害受動文の参照点関係(町田 2004:395 より 一部修正)

(13)の「学校」は(12)の「学校」と異なり、「太郎の学校」ではなく、むしろ「娘の学校」とであると解釈する方が普通である。そして、二つの異なる影響がヲ格名詞句とガ格名詞句に別々に及んでいる。ヲ格名詞句である「学校」は「辞める」という行為を受け、ガ格名詞句である「太郎」は娘が辞めることによって生じる別の事態の影響(娘に対する期待が裏切られる、世間体を失うなど)を受けているのである。このように、(13)のような事例に至っては、ガ格名詞句とヲ格名詞句が受影性を共有しているとは言い難くなる(町田 2004:395)。

要するに、(13)の表す参照点関係のターゲットは(9)-(12)のように、ヲ格名詞句の「学校」という「モノ」ではなく、「娘が学校を辞めた」という事態全体である。なぜなら、太郎を参照点として喚起されるターゲットは娘の学校と考えるよりも娘が学校を辞めたことと考

えるほうが自然だからである(町田 2004:395)。

町田(2004)のこの分析は興味深いものであり、参照点関係からの考察が本論文にたいへん示唆的である。本論文においても、持ち主受動構文の表す事象構造は町田(2004)で提案された参照点関係を用いて分析する。しかしながら、(13)のような持ち主受動文の参照点関係におけるターゲットに関する論述には問題があるのではないかと思われる。つまり、太郎を参照点として喚起されるターゲットは「娘の学校」というモノ及び「娘が学校を辞めた」というコトよりも「太郎の娘」と考えるほうが自然であると考えられる。

(14) 太郎は母に死なれた<sup>59</sup>。(太郎の母)

(15) 私は田中に前妻と結婚された。(私の前妻)

[山内 1997:122]

(14)-(15)のようなヲ格名詞句を持たない、被害の意味を表す持ち主受動文を見ると、(13)の表す参照点関係のターゲットがモノからコトへと拡張するといった町田(2004)の論述に問題があることがわかる。すなわち、(14)のガ格名詞「太郎」を参照点として喚起されるターゲットは「母が死んだ」というコトと考えるよりも「太郎の母」と考えるほうが自然であり、(15)のガ格名詞「私」を参照点として喚起されるターゲットは「田中が結婚した」というコトと考えるよりも「私の前妻」と考えるほうが自然である。

また、受影性に関しては、町田(2004)は直接的な影響と間接的な影響を区別しない。実は分離不可能な所有物と分離可能な所有物に関する事態により主語指示物の受けた影響は性質が異なると考えられる<sup>60</sup>。持ち主受動構文といった間接受動構文は直接受動構文からの拡張であるという観点を説明するには、こういった影響性の性質の相違<sup>61</sup>を無視すること

---

<sup>59</sup> 谷口(2005:324)によると、(14)のような被害受身文の場合、興味深いのは、たとえ明示されなくても所有関係が読み込まれる傾向にあることである。例えば、(14)での「母」は、明示されていないが「太郎の母」と解釈される。その一方で、「友人の母」とした場合は「太郎」との関連性が希薄であり、友人の母の死によって「太郎」にどのような影響があったかは不明であるため容認性が落ちる。このように、(14)のように、第三者受動文の典型例としてよく挙げられる受動文には所有関係が認められるため、本論文では、第三者受動文ではなく、持ち主受動文とする。

<sup>60</sup> 受動文における影響性の性質の相違について、詳しくは工藤(1990)、益岡(1982)を参照のこと。

<sup>61</sup> 従来の研究では、受動構文における主語名詞の受ける影響について、その間接性によって、「直接的影響」と「間接的影響」と二分することが多い(柴谷 1978、工藤 1990、小泉 1993、益岡 1982、影山 2006)。例えば、工藤(1990)は、主語名詞が直接受動構文では行

ができないと考える。本論文では、この点も含め、日本語の持ち主受動構文の表す事態把握を詳しく検討する。

## 6.2.2 中国語の持ち主受動文に関する先行研究

中国語においても、(16)のように上述した日本語の持ち主受動文に対応する受動文が存在し(鶴殿 2005、于康 2012,2013)、「保留賓語の受動文」あるいは「目的語残存の受動文」と呼ばれている。

- (16) 你 被 小偷偷 过 手机 吗?  
あなた 受動 泥棒 盗む -たことがある 携帯 か  
(あなたは、泥棒に携帯を盗まれたことがある?)

[于康訳 2012:1]

このような持ち主受動文に言及された研究としては、丁声树(1961)、吕叔湘(1965)、李临定(1980,1986)、朱德熙(1982)、徐杰(1999,2006)、陆俭明(2004)、邓思颖(2006)、潘海华,韩景泉(2008)、勝川(2008a,2008b,2013)などが挙げられる。

李临定(1980)は、現代中国語の受動文において、保留賓語を持つものとして挙げられている受動文のうち、身体部位、親族及び部分関係を表す持ち主受動文が見られる。

- (17) 他 被 敌人 炸 了 左脚。  
彼 受動 敵 爆撃する 傷つく 完了 左足  
(私は敵に左足を爆撃で吹き飛ばされた)

- (18) 我 给 地主 害 死了 爹, 他 给 地主 害 死了 娘。  
私 受動 地主 殺す 死ぬ 完了 親父 彼 受動 地主 殺す 死ぬ 完了 娘  
(私は地主におやじを殺され、彼は地主におふくろを殺された)

---

為を直接的に受けるのに対し、持ち主受動構文では行為を間接的に受け、第三者受動構文では不利益を間接的に受けるとしている。影山(2006)では、本論文でいう直接受動構文と対格の属格類の持ち主受動構文を「行為受影受身文」、主格の属格類の持ち主受動構文と第三者受動構文を「出来事受影受身文」と呼び分けている。

(19)平房 被 敌人 烧 毀 了 几间。

平屋 受動 敵 焼く 壊す 完了 いく間

(平屋建ての家が敵にいく間か焼いて壊された)

[鶴殿訳 2005:420]

また、徐杰(1999)は主語と残留目的語との意味的關係によって、持ち主受動文を「領有-隸属」關係((20))、「全体-部分」關係((21))、「親族」關係((22))という三つに分類している。

(20)李四 被 打 傷 了 一条 胳膊。

人名 受動 殴る 傷つく 完了 一本 腕

(李四は腕をやられた)

[徐杰 1999:17]

(21)苹果 被 削 了 皮。

りんご 受動 剥く 完了 皮

(リンゴは、皮を剥かれた)

[于康訳 2012:2]

(22)张三 被 杀 了 父亲。

人名 受動 殺す 完了 父

(張三さんは、父を殺された)

[例(2)再掲]

さらに、勝川(2013)は可譲渡かどうかによって、主語と目的語間の所有關係を「全体-部分關係」、「本体-属性關係」、「相互依存關係」及び「任意的所有關係」との四つに分類し、実例に基づき、当該構文成立の容認度と所有タイプの相関性について考察を行った。その結果、持ち主が自らの所有物を通じてデキゴトに直接関与しており、その影響を直接経験する場合、持ち主受動構文が成立することを指摘した。つまり、影響の直接性が持ち主受動構文の成立条件だとしている。

勝川(2013)の所有關係に関する分類は以上挙げた他の先行研究より、全面的かつ科学的であり、日本語の持ち主受動構文の所有關係に関する分類と共通していると考えられる。よって、本論文は勝川(2013)の所有關係に関する分類法を参照にし、日中語の持ち主受動

構文を下位分類してみることにする。一方、影響の直接性について検証する価値があると思われる。(20)-(21)は明らかに持ち主が直接的に述語動詞の表す事態に関与しているが、(22)は持ち主が直接的に当該事態に関与していると言えなくても、持ち主受動文として適格となっている。勝川(2013)の説は、このような現象を説明することができない。

以上、現代中国語の残留目的語受動文に関する先行研究は、ほとんど主語と目的語の意味的關係によって下位分類を行うことにとどまり、その文法的ふるまい、述語動詞の成立条件とは何かについては特に言及されていない。

一方、実は中国語において、以上挙げた目的語残存の持ち主受動文と同じ意味を表す受動文、つまり(23)のような「把」を伴うタイプも挙げられる(邵敬敏 1983、李临定 1986、李珊 1993、闫娇莲 2008、柴东英 2012)。

(23) 彰 被 他 的 儿 子 把 自 己 的 家 产 花 干 净 了。

人名 受動 彼 の 息子 処置 自 分 の 家 産 使 用 す っ かり 完 了

(彰さんは子供に自分の家の財産をすっかり使い果たされた)

[例(3)再掲]

このような受動文は、残留する目的語が「把」によって述語動詞の前に置かれ、主語と「把」の目的語の間には所有關係が認められるため、持ち主受動文として位置づけられると考える。しかし、このような持ち主受動文に関してはこれまであまり研究がない。本論文は、目的語残存の受動文と「把」を伴う受動文との二つを中国語の通常の持ち主受動文の下位分類として、全面的に持ち主受動構文の構文的特徴及びその事態把握を考察する。

### 6.2.3 日中語の持ち主受動構文に関する対照研究

于康(2009)は身体部位の關係を表す日中語の持ち主受動文を対象に、所有物が持ち主主語と共起するかどうかは述語動詞の意味によるとしている。つまり、動詞の表す動作が持ち主と身体部位との両方に向けられる場合、所有物である身体部位が持ち主と共起しなくてもよい。しかし、動作が身体部位のみに向けられる場合、所有物である身体部位が持ち主と共起しないと、受動文はもとの受動文と意味的に矛盾が生じる、またはそれ自体文としては成立しない。于康の研究は示唆的であるが、自ら指摘したように、この結論は身体

部位といった所有関係にある日中語の持ち主受動文に限って分析し得たものであり、他の所有関係にある日中語の持ち主受動文に適用できるかどうかはさらなる考察が必要となる。

また、于康(2012)は主語と目的語との意味関係の有無から、日中語における目的語残存の受動文(持ち主受動文を含む)を二種類に分け、二項動詞による目的語残存受動文における目的語残存の条件を考察した。その結果、目的語が残存するか否かは、統語的制約を受けるほか、日本語の目的語残存受動文は受影者を主語に取り立てることが特徴であるが、中国語の目的語残存受動文は文のテーマを主語に取り立てることが特徴的である、ということがわかった。この結論の可否を検証するために、三項動詞の目的語残存受動文も考察しなければならない。

一方、凌蓉(2005)は日中対訳コーパスや辞書、新聞などから用例を集めて、述語動詞、主語と行為主体の有生性及び関係という点から日中語の持ち主受動文の文法的成立条件を検討した。凌蓉の考察は大変詳しいものであり、参考価値の高いものである。ただし、その考察は日本語の持ち主受動文(能動文のヲ格、ニ格、カラ格の連体修飾語・属格名詞が主語となるもののみ)とそれに対応する中国語の受動表現が成立するか否かといった分析に偏っており、中国語の持ち主受動文が日本語とどのような対応関係をなすのかに触れた部分が少ない。また、中国語の持ち主受動文における「把」を伴う形式と目的語残存形式との区別を言及しておらず、事態把握と関連せず、単に日中語における目的語残存の持ち主受動構文の構文的特徴を検討しただけという不足が挙げられる。

さらに、中島(2007,2012)は、志賀直哉の『暗夜行路』とその中国語訳本を資料とし、日中語の間接受動文(持ち主受動文を含む)の対応の諸相を考察し、以下のように中国語における目的語残存の持ち主受動文の成立条件を仮説として提起した。

主文の主語と補文の表す事態とが密接に関連すればするほど、間接受身即ち目的語が文中に残る受身は成立しやすく、関連性が低いほど、その成立は不可能となる。

中島(2007:87)

つまり、勝川(2013)の提案した影響の直接性と異なり、主語と述語動詞の表す事態、あるいは主語(持ち主)と補文の目的語(所有物)との関連性を目的語残存の持ち主受動文の成立条件としている。例えば、下記二つの持ち主受動文における容認性の相違はこの仮説によって説明できる。

(24)○我 被 太郎 撕 破 了 衣服。

私 受動 人名 引く 破る 完了 衣服

(私は太郎に衣服を破られた)

(25)×我 被 太郎 撕 破 了 信。

私 受動 人名 引く 破る 完了 手紙

(私は太郎に手紙を破られた)

[中島訳 2012:13-14]

中島(2012:13-14)によると、(25)が非文法的なのは、主文主語「我(私)」と補文の目的語「信(手紙)」との関連性が弱いことによる。一方、「我(私)」と「衣服(衣服)」のように持ち主と所有物の関係が成り立つ、関連性の強い(24)は文法的に成立する。確かに、(25)と比べて、(24)のほうが主語と目的語との関連性が強いが、(25)は(24)と同様に、目的語「衣服(衣服)」と主語「我(私)」との間には所有関係が認められ、しかも「把」を伴う形式の受動文にすると、「我被太郎把信撕破了(私は太郎に手紙を破られた)」のように中国語の持ち主受動文としては成立する。さらに、(25)と同様に、分離可能な所有関係にある中国語の持ち主受動文も見られる。例えば、(26)のようなものである。

(26)到后来， 听说 连 真的 在 报纸 上 被 点 着 名儿

後になって だそう だ さえも 本当 に 新聞 上 受動 指定する 持続 名前

批评 了 作品 的 那个 “编 小说” 的，也 没 多 大 事 儿， 还是 照样

批判する 完了 作品 の あの 書く 小説 の も ない たい した こと 相 変 わ ら ず

写 他 的 小 说， 照 样 登 出 来。

書く 彼の 小説 いつも の よう に 掲 載 する て くる

(聞くところによると、ほんとうに新聞で名指しで作品を批判された小説書きも、たいしたことはなく、相変わらず小説を書いて、発表しているそうだ)

[対訳 轆轳把胡同 9 号]

「那个“编小说”的被点着名儿批评了作品(あの小説書きは名指しで作品を批判された)」はごく自然な中国語の受動表現である。(26)の主語「那个“编小说”的(あの小説書き)」と

目的語「作品(作品)」との関係性が、(24)の「我(私)」と「衣服(衣服)」との関連性ほど強くなく、(25)の「我(私)」と「信(手紙)」との関連性と同じ程度であるにもかかわらず、中国語の持ち主受動表現としては成立する。中島の仮説は以上のような現象については説明できない。

この仮説は直観に訴えるものの、鍵となる「関連性」がどのような概念であるか、その程度はどのようにして測られるかについての説明はさらに必要である。また、それはごく限られた対訳資料に基づいて提起したものであるため、中国語の持ち主受動文の全体(「把」を伴うタイプを含む)については説明できないのがはっきりしている。

このように、持ち主受動構文に関する日中対照研究<sup>62</sup>では、中国語にも日本語の持ち主受動文に対応するものが存在するという意見が見られるが、それらはすべて目的語残存の持ち主受動文に限られ、「把」を伴う形式のタイプにはあまり言及していない。また、日中語の持ち主受動構文のそれぞれの成立条件・使用要因において検討すべき点が多く、新型の持ち主受動構文を含めた両言語の持ち主受動構文の体系に関する対照研究はいまだにないようである。さらに、日中語の持ち主受動構文の構文的特徴、対応関係及びそれらに関連する事態把握における異同点に関する研究はほとんどないといってよい。

そこで、本章は日中語の持ち主受動構文として、日本語の持ち主受動構文、中国語の通常の持ち主受動構文及び新型の持ち主受動構文を取り上げ、それらを対照することによりそれぞれの特徴を明らかにし、構文的相違点のみならず、そのような差異が反映する事態把握の相違も探究する。

次節 6.3 では、実例に基づき、日中語における持ち主受動構文の構文的特徴を考察し、それらの異同点及びそれぞれの使用要因を解明する。

### 6.3 日中語の持ち主受動構文の構文的特徴

本章のテーマである持ち主受動構文がいかなる所有関係にあるのか、ということは日中語の持ち主受動構文の構文的特徴に関わる重要な要因となる。したがって、本節では、日中語の持ち主受動文に見られる所有関係を分類した上で、主体-活動関係、相互依存関係、同一関係及びその他の所有関係という四つに分けて、日中語の持ち主受動構文の構文的特

---

<sup>62</sup> 日中語の持ち主受動文の表現方法についての研究としては、黒田(2014)が挙げられる。



徴について考察していくことにする。

なお、本節では、いかなる所有関係にある持ち主受動文であれ、仁田(1992)、山内(1997)、于康(2009)にしたがって、所有物を表す目的語名詞を省略して、両者の意味に矛盾が生じない場合は、「含意関係」、あるいは「等価的な関係」が存在するという<sup>63</sup>。そうでない場合は、「含意関係」、あるいは「等価的な関係」が存在しないとする。すなわち、前者は、日本語の「NP1がNP2にNP3をVられる」、中国語の「NP1+被+NP2+VP+NP3」と「NP1+被+NP2+把+NP3+VP」のうち、所有物を表すNP3を省略し、直接受動文である「NP1がNP2にVられる」、「NP1+被+NP2+VP」としても両者の意味に矛盾が生じない場合を指すが、後者は、日本語の「NP1がNP2にNP3をVられる」、中国語の「NP1+被+NP2+VP+NP3」と「NP1+被+NP2+把+NP3+VP」のうち、所有物を表すNP3を省略し、「NP1がNP2にVられる」、「NP1+被+NP2+VP」として両者の意味に矛盾が生じる場合をいう。

まず6.3.1で、所有関係に関する先行研究を踏まえて、日中語の持ち主受動文に見られる所有関係を整理し分類する。続いて、6.3.2から6.3.5にわたって、実例に基づき、所有関係を主体-活動関係、相互依存関係、同一関係及びその他の所有関係(全体-部分関係、本体-属性関係、及び一般所有関係との三つを含む)の四つに分けて、述語、被害・迷惑といった情意性、及びテンス・アスペクトなどの後続形式といった面から、日中語の持ち主受動構文について、それらの形式的特徴及び意味的特徴を検討し、それぞれの使用要因を解明する。その上で、6.3.6では日中語の持ち主受動構文の構文的特徴における相違点と共通点をまとめる。

### 6.3.1 日中語の持ち主受動構文に見られる所有関係

日本語の持ち主受動文に見られる所有関係については、6.2.1で述べたとおり、身体部位・部分、親族、所有物、側面、及び状況のヲ格を持つといったものが挙げられる。一方、中国語の持ち主受動文に見られる所有関係については、6.2.2で紹介したように、全体-部分関係、本体-属性関係、相互依存関係、任意的-一般所有関係というものが挙げられる。また、持ち主受動文の日中対照研究では、凌蓉(2005:133)は持ち主受動文の主語と目的語の関係を次の六種に分けている。

---

<sup>63</sup> 「含意関係」及び「等価的な関係」について、詳しくは仁田(1992)、山内(1997)を参照のこと。

- ① 人とその体の一部の関係
- ② 人とその側面の関係
- ③ 人とその所有物の関係
- ④ 人とその親族の関係
- ⑤ 全体と部分の関係
- ⑥ 同一関係

以上のように、日中語の持ち主受動文に存在する所有関係を持ち主と所有物との意味関係によって分類する場合、そこにはさまざまな類分けの可能性が存在し、下位分類の呼び方も多少異なる。桃内(2004)は、所有に関する Heine(1997)及び角田(2009)の論述における分類の対応関係を図 6-4 のように示している。

所有傾斜:

身体部位 > 属性 > 衣類 > (親族) > 愛玩動物 > 作品 > その他の所有物

BODYP      STATE    CON2      KIN

INHEP      CON1

RELSP

BODYP (Body-parts 身体部位)

KIN(Kinship terms 親族対象)

INHEP (Inherent parts of other items eg.branch, handle)

STATE (Physical and mental states eg.strength, fear)

CON1 (Culture specific conventions1 eg.name, voice, smell, shadow, footprint, property, home)

RELSP (Relational spatial concepts eg.top, bottom, interio)

CON2 (Culture specific conventions2 eg.nerhbor, house, bed, fire, clothes, spear)

図 6-4 所有傾斜(桃内 2004:137 より)

図 6-4 に示す所有傾斜は、譲渡不可能所有と譲渡可能所有の分類を精密化したものであり、持ち主と所有物との物理的・心理的な近さ・密接さの程度を表すと言える。一般に、譲渡不可能所有物の代表的なものとされるものは身体部位であり、逆に道具などは譲渡可能所有物である。これら二種の所有関係は峻別することが困難で、実は連続体をなす。

以上、所有関係に関するこれら二つの先行研究は、事物と事物、つまりモノとモノの間に成り立つ所有関係のみ指すものである。しかしながら、事物と事物の間に、同一指示、いわゆる「同一関係」(凌蓉 2005:140)といった周辺的な所有関係、さらに事物と活動、つまりモノと活動の間には、状況のヲ格を持つ日本語の持ち主受動文(仁田 1992:328)や中国語の新型の持ち主受動文のように、主体-活動といった所有関係も成り立つと言える。

そこで、本論文は日中語の持ち主受動構文の体系における相違を明らかにするために、所有関係をより広く扱い、事物と事物のみならず、事物と活動の間に存在するものも周辺的な所有関係として考察する。所有関係に関する先行研究を踏まえて、まず譲渡可能性を基準に、譲渡不可能な所有関係と譲渡可能な所有関係、本論文でいう一般所有関係に大別し、その上で、所有の仕方・され方によって、さらに譲渡不可能な所有関係を、全体-部分関係、本体-属性関係、主体-活動関係、相互依存関係及び同一関係の五タイプに分類する。

以上、日中語の持ち主受動構文に見られる所有関係に関する分類を図に示すと、次のようになる。

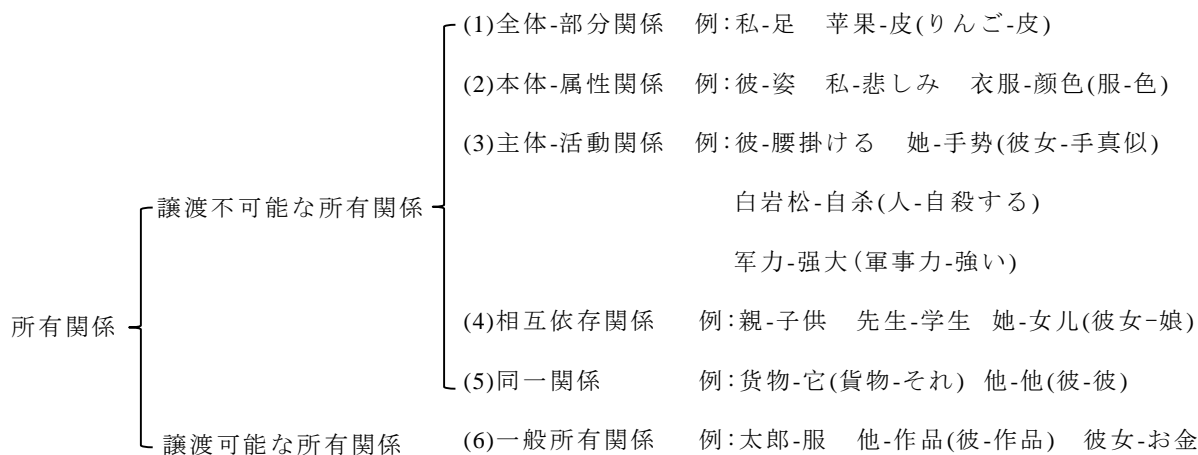


図 6-5 日中語の持ち主受動構文に見られる所有関係の分類

図 6-5 にある所有関係の下位分類の六種の持ち主の有生性に関しては、全体-部分関係、本体-属性関係、主体-活動関係にある中国語の新型の持ち主受動文及び同一関係にあるものは有情物に限らず、無情物も可能である。一方、主体-活動関係にある日本語と中国語の通常の持ち主受動文、相互依存関係と一般所有関係にあるものは有情物に限る。

以下において、例文を挙げながら、述語、テンス・アスペクト及び情意性などに関連して、

上の六種の所有関係にある日中語の持ち主受動構文の構文的特徴を具体的に考察し、日中語の持ち主受動構文の使用要因を解明していく。

### 6.3.2 主体-活動関係にある日中語の持ち主受動構文

主体-活動関係とは、所有物が持ち主の行う活動を表すものである。この関係にある持ち主受動文は、いわゆる山内(1997)でいう埋め込み文中の主語の役割を担うガ格、二格名詞が受動文の主語に来るもの、または仁田(1992)でいう状況のヲ格を持つ持ち主受動文を指す。この活動には、動的な動きを表すものもあれば、静的な状態を表すものもある。そのうち、静的状態を表す活動が本体の持つ性質・属性を表す属性とは近い関係にあるが、両者の相違は形式上、属性が名詞または名詞句によって表されるのに対し、静的状態を表す活動が名詞節や引用節など、節の形によって表示される。ただし、中国語における新型の持ち主受動文では、動的な動きを表すものであろう、静的な状態を表すものであろう、いずれも形式上節ではなく、動詞(句)、名詞(句)、または形容詞(句)によって表され、例外的な存在である。このように、主体-活動関係にある日中語の持ち主受動文は全体-部分関係、本体-属性関係などと比べて、等質性に欠け雑多なところを有する。

以下、主体-活動関係にある日中語の持ち主受動文を、活動を表す目的語節を省略して両者は意味的に等価的な関係にあるか否かということによって、状況活動と非状況活動との二つに分けて考察し、主体-活動関係にある日中語の持ち主受動文の使用要因を明らかにする。

#### 6.3.2.1 状況活動の持ち主受動構文

本論文では、状況活動の持ち主受動文とは仁田(1992)でいう「状況のヲ格を持つ」持ち主受動文のことをいう。この用法は中国語では確認されておらず、確かに日本語独特のもののように見受けられる。

状況のヲ格とは何か、状況のヲ格を持つ持ち主受動文とはどのようなものなのかについて、仁田(1992)は以下のように論述している。

状況のヲ格を持つ<持ち主の受身>における状況とは、事態の外側に別個に存在するよう

なものではない。事態成立の構成要素である働きかけられる対象の存在のありようが、結局は、事態がどのような状況・背景のもとで行われたかを表すことになっているものである。これを、外的状況に対して、内的状況と仮に呼んでおこう。「男が門ヲ出ヨウトシタ時、男ヲ後カラ銃デ撃ッタ。」の下線部のようなものが、これである。この内的状況も、「(男ガ)門ヲデヨウトシタトコロヲ後カラ銃デ撃ッタ。」のように、状況のヲ格でもって表現できる。当然、対象をヲ格に据えた「男ヲ後カラ銃デ撃ッタ。」といった表現も成り立つ。ただ、外的状況の場合と異なって、「?? 門ヲデヨウトシタトコロヲ男ヲ後カラ銃デ撃ッタ。」のように、一つの文の中で、重ねて出現させることには、かなり無理がある。以下に述べる状況のヲ格を持つ<持ち主の受身>とは、文が受身化することによって、対象のヲ格が、受身文のガ格に取り出されることによって、内的状況のヲ格が文中に併存しうようになったものである。

仁田(1992:327-328)

仁田(1992)が挙げた例文は、以下(27)-(29)のようなものである。

(27)彼は(中略)だから、昨日戻ったところを殺された、ということになりますかね。

a.元の能動文:誰かは彼が戻ったところを殺す

(28)彼はヒサの財布を奪い、再び駅に向かったが、引返すのを駅員に見られそうなので、車の通る街道まで歩いてタクシーを拾い、新宿に出た。

a.元の能動文:駅員は彼が引返すのを見る

(29)そこまでは気がつかなかった。大崎は、一寸の隙をグサリと突かれたようにおもった。二人の刑事は大崎の反応を確かめるように視線をこらしている。

a.元の能動文:二人の刑事は大崎の隙を突く

[仁田 1992:327]

(27)-(29)はいずれも、目的語のヲ格名詞節または名詞句を省略し、それぞれ「彼が昨日戻ったところを殺された=彼が昨日殺された」、「彼が引返すのを駅員に見られる=彼が駅員に見られる」、「大崎が一寸の隙をグサリと突かれた=大崎がグサリと突かれた」のように、元の形式と等価的な関係にある。言い換えれば、このタイプの受動文では、主語指示物は内的状況を表す埋め込み文中の主格であると同時に、述語動詞の表す動作の直接対象であ

る。仁田(1992:326)のことばを借りると、その意味で、受動文のガ格が直接的な働きかけを被っているこのタイプは、極めて<まどもの受身(直接受動)>に近いところに位置すると言えよう、ということである。ここから、日本語において、主体-活動関係にある持ち主受動文と直接受動文との連続性が窺える。

状況活動の持ち主受動文では、仁田(1992)によると、受動文のガ格と状況のヲ格には、状況のヲ格で表されている事態・出来事が、ガ格によって表されている存在によって引き起こされたものであるという。このことは(27)-(28)にはふさわしいが、(29)には言えないのではないか。すなわち、(27)の「戻ったところ」、(28)の「引返すの」といったヲ格で表されている事態がガ格の「彼」によって引き起こされたものである、というのは確かであるが、(29)の「一寸の隙」というヲ格で表されているのが、ガ格の「大崎」によって引き起こされたものである、とは言えない。「隙をつかれる」が「人の不意をつかれる」という意味を表すため、本論文では状況活動の持ち主受動文ではなく、本体-属性関係にある持ち主受動文とする。

主体-活動関係にある持ち主受動文では、主語指示物が述語動詞の表す動作の直接対象であるため、直接受動文に入る動詞がすべて持ち主受動文にも入ると思われがちであるが、このような用例は多くはない。(27)-(28)以外に、日中対訳コーパスでは、以下のような状況活動の持ち主受動文が見られる。

(30) だれか迎えに来ていないものでもなかったので、二人が一緒だったところを見られるのを避けたわけであった。

[対訳 あした来る人]

(31) 地面に転がった一人の子は這い起きて、これは跛をひきながら駈け去った。トラックの枠に腰かけていたところを吹き落されたものらしい。

[対訳 黒い雨]

(32) だめだ、子供は山へ入って行くのをとめられている。外国兵とまちがって撃たれるぞ。

[対訳 飼育]

(30)の「二人が一緒だったところを見られる」、(31)の「一人の子が腰かけていたところを吹き落された」、及び(32)の「子供が山へ入って行くのをとめられている」では、状況の

ヲ格、それぞれ「一緒だったところ」、「腰かけていたところ」、「山へ入って行くの」はいずれも、ガ格名詞「二人」、「一人の子」、「子供」によって行われた活動であり、述語動詞の表す事態、それぞれ「二人が見られる」、「一人の子が吹き落された」、「子供がとめられている」がどのような状況・背景のもとで行われたかを表す。よって、状況のヲ格を省略しても、それらの意味は直接受動文に含意されている。

このように、状況活動の持ち主受動文では、主語指示物が有情物に限られ、述語動詞は直接受動文と同様に広範囲に渡り、主語指示物にとって当該事態が例外なく被害になる。状況活動の持ち主受動文が状況のヲ格を欠いた直接受動文とは同じ客観的事態を表すが、情意性においては異なる。直接受動文は被害、中立及び利益のいずれもあるが、状況活動の持ち主受動文は(30)-(32)のように被害しかない。言い換えれば、活動の主体である持ち主が当該事態により被害を受けた、という意味を表すため、つまり、受影者視点<sup>64</sup>によって状況活動の持ち主受動文は用いられるのである。

また、状況活動は「トコロノ」を伴う形、つまり節で表される、という形式的特徴が挙げられる。日本語において、この「トコロノ」はある事態をひとまとまりにして把握する機能がある。両者の相違について、近藤<sup>65</sup>(2009)は以下のように述べている。

ノもトコロも、話し手が時間とともに変化する動きのある事態を映像的に切り取り、まるごとコト的把握したことを表します。ノは、ある時間をかけて実現する眼前の動きのプロセス全体をひとまとまりにして把握し、トコロは、だれか/何かの動きや活動のプロセスのある一瞬を切り取って静止画像のように把握する機能を有し、いずれも日本語話者に<好まれる言い回し>です。

近藤(2009:118)

つまり、ノとトコロはともにある事態をひとまとまりにして把握する機能があるが、切り取り方は異なる。前者は目の前の事態全体をひとまとまりにして把握するが、後者は目

---

<sup>64</sup> 本論文でいう「受影者視点」は、ほぼ益岡(1982)の「受影性の前景化」という概念に相当する。「受影性の前景化」とは、ある出来事の結果として心理的或いは物理的影響を被った非主語名詞句を前景化することである(cf.益岡 1982:52)。

<sup>65</sup> 近藤は、「あ、飛行船が飛んでるのが見える」、「私も、この前会社を出ようとしてところを上司に呼び止められて、書類のコピー頼まれて…」のような例文をもって、日本語話者が事態をまるごとコト的に把握する、という好まれる傾向があると主張する。

の前の事態のある一瞬を輪切りにして把握する。このように、日本語では、「トコロノ」によって臨場感を伴って動きのあるコトの表出が可能となっている。状況活動の持ち主受動文における「内的状況」はまさにその臨場感の現れである。

### 6.3.2.2 非状況活動の持ち主受動構文

非状況活動の持ち主受動文は状況活動の持ち主受動文と異なり、所有物である活動を表す目的語名詞句または名詞節を省略して、両者の意味に矛盾が生じる、つまり意味的に等価的な関係が存在しない。言い換えれば、述語動詞の表す動作の直接対象においては、状況活動の持ち主受動文は主語指示物の持ち主であるのに対し、非状況活動の持ち主受動文は目的語名詞句または名詞節の表す所有物である。二つのタイプは以下の三点で異なる。

まず、状況活動の持ち主受動文は内的状況のヲ格が文中に併存するため、動的な動きしか表さないが、非状況活動の持ち主受動文は動的な動きのみならず、静的な活動、あるいは属性・状態をも表すことがある。次に、前述したように、述語動詞に関しては、状況活動の持ち主受動文は実例が少ないものの基本的に直接受動文と同様、広範囲に渡る。一方、非状況活動の持ち主受動文は実例が多いが、ごく限られた動詞類しか入らない。また、所有物である活動の表し方においては、状況活動の持ち主受動文は「トコロノ」を伴う節の形で表されるが、非状況活動の持ち主受動文は「ノ/コト」を伴う節の形のみならず、名詞句によって表されることもある。

こういった非状況活動の持ち主受動文は日中語ともに存在する。中国語において、非状況活動の持ち主受動文はそれらの構文的特徴によって、通常と新型との二種類に分けられる。本節では、日中語における非状況活動の持ち主受動文のこういった三種類を便宜的にそれぞれ「日本語の持ち主受動文」、「通常<sub>1</sub>の持ち主受動文」、「新型<sub>1</sub>の持ち主受動文」と呼ぶことにする。新型の持ち主受動文は他の二種類、つまり日本語の持ち主受動文と通常<sub>1</sub>の持ち主受動文と形式的にはっきり異なるため、以下、日本語の持ち主受動文、通常<sub>1</sub>の持ち主受動文及び新型<sub>1</sub>の持ち主受動文という順に考察していく。

(33)-(37)は日中対訳コーパスから取った例文である。そのうち、(33)-(36)は日本語の持ち主受動文であるが、(37)は中国語における通常<sub>1</sub>の持ち主受動文である。

(33) 杏子は自分の鳴咽を梶に感づかれてはならないと思った。梶の声があると、杏子



はまたそのまま歩き出した。

(杏子不想{ 让/被 }梶觉察出自己的呜咽。当梶大助的脚步声传来时，又继续往前走去)

[対訳 あした来る人]

(34) 従妹は泣きました。私に添われないから悲しいのではありません、結婚の申し込  
を拒絶されたのが、女として辛かったからです。

(堂妹也哭了。她并不是因为不能跟我结婚才难过的。一个女人，倘若被人拒绝了结婚的要求，当然是痛苦的)

[対訳 ころろ]

(35) 杏子は(中略)昼間八千代に会っていて、その同じ日の夜に、克平と一緒に花火を見に  
行ったことを知られるのはいやだった。

(杏子(中略)白天已经见过，她不愿意{ 让/被 }八千代知道自己同一天晚上和克平一起去看烟花)

[対訳 あした来る人]

(36) 女から手紙が来たのを母に知られたということに、賢一郎は若い羞恥を感じていた。

({ 让/被 }母亲知道了有女人给他写信，使贤一郎感到青年人常有的那种羞怯)

[対訳 青春の蹉跌]

(37) 阿巧 不敢 做 声，心里 却 万分 怔忡……还是  
人名 する勇氣がない 立てる 声 心の中 ところが 極めて 動悸 それとも  
刚才 被 她 看見 了 她 对 阿寿 做 了 两次 的 手势。

先 受動 彼女 見える 完了 彼女 に 人名 する 完了 二回 の 手真似

(阿巧は震え上って、声も出せなかった……それとも、さっき阿寿に手真似をしたのが見つかったのか、どちらとも見当がつかなかった)

[対訳 霜叶红似二月花]

(33)の「杏子は自分の鳴咽を梶に感づかれる」は、目的語名詞「鳴咽」が主語指示物「杏子」の行う動きであるため、主体-活動関係にある持ち主受動文である。同様に、(34)の「従妹は私に結婚の申し込を拒絶された」は、目的語名詞句「結婚の申し込」が主語指示物「従妹」の行う活動であるため、主体-活動関係にある持ち主受動文である。日本語では(34)のように、有情物持ち主主語の受けた被害・迷惑の意味を強調するため、第

一人称の行為主体による持ち主受動文を用いることがある。つまり、日本語の受動文では、主語の受けた被害・迷惑の意味を強調することによって、視点制約は解消されることがある。このことは第7章で後述するように、持ち主受動文のみならず第三者受動文にも言える。

(35)は山内(1997)でいう埋め込み文中の主語の役割を担うガ格、(36)は山内(1997)でいう埋め込み文中の主語の役割を担うニ格が受動文の主語に来る持ち主受動文である。(35)の「杏子は克平と一緒に花火を見に行ったことを八千代に知られる」は、目的語名詞節「克平と一緒に花火を見に行った」の表す事態が主語指示物「杏子」の行う活動であるため、主体-活動関係にある持ち主受動文である。同様に、(36)の「賢一郎は女から手紙が来たのを母に知られた」は、目的語名詞節「女から手紙が来た」の表す事態が主語指示物「賢一郎」に起きた出来事であるため、主体-活動関係にある持ち主受動文と言える。

(33)-(36)はいずれも中国語訳文では、目的語残存形式の持ち主受動文になっており、日中語ともに、活動を表す目的語は(33)-(34)のように名詞句によって表されることもあれば、(35)-(36)のように名詞節によって表されることもある。また、(37)の「阿巧被她看见了(阿巧)对阿寿做了两次的手势(直訳:阿巧は彼女に阿寿に二回した手真似を見られた)」は、目的語名詞「手势(手真似)」が主語指示物「阿巧」の動きであるため、主体-活動関係にある持ち主受動文である。

日中語において、(33)-(37)のように、動的活動を表す非状況活動の持ち主受動文のみならず、(38)-(40)のように、静的活動あるいは静的状態・属性を表す非状況活動の持ち主受動文も見られる。いずれにしても、中国語では「把」を伴う形式がなく、目的語残存の形式のみである。

(38)其処を一つ見つけさえすれば、丁度女房に化けた狐が、尾のある事を知られたように、侍従の幻も崩れてしまう。

[山内 1997:123]

(39)これは専念に当来の浄土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思ったからばかりではない。それより寧ろ、自分で鼻を気にしていると云う事を、人に知られるのが嫌だったからである。

(不仅是因为他觉得作为一个应该专心往生净土的和尚，不宜惦念鼻子，更重要的还是他不愿意{ 让/被 }人家知道他把鼻子的事放在心上)

(40)このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸っ子は意気地がないと云われるのは残念だ。

(若就此罢休又关系到自己的脸面。要是{ 叫/被 }人说什么江戸哥儿不争气,那就太遗憾了)

(38)は山内(1997)でいう埋め込み文中の主語の役割を担う二格が受動文の主語に来る持ち主受動文である。(39)の「女房に化けた狐が尾のある事を知られた」は、ヲ格の「尾のある」の表す事態が主語指示物「女房に化けた狐」の持つ属性である。(40)の「自分が鼻を気にしていると云う事を人に知られる」は、ヲ格の「自分が鼻を気にしている」の表す事態が主語指示物「自分」の現在の心理状態である。一方、(38)-(39)と異なり、(40)は静的活動を表すのは名詞節ではなく、「ト」を伴う引用節である。(40)の「江戸っ子は意気地がないと云われる」は、引用節の「意気地がない」というのが主語指示物「江戸っ子」の持つ性質・属性である。このように、名詞節や引用節によって表される属性・状態が主語指示物の持つものであるため、持ち主受動文とする。このような属性・状態が名詞または名詞句ではなく、節によって表されるので、後述する主体-属性関係の属性という所有物と区別するため、静的活動として位置づける<sup>66</sup>。

(39)-(40)の中国語訳を見てみよう。(39)の「让人家知道他把鼻子的事放在心上(彼が鼻を気にしているという事を人に知られる)」の「让」、(40)の「叫人说什么江戸哥儿不争气(人に江戸っ子は意気地がないと云われる)」の「叫」はともに「被」という受動専用の形式に置き換えられるため、両訳文はともに受動文であることがわかる。そして、目的語節「他把鼻子的事放在心上(彼が鼻を気にしているという事)」、「江戸哥儿不争气(江戸っ子

<sup>66</sup> 仁田(1992:330)は、「見る」によって形成された存在の認知に関する<持ち主の受身>は、状況のヲ格を持つ<持ち主の受身>と近似の意味を表し、後者に近づいていくと述べている。この二種の持ち主受動文は本論文ではそれぞれ本体-属性関係にある持ち主受動文、主体-活動関係にある持ち主受動文と呼ぶものである。その例としては、以下のようなものである。

- ① 桜井が姿を消して一週間である。……まず、桜井が失踪した夜は、塩木といっしょの姿を木村に見られている。<存在の認知に関する持ち主の受身>
- ② ~、塩木の立場が危なくなった。木村に、桜井と一緒に見られたのが致命的なミスだった。<状況のヲ格を持つ持ち主の受身>

は意気地がない)」の表す事態が主語指示物の静的活動であるため、非状況活動の持ち主受動文と言える。こういった目的語残存形式の非状況活動の持ち主受動文は「把」を伴う形式に置き換えると非文となる。

以上のように、日中語における非状況活動の持ち主受動文は主語が有情物に限られ、述語動詞が主に知覚・感覚((33)、(37))、思考・認知((35)-(36)、(38)-(39))、及び言語・態度((34)、(40))の意味を表す動詞であり、すべてが主語の持ち主にとって被害・迷惑となる。その使用要因として、状況活動の持ち主受動文と同様、話者が有情物持ち主の受けた被害・迷惑の意味を強調する、つまり受影者視点というのが挙げられる。

以下、新型の持ち主受動文の考察に入る。

新型受動文の認定類は埋め込み文中の主語の役割を担う主格が受動文の主語に来るということによって、主体-活動関係にある持ち主受動文と言える。新型の持ち主受動文は上述した日本語と通常を持ち主受動文と同様に、動的活動を表すものもあれば、静的活動を表すものもあり、その使用要因は、持ち主主語の受けた利害の意味を強調する、という受影者視点であると考えられる。一方、述語の品詞類及び情意性との二点においては、新型の持ち主受動文は明らかに日本語及び通常を持ち主受動文とは異なる。

(41) 白岩松 网上 “被 自杀” 回应 称 “生活 还 那样”

人名 ネット上 受動 自殺する 返事 言う 生活 まだ どのように  
(白岩松が(元気であるが)ネットで(記者に)自殺して死んだといわれてしまい、「生活は変わっていない」と返事をした)

[例(6)再掲]

(42) 哈尔滨 女子 建设银行 卡 1 万元 莫名 “被 消费”

地名 女性 銀行名 カード 1 万元 不思議に 受動 消費する  
(ハルビン女性の建設銀行カードにある 1 万元は(本当は使われていないのに)銀行員によって)使われたことにされた)

[东北新闻网 2013-12-05]

(43) 中国 军力 “被 强大”，终 将 误 国 误 民！

中国 軍力 受動 強い 最終的に であろう 誤る 国 誤る 国民  
(事実はそうではないのに)中国の軍力**が強いと(欧米諸国に)**言われていることは、最終的に国や国民の利益を損なうであろう)

[戴旭新浪博客 2009-12-30]

(44) 被小三 和 被 人 当作 假想敌 的 女生 就 在 我们 身边。

受動 愛人 と 受動 人 と思う 仮想敵 の 女性 絶対に いる 私たち 身の回り  
(愛人ではないのに)愛人であることにされてしまう、あるいは仮想敵にされてしま  
う女性たちが私たちの身の回りにいる)

[北方网文化娱乐 2012-09-29]

(41)の「白岩松“被自杀”(白岩松が自殺していないのに記者に自殺したと言われる)」は、元の能動文中の目的語節「白岩松自杀了(白岩松が自殺した)」が主述構造になっており、「自殺する」という行為が「白岩松」の行う動きであり、その主語の意味役割を担う主格名詞「白岩松(白岩松)」が受動文の主語に来る。(42)の「1万元“被消费”(1万元は本当は使われていないのに銀行員によって使われたことにされた)」は、元の能動文中の目的語節「1万元被消费了(1万元が使われた)」では、「使われてなくなった」という変化が「1万元」の動きであり、その主語の意味役割を担う主格名詞「1万元(1万元)」が受動文の主語に来る。同様に、(43)の「中国军力“被”强大(事実はその中国の軍事力が強いと欧米諸国に言われている)」は、元の能動文中の目的語になる主述構造「中国军力强大(中国の軍事力が強い)」では、「強い」という性質・属性が「中国の軍事力」の持つものであり、その主語の意味役割を担う主格名詞「中国军力(中国の軍事力)」が受動文の主語に来る。(44)の「女生被小三(女性が愛人ではないのに愛人であることにされる)」は、元の能動文中の目的語節になる主述構造「女生/她是小三((女性・彼女が愛人である))」では、「愛人である」という属性・状態が「女性・彼女」の持つものであり、その主語の意味役割を担う主格名詞「女生(女性)」が受動文の主語に来る。

このように、(41)-(42)は動的活動、(43)-(44)は静的活動を表す持ち主受動文である。これらの活動を表す目的語節の一部、つまり活動の意味論的な中心である「自杀(自殺する)」、「消费(使う)」、「强大(強い)」と「小三(愛人)」といった動詞、形容詞及び名詞を省略すると非文になる。よって、(41)-(44)は状況活動の持ち主受動文のように等価的な関係が存在せず、非状況活動の持ち主受動文である。有情物主語((41)、(44))であれ、無情物主語((42)-(43))であれ、(41)-(44)の表す事態はいずれも主語指示物、または主語に関連する有情物にとって被害となる。

しかしながら、新型受動文の述語(動詞、形容詞及び名詞)の表す事態が主語指示物、ま

たは主語に関連する有情物にとって、被害ではなく利益になる例文も見られる。例えば、以下のようなものである。

(45)安徽省凤台县连续 多年 财政收入 位居 全省 县财政 收入 的  
地名 省 地名 县 連続する 長年 財政 收入 に位する 全省 県財政 收入 の  
第一位， 却 仍然 戴 着 “安徽省扶 貧 开发  
首位 ところが 相変わらず かぶる 持続 地名 省 救済する 貧困 開発する  
工作 重点 县” 的 帽子， 为什么 就这样 心甘情愿 地 “被  
活動 重点 县 の レッテル なぜ このように 喜んで甘んじる に 受動  
貧困” 呢？

貧困 のか

(安徽省鳳台县は長年連続して財政収入が全省県財政収入の首位に立っているが、相変わらず「安徽省貧困救済、開発活動の重点対象県」というレッテルを貼られている。なぜこのように甘んじて(貧困ではないのに)貧困であることにされるのか)

[百度评论 2010-05-21]

(46)主动 “被 残疾”， 是否 担 刑责？  
積極的 受動 体に障害があること であるかどうか 引き受ける 刑事責任  
(自ら積極的に(体に障害がないのに政府によって)身体障害者であることにされた人は、刑事責任の対象になるか)

[搜狐网 2010-1-13]

(45)の「安徽省凤台县心甘情愿“被贫困”(安徽省鳳台县は甘んじて貧困ではないのに政府に貧困であることにされる)」は、その連用修飾語「心甘情愿(喜んで甘んじる)」からもわかるように、主語「安徽省鳳台县」に関連する有情物にとって、当該事態が利益になる。同様に、(46)の「某人主动“被残疾”(ある人が自ら積極的に体に障害がないのに政府によって身体障害者であることにされる)」は、連用修飾語「主动(自ら積極的に)」からわかるように、当該事態が主語の「ある人」にとって利益になる。このように、事実を無視し、それに反することにされることは当該事態に関連する有情物にとって好ましくないのが一般的であるが、逆にその結果により関連人物が利益を得ることもあり得るのである。

以上のように、新型の持ち主受動文は通常及び日本語の持ち主受動文と五つの点において異なると言える。

第一に、新型の持ち主受動文は通常及び日本語の持ち主受動文と異なり、主語が有情物((41)、(44)、(46))に限らず、無情物((42)-(43)、(45))も可能である。ただし、無情物主語の場合は、(42)のようにその無情物主語「1万元」に何らかの関わりを持つ有情物「ハルビン女性」が想起できるものに限られる。

第二に、新型の持ち主受動文には(42)のような二重受動の用法が存在するが、この用法は通常及び日本語の持ち主受動文には見つからない。つまり、受動文の主語指示物「1万元」が元の能動文中の目的語節「1万元が使われた」では主語の役割を担うが、実は埋め込み文中の述語動詞の表す動作の直接対象となっており、それを受動文にすると、二重受動の意味になるのである。

第三に、形式上、新型の持ち主受動文は通常及び日本語の持ち主受動文と明らかに異なる。通常及び日本語の持ち主受動文はともに述語動詞と活動を表す目的語節の完全形式を持っているが、新型の持ち主受動文は第4章でも述べたように、認定類の述語動詞が言語化されず、しかも活動を表す目的語節あるいは結果節の一部しか表されない。よって、その目的語節の一部が動詞(句)のみならず、形容詞(句)及び名詞(句)によって表現されることもある。このように、元の認定類の述語動詞が言語化されず、「被」受動文では受動形式の「被」に後続するものが述語である、といったことにより、動詞(句)、形容詞(句)及び名詞(句)によって明示された元の目的語節の一部は、新型の持ち主受動文の「述語」としての地位を得るようになったと考えられる。ゆえに、新型の持ち主受動文の「述語」として、通常及び日本語の持ち主受動文のように、動詞(句)は勿論、形容詞(句)、さらに名詞(句)も可能である。

第四に、元の述語動詞においては、新型の持ち主受動文は認定類、つまり言語、思考・認知を意味する動詞に限られ、通常及び日本語の持ち主受動文よりも範囲が狭い。

最後に、通常及び日本語の持ち主受動文の表す事態は例外なく主語指示物にとって被害となるが、新型の持ち主受動文の表す事態は、ほとんど有情物主語または無情物主語に関連する有情物にとって被害となるが、利益となるものもまれに見られる。

以上の考察の結果は下表のようにまとめることができる。

主体-活動関係にある日中語の持ち主受動文の構文的特徴に共通点もあれば、相違点もある。そのうち、特に日本語の持ち主受動文と中国語の通常及び日本語の持ち主受動文との間には共

通点が多く見られる。一方、中国語の新型の持ち主受動文と通常の持ち主受動文及び日本語の持ち主受動文との間には相違点が多く見られる。

表 6-2 主体-活動関係にある日中語の持ち主受動構文の異同点

		日本語	中国語	
			通常	新型
主語		有情物のみ	有情物のみ	有情物と無情物
述語	状況	広範囲に渡る(直接受動と同様)	なし	
	非状況	知覚・感覚、思考・認知、言語・態度	知覚・感覚、思考・認知、言語・態度	言語、思考・認知 (元の述語動詞)
情意性		被害	被害	被害と利益
形式		目的語残存形式	目的語残存形式のみ	目的語残存形式のみ
		述語と活動全体	述語と活動全体	述語略、活動の一部
		動詞のみ	動詞のみ	動詞、形容詞、名詞
使用要因		受影者視点	受影者視点	受影者視点

日中語の持ち主受動文の共通点は、言語、思考・認知を意味する他動詞を(元の)述語とすること、所有物である活動を表す目的語節またはその一部が残留する形式、及び受影者視点という使用要因、との三点にあると言える。

一方、日中語の持ち主受動文の相違点は、状況活動の持ち主受動文は日本語にはあるが、中国語にはないということ、元の述語動詞が言語化されず、形式上の述語が動詞(句)のみならず、形容詞(句)及び名詞(句)によって表される非状況活動の持ち主受動文は日本語にはないが、中国語にはあるということとの二点にある。

### 6.3.3 相互依存関係にある日中語の持ち主受動構文

相互依存関係とは、互いが互いの存在なくしてはありえない二つの事物間に成り立つ関係であり、自らの存在が他者との関係によってのみ規定され得るような関係を指す(勝川2004:195)。相互依存関係の典型例としては、「親-子供」のような親族関係が挙げられる。



また、「先生-学生」のような人間関係も挙げられる。いずれも有情物に限る。「親/先生」が存在してはじめて「子供/学生」は存在し得、同時に「子供/学生」が存在してはじめて「親/先生」は存在し得るように、「親/先生」と「子供/学生」は相互に規定し合う関係体系をなしているのである。こういった親族関係や人間関係は相互依存の上に成り立つという点で不可譲渡性が高いとは言えるが、所有物である人間がその持ち主と一体ではない点では分離可能であり、可譲渡性所有になる。ここから、一般所有関係との連続性を見出す。

相互依存関係にある日中語の持ち主受動文には、元の能動文中の対格の属格名詞が主語に来るタイプと、元の能動文中の主語の役割を担う主格の属格名詞が主語に立つタイプとの二種類が存在する。これらの二種類は使用要因としてはともに、親族に関する事態により主語指示物が利害を受ける、という受影者視点であると考えられるが、述語動詞及び情意性においてははっきり異なる。よって、以下、相互依存関係にある日中語の持ち主受動文をこの二つのタイプに分けて考察していく。なお、便宜上、これらの二種類はそれぞれ「対格の属格類」、「主格の属格類」と呼ぶことにする。

### 6.3.3.1 対格の属格類の持ち主受動構文

凌蓉(2005:139)は、(47)-(50)のように親族名詞を目的語とする持ち主受動文は日本語と比べて、中国語では実生活にめったに用いられず、極めて少ないと指摘している。

(47) 私は警官に息子を殴られた。

a. 中国語訳: 我被警察{ ???打了儿子/???把儿子打了 }

[仁田 1992:351]

(48) 僕は、子供を先生に褒められた。

a. 中国語訳: 我被老师{ ???表扬了孩子/???把孩子表扬了 }

[谷口 2005:309]

(49) 刘桂英 不再 问 了， 她 紧紧地 抱 着 平波， 像

人名 もう-しない 聞く 完了 彼女 しっかりと 抱く 持続 人名 のように

怕 被 人 把 这一个 女儿 也 抱 走。

怖がる 受動人 処置 この 娘 も 抱く 去る

(劉桂英はもう聞かないで、人にこの娘も奪い去られるのを怖がるように、平波を

しっかりと抱いている)

[闫娇莲 2008:10]

(50)她 像 一个 被 人 抢 走 了 妈妈 的 孩子(後略)

彼女 のように 一人 受動 人 奪う 去る 完了 母親 の 子供

(彼女は母親を奪い去られる子どものように(後略))

[対訳 青春之歌]

(47)-(50)はいずれも目的語名詞「息子」、「子供」、「女儿(娘)」、「妈妈(母親)」が当該受動構文の主語指示物「私」、「僕」、「刘桂英(劉桂英)」、「孩子(子供)」の親族であるため、相互依存関係にある持ち主受動文である。これらは、つまり山内(1997)でいうヲ格あるいは対格の属格が受動文の主語に来る持ち主受動文である。情意性においては、(48)は他の三文と異なる。(48)は「先生が子供を褒めた」という「子供」に関連する事態により、主語指示物の「僕」は被害・迷惑ではなく、むしろ利益あるいは恩恵を受けたということを表す。このような利益の用法は中国語では見つからない。

持ち主受動文の対格の属格類においては、「結果の明示化」という相違が日中語に見られる。中国語では、「殴る」や「褒める」といった対象非変化の動詞は(47)-(48)の中国語訳に示すように、日本語と同様に、そのまま持ち主受動文の述語としては用いられないが、(49)のように、「抱(抱く)」という接触動詞に結果補語「走(去る)」が後置すると、ごく自然な持ち主受動表現になる。

また、(50)のように「抢(奪う)」という取消を意味する対象変化の他動詞による持ち主受動文はその結果補語「走(去る)」が削除されても成立するが、結果補語を伴うほうがより自然である。つまり、対格の属格類では、中国語は影響性の強い動詞が要請されるが、日本語はそのような制約がかからないのである。

持ち主受動構文の対格の属格類においては、日中語の相違をまとめると、以下のようなになる。まず、述語動詞に関しては、日本語に比べて中国語のほうが述語動詞に対する制約は厳しい。また、情意性については、日本語には被害のみならず、利益の意味を持つものも見られるが、中国語には被害の意味を表すもののみである。

### 6.3.3.2 主格の属格類の持ち主受動構文

6.3.3.1 では対格の属格類について考察してきたが、本節では主格の属格類について検討する。上述したように、二種類は述語動詞に対する制限及び情意性においては異なる。対格の属格類に比べて、主格の属格類は、述語動詞が他動詞に限られず、自動詞も可能である。また、情意性においては、被害しか見つからない。

(51) 太郎は母に死なれた。

a.元の能動文:太郎の母が死んだ

[例(14)再掲]

(52) 女子 被 儿子 吵 醒 将 其 残忍 杀 死

女性 受動 息子 騒ぐ 醒める 処置 彼 残酷 殺す 死ぬ

(女性は息子に騒がれて目が覚めたので、彼を殺した)

a.元の能動文:女子的儿子吵

[华东在线 2015-04-16]

(53) 太郎が娘に学校を辞められた。

a.元の能動文:太郎の娘が学校を辞めた

[町田 2004:395]

(54) 祝大 刚要 开口, 早 被 他老婆 抢着 说道(略)

人名 したときに 口を開く 早く 受動 彼 女房 先を争う 言う

(祝大が口をひらきかけたとき、女房のほうから口を出した)

a.元の能動文:他老婆抢着说道

[対訳 霜叶红似二月花]

日本語では、(51)の「太郎は母に死なれた」は、主語名詞「太郎」と行為主体名詞「母」との間、(53)の「太郎が娘に学校を辞められた」は、主語名詞「太郎」と行為主体名詞「娘」との間には親族関係が存在するため、相互依存関係にある持ち主受動文である。同様に、中国語では(52)の「女子被儿子吵醒(女性は息子に騒がれて目が覚めた)」は、主語名詞「女子(女性)」と行為主体名詞「儿子(息子)」との間、(54)の「祝大被他老婆抢着说道(祝大が女房に横から口を出された)」は、主語名詞「祝大(祝大)」と行為主体名詞「他老婆(彼の女房)」

との間には親族関係が存在するため、相互依存関係にある持ち主受動文である。

このように、日中語の持ち主受動文の主格の属格類では、動詞の影響性がどうであれ、あるいは他動詞((53)-(54))であれ、自動詞((51)-(52))であれ、主語名詞と行為主体名詞とが親族関係といった相互依存の関係にあるならば、述語動詞として用いられる。また、主格の属格類は対格の属格類と異なり、いずれも有情物持ち主主語にとって、述語動詞の表す事態が被害となり、(48)のように利益になるものはない。ただし、(51)-(54)のようにその被害といった結果の意味の明示化においては、日中語に顕著な相違が見られる。すなわち、日本語では、(51)、(53)のようにそのような被害の意味は含意にとどめ、言語化しないが、中国語では(52)、(54)のように、「醒(目が覚めた)」、「早-抢着(先に-先を争う)」と前後の文脈で明確に言語化する。このことは、第7章で述べるように、日中語の第三者受動構文にも言える。

以上のように、対格の属格類に比べて、主格の属格類は、日中語はともに述語動詞の影響性が要求されないが、中国語のほうが日本語より述語動詞に対する制限が厳しい。また、被害の意味の明示化においては、日中語には相違が見られる。日本語は被害の意味を含意にとどめ、明示しない傾向が強いのに対し、中国語は被害の意味を具体的に明示する傾向が強い。さらに、情意性については、対格の属格類と異なり、日中語はともに被害の意味を持つものしか見つからない。

#### 6.3.4 同一関係にある中国語の持ち主受動構文

同一関係とは、同じ人または同じ事物を表す受動文の主語と目的語の関係のことを言う(凌蓉 2005:139-140)。この関係にある受動文は日本語には存在しないが、中国語には通常の持ち主受動文としてよく見かけられ、新型の持ち主受動文としては用いられない。この場合、中国語における通常の持ち主受動文の目的語はほとんど、「我(私)」、「他(彼)」、「它(それ)」、「她们(彼女たち)」などの代名詞を用い、受動者として「把」によって導入される。つまり、中国語では、同一関係にある通常の持ち主受動文は目的語残存の形式を持たず、「把」を伴う形式しかない。

代名詞は談話内ですでに確立された、指示対象の構造的支配領域内に起こらなければならないとされる。こういった代名詞の照応関係が所有構文(例:医者<sub>1</sub>の財布<sub>2</sub>)と同様に、参照点関係の表れとして挙げられるため、本論文では、同一関係を所有関係の特殊例として位

置づける。つまり、同じく参照点関係が関与しているものではあるが、典型的な所有関係では持ち主と所有物は別のものを指すのに対し、代名詞の照応関係では代名詞と先行詞は同じものを指す。代名詞が先行詞の支配領域内でなければ非文となるため、同一関係における代名詞と先行詞は分離不可能な関係にあると言えよう。

同一関係にある中国語の持ち主受動文は、主語と同じ事物を表す目的語及びその前置詞「把」を省略し、両者の意味に矛盾が生じず、つまり含意関係を持っている。ここから、この種の持ち主受動文と直接受動文との連続性が窺える。

(55) 那个 孩子 被 人 把 他 打 了 一 顿。

その 子供 受動 人 処置 彼 殴る 完了 数量

(その子供は人に彼を殴られた)

[刘月华他訳一部修正 1991:645]

(55)の「那个孩子被人把他打了一顿」は、「把」を伴わない直接受動表現「那个孩子被人打了一顿(その子供は人に殴られた)」と基本的に同じ客観的事態を表すが、主語名詞「那个孩子(その子供)」と目的語代名詞「他(彼)」は同格指示するものである。刘月华他(1991:645)によると、このような受動文は話し言葉にしか現れないという。ほかに、李临定(1986)、李珊(1993)、凌蓉(2005)においても、この「同一関係」にある受動文を言及しているが、その使用要因については特に論じていない。

以下、「把」を伴わない直接受動構文と比較しながら、このような同一関係にある持ち主受動構文の使用要因を明らかにする。

まず、話者が直接的に影響を受けた動作対象、つまり直接受動文の主語指示物を強調するため、代名詞を用い、それを再び受動者として「把」によって導入されるということが考えられる。つまり、受動者強調という語用論的要因が同一関係にある持ち主受動構文の使用に関わる。

(56) 李槐英 和 黄梅霜 也 被 刘文蔚 把 她们 分 在 两张 桌子

人名 と 人名 も 受動 人名 処置 彼女たち 分ける に 二つ テーブル  
上 了。

上 完了

(李槐英と黄梅霜も、劉文蔚に案内されて、別べつのテーブルにわかれて着席した)

[対訳 青春之歌]

(57) 他 得 睁 着 眼，清清楚楚的 看 着，到底  
彼 しなければならない あける 持続 目 はっきりと 見る 持続 いったい  
怎样 被 别人 把 他 推 下去。  
どのように 受動 他人 処置 彼 押す 落ちる  
(いったいだれが、どんなふうにおれを泥沼につきおとすか、はっきり見さだめてやるのだ)

[対訳 骆驼祥子]

例えば、(56)の「李槐英和黄梅霜也被刘文蔚把她们分在两张桌子上(直訳:李槐英と黄梅霜も劉文蔚に分けられて別々のテーブルに着席した)」は、目的語代名詞「她们(彼女たち)」が主語名詞「李槐英和黄梅霜(李槐英と黄梅霜)」と同じ人間を指すため、同一関係にある持ち主受動文である。(56)の持ち主受動表現は、「把」を伴わない直接受動表現「李槐英和黄梅霜也被刘文蔚分在两张桌子上(直訳:李槐英と黄梅霜も劉文蔚に分けられて別々のテーブルに着席した)」とは同じ客観的事態を表すが、「把」を伴う持ち主受動表現のほうが「把」を伴わない直接受動表現よりも処置の意味が強く、受動者主語名詞句「李槐英と黄梅霜」を強調するニュアンスを持っていると考えられる。このことは(57)にも当てはまる。

(58) 如同 一间 房子 那么 大 的 货物，据说 有 一万多 斤 重，  
まるで-のようだ 一間 家 ほど 大きい の 貨物 そうだ ある 一万余り 斤 重さ  
在 陈师傅 带领 呼喊 的 号子声 里，在 众人 汇合 成 一股 力量  
に 陳親方 指揮する 叫ぶ の かけ声 に に みんな 合流する なる 数量 力  
的 滚撬 牵拽 之下，在 稳稳地 移动 着，一节一节地 移动 着；最后，  
の てこ 引く 下で に 徐々に 移動する 持続 ゆっくりと 移動する 持続 最後に  
终于 被 人们 把 它 运 进了 那个 新 修 起来  
とうとう 受動 みんな 処置 それ 運ぶ 入る 完了 あの 新しく 建てる て上がる  
的 大库房 里。

の 大倉庫 に

(家ほどの大きさもあろうかというこの貨物は、五十トンをこえるということであつ

たが、陳親方のあげるかけ声を音頭に、総がかりでロ-プを引き、テコをかませるみんなの力で、ゆっくりと動き始め、徐々に徐々に移動し、とうとうあのできたばかりの大倉庫の中へ運びこまれた)

[対訳 金光大道]

一方、(58)は無情物主語の持ち主受動文であり、(56)-(57)と異なり、語用論的要因よりも構造上の要因のほうが適切であると考えられる。すなわち、(58)では、「如同一間房子那么大的货物(家ほどの大きさもあろうかというこの貨物)」という主語名詞句が複雑で、「被人们运进了那个新修起来的大库房里(みんなにあのできたばかりの大倉庫の中へ運びこまれた)」という述部も複雑で、両者の距離が大きいため、代名詞「它(それ)」を用い、主語指示物を再び受動者として「把」によって導入されるのである。要するに、主語と述部が複雑で、両者の間にかなりの距離があるといった構文的要因によって、受動文の主語指示物が代名詞で再び受動者として「把」によって導入されるのであると考える。

このように、中国語では同一関係にある持ち主受動文は、日本語の状況活動の持ち主受動文と同様、実際の用例は多くはなく、述語動詞が直接受動文と同様、広範囲に渡る。そして、(56)-(58)のように結果の明示化が要請されている。また、(58)のように无情物主語も可能であるため、情意性においては、被害のみならず、中立的であるものもある。同一関係にある持ち主受動文は「把」を伴わない直接受動文と同じ事態を表すが、受動者強調という語用論的要因や、主語と述部が複雑である、両者の距離が大きいなどの構文的要因によって使用されると考える。

### 6.3.5 その他の所有関係にある日中語の持ち主受動構文

以上、日中語において主体-活動関係、相互依存関係及び同一関係にある持ち主受動構文について考察してきた。本節では、全体-部分関係、本体-属性関係及び一般所有関係にある持ち主受動構文について分析する。

#### 6.3.5.1 全体-部分関係にある日中語の持ち主受動構文

全体-部分関係において、持ち主が有情物(人間や動物)である場合、その身体部位を表す

部分名詞、持ち主が無情物である場合、その一部を表す部分名詞が挙げられる。身体部分の類には、手、足、頭、髪などの身体部位や、汗、糞尿などの排泄物が属す(角田 2009:128)。人間や動物とその身体部位、無情物とその一部が不可分な関係であることは言うまでもない。

以下、持ち主を有情物と無情物との二つに分けて、全体-部分関係にある日中語の持ち主受動構文について、その構文的特徴における異同点を考察していく。

### 1) 有情物主語の持ち主受動構文

日本語においても、中国語においても、有情物主語の持ち主受動文は典型例として、(59)-(60)のような対象非変化の接触動詞によるものが挙げられる。こういった持ち主受動文は所有物を表す目的語名詞を省略しても、両者の意味に矛盾が生じない。

(59) のび太君はジャイアンに頭を殴られすぎたから馬鹿になったんですか？

a. 元の能動文:ジャイアンがのび太君の頭を殴った

[少納言 Yahoo!知恵袋]

(60) 他 被 敌人 打 伤 了 腿。

彼 受動 敵 殴る 負傷する 完了 足

(彼は敵に足をやられた)

a. 元の能動文:敌人打伤了他的腿

b. 「把」を伴う形式の持ち主受動文:他被敌人把腿打伤了

[勝川訳 2013:171]

この関係にある日中語の持ち主受動文の典型的な特性とは、分離不可能な部分に対する働きかけが直ちに持ち主である全体に対する働きかけを表すといったことを意味している(仁田 1992:345)。(59)-(60)を例に取れば、以下のことが観察される。「頭を殴る」、「打伤脚(足をやる)」といったことは、誰かを殴ることであると同時に、「のび太君を殴る」、「打伤他(彼をやる)」といったことは、のび太君と彼のどこかを殴ることである。

上述したように、こういった持ち主受動文は所有物を表す目的語名詞を省略しても、両者の意味に矛盾が生じない。しかしながら、事態把握の観点から見ると、詳述性と話者の主語名詞への当該受動事態における参与者解釈との二点で異なると考える。

一つは詳述性においてであるが、例えば、中国語において、(60)は目的語残存の持ち主受



動文であり、「把」を伴う形式の持ち主受動文に置き換えられるが、両者は意味的にニュアンスが異なる。すなわち、所有物を省略した持ち主主語の直接受動文、「他被敌人打伤了(彼は敵にやられた)」と比べて、持ち主受動文の両形式は所有物の情報も入っているので、持ち主の視点からより詳しく当該受動事態を述べている、という共通点がある一方、「把」を伴う形式の持ち主受動文のほうが目的語残存形式の持ち主受動文よりも話者は所有物である身体部位が誰かによってどのような処置や影響を受けたのかを強調する意味合いが強い。

もう一つは、話者の主語名詞への当該受動事態における参与者解釈のことである。すなわち、目的語を省略した直接受動文と目的語残留の持ち主受動文は主語名詞が同じであっても、話者は主語指示物を、前者では直接的な影響を受けた受動者、後者では間接的な影響を受けた受影者として解釈するのである。例えば、(59)では、「のび太君がジャイアンに頭を殴られた」は、主語の「のび太君」が「ジャイアンが頭を殴る」という事態から間接的に影響を受けた、と解釈できるが、目的語名詞を省略した「のび太君がジャイアンに殴られた」は、主語の「のび太君」が「ジャイアンが殴る」という事態から直接的に影響を受けた、と解釈しかできない。こういった影響の直接性と間接性の区別は直接受動文から持ち主受動文へ、さらに第三者受動文へと拡張する過程、及び直接受動文から使役受動文へと拡張する過程で重要な意味を持つため、本論文は影響の直接性によって、受動文の主語指示物は受動者と受影者との区別をつける。

本論文では、「受動者」とは直接的に影響を受ける存在のことをいう。それに対し、「受影者」とは間接的に影響や利害を受ける存在のことをいう。同じ事態における同一の存在が受動者としても、受影者としても解釈できる場合はある。例えば、彼が私の頭を殴ったという事態において、「私」という存在が受動者として解釈すれば、「私が彼に殴られた」と表現するが、「私」が受影者として解釈すれば、「私が彼に頭を殴った」と表現するのである。

すでに仁田(1992:345)が指摘したように、人に対する接触といったこの種のタイプの動きでは、ある身体場所において接触することにおいてしか、人に対する接触動作を実現することができない。換言すれば、<接触動作を行う動作主>、<接触される相手>、<接触場所>といった三つの要素が必要とされるのであり、しかも<接触相手>と<接触場所>は分離不可能な所有関係にある。こういった接触動詞は(59)-(60)に示すように、能動文において三項述語として実現されることはない(仁田 1992:344)が、受動文にすると、(61)-(62)のような三項動詞による直接受動文と同様の文法的ふるまいをする。

(61) 子供はジョンにその本を与えられた。

a.元の能動文:ジョンが子供にその本を与えた

[岸本 2013:214]

(62) 小李 被 小王 送 了 一张 好人卡。

李さん 受動 王さん おくる 完了 一枚 よい人カード

(李さんは王さんによい人カードをおくられた)

a.元の能動文:小王送了小李一张好人卡

[于康訳 2013:12]

つまり、(59)-(60)のような持ち主受動文は(61)-(62)のような直接受動文と同様に、述語動詞が「ガ格、ニ格、ヲ格」、「動作相手、動作主、動作対象」を表す与格、主格と対格の三項を取るのである。ここから、持ち主受動構文と直接受動構文との連続性が窺える。これら二種類の受動構文の相違を言うと、結合価の増加にあると言える。すなわち、(59)-(60)のような持ち主受動文においては、元の能動文は述語動詞が二項しか取ることができないが、受動化すると三項を取ることができる。一方、(61)-(62)のような直接受動文においては、元の能動文と同様に、受動文は述語動詞が三項を取る。

ここでは、対象非変化の接触動詞による持ち主受動文に見られる日中語の構文的相違を一点指摘しておく。

日本語では、(59)のように「殴る」といった対象非変化の接触動詞のみで述部として成り立つが、中国語では、(60)のように「打(殴る)」という対象非変化の接触動詞に「伤(負傷する/傷つく)」といった動詞による結果補語、つまり対象変化を表す成分を付加してはじめて述部として成り立つ。つまり、結果補語のない形式、「他被敌人打了腿(直訳:彼は敵に足を殴られた)」、「他被敌人把腿打了(直訳:彼は敵に足を殴られた)」は結果が明示された形式、「他被敌人打伤了腿(直訳:彼は敵に殴られて足が負傷した)」、「他被敌人把腿打伤了(直訳:彼は敵に足を殴られて負傷した)」と比べて落ち着かなく、容認性が落ちる。要するに、中国語は結果の意味及びその明示化が要請されるが、日本語はそのような制約がかからない、ということである。このような日中語の相違は、接触動詞による持ち主受動文のみならず、他のタイプの動詞による持ち主受動文、さらに持ち主受動文以外のほかの受動文、つまり直接受動文や、使役受動文、第三者受動文などにも見られる。

また、(63)-(64)のように慣用的な表現として対象非変化の接触動詞によるものも見られる。こういった例文は(59)-(60)のようなものと異なり、目的語名詞を省略して、両者の意味に矛盾が生じる。

(63) 春子は心を打たれ、やや暫くその紙面を見つめていた。

[于康 2012:4]

(64) 当心 被 经理 打 屁股!

気をつける 受動 社長 叩く お尻

(気をつけてね。社長に怒られないように)

a. 「把」を伴う形式の持ち主受動文: # 当心被经理把屁股打!

[于康訳 2012:5]

「心を打たれる」と「被打屁股(直訳:尻を叩かれる(怒られる))」は日中語において、それらの目的語と動詞がコロケーションであるため、その構成成分がそれほど自由に動くことができない。それぞれの目的語名詞を省略し、「春子が打たれる」、「(你)被经理打(あなたが社長に叩かれる)」としても成り立つが、両者の表す意味は明らかに異なる。このように、日中語において、目的語と動詞がコロケーションであるならば、目的語はそのまま元の位置に残存する形式の持ち主受動表現になるのである。つまり、構文的制約によって、日中語はともに持ち主受動文が用いられる。

なお、中国語において、(64)のような慣用的な受動表現は(64)aに示すように、「把」を伴う形式の持ち主受動表現にすると、元の受動表現と異なる意味になる。

これまで、対象非変化の接触動詞による日中語の持ち主受動文を見てきた。一方、接触動詞には対象変化をもたらすものもある。このような接触動詞を含んだ対象変化の動詞、仁田(1992:341)でいう「様変えの動詞」はよく持ち主受動文の述語として用いられる。例えば、(65)-(67)のような例文である。

(65) 花子は太郎に髪を切られた。

[山内 1997:127]

(66) 有一天, 他 果然 被 人 剪 去 了 辮子。

ある日 彼 やはり 受動 人 切る 離れる 完了 辮髪

(ある日、彼は案の定辮髪を切り取られた)

a. 「把」を伴う形式の持ち主受動文:有一天,他果然被人把辮子剪去了

[勝川訳 2013:172]

(67)莫大年 问:“听说 你 被 军阀 把 天灵盖 掀 了。”

人名 聞く そうだ あなた 受動 軍閥 処置 頭蓋骨 取る 完了

(「あなたは軍閥によって頭蓋骨を割られたそうだね」と莫大年が聞いた)

[温琳訳 2011:201]

(65)-(67)は対象変化の接触動詞「切る」、「剪(切る)」、「掀(取る)」による日中語の持ち主受動文である。(65)の「花子は太郎に髪を切られた」の目的語名詞を省略した形式、「花子は太郎に切られた」は元の形式と意味的に矛盾が生じる。同様に、(66)の「他被人剪去了辮子(彼は人に辮髪を切り取られた)」の目的語名詞を省略し、「他被人剪去了(彼は人に切り取られた)」という形式は受動文としては成立できなくなる。(67)の「你被军阀把天灵盖掀了(あなたは軍閥によって頭蓋骨を割られた)」の「把」及びその目的語名詞を省略し、「你被军阀掀了(あなたは軍閥によって割られた)」という形式は受動文としては成り立たない。

つまり、こういった対象変化動詞による持ち主受動文においては、所有物である目的語名詞がなければ意味的に矛盾が生じるか、または受動文としては成立できなくなるため、持ち主の視点から当該事態を受動文で述べると、持ち主受動文しかできない。しかしながら、所有物の視点から当該事態を受動文で述べることもできる。だが、有情物である持ち主のほうが無情物である所有物よりも際立つため、概念化者である話者は受動者視点ではなく、受影者視点を取るのが自然であると考えられる。要するに、こういった持ち主受動文は有情物である持ち主の受けた間接的な影響・利害を述べるため、いわゆる「受影者視点」という語用論的要因によって用いられると考える。

対象変化の動詞による持ち主受動文においても、日中語に結果の明示化という相違が見られる。すなわち、日本語では、(65)のように「切る」といった対象変化の接触動詞のみで成り立つが、中国語では、(66)のように「剪(切る)」という対象変化の接触動詞のみならず、それに「去(離れる/取る)」といった動詞による結果補語、つまり対象変化を具体的に表す成分を付加したほうが結果補語のない形式よりも自然である。要するに、中国語は結果の意味を具体的に明示する傾向があるが、日本語はそのような傾向が見えない、ということである。

使用要因として、日中語の持ち主受動文は上述した構文上の制約と受影者視点以外、持ち主主語指示物の状態・様態を詳しく描写する、といった状態描写の要因も挙げられる。例えば、以下のようなものである。

(68) 太郎は頭を布で覆われている。

[表 2004:37]

(69) 二台電車をやり越し、三台目に乗った。克平は背をアルさんに押されて、むりやりに詰め込まれた格好だった。

(让过两辆后，他们挤上第三辆电车。克平被乙醇推着脊梁，好不容易挤了上去)

a. 克平被乙醇{ ○推着脊梁/×把脊梁推着 }，好不容易挤了上去

[対訳 あした来る人]

(68)の「太郎は頭を布で覆われている」は持ち主主語の「太郎」の現在の状態「頭を布で覆われている」を詳しく描写している。また、(69)の「克平は背をアルさんに押されて」は中国語の「克平被乙醇推着脊梁(克平は背をアルさんに押されて)」に対応している。こういった持ち主受動表現はそれらの目的語「背」を省略し、「克平はアルさんに押されて/克平被乙醇推着」としても両者の意味には矛盾が生じない。しかしながら、後続文脈からもわかるように当該受動表現は、主語指示物である「克平」の「格好」を描写するため、つまり様態描写によってより詳しく当該受動事態を述べている。よって、所有物を表す目的語を省略した持ち主主語の直接受動文と比べて、所有物と共起する持ち主受動文のほうがふさわしいのである。

中国語において、(69)aからもわかるように、このような様態を描写するために用いられる目的語残存形式の持ち主受動文は「把」を伴う形式に置き換えると不自然になる。それは「把」構文が処置といった動的な意味を表すため、状態や様態の描写という静的な意味と矛盾するためだと考える。つまり、持ち主の様態をより詳しく描写することが日中語における持ち主受動文の使用要因の一つとして挙げられる。

後述するように、このような有情物主語の状態・様態を描写するために用いられる持ち主受動文は無情物主語の持ち主受動文と連続体をなしていると考えられる。

最後に、情意性の面においては、以上挙げた例文からもわかるように、日中語の持ち主受動文はともに、ほとんど有情物主語の持ち主にとって被害となるが、まれに利益になる

例文も見られる。

(70) 父親は息子に肩をもまれて気持ちよさそうだ。

(71) 被 男朋友 牽 着 手 逛街 真 好。  
受動 彼氏 引く 持続 手 街をぶらつく 本当に よい  
(彼氏に手を引かれて街をぶらつくのが最高だ)

[百度贴吧 2015-10-09]

(70)は「息子に肩をもまれる」ことで、持ち主主語の「父親」が「気持ちよさそうだ」という様態を表している。同様に、(71)は「彼氏に手を引かれる」という様態で「街をぶらつくのが最高だ」という意味を表している。それぞれ主語指示物にとっての利益の意味が後続文脈で明示されている。このような利益を意味する日中語の持ち主受動文は、状態描写のため用いられるものに限られる。

要するに、状態描写によって使用される日中語の持ち主受動文は当該事態が主語指示物にとって被害でも利益でもなく中立となる場合もあれば、利益になる場合もある。また、構文上の制約によって用いられる日中語の持ち主受動文は被害、中立及び利益のいずれも可能であるが、受影者視点による日中語の持ち主受動文はすべて被害・迷惑となる。

## 2) 無情物主語の持ち主受動構文

日本語の持ち主受動構文に関する先行研究はほとんど有情物主語のものに限られるが、無情物主語のものも存在する。日本語の無情物主語の持ち主受動文に関しては、影山(2006)は詳しく考察を行っている。本論文はそれを参照に、中国語と対照しつつ考察を進めていく。

影山(2006)によると、日本語において、状態変化動詞、使役性を含意しない他動詞、いわゆる「非対格構造の他動詞」<sup>67</sup>及び状態動詞との三種類の他動詞は無情物主語の持ち主受動文の述語として用いられる。一方、中国語においては、これら三種類のうち、状態変化動詞しか持ち主受動文の述語として用いられない。

(72) 隣の家が突風に屋根を{ ○吹き飛ばされた/×吹かれた }。

<sup>67</sup> 詳しくは、影山(2006:216)を参照。

(73)帆布 篷 裂 了 几条 大 口, 舵楼 坏 了 半边, 左舷  
ズック 苫 裂ける 完了 いくつか 大きい 裂け目 操舵室 壊れる 完了 半分 左舷

被 桥洞 的 石壁 擦 去 了 一片 皮……

受動 橋脚間の空洞 の 石壁 擦れる 離れる 完了 一切れ 皮

(カンバスは数カ所で大きく裂け、操舵室は半分がこわれ、左舷の鉄板が一枚、橋  
の石の壁でこすれてはがれていた)

a. 左舷被桥洞的石壁{ ○擦去/×擦 }了一片皮

b. 「把」を伴う形式の持ち主受動文: ?左舷被桥洞的石壁把一片皮擦去了

[対訳 霜叶红似二月花]

(72)は状態変化動詞「吹き飛ばす」による日本語の持ち主受動文、影山(2006:205)でいう「状態変化受動文」であるが、その動詞を継続的アスペクトの働きかけ動詞(例:吹く)に置き換えると、非文法的ないし極めて不自然な文になる。このことは中国語の無情物主語持ち主受動文にも当てはまる。(73)a に示すように、「左舷被桥洞的石壁擦去了一片皮(直訳:左舷が橋の石の壁で鉄板一枚をこすり取られた)」の結果補語を表す動詞「去(離れる/取る)」を削除すると、「左舷被桥洞的石壁擦了一片皮(直訳:左舷が橋の石の壁で鉄板一枚をこすられた)」は非文法的ないし極めて不自然な文になる。また、(73)b のような目的語残存形式の無情物主語の持ち主受動文は、「把」を伴う形式の持ち主受動文に置き換えると、極めて不自然な表現になる。それは、当該無情物主語の持ち主受動文は、所有物が誰かまたは何かによってどのような処置や影響を受けたのかを述べるのではなく、主語の持ち主である無情物に状態変化が起きた、ということを表すためであると考えられる。よって、その一部である所有物をわざわざ受動者として「把」によって導入する必要がないのである。

このように、中国語の持ち主受動文は主語の生物性の如何に関わらず、主語指示物に起きた状態変化といった結果の意味及びその言語化が要請される。この特徴は、使役性を含意しない他動詞、影山(2006:216)でいう「非対格構造の他動詞」及び状態動詞による日本語の持ち主受動文に対応する持ち主受動文は中国語においては存在しない、ということからも窺える。

(74)富士山は山頂を新雪{ に/で }覆われていた。

[影山 2006:217]

a.○富士山は、まだ山頂を新雪{ に/で }覆われていた

b.現在形:富士山は来月には、山頂を新雪{ に/で }覆われる <習慣、将来の見込み>

(75)日本語の国土は大半を山地で占められている。

[影山 2006:220]

a.×日本語の国土は、まだ大半を山地で占められている

b.現在形:日本語の国土は大半を山地で占められる <現在の状態>

(74)は「覆う」という使役性を含意しない他動詞による持ち主受動文、影山(2006)でいう「性質変化受動文」であり、(75)は「占める」という状態を表す他動詞による持ち主受動文、影山(2006)でいう「状態性の受動文」である。これら二つのタイプの異同点については、すでに影山(2006:220-221)が指摘したように、両者は「ている」形をつけると、ともに現在の状態を表すが、状態性のアスペクトにおいて際立って異なる。すなわち、(74)の a、b からわかるように、「覆う」のような非使役他動詞による持ち主受動文は「まだ」という副詞との共起から、その状態は一時的で、時間とともに推移する可能性があるということがわかる。したがって、現在形で現在の状態を表すことができない。一方、(75)の a、b に示すように、「占める」のような状態動詞による持ち主受動文は「まだ」という副詞と共起すると非自然になるといったことから、その状態は時間に影響されない恒常的な状態であることがわかる。よって、現在形で現在の状態を表現するのである。

以上のように、日中語において、無情物主語の持ち主受動文の使用要因として、前述した状態描写という語用論的要因が挙げられる。ただし、この「状態」は中国語では状態変化に限られるが、日本語では状態変化のみならず、性質変化及び静的状態も含まれる。また、情意性においては、無情物主語の持ち主受動文は日中語ともに中立的であることは言うまでもない。

以上、主語の有生性によって有情物と無情物に分けて、述語、テンス・アスペクト及び情意性といった面から、日中語の持ち主受動文についてそれらの構文的特徴を分析してきた。二項動詞の持ち主受動文と三項動詞の直接受動文との連続性、無情物主語の持ち主受動文と状態描写の有情物主語の持ち主受動文との連続性が窺えた。

構文的特徴においては、日中語に見られる共通点と相違点は以下のようにまとめられる。



まず、共通点としては、以下の二点が挙げられる。

- 1) 述語動詞においては、全体-部分関係にある日中語の持ち主受動文は主に接触動詞(対象変化動詞と対象非変化動詞を含む)によるものである。これは接触動詞の語彙的意味に関わると考える。つまり、接触という動きでは、ある部分において接触することにおいてしか、その全体に対する接触動作を実現することができない<sup>68</sup>。
- 2) 情意性においては、対象変化接触動詞による無情物主語の持ち主受動文はすべて中立的であるが、有情物主語の持ち主受動文では、ほとんど被害となるが、利益となるものもまれにある。

また、相違点としては、次の三点が言える。

- 1) 述語動詞に関しては、使役性を含意しない他動詞や状態を表す他動詞は日本語では持ち主受動文の述語として用いられるが、中国語では、それらの動詞は影響性が弱い  
ため、持ち主受動文の述語としては用いられない。
- 2) 中国語では持ち主受動文は結果の意味及びその明示化が要請されるが、日本語では「結果の明示化」という制約がかからない。中国語では、対象非変化の接触動詞に結果補語が後続されないと持ち主受動文としては成り立たないということ、対象変化の接触動詞による持ち主受動文でも結果が補語によって具体的に明示されるほうがより自然だということ、及び使役性を含意しない他動詞や状態他動詞が持ち主受動文の述語としては用いられないといったことはすべて「結果の明示化」という制約に関わる。
- 3) 構文的形式に関しては、日本語は目的語残存の形式しかないが、中国語は目的語残存の形式のみならず、「把」を伴う形式も可能である。

また、日中語の持ち主受動構文の使用要因として、主に以下の三つが挙げられる。

- 1) 所有物を表す目的語を省略、または他の位置(主語など)に移動すると、当該受動表現が成立できなくなる、という構文上の制約が挙げられる。その典型例は「心を打たれる」、「被打屁股(怒られる)」のように慣用的な受動表現である。
- 2) 所有物を表す目的語を省略しても二つの受動表現は意味的に矛盾が生じない場合、話者が持ち主の状態、あるいは様態を詳しく描写するため、持ち主受動文は用いられる。

---

<sup>68</sup> これについて、詳しくは仁田(1992:345)を参照のこと。

- 3) 所有物に加えられた働きかけにより、有情物持ち主が利害あるいは影響を受ける場合、話者が持ち主に共感する立場でそれを受動者ではなく、受影者として当該受動事態を述べるため、持ち主受動文は用いられる。これは本論文では仮に「受影者視点」といい、状態描写と同様に、語用論的要因と言えよう。

#### 6.3.5.2 本体-属性関係にある日中語の持ち主受動構文

本体-属性関係とは、所有物が持ち主の持つある側面的特徴や性質・属性の類概念を表すものである(勝川 2008b:395)。本論文では、属性には、身長、体重、血液型、健康状態(有情物の場合)など、サイズ、材質、デザイン(無情物の場合)などの準身体的所有物や、感情、意識、思考・認知などの精神的所有物、国籍、年齢、名前、身分、職業、価格などの社会的所有物(勝川 2008b:395)、及び「底」、「側」などのような相対的な空間概念(桃内 2004:137)が含まれる。この関係において、所有物である属性が本体の具備している性質であるため、持ち主とは分離不可能な関係にあると言える。

この関係にある日中語の持ち主受動文は、(76)-(78)のように有情物主語もあれば、(79)-(80)のように無情物主語もある。そして、主に取消、受け取りを意味する対象変化動詞、つまり影響性の強い他動詞によるものである。

- (76) 狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌は中々達者だから、  
まずい事を喋舌って揚足を取られちゃ面白くない。

[対訳 坊ちゃん]

- (77) 那时候 他 犯 了 错误, 被 撤 了 职, 在 总政治部 编  
その頃 彼 犯す 完了 間違い 受動 免ずる 完了 職 で 総政治部 編集する  
红星报。  
紅星報

(そのころ、彼は間違いをしでかして免職されてね、総政治部で紅星報を編集していたの)

[対訳 我的父亲邓小平]

- (78) 1992 年, 又 被 人 用 硫酸 把 容貌 毁 成 这样。  
1992 年 また 受動 人 用いる 硫酸 処置 容貌 壊す なる このように

(1992年に、また人に硫酸で容貌を損なわれてこのようになってしまった)

a. 目的語残留形式: ×1992年, 又被人用硫酸毁容貌成这样

[闫娇莲 2008:10]

(79) 名前を盗まれた橋をみたことがある。

[対訳 日本戦後名詩百家集]

(80) 昏睡 了 一夜 的 秀娥 大婶 慢慢 睁开 了 她 那

昏々と眠る 完了 一晚 の 人名 おばさん ゆっくりと 開ける 完了 彼女 その  
被 破灭 的 生活 驱散 了 光澤 的 眼睛, 她的 空洞 的  
受動 消え失せる の 生活 なくす 完了 光沢 の 目 彼女の 中身がない の  
目光 望 着 屋顶(後略)

眼光 眺める 持続 天井

(一晚意識のなかった秀娥は、ぼんやりと目を開いた。光をなくした瞳を天井に向け  
(後略))

[対訳 轮椅上の夢]

これらはいずれも属性への働きかけが本体への働きかけを含意してはいるものの、所有物である属性を表す目的語を省略した形式は元の形式と意味的に矛盾が生じる。このことは、(76)-(77)のような慣用的な表現「揚足を取る」、「撤職(免職する)」のみならず、(78)-(80)のような一般的な表現「毀容貌(容貌を損なう)」、「名前を盗む」、「驱散光泽(光をなくす)」にも適用できる。ただし、後述するように、このことは「周囲・まわり」という属性を表す所有物の持ち主受動文には適合しない。

(77)、(80)のような対象変化動詞による中国語の持ち主受動文は、対象変化といった結果の意味が述語動詞の語彙的意味(「撤(免ずる)」、「驱散(なくす)」)に含まれているため、それに結果補語が後続しなくてもよいのである。(78)は(77)、(80)と同様、対象変化動詞「毀(壊す・損なう)」による持ち主受動文であるが、後続する結果補語「成这样(このようになる)」を述語動詞「毀(壊す・損なう)」から離すことができない、という構文的制約のため、目的語残存形式の持ち主受動文にすると非文になる。つまり、「把」を伴う形式の持ち主受動文の使用は結果の明示化という制約にも関わると考える。

以上のように、主語の有生性によって、日中語の持ち主受動文の使用要因は異なる。有情物主語の場合は(76)-(78)のように、構文上の制約と受影者視点との二つが挙げられるが、

無情物主語の場合は(79)-(80)のように、持ち主の状態あるいは属性を述べる、つまり状態描写という要因が挙げられる。

対象変化動詞以外、仁田(1992)でいう「認識的な認知動詞」((81)-(82))、及び「感覺的認知動詞」((83)-(84))といった対象非変化動詞も日中語の持ち主受動文の述語として用いられる。

(81)この間に彼は東洋出版社を皮切りに、何軒かの出版社を訪ねたり、相当名を知られている学者に会ったりしたりした。

[対訳 あした来る人]

(82)事实 就是 这样， 他 只是 在 死后 才 被 个别人 想 起  
事实 なのだ このように 彼 だけ に 死後 してこそ 受動 個別の人 思う 出す  
了 好处。  
完了 恩恵

(事実なのだ、父は死後始めて、個別の人にその良さを思い出してもらったのだ)

[対訳 活动変人形]

(83)それにあの沈黙だって、うっかり裸の寝姿を見られてしまった、不用意を、ただ恥入ってのことにすぎなかったのかもしれないではないか。

[対訳 砂の女]

(84)她 觉得 好像 被 人 窥 到 了 心里的 隐私 似的。  
彼女 感じる まるで 受動 人 覗く 取る 完了 心の中の プライバシー のようだ  
(彼女は心の中の秘密を覗かれたように感じた)

[勝川訳 2008a:335]

(81)の「名を知られている」という事態がその持ち主である「学者」にとって被害ではなく、利益になる。同様に、(82)の「被个别人想起了好处(直訳:個別の人にその良さを思い出された)」という事態が持ち主である「父」にとって被害ではなく、利益になる。一方、(83)-(84)はともに持ち主主語「彼女」、「她(彼女)」にとって、述語動詞の表す事態「裸の寝姿を見た」、「窥到了心里的隐私(心の中の秘密を覗いた)」が被害になる。このように、属性に加えられた働きかけにより、有情物持ち主が間接的に利害あるいは影響を受ける場合、話者が持ち主に共感する立場で持ち主を受影者として当該受動事態を述べるため、日中語とも

に持ち主受動文が用いられる。要するに、有情物主語の持ち主受動文の使用は受影者視点といった語用論的要因によって動機付けられる。

このような対象非変化動詞による持ち主受動文を見ると、日中語の構文的相違、いわゆる「結果の明示化」が端的に現れている。すなわち、(82)の「想(思う)」という思考・認知動詞は日本語のように、つまり(81)の「知る」のようにそれだけで持ち主受動文の述部として成り立つことができず、それに「起(出す)」という結果の意味を表す補語が後続しなければならない。同様に、(84)の「窺(覗く)」という知覚・感覚動詞は(83)の「見る」のようにそれだけで持ち主受動文の述語として成立できず、それに「到(取る)」という結果補語が後続しなければならない。

ほかに、全体-部分関係と同様に、本体-属性関係にある日本語の持ち主受動文には、(85)のように影響性が弱い使役他動詞や、(86)のように使役性を含意しない他動詞によるものも見られる。

(85) そう考え出すと、周囲をスパイで取り巻かれ、自分までが監視されているような気がしてきた。

a. 自分がまだ、周囲をスパイで取り巻かれている <動作持続と結果持続>

[仁田 1992:329]

(86) 敷地は広く、まわりを高いコンクリートの塀{ に/で }囲まれていた。

a. 敷地はまだ、まわりを高いコンクリートの塀に囲まれている <結果持続のみ>

[対訳 ノルウェイの森]

(85)の「取り巻く」は動作主性を含意する使役他動詞であるが、動作主「スパイ」が具格「で」によって表すためその影響性が強くないことがわかる。一方、(86)の「囲む」は行為主体「塀」が無情物であり、「に」で表されているが、それが「で」に置き換えられるため、使役性を含意しない他動詞である。このことは、前述したように、「まだ」という副詞がそれらの動詞と一緒に用いられると、前者は(85)aのように動詞持続と結果状態の持続との両方の意味があるが、後者は(86)aのように状態持続の意味しかない、ということからもわかる。このような影響性が弱い、または使役性を含意しない他動詞は中国語では持ち主受動文の述語としては用いられない。

前述したように、属性である目的語「まわり」や「周囲」を省略しても、「敷地は高いコ

ンクリートの塀に囲まれていた」、「自分がスパイで取り巻かれる」というのが元の形式と等価的な関係にある。これは「取り巻く」、「囲む」といった動詞の語彙的意味に「周囲」、「まわり」のような情報がすでに含まれるためであると考えられる。

以上のように、本体-属性関係にある日中語の持ち主受動文は以下のような共通点と相違点が存在すると言える。

まず、共通点としては、以下の四点が挙げられる。

- 1) 述語動詞においては、本体-属性関係にある日中語の持ち主受動文は主に取消、受け取りを意味する対象変化動詞、つまり影響性の強い他動詞が述語動詞によるものであるが、思考・認知及び知覚・感覚といった影響性の弱い他動詞によるものもある。
- 2) 情意性においては、無情物主語の持ち主受動文はすべて中立的であるが、有情物主語の持ち主受動文ではほとんど被害となるが、利益となるものもまれにある。
- 3) 使用要因に関しては、無情物主語の持ち主受動文は主に状態・属性描写という要因、有情物主語の持ち主受動文は主に構文上の制約及び受影者視点といった要因によって用いられる。

また、相違点としては、次の三点が言える。

- 1) 述語動詞に関しては、「囲む」のような使役性を含意しない他動詞は日本語では持ち主受動文の述語として用いられるが、中国語ではそれらの動詞は影響性が弱いため、持ち主受動文の述語としては用いられない。つまり、述語動詞の影響性においては、中国語のほうが日本語より厳しく制約されている。
- 2) 中国語では持ち主受動文は結果の意味及びその明示化が要請されるが、日本語では「結果の明示化」という制約がかからない。中国語では、対象非変化の認知、感覚を意味する動詞に結果補語が後続されないと持ち主受動文としては成り立たないということ、及び使役性を含意しない他動詞が持ち主受動文の述語としては用いられないということはこの制約に関わる。
- 3) 構文的形式に関しては、日本語は目的語残存の形式しかないが、中国語は目的語残存の形式のみならず、「把」を伴う形式も可能である。

### 6.3.5.3 一般所有関係にある日中語の持ち主受動構文

一般所有関係は、有情物持ち主が何らかの働きかけをした結果、所有するに至った遇有

的な所有物との関係を表す(勝川 2008a:338)ことから、可譲渡性の高い所有関係であると考えられる。このうち、装着類、つまり衣服、ネクタイ、帽子、眼鏡、靴などを表す所有物は身につけた時には持ち主に密着しており、身体の一部に準ずる所有物と見なされ、不可譲渡性の高い所有物と認識される。ここから、装着類所有物と身体部位との連続性が窺える。一方、装着類は身につけてない時には、ほかの一般所有物(以下「非装着類」と呼ぶ)と同様に、物理的に、あるいは心理的に持ち主からもっとも離れている。一般所有関係にある日中語の持ち主受動文の使用は当該事態から有情物持ち主が利害を受ける、という語用論的要因によると考えられる。

まず、装着類所有物の例文を見てみよう。

(87)花子は太郎にスカートを引っ張られた。

[山内 1997:125]

(88)太郎は恋人に背広を褒められた。

[山内 1997:126]

(89)她 被 树枝 挂 破 了 衣服。

彼女 受動 枝 引く 破る 完了 服

(彼女は、枝によって服を破られた)

[于康訳 2012:5]

(87)の「スカート」、(88)の「背広」及び(89)の「衣服(服)」はいずれも身につけている所有物である。このような装着中の所有物の持ち主受動文にも、結果の明示化という日中語の相違が見られる。すなわち、日本語は結果の明示化という制約がないため、(87)のような対象非変化の接触動詞や、(88)のような態度、評価を表す、影響性が弱い他動詞などは持ち主受動文の述語として用いられる。中国語は結果の明示化が要請されるため、対象非変化の接触動詞や態度・評価動詞など影響性の弱い動詞は、(89)のようにそれに結果補語(「破(破れる)」)が後続しないと、不自然な表現になる。また、情意性においても日中語は異なる。日本語は(87)のように受動文の主語が被害を受けるものもあれば、(88)のように利益を受けるものもある。それに対し、中国語は後に挙げる例文からもわかるように、被害((89))のみである。

また、(90)の「財布」、(91)の「手机(携帯)」は衣類ではないが、いずれも身につけた状態、

すなわち装着中の所有物であると解釈される傾向にある。

(90) 先日、韓国旅行中に、財布をすられました。

[少納言 Yahoo!知恵袋]

(91) 你 被 小偷偷 过 手机 吗?

あなた 受動 泥棒 盗む 経験 携帯 か

(あなたは、泥棒に携帯を盗まれたことがある?)

[于康訳 2012:1]

このような装着類と解釈できる所有物と装着類と解釈できない、非装着類所有物との日中語の持ち主受動文では、主に(90)-(93)のように、取消・受け取り(例:する、盗む、没収する)、作用(例:使う)を意味する対象変化動詞は述語として用いられるが、(94)-(98)のように態度・評価(例:認める、騙す、批判する)、知的活動(例:読む)を意味する対象非変化の動詞は述語としても用いられる。

(92) そして、旧地主がその土地を没収される不満をおさえ、政府の決定に従ったことは、あの大改革をなんの流血事件もなしに実施させることになった。

[対訳 激動の百年史]

(93) 彰 被 他的 儿子 把 自己的家产 花 干净 了。

人名 受動 彼の 息子 処置 自分の 家産 使う すっかり 完了

(彰さんは子供に自分の家の財産をすっかり使い果たされた)

[例(23)再掲]

(94) 花子は太郎に日記を読まれた。

[山内 1997:126]

(95) 花子はクラスメートに弁当箱を笑われた。

[山内 1997:126]

(96) 田中教授は、論文を学会関係者に認められた。

[高見 1995:87]



(97) 到后来，听说连真的在报纸上被点着名儿  
後になってだそうだし、さへも本当に新聞上受動指定する持続名前  
批評了作品的。那个“编小说”的，也没多大事儿，还是照样  
批判する完了作品のあの書く小説のもないたいしたこと相変わらず  
写他的小说，照样登出来。  
書く彼の小説いつものように掲載するてくる  
(聞くとところによると、ほんとうに新聞で名指しで作品を批判された小説書きも、たい  
いしたことはなく、相変わらず小説を書いて、発表しているそうだ)

[例(26)再掲]

(98) 有一次，一个日本老年旅游团整个团上了黑车，被  
ある一回一人日本お年寄り観光団体全体団体乗る完了未登録車受動  
騙走了钱财。  
騙す取る完了金銭財物

(日本のお年寄りの団体観光客が丸ごとバスに乗せられ、金を騙し取られたケースも  
あった)

[対訳 中日飞鸿]

(94)-(98)では、「日記」、「論文」、「作品」は持ち主の書いたものであり、単に買って所有している本よりも持ち主との関係が緊密であると言えよう。また、「土地」、「家産(家産)」及び「钱财(お金)」は作品ではないが、持ち主の生活に緊密に関わるものであるため、それに関する事態から持ち主が間接的に影響を受けるといえることがよくある。一方、「弁当箱」のような一般所有物は作品でもなく、生活に緊密に関わるものとも言えない。この場合、日本語ではそれに関する事態より持ち主が間接的に影響を受けると捉えられるが、中国語ではそれを直接的に影響の受ける受動者として捉えられるほうが一般的である。

以上のように、一般所有物を装着類と非装着類に分けて、述語動詞及び情意性から日中語の持ち主受動文の構文的特徴及び使用要因について考察してきた。まとめて言えば、一般所有関係にある日中語の持ち主受動文は以下のような共通点と相違点が存在する。

共通点は主として次の二点にある。

- 1) 主に接触動詞、態度・評価動詞及び取消・受け取りを表す動詞は述語動詞として用いられる。

- 2) 使用要因においては、所有物に関連する事態により持ち主が間接的に影響(主に被害)を受ける、という語用論的要因が挙げられる。

相違点としては主に以下の二点が言える。

- 1) 中国語の受動文は結果の明示化が要請されるため、対象非変化の動詞はそれに結果補語が後続しないと、受動文の述語動詞としては用いられない。一方、日本語の受動文は結果明示化の要請がないため、対象変化の動詞のみならず、対象非変化の動詞もそのまま受動文の述語動詞として用いられる。つまり、日本語よりも中国語のほうが述語動詞に対する制限が厳しく、述語として用いられる動詞の数が少ない、ということが言えよう。
- 2) 情意性においては、日本語は被害のみならず、主語にとって当該事態が利益となるものもある。一方、中国語は被害のみである。これはまさに、中国語の「被」構文はほとんど主語から見て不愉快あるいは被害的な事柄を表すのに用いられる(刘月华他 1991:643)、ということの現れであろう。

### 6.3.6 まとめ

本節では、日中語の持ち主受動構文を所有関係によって、全体-部分関係、本体-属性関係、主体-活動関係、相互依存関係、同一関係及び一般所有関係という六種に分けて、主に主語の有生性、述語、テンス・アスペクト、情意性という意味の面及び形式の面から考察し、それらの使用要因を明らかにした。その結果、所有関係の種類と述語動詞との関連性、主語の有生性と情意性との関連性、持ち主受動構文と直接受動構文との連続性、受影者視点以外、状態描写や構文上の制約なども持ち主受動構文の使用要因として挙げられる、ということがわかった。

日本語は目的語残存形式の持ち主受動文しかないが、中国語は目的語残存形式のみならず、「把」を伴う形式の持ち主受動文もある。そして、同一関係にある持ち主受動構文は「把」を伴う形式のみで、日本語にはなく中国語特有のもののように見受けられる。また、元の述語動詞が言語化されず、所有物を表す目的語節の一部しか表されない、主体-活動関係にある非状況活動の新型の持ち主受動構文も日本語には見つからず中国語特有のものであると言える。さらに、主体-活動関係にある非状況活動の新型の持ち主受動構文には二重受動の用法が存在するが、このような用法は日本語では確認されていない。一方、主体-活動関

係にある状況活動の持ち主受動構文は中国語にはなく日本語独特のものである。

日中語において、目的語残存形式の持ち主受動文の使用要因として以下の三つが挙げられる。

- 1) 所有物を表す目的語を省略、または他の位置(例:主語など)に移動すると、当該受動表現が成立できなくなる、という構文上の制約
- 2) 所有物を表す目的語を省略、または他の位置(例:主語など)に移動しても二つの受動表現の意味に矛盾が生じない場合、語用論的要因が二つ考えられる。
  - (1) 話者が持ち主の状態、あるいは様態を詳しく描写する、という状態描写の要因
  - (2) 話者が所有物に関連する事態により利害を受けた持ち主に共感する立場を取る、という受影者視点

一方、中国語に特有の形式、つまり「把」を伴う形式の持ち主受動構文の使用要因として次の二つが挙げられる。

- 1) 主語が複雑で、述部との距離が大きい、及び結果補語と述語動詞が緊密な関係にあるので両者を離す、あるいは両者の間に目的語を挿入することができない、などの構文上の制約
- 2) 話者が直接的に影響を受けたものを強調するため、それを受動者として「把」によって導入される、という受動者強調の語用論的要因

日中語の持ち主受動構文は以下の点において異なる。

- 1) 中国語では結果の意味及びその明示化が要請されるため、対象非変化の動詞あるいは影響性の弱い動詞はそれに結果補語が後続しないと受動文の述語として用いられない。日本語ではこのような制約がかからない。これは日本語に比べて、中国語の受動構文のほうが述語動詞に対する制限が厳しい、ということ動機付けていると考える。
- 2) 中国語の文法は文脈によって文法形式や言語形式が表出しなくてもよい、という意

合法を主とする特徴を持っているとされている<sup>69</sup>。よって、中国語では、元の述語動詞が言語化されず、所有物を表す目的語節あるいは結果節の一部しか表されない新型の持ち主受動構文もできるが、日本語ではこのように言語形式が一部しか表出しない持ち主受動表現は存在しない。

## 6.4 日中語の持ち主受動構文の事態把握

6.3 では、日中語の持ち主受動構文を所有関係によって、大きく主体-活動関係、相互依存関係、同一関係及びその他の所有関係との四つに分けて、構文的特徴について考察を行った。そのような構文的特徴に基づき、本節では、日中語の持ち主受動構文の表す事態把握を認知モデルで表すことを試みる。なお、その他の所有関係のうち、全体-部分関係は物理的に分離不可能であり、本体-属性関係と一般所有関係は相互依存関係のうち、対格の属格類と同じ事態把握を表すため、以下、全体-部分関係、主体-活動関係、同一関係、及び相互依存関係との四つに分けて検討を進めていく。

### 6.4.1 全体-部分関係の持ち主受動構文の事態把握

全体-部分関係にある日中語の持ち主受動文においては、接触動詞による持ち主受動文は典型的なものであると言えよう。以下、(99)-(100)を例に、全体-部分関係にある日中語の持ち主受動構文の表す事態把握を図式する。

まず、日本語の持ち主受動文(99)の表す事態は認知モデルによって表示すると、図 6-6 になる。C は概念化者、R は参照点、T はターゲットを表す。点線の矢印は概念化者の心的走査を表示する。太線は前景、細線は背景を表す。

(99)のび太君はジャイアンに頭を殴られすぎたから馬鹿になったんですか？

[例(59)再掲]

---

<sup>69</sup> 意合法を主とする、という中国語の文法の特徴については、詳しく袁毓林(2015)、杉村(2015)を参照のこと。

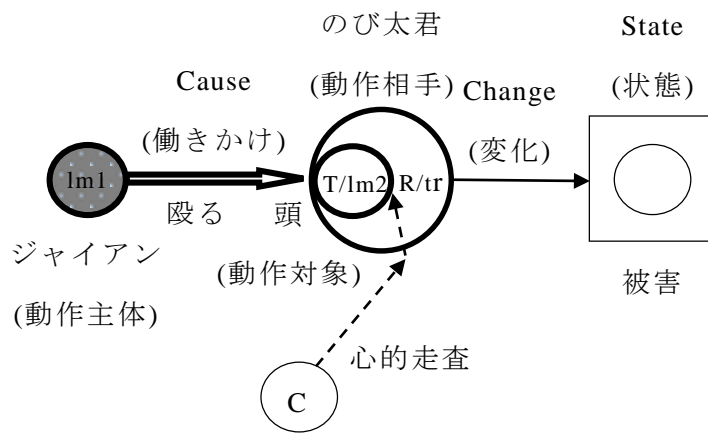


図 6-6 全体-部分関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造

すなわち、「ジャイアンがのび太君の頭を殴った」という事態を、概念化者である話者は動作対象である所有物「頭」ではなく、その持ち主である動作の相手「のび太君」を視点人物として、「殴る」の表す動作から持ち主主語が被害を受けたと捉えている。主語指示物の受けた「被害」の意味は言語化されていないため、Change-State 節は背景化される。

一方、中国語の持ち主受動文(100)の表す事象構造は次のようになる。

(100) 他 被 敌人 打 伤 了 腿。  
 彼 受動 敵 殴る 負傷する 完了 足  
 (彼は敵に足をやられた)

[例(60)再掲]

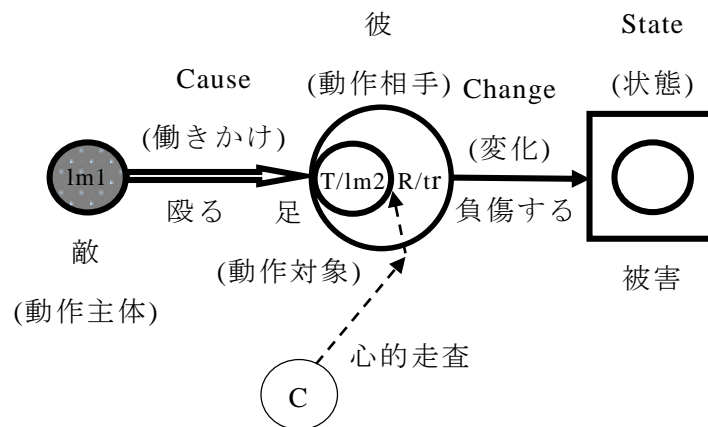


図 6-7 全体-部分関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造

図からもわかるように、中国語の持ち主受動文は日本語の持ち主受動文と同じ事象構造を表すが、焦点化される部分は異なる。中国語の持ち主受動文は結果を表す補語(例:(100)の「伤(負傷する)」)、いわゆる「結果補語」がついているので、主語指示物の受けた「被害」の意味が明示されるため、Change-State 節は焦点化されている。

#### 6.4.2 主体-活動関係の持ち主受動構文の事態把握

まず、日本語に特有の状況活動の持ち主受動構文の事態把握を見てみよう。(101)の表す事象構造は以下のようになる。四角形はコト・出来事を表す。

(101)彼はヒサの財布を奪い、再び駅に向かったが、引返すのを駅員に見られそうなので、車の通る街道まで歩いてタクシーを拾い、新宿に出た。

[例(28)再掲]

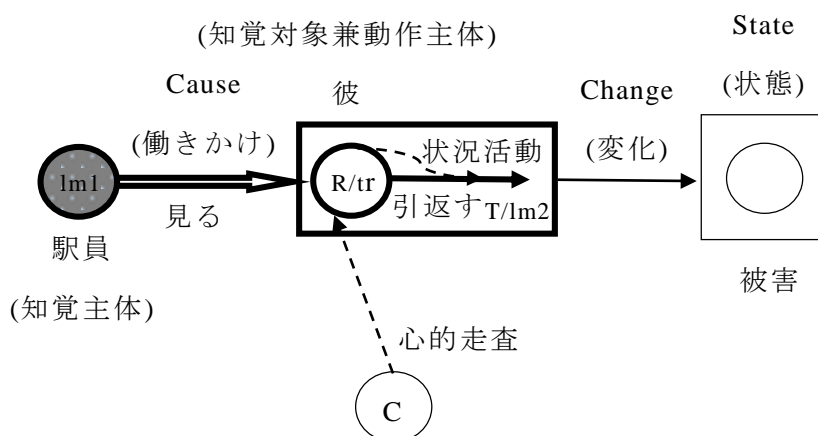


図 6-8 主体-活動関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(状況活動)

(101)は「彼が引き返すときに駅員が彼を見る」という事態を表す。この事態を、概念化者である話者は知覚対象である「彼」の視点を取り、知覚対象の行う活動である「引き返す」という動作を述語動詞「見る」の表す事態の行われる内的状況として、述語動詞の表す動作から知覚対象兼活動主体の主語指示物「彼」が被害を受けると捉えている。主語指示物の受けた「被害」の意味は言語化されていないため、Change-State 節は背景化される。

続いて、日中語における状況活動の持ち主受動構文の事態把握を考察する。

(102) 杏子は(中略)昼間八千代に会っていて、その同じ日の夜に、克平と一緒に花火を見に行ったことを知られるのはいやだった。

[例(35)再掲]

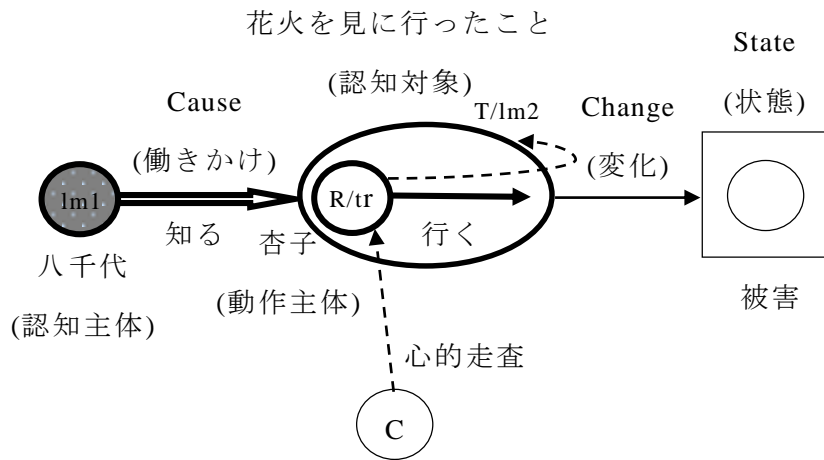


図 6-9 主体-活動関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(非状況活動)

「杏子は八千代に克平と一緒に花火を見に行ったことを知られる」という日本語の持ち主受動表現は「八千代は杏子と克平と一緒に花火を見に行ったことを知る」という事態を表す。その事象構造と(101)の事象構造とは活動に対する概念化者の把握が異なる。すなわち、(101)では「引き返す」の表す活動は「見る」の表す事態の内的状況、動的な動きとして捉えられるが、(102)では「行く」の表す活動は「知る」の表す認知動作の直接対象として捉えられる。言い換えれば、活動の表す事態は(101)では動的なコト、(102)では静的なモノとして捉えられる。したがって、図 6-9 では非状況活動は状況活動と異なり、四角形ではなく、大きいサークルで表す。

(103) 阿巧 不敢 做 声，心里 却 万分 怔忡……还是  
 人名 する 勇気がない 立てる 声 心の中 ところが 極めて 動悸 それとも  
 刚才 被 她 看见 了 她 对 阿寿 做 了 两次 的手势。  
 先 受動 彼女 見える 完了 彼女 に 人名 する 完了 二回 の 手真似

(阿巧は震え上って、声も出せなかった……それとも、さっき阿寿に手真似をしたのが見つかったのか、どちらとも見当がつかなかった)

[例(37)再掲]

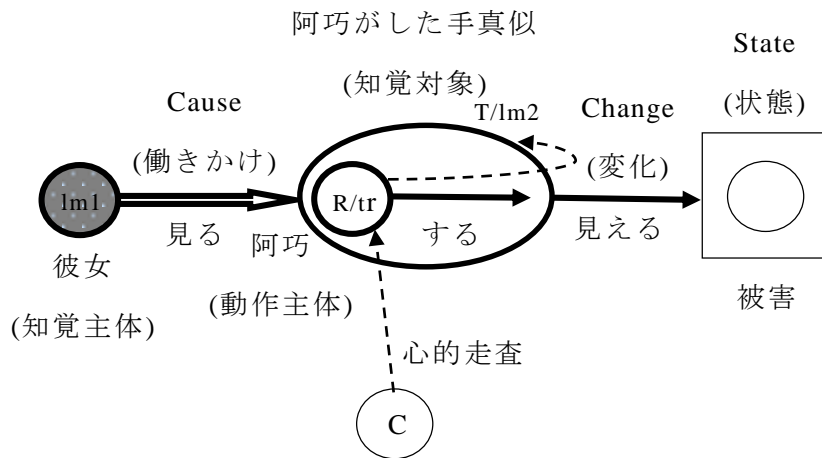


図 6-10 主体-活動関係にある中国語の通常の持ち主受動構文の事象構造(非状況活動)

図 6-9、図 6-10 に示すように、(102)と(103)は同じ事態把握を表している。「阿巧被她看见了(阿巧)对阿寿做了两次的手势(直訳:阿巧は彼女に阿寿に二回した手真似を見られた)」という中国語の持ち主受動表現は、「彼女は阿巧が阿寿にした手真似を見た」という事態を表す。概念化者である話者はこの事態を動作主体である「阿巧」の視点から、主語指示物にとって好ましくないものとして捉えている。述語動詞「看(見る)」に「见(見える・感じ取る)」という結果補語が後続するため、Change 節は前景となっているが、その被害の意味が明示されていないため、State 節は背景となっている。

また、非状況活動の新型の持ち主受動文(104)の表す事象構造は図 6-11 になる。点線の大きいサークルは否定の意味、ここでは非事実性、実線の大きいサークルは事実性(仮事実を含む)を表し、点線の曲線は同一指示を表示する。こういった新型の持ち主受動文では、認定類の動詞「言う/認定する」は非事実を仮事実にするため、本質的には「作る」、「書く」のように、非存在から存在へと作り出すという作成・生産類動詞と見なすことができる。ある事態が非事実から仮事実になったため、Change-State 節は前景になっている。



(104) 白岩松 网上 “被自杀” 回应 称 “生活 还 那样”

人名 ネット上 受動 自殺する 返事 言う 生活 まだ あのように

(白岩松が(元気であるが)ネットで(記者に)自殺して死んだといわれてしまい、「生活は変わっていない」と返事をした)

[例(41)再掲]

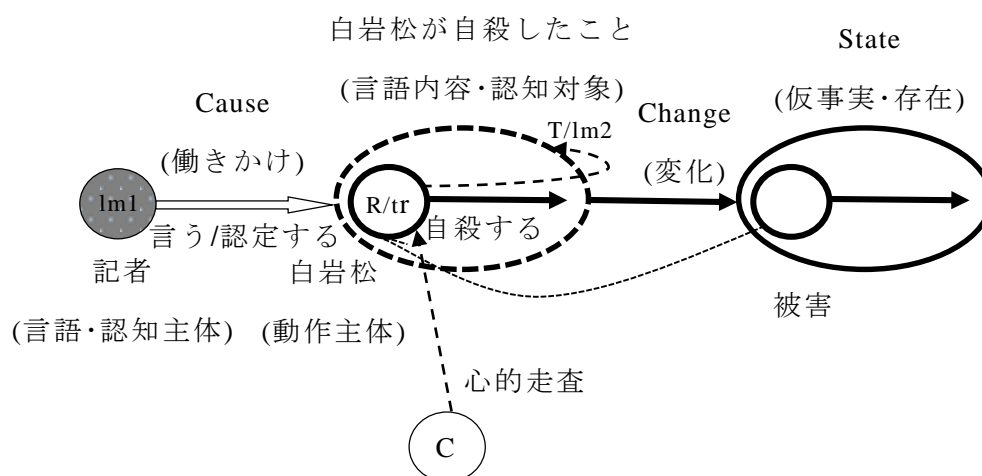


図 6-11 主体-活動関係にある中国語の新型の持ち主受動構文の事象構造(一重受動)

(104)の「白岩松 “被自杀”(白岩松が自殺していないのに、記者に自殺したと言われてしまう)」は単に「白岩松が記者に自殺したと言われてしまう」という受動の意味ではなく、「本当は自殺していないのに」という否定の意味も含まれている。この「否定」の意味はつまり非事実から仮事実への状態変化を表している。概念化者である話者は、「自殺する」の表す動作の主体「白岩松」を視点人物として、「白岩松が自殺していないのに記者は白岩松が自殺したと言う」という事態が主語指示物にとって好ましくないものとして捉えている。言語・認知主体の「記者」及びその動作を表す認定類の動詞が明示されないため、Cause節は背景化される。

(105) 郭美美 之母 自曝 炒股 发家 郎咸平 “被 采访”

人名 の 母 自ら 暴露する 株の売買 家を富ます 人名 受動 インタビューする

(株の売買によって金持ちになったと郭美美的母は自ら暴露した。郎咸平は(本当は

郭美美にインタビューした側なのだがネットユーザーには郭美美に)インタビューされた(ようなものだ)と言われている)

[凤凰视频 2011-08-04]

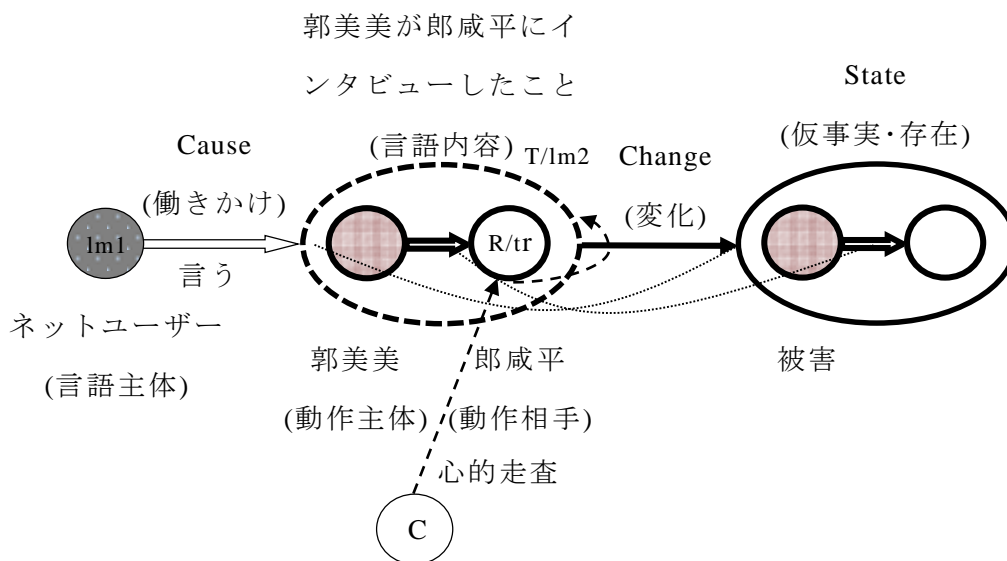


図 6-12 主体-活動関係にある中国語の新型の持ち主受動構文の事象構造(二重受動)

図 6-11、図 6-12 からわかるように、(104)と(105)は同じ事態把握を表している。ただし、両者は二点で異なる。まず、言語内容である事態は(104)では一つの参与者を含むものであるのに対し、(105)では二つの参与者を含むものである。また、参照点となる参与者は(104)では動作主体であるが、(105)では動作相手・対象である。

(105)の「郎咸平“被采访”(郎咸平は本当は郭美美にインタビューした側なのだがネットユーザーには郭美美にインタビューされたと言われてしまう)」は、「郎咸平が郭美美にインタビューしたのに、ネットユーザーは郎咸平が郭美美にインタビューされたと言う」ということを表す。概念化者の話者は「インタビューする」の表す動作の対象である「郎咸平」の視点から、当該事態が主語人物の「郎咸平」にとって被害となる、と捉えている。言語主体「ネットユーザー」及びその動作を表す動詞「言う」が明示されないため、Cause節は背景となっている。

### 6.4.3 同一関係の持ち主受動構文の事態把握

同一関係にある持ち主受動構文は日本語と比べて、中国語に特有のものであると言える。(106)の表す事象構造は次のようになる。点線の曲線は二つの参加者が同じものであることを意味する。

(106) 那个 孩子 被 人 把 他 打 了 一顿。

その 子供 受動 人 処置 彼 殴る 完了 数量

(その子供は人に彼を殴られた)

[例(55)再掲]

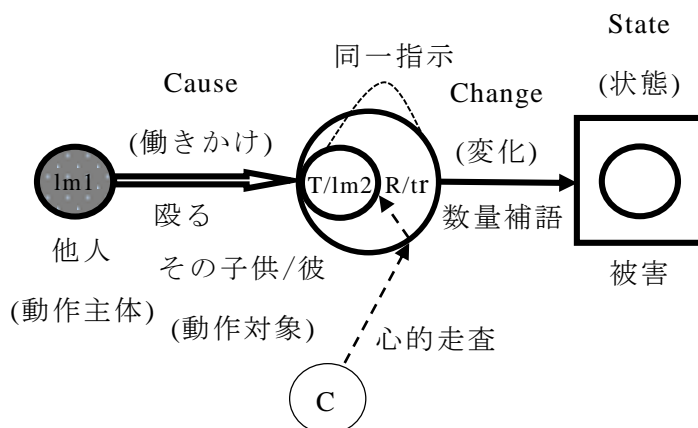


図 6-13 同一関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造

「那个孩子被人把他打了一顿(その子供は人に彼を殴られた)」は「他人がその子供を一回ひどく打ちすえた」ということを表す。当該事態は二つの参加者間にエネルギーの伝達が起こる、という他動関係であるが、概念化者の話者は動作対象の「その子供」を強調するため、それを再び受動者として「他(彼)」という代名詞で、「把」によって導入するのである。よって、図では「その子供」と「彼」は点線の曲線で繋いでいる。また、述語動詞「打(殴る)」に後続する「一顿」という数量補語はただ「一回」という回数の意味のみならず、「ひどく」という程度の意味も含まれていると考えられる。よって、「殴る」の表す動作から、主語人物の「その子供」が直接的な作用を受けたと同時に、被害を被ったという意味も伝わっている。したがって、Change-State 節も前景となっている。

#### 6.4.4 相互依存関係の持ち主受動構文の事態把握

前述したとおり、相互依存関係にある日中語の持ち主受動構文は対格の属格類及び主格の属格類との二つに分けられる。そのうち、対格の属格類の持ち主受動構文はその他の所有関係の中、本体-属性関係及び一般所有関係の持ち主受動構文と同じ事態把握を表すため、本論文は、ここではただ対格の属格類の相互依存関係にある持ち主受動構文の表す事象構造を示すことにする。

(107) 私は警官に息子を殴られた。

[例(47)再掲]

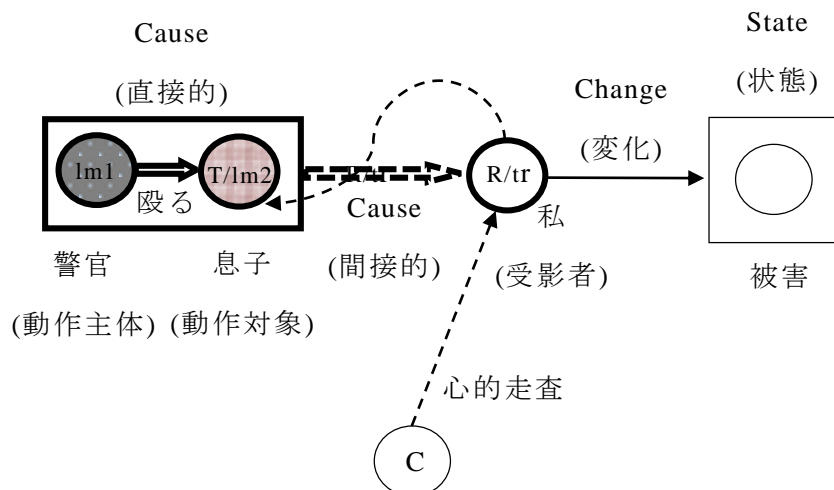


図 6-14 相互依存関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(対格の属格類)

対格の属格類の相互依存関係にある持ち主受動構文の事象構造は、これまで述べてきた他の所有関係の持ち主受動構文、つまり、全体-部分関係、主体-活動関係、同一関係にある持ち主受動構文の表す事象構造と二点で異なる。まず、影響者、つまり行為連鎖の先頭に位置するエネルギーの与える側はモノであるか、コトであるかという参与者の性質で異なる。また、これに関連して、影響者の働きかけは直接的であるか、間接的であるかという影響の性質で異なる。つまり、モノである人間の動作・行為により、直接的に影響を受けるが、コトである事態により間接的に影響、特に利害などの影響しか受けることができないのである。このような間接的な影響を図では点線の二重矢印によって表す。この影響の間

接性は第 5 章で論じた使役受動構文と通じていると考えられる。

(107)の「私は警官に息子を殴られた」は「私」が「警官が息子を殴った」ということにより間接的に被害・迷惑を受けたことを表す。被害・迷惑の意味が明示されていないため、Change-State 節は背景化される。

(108)张三 被 杀 了 父亲。

人名 受動 殺す 完了 父

(張三さんは、父を殺された)

[例(22)再掲]

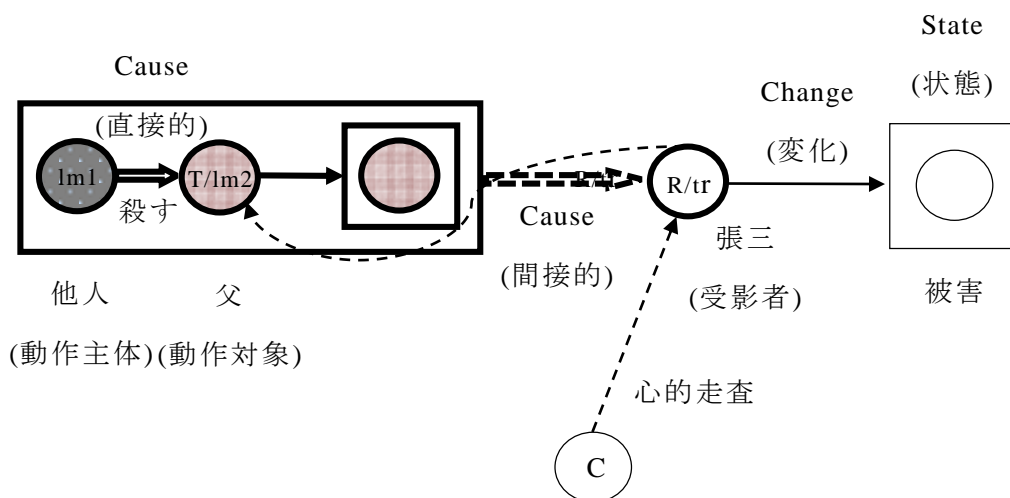


図 6-15 相互依存関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造(対格の属格類)

前述したように、中国語の持ち主受動構文は日本語と比べて、述語動詞の影響性に対する制限が厳しい。このことは図 6-14 と図 6-15 を比較すると明らかになるであろう。つまり、(107)は「殴る」という対象非変化の接触動詞によるものであるため、図 6-14 ではコトである影響者は Cause 節しか含まれない。それに対し、(108)は「殺す」という対象変化をもたらす動詞によるものであるため、図 6-15 ではコトである影響者は Cause-Change-State 節の全体が含まれる。この点で日中語の持ち主受動構文の表す事象は異なるが、それ以外の点において両者は特に区別がないと考えられる。

つまり、「张三被杀了父亲(張三さんは人に父を殺された)」という中国語の持ち主受動表

現は、「他人が父を殺した」という事態により、主語指示物の「張三さん」が間接的に被害を受けたことを表す。被害の意味が明示されていないため、図では Change-State 節は背景となっている。

続いて、主格の属格類の持ち主受動構文の事象構造を考察する。

(109) 太郎は母に死なれた。

[例(51)再掲]

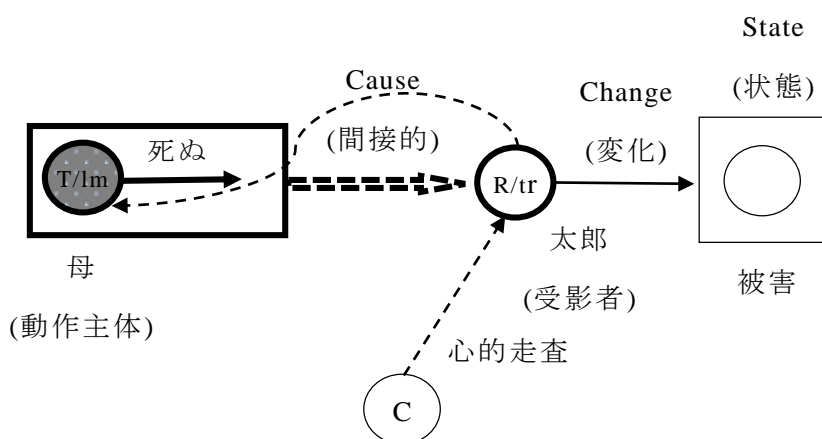


図 6-16 相互依存関係にある日本語の持ち主受動構文の事象構造(主格の属格類)

図 6-16 と図 6-15 は同じく親族関係にある人間に関するコトにより、主語人物が間接的に被害を受けたことを表すが、影響者である事態における主語人物の親族の意味役割は異なる。すなわち、影響者である事態において、図 6-15 のように対格の属格類は主語人物の親族が動作対象であるのに対し、図 6-16 のように主格の属格類は動作対象ではなく、動作主体である、ということである。(109)は主語指示物の「太郎」が「母が死んだ」という事態により間接的に受けた被害・迷惑の意味が明示されていないため、図では Change-State 節は背景化されている。

(110) 女子 被 儿子 吵 醒 将 其 残忍 杀死

女性 受動 息子 騒ぐ 醒める 処置 彼 残酷 殺す 死ぬ

(女性は息子に騒がれて目が覚めたので、彼を殺した)

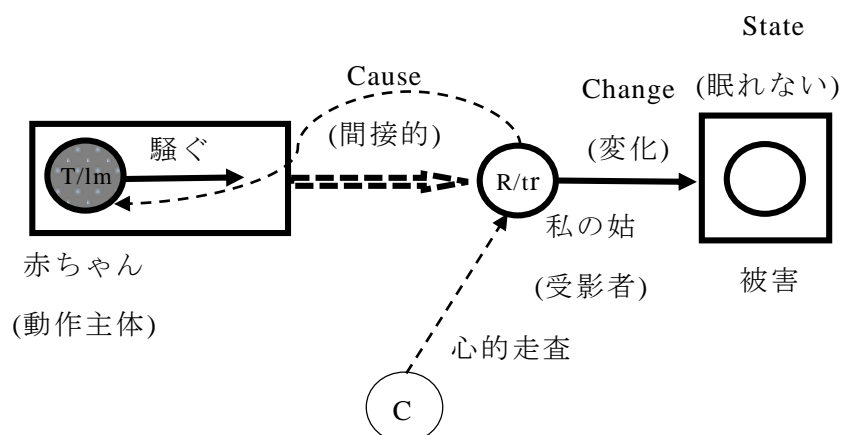


図 6-17 相互依存関係にある中国語の持ち主受動構文の事象構造(主格の属格類)

図 6-16、図 6-17 からわかるように、主格の属格類の持ち主受動構文においては、中国語と日本語は同じ事象構造を表すが、結果の意味の明示化によって、両者は Change-State 節が背景となるか、前景となるか、という焦点化の点で異なる。

(110)の「女子被儿子吵醒(女性は息子に騒がれて目が覚めた)」は、主語指示物の「女性」が「息子が騒いだ」ということにより、間接的に被害を受けて、「目が覚めた」という結果状態になった、といったことを表す。主語人物の受けた被害の意味が明示されているため、図では Change-State 節は前景化されている。

#### 6.4.4 まとめ

以上、日中語の持ち主受動構文の事態把握における異同点を、事態認知モデルによって表すことを試みた。上に述べてきた内容を次のようにまとめることができる。

- 1) 日中語の持ち主受動構文は、所有関係のいずれにあるかに関わらず、すべてある参与者(事態参与者を含む)の直接的または間接的な影響によってもう一つの参与者に位置・状態変化が起こる、という二つの参与者を含む使役事態を、事態内または事態外から被影響者を視点人物として捉えることを表す。

- 2) 全体-部分関係にある日中語の持ち主受動構文に関しては、日中語はともに典型的な他動関係をベースとし、参照点関係の関与によって述語動詞の表す動作の対象である部分ではなく、その持ち主である全体をもっとも際立つ要素(主語 tr)として選択するが、際立ちの面においては異なる。日本語は結果の意味が明示されないため、他動事態の一部しかプロファイルしないのに対し、中国語は事態の全体をプロファイルする。事態把握のレベルにおいて、こういった全体-部分関係にある日中語の持ち主受動構文は参照点関係の関与によって直接受動構文のような受動者視点から受影者視点へと拡張すると考えられる。
- 3) 主体-活動関係にある日中語の持ち主受動構文においては、
- (1) 日本語には状況活動の持ち主受動構文が存在するのに対し、中国語には存在しない。これはつまり、述語動詞の表す動作の対象が行う活動を当該受動構文の述語動詞の表す事態の行われる内的状況として捉える、といったコト的把握は中国語では見つからないということである。
- (2) コト的把握に対してモノ的把握を表す非状況活動の持ち主受動構文に関しては、日中語の三つのタイプはいずれも拡張的な他動関係をベースとし、参照点関係の関与によって述語動詞の表す動作の対象である活動ではなく、その主体である人間をもっとも際立つ要素として選択するが、際立ちの面においては異なる。日本語は結果の意味が明示されないため、他動事態の一部(Cause 節)しかプロファイルしない。また、中国語の通常は被害の意味が明示されないものの、受けた影響を結果補語によって具体的に表されるため、Cause-Change 節をプロファイルする。さらに、中国語の新型は言語・認知主体及びその動作を表す認定類の動詞が明示されないため、他動事態の一部、つまり Change-state 節のみをプロファイルする。
- 4) 同一関係にある持ち主受動構文は日本語には見つからず、中国語に特有のものである。同一関係にある中国語の持ち主受動構文は典型的な他動関係をベースとし、述語動詞の表す動作の対象をもっとも際立つ要素として選択するが、話者が動作対象を強調するため、それを再び受動者として参照点関係の関与によって代名詞で「把」をもって導入するのである。事態把握のレベルにおいて、このような同一関係にある中国語の持ち主受動構文は直接受動構文と同様、受動者視点を取るが、参照点関係が関与するかどうか、といった点においては異なる。
- 5) 相互依存関係にある日中語の持ち主受動構文は対格の属格類と主格の属格類と二分



することができる。そのうち、対格の属格類の持ち主受動構文は本体-属性関係及び一般所有関係にある持ち主受動構文と同じ事態把握を表す。相互依存関係は全体-部分関係、主体-活動関係の状況活動及び同一関係と影響の直接性において性質が異なる。つまり、主語指示物の受けた影響は、相互依存関係(主体-活動関係の非状況活動と同様)では述語動詞の表す事態による間接的な影響であるのに対し、その他の三者では述語動詞の表す動作による直接的な影響である、ということである。このような影響の間接性によって持ち主受動構文から第三者受動構文へと拡張することができるのだと考えられる。そして、影響の間接性からは第三者受動構文と使役受動構文との連続性も窺えると思われる。

- (1) 対格の属格類の持ち主受動構文では、日中語はともに拡張的な他動関係をベースとし、参照点関係の関与によって、述語動詞の表す事態により主語指示物が間接的に影響・利害を受けることを表すが、当該使役事態の一部(Cause 節)しかプロファイルしない。しかしながら、述語動詞の表す事態は日本語では他動関係の一部、Cause 節のみでよいが、中国語では、他動関係の全体、つまり Cause-Change-State 節の全体が含まれなければならない。
- (2) 主格の属格類の持ち主受動構文においては、日中語はともに拡張的な他動関係をベースとし、参照点関係の関与によって、述語動詞の表す事態により主語指示物が間接的に影響・利害を受けることを表すが、際立つの面においては異なる。日本語は受けた被害の意味が明示されないため、当該使役事態の一部(Cause 節)しかプロファイルしない。それに対し、中国語は受けた被害の意味が結果補語によって表されるため、他動関係の全体、つまり Cause-Change-State 節の全体をプロファイルする。

次節では、日中対訳コーパスから収集したデータをもとに、日本語と中国語の通常を持ち主受動文とそれに対応する中国語・日本語表現を対照することによって、持ち主受動事態に関する事態把握における日中語母語話者の相違点を解明する。

## 6.5 対訳データによる日中語の持ち主受動構文の対応関係

前述したように、持ち主受動構文に関する日中対照研究では、対訳資料によるものとし

て、中島(2007,2012)、凌蓉(2005)が挙げられる。それらはいずれも事態把握と関連せず、単に日中語の持ち主受動構文の成立条件や構文的特徴を考察しただけである。

そこで、本節は日中対訳コーパスより収集した例文を資料とし、日本語の持ち主受動文とその中国語訳、及び中国語の通常の持ち主受動文(目的語残存のタイプ及び「把」を伴う形式のタイプを含む)とその日本語訳はどのように対応しているのか、といった構文的特徴を考察した上で、持ち主受動事態に関する事態把握における日中語母語話者の相違を明らかにする。

### 6.5.1 日本語の持ち主受動文とその中国語訳

まず、日中対訳コーパスからとった日本語の持ち主受動文とその中国語訳との対応関係を下表に挙げておく。

表 6-3 日本語の持ち主受動文に対応する中国語訳(516)

中 訳	受動文(177/34.3%)				非受動文(314/60.9%)				非対応 (25/4.8%)
	直接	間接		使役 受動	能動文(270/52.3%)		使役 文	処置 文	
		持ち 主	第三 者		自動詞 文	他動詞 文			
数	115	59	2	1	47	223	25	19	25
%	22.3%	11.4%	0.4%	0.2%	9.1%	43.2%	4.8%	3.7%	4.8%

表 6-3 を見ると、日本語の持ち主受動文に対応する中国語の持ち主受動文の比率はわずか 11.4% であり、直接受動文ほど高くなく、能動文の比率と比べて、大幅に下回っていることがわかる。言い換えれば、日本語の持ち主受動文のほとんどは中国語の通常の持ち主受動文ではなく、能動文、特に他動詞文で表現するのである。

日本語の持ち主受動文とその中国語訳との対応関係を分析する前に、まず、日本語において、状況活動の持ち主受動文と相互依存関係にある持ち主受動文は中国語ではどのように表現されるのかを確認しておく。

(111) だれか迎えに来ていないものでもなかったので、二人が一緒だったところを見ら

れるのを避けたわけであった。

(或许有人接站，俩人想避免被人看见同在一起的情景)

[対訳 あした来る人]

(112)地面に転がった一人の子は這い起きて、これは跛をひきながら駈け去った。トラックの枠に腰かけていたところを吹き落されたものらしい。

(有一个小孩跌倒在地上，赶紧爬起来，脚一瘸一瘸地跑了。他象是坐在卡车的挡板上被风吹下来的)

[対訳 黒い雨]

(113)だめだ、子供は山へ入って行くのをとめられている。外国兵とまちがって撃たれるぞ。

(不行！小孩子不准上山。搞错了，要挨枪子儿的)

[対訳 飼育]

(111)-(113)は状況活動の持ち主受動文である。(111)-(113)の対訳からもわかるように、中国語では、このような状況活動の持ち主受動文は非状況活動の持ち主受動文((111))や、直接受動文((112))によって表されることもあれば、能動文((113))によって表されることもある。

(111)では、「俩人被人看见同在一起的情景(直訳:二人が一緒にいった情景を見られる)」は、その所有物を表す目的語「同在一起的情景(直訳:一緒にいった情景)」を省略した形式、「俩人被人看见(直訳:二人が見られる)」と異なる意味を表す。よって、両者が等価的な関係あるいは含意関係を持たず、(111)の中国語訳は状況活動の持ち主受動文ではなく、非状況活動の持ち主受動文となる。また、(111)の活動を表す所有物は、日本語では「一緒だったところ」といったトコロを伴う節によって表されているが、中国語では「同在一起的情景(直訳:一緒にいった情景)」という連体節を伴う名詞によって表されている。これは、つまり受動文における行為主体の視覚を捉えたのは、日本語では「二人が一緒だ」という眼前の動きを伴った事態であるが、中国語では「情景(情景)」という静的なものである、ということである。

近藤(2009:116-118)のこばを借りると、トコロを伴う節による表現は談話のイマ・ココで知覚的に捉えたある事態の一瞬をひとまとまりとして取り切って述べるという事態内把握であるが、連体節による表現は知覚的に捉えた事態を外から客観的かつ理性的に整理し

事実として述べるといった事態外把握である、ということである。このような事態内-事態外把握、あるいはコト的-モノ的把握の相違は日中語の持ち主受動文にも見られる。

(111)に示すように、日本語母語話者が見えのままに事態をまるごととして把握するのが好まれるため、同じ事態は内的状況のヲ格が文中に併存する形式の持ち主受動文によって表される。それに対し、中国語母語話者が傍観者として事態外から客観的に事態を捉えるのが好まれるため、同じ事態は連体節を伴う形式の持ち主受動文によって表される。

一方、(112)では、「他坐在卡车的挡板上被风吹下来(彼がトラックの枠に腰かけていたところを吹き落された)」は、その状況活動を表す原文の目的語名詞節に対応する動詞節、「坐在卡车的挡板上(トラックの枠に腰かけていたところ)」を欠いても、両者が等価的な関係にある。しかしながら、その活動を表す動詞節は受動文の述語動詞の目的語ではなく、当該事態「被风吹下来(風に吹き落とされた)」の背景として連用修飾語となっている。このように、(112)の中国語訳は目的語が残らず、それに主体-活動などのような所有関係も見出せず、明らかに持ち主受動文とは言えず、「吹(吹く)」という自動詞による第三者受動文となる。

また、相互依存関係にある持ち主受動文は日本語においても、中国語においても存在するが、両言語は必ずしも同じとは言えず、異なる傾向が見られる。

すでに勝川(2013:182-183)が指摘したように、日本語では別の個人である親族が何らかの影響を受けたことによって、直接関与していない自分が間接的に被害を受けた受影者であると捉える傾向がある。一方、中国語では親族が何らかの影響を受けても、そのことから自分が直接的に影響を受ける受動者であるとは認識されず、受動文で表現するならば、直接的に影響を受けた受動者(親族)が主題化され主語に立った直接受動文になる、という傾向がある。これは、つまり凌蓉(2005:97-98)の**ことばを借りると**、日本語には、他人、特に親族を自分の所有物と見なし、他の人が何らかの影響を受けたら、自分までその影響を受けているというような「運命共同体」的な発想が潜んでおり、それに対し、中国語には、他人はあくまでも他人であり、他人が影響を受けても自分とはあまり関係がないという「個人独立体」的な発想が潜んでいる、ということである。要するに、受動文の使用においては、日本語は受影者視点、中国語は受動者視点**が密接的に関わっている**。

以上、相互依存関係にある持ち主受動構文に関する日中語の相違は対訳データによって検証されている。

(114)でも息子の愛人なんて、母親から見ると、憎いもんだって言うわね。息子を取られ  
るような気がするんだってさ。

(你想，儿子的情人，在母亲看来总是讨厌的，因为她把儿子夺走了，你说是不是?)

[対訳 青春の蹉跎]

(115)時雄は悶えざるを得なかった。わが愛するものを奪われたということは甚だしく  
その心を暗くした。元より進んでその女弟子を自分の恋人にする考は無い。

(时雄非常烦闷。自己心爱的人被人夺走，心里确实很不痛快，尽管从开始起他就没有  
打算把自己的女弟子作为情人)

[対訳 坊ちゃん]

(114)の「母親が息子の愛人に息子を取られた」という持ち主受動表現は、「息子の愛人が息子を取った」という事態から、その親族である「母親」が間接的に被害を受けた、ということを表している。中国語では、それが「她把儿子夺走了(彼女・息子の愛人が息子を奪い取った)」のように、原文の行為主体(代)名詞「彼女・息子の愛人」が主語に立ち、動作対象「息子」を受動者として「把」によって導入される、いわゆる「把」処置文(能動構文)になっている。また、(115)の「時雄はわが愛するものを奪われた」という持ち主受動表現は、「わが愛するものを奪った」という出来事より、その親族、あるいは親族に等しい存在である「時雄」が間接的に被害を受けた、ということを表している。中国語では、それが「自己心爱的人被人夺走(わが愛するものが他人に奪い取った)」のように、所有物名詞句「わが愛するもの」が主語に来る直接受動表現によって表されている。

このように、同じ事態を受動文で表現すると、日本語では受影者の視点、中国語では受動者の視点によってそれぞれ持ち主受動文、直接受動文になる傾向がある。

以下、対応関係の議論に入る。

### 1) 受動文

日本語の持ち主受動文 516 例のうち、受動文は 177 例、34.3%を占めている。受動文のうち、直接受動文が 115 例、22.3%、持ち主受動文が 59 例、11.4%、第三者受動文は 2 例、0.4%、使役受動文 1 例、0.2%と極めて少ない。

日本語の持ち主受動文 516 例のうち、中国語では受動文と訳されるものは 177 例、34.3%を占めているということは、中国語訳文においても、概念化者である話者が影響を受ける参加者の視点から、当該事態を述べるという把握を行うものは日本語原文の約三分

の一にすぎないということを表す。

### 1-1)直接受動文

日本語の持ち主受動文が中国語で直接受動文(計 115 例)と対応しているのは、主に取消・受け取り、接触、言語・態度、思考の意味を表す動詞によるものであり、全体-部分、本体-属性、主体-活動、及び一般所有といった所有関係が見られる。また、中国語訳では直接受動文といっても、所有物主語の直接受動文(計 80 例)のみならず、持ち主主語の直接受動文(計 33 例)も見られる。

同じ事態を受動文で表現すると、日本語では持ち主主語の受動文、つまり持ち主受動文、中国語では所有物主語の受動文、つまり直接受動文のほうがより自然だとされている(凌蓉 2005、于康 2012)。それでは、まず日本語の持ち主受動文が中国語で所有物主語の直接受動文と対応している例文を見てみよう。

日本語の持ち主受動文が中国語では、当該受動節の内部構造<sup>70</sup>において持ち主と共起する所有物主語の直接受動文によって表されるものは 31 例ある。これらは日本語原文の持ち主受動文と同様に、参照点関係が関与しており、そして同じ程度で詳しく当該事態を述べているが、視点あるいは主語とするものは異なる。すなわち、日本語が持ち主を主語とするのに対し、中国語は所有物を主語とする。

日本語の持ち主受動文が中国語において、当該受動節で持ち主と共起する所有物主語の直接受動文によって表されるものは、その所有物主語の表し方によって、「的(助詞)」<sup>71</sup>を伴う形式と「的」を伴わない形式と二分することができる。

まず、訳文の所有物主語が「的」を伴う形式で表示されるものには、主に「名詞(持ち主)+的+名詞(所有物)」、「人称代名詞(持ち主)+的+名詞(所有物)」、及び「人称代名詞(持ち主)+動詞+的+名詞(所有物)」という三つの形式がある。これらのうち、持ち主が名詞で表現されるのは有情物に限られないが、人称代名詞で表現されるのはむろん有情物に限られる。

(116)二人は大宮の室に入った。武子の室からは時々二人の笑い声が聞えた。野島はその方に氣をとられて黙っていたかった。

<sup>70</sup> ここで内部構造と呼ぶのは、主語と述語を備えた一つの節単位に含まれる構造である。それに対し、節単位を超えた構造を外部構造、あるいは前後の文脈と呼ぶ。これらの規定は志波(2015:30)によるものである。

<sup>71</sup> 刘月华他(1988:283)によると、「的(助詞)」は構造助詞の一つであり、定語・連体修飾語とその中心語を結び付けるもので、定語の文法的標識である。

(两人走进大宫的房间。从武子的房间里不时传来她们的笑声。野岛的注意力被吸引到那边去了)

[対訳 友情]

(117) 寺町には一箇寺も無くなっていた。崩れ落ちて、辛うじて原型をとどめる土塀、枝を引き裂かれて生肌をさらしている老樹などが残っているだけで、寺町一の大伽藍と云われていた本願寺の別院も跡形がない。

(寺町上没有留下一所寺院。土墙倒塌了, 却还幸存着原来的模样, 老树的枝条被撕裂, 露出了树的内层, 树干还残存着。被称为寺町第一大寺院的本愿寺的分院也无影无踪了)

[対訳 黒い雨]

(116)-(117)は日本語の持ち主受動文が中国語で直接受動文と対応し、その所有物主語が「名詞(持ち主)+的+名詞(所有物)」という形式によって表される例文である。訳文の所有物主語は、(116)では「野岛的注意力(野島の気)」、(117)では「老树的枝条(老樹の枝)」と対応している。

(118)それが酒を飲んだ揚句の事なので、夢中に擲り合をしている間に、学校の制帽をとうとう向うのものに取られてしまったのです。

(那纯属酗酒滋事, 在打得难解难分的时候, 我的学校制帽给对方抢去了)

[対訳 ころろ]

(119)彼女と一緒にいると僕は人生を一段階上にひっぱりあげられたような気がした。

(只消和她在一起, 我就恍惚觉得自己的人生被拽上了更高一级阶梯)

[対訳 ノルウェイの森]

(118)-(119)は訳文の所有物主語が「人称代名詞(持ち主)+的+名詞(所有物)」という形式で表示される例文である。原文の持ち主は訳文では、(118)では「我的学校制帽(私の学校の制帽)」のように「我(私)」という人称代名詞、(119)では「自己的人生(自分の人生)」のように「自己(自分)」という再帰代名詞で表されている。

(120)対する不信がありありと浮んで見えた。女にとって、自分がみごもった子を男から

否定されるということは、それまでの二人のあいだのすべての愛が否定されることであつたに違いない。

(对女人来说，自己怀着的孩子被男人否定掉，那等于否定了两人之间的爱情)

[対訳 青春の蹉跎]

(121)おれはだまって、天麩羅を消して、こんないたずらが面白いか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知ってるか、と云ったら、自分がした事を笑われて怒るのが卑怯じゃろうがな、もしと答えた奴がある。

(俺黙黙地将对虾面几个字擦去，向他们说：“你们这样胡闹，感到有意思吗？这是一种卑鄙的玩笑。你们懂得卑鄙这个词儿吗？”于是有一个家伙回答说：“自己做的事情，被人家一笑就发火，那才是卑鄙哦。”)

[対訳 坊ちゃん]

(120)-(121)は原文の所有物目的語がそれぞれ「自分がみごもった」、「自分がした」という連体節を持ち、訳文の所有物主語が「人称代名詞(持ち主)+動詞+的+名詞(所有物)」という形式で表示される例文である。(120)は親族関係といった相互依存関係、(121)は主体-活動という所有関係にある。両文はともに原文の所有物目的語、つまり「自己怀着的孩子(自分がみごもった子ども)」、「自己做的事情(自分がした事)」がそのままの形で訳文の所有物主語になっている。

また、訳文の所有物主語が「的」を伴わない形式で表示されるものには、主に「人称代名詞(持ち主)+指示代名詞+名詞(所有物)」、及び「指示代名詞+名詞(持ち主)+名詞(所有物)」という二つがある。これらのうち、前者では持ち主は人称代名詞で表現されるが、後者では名詞で表現される。

(122)そうすると、上原さんがすぐに僕に電話で知らせる事になっているのですから、必ずそのようにお願いします、僕はこんどの中毒を、ママにだけは気附かれたくないのです、

(上原先生一接到钱，就会马上打电话告诉我的。请务必这么办，因为我这次中毒，无论如何不想让妈妈知道)

[対訳 斜陽]

(123)娘さんは腰から下を梁か何かで挟まれていたとしても、きっちりと瓦の波のなか



に嵌めこまれながら、上半身を自由自在に動かしていたのは不思議である。

(这个姑娘下半身被梁柱之类的东西夹住了，正好陷在瓦片的波浪里。可也奇怪，她的上半身却能自由活动)

[対訳 黒い雨]

(122)は主体-活動という所有関係にある日本語の持ち主受動文であり、訳文では所有物主語が「我这次中毒(僕の今度の中毒)」のように、「人称代名詞(持ち主)+指示代名詞+名詞(所有物)」という形式で表されている。(123)は身体部位という全体-部分の所有関係にある持ち主受動文であり、中国語訳文では所有物主語が「这个姑娘下半身(この娘さんの下半身)」のように、「指示代名詞+名詞(持ち主)+名詞(所有物)」という形で表示されている。

(122)-(123)は原文の持ち主が代名詞や名詞、それに後続する所有物が名詞で表され、両者の間に助詞「的」がないため、中国語では主述構造が述語となった構文、いわゆる「主谓谓语句(主述述語文)」(刘月华他 1991:555)となる<sup>72</sup>。刘月华他(1991:555)によると、この主述述語文は主語について説明を加えたり、あるいはそれを描写するものであるため、説明文あるいは描写文であるといえる。よって、中国語において、(122)-(123)のように主語が二つ持ち、しかも両主語の間に所有関係が存在する主述述語構文は、日本語の助詞「は」を含むトピック構文(熊代 2002:89 例:象は鼻が長い)、あるいは二重主語構文(町田 2011:4 例:僕は足が踏まれた)に相当すると考える。日中語において、これらの構文は呼び名が異なるが、本質的にいずれも参照点関係が関与している構文である。すなわち、このようなトピック構文では、トピックあるいは大主語の部分が参照点として機能して、ある知識領域を想起し、その領域内において文の後続部分、あるいは大述語の表す命題が解釈される。

例えば、「僕は足が踏まれた」と例文(123)の「这个姑娘下半身被梁柱之类的东西夹住了

---

<sup>72</sup> 刘月华他(1991:555)によれば、中国語において、「主谓谓语句(主述述語文)」では、文全体の主語や述語と、述語の中の主語や述語とを区別するために前者を大主語、大述語、後者を小主語、小述語と呼び、大主語と小主語あるいは小述語との間に存在する関係によって当該構文はいくつかの異なるタイプに分けられるという。すなわち、(1)小主語(点線で表す)が大主語(二重破線で表す)に所属するものであるもの。例えば、他头疼，嗓子还有点红(彼は頭痛がし、のども少し赤い)、金沙江水急浪大(金沙江は流れが急で波も高い)などである。(2)大主語が大述語(二重線で表す)に対して「对于(に対して)」、「关于(に関して)」の意味を潜在的に含んでいるもの。例えば、管理工作，我是个外行(管理については私は素人です)である。(3)小主語と大主語が意味の上で動作の仕手と受け手の関係にあるもの。例えば、这本书我看过(この本は私は読んだことがあります)などである。

(この娘さんは下半身が梁か何かで挟まれていた)」という文においては、「僕は」、「这个姑娘(この娘さんは)」の部分がトピックとなり、「足が踏まれた」、「下半身被梁柱之类的东西夹住了(下半身が梁か何かで挟まれていた)」の部分が命題となる。そして、その「足が踏まれた」、「下半身被梁柱之类的东西夹住了(下半身が梁か何かで挟まれていた)」という文を適切に解釈するのに必要な領域を「僕は」、「この娘さんは」の部分が表している。つまり、足が踏まれた、下半身が梁か何かで挟まれていたのは、誰かほかの人ではなく、「僕」、「この娘さん」であるということを表している。

以上、日本語の持ち主受動文が中国語において、当該受動節の内部構造で持ち主と共起する所有物主語の直接受動文と対応するものを考察した。一方、中国語において当該受動節の外部構造、あるいは前後の文脈から持ち主が推定できる場合や、自明である場合、明示する必要がない場合など、日本語の持ち主受動文が当該受動節の内部構造で持ち主と共起しない所有物主語の直接受動文と対応するのは 49 例ある。

(124)内供は、首を振って、痛くないと云う意味を示そうとした。ところが鼻を踏まれているので思うように首が動かない。

(内供想摇摇头表示不疼。可是鼻子给踩着，头摇不成)

[対訳 鼻]

(125)はずみで、足をとられはしたが、倒れながら一廻転して、立上るなりもう駈け出し

(一个跟头，脚被咬住了，他倒下去一个鹞子翻身，爬起来，又跑开了)

[対訳 砂の女]

(126)そして子供のことを考えたの。子供にこんなところ見られたらどうしようってね。

(二来我还考虑到孩子，这种场面被孩子撞见可怎么办?)

[対訳 ノルウェイの森]

(124)-(125)は身体部位という全体-部分関係にある日本語の持ち主受動文であり、持ち主「内供(内供)」、「他(彼)」がそれぞれ(124)では先行文脈、(125)では後続文脈で明示されている。一方、(126)は状況活動の持ち主受動文であり、訳文では所有物主語が「这种场面(こんなところ)」のように、「指示代名詞+名詞(所有物)」という形式で表され、持ち主が自明であるため明示されていない。

これまで、日本語の持ち主受動文が中国語で所有物主語の直接受動文と対応している例文を考察してきた。以上のように、日本語の持ち主受動文(例:私が足を踏まれた)が中国語において、つねに持ち主と共起する形式で所有物主語の直接受動文(例:我的脚被踩了(私の足が踏まれた))と訳されるのではない、ということがわかった。

以下、日本語の持ち主受動文が中国語において、先行研究ではあまり言及されていない直接受動文、つまり所有者主語の直接受動文と対応する例文を分析していく。

日本語の持ち主受動文が中国語で、持ち主主語の直接受動文と訳されるのは計 33 例あるが、日中語はともに持ち主を主語、あるいは視点人物として当該事態を述べる。しかし、詳述性においては、訳文の直接受動文は原文の持ち主受動文と比べて、同程度詳細なものと、より簡略なものとの二つに分けられる。

まず、中国語において原文と同様に、詳しく当該事態を述べる所有者主語の直接受動文について、その構文的特徴を見てみよう。

(127)女は、よほど氣勢をそがれたらしく、行動に対してばかりでなく、言葉に対しても、ひどく従順だった。

(女人被挫得没了气性，不仅对男人的举动，而且对男人的语言也十分顺从)

[対訳 砂の女]

(128)母は父のために箒で背中をどやされた時の事などを話した。

(母亲谈着她被父亲用扫帚打在背上时的情景)

[対訳 ころろ]

(127)の「女は、よほど氣勢をそがれた」は「女人被挫得没了气性(女はそがれて氣勢がなくなった)」と訳されており、原文の所有物である「氣勢」が「得」による結果補語「得没了气性(~て氣勢がなくなった)」として表されている。また、(128)の「母は父のために箒で背中をどやされた」は「她(母亲)被父亲用扫帚打在背上(彼女(母)は父のために箒で背中にどやされた)」と訳されており、原文の身体部位である「背中」が「在(に)」による前置詞句「在背上(背中に)」で表示されている。つまり、結果補語や前置詞句などによって所有物が表されるため、中国語訳文において所有者主語の直接受動文は日本語原文の持ち主受動文と同様に、持ち主の視点から詳しく当該受動事態を述べることはできる。

(129)このままに済ましてはおれの顔にかかわる。江戸っ子は意気地がないと云われるのは残念だ。

a.訳 1(如果这样就算了，那关系到俺的颜面。俺这个“江戸儿”如果被说成没囊没气，那俺心里是决难服气的)

b.訳 2(若就此罢休又关系到自己的脸面。要是叫人说什么江戸哥儿不争气，那就太遗憾了)

[対訳 坊ちゃん]

(129)は「江戸っ子は意気地がない」という埋め込み文中の主格である「江戸っ子であるおれ」が受動文の主語に来る、言語活動を表す動詞「いう」による非状況活動の持ち主受動文である。動詞「いう」が「人が+内容を/と+動詞」といった形式を取り、言語活動のみならず言語活動の内容にも触れているため、客体への働きかけが強く、この動詞を述語動詞とする受動文は「人・事物は+内容と+動詞られる」という形の文になる(凌蓉 2005:52-53)。受動文「人・事物は+内容と+動詞られる」のうち、「内容」の部分が主語の「人・事物」の行う活動、または主語の持つ性質・属性である場合、つまり主語の「人・事物」と言語活動の内容との間に、主体-活動あるいは本体-属性といった所有関係が認められるため、本論文では直接対象受動文(凌蓉 2005:52)ではなく、持ち主受動文とする。

確かに、凌蓉(2005:52)が指摘したように、このような動詞を中国語の受動文に用いる場合、(129)aの訳1のように、動詞の後に「成(になる)」などによる補語がつくのが一般的である。しかしながら、(129)bの訳2からもわかるように、言語活動の内容を目的語として動詞に後続するのもありうるのである。要するに、言語活動を表す動詞による日本語の持ち主受動文が中国語で持ち主主語の受動文に対応する場合、原文の所有物である内容が結果補語としても、述語動詞の目的語としても現れるが、前者は所有物が結果補語であるため直接受動文であるのに対し、後者は所有物が残留目的語であるため持ち主受動文となる。日本語の持ち主受動文が中国語においても持ち主受動文で表されるものについては後に詳しく述べる。

また、中国語において日本語原文の持ち主受動文と比べて、より簡略的に、つまり所有物が明示されない持ち主主語の直接受動文の具体例を見られたい。

(130)一度云い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしてられません。

(我一旦开了口，无论给她怎样望着，也不在乎了)

[対訳 ころろ]

(131) そうだ。そのとき私は気づいたのだが、老師のそのうずくまった姿は、僧堂入衆の歎願を拒まれた行脚僧が、玄関先で終日自分の荷物の上に頭を垂れて過ごすあの庭詰の姿勢に似ていた。

(是的，此时我感到，老师蹲在那里的姿势与那些被拒之僧堂外的、终日睡在大门外自己的行囊之上的游方僧相比是何等的相似)

[対訳 金閣寺]

(130)の「私が彼女に顔を見られる」という形式、つまり「NP1(持ち主)がNP2にNP3(所有物)をVられる」のうち、ヲ格名詞を省略し、「私が見られる」としても両者の意味に矛盾が生じないため、動作の向けられる対象は主にガ格名詞、つまり持ち主であるといってもよい。よって、(130)のように、動作の向けられる対象が主に持ち主であるタイプの持ち主受動文は中国語において、所有物が共起しない持ち主主語の直接受動文に対応する傾向がある。また、(131)は態度を表す動詞「拒む」による持ち主受動文である。原文では、述語動詞の表す動作の向けられる相手「行脚僧」及び対象「僧堂入衆の歎願」の両方が備わっているが、訳文では、動作の向けられる相手「游方僧(行脚僧)」しか現れない。つまり、(131)のように、「NP1(持ち主)がNP2にNP3(所有物)をVられる」のうち、ヲ格名詞を省略した「NP1(持ち主)がNP2にVられる」という形式も成り立つ場合、日本語の持ち主受動文は中国語において、所有物が共起しない持ち主主語の直接受動文に対応することがある。

(132) 姉は茶を淹れる。土産の包を開くと、姉の好きな好きなシュウクリーム。これはマアお旨しいと姉の声。で、暫く一座はそれに気を取られた。

(姐姐沏上茶。打开芳子带回来的包袱，发现是自己最爱吃的奶油点心，便说道：“啊！这太好吃了。”这一来，大家一时被这点心吸引住了)

[対訳 布団]

(133) 先生は蒼い透き徹るような空を見ていた。私は私を包む若葉の色に心を奪われていた。

(他望着蔚蓝清澈的天空，我却给周围嫩绿的颜色吸引着)

[対訳 金閣寺]

日本語において、(132)の「気を取られる」と(133)の「心を奪われる」は慣用的な表現である。このような持ち主受動表現は中国語でともに「吸引(引きつける)」という他動詞による所有者主語の直接受動表現「大家被这点心吸引住了(みんなはそのお土産に引きつけられた)」、「我给周围嫩绿的颜色吸引着(私は私を包む若葉の色に引きつけられていた)」に対応している。すなわち、中国語訳文において、(132)-(133)のように、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP+NP3(所有物)」のうち、残留目的語 NP3 を省略し、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP」としても両者の意味に矛盾が生じないため、動作の向けられる対象は主に主語名詞、つまり持ち主であるといってもよい。よって、日本語の持ち主受動文は中国語で、(132)-(133)のように動作の向けられる対象が主に持ち主である主語名詞であるタイプの受動文に対応する場合、原文の所有物が共起しない直接受動文に訳されるほうがより一般的である。

## 1-2)間接受動文

### 1-2-1)持ち主受動文

日本語の持ち主受動文が中国語においても持ち主受動文(目的語残存のタイプと「把」を伴う形式のタイプを含む)で表示されるのは計 59 例ある。それらは、主に取消・受け取り、接触、知覚などの意味を表す動詞によるもので、全体-部分、本体-属性、主体-活動、相互依存及び衣類などの一般所有という五つの所有関係のすべてが含まれているが、主に全体-部分関係、本体-属性関係、及び一般所有関係といった所有関係にあるものである。

原文の述語動詞及び所有関係のいずれに属するのかわからず、日本語の持ち主受動文が中国語において、目的語残存形式の持ち主受動文と訳されるもの、主に以下の四つのパターンに分けられる。

第一に、中国語では、日本語の持ち主受動文が受動文で表現すれば、コロケーション<sup>73</sup>、あるいは慣用的な表現となる場合、そのような受動表現は、動詞とその目的語が慣用的に固く結び付いたため、所有物主語、または持ち主主語の直接受動文ではなく、目的語残存の持ち主受動文にしかなることができない。例えば、(134)のような例文である。

(134)狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌は中々達者だから、

---

<sup>73</sup> 于康(2012:4)によると、コロケーションとは、二つ以上の単語が慣用的に固く結び付いたもののことであり、コロケーションのフレーズは、その構成成分がそれほど自由に動くことができないので、統語的にも意味的にも一定の制約を受けることになる。

まずい事を喋舌って揚足を取られちゃ面白くない。

(“狗獾”和“红衬衫”从人品说，比俺差得远，但在嘴头子上，却都能言善辩，如果俺说得不妙，让他们抓了小辫子，那可就糟糕了)

[対訳 坊ちゃん]

日本語で「揚足を取る」は慣用的な表現であり、(134)のようにその動詞の受動形である「揚足を取られる」は中国語において、受動文で表すと、「让他们抓了小辫子(彼らに弱みを握られる)」という表現になる。中国語において、「小辫子(お下げ)」は本来身体部位を表すが、当該コロケーション「抓小辫子(弱みを握る)」では比喩的に「弱点・弱み」を表す。(134)の訳文である「让他们抓了小辫子(彼らに弱みを握られる)」の残留目的語「小辫子」が主語に来ると、「小辫子让他们抓了(彼らにお下げが握られる)」のように、「小辫子」は比喩的な意味ではなく、身体部位の意味になってしまう。

第二に、中国語では、日本語の持ち主受動文が受動文で表現されれば、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP+NP3(所有物)」という形式になり、その残留目的語 NP3 を省略し、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP」として両者の意味に矛盾が生じる、または後者が不完全な文や成立しない文になる場合、目的語残存の持ち主受動文で表されるしかできない。

(135)この家はもう、半分死にかけている……流れつづける砂の触手に、内臓を半分くいちぎられて……(後略)

(原来这屋子的一半已经死去了……已经被不停流动沙子的触手，掏空了一半内臓哇……(後略))

[対訳 砂の女]

(136)殊に父はその母から責任を追及され、さらにその子からも責任を追及される。

(特别是父亲要被孩子的母亲和孩子本人追究责任)

[対訳 青春の蹉跌]

(135)の「この家は内臓を半分くいちぎられた」は中国語で、「这屋子被掏空了一半内臓(この家は内臓の半分を取り出された)」と訳されており、その残留目的語「一半内臓(内臓の半分)」を省略し、「这屋子被掏空了(この家は取り出されて空きになった)」として両者の意味に矛盾が生じるため、所有物を目的語として残存しなければ、原文の意味をそのまま

訳すことができなくなる。また、(136)の「父はその母から責任を迫及される」は中国語において、「父亲要被孩子的母亲追究责任(父はその母から責任を迫及される)」に対応しており、その残留目的語である「責任(責任)」を省略した「父亲要被孩子的母亲追究(父はその母から迫及される)」という形式が不完全な文、あるいは成立しない文になるため、所有物「責任(責任)」を目的語として残留する形の持ち主受動文で表されるしかできない。

第三に、中国語では、日本語の持ち主受動文が受動文で表現すれば、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP+NP3(所有物)」という形式になり、その残留目的語 NP3 を省略し、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP」としても両者の意味に矛盾が生じず、当該受動節が後続する動詞句または動詞節の表す動作の様態を表す場合、所有物を目的語として残存する持ち主受動文で表示される。このタイプは主に接触の意味を表す動詞によるものであり、身体部位という所有関係にあるものである。例えば、以下の例文である。

(137)重松はシゲ子が手を放してから、自分が手を引かれていたことに気がついた。

(繁子放手之后，重松才意识到自己是被拉着手走来的)

[対訳 黒い雨]

(138)二台電車をやり越し、三台目に乗った。克平は背をアルさんに押されて、むりやりに詰め込まれた格好だった。

(让过两辆后，他们挤上第三辆电车。克平被乙醇推着脊梁，好不容易挤了上去)

[対訳 あした来る人]

(137)-(138)はともに接触を意味する動詞による日本語の持ち主受動文であり、しかも身体部位といった全体-部分の所有関係にあるものである。中国語では、(137)の「自分が手を引かれていた」は「自己是被拉着手走来的(自分が手を引かれて歩いてきたのだ)」と訳されており、訳文の述部「被拉着手走来(手を引かれて歩いてきた)」では、二つの動詞句「被拉着手(手を引かれて)」、「走来(歩いてきた)」がそれぞれ二つの相伴って起こる動作を表しているが、重点は後者にあり、前者は補助的な要素として後者の様態を述べている。また、(138)の「克平は背をアルさんに押されて、むりやりに詰め込まれた格好だった」は「克平被乙醇推着脊梁，好不容易挤了上去(克平は背をアルさんに押されて、むりやりに詰め込まれた)」に対応しており、訳文では原文と同様に、受動節「克平被乙醇推着脊梁(克平は背をアルさんに押されて)」は接続節に置かれ、補助的な要素として後続する主節である動詞節「好



不容易挤了上去(むりやりに詰め込まれた)」の様態を表している。

(137)-(138)のような持ち主受動文は、日本語においても、中国語においても、身体部位という所有物を表す目的語を省略しても、元の持ち主受動文と意味的に矛盾が生じないが、詳述性においては明らかに異なる。すなわち、所有物を表す目的語が残る持ち主受動文のほうが、それを省略した直接受動文より詳しく当該事態を述べている。

第四に、中国語では、日本語の持ち主受動文が受動文で表現すれば、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP+NP3(所有物)」という形式になり、その残留目的語 NP3 を省略し、「NP1(持ち主)+被+NP2+VP」としても両者の意味に矛盾が生じない場合、話者は所有物である NP3 を強調するために、所有物である NP3 を目的語として残存する形の持ち主受動文を用いる。

(139)私は又断りました。叔父は厭な顔をしました。従妹は泣きました。私に添われ  
ないから悲しいのではありません、結婚の申し込を拒絶されたのが、女として辛か  
ったからです。

(我拒绝了。叔叔的脸拉长了，堂妹也哭了。她并不是因为不能跟我结婚才难过的。一个女人，倘若被人拒绝了结婚的要求，当然是痛苦的)

[対訳 ころろ]

(140)登山家だろうと、ビルの窓拭きだろうと、テレビ塔の電気工だろうと、サ-カスの  
ブランコ乗りだろうと、発電所の煙突掃除夫だろうと、下に気をとられたときが、  
そのまま破滅のときなのだ。

(登山家也好，大楼擦玻璃窗的也好，电视塔上的电工也好，马戏团的空中飞人也好，发电厂烟囱的清扫工也好；要是被底下的事吸引去了注意力，那就到了他的灭顶之时了)

[対訳 砂の女]

(139)の「従妹は結婚の申し込を拒絶された」は中国語では、「她被人拒绝了结婚的要求(彼女は人に結婚の申込みを拒絶された)」に対応しており、残留目的語「结婚的要求(結婚の申込み)」が省略されて「她被人拒绝了(彼女は人に拒絶された)」としても意味的に矛盾が生じないが、話者が所有物である「结婚的要求(結婚の申込み)」を強調するため、目的語として残るのである。すなわち、女として拒絶されて辛かったのは、ほかのものではなく、「结婚的要求(結婚の申込み)」というものである、という意味を表す場合、所有物を目的語

として残存する形の持ち主受動文になるのである。同様に、(140)の「気をとられた」という慣用的な受動表現は訳文では、「被吸引去了注意力(注意を引き付けられた)」と訳されており、前述したように、そのうちの「注意力(注意)」を省略し、「被吸引了(引き付けられた)」と持ち主主語の直接受動表現としても成立するが、所有物である「注意力(注意)」を際立たせるために、それを目的語として残存する。つまり、取られて破滅のときになるのは、ほかのものではなく、「注意力(注意)」である、ということを表す場合、その所有物を目的語として残るのである。

これまで、中国語において、日本語の持ち主受動文が目的語残存形式の持ち主受動文で表される例文を詳しく考察してきた。以下、先行研究ではあまり言及されていないタイプ、つまり「把」を伴う形式の持ち主受動文で日本語の持ち主受動文が表示される例文について分析する。

(141)もしその男が私の生活の行路を横切らなかったならば、恐らくこういう長いものを貴方に書き残す必要も起らなかったでしょう。私は手もなく、魔の通る前に立って、その瞬間の影に一生を薄暗くされて気が付かずにいたのと同じ事です。

(如果没有那个男人穿过我的生活道路，恐怕我也不会有必要写这么长的信留给你了。我简直跟毫无抵抗似地站在魔鬼经过的地方，被那一瞬间的阴影把毕生弄得黯淡无光，而自己却没有注意到一样)

a.直接受動形式:被那一瞬间的阴影弄得毕生黯淡无光

b.「把」を伴う形式:被那一瞬间的阴影把毕生弄得黯淡无光

[対訳 ころろ]

(142)路傍に倒れた兵士の数が多くなった。私は死んだ兵士の銃を取る機会をねらっていたが、死者の傍に銃があることは絶えてなかった。最初から持っていないか、あるいは早速取り去られるからであろう。

(倒毙在路边的士兵逐渐增多了，我一直想找机会从死者身上弄支枪，可尸体旁边总没有枪。不知是这些兵没带枪呢，还是人刚死就被人立刻把枪拿走了呢?)

a.目的語残存の形式:被人立刻拿走了枪

b.「把」を伴う形式:被人立刻把枪拿走了

[対訳 野火]

中国語では、(141)の「その瞬間の影に一生を薄暗くされた」は「被那一瞬间的阴影把毕生弄得黯淡无光(その瞬間の影に一生を薄暗くされた)」、(142)の「銃を早速取り去られる」は「被人立刻把枪拿走了(人に銃を早速取り去られる)」と訳されており、それぞれの a からわかるように、持ち主主語の直接受動文または目的語残存の持ち主受動文によっても表されるが、これらの形式に比べて、それぞれの b という「把」を伴う形式のほうが、受動者、かつ所有物である「把」の目的語の「毕生(一生)」、「枪(銃)」を際立たせ、それらの受けた処置や影響を強調する意味合いが強い。

朱德熙(1982 [杉村他(訳)1995:250-253])によると、中国語において、「把」の働きは、「S+V+O」という能動構文に還元できない「把」構文が数多く存在するから、動詞後の目的語を前に引き出すことではなく、受動者を導入することにあるという。また、刘月华他(1991;635)によれば、「S+V(+O)」という能動構文は動作主がいかなる動作を行うかを述べたり尋ねたりする場合用いられるが、「被」構文は主語にとって被害的あるいは不愉快な事態について用いられることが多く、「把」構文は話者が動作主を叙述の対象とし、ある事物が誰かの処置や影響を受けたことを述べたり、ある事物が誰かによってどのような処置や影響を受けたのかを尋ねたりするときに使用される。よって、(141)-(142)の a とそれぞれの b はともに「被」構文ではあるが、「被」に後続する部分が能動構文であるか、それとも「把」構文であるかという点で異なる。すなわち、(141)-(142)の a とそれぞれの b はともに、主語の持ち主が受影者として当該事態から被害を受けることを述べるが、異なるのはそれぞれの b では、所有物を直接的に処置や影響を受けた受動者として、「把」によって導入され、その受けた影響を際立たせる、ということである。つまり、「被-把」という「把」を伴う形式の持ち主受動構文は、持ち主主語の直接受動構文及び目的語残存の持ち主受動構文と比べて、所有物である「把」の目的語の受けた直接的な影響を強調するため、主語の持ち主を間接的に被害の被った受影者とするニュアンスが強い。換言すれば、「把」を伴う形式の持ち主受動構文では、直接的に影響を受けた受動者(所有物)と、間接的に被害を被った受影者(持ち主)との対立がはっきりしている、ということである。

要するに、話者が所有物の受けた処置や影響を強調するために、中国語では、影響性の強い動詞による日本語の持ち主受動文に対応する受動形式として、「把」を伴う形式の持ち主受動文が用いられると考える。

### 1-2-2)第三者受動文

日本語の持ち主受動文は中国語で、第三者受動文によって表されることがある。例えば、

以下の例文である。

(143)漱石の「それから」(明 42)は、「慌ただしく門前を馳けて行く足音」で眼を覚まされる主人公代助の朝の描写から始まる。

(漱石的《其后》是从描写主人公代助早上被“慌慌张张地从门前跑过的脚步声”吵醒而开始的)

[対訳 近代作家入門]

(143)の「足音で眼を覚まされる」は「被脚步声吵醒(直訳:足音に騒がれて目が覚めた)」に対応しており、訳文では、日本語の「(目を)覚ます」に対応する自動詞「(目が)覚める」を結果補語とし、その前に新しい自動詞「吵(騒ぐ)」を受動文の述語として付け加える。原文の行為主体「足音」が「で」によって表示されることからわかるように、「脚步声吵(足音が騒がしい)」ということが原因となり、「代助醒(代助は目が覚めた)」という結果が生じた、つまり「被」によって導かれる補文の事態「脚步声吵(足音が騒がしい)」が原因を表し、それに後続する結果を表す補語「醒(覚めた)」が明示されれば、中国語で第三者受動文としては成立する。中国語の第三者受動文の成立条件について、詳しくは第7章を参照のこと。

要するに、原文の述語動詞に結果の意味が含まれれば、中国語ではそれに対応する動詞を結果補語とし、述語動詞として新しい動詞を付け加えたりすることによって、日本語の持ち主受動文が第三者受動文で表現されることはできる。これは、中国語において受動文の使用には、結果の意味及び結果補語の明示化、つまり位置・状態変化及びその言語化が密接的に関わっている、ということを表している。

### 1-3)使役受動文

日中対訳コーパスでは、日本語の持ち主受動文が中国語において、使役受動文によって訳されるのは1例見られる。

(144)カナブンブンで毒気を抜かれた形で、梶も初めて父親の言葉で言った。

(在给金蟻吓了一跳后，梶才换上父亲的口气)

[対訳 あした来る人]

(144)の「毒気を抜かれた」は「度胆を抜かれた」という意味を表す慣用的な表現であり、

中国語では「给金蟻吓了一跳(カナブンブンにびっくりさせられた)」、つまり受動標識「给」に「吓(びっくりさせる)」という心理状態を表す動詞が後続するという形式の使役受動表現によって表されている。原文の行為主体「カナブンブン」が「で」によって表示されるため、原因の意味が強いということがわかる。(144)は、原因となる「カナブンブン」のために、主語の「梶」が「びっくりした」といった心理状態になった、ということを表している。訳文は、原文と同様に、行為主体を使役者としているが、原文の述語動詞「抜かれた」に対応する動詞ではなく、述部「毒気を抜かれた」に含まれる結果の意味、あるいは結果状態を表す動詞に対応する動詞「吓(びっくりする)」を受動文の述語としている。

つまり、原文の行為主体が原因となり、しかもその述語動詞に結果の意味が含まれれば、中国語ではその結果の意味を表す動詞による使役受動文によって、日本語の持ち主受動文が表されることはできる。これも、上述したように中国語において受動文の使用には、結果の意味及び結果補語の明示化が密接的に関わっている、ということを表している。

## 2) 非受動文

日本語の持ち主受動文が中国語では非受動文として対応するものは 314 例、60.9%にも達している。そのうち、自動詞文が 47 例、9.1%、他動詞文は 223 例、43.5%、使役文が 25 例、4.8%、処置文は 19 例、3.7%を占めている。つまり、日本語の持ち主受動文はもっとも高い比率で中国語の他動詞文と対応している。

### 2-1) 能動文

#### 2-1-1) 自動詞文

日中対訳コーパスでは、日本語の持ち主受動文が中国語において、自動詞能動文によって表されるものは 47 例ある。それらの持ち主受動文はおもに接触、取消・受け取りの意味を表す他動詞、及び行為や状態変化を意味する非能格自動詞によるものであり、本論文での所有関係の下位分類、同一関係を除外した五種のいずれも含まれるが、とりわけ全体-部分、本体-属性、相互依存といった所有関係にある例文が多い。また、その訳文の自動詞文は、所有物主語のものもあれば、所有者及び行為主体主語のものもある。例えば、下記の例文は中国語訳文では、それぞれ所有物、所有者及び行為主体を主語とする自動詞文である。

(145) 島村は駒子の聞きちがいに思いあたると、はっと胸を突かれたけれど、目を閉じて黙っていた。

a. 訳 1(島村一想到驹子是错听了话, 胸中就猛然起了波动, 可是他合上眼一声也没响)

b. 訳 2(岛村猜想驹子准是误会了, 不由得大吃一惊, 他闭上眼睛, 一声不响)

[対訳 雪国]

(146) 黒人兵は僕の腕を離すと、その午前まで僕らの間にあふれていた親しい日常の感情に胸をしめつけられるように、僕を見つめた。

(黒人松开我的手臂, 看着我。直到上午还存在于我们之间的亲切的、习以为常的感情似乎又涌上了他的胸膛)

[対訳 飼育]

(145)の「島村は胸を突かれた」は a 訳 1 では「胸中起了波动(直訳:胸には揺れ動きが起こった)」、b 訳 2 では「島村大吃一惊(島村がびっくりした)」と訳されている。両者は中国語ではともに自動詞能動文ではあるが、前者が身体部位である「胸」を主語とするのに対し、後者は持ち主である「島村」を主語とする。また、(146)の「黒人兵は親しい日常の感情に胸をしめつけられる」は「亲切的、习以为常的感情涌上了他的胸膛(直訳:親しい日常の感情が彼の胸に湧き上がってくる)」に対応しており、中国語では原文での行為主体を表す二格名詞句「親しい日常の感情」を主語に取り立て、「涌(湧く)」という自動詞を述語とする能動文になっている。

原文における持ち主受動文の述語動詞と訳文における自動詞文の述語動詞との意味関係を見ると、中国語訳の自動詞文を大きく二分することができる。

まず、日本語原文の述語動詞と同じ意味を表す中国語の自動詞によるものである。このタイプは、おもに原文では非能格自動詞による、しかも親族関係といった相互依存の所有関係にある日本語の持ち主受動文に対応する例文である。例えば、以下のようなものである。

(147) そうお前達に側で騒がれると、母さんは最早気が狂いそうに成る。

(你们在旁边大吵大闹, 做妈的简直要气疯啦!)

[対訳 破戒]

(148) 実はそれだけではない、まだみんなに云わなかったが、女房の奴に逃げられてしまつて、…………

(其实不仅是这个原因, 我还没告诉大家呢, 我老婆跑掉了……)

(147)では「母さんはお前たち・子どもたちに騒がれる」のように、その主語名詞「母さん」と二格名詞句「お前たち・子どもたち」との間には親族関係といった所有関係が存在するため、本論文では持ち主受動文の周辺に位置づける。同様に、(148)の「私は女房の奴に逃げられた」においても、主語名詞「私」と二格名詞句「女房」が親族関係にあるので、本論文では持ち主受動文とする。これらの訳文では、それぞれ原文の述語動詞「騒がれる」、「逃げる」に対応する中国語の自動詞「吵闹(騒ぐ)」、「跑(逃げる)」による能動文となっている。換言すれば、このようなタイプの持ち主受動文では、その持ち主主語と所有物が受影者と行為主体の関係にあるため、訳文の所有物主語の自動詞能動文と原文の受動文との対応は、同じ事態を二つの異なった視点から述べる関係にある。話者の視点が行為主体に置かれる表現が中国語の自動詞能動文、受影者に置かれる表現が日本語の持ち主受動文である。したがって、中国語訳文の述語動詞は日本語原文の述語動詞と同じ意味を表すものになるのである。

また、日本語原文の述語動詞と異なる意味を表す中国語の自動詞によるものである。このタイプでは、訳文と原文の述語動詞は意味的に異なるが、訳文と原文の述部は意味的に対応する。そうでなければ、非対応となる。

(149)叔父も、丑松もすくなくならず胸を打たれたのである。

(叔父和丑松都有些激动)

[対訳 破戒]

(150)杏子は、突然アルさんにいやと言うほど肩を平手データたかれた。

(突然，乙醇的手掌重重落在自己肩头)

[対訳 あした来る人]

中国語では、(149)の「胸を打たれた」は「激动(感激する)」、(150)の「アルさんに肩を平手データたかれた」は「乙醇的手掌落在自己肩头(アルさんの平手が自分の肩に落ちた)」と訳されている。明らかに訳文の述語動詞、それぞれ「激动(感激する)」、「落(落ちる)」が原文の述語動詞「打つ」、「叩く」と異なる意味を表すが、訳文の述部「激动(感激する)」、「落在自己肩头(自分の肩に落ちた)」は意味的に原文の述部「胸を打たれた」、

「肩をたたかれた」と対応している。つまり、このタイプの持ち主受動文が中国語の自動詞文(所有物主語、所有者主語と動作主主語のいずれも可能)によって表示されるのは、それらの述語動詞の表す意味が必ずしも同じではないが、それらの述部の表す意味が対応するためである。

### 2-1-2)他動詞文

日本語の持ち主受動文が中国語では、他動詞能動文で表されるのは223例ある。そのほとんどは接触、取消・受け取りなどの意味を表す他動詞によるものであるが、状態変化、感覚及び行為の意味を表す非能格自動詞、さらに状態変化の意味を表す非対格自動詞によるものも見られる。例えば、(151)は非能格自動詞、(152)は非対格自動詞によるものである。

(151)おそらくこの前、お店へ行った時でも、家内はあの犬のことを知ったんでしょう。

そういう勘はすごいんです。すぐ、何でもかんづかれてしまう。

(或许是上次去你店里时知道的吧？在这方面她十分敏感，什么事她都能凭直觉一下子猜中)

[対訳 あした来る人]

(152)八千代は、夫がどうしても山に登りたいのなら、(中略)山に登るために生れて来たみたいに、山のことばかりに夢中になられるのは、もちろん八千代にしてみたら愉快であろうはずはなかったが(後略)

(其实，如果丈夫横竖要去登山，(中略)当然，丈夫俨然为山而生存于世般地一味迷恋登山，作为八千代不可能心里高兴)

[対訳 あした来る人]

(151)-(152)はともに、「私は家内にかんづかれる」、「八千代は夫に山のことばかりに夢中になられる」のように、主語と行為主体を表す二格名詞句とが親族関係にあるため、日本語の持ち主受動文である。中国語ではそれぞれ「什么事她都能凭直觉一下子猜中(何でも彼女はすぐ直感によって当てられる)」、「丈夫俨然为山而生存于世般地一味迷恋登山(夫は山に登るために生れて来たみたいに、山のことばかりにふける)」と訳されており、原文の述語動詞「感づく」、「なる」と異なる意味を表す動詞「猜(当てる)」、「迷恋(ふける)」による所有物主語の能動文となっている。

原文の持ち主受動文は同一関係を除いた所有関係の五つの下位分類のいずれも含まれる。



上記(151)-(152)のような親族関係といった相互依存の所有関係にあるものも見られるが、主に本体-属性、全体-部分、主体-活動及び一般所有といった所有関係にあるものである。また、その訳文の他動詞文は、原文と同様に所有者主語のものもあれば、所有物主語、動作主主語、さらにこれら三つ、つまり所有者、所有物及び行為主体以外のものが主語に来る例文もある。例えば、下記のようなものである。

(153)「どうぞ隠さずに云って下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんが又云った。

(“别隐瞒，告诉我吧。如果说我有责任，就比刀刷还难受。”太太又说)

[対訳 ころろ]

(154)悪臭の出るゴミ焼却場を自分の市や町や村につくられては迷惑だが、隣の市町村に建てるのならかまわないというわけだ。

(换言之，对于臭气熏天的垃圾处理场设在自己的市、町、村，不能容忍，若设在邻近的市、町、村，却不持异议)

[対訳 日本列島改造論]

中国語において、(153)の「身を切られる」は「刀刷(刃物は(身を)切る)」、(154)の「悪臭の出るゴミ焼却場を自分の市や町や村につくられる」は「臭气熏天的垃圾处理场设在自己的市、町、村(悪臭の出るゴミ焼却場は自分の市や町や村につくる)」と訳されている。(153)はヲ格名詞の持ち主、(154)はニ格名詞句の持ち主が受動文の主語に来る持ち主受動文である。原文において、(153)では明示されていない、道具を表すデ格名詞句「刃物」、(154)では明示されている述語動詞の目的語「ゴミ焼却場」に対応する名詞句は訳文では他動詞能動文の主語に来る。(154)の訳文である「垃圾处理场设在自己的市、町、村(ゴミ焼却場は自分の市や町や村につくる)」は、主語名詞「垃圾处理场(ゴミ焼却場)」が述語動詞「设(つくる)」の表す動作の直接対象であるため、いわゆる中国語の「受事主语句(受動者主語文)」となっている。

また、訳文の述語動詞と原文の述語動詞との意味関係を見ると、(155)-(156)のように同じもののほうがむしろ少ない。

(155)日本軍は完全に武装を解除され、それぞれの家庭に復帰して平和的、生産的な生活

を営む機会を与えられる。

(日本军队完全解除武装后, 允许士兵重返家园, 从事和平的劳动与生活)

[対訳 日本経済の飛躍的な発展]

(156)敷地は広く、まわりを高いコンクリートの塀に囲まれていた。

(占地很大, 四周围有高高的混凝土墙)

[対訳 ノルウェイの森]

中国語では、(155)の「日本軍は武装を解除される」は「日本军队解除武装(日本軍は武装を解除する)」、(156)の「まわりを高いコンクリートの塀に囲まれていた」は「四周围有高高的混凝土墙(まわりは高いコンクリートの塀で囲んでいる)」に対応しており、ともに原文の述語動詞「解除する」、「囲む」と同じ意味を表す他動詞「解除(解除する)」、「围(囲む)」による能動文である。(156)のように、「囲む」という使役性を含意しない他動詞による日本語の持ち主受動文は中国語では他動詞能動文によって表されることがある。

一方、訳文の述語動詞が原文の述語動詞と異なる意味を表す例文には、主に四つの異なるタイプが見られる。

まず第一に、中国語では慣用的な表現であるもの。

(157)野だは二三秒の間毒気を抜かれた体で、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。

a. 訳 1(“蹙脚帮”在两三秒钟之内, 好象摸不着头脑, 呆呆地楞在那里)

b. 訳 2(有两三秒钟, 帮腔佬象丢了魂似的, 一下子愣住了)

[対訳 坊ちゃん]

(157)の「毒気を抜かれた」は慣用的な受動表現であり、「摸不着头脑(直訳:頭に触れられない(糸口がつかめない))」、「丢了魂(直訳:魂を失う(魂が抜ける))」といった中国語の慣用的表現に対応している。訳文と原文の述語動詞は異なる意味を表すが、それぞれの述部は意味的に対応している。

第二に、意味的に原文の述語動詞に対応する動詞あるいは名詞の前に、語彙的受動を表す動詞を付け加えるもの。

(158)腰が高いと靴で臀を踏まれ、銃口が低いと指揮刀で肩をつつかれる。

(腰部弓得高了，屁股就要挨军靴踩；枪口放低了，肩膀就要挨指挥刀捅)

[対訳 黒い雨]

(159)本県の中学は昔時より善良温順の気風を以て全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起ってその責任を問わざるを得ず。

(本县中学，向来以善良温顺之学风赢得全国钦羨，而令吾校之荣誉因这两个不逞之徒的轻狂举动而蒙受损害，致使全市遭此耻辱。吾人应奋然而起，追究责任)

[対訳 坊ちゃん]

(160)「そうかい」彼は友達のことを褒められるのをよろこびたいと思ったが、心細かった。

(“是吗？”野岛想为朋友受到称赞而高兴，但又觉得心中不安)

[対訳 友情]

中国語では、(158)の「臀を踏まれる」は「挨踩(直訳:踏むのを受ける(踏まれる))」、(159)の「吾校の特権を毀損せられる」は「吾校之荣誉蒙受损害(吾校の荣誉が損害をこうむる)」、(160)の「友達のことを褒められる」は「朋友受到称赞(直訳:友達が賞賛・褒めるのを受ける(友達が褒められる))」に対応している。(158)-(159)はいずれも原文の述語動詞に対応する動詞や名詞に、受動の意味を表す他動詞、いわゆる語彙的受動の動詞が付加する形式になっている。中国語において、「挨」によるものは主に(158)のように、接触の意味を表す動詞、しかも身体部位にある日本語の持ち主受動文に対応する。また、「受」によるものは主に(159)-(160)に示すように、言語・態度、または作用の意味を表す動詞による日本語の持ち主受動文に対応する。ちなみに、中国語では「挨」、「蒙受」、「遭受/遭到」などは不幸なことまたは不利な状況にしか用いないが、「受/受到」にはそのような制限はない。

第三に、原文の述語動詞と正反対の意味を表す動詞、つまり反義関係にある動詞によるもの。

(161)私は修業中のからだですから、学生として大切な時間を奪われるのは非常の苦痛だとも考えました。

(我正在求学期间，作为学生，失去宝贵的学习时间将是痛苦不堪的)

[対訳 金閣寺]

(162)「喉さえやられなきゃ」と兎口は自信の強い声でいった。「それに若い犬しか残ってない時を待ったんだ」

(“只要咽喉保护好……”豁唇儿信心十足地说,“而且还要等到窝里只有小狗的时候。”)

[対訳 飼育]

(161)の「大切な時間を奪われる」は中国語では「失去宝贵的学习时间(大切な時間を失う)」、(162)の「喉をやられる」は「咽喉保护好(喉はちゃんと守る)」と訳されており、それぞれの述語動詞は原文のそれと異なる。すなわち、(161)では原文の「奪う」に対し、訳文は「失去(失う)」であり、(162)では原文の「やる」に対し、訳文は「保护(守る)」である。

第四に、原文の述部全体が感覚または心理・感情の意味を表す場合、訳文ではほとんどそれに対応する感覚、心理・感情を意味する他動詞に目的語がつく形式になる。

(163)女子学生は(中略)疲れきってぼんやりした、悪い表情をしてい、僕は胸をしめつけられた。

(女学生(中略)脸上浮现出由于疲劳过度有些呆滞难受的表情。我觉得胸闷)

[対訳 死者の奢り]

(164)思わず其処に腰掛けていた一人の紳士と顔を見合せた時は、あまりの奇遇に胸を打たれたのである。

(当他无意中和早已坐在那儿的一个绅士照面的时候,他对这意想不到的奇遇感到惊讶)

[対訳 破戒]

中国語において、(163)の「胸をしめつけられた」は「觉得胸闷(直訳:胸が息苦しいと感じた)」、(164)の「胸を打たれた」は「感到惊讶(直訳:驚きを感じた(不思議に思った))」に対応している。(163)-(164)はともに、原文の述部が感覚、感情の意味を表し、訳文では感覚、感情を意味する他動詞「觉得(と思う/感じる)/感到(感じる)」に目的語「胸闷(胸が息苦しい)/惊讶(驚き)」を繋ぐ形で表されている。

## 2-2)使役文

日中対訳コーパスでは、日本語の持ち主受動文が中国語において、「使/叫/让」という使役標識による使役文で表されるのは25例ある。主としては、思考・認知、接触、及び位置・状態変化の意味を表す動詞によるものであり、そして主体-活動、本体-属性、及び全体-部

分といった所有関係にあるものである。例えば、以下のように、思考・認知を意味する動詞による、主体-活動という所有関係にある日本語の持ち主受動文は中国語の「让」使役文によって表示されている。

(165)それよりも一番に肝心カナメの心得は、当方がすでに見抜いているという事実を、相手に悟られぬよう隠しとおす工夫である。

(重要的是要想方设法做到不让对方知道你已经看透了他的心思)

a.不{ ○让/○被 }对方知道你已经看透了他的心思

[対訳 百言百話]

(165)は思考・認知の意味を表す動詞「悟る」によるものであり、ヲ格名詞「当方がすでに見抜いているという事実」が受動文の主語名詞の行う活動であるため、主体-活動関係にある日本語の持ち主受動文である。訳文では、(165)の「当方がすでに見抜いているという事実を、相手に悟られる」は「让对方知道你已经看透了他的心思(直訳:当方がすでに見抜いているという事実を、相手に悟らせる)」と訳されている。訳文は、原文の述語動詞に対応する中国語の動詞「看透(悟る)」に「让」という使役標識が先行する形式になっている。中国語の「让」が使役と受動との両方の意味をあわせ持ち、当該訳文の「让」が受動専用の形式「被」に置き換えられる、といったことから、(165)の訳文は受動文としても解釈できるということがわかる。

一方、日中対訳コーパスでは、日本語の持ち主受動文が「使/叫」という形式による中国語の使役文で表されるものは、「让」による使役文と異なり、受動文と解釈することができない。例えば、以下の例文である。

(166)本県の中学は昔時より善良温順の気風を以て全国の羨望するところなりしが、軽薄なる二豎子のために吾校の特権を毀損せられて、この不面目を全市に受けたる以上は、吾人は奮然として起ってその責任を問わざるを得ず。

(本县中学，夙以善良温雅之风气，为全国所羡慕。今以此轻薄二竖子之故，使我校此一殊荣，遭受毁损；使全市为此不严肃之行为，蒙受玷污。事既如此，吾等不得不奋然而起，纠问其责)

a.今以此轻薄二竖子之故，{ ○使/×被 }我校此一殊荣，遭受毁损

[対訳 坊ちゃん]

(167)「身体が身体だから無暗に汽車になんぞ乗って揺れない方が好い。無理をして見舞に来られたりすると、却って此方が心配だから」と云っていた。

(父亲说：“身体到底是身体，还是不要不顾前后地坐着火车颠颠簸簸的好，如果叫她勉强来探望我，反而使我操心。”)

a.如果{ ○叫/×被 }她勉强来探望我，反而使我操心

[対訳 こころ]

中国語では、(166)の「本県の中学は軽薄なる二豎子の為めに吾校の特権を毀損せられる」は「今以此轻薄二竖子之故，使我校此一殊荣，遭受毀損(直訳:軽薄なる二豎子の為め吾校の特権に毀損を受けさせる)」、(167)の「無理をして見舞に来られたりすると」は「如果叫她勉强来探望我(無理をして見舞に来させたりすると)」に対応しており、それぞれの「使/叫」が「被」という受動専用の形式に置き換えられないため、受動表現と解釈できないということがわかる。また、訳文と原文の述語動詞の意味関係においては、(166)-(167)は異なる。(167)は(165)と同様に、原文の述語動詞と対応する動詞の前に使役標識が付加するという形式であるが、(166)は原文のサ変述語動詞と対応する動詞性名詞の前に、使役標識のみならず、語彙的受動を表す動詞「遭受(受ける)」も付加するといった形式である。

### 2-3)処置文

日中対訳コーパスでは、日本語の持ち主受動文が中国語の「把」処置文で表現されるのは19例ある。それらは主に取消・受け取り、思考・認知の意味を表す動詞によるもので、同一関係を除外した所有関係の五つの下位分類のすべてが含まれるが、(169)のように主体-活動関係にあるものもとても多い。また、訳文では「把」処置文といっても、必ずしも(168)のように原文の行為主体が主語に来るものではない。

(168)その時から母は、この娘に賢一郎を奪られてしまうのではないかという風な、直感があった。

(从那时起母亲有一种直感，好象这个姑娘会把贤一郎夺走)

[対訳 青春の蹉跌]

(169)然し立ち直って、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑った事を是非とも周囲の人に知られなければならない窮境に陥ったのです。

a. 訳 1(如果我想站站稳，向前再跨出一步的话，就不能不把刚才的失足让周围的人都知道)

b. 訳 2(但是，当我重新站起来，再要向前跨出一步的时候，便陷入不得不把这失足的原委诉诸于众的窘境中)

[対訳 ところ]

(168)は取消を意味する動詞「奪う」による、「母」と息子である「賢一郎」との親族関係にある持ち主受動文であり、(169)は思考・認知を意味する動詞「知る」による、主語「私」とヲ格名詞句「滑った事」との主体-活動といった所有関係にある持ち主受動文である。中国語において、(168)の「この娘に賢一郎を奪られてしまう」は「这个姑娘会把贤一郎夺走(この娘が賢一郎を奪ってしまう)」に対応しており、原文の行為主体である「この娘」に対応する名詞句「这个姑娘(この娘)」が訳文では主語の位置に来る。(169)の「私は今滑った事を周囲の人に知られる」は、「我把刚才的失足让周围的人都知道(私は今滑った事を周囲の人に知らせる)」、及び「我把这失足的原委诉诸于众(私は今滑った事を周囲の人に告げる)」となっており、a 訳文 1 と b 訳文 2 はともに原文の行為主体を表す名詞句「周囲の人」ではなく、持ち主を表す代名詞「我(私)」が主語に来る。また、訳文の述語動詞が原文の述語動詞との関係を見ると、ほとんどは(167)、(169)の訳 1 のように、訳文と原文の述語動詞(奪(奪う)-奪う、知道(知る)-知る)が同じ意味を表すものであるが、(169)の b 訳 2 のように、訳文の述語動詞が原文のそれと反義関係(诉(告げる)-知る)にあるものも見られる。

以上、日中対訳コーパスから収集した日本語の持ち主受動文とその中国語訳との対応関係を考察してきた。要点をまとめると、以下のようになる。

第一に、日本語の持ち主受動文は、取消・受け取り、接触、知覚などの意味を表す動詞によるものが中国語の第三者受動文と対応する場合はあるが、ただ 59 例、約十分の一に止まっている。そして、日本語原文で明示されない結果の意味は中国語訳文では明示化される傾向がある。

第二に、日本語の持ち主受動文 516 例のうち、中国語では能動文、使役文及び処置文といった非受動文となるのは計 314 例、60.9%にも達している。つまり、日本語の持ち主受動文の六割は中国語では、概念化者である話者が影響を受ける側ではなく、影響を与える側から当該事態を捉えて言語化するのである。このように、日中語母語話者は行為連鎖の末尾と先頭とのいずれかを際立つ要素とする選択の傾向が異なる。日本語母語話者は行為

連鎖の末尾にある参加者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にあるが、中国語母語話者は行為連鎖の先頭にある参加者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にある。

第三に、日本語の状況活動の持ち主受動文は中国語では持ち主受動文で表すと、連体節を伴う形式の非状況活動の持ち主受動文になる。このことは、日本語母語話者が見えのままに事態をまるごとコト的把握したという事態内把握、中国語母語話者が傍観者として事態外から客観的に事態をまるごとモノ的把握したという事態外把握を行う傾向にある、という事態把握の差異の現れである。

第四に、相互依存関係にある日本語の持ち主受動文は中国語において受動文で表現すると、連体節を伴う形式の所有物主語の直接受動文になる。これは、日本語母語話者が受影者視点、中国語母語話者が受動者視点を取る傾向にある、といった事態把握の相違を表す。

第五に、日本語の持ち主受動文が中国語の使役文によって表されるものは多くないが、そのなか、原文の受影者を表す主語名詞が訳文の主語に来る使役文は、実は使役と受動との両方の意味としても解釈できる。このように、中国語において使役と受動との意味的接近のために、日本語の持ち主受動文は受動文ではなく、使役文で表現されることができる。

## 6.5.2 中国語の持ち主受動文とその日本語訳

日中対訳コーパスからとった中国語の持ち主受動文とその日本語訳との対応関係を下表に示す。

表 6-4 中国語の持ち主受動文に対応する日本語訳(116)

日訳	受動文(83/71.6%)			非受動文(24/20.7%)		使役文	非対応 (9/7.8%)
	直接	間接		能動文			
		持ち主	第三者	自動詞文	他動詞文		
数	15	67	1	14	9	1	9
%	12.9%	57.8%	0.9%	12.1%	7.8%	0.9%	7.8%

表 6-4 を見ると、中国語の持ち主受動文に対応する日本語の持ち主受動文の比率は 57.8%にも達しており、直接受動文や、非受動文、及び非対応の比率と比べて、大幅に上



回っているということがわかった。換言すれば、中国語の持ち主受動文の半分以上は日本語の持ち主受動文と対応しているのである。

中国語の持ち主受動文とその日本語訳との対応関係を考察する前に、まず、同一関係にある中国語の持ち主受動文は日本語においてどのように表現されるのかを確認しておく。

下記の(170)-(172)は同一関係の持ち主受動文であるが、それらの対訳からもわかるように、日本語においては、(170)-(171)のように直接受動文によって表される場合もあれば、(172)のように他動詞能動文によって表現される場合もある。

(170)李槐英 和 黄梅霜 也 被 刘文蔚 把 她们 分 在 两张 桌子  
人名 と 人名 も 受動 人名 処置 彼女たち 分ける に 二つ テ-プル  
上 了。  
上 完了

(李槐英と黄梅霜も、刘文蔚に案内されて、別べつのテーブルにわかれて着席した)

[例(56)再掲]

(171)如同 一间 房子 那么 大 的 货物, 据说 有 一万多 斤 重,  
まるで-のようだ 一間 家 ほど 大きい の 貨物 そうだ ある 一万余り 斤 重さ  
在 陈师傅 带领 呼喊 的 号子声 里, 在 众人 汇合 成 一股 力量  
に 陳親方 指揮する 叫ぶ の かけ声 に に みんな 合流する なる 数量 力  
的 滚撬 牵拽 之下, 在 稳稳地 移动 着, 一节一节地 移动 着; 最后,  
の てこ 引く 下で に 徐々に 移動する 持続 ゆっくりと 移動する 持続 最後に  
终于 被 人们 把 它 运 进 了 那个 新 修 起来  
とうとう 受動 みんな 処置 それ 運ぶ 入る 完了 あの 新しく 建てる て上がる  
的 大库房 里。

の 大倉庫 に

(家ほどの大きさもあろうかというこの貨物は、五十トンをこえるということであったが、陳親方のあげるかけ声を音頭に、総がかりでロ-プを引き、テコをかませるみんなの力で、ゆっくりと動き始め、徐々に徐々に移動し、とうとうあのできたばかりの大倉庫の中へ運びこまれた)

[例(58)再掲]

(172)他 得 睁 着 眼，清清楚楚的 看 着，到底  
 彼 しなければならぬ あける 持続 目 はっきりと 見る 持続 いったい  
 怎样 被 別人 把 他 推 下去。  
 どのように 受動 他人 処置 彼 押す 落ちる  
 (いったいだれが、どんなふうにおれを泥沼につきおとすか、はっきり見さだめてや  
 るのだ)

[例(57)再掲]

例えば、(170)の「李槐英和黃梅霜也被劉文蔚把她们分在两张桌子上(直訳:李槐英と黃梅霜も劉文蔚に分けられて別々のテーブルに着席した)」は、日本語では「李槐英と黃梅霜も、劉文蔚に案内されて、別べつのテーブルにわかれて着席した」と対応している。訳文の述語動詞「案内する」は原文の述語動詞「分(分ける)」と異なる意味を表す。一方、(172)の訳文の述語動詞は原文の述語動詞と同じ意味を表す。また、(173)は日本語では「おれをつきおとす」という原文の述語動詞に対応する他動詞による能動文になっている。

以下、対応関係の議論に移る。

### 1) 受動文

中国語の持ち主受動文 116 例のうち、受動文は 83 例、71.6%にも及んでいる。受動文のうち、直接受動文が 15 例、12.9%、持ち主受動文が 67 例、57.8%、第三者受動文は 1 例、0.9%と極めて少ない。

中国語の持ち主受動文 116 例のうち、日本語の受動文と訳されているものは 83 例、71.6%を占めているということは、日本語訳文においても、概念化者である話者が影響を受ける参加者の視点から、当該事態を述べるという把握を行うものは中国語原文の七割強であることを示している。

#### 1-1)直接受動文

中国語において、取消の意味を表す他動詞による持ち主受動文は、日本語で「V+O」という動目構造を持つサ変他動詞による直接受動文に対応している。例えば、以下の例文である。

(173)再告诉你，你不仅被开除了党籍，根据你的罪状，中国人民还宣判了你的死刑！

(まだあるぞ。おまえは党から除名されただけでなく、おまえの罪状にもとづいて、

党はおまえに死刑を宣告した！)

[対訳 青春之歌]

(174)这一仗，打得国民党郑州绥署主任、蒋介石心腹大将刘峙被撤职。

(この一戦で、国民党鄭州綏署主任で蒋介石の腹心の大将劉峙は解任された)

[対訳 我的父亲邓小平]

(173)の「你被开除了党籍(直訳:おまえは党籍から名前を除かれた)」は「おまえは除名された」、(174)の「刘峙被撤职(直訳:劉峙は職を解かれた)」は「劉峙は解任された」と訳されている。訳文では、原文の所有物である「党籍」及び「職」の情報がそれぞれ、「名前を除く」、「任務を解く」という意味構造を持つサ変動詞「除名する」、「解任する」に含まれているため、中国語の持ち主受動文は日本語で持ち主主語の直接受動文になっているのである。両言語はともに持ち主を主語とし、同じ程度詳細に当該事態を述べているが、中国語では持ち主受動文であるのに対し、日本語では直接受動文である。

また、接触の意味を表す他動詞による中国語の持ち主受動文は、日本語では、(175)-(176)のように持ち主主語の直接受動文に対応する場合もあれば、(177)-(178)のように所有物主語の直接受動文に対応する場合もある。

両者はいずれも、原文の持ち主受動文と同様の程度で詳細に当該事態を表すことができるが、持ち主と所有物のうち、どちらを主語、つまりもっとも際立つ存在とするのかにおいては異なる。すなわち、前者の持ち主主語の直接受動文は、原文と同様に持ち主、後者の所有物主語の直接受動文は原文と異なり、持ち主ではなく、所有物をもっとも際立つ要素とし、それに生じた変化過程または結果状態を述べる。

(175)她干过最粗笨的活，忍受过最粗鄙的侮辱，被人们当面无数次地训斥批判，也被人们背后无数次地戳脊梁骨(後略)

(非常につらい肉体労働をやった。このうえない乱暴な侮辱にも耐えてきた。面と向かって非難され批判されたことも、陰で言いがかりをつけられたことも数え切れな  
いほどあった)

[対訳 钟鼓楼]

(176)他头戴一顶破毡帽头，两个护耳朝外张着，上边还缝着两片被虫子咬光了毛的兔皮(後略)

(破れたラシャの防寒帽をかぶっていて、耳覆いがふくらんでいる。防寒帽の上のほうに、虫にくわれてすっかり脱毛してしまった兎の皮をぬいつけている)

[対訳 金光大道]

(175)の「被戳脊梁骨(直訳:背骨を突かれた)」は「言いがかりをつけられた」、(176)の「被虫子咬光了毛的兔皮(直訳:虫にくわれて毛が残っていない兎の皮)」は「虫にくわれてすっかり脱毛してしまった兎の皮」に訳されている。(175)の「戳脊梁骨(後ろ指をさす)」は慣用的な表現であり、そのうち、「脊梁骨(背骨)」は本当の身体部位というよりもむしろ比喩的な意味合い、「悪口」のほうが適切である。(176)の「被虫子咬光了毛(直訳:虫にくわれて毛が残っていない)」は、述語動詞「被(受動標識)+咬(食う)」と所有物の状態変化を表す結果補語「毛(毛)+光了(残っていない)」に分けて、日本語ではそれぞれ「くわれた」、「すっかり脱毛してしまった」と対応している。

(177)这就是说，在“围剿”和反“围剿”的斗争中，我们没有由防御转到进攻，反而被敌人的进攻打破了我们的防御，我们的防御就变成了退却，敌人的进攻就变成了追击。(これはつまり、「包圍討伐」と反「包圍討伐」の闘争において、われわれが防御から進攻に転ずることがなく、逆に、敵の進攻によって、われわれの防御がうちやぶられたので、われわれの防御は退却に変わり、敵の進攻は追撃に変わったということである)

[対訳 毛泽东选集第一卷]

(178)他来个急刹车，猛停步，差一点儿往前倾倒，腿脚发颤地站了一会儿，地下被他踩碎了一片细土面。

(あわてて立ち止まったので、勢いのついた体は危くつんのめりそうになった。わななく足元の土はふみしだかれた)

[対訳 金光大道]

一方、(177)-(178)は、日本語訳文ではともに所有物主語の直接受動文である。(177)の「被敌人的进攻打破了我的防御(直訳:敵の進攻によって、われわれの防御を打ち破られた)」は「敵の進攻によって、われわれの防御がうちやぶられた」、(178)の「地下被他踩碎了一片细土面(直訳:地面は彼によって一面の土を踏みしだかれた)」は「足元の土はふみしだかれ

た」と対応している。原文では、述語動詞「打(打つ)」、「踩(踏む)」と所有物の状態変化を表す結果補語である動詞「破(破る)」、「碎(砕く)」は訳文では、それぞれ「打ち破る」、「踏みしだく」という複合動詞によって表されるため、中国語の持ち主受動文は日本語で所有物主語の直接受動文と対応している。

## 1-2)間接受動文

### 1-2-1)持ち主受動文

中国語の持ち主受動文は、無情物主語に何らかの関わりを持つ有情物が想起できる場合、日本語では、持ち主受動文と対応することはある。例えば、以下のような受取りあるいは取消を意味する動詞によるものである。

(179)从广东出发的资产阶级民主革命，到半路被买办豪绅阶级篡夺了领导权，立即转向反革命路上，全国工农平民以至资产阶级，依然在反革命统治底下，没有得到丝毫政治上经济上的解放。

(広東省からはじまったブルジョア民主主義革命は、途中で買弁・豪紳階級に指導権をさらわれて、たちまちに反革命の方向にむけられてしまい、全国の労・農・平民からブルジョア階級までが、依然として反革命の支配下におかれており、政治的にも経済的にも、少しも解放されていない)

[対訳 毛泽东选集第二卷]

(180)父亲跳上河堤后，还在想着去年的一些情景，罗汉大爷被剥皮后的头颅在他眼前不停地晃动。

(土手に跳びあがってからも、父は去年の情景を想っていた。皮をはがれたあとの羅漢大爺の頭が、目の前で揺れつづけた)

[対訳 红高粱]

(179)の「被篡夺了领导权」は「指導権をさらわれた」と訳されており、(180)の「被剥皮后的头颅」は「皮をはがれたあとの頭」と表現されている。いずれも無情物である持ち主「民主主義革命」、「頭」に関連する有情物「ブルジョア」、「羅漢大爺」が想起できる。当該事態から直接に影響を受けるのは無情物の「民主主義革命」と「頭」ではあるが、その影響から間接的に被害を受けるのは、それらと何らかの関わりを持つ有情物の「ブルジョア」と「羅漢大爺」である。よって、無情物主語に関連する有情物の被った

被害の意味を表す中国語の持ち主受動文は、日本語では無情物主語の持ち主受動文と対応する。

次に、述語動詞の意味別に中国語の有情物主語の持ち主受動文とその日本語訳の関係を見てみよう。

まず第一に、取消や受け取りを意味する他動詞による中国語の持ち主受動文は、計 67 例のうち、45 例もあり、全体-部分関係、本体-属性関係、主体-活動関係、相互依存関係、及び一般所有関係といった広義の所有関係がすべて含まれている。

(181)有一个宋少荣，也小小放点儿乡账，他就能够找出七，八，十来个户头，都被赵守义剥过皮的；可是，皮尽管剥了，多则三五年，少则一两年，案却没结。

(百姓に小金を貸している宋少荣という男がいますが、彼なら、趙守義に皮をひんむかれた連中を、九人や十人、すぐにも探してきます。連中は、皮をひんむかれたとはいえ、長いもので四、五年、短いもので一、二年は、裁判で頑張っています)

[対訳 霜叶红似二月花]

(182)张晓梅姨妈也没有摆脱“文革”冲击的恶运。在林彪、“四人帮”疯狂批判北京市市委书记兼市长彭真，彻底砸烂旧市委的同时，张晓梅被罢官、免职，遭到残酷地揪斗和迫害。

(張曉梅おばさんも運悪く「文革」の直撃を逃れることはできなかった。林彪と「四人組」が、たけり狂って党北京市委員会書記兼市長彭真を批判し、同市委を徹底的に破壊しつつしていたころ、張曉梅は職を罷免され、残酷な吊るし上げと迫害に遭っていた)

[対訳 我的父亲邓小平]

(183)她好象被解除了武装，任凭他的目光在她脸上久久地停留，再也不能“抗议”了。

(まるで武装を解除されてしまったように、彼の視線にさらされながら「抗議」ひとつできないでいる)

[対訳 人到中年]

(184)小俞没有喊。她像一个被人抢走了妈妈的孩子，看见林红被人用木板向门外一抬，她就跳下床来扑向她去

(俞淑秀は、黙りこくっていた。林紅が戸板で担ぎだされていぺのを見たとき、かの女は母親を奪い去られる子どものように、ベッドからとびおりて、林紅にすがりつ

こうとした)

[対訳 青春之歌]

(185)有一次，一个日本老年旅游团整个团上了黑车，被骗走了钱财。

(日本のお年寄りの団体観光客が丸ごとバスに乗せられ、金を騙し取られたケースもあった)

[対訳 中日飞鸿]

(181)の「被剥皮」は「皮をひんむかれた」と訳されているが、実は(118)と異なり、本当の身体部位の意味ではなく、比喩的に「残酷に人を迫害・権取する」という意味を表す。(182)の「被罢官、免职」は「免官される」と「免職される」を意味し、両者は慣用的な表現であるが、日本語では両表現をあわせて「職を罷免された」と訳している。また、(183)の「被解除了武装」は「武装を解除されてしまった」と訳されており、主語の「彼女」と「武装」とは主体とそれが行う活動との関係、いわゆる主体-活動の所有関係にある。(184)の「被人抢走了妈妈的孩子」は「母親を奪い去られる子ども」と訳されており、「子ども」と「母親」との間には親族関係といった相互依存の所有関係が存在する。さらに、(185)の「被騙走了钱财」は「金を騙し取られた」と対応し、(184)と同様に、原文の述語動詞「抢(奪う)/骗(騙す)」と結果補語を表す動詞「走(去る)/走(取る)」がそれぞれ日本語では「奪い去る」と「騙し取る」という複合動詞によって表されている。

第二に、接触の意味を表す動詞による中国語の持ち主受動文は14例ある。そのほとんどは(186)のように身体部位という全体-部分の所有関係に属するが、(187)のように本体-属性という所有関係にあるものは1例ある。

(186)余大牙被绑住双臂，拴在一棵树上。

(余大牙は両手を縛られて、樹につながれていた)

[対訳 红高粱]

(187)周忠仿佛被触动了心事，在星光里沉重地摇摇头(後略)

(周忠は胸のつかえに触わられたようで、物憂く星あかりに首をふった)

[対訳 金光大道]

(186)の「被绑住双臂」は「両手を縛られた」と訳されており、「両手」は身体部位であ

る。一方、(187)の「被触动了心事」は「胸のつかえに触わられた」に対応し、「つかえ」は主語「周忠」の持っている心理・感情といった精神的属性である。中国語原文では、両例文ともに主語が残留する目的語の属格であるが、日本語訳文では、主語は(186)ではヲ格名詞、(187)ではニ格名詞の属格である。

ほかに、作用、言語・態度、知覚・感覚などの意味を表す他動詞による持ち主受動文は8例あり、全体-部分関係、本体-属性関係、主体-活動関係、一般所有関係といった所有関係にある。例えば、以下の例文である。

(188)这个沉静温厚的姑娘大改常态：她呜咽地哭着，眼泪纵流着，却一句话也不说，仿佛被什么沉重的绝望的悲伤撕碎了心。

(このいつもおちつき払っている、おだやかな性格の娘が、今日は大違いで、しきりにしゃくりあげながら、顔じゅう涙でくしゃくしゃにし、おえつのために、口さえまともにきけないのだ。なにか絶望的な悲しみに、心を砕かれてしまったかのようだ)

[対訳 青春之歌]

(189)朱铁汉被揭到了短处，硬着嘴说：(後略)

(痛いところをつかれて朱鉄漢は口をとんがらかした)

[対訳 金光大道]

(190)他想轻手蹑脚的进去，别教虎姑娘看见；正因为她平日很看得起他，所以不愿头一个就被她看见他的失败。

(祥子は、気づかれぬようにそっとはいろうと思った。彼女はかねがね彼を買ってくれている。その彼女に今度のしくじりをまっさきに見つけられるのは辛かった)

[対訳 骆驼祥子]

(191)到后来，听说连真的在报纸上被点着名儿批评了作品的那个“编小说”的，也没多大事儿，还是照样写他的小说，照样登出来。

(聞くとところによると、ほんとうに新聞で名指しで作品を批判された小説書きも、たいしたことはなく、相変わらず小説を書いて、発表しているそうだ)

[例(97)再掲]

(188)では、述語動詞の「撕(引き裂く)」は作用を意味する他動詞であり、残留目的語で



ある「心」は身体部位である。(188)は、日本語訳文では、述語動詞ではなく、結果補語を表す自動詞「碎(碎ける)」に対応する他動詞「碎く」による持ち主受動文になっている。(189)では、原文の述語動詞「揭」は、「(欠点を)指摘する・あばく」という言語・態度の意味を表す他動詞であるが、訳文では「(痛いところを)つかれた」という接触を意味する他動詞になっている。また(190)は知覚動詞「看(見る)」による持ち主受動文であり、残留目的語「他的失败(彼の失败)」は主語である「彼」の動きであり、日本語では「今度のしくじり」と訳されている。ここで、興味深いのは目的語「失败」の属格である「彼」が受動文の主語に来たにもかかわらず、受動文の目的語の属格としても同時に残っているということである。于康(2012:7)は、この用法は日本語では確認されていないと指摘しているが、その理由については言及していない。(190)はその日本語訳からもわかるように、「彼/自分/今度」などの属格が生起しないと、ただ「しくじり/失败」だけでは成立しないのである。さらに、(191)は「批评(批判する)」という言語・態度の意味を表す他動詞による持ち主受動文であり、目的語「作品」は「小説書き」に属する所有物である。

### 1-2-2)第三者受動文

中国語では、(192)のように「抄家(財産を没収する)」という慣用的な表現による持ち主受動文は、日本語で「家探しされた」というサ変動詞による第三者の受動文になっている。

(192)你还不知道? 方丹的爸爸已经被登报批判了, 我担心爸爸也……万一被抄家, 那些东西也许会给爸爸带来麻烦……

(まだ聞いてないのか。方丹のパパが新聞で批判されたんだよ。おれたちのパパのことも心配になって……もし万一、家捜しなんかされたら、ああいうものが災難の種類になるかも知れないだろ……)

[対訳 轮椅上的梦]

原文では、述語動詞の「抄(捜査し没収する)」は取消・受け取りの意味を表す動詞であり、その目的語である「家(家)」は、本当の「家」ではなく、メトニミー的に「財産」を指している。訳文では、主語の「おれたち」は「誰かが家探しする」という事態により、被害を受ける、ということを表している。

原文と訳文はともに主語の述語動詞の表す事態から被害を受けるということを表すが、

主語の当該事態への関与の仕方は異なる。中国語原文では、主語「おれたち」は「(おれたちの)財産を没収する」という事態に間接的に関与しているが、日本語訳文では、主語は「誰かが家探しする」という事態には含まれないものの、概念化者である話者によって当該事態に関連付けられている。つまり、原文の持ち主受動文の主語は客観的に当該事態に関与しているが、訳文の第三者受動文の主語は概念化者によって主体的に当該事態に関与しているのである。

## 2) 非受動文

中国語の持ち主受動文が日本語では非受動文として対応するものは24例、20.7%を占めている。そのうち、自動詞文が14例、12.1%、他動詞文が9例、7.8%、使役文は1例、0.9%を占めている。

### 2-1) 能動文

#### 2-1-1) 自動詞文

中国語の持ち主受動文が日本語では自動詞文と訳されているのは、取消及び接触を意味する他動詞によるものが各6例、作用及び知覚・感覚を意味する他動詞によるものが各1例である。日本語訳文では、同じく自動詞文といっても、持ち主主語のもの(8例)もあれば、所有物(4例)または行為主体(2例)主語のものもある。

まず、中国語の持ち主受動文が日本語では持ち主主語の自動詞文と対応するものを考察する。(193)-(194)はいずれも中国語原文と同様に持ち主をもっとも際立つ存在とするが、行為主体は日本語では、節や、デ格名詞及びニ格名詞によって表され、中国語原文と異なり背景化される。

(193)据说她曾是北师大中文系的高材生，因为闹学潮被开除了学籍。

(その昔、北京師範大学中文学部の優等生だったが、学生運動を起こして除籍処分にあつたのだという)

[対訳 人啊，人]

(194)帆布篷裂了几条大口，舵楼坏了半边，左舷被桥洞的石壁擦去了一片皮，二副伤了腿，乌阿七躺在后舱，哼的很厉害。

(キャンバスは数カ所で大きく裂け、操舵室は半分がこわれ、左舷の鉄板が一枚、橋の石の壁でこすれてはがれていた。副長は足に負傷し、烏阿七は後部船室で、うんうんうなっていた)

[対訳 霜叶红似二月花]

(195) 我们不要被胜利冲昏头脑，要不断总结经验，提高战斗力。

(われわれは勝利にのぼせあがってはならず、たえず経験を総括して、戦闘力を強めなければならない)

[対訳 邓小平文选第一卷]

(193)の「她被开除了学籍(直訳:彼女は学籍を処分された)」は「彼女が除籍処分にあった」と訳されており、そのうち、原文の動詞句「开除了学籍(学籍を処分する)」は「除籍処分」というサ変名詞句で表され、受動の意味は「あった」という語彙的受動の意味を持つ自動詞によって表現されている。また、(194)の「左舷被擦去了一片皮(直訳:左舷が鉄板一枚を擦り取られていた)」は「左舷の鉄板が一枚、こすれてはがれていた」と訳されている。原文と訳文はともに無情物である全体が主語になるが、原文の目的語、つまり部分を表す名詞は訳文では補助的な成分とし、原文の述語動詞「擦(擦る)」及び結果補語を表す動詞「去(取る)」はそれぞれ訳文では、「こすれる」と「はがれる」という自動詞によって表現されている。さらに、(195)の「我们被胜利冲昏头脑(直訳:われわれは勝利に頭を混乱させられる)」は「われわれは勝利にのぼせあがる」と対応している。つまり、行為主体「勝利」が原因となり、主語の「われわれ」がそれにより心理的状态変化が起きたという意味を表す中国語の持ち主受動文は、日本語ではその心理的状态変化を表す自動詞による能動文と対応する。

下記の(196)-(198)は中国語の持ち主受動文が日本語では、所有物主語の自動詞文と対応している例文である。(196)-(198)は、原文に含まれる持ち主と行為主体が補助的な要素として前後の文脈で表されるが、主語の所有物の受けた影響や状態変化という意味を表している。

(196) “她哭啦？……”这个念头一闪，他立刻被一种怜悯的感情把满腔气恼全部勾销了。

(泣いていたんだな？……そう思うと、かれは、一種のあわれみの感情につきあげられて、いままでのうらみは、どこかに消えてしまった)

[対訳 青春之歌]

(197) 阿巧不敢做声，心里却万分怔忡，想不明白是天快黑的时候她在那边树下和阿寿调笑的事被婉小姐知道了呢，还是刚才被她看见了她对阿寿做了两次的手势。

(阿巧は震え上って、声も出せなかった。暮れ方あの木の下で阿寿とふざけていたのを見られてしまったのか、それとも、さっき阿寿に手真似をしたのが見つかったのか、どちらとも見当がつかなかった)

[対訳 霜叶红似二月花]

(198)他想起行军高粱地中的艰难，想起王文义被流弹击中耳朵，想起五十几个队员在公路上像羊拉屎一样往大桥开进(後略)

(父は思い出した。高粱畑を行軍した苦しさ、流れ弾にあたった王文義の耳、五十数名の隊員が羊の糞のようにぞろぞろと公路を大橋へ向かって進んだこと(後略))

[対訳 红高粱]

(196)は、(197)-(198)のような目的語残存の持ち主受動文ではなく、「把」を伴う形式の持ち主受動文である。(196)は「勾销(取り消す)」という他動詞による持ち主受動文であるが、訳文では、「消える」という状態変化を意味する自動詞による能動文になっている。(25)は知覚動詞「看(見る)」によるものであり、残留目的語「手真似」と主語「阿巧」との間には主体-活動という所有関係が存在する。(197)の「被她看见了她对阿寿做了两次的手势(直訳:彼女に阿寿にした手真似を見られた)」は「阿寿に手真似をしたのが見つかった」と訳されており、日本語では活動を表す名詞節「手真似をした」が「の」の助けを借りて主語となり、原文の述部「看(見る)+见(感じ取る)」に対応する自動詞「見つかる」による能動文となっている。また、(198)の「王文义被流弹击中耳朵(直訳:王文義は流れ弾に耳をうたれた)」は「流れ弾にあたった王文義の耳」と訳されている。(198)は原文では、述語動詞「击(接触する)」と結果補語を表す動詞「中(あたる)」のうち、訳文では後者である「中(あたる)」に対応する自動詞による能動文と対応している。

最後に、接触の意味を表す他動詞による中国語の持ち主受動文は日本語では、行為主体主語の自動詞文と対応している例文を見てみよう。(199)-(200)はともに、原文にある持ち主と所有物が含まれているが、原文と異なりエネルギーの到達点ではなく、その源あるいは開始点をもっとも際立つ要素とし、その動き、またはそれに起きた変化及び結果状態を述べている。

(199)刘祥这才明白高大泉又被李培林说的那个没耕地的户缠住心(後略)

(そう言われて劉祥は、李培林の話が高大泉の胸にひっかかっているのに気づいた)

[対訳 金光大道]

(200) 爷爷下令把连环铁耙收起，把被铁耙扎瘪了轮胎的第一辆汽车推到公路上，掀到东侧路沟里。

(祖父が命じてまぐわがとり払われ、まぐわがささってタイヤがへしゃげた先頭の車が公路に押し出されて、東側の側溝にひっくりかえされた)

[対訳 红高粱]

(199)の「高大泉被李培林说的那个没耕地的户缠住心(直訳:高大泉が李培林の話したあの耕地を持たない農家に心をひかれた)」は「李培林の話が高大泉の胸にひっかかっている」と訳されている。原文の行為主体である「李培林说的那个没耕地的户(李培林の話したあの耕地を持たない農家)」は訳文では略して「李培林の話」、原文の身体部位「高大泉の心」は訳文では「高大泉の胸」と対応している。また、(200)の「被铁耙扎瘪了轮胎的第一辆汽车(直訳:タイヤをまぐわにさしひしゃげられた先頭の車)」は「まぐわがささってタイヤがへしゃげた先頭の車」と対応している。原文の述部である「扎瘪」は述語動詞「扎(刺す)」と結果補語を表す動詞「瘪(へこむ)」とに分けられて、訳文ではそれぞれ「(まぐわが)刺さる」と「(タイヤが)へしゃげる」に訳されている。つまり、中国語の持ち主受動文は日本語では、述語他動詞に対応する自動詞が存在すれば、その自動詞による能動文に対応することはある。

### 2-1-2)他動詞文

中国語の持ち主受動文が日本語で他動詞文と対応するのは9例あり、そのうち、持ち主主語の他動詞文は4例、行為主体主語の他動詞文は5例である。

まず、(201)-(203)は日本語では持ち主主語の他動詞文と対応している例文である。これらはいずれも原文の持ち主受動文と同様に、持ち主を主語とし、その述語動詞の表す事態から被害や利益などの影響を受ける、ということを表している。一方、原文の持ち主受動文と異なるのは、行為主体の含意ということである。すなわち、原文の持ち主受動文は行為主体が明示されなくても、その存在が含意されているが、訳文の他動詞文は原文中の行為主体がデ格名詞やニ格名詞で表されても、それが補助的な成分であるため焦点化されていない。

(201) 大院子里又有好多人被抄了家，有好多人被抓走了。

(同じ敷地内のアパートでも、大勢が家宅捜索を受け、また逮捕された)

[対訳 轮椅上の夢]

(202) 长冈乡有一个贫苦农民被火烧掉了一间半房子，乡政府就发动群众捐钱帮助他。

(長岡県のある貧しい農民が火事で家をひと間半焼いたが、郷政府はすぐ、大衆が金を出しあってかれをたすけるように、はたらきかけた)

[対訳 毛泽东选集第一卷]

(203) 事实就是这样，他只是在死后才被个别人想起了好处。

(事実なのだ、父は死後はじめて、個別の人にその良さを思い出してもらったのだ)

[対訳 活动変人形]

(201)の「好多人被抄了家(直訳:大勢が財産を没収された)」は「大勢が家宅捜索を受けた」と対応している。述部である慣用的表現の「抄家(家捜しする/財産を没収する)」は「家宅捜索」という名詞句、受動の意味は「受けた」という語彙的受動の意味を持つ他動詞によって表現されている。また、(202)の「农民被火烧掉了一间半房子(直訳:農民が火事で家をひと間半焼かれた)」は「農民が火事で家をひと間半焼いた」と訳されている。原文での行為主体「火」は訳文では「家事で」、原文での所有物「一間半房子」は訳文では「ひと間半」といった補助的成分によって表現されている。さらに、(203)では、「他被个别人想起了好处(直訳:彼・父は個別の人にその良さを思い出された)」は「父は個別の人にその良さを思い出してもらった」と訳されている。原文では、行為主体の「個別の人」は訳文では二格名詞、所有物の「その良さ」は訳文ではヲ格名詞、述語動詞「想(思う)」と結果補語を表す動詞「起(出す)」は訳文では「思い出す」という複合動詞、利益という意味合いは「てもらう」といった恩恵の授受表現(庵 2012:116)によって表されている。

次に、(204)-(206)は中国語の持ち主受動文が日本語では行為主体主語の他動詞文に対応する例文である。三つの例文はいずれも原文の持ち主がコンテキストで表され、原文の持ち主受動文と同じ程度詳しく当該事態を表しているが、原文と異なり行為主体をもっとも際立つ存在とし、述語動詞の表す事態を述べている。

(204) 父亲告诉我，在这片刻的宁静里，王文义摇摇晃晃地走上河堤，他站在河堤上，手提长苗子鸟枪，目瞪口呆，痛苦万分，高叫一声：“孩子他娘！”不及挪步，就被几十颗子弹把腹部打成了一个月亮般透明的大窟窿。

(父は、わたしに言った。その束の間の静けさのなかで、王文義がふらふらと土手にあがった。かれは猟銃を手に、悲しみのあまり呆然と土手の上に立った。「かあちゃん!」かれは叫んだが、たちまち数十発の弾丸がその腹部に、月のように透明で大きな穴をあけた)

[対訳 紅高粱]

(205) 说是有一家一天夜里进去一个贼，贼是偷锅的，被主人听到了动静，贼端着铁锅在前头跑(後略)

(一軒の家にある晩泥棒が忍びこんだ。そいつは鍋盗人じゃったが、物音を聞きつけた家人に怒鳴られ、鍋を抱えて一目散に逃げだした)

[対訳 活动变人形]

(206) 觉慧答应着，他想分辩几句，但是他刚刚开口，又被祖父抢着接下去说了。

(覚慧は応答もし、いいわけもしようと思ったが、口を開こうとすると祖父はおっかぶせるように話しつづけた)

[対訳 家]

(204)は他の二つの例文(205)-(206)と異なり、目的語残存の持ち主受動文ではなく、「把」を伴う形式の持ち主受動文である。「被几十颗子弹把腹部打成了一个月亮般透明的大窟窿(直訳:数十発の弾丸に腹部を撃たれて、その腹部に月のように透明で大きな穴ができ上がった)」は日本語では「数十発の弾丸がその腹部に、月のように透明で大きな穴をあけた」と対応している。訳文では、原文の行為主体「数十発の弾丸」は主語、「把」の目的語である所有物「腹部」は二格名詞句、述部である「打(うつ)+成(なる)」は「あける」という生産の意味を表す他動詞、結果状態である「大きな穴」は目的語として表されている。また、(205)の「被主人听到了动静(直訳:家人に物音を聞きつけられた)」は「家人が物音を聞きつけた」と訳され、原文の述語動詞「听(聞く)」と結果補語を表す動詞「到(およぶ)」は日本語で「聞きつける」という複合動詞によって表されている。さらに、(206)は、主語「覚慧」と行為主体「祖父」とは親族関係という所有関係にある持ち主受動文である。(34)の「被祖父抢着接下去说了(直訳:祖父に先を争って続けて話された)」は「祖父はおっかぶせるように話しつづけた」と対応している。原文では、「抢着接下去说

(先を争って続けて話す)」という述連構造(朱徳熙 1982 [杉村他(訳)1995:14])<sup>74</sup>の述部のうち、前にある動詞性構造「抢着(先を争って)」は様態を表し、訳文では「おっかぶせるように」、後に来る動詞性構造「接下去说(続けて話す)」は先後して発生した動作を表し、訳文では「話しつづけた」という複合動詞によって表現されている。

## 2-2)使役文

中国語の持ち主受動文が日本語で使役文と対応する例文は 1 例しかない。

(207) 在离开河堤几十步远, 伤损不太严重的高粱地里, 爷爷和父亲找到了被打出了肠子的方七和另一个叫“瘸瘸四”的队员(後略)

(土手から数十歩離れた、あまりひどくやられていない高粱畑のなかで、祖父と父は腹わたをはみださせた方七ともう一人「瘸瘸四」というあだ名の隊員(後略))

[対訳 紅高粱]

(207)の「被打出了肠子的方七(直訳:撃たれて腹わたが出てきた方七)」は「腹わたをはみださせた方七」と訳されている。訳文では、原文の身体部位という所有物は目的語として残っており、原文の述部のうち結果補語を表す自動詞「出(出る)」のみはそれに対応する自動詞「はみだす」によって表されているが、原文と異なり、持ち主ではなく行為主体を主語としている。

以上、日中対訳コーパスから収集した中国語の持ち主受動文とその日本語訳との対応関係を考察してきた。要点をまとめると、以下のようになる。

第一に、中国語の持ち主受動文では、取消・受け取り、接触及び知覚を意味する動詞によるものが日本語の第三者受動文と対応する例文は計 67 例、57.8%を占めている。つまり、中国語の持ち主受動文の半分以上は日本語の持ち主受動文と対応する。

第二に、中国語の持ち主受動文 116 例のうち、日本語では受動文となるのは計 83 例、

<sup>74</sup> 朱徳熙(1982 [杉村他(訳)1995:14])によると、述連構造とは動詞あるいは動詞性構造(動目構造、動補構造など)が連続した構造である。述連構造は動目構造、動補構造、連合構造などとは異なるまた別の統語構造であり、構成素間の意味上の関係から見れば、使用頻度の高い述連構造には以下のようなタイプがある。①二つの動詞性構造が、先後して発生した動作を表す。例えば、下课开班会(授業が終わったら学級会を開く)である。②前にある動詞性構造が様態を表す。例えば、拍着手笑(手を叩いて笑う)である。③前にある動詞性構造が原因あるいは仮定を表す。例えば、有事不能来(用事ができて来られない)、不会做去问老师(できなければ行って先生に聞く)である。④後に来る動詞性構造が目的を表す。例えば、上街买菜(街に出て料理の材料を買う)である。



71.6%にも達している。要するに、中国語の持ち主受動文の約七割は日本語でも話者が影響を受ける側から捉えて言語化するのである。

第三に、同一関係にある中国語の持ち主受動文は日本語において受動文で表すと、直接受動文になる。これはつまり、同一事態を把握する際、中国語母語話者は参照点関係が関与するが、日本語母語話者は参照点関係が関与しない、という事態把握の相違を表す。

### 6.5.3 まとめ

以上、日中対訳コーパスより収集した日中(通常のみ)語の持ち主受動文とそれらの中国語・日本語訳との対応関係を検討してきた。日中語の持ち主受動構文の構文的特徴及び事態把握における異同点を次のようにまとめられる。

まず、日本語と中国語の共通点は主として次の二点にある。

- 1) 取消・受け取り、接触、及び知覚の意味を表す他動詞による日中語の持ち主受動文が対応することはある。それらは全体-部分関係、本体-属性関係、主体-活動関係、相互依存関係及び一般所有関係といった五種類の所有関係のいずれも含む。
- 2) 日中語の持ち主受動文の使用要因として、コロケーション、あるいは慣用的な表現を含めて、残留目的語を省略した形式が元の形式と意味的に矛盾が生じるという構文的制約、及び話者は様態描写のために当該事態を詳細に述べる、または有情者である持ち主の受けた利害の意味を強調するために持ち主を受影者として主語に取り立てる、といった語用論的要因との三つが挙げられる。

また、日本語と中国語の相違点については、以下の六点が言える。

- 1) 日本語の持ち主受動文がもっとも高い比率(約六割)で中国語の能動文、使役文及び処置文といった非受動文と対応するのに対し、中国語の通常持ち主受動文は最も高い比率、約七割で日本語の受動文と対応する。言い換えれば、同じ事態を日本語では影響を受ける側から、中国語では影響を与える側から捉える傾向が強い。つまり、日中語母語話者は行為連鎖の末尾と先頭とのいずれかを際立つ要素とする選択の傾向が異なる。日本語母語話者は行為連鎖の末尾にある参加者をもっとも際立つ

要素とする選択の傾向にあるが、中国語母語話者は行為連鎖の先頭にある参与者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にある。

- 2) 中国語では、話者が持ち主を受影者として所有物の受けた処置・影響の意味を強調するといった語用論的要因によって、目的語残存の形式ではなく、受動者を導入する機能を持つ「把」を伴う形式の持ち主受動文が用いられる。日本語においては、目的語残存の形式しかなく、中国語の「把」を伴う形式の持ち主受動文に対応する形式が存在しない。
- 3) 同じ事態を受動文で表現すると、日本語では持ち主受動文、中国語では所有物主語の直接受動文のほうがより自然であるという傾向がある。これは、日本語母語話者が受影者視点、中国語母語話者が受動者視点を取る傾向にある、という事態把握の相違を表す。
- 4) 同一の事態を持ち主受動文で表現すると、日本語では内的状況のヲ格が文中に併存する形式の持ち主受動文、いわゆる状況活動の持ち主受動文、中国語では連体節を伴う形式の持ち主受動文、いわゆる非状況活動の持ち主受動文のほうがより自然であるという傾向がある。このことは、日本語母語話者が見えのままに事態をまるごとコト的把握したという事態内把握、中国語母語話者が傍観者として事態外から客観的に事態をまるごとモノ的把握したという事態外把握を行う傾向にある、という事態把握の差異の現れである。

## 6.6 おわりに

本章では、日中語における持ち主受動構文の三種類、つまり日本語の持ち主受動構文、中国語の通常の持ち主受動構文及び新型の持ち主受動構文について、それぞれの構文的特徴及び事態把握における異同点を分析した。その結果は、以下のようにまとめることができる。

- 1) 形式的特徴に関しては、
  - (1) 中国語では、元の述語動詞が言語化されず、所有物を表す目的語節の一部しか表されない新型の持ち主受動構文もできるが、日本語ではこのように言語形式が一部しか表出しない持ち主受動表現は存在しない。これは中国語の文法は文脈によ

って言語形式が表出しなくてもよい、といった「意合法」を主とする特徴の現れである。

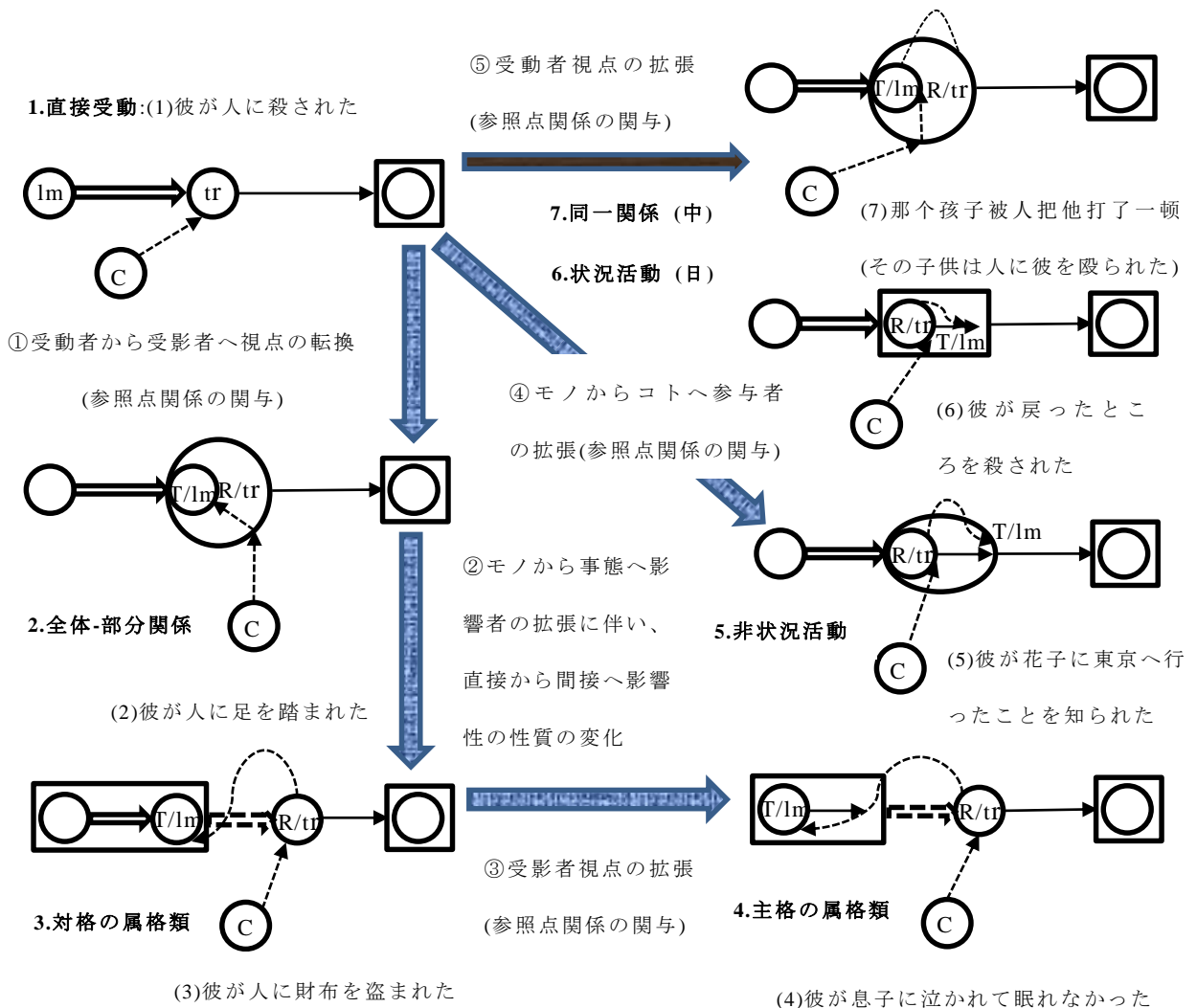
- (2) 中国語においては、語用論的要因によって、目的語残存の形式ではなく、受動者を導入する機能を持つ「把」を伴う形式の持ち主受動文が用いられる。日本語においては、目的語残存の形式しかなく、中国語の「把」を伴う形式の持ち主受動文に対応する形式が存在しない。
  - (3) 日本語には、内的状況のヲ格・対格を伴う形式の持ち主受動文が存在するが、中国語にはこのような形式の持ち主受動文が見つからない。一方、中国語においては、同一指示の代名詞を「把」によって導入する形式の持ち主受動文は存在するが、日本語においてはこのような形式の持ち主受動文が見当たらない。
- 2) 意味的特徴においては、
- (1) 中国語の受動文は結果の明示化が要請されるため、主節では対象非変化の動詞はそれに結果補語が後続しないと、受動文の述語動詞としては用いられない。一方、日本語の受動文は結果明示化の要請がないため、対象変化の動詞のみならず、対象非変化の動詞もそのまま受動文の述語動詞として用いられる。これは日本語よりも中国語のほうが述語動詞に対する制限が厳しく、述語として用いられる動詞の数が少ない、ということ動機付けている。
  - (2) 情意性においては、日中語はともに無情物主語の持ち主受動文はほとんど中立的であるが、それに関連する有情物が想起できる場合は被害となる。また、有情物主語の持ち主受動文は、ほとんど被害となるが、利益となるものもまれにある。
- 3) 持ち主受動文の使用要因に関しては、日中語はともに先行研究で指摘した構文上の制約及び受影者視点(于康 2012)という二つに加えて、状態描写と受動者強調との二つが挙げられる。また、影響の直接性(勝川 2013)や主語指示物と目的語指示物との関連性(中島 2012)はただ概念化者である話者が当該事態を把握する際に、受影者視点を取るのに関わる要素として挙げられるものだと考える。
- 4) 事態把握においては、
- (1) 日中語の持ち主受動構文は、所有関係のいずれにあるかに関わらず、すべてある参与者(事態参与者を含む)の直接的または間接的な影響によってもう一つの参与者に位置・状態変化が起こる、という二つの参与者を含む使役事態を、事態内または事態外から被影響者を視点人物として捉えることを表す。

- (2) 上述した結果の明示化における相違は日中語母語話者の当該事態を把握する際、焦点化の差異を表す。つまり、日本語母語話者は Cause 節の表す行為に焦点を置き、その行為がいったいどのような変化・結果をもたらすのかについては特に関心を持たない。それに対し、中国語母語話者は Change-State 節の表す変化・結果に焦点を置き、その変化・結果のもたらす原因として、Cause 節の表す行為が補足的な要素として挙げられるということである。
- (3) 同じ事態を受動文で表現すると、日本語では持ち主受動文、中国語では所有物主語の直接受動文のほうがより自然であるという傾向がある。これは、日本語母語話者が受影者視点、中国語母語話者が受動者視点を取る傾向にある、という事態把握の相違を表す。
- (4) 同一の事態を持ち主受動文で表現すると、日本語では内的状況のヲ格が文中に併存する形式の持ち主受動文、いわゆる状況活動の持ち主受動文、中国語では連体節を伴う形式の持ち主受動文、いわゆる非状況活動の持ち主受動文のほうがより自然であるという傾向がある。このことは、日本語母語話者が見えのままに事態をまるごとコト的把握したという事態内把握、中国語母語話者が傍観者として事態外から客観的に事態をまるごとモノ的把握したという事態外把握を行う傾向にある、という事態把握の差異の現れである<sup>75</sup>。
- (5) 日本語に特有の状況活動の持ち主受動文と中国語に特有の同一関係の持ち主受動文はともに直接受動文と同様に、述語動詞の表す動作の対象をもっとも際立つ要素として選択するが、参照点関係が関与している。しかしながら、参照点関係の関与の仕方においては異なる。日本語は述語動詞の表す動作の対象を参照点として、それを經由して当該受動事態の行われる内的状況とするその活動を指示するという仕方であるが、中国語は述語動詞の表す動作の対象を参照点として、それを經由して同一指示関係にある「把」の目的語代名詞の表す指示物を喚起するという仕方である。

<sup>75</sup> ここでいう「コト的事態内把握」と「モノ的事態外把握」はそれぞれ、ほぼ中村(2009:358-364)の「Iモード(Interactional mode of cognition)」と「Dモード(Displaced mode of cognition)」、池上(2011:52)の「主観的把握(Subjective Construal)」と「客観的把握(Objective Construal)」、及び町田(2012:247)の「主体的把握(subjective construal)」と「客体的把握(objective construal)」に相当する。主観的把握の指標、つまり言語表現の主観性度を測るための基準については、上原(2001:2)、池上(2003,2004,2010,2011)、近藤他(2007,2009,2010,2014)、町田(2011,2012)などは詳しく論じている。

5) 日中対訳コーパスから収集した日中(通常のみ)語の持ち主受動文とそれらの中国語・日本語訳との対応関係を考察することによって、取消・受け取り、接触、及び知覚の意味を表す他動詞による日中語の持ち主受動文が対応するということがわかった。それらは全体-部分関係、本体-属性関係、主体-活動関係、相互依存関係及び一般所有関係といった五種類の所有関係のいずれも含む。また、日本語の持ち主受動文がもっとも高い比率(約六割)で中国語の能動文、使役文及び処置文といった非受動文と対応するのに対し、中国語の通常を持ち主受動文は最も高い比率、約七割で日本語の受動文と対応する。言い換えれば、同じ事態を日本語では影響を受ける側から、中国語では影響を与える側から捉える傾向が強い。つまり、日中語母語話者は行為連鎖の末尾と先頭とのいずれかを際立つ要素とする選択の傾向が異なる。日本語母語話者は行為連鎖の末尾にある参加者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にあるが、中国語母語話者は行為連鎖の先頭にある参加者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にある。

また、以上の考察により、持ち主受動構文はプロトタイプである直接受動構文からの拡張であると見なすことができ、その拡張は事態把握のレベルで動機付けられている、ということが明らかになった。事態把握のレベルで直接受動構文から持ち主受動構文へと拡張する動機付けにおいては、日中語には共通点もあれば、相違点もある。日中語において、直接受動構文から持ち主受動構文へと拡張する過程は以下のように図式することができると思う。



C =概念化者

R =参照点

T =ターゲット

——— 同一指示

-----> 心的走査

————> 変化

tr =トラジェクター

lm =ランドマーク

————> 直接的影響

-----> 間接的影響

————> 拡張経路(日中同)

————> 拡張経路(日中異)

図 6-18 日中語の持ち主受動構文の拡張過程

上図に示すように、日中語の持ち主受動構文は直接受動構文から拡張する過程で、①②③④という経路においては同じであるが、⑤の経路においては異なる。その拡張の動機付けは参照点関係の関与であると考えられる。すなわち、参照点関係の関与によって、まず

受動者視点から受影者視点へと転換する(①)ことによって、直接受動構文から全体-部分関係にある持ち主受動構文へと拡張する。続いて、影響者がモノから事態へと拡張するに伴い、影響者からの影響も直接的なものから間接的なものへと性質が変わる(②)ことによって、全体-部分関係にある持ち主受動構文から対格の属格類の持ち主受動構文へと拡張する。また、受影者視点がさらに拡張する(③)ことによって、対格の属格類の持ち主受動構文から主格の属格類へと拡張する。一方、参照点関係の関与によって、参加者がモノからコトへと拡張する(④)ことによって、直接受動構文から非状況活動の持ち主受動構文へと拡張する。最後に、参照点関係の関与によって、受動者視点が拡張する(⑤)ことによって、日本語では直接受動構文から状況活動の持ち主受動構文へと拡張するが、中国語では直接受動構文から同一関係の持ち主受動構文へと拡張する。

最後に、本章の分析の結果から、第1章で挙げた持ち主受動構文に関する日本人・中国人学習者の誤用や中国語で編纂される日本語の教科書に見られる不自然な受動表現(208)-(210)に対して、以下のように説明することができる。

(208){ ×我被弟弟抢了玩具/○我的玩具被弟弟抢了 }

(私は弟に玩具を奪われた)

[車純蓮 2012:18]<日本人の中国語学習者の誤用>

(209){ ×田中さんの財布は/○田中さんは財布を }すりにすられた。

[張麟声 2001:134]<中国人の日本語学習者の誤用>

(210)教師：元気がありませんね。どうしましたか。

タン：満員電車で{ ×私の財布が/○財布を }取られました。

教師：そうでしたか…。

[池上他 2009:90]<中国で編纂される日本語の教科書に見られる不自然な受動表現>

(208)-(210)はまさに日中語母語話者の持ち主受動事態に対する事態把握の相違、つまり受影者視点-受動者視点といった視点選択の相違の現れである。(208)-(210)はいずれも対象変化他動詞による持ち主受動文であるが、この場合、日本語母語話者は「我被弟弟抢了玩具(私は弟に玩具を奪われた)」、「田中さんは財布をすりにすられた」、「財布を取られました」のように、直接的に影響を受ける所有物名詞を目的語の位置に残し、間接的に影響を受ける持ち主名詞を主語にする形式の受動文で表す傾向にあるが、中国語母語話者は

「我的玩具被弟弟抢了(私の玩具が弟に奪われた)」、「田中さんの財布はすりにすられた」、「私の財布が取られました」のように、直接的に影響を受ける所有物名詞を主語にする形式の受動文で表す傾向にある。

好まれる言い回しのこのような相違は日中語母語話者の同じ事態に対する把握の相違を表す。すなわち、日本語母語話者は間接的に影響を受ける受影者、つまり持ち主、中国語母語話者は直接的に影響を受ける受動者、つまり所有物の視点から当該事態を捉える傾向がある。凌蓉(2005:134)の観点を言い換えれば、日本語は概念化者である話者が主体的に関連事物・持ち主と関連付けて当該受動事態を述べる傾向が強いが、中国語は話者がわが事でも傍観者のように客観的に述べる傾向が強い、ということである。

しかしながら、日本語には(211)-(213)のように所有物主語の直接受動文、前述したように中国語には持ち主受動文がないわけではない。つまり、日本語母語話者は主に主体的に持ち主と関連付けて当該受動事態を捉えるが、中国語母語話者のように客観的に捉えることもある。一方、中国語母語話者は主に傍観者として客観的に当該受動事態を捉えるが、日本語母語話者のように主体的に持ち主と関連付けて当該事態を捉えることもある。

(211) 太郎の腕が折られた。

[表 2004:37]

(212) シャルルの心は粉碎されて、消えてしまう。

[表 2004:35]

(213) 太郎の頭は布で覆われている。

[表 2004:37]

(211)-(212)はともに所有物である「腕」と「心」に「折った」、「粉碎した」といった状態変化が起こったことを表す。一方、(213)は所有物である「頭」が「今、布で覆っている」という現在の状態を表す。言い換えれば、無情物である所有物に状態変化が生じた場合や、現在、どのような状態にあるのかを述べる場合、日本語母語話者はその持ち主との関連付けをせず、ただ客観的に当該受動事態を捉える、ということである。

このように、(210)では前後の文脈からわかるように、話し手は「元気がない」という聞き手の状態をもたらす原因を聞いたので、聞き手はただ客観的に「私の財布が取られました」と答えるよりも、主体的に自分と関連付けて(元気がない)、「財布を取られまし



た」と答えるほうが適切であろう。

## 第7章 日中語の第三者受動構文に関する対照研究

### 7.1 はじめに

日中対照研究では、(1)-(2)のような第三者受動文は日本語だけにあり、中国語においては成立しない、というのがこれまでの大方の見解である(中島 2007)。しかしながら、すでに指摘されたように、極めてまれではあるが、(3)-(4)に示すように、中国語においても第三者受動文が成立する場合がある(大河内 1983、金田一 1988、楊凱榮 1989、凌蓉 2005、中島 2012、杉村 2014)。

(1) 僕は雨に降られた。

[仁田 1997:231]

(2) 私は彼に先に論文を発表された。

[仁田 1997:231]

(3) 夜里我被 婴儿 哭 得 睡 不着 觉。  
夜に私受動 赤ん坊 泣く 助詞 眠る できない 眠り  
(私は夜中に赤ん坊に泣かれて眠れなかった)

[中島訳 2007:97]

(4) 我被 客人 一 来, 弄 得 没 学习 好。  
私受動 客 すると 来る する 助詞 できない 勉強する よく  
(私は客に來られて、勉強できなかった)

[中島訳 2007:97]

(3)-(4)のような受動文に関する考察によって、中島(2007)は、中国語における自動詞による第三者受動文の成立条件を以下のように提起した。

従って、自動詞の受身は、間接的影響の原因を表す“被”構文に、結果を表す“得”補語が後置される場合、極めて稀に成立することもあり得るといえる。

中島(2007:98)

すなわち、「被」によって導かれる補文の事態が原因を表し、それに後続する結果を表す補語、いわゆる「結果補語」が「得」を伴う形式によって表される場合のみ、自動詞の第三者受動文が成立することはできるということである。

しかしながら、中国語において、(5)-(7)のように、「得」補語が伴われないにもかかわらず、第三者受動文としてごく自然な受動表現がある。

- (5) 这次，又 被 那 只 狡猾 的 狐狸 逃 走 了  
今度 また 受動 あの 匹 ずる賢い の 狐 逃げる 去る 完了  
(今度、またあのずる賢い狐に逃げられてしまった)

[凌蓉訳 2005:102]

- (6) 被 他 这么 一 坐，我 什么都 看不见 了。  
受動 彼 このように すると 座る 私 何も 見えない 完了  
(彼に座られて何も見えなくなってしまった)

[楊凱栄 1989:15]

- (7) 我 坐庄，又 被 他 自摸 了。  
私 親になる また 受動 彼 つもる 完了  
(((マージャンで)親になり、また彼につもられた)

[C.-T. James Huang 他 2009:140]

さらに、以上のような自動詞による第三者の受動文のみならず、中国語において、日本語の受動文(2)と同様に、他動詞による第三者の受動文もまれに見られる。

- (8) 零件 加工 时，被 小王 漏 掉 了 一道 工序，结果  
部品 加工する 時 受動 王さん 抜かす てしまう 完了 一つ 工程 結局  
加工 出来 的 零件 成 了 废品。  
加工する 生じる の 部品 なる 完了 不合格品  
(部品を加工するとき、王さんが加工プロセスを一つやり忘れたため、不良品となっ  
てしまった)

[凌蓉訳 2005:112]

(9) 通过 一番 努力, 被 他 考 进了 前 三名, 这家伙  
を通じて 一回 努力 受動 彼 試験を受ける 入る 完了 上位 三位 こいつ  
是 很 有 潜力 的。  
である とても ある 潜在力 のだ  
(彼は努力のもとで上位の三名に入った。潜在力のある人だ)

[凌蓉訳 2005:113]

(8)-(9)のような第三者受動文も、上記の(5)-(7)と同様に、「得」補語が伴われないにもかかわらず、中国語においてごく自然な受動表現である。このように、言語データを増やして、中国語の第三者受動文に関する成立条件の仮説を改めて調査して見る価値は十分にあると思われる。

上述したとおり、現在、中国語において第三者受動文が可能であるという見方がされるようになってきたが、そのほとんどは「哭(泣く)」、「吵(騒ぐ)」、「坐(座る)」、「逃(逃げる)」のような非能格自動詞を含む数例を挙げることにとどまり、その文法的ふるまい、及び日本語の第三者受動文とはどのような対応関係をなすのかについては、特に言及されていない。

一方、日本語に特有とされてきた第三者受動構文に関する研究は盛んに行われており、主としては寺村(1982)、柴谷(1997)、谷口(2005)、高見(2011)などが挙げられる。それでは、同じく第三者の受動構文であるが、日中語の両構文は、本当に同じ意味を表すのであろうか。そして、いかなる条件の下で、日本語・中国語の第三者受動文はそれぞれ中国語・日本語にも第三者受動文と対応するのであろうか。さらに、日中語の第三者受動構文に反映される事態把握には、どのような共通点と相違点があるのか。以上のような問題についての研究は極めて少ない。

そこで、本章は、日中語の第三者受動構文を対象に、実例に基づき、両者の構文的特徴を解明し、事態認知モデルを用いてそのような差異に反映される事態把握の相違を考察し、最後に対訳コーパスのデータに基づき、日中語の第三者受動構文の対応関係を明らかにする。これによって、先行研究で提案した中国語の第三者受動構文の成立条件に関する仮説を修正する必要があること、日本語にも第一人称代名詞の行為主体の第三者受動文が存在すること、及び日中語の第三者受動構文は単文で結果の意味の明示化において明らかに異なることがわかった。

まず 7.2 では、日中語の第三者受動構文に関連する研究を概観し、先行研究の問題点を指摘する。次に 7.3 で、実例に基づき、日中語における第三者受動構文の構文的特徴を考察し、それらの異同点を解明する。その上で、7.4 では事態認知モデルを用いてそのような差異に反映される事態把握の相違を考察し、7.5 で日中対訳コーパスから収集したデータを元に、日中語の第三者受動文とその対訳から、日中語の第三者受動構文の対応関係はどのようなになっているのかを考察する。最後に 7.6 では結論を述べる。

## 7.2 先行研究

### 7.2.1 日本語の第三者受動構文に関する先行研究

日本語において、第三者受動構文の成立する文法的条件については、寺村(1982:243-254)は他動詞や非能格自動詞などは第三者受動文になるが、「降る」、「ある」というような例外的なものを除外した「所動詞」あるいは「非対格自動詞」は第三者受動文にならず、つまり第三者受動文を成立させる動詞の範囲は、直接受動文を成立させるものよりずっと広いと述べている。また、その語用的条件に関しては、氏は、授受表現と比較しながら、そこに現れている利益関係を中心にして分析している。授受表現は受益の意味を表す場合に用いるが、間接受動表現は、ある事態がある者にとってうれしくない、迷惑である、という時にしか使えないとされている。

一方、谷口(2005:307-314)は認知文法のアプローチから日本語の被害受け身文(ほぼ本論文でいう第三者受動文と対応する)について、その事態解釈及び構文的意味を詳しく考察を行っている。

(10) 僕はこどもに泣かれた。

a.元の能動文:こどもが泣いた

[谷口 2005:307]

まず、(10)のような例文をもって、対応する能動文が存在しない被害受け身文は、主語以外の部分から成り立つ自律的事態「こどもが泣いた」が原因となって、主語「僕」が被害・迷惑を被るといふ、主語の心理状態の変化が述べられるとし、被害受け身文によって表さ

れる事態把握は、次のように図示されると提案している。

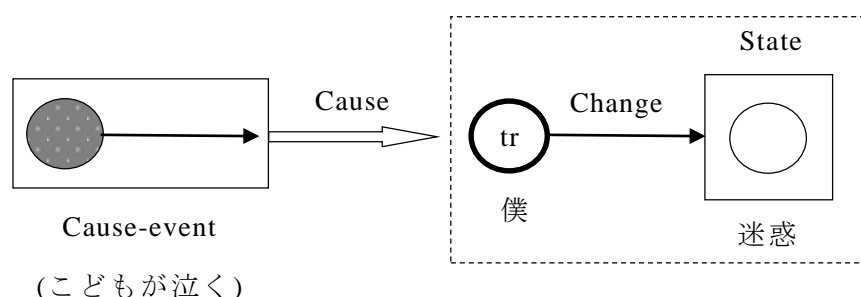


図 7-1 日本語の被害受け身文の事態把握(谷口 2005:308 より)

被害受け身文(10)を例にすると、「こどもが泣く」という一つの自律的事態が「僕」の心理状態の変化という事態の原因となっている。したがって被害受け身文では、ある事態が別の事態を引き起こす拡張的他動関係がベースとなっているとみなされ、主語以外の部分が表す自律的事態は **Cause-event** として特徴付けられる(谷口 2005:308)。7.6 で述べるように、事態把握のレベルにおいては、参加者がモノから事態へと拡張することによって、直接受動構文から直接的に第三者受動構文へと拡張すると考えるよりも、直接受動構文から持ち主受動構文へと拡張し、それからさらに拡張が進んでいくと、第三者受動構文ができるようになると思うほうは説得力があるのではなかろうか。なぜなら、それは直接受動構文の表す影響は直接的なものであるのに対し、第三者受動構文の表す影響は間接的なものである、といった影響の性質が根本的に異なるためであると考え<sup>76</sup>。

次に、被害受け身文の構文的意味について、以下のように述べている。

被害受身文は、その主語指示物の心理的变化が **Cause-event** によって引き起こされることを述べる構文で、そのデフォルト的な意味は<被害・迷惑>である。ただし **Cause-event** を表す動詞が明らかに恩恵をもたらすものであれば、<恩恵>の意味を表し得る。

谷口(2005:310)

<sup>76</sup> 受動構文における主語名詞の受ける影響性の性質の相違は、第 6 章で述べた持ち主受動構文にも関連する。詳しくは注 61 及び注 64、図 6-14、図 6-15、図 6-16、と図 6-17 を参照。

すなわち、被害受け身文が表す事態において、Cause-eventにより引き起こされる主語の心理状態の変化は、恩恵もあるが、むしろ限られており、被害・迷惑が中心的であるため、こうした被害・迷惑の意味が構文の意味として構文の側から与えられていると見なす(谷口 2005:308-309)。

また、高見(2011:48-82)は、寺村(1982)と同様に、対応する能動文がない、及び主語指示物が述べられている事態により被害や迷惑を被っているという二つの特徴を有する受動文を「間接受動文」(ほぼ本論文でいう第三者受動文と対応する)とし、間接受動文の適格性は、単に適格か不適格かという現象ではなく、複数の要因に左右される、程度をなす現象であると主張し、その基本的機能-主語指示物が当該の事態により被害・迷惑を被っており、その被害・迷惑が「ニ」格名詞句の指示物のせいである、という二つの点を満たすための四つの要因、すなわち人間度の階層、自力度の階層、先行迷惑度の階層、後続迷惑度の階層といった要因の相互作用によって捉えられると述べている。

さらに、志波(2015:136)は、第三者受動文は、直接受動文などに比べて特に、文末に現れる例が少なく、一定の外部構造で用いられることが多いという特徴を持つと述べている。第三者受動文が用いられやすい外部構造とは、次のようなものである。

- a ~たら大変:泣かれたら大変だ、泣かれるとたまらない
- b ~ても困る:泣かれても困る
- c ~のは嫌だ:泣かれるのは{ 嫌だ/やっかいだ }

志波(2015:136)

後続文脈のみならず、先行する文脈で被害・迷惑を表す表現が付加されると、第三者受動文の適格性が高くなる、ということはしばしばある(町田 2004、吉紅 2009、高見 2011)。吉紅(2009)は先行文脈で第三者受動文の成立に関わる要素として、主に「勝手に」、「一方的に」、「先に」などの副詞的要素を挙げている。

谷口(2005)、高見(2011)の分析は興味深いものであり、本論文にたいへん示唆的である。本論文においても、第三者受動構文の表す事態把握は谷口(2005)で提案された図式によって表すことにする。また、構文的特徴を分析するにあたり、高見(2011)、志波(2015)の分析方法を参照に、主に主語と行為主体の有生性、動詞の意図性及び先行・後続文脈の形式といった外部構造という面から検討することとする。しかしながら、後述するように、有情物

主語に限らず、無情物主語の第三者受動文も存在するため、本論文はこういった無情物主語の第三者受動文も視野に入れて、改めて第三者受動構文の成立条件・使用要因とは何かについて検討を行う。

## 7.2.2 日中語の第三者受動構文に関する対照研究

寺村(1982)は間接受動表現は日本語に特有の表現形式で、中国語にも朝鮮語にすら、対応するものは見出せないと論じている。張麟声(2001)、高見(2011)も同じ立場である。このように、第三者受動文に関しては中国語では成立しないというのがこれまでの定説である(中島 2012:5)。

しかし、上述した定説と異なる論調も見られる。大河内(1983)は、古くから中国語の白話小説に間接受身文が出現し、自動詞の第三者受身文が成立する場合は例外として二つあるという。その一つは、(11)のように「看见(見える)」、「听见(聞こえる)」という一部の知覚動詞であり、もう一つは、(12)のように囲碁などの解説において「被」を使うものが多いという。しかしながら、(11)-(12)のうち、(12)は確かに自動詞の第三者受動文であるが、(11)はその日本語訳からもわかるように、間接受動文ではなく、直接受動文とされるのではなかろうか。なぜなら、「见(見える)」が結果補語を表す自動詞であるため、その述語動詞は、「看见(見える)」という自動詞ではなく、「看(見る)」という他動詞であるからである<sup>77</sup>。

(11)这一切是被道旁的树木看见了的。

(このすべては道傍の樹に見られてしまった)

(12)被白棋适了，黑地是六目。

(白石に生きられると黒石は六目だ)

[中島訳 2012:14]

大河内(1983)の挙げた囲碁などの解説における第三者受動文以外に、楊凱榮(1989)は「被他这么一坐，我什么都看不见了(彼に座られて何も見えなくなってしまった)」という、「这

---

<sup>77</sup> 刘月华他(1991:451)によると、「见」の基本的意味は「見て、そして結果を得る一見て目に入る」ということであり、結果補語になる場合、普通は動詞「看(見る)、瞧(見る)、瞅(見る)、望(眺める)、听(聞く)、闻(嗅ぐ)」の後だけに用いられ、「動作が結果を得る」という意味を表すという。



么一」を伴う形式の自動詞の第三者受動文を挙げている。

また、金田一(1988)は間接の受動態は東アジアの諸言語によく見られ、特に珍しいものではないと述べている。中国語でも、「被孩子吵了(子供に泣かれた)」、「被雨淋了(雨に降られた)」などという指摘している。確かに、中国語には前述したように、間接受動態が存在しているが、例文には問題があるのではないかと思われる。「被孩子吵了(子供に泣かれた)」は、「被孩子吵了一整晚(一晩中、子供に泣かれた)/被孩子吵得一整晚没睡着(子供に泣かれて一晩中眠れなかった)」と比べるとよくわかるように、容認度が高くない。

要するに、すでに日中受動文を対照研究した鶴殿(2005:421)が指摘したように、柴谷や仁田が「間接受身文の存在が、日本語の特色である」というのは確かだが、正確に言えば必ずしも日本語だけの特色ではないのである。

一方、凌蓉(2005)は日中対訳コーパスや辞書、新聞などから用例を集めて、日中語の第三者受動文の文法的成立条件及び語用的特徴を全面的に検討した。凌蓉の考察は大変詳しいものであり、参考価値の高いものである。ただし、その考察は日本語の第三者受動文とそれに対応する中国語の受動表現が成立するか否かといった分析に偏っており、中国語の第三者受動文が日本語とどのような対応関係をなすのかに触れた部分が少ない。また、事態把握と関連せず、単に日中語の第三者受動構文の構文的特徴を検討しただけという不足が挙げられる。

さらに、中島(2007,2012)は、志賀直哉の『暗夜行路』とその中国語訳本を資料とし、日中語の間接受動文(第三者受動文を含む)の対応の諸相を考察し、中国語の自動詞受動文の成立条件を仮説として提起した。7.1節で述べたように、この仮説はごく限られた対訳資料に基づいて提起したものであるため、自動詞の第三者受動文の全体を説明することができない。また、中国語における他動詞の第三者受動文の成立については解明されていないという問題の残るところである。

このように、日中対照研究では、中国語に第三者受動文が成立しないという定説に反する意見が見られるが、日中語の第三者受動構文の構文的特徴、対応関係及びそれらに関連する事態把握における異同点に関する研究はほとんどなされていないのが現状である。

そこで、本章は日中語の第三者受動構文を取り上げ、それらを対照することによりそれぞれの特徴を明らかにし、構文的相違点のみならず、そのような差異が反映する事態把握の相違も探究する。

次節 7.3 では、実例に基づき、日中語における第三者受動構文の構文的特徴を考察し、

それらの異同点を解明する。続いて 7.4 では、事態認知モデルを用いてそのような差異に反映される事態把握の相違を考察し、さらに 7.5 では、日中対訳コーパスから収集したデータを元に、日中語の第三者受動文とその対訳から、日中語の第三者受動構文の対応関係を明らかにする。

### 7.3 日中語の第三者受動構文の構文的特徴

本節では、実例に基づき、高見(2011)の分析方法を参照し、形式及び意味の面から日中語の第三者受動構文の構文的特徴について詳しく考察し、それらの使用要因を明らかにする。

まず、7.3.1 では、主に副詞的要素などの先行文脈、結果の意味の明示化という後続文脈、といった外部構造から日中語の第三者受動構文の形式的特徴を考察する。続いて 7.3.2 では、主語と行為主体の有生性及び両者の関係、行為主体の言語化及び格標識、被害・迷惑、中立及び利益といった情意性、さらに述語動詞という四つの点から日中語の第三者受動構文の意味的特徴を分析し、それらの使用要因を解明する。その上で、7.3.3 で両構文の構文的特徴における共通点及び相違点をまとめる。

#### 7.3.1 形式的特徴

第三者受動構文においては、第 5 章、第 6 章で述べた日中語の相違、つまり結果の明示化という差異ははっきり見られない。すなわち、使役受動構文と持ち主受動構文では、中国語は結果の明示化が要請されるのに対し、日本語はそのような制約がかからない。一方、第三者受動構文では、中国語のみならず、日本語も結果の意味が明示される例文は多く見られる、ということである。ただし、単文では中国語は結果の意味が明示されなければならないのに対し、日本語は結果の意味が明示されなくてもよい、という結果の明示化における義務性の相違が見られる。

なお、ここでは益岡(1982)に従い、「結果」というのはその性質によって、具体的な結果と抽象的な結果との二つに分けられる。具体的な結果とは(15)のように、ある対象が位置・状態変化を起こる、という物理的な結果状態(例:目が覚める)のことをいう。それに対し、抽象的な結果とは(13)-(14)のように、ある対象が感情的な状態変化を起こる、という心理

的な結果状態(例:しまった、迷惑だ)のことをいう<sup>78</sup>。言語化においては、前者は明示される傾向にあるが、後者は明示されない傾向にある。

前述したように、志波(2015)は、第三者受動文は、直接受動文などに比べて特に文末に現れる例が少なく、一定の外部構造で用いられることが多いという特徴を持つと述べている。志波(2015)の挙げた後続形式以外に、(13)のように「～てしまう」、(14)のように「～ると迷惑だ」、及び(15)のように「～ると、結果主節」といった外部構造もよく見つかる。

(13)勝手に会議を行われてしまった。

[凌蓉 2005:112]

(14)たまにはいいけれど、たびたび来られると迷惑だわ。

[対訳 痴人の愛]

(15)それやられると目が覚めちゃうんだ。

[対訳 ノルウェイの森]

また、吉紅(2009)が指摘した先行文脈で第三者受動文の成立に関わる要素としては、主に(13)のような「勝手に」、(17)のような「先に」などの副詞的要素が挙げられる。

(16)三日も雨に降られると、かえって十分な休養になる。

[山下 2001:3]

(17)私は彼に先に論文を発表された。

[仁田 1997:231]

むろん、日本語の第三者受動文は、直接受動文などに比べて、(13)-(17)のように一定の外部構造で用いられることが多いが、(1)、(10)のように単文の文末に現れる例も見つかる。

一方、中国語の第三者受動文は、直接受動文、使役受動文、持ち主受動文などと同様に、(18)-(19)のように述語動詞に結果補語がつくのは一般的である。第1章で述べたように、(19)の「了(助詞)」も結果補語の一種だと考えられる。

---

<sup>78</sup> 益岡(1982)は受影性をその性質によって、物理的受影性と心理的受影性との二つに分け、両者はいずれも直接的ものと間接的のものが認められ、それに基づいて直接受動文と間接受動文を区別することができるように思われると述べている。

(18) 夜 里 我 被 嬰 儿 哭 得 睡 不 着 觉。

夜 に 私 受 動 赤 ん 坊 泣 く 助 詞 眠 る で き な い 眠 り

(私は夜中に赤ん坊に泣かれて眠れなかった)

[例(3)再掲]

(19) 我 坐 庄, 又 被 他 自 摸 了。

私 親 に な る ま た 受 動 彼 つ も る 完 了

((マージャンで)親になり、また彼につもられた)

[例(7)再掲]

前述したとおり、中島(2012)は中国語の第三者受動文の成立条件として、(18)のように「得」による結果補語<sup>79</sup>がなければならないとしているが、本論文は「得」補語の必須性という見解には同意できない。なぜなら、(20)のように従属節に置かれる場合、当該受動節内で結果の意味が明示されなくても成立する文がある一方、結果状態の表し方には「得」による形式以外、(21)-(27)のように他のさまざまな形式も存在するためである。

(20) 妈 妈 因 宝 宝 被 吵, 持 砖 砸 飙 车 党。

お 母 さ ん た め 赤 ち ゃ ん 受 動 騒 ぐ 持 つ レ ン ガ 殴 る 暴 走 族

(騒がれたため、赤ちゃんのお母さんはレンガで暴走族を殴った)

[手机央视网 2012-10-12]

<sup>79</sup> 木村(2000:24-25)によると、(18)「哭得睡不着觉(泣かれて眠れなかった)」のような、動作と結果を併せ示すタイプの動補構造、つまり VR 構造は受影文(受動文のことをいう)にもっとも適した述語形式であり、これを述語とする受影文こそ、中国語の受影文のプロトタイプであると考えられるという。さらに、この VR 構造について、以下のように述べている。

動作・行為を表す V と結果を表す R の結合からなる VR 構造をプロトタイプとする受影文の述語は、典型的には、<スル-ナル>合体の複合的な意味構造をなすものと言える。但し、構文全体の意味としては、対象がどう<ナル>かに関心を寄せるものであるという事実を考慮すれば、スル的な V とナル的な R が等価の表現機能を担っているとは考えにくい。この種の構文において焦点化(profile)されているのはやはり主語の位置に置かれた対象 X であり、同時にその X についての状況を語る R である。つまり、受影文においては、<働きかけ>と<結果>の局面のうち、後者が焦点化され、その原因となる前者の方は前提化されていると考えられる。或いは、結果としてのナル的状况が前景化され、スル的動作・行為は背景化されていると言い換えてもよい。

(20)の「被吵(騒がれる)」は従属節に置かれ、当該受動節内ではいかなる結果補語もついていなく成り立つ。それは、当該受動節に後続する主節から受けた影響や被害といった結果の意味が推定できるためであると考えられる。

また、結果の意味の表し方については、(21)のように方向句「出来(出て来る)」、(22)のように数量句「一下(一回)」、(23)のように前置詞句「在门外(室外にいる)」、(24)のように形容詞「痛(痛い)」、(25)のように動詞句「进前三名(上位の三名に入る)」、(26)のように助詞「了(完了)」、さらに(27)のように「引起了自己的心事(自分も悲しくなった)」という主節などの形式が挙げられる。

(21)我想 逃， 没 逃 脱， 被 他们 抓 回去， 又 打。

私 したい 逃げる ない 逃げる 離れる 受動 彼ら 捕まえる ていく また 殴る  
后来 到 了 河南 才 被 我 逃 出来 了。

その後 着く 完了 地名 やっと 受動 私 逃げる 出てくる 完了

(私は逃げたかったが、逃げきれず、また彼らに捕まえられて殴られた。やがて、河南に着いてからやっと私が逃げることができた)

[魔方格 2015-06-09]

(22)话音 未 落， 车轮 猛 地 撞 在 一个 土坎 上， 我 被

話し声 ない 落ちる 車輪 激しい に ぶつかる に 一つ 土手上 私 受動  
剧烈地 颠 了 一下， 忽地 摔 了 出去， 跌 在 地上。

激しい に 揺れる 完了 ちょっと 突然 投げつける 完了 ていく 転ぶ に 地面  
(そう叫んだとたん、車椅子は地面のでっばりに乗り上げて私は宙に放り出された)

[対訳 轮椅上的梦]

(23)他 追求 了 一阵子 的 密斯 刘 终于 理所当然 地

彼 追い求める 完了 しばらく の ミス 姓 とうとう 理の当然である に

拒絶 了 他， 密斯 刘 砰地 关 上 了 门， 他 被 关

拒絶する 完了 彼 ミス 姓 ばたん と 占める つける 完了 ドア 彼 受動 閉める  
在 门 外 了。

に ドア 外 完了

(ひと頃追いかけたミス劉にも当然振られ、ドアをボタンとばかりシャットアウト

だ)

[対訳 活動変人形]

(24)眼睛 被 哭 癢 了, 怎么办 呢?

目 受動 泣く 痛い 完了 どうする か

(泣いて目が痛くなって、どうしよう)

[百度拇指医生 2009-05-23]

(25)通过 一番 努力, 被 他 考 进 了 前 三名, 这家伙

を通じて 一回 努力 受動 彼 試験を受ける 入る 完了 上位 三位 こいつ

是 很 有 潜力 的。

である とても ある 潜在力 のだ

(彼は努力のもとで上位の三名に入った。潜在力のある人だ)

[例(9)再掲]

(26)侯 老太 气愤 地 说, 等 警察 来 这 段 时 间 里, 一 不 留

苗字 老婦人 怒る に 言う 待つ 警察 来る この 間 に すると ない つける

裨 被 小偷 跑 了。

気 受動 すり 逃げる 完了

(侯ばあさんは、警察を待っている間ちょっと油断した隙にすりに逃げられちゃったと怒って言った)

[南方都市报 2014-06-12]

(27)周氏 被 鸣凤 这 一 哭 引起 了 自己 的 心事。

周氏 受動 人名 そんなに すると 泣く 引き起こす 完了 自分 の 心配事

(周氏は鳴鳳に泣かれて自分も悲しくなった)

[対訳 家]

ここでは、助詞「了」について一点指摘しておく。

(19)、(26)はともに助詞「了」によって、状態変化といった結果が表されるが、(19')、(26')からもわかるように、発音及び「掉(てしまう)」という結果補語、語気助詞「了」と「啊 a」の合音「啦 la」(刘月华他 1988:326)に置き換えられるかどうかによって、両文における「了」は同じ働きをする助詞ではない、ということが示唆される。すなわち、(19)における「了」は、状況の変化という語気助詞の働きしかしないが、(26)における「了」は、動作の結果(動

態助詞)及び状況の変化(語気助詞)の両方の働きを重ねる。

したがって、上述した「得」や形容詞、主節などによる結果補語と異なり、(19)のように助詞「了」による状態変化といった結果は、具体的に現在どのような状態にあるのかについては明示されていないにもかかわらず、そのような受動文は成立する。このような第三者受動文は、主語が受けるのは具体的な物理的影響ではなく、「被害」といった抽象的な心理的影響であるため、文末の「了」から客観的な状況の変化のみならず、主語にとっての「被害」といった心理状態の変化「ついていない」というニュアンスも強く読み取れる。

(19')又被他自摸{ 了(×liǎo/○la)/×掉/○啦 } <語気助詞>

(26')一不留神被小偷跑{ 了(○liǎo/○la)/○掉/○啦 } <動態助詞兼語気助詞>

また、中国語の第三者受動文は日本語と同様、先行する文脈で時間、程度、接続、受け手の様態、行為主体の動作の方式を表す副詞的な要素、いわゆる連用修飾語が削除されると、適格性が落ちる、ということはしばしばある。先行文脈で第三者受動文の成立に関わる要素として、主に(19)のような「又(また)」、(21)のような「才(やっと)」、(22)のような「剧烈地(激しく)」、(26)のような「一不留神(油断した隙に)」、(28)のような「抢先(先に)」、(29)のような「自作主张(勝手に)」などの副詞的要素が挙げられる。

(28)被 旁边 的 学生 抢先 说 出 了 同 样 的 意 见。

受動 側 の 学生 先を争う 言う 出る 完了 同様 の 意見

(同じ意見を先に隣の学生に述べられてしまった)

[凌蓉訳 2005:114]

(29)被 他 自作主张 地 把 仓库 的 看管 委托 给 保安 公司 了。

受動 彼 独断する に 处置 倉庫 の 管理 委託する に 警備 会社 完了

(彼に勝手に倉庫の管理を整備会社に頼まれた)

[凌蓉訳 2005:115]

このように、日中語の第三者受動構文はともに一定の外部構造で用いられることが多く、それらの容認性が前後の文脈によって左右されやすい。こういった外部構造は主に先行文脈での副詞的要素及び後続文脈での結果状態を意味する成分などが挙げられる。そして、

結果状態のうち、ある対象の位置・状態変化を表す具体的な物理的結果の意味はしばしば明示されるが、ある対象の感情変化を表す抽象的な心理的結果の意味は含意にとどめ、明示しない傾向がある。

しかしながら、両言語の間には相違も見られる。

まず、日本語の第三者受動構文は上述した外部構造なしに単文の文末に現れる例文がある。一方、中国語の第三者受動構文は従属節に置かれ、それに後続する主節から被害などの結果の意味が推測できる場合のみ成り立つが、上述した外部構造なしに単文の文末に現れる例文が見当たらない。つまり、単文では日本語は結果の意味が明示されなくても成立するが、中国語は結果の意味が明示されなければならない、という単文での結果の意味の明示化における義務性の差異である。

また、結果の性質において日中語は異なる傾向にある。上に挙げた例文からもわかるように、日本語の第三者受動文はほとんど「被害・迷惑」といった心理的な状態変化を表すが、中国語の第三者受動文はほとんど具体的な物理的な位置・状態変化を表す。

### 7.3.2 意味的特徴

本節では、主に情意性及び述語動詞といった点から日中語の第三者受動構文の意味的特徴を考察し、それぞれの使用要因を明らかにする。

#### 1) 情意性

従来の研究は、寺村(1982)、谷口(2005)、高見(2011)のように、対応する能動文がない、主語指示物が被害・迷惑を被っているという二つの特徴を持つ受動文を第三者受動文としている。よって、迷惑を感じられない無情物は第三者受動文の主語として用いることはできず、第三者受動文は例外なく有情物主語にとって被害・迷惑となるのである。例えば、(1)-(2)、(10)、(13)-(15)のような例文はすべて有情物主語であり、主語名詞にとって当該事態の成立が望ましくなく、迷惑を感じる。

しかしながら、すでに指摘されたように(山下 2001、谷口 2005、日本語記述文法研究会 2009)、(30)-(31)のように有情物主語でありながら、迷惑の意味合いが希薄になるどころか恩恵性が含意されることもある。さらに、(32)-(33)のように実際に無情物主語の第三者受



動文さえも見られる<sup>80</sup>。

(30)三日も雨に降られると、かえって十分な休養になる。

[例(16)再掲]

(31)夏の夕暮れ、ベランダで(私が)風に吹かれながらビールを飲むのが、私は好きだ。

[日本語記述文法研究会 2009:241]

(32)旗が風に吹かれて、たなびいている。

[杉本 1999:54]

(33)風に吹かれて、ひらひらしている貼紙もある。

[対訳 黒い雨]

(30)-(31)はともに有情物主語ではあるが、後続文脈からわかるように、当該事態は主語にとって利益になる。一方、(32)-(33)は無情物主語の受動文であり、いずれも無情物主語の状態を描写している。そして、いずれも行為主体に関連する事態「風が吹く」と主語指示物に生じる位置や状態変化「旗がたなびく」、「貼紙がひらひらする」との間に、因果関係が存在すると考える。よって、前述したように、谷口(2005)が指摘した因果関係の範囲は拡大しなければならないということがわかった。すなわち、無情物主語の第三者受動文もあるため、第三者受動文は行為主体に関わる自律的事態が原因となり、主語指示物が被害・迷惑を被るといふ、主語の心理的状态の変化のみならず、主語指示物に位置変化や状態変化が生じることを表す。

このように、有情物主語の第三者受動文は述語動詞の表す事態に含まれない主語指示物が当該事態により間接的に被害や利益などの影響を受け、心理的状态が変化したということを表す。つまり、間接的な影響を被る受影者を視点人物とする選択によって有情物主語の第三者受動文が用いられると考えられる。また、(32)のように、話者は有情物指示物の状態を描写するため、第三者受動文が用いられるとも考えられる。一方、無情物主語の第三者受動文の使用は(32)-(33)のように、状態描写といった語用論的な要因しか考えられな

---

<sup>80</sup> 杉本(1999)は、対応する能動文を持つ(例:○風が旗に吹く、×雨が僕に降る)、被害の意味がないという二点によって、「雨に降られる」、「風に吹かれる」のような気象受動文は第三者受動文ではなく、直接受動文と見なすと主張している。本論文は、このような受動文の主語が当該事態に含まれないものの、述語動詞の表す事態から影響を受けるという意味で、直接受動文ではなく、第三者受動文であることにする。

い。

無情物主語の場合は、有情物主語と異なり、その行為主体が無情物、特に「風」のような自然現象に限られる。このような受動文は、情意性の面においては、主語が被害・迷惑を感じられない無情物であるため、被害、利益ではなく、中立となる。また、無情物行為主体の場合は、主に「風」、「雨」のような自然現象や、「バス」、「機械」などの機械類を意味する名詞、いわゆる自然の力やあたかも自らの力を持っているかのように考えることができる名詞(高見 2011:60-61)である。

杉村(2014)は、一人称行為主体の受動文は中国語にあって日本語にないものとしているが、実は後述するように日本語にも一人称行為主体の第三者受動文はまれに見られる。この点については、7.5 で詳しく論述する。

また、主語と行為主体との関係においては、両者は全く無関係なものでないことも容易に読み取れる。両者は主に(34)-(35)のような人間関係、(36)-(37)のような競争関係、あるいは利益衝突の関係にあるが、まれに(30)-(31)のような人間と自然現象の関係、(32)-(33)のような物と自然現象の関係、及び(39)-(40)のような人間と乗り物や機械の関係にあることもある。

(34)私は客に来られて勉強できなかった。

[中島 2007:93]

(35)太郎は花子に結婚された。

[仁田 1997:231]

(36)私は彼に先に論文を発表された。

[仁田 1997:231]

(37)A社はB社に新製品を発表された。

[杉本 1999:52]

(38)あたしに逃げられてそんなに困った？

[対訳 痴人の愛]

(39)電車に遅れられて、試験に遅刻した。

[日本語記述文法研究会 2009:240]

(40)変な時に安全措置に働かれて困った。

[趙穎 2012:8]

このように、第三者受動文の主語と行為主体は実は何らかの関係を持つものである。ゆえに、主語指示物は行為主体に関連する事態により、間接的に被害、利益あるいは中立的な影響を受けることが可能となるのである。つまり、主語と行為主体との関係は第三者受動文の情意性に関わる要素である。

行為主体の格標識については、直接及び持ち主の受動構文では「に」を中心としながらも、「によって」や「から」、「で」などで表されることもあるのに対し、第三者受動構文では(30)-(40)に示すように「に」しか用いられないとされている(日本語記述文法研究会2009:238)。しかしながら、(41)のように第三者受動文の行為主体は、「から」で表示される例文もまれに見られる。

(41) そうかしら。信じないわ。あなたはわりあい女から騒がれる方だと思うわ。

[対訳 青春の蹉跎]

以上述べてきたように、日本語の第三者受動文において、主語と行為主体はいずれも有情物に限らず、無情物も可能であり、両者は何らかの関わりを持つ存在であるため、主語指示物は行為主体に関する事態により間接的な影響を受けることが可能となる。主語指示物の当該事態により受けた影響は主に被害となるが、中立及び利益となるものも見られる。

続いて、中国語の第三者受動文の情意性について考察を進めていく。

凌蓉(2005)によると、中国語の第三者受動構文は、被害・迷惑の意味を持っているため、一般的に被害・迷惑を感じることでできる人間を主語としなければならないという。しかしながら、(42)-(43)のように有情物主語の第三者受動文もあれば、(44)-(45)のように無情物主語の第三者受動文もある。そして中国語において、有情物主語の第三者受動文には日本語と同様、(42)のように主語指示物にとって当該事態が被害になる例文もあれば、(43)のように利益になる例文もある。また、(44)のように主語指示物の性質・属性を述べるのに無情物主語の第三者受動文が用いられると考えられるものもある。(44)のような無情物主語の第三者受動文は情意性の面において、明らかに(42)-(43)と異なり、中立的である。

(42) 侯老太 气愤地说，等 警察来 这段时间里，一不留  
苗字 老婦人 怒る に 言う 待つ 警察 来る この 間 に すると ない つける  
神 被 小偷 跑 了。

氣 受動 すり 逃げる 完了

(侯ばあさんは、警察を待っている間ちょっと油断した隙にすりに逃げられちゃった  
と怒って言った)

[例(26)再掲]

(43) 这个 单位 有 了 这样 一位 先 是 工作人员 后 是 退休人员  
この 機関 いる 完了 この ような 一人 初め である 職員 次 である 退職者  
最后 临死 前 几个月 被 “落实 政策” 从 “历史 反革命” 又 变成 了

最後 臨終 前 数ヶ月 受動 実現する 政策 から 歴史 反革命 また となる 完了  
“离休 老 同志” 的 人士，确实 是 这个 单位 “倒 了 血 楣”。

離職休養 敬意 同志 の 人士 確かに のだ この 機関 倒れる 完了 血 まぐさ  
(彼らにしては、倪吾誠のような初めは職員、次は定年退職者、やっと死ぬ数ヶ月  
前『名誉回復』政策によって『歴史的な反革命』から『特待定年退職者』の身分に切  
変わった人士を抱えては、いい迷惑なのだ)

[対訳 活動変人形]

(44) 但是 夏天 风 太 大， 广告旗 很 容易 被 风吹 得  
でも 夏 風 すぎる 大きい 広告旗 とても やさしい 受動 風 吹く 助詞  
卷 起来。

反り返る 立ち上がる

(夏は風が強いから、のぼり旗は巻き上がってしまうことが多い)

[百度知道 2011-06-26]

一方、(45)のように、無情物主語に関連する有情物が想起できる第三者の持ち主受動文  
も中国語には見られるが、このような用法は日本語には確認されていない。

(45) 秦 始皇 惹 了 孟姜女，刚 修的 长城 被  
秦 始皇帝 逆らう 完了 人名 したばかり 修築する の 万里の長城 受動

哭 倒 了。

泣く 倒れる 完了

(秦の始皇帝が孟姜女を怒らせたため、修築されたばかりの万里の長城は彼女に泣かれて倒れた)

[月亮島教育 2015-04-17]

(45)は単に「孟姜女が泣く」という自律的事態により、主語指示物「長城」が「倒れる」状態になったことを表すのではなく、「長城が倒れる」という結果事態は無情物主語「長城」に関連する人物「秦の始皇帝」にとって被害となる、というニュアンスも表している。

さらに、前掲した(21)、(25)のような用法は日本語にも見つからない。ここでは例文を再掲する。

(46)我 想 逃， 没 逃 脱， 被 他们 抓 回去， 又 打。

私 したい 逃げる ない 逃げる 離れる 受動 彼ら 捕まえる ていく また 殴る  
后来 到 了 河南 才 被 我 逃 出来 了。

その後 着く 完了 地名 やっと 受動 私 逃げる 出てくる 完了

(私は逃げたかったが、逃げきれず、また彼らに捕まえられて殴られた。やがて、河南に着いてからやっと私が逃げる事ができた)

[例(21)再掲]

(47)通过 一番 努力， 被 他 考 进 了 前 三名， 这家伙

を通じて 一回 努力 受動 彼 試験を受ける 入る 完了 上位 三位 こいつ  
是 很 有 潜力 的。

である とても ある 潜在力 のだ

(彼は努力のもとで上位の三名に入った。潜在力のある人だ)

[例(25)再掲]

(46)-(47)のような受動文は、いわゆる杉村(1992,1999)でいう「自己称揚」の受動文、あるいは凌蓉(2005)でいう「行為者称揚」の受動文である。こういった行為者称揚の意味を表す受動文を用いることにより、「逃げる」や「上位の三名に入る」という難しいことを

実現した行為者「私」、「彼」の努力を褒め称えることができる。つまり、中国語では行為者を称揚するのに第三者受動文が用いられると考えられる。

このように、中国語では、有情物主語の第三者受動文は述語動詞の表す事態に含まれない主語指示物が当該事態により間接的に影響(利害を含む)を受け、位置・状態が変化したということを表す。つまり、間接的な影響を被る受影者を視点人物とする選択によって有情物主語の第三者受動文が用いられると考えられる。また、(46)-(47)のように、難しいことを実現した行為者の努力を称揚する、いわゆる行為者称揚によって第三者受動文が使用されるとも考えられる。一方、(44)のように話者は無情物指示物の性質・属性を叙述するため、無情物主語の第三者受動文が用いられると考える。また、(45)のように無情物主語に関連する有情物はその無情物の当該事態から間接的に受けた影響により被害を被ることを表すこともできる。つまり、中国語の第三者受動文の使用要因において、有情物主語は受影者視点と行為者称揚との二つが挙げられるが、無情物主語は性質叙述<sup>81</sup>と受影者視点との二つが挙げられる。

行為主体の有生性に関しては、凌蓉(2005)はほとんど「人」であるが、まれには「動物」が擬人的に行為者として用いられることもある、つまり有情物に限ると述べている。確かに、第三者受動文の行為主体は、よく(45)-(47)のように有情物であるが、(44)、(48)のように無情物である例文もある。ただし、日本語と同様、無情物行為主体の場合は主に「風」のような自然現象、「車椅子」のような機械類を意味する名詞、いわゆる自然の力やあたかも自らの力を持っているかのように考えることができる名詞に限られる。

(48) 话音 未 落， 车轮 猛 地 撞 在 一个 土坎 上，我 被  
話し声 ない 落ちる 車輪 激しい に ぶつかる に 一つ 土手 上 私 受動  
剧烈 地 颠 了 一下， 忽地 摔 了 出去， 跌 在 地上。  
激しい に 揺れる 完了 ちょっと 突然 投げつける 完了 ていく 転ぶ に 地面  
(そう叫んだとたん、車椅子は地面のでっばりに乗り上げて私は宙に放り出された)

[例(22)再掲]

<sup>81</sup> 本論文でいう「性質叙述」は、ほぼ益岡(1982)の「属性叙述」、及び高見(2011)の「特徴づけ」という概念と同じ意味を表す。「属性叙述」とは、ある名詞句がある属性を有していることをいう(cf.益岡 1982)。「特徴づけ」とは、受動文の主語を特徴/性格付けることを指す(高見 2011:33)。

また、行為主体の言語化に関しては、名詞や代名詞((44)、(46)-(47)など)で明示されるのは基本的ではあるが、(43)、(45)、(48)に示すように自明の場合や前後の文脈で明示されるため、当該受動節では言語化されないこともある。さらに、行為主体が第一人称代名詞「我(私)」で表される例文((46))もまれに見られる。

さらに、主語と行為主体とは全く無関係なものではないことも容易に読み取れる。例えば、主に「私と赤ん坊」((18))、「万里の長城と孟姜女」((45))、「私と車椅子」((48))のような近い位置関係、及び「侯おばあさんとすり」((42))、「彼らと私」((46))、「私と彼」((47))のように近くにいて利害を衝突する関係が挙げられる。また、「職員と政府」((43))のような国民と政府の関係、「目と私」((49))のような身体部位と人間の関係もまれに見られる。

(49) 眼睛 被 哭 痛 了， 怎么办 呢？

目 受動 泣く 痛い 完了 どう する か

(泣いて目が痛くなって、どうしよう)

[例(24)再掲]

このように、中国語の第三者受動文は構造上、持ち主受動文のように所有関係を表す属格を持つ、あるいは付加することができるのとは異なるが、主語と行為主体はいかなる関係も持たないものでもなく、実は両者の間に、近距離の位置関係や利害衝突の関係など何らかの関係が存在すると考える。

## 2) 述語動詞

日本語において、他動詞と非能格自動詞は第三者受動文になるが、非対格自動詞はならない(三上 1972、影山 1993,1996)という従来の説に反して、寺村(1982)、高見(2011)は非対格自動詞はまれながら、第三者受動文に用いられることがあると主張している。

また、吉紅(2009)は、日中対訳コーパスを利用し、728語の日本語教育における基本動詞を自動詞と他動詞に分け、『日本語基本動詞用法辞典』(小泉他 1989)でそれらの動詞による日本語の第三者受動文の成否を調べた結果、第三者受動文にならない、またはなりにくい動詞は以下のようなものであると述べている。

### 1) 自動詞

- ① 敬語動詞:いらっしゃる、上がる

- ② 存在:ある
- ③ 可能:できる、聞こえる、助かる、間に合う、見える
- ④ 自然的な動き:売れる、起こる、解ける、済む、届く、匂う、始まる、止むなど
- ⑤ 状態的变化:溶ける、凍る、点く、沸く、煮える、溜まる、焦げる
- ⑥ 関係:合う、対する、似る、違う、異なる
- ⑦ 感情・心理:感動する、感心する、悩む、困る、びっくりする、苦しむ、気がする

## 2) 他動詞

- ① 敬語動詞:おっしゃる、致す、申す、下さる、なさる、召し上がる
- ② やりもらい動詞:くれる、もらう、やる
- ③ その他:連れる、愛する、預ける、受取る、移す、送る、押す、聞く、叱るなど

吉紅(2009:20-25)

さらに、凌蓉(2005)は日中対照しながら、どのような自動詞及び他動詞が日中語の第三者受動文になるのかについて詳細に考察を行った。その結果、第三者受動文の述語動詞として用いられる動詞の種類は以下のとおりである。

表 7-1 からわかるように、日本語においては多くの動詞は第三者受動文の述語動詞として用いることができるが、中国語においては第三者受動文の述語動詞として使用される動詞はきわめて少ない。



表 7-1 日中語の第三者受動文における述語動詞の成立条件(凌蓉 2005:141 より一部修正)

動詞の種類	動詞の意味		第三者受身文及びそれに対応する「被」構文の述語動詞として用いることができるかどうか		
			日本語	中国語	
自動詞	動作	一般的な動作	○	×	
		移動動作	○	少数	
		他人と関係のある動作	○	×	
	現象	存在	○	×	
		出現消失	○	×	
		自然現象	一部	×	
		生理現象	○	極少数	
		状態変化	一部	×	
		態度・感情	○	×	
	他動詞	客体に影響を与え、かつ客体を変化させる	作用	○	少数
生産			○	少数	
位置変化			移動	○	少数
			授受	大部分	少数
客体に影響を与えるが、客体を変化させない		言語活動	○	少数	
		態度・感情	○	少数	
客体への影響が弱い		思考	一部	×	

凌蓉(2005)、吉紅(2009)の研究はたいへん詳しいものであり、本論文には非常に有益である。ただし、吉紅(2009)自身が述べているように、特別な場合には、それらの動詞は第三者受動文になる可能性がある。(40)のような自動詞「働く」は凌蓉(2005)では言及されず、吉紅(2009)では、自然的な動きを表す自動詞として第三者受動文にならないとしているが、そのような例文が存在する。また、対訳コーパスやインターネットから収集したデータからわかるように、中国語の第三者受動文の述語動詞として用いられる自動詞は、移動と生理を表す動詞に限らず、その範囲がより広い。このように、言語データを増やして、日中

語の第三者受動構文の述語動詞について、改めて検討して見る価値は十分にあると思われる。以下、日中語における第三者受動構文の述語動詞について検討を進めていく。

まず、日本語の第三者受動構文の述語動詞について考察する。

以上挙げた例文からもわかるように、非能格自動詞のうち、(34)、(38)のような移動動作を表すもの、(35)のような他人との関係のある動作を表すもの、及び(41)のような一般的な動作を表すものは第三者受動文の述語動詞として用いることができる。また、(50)-(51)に示すように、生理現象を表す非能格自動詞も第三者受動文の述語動詞として用いられる。

(50)それでもしくしく泣いたりされればまだ可愛げがありますけれど、時には私がいかに厳しく叱りつけても涙一滴こぼさないで、小憎らしいほど空惚けたり、例の鋭い上眼を使ってまるで狙いをつけるように一直線に私を見据える。

[対訳 痴人の愛]

(51)そんなに大きく呼吸されては、聴診器があてられない。

[凌蓉 2005:107]

一方、非対格自動詞の場合はどのようになっているのであろうか。凌蓉(2005)が指摘したように、非対格自動詞のうち、(30)-(33)のような自然現象を表す動詞以外、(52)のような存在を表すもの、(53)-(54)のような出現・消失を表すもの、(55)-(56)のような状態変化を表すもの、及び(57)-(58)のような態度・感情を表すものも第三者受動文の述語動詞として用いることができる。

(52)鮎太は意外だった。二人いられては手紙を渡す相手を知るのに困ると思った。

[志波 2015:137]

(53)犬の子にぼこぼこ生まれられて困った。

[凌蓉 2005:106]

(54)桜島にまた噴火され、地元の住民はとても困っている。

[高見 2011:56]

(55)大人しいのは結構だけれど、陰鬱になられても困るなア。

[対訳 痴人の愛]

(56)彼に急に変われて弱った。

[凌蓉 2005:109]

(57) こんなことぐらいで驚かれては困る。

[凌蓉 2005:109]

(58) いや、とにかく、俺は今まであの野郎に威張られたのが癪にさわって、しょうがねえんだ。このままじゃ済まされねえ。

[対訳 野火]

しかしながら、上述したとおり、(40)、(59)-(60)のような自然的な動きを表す非対格自動詞も第三者受動文の述語動詞として使用することができる。さらに、(61)のような位置変化を表す非対格自動詞、及び(62)のように状態の持続を表す非対格自動詞も第三者受動文になる。

(59) せっかく降り出したのに、こんなに早く止まれては、スキー場開きに間に合わない。

[町田 2005:54]

(60) 庭いっぱい、背高泡立草に咲かれてまた花粉症が再発してしまった。

[高見 2011:78]

(61) 二日続きの雨で、綺麗だった桜の花にもすっかり散られてしまい、お花見に行けなくなってしまった。

[高見 2011:56]

(62) こんな日照りに続かれては、田んぼが干上がっちゃうよ。

[高見 2011:60]

さらに、他動詞のうち、凌蓉(2005)が指摘したように、(13)、(36)-(37)のような生産の意味を表すもの、(63)-(64)のような作用・着装の意味を表すもの、(65)-(66)のような位置変化、つまり移動及び授受の意味を表すもの、(67)のような言語活動を表すもの、(68)-(69)のような態度・感情を表すもの、及び(70)のような思考動詞の一部は第三者受動文の述語動詞として用いることができる。

(63) アパートで猫を飼われると近所迷惑だ。

[凌蓉 2005:111]

(64) 妻に派手な帽子をかぶられて恥ずかしい。

[凌蓉 2005:112]

(65) 彼は係りの者に自宅へ書類を届けられて迷惑した。

[凌蓉 2005:113]

(66) 先に彼に博士号を与えられてしまった。

[凌蓉 2005:114]

(67) 太郎が次郎にくだらない夢を語られた。

[町田 2005:51]

(68) ここであきらめられたら閉口するよ。それにしても困ったな。

[対訳 あした来る人]

(69) 心配という表現で、好きだという気持ちを表現することができます。人から「大丈夫？」と心配されると、嬉しくなってしまうですね。

[<https://happylifestyle.com/1938> 2015/09/21 参照]

(70) あんなにうマーク作戦を工夫されては、我々はかなわない。

[凌蓉 2005:116]

しかしながら、先行研究で指摘された他動詞以外に、所有の意味を表す他動詞、経験の意味を表す他動詞、接触の意味を表す他動詞、及び知覚動詞は第三者受動文の述語動詞として使用することができる。例えば、以下のような例文である。

(71) 「それもそうだが、お金よりロリカにどうして家族が死んだか疑問を持たれる方がこわいのさ」「もう分からないでしょう。警察はあなたを呼ばないわ」

[小納言 ちょっとだけ甘い夢見させて]

(72) クラレンは彼が自分を見守っているのを目にして、返事を待たれていることに気がついた。「あなたを信じるわ」彼女は眠たげにそうつぶやいた。

[小納言 ルールは無用]

(73) 1点リードで迎えた9回表にはツーアウトから逆転の2ランを打たれました。

[小納言 ジャイアンツ愛]

(74) と心の中で念じて、その蛇を見つめていたが、いっかな蛇は、動こうとしなかった。

私はなぜだか、看護婦さんに、その蛇を見られたくなかった。

(71)は本来「疑問を持つ」という事態に直接的に関与しないはずの主語が、行為主体が当該動作を行ったことによって被害・迷惑を被ることを表す。(72)は「彼が返事を待っている」という事態に含まれないものの、主語人物の「彼女」は当該事態により被害・迷惑を受けることを表す。(73)のような接触動詞による第三者受動文はよくスポーツに関連する文体に現れる。(74)は知覚動詞「見る」によるものである。

これまで、どのような動詞が日本語の第三者受動文になるのかについて検討してきた。確かに寺村(1982)が指摘したように、第三者受動文を成立させる動詞の範囲は直接受動文を成立させるものよりずっと広い。しかし、以上の考察から明らかなように、自動詞が第三者受動文を作ることが可能であっても、あらゆる自動詞が第三者受動文になるというわけではなく、自動詞のなかにも第三者受動文にならない動詞がある。

続いて、中国語の第三者受動構文の述語動詞について考察を進めていく。

凌蓉(2005)は移動動作と生理現象の意味を表す非能格自動詞のみが第三者受動文の述語動詞として用いることができるとしている。例えば、(42)の「跑(逃げる)」、(46)の「逃(逃げる)」という移動動作を表す動詞、(45)、(49)の「哭(泣く)」という生理現象を表す動詞による受動文である。

また、凌蓉(2005)は一般的な動作の意味を表す非能格自動詞が第三者受動文の述語動詞として用いることができないとしているが、実は「吵(騒ぐ)」、「笑(笑う)」などのような動作動詞による第三者受動文が見当たる。

(75)我 被 孩子 吵 得 头 也 痛 了。

私 受動 子供 騒ぐ 助詞 頭 さえも 痛い 完了

(私は子供に騒がれて頭が痛くなった)

[中島訳 2012:15]

(76)觉慧 被 他们 笑 得 有点 发恼 了, 动气 地 答 了一句(後略)

人名 受動 彼ら 笑う 助詞 少し 腹を立てる 完了 怒る に 答える 完了 一言

(覚慧は笑われてちょっと怒った様子でこう答えた)

[対訳 家]

(76)の「笑」は「笑う」という意味の自動詞であり、「嘲笑する」という意味の他動詞ではない。(75)-(76)は現代中国語において、ごく自然な受動文である。

一方、非対格自動詞に関しては、(77)-(78)のような存在・位置を表す動詞、(79)のような自然現象を表す動詞、及び(80)-(81)のような位置変化、状態変化を表す動詞も第三者受動文の述語動詞として用いることができる。

(77)被 他 这么 一 坐, 我 什么都 看不见 了。

受動 彼 このように すると 座る 私 何も 見えない 完了

(彼に座られて何も見えなくなってしまった)

[例(6)再掲]

(78)起先 还 知道 哪 一辆 是 曾经 跌倒 的 车, 后来 被 别的 车  
初め まだ わかる どれ 一台 である 以前に 転ぶ の 車 その後 受動 他の 車  
一 混, 知不清 了。

すると 混じる わからない 完了

(はじめのうちは、ころんだ車とどれか見分けがしたが、そのうちにほかの車とまぎれてしまって、区別がつかなくなった)

[対訳 彷徨]

(79)今天 我 掏 钱 买 水 喝。刚 掏 出来 五块钱 被 风  
今日 私 取り出す 金 買う 水 飲む たところ 取り出す てくる 五元 金 受動 風  
给 刮 跑 了 找 不到 了。

助詞 吹く いなくなる 完了 探す できない 完了

(今日は水を買う時に5元を取り出したところ、風に吹かれてしまって、探し当てられなかった)

[百度知道 2014-08-29]

(80)话音 未 落, 车轮 猛 地 撞 在 一个 土坎 上, 我 被  
話し声 ない 落ちる 車輪 激しい に ぶつかる に 一つ 土手 上 私 受動  
剧烈 地 颠 了 一下, 忽地 摔 了 出去, 跌 在 地上。  
激しい に 揺れる 完了 ちょっと 突然 投げつける 完了 ていく 転ぶ に 地面  
(そう叫んだとたん、車椅子は地面のでっぴりに乗り上げて私は宙に放り出された)

[例(48)再掲]

(81) 父亲 听到 爷爷 被 饼 噎 得 哦哦 地 叫, 看到 那些 棱角  
 父 聞こえる 祖父 受動 餅 つかえる 助詞 擬声語 に 叫ぶ 見える それら 角  
 分明 的 饼 块 从 爷爷 的 喉咙 里 缓慢地 往 下 蠕动。  
 明らかな 餅 塊 から 祖父 の 喉 に ゆっくりと へ 下 蠕動する  
 (祖父は、餅を喉につかえさせてオウオウと叫んだ。角ばった餅のかたまりが、祖父の  
 喉をゆっくりと下へ動いていくのが見えた)

[対訳 红高粱]

(77)-(78)のように、存在・位置を表す自動詞「坐(座る)」、「混(混じる)」による受動文は、  
 つねに第三者受動文として容認されるというわけではない。文中の「(这么)一(すると)」が  
 なくなると、当該受動文は非文となる。また、(79)の「刮(吹く)」は自然現象を表す非対格  
 自動詞、(80)の「颠(揺れる)」は位置変化を表す非対格動詞、(71)の「噎(つかえる)」は状態  
 変化を表す非対格自動詞であるため、いずれも自動詞による第三者の受動文である。

上に述べてのように、凌蓉(2005)は作用、生産、移動、授受、言語活動、及び態度・感情を  
 表す動詞の少数が第三者受動文の述語動詞として用いることはできると述べている。確か  
 に、中国語において、こういった他動詞による第三者の受動文は成立する。以下、凌蓉(2005)  
 で挙げた例文を引用して示す。

(82) 零件 加工 时, 被 小王 漏 掉 了 一道 工序, 结果  
 部品 加工する 時 受動 王さん 抜かす てしまう 完了 一つ 工程 結局  
 加工 出来 的 零件 成 了 废品。  
 加工する 生じる の 部品 なる 完了 不合格品  
 (部品を加工するとき、王さんが加工プロセスを一つやり忘れたため、不良品となっ  
 てしまった)

[例(8)再掲]

(83) 被 竞争 对手 先 发明 出 了 新产品。  
 受動 競争 ライバル 先に 発明する 出る 完了 新製品  
 (ライバルに新製品を先に発明されてしまった)

[凌蓉訳 2005:113]

(84)通过 一番 努力, 被 他 考 进了 前 三名, 这家伙  
を通じて 一回 努力 受動 彼 試験を受ける 入る 完了 上位 三位 こいつ  
是 很 有 潜力 的。  
である とても ある 潜在力 のだ  
(彼は努力のもとで上位の三名に入った。潜在力のある人だ)

[例(47)再掲]

(85)被 他 抢先 送 给了 老师 一本书。  
受動 彼 先を争う 贈る に 完了 先生 一冊 本  
(彼に先に先生に本を差し上げられてしまった)

[凌蓉訳 2005:114]

(86)被 旁边 的 学生 抢先 说 出了 同样 的 意见。  
受動 側 の 学生 先を争う 言う 出る 完了 同様 の 意見  
(同じ意見を先に隣の学生に述べられてしまった)

[例(28)再掲]

(87)被 他 自作主张 地 把 仓库 的 看管 委托 给 保安 公司 了。  
受動 彼 独断する に 処置 倉庫 の 管理 委託する に 警備 会社 完了  
(彼に勝手に倉庫の管理を整備会社に頼まれた)

[例(29)再掲]

凌蓉(2005)によると、(82)の「漏(抜かす)」は作用を表す他動詞、(83)の「发明(発明する)」は生産を表す他動詞、また(84)の「考(試験を受ける)」は移動を表す他動詞、(85)の「送(贈る)」は授受を表す他動詞、さらに(86)の「说(言う)」は言語活動を表す他動詞、(87)の「委托(頼む)」は態度・感情を表す他動詞であり、いずれも他動詞による第三者受動文である。しかし、(84)の「考(試験を受ける)」は移動を表す他動詞とすることには異論がある。なぜなら、移動を表すのは「考(試験を受ける)」という他動詞ではなく、文中の結果補語としてある自動詞「进(入る)」であるためである。よって、移動を表す他動詞ではなく、経験を表す他動詞は第三者受動文の述語動詞として用いることができるということになる。

ほかに、対訳コーパスでは、(88)-(89)のように、位置変化を表す使役動詞「关(閉ま-らせる)」、及び状態変化を表す使役動詞「落实(実現-させる)」による第三者の受動文も見られる。



(88)他 追求 了 一阵子 的 密斯 刘 终于 理所当然 地  
彼 追い求める 完了 しばらく の ミス 姓 とうとう 理の当然である に  
拒绝 了 他, 密斯 刘 砰地 关 上 了 门, 他 被 关  
拒絶する 完了 彼 ミス 姓 ばたんと 占める つける 完了 ドア 彼 受動 閉める  
在 门 外 了。

に ドア 外 完了

(ひと頃追いかけたミス劉にも当然振られ、ドアをバタンとばかりシャットアウトだ)

[例(23)再掲]

(89)但 当 她 一九七二年 以 半 残废 的 身心 被  
だが に 彼女 一九七二年 もって 半分 体が不自由になる の 心身 受動  
“落实 政策” 到 一家 纽扣 厂 当 包装工 时, 她 在 心里 又  
実現する 政策 行く 一社 ボタン 工場 になる 包装工 時 彼女 に 心の中 再び  
暗暗 对 自己 说(後略)

ひそかに 自分 言う

(だが、一九七二年、心身ともに廃人のようになった彼女が、「正しい政策の実施」の形で、あるボクン工場に行かされ、包装工になったとき、ふたたび自分に言いきかせた)

[対訳 钟鼓楼]

以上、日中語の第三者受動構文の述語動詞について考察してきた。検討した結果、以下のようにまとめることができる。

表 7-3 における動詞の分類は凌蓉(2005)によるものであり、ただし「泣く」、「笑う」のような生理現象類動詞が外的な影響を必要としないため、非対格自動詞ではなく非能格自動詞に入れておいた。

表 7-2 日中語における第三者受動構文の述語動詞

動詞の種類	動詞の意味		日本語	中国語	
自動詞	非能格自動詞	一般的な動作	○	○	
		移動動作	○	○	
		他人と関係のある動作	○	×	
		生理現象	○	○	
	非対格自動詞	存在・位置	○	○	
		出現消失	○	×	
		自然現象	○	○	
		状態変化	○	○	
		態度・感情	○	×	
		自然的な動き	○	×	
		位置変化	○	○	
	状態の持続	○	×		
	他動詞	対象変化他動詞	作用	○	○
生産			○	○	
位置変化			移動	○	○
			授受	○	○
対象非変化他動詞		言語活動	○	○	
		態度・感情	○	○	
		接触	○	×	
		知覚	○	×	
影響性の弱い他動詞		思考	○	×	
		所有	○	×	
	経験	○	○		

表 7-1 と表 7-2 を比べると、日本語では先行研究で指摘した動詞以外に、自然的な動き、位置変化、及び状態の持続を意味する非対格自動詞や、接触、知覚を意味する対象非変化他動詞、所有、経験を意味する影響性の弱い他動詞も第三者受動文の述語動詞として用い

ることができること、及び中国語では先行研究で指摘した動詞以外に、一般的な動作を意味する非能格自動詞や、存在・位置、自然現象、状態変化、及び位置変化を意味する非対格自動詞、経験を意味する他動詞も第三者受動文の述語動詞として用いられることがわかった。

同じタイプの動詞による第三者受動文は日本語においても、中国語においても存在するといっても、それらの使い方の制限が異なる場合がある。例えば、表 7-3 からわかるように、移動を意味する非能格自動詞は日中語の第三者受動文の述語として用いられる。しかし、「行く」、「来る」のような自動詞は日本語では第三者受動文になるが、中国語では第三者受動文にならない。

また、「逃げる」のような自動詞は日本語においても中国語において第三者受動文になるが、その使用状況は異なる。すでに鄭曉青(1996:83)が指摘したように、中国語の「逃/跑(逃げる)」という動作は(46)に示すように、「抓(捕まえる)/追(追う)」といった動作を前提にしている。よって、「抓(捕まえる)/追(追う)」という動作が考えられない場合には、「逃/跑(逃げる)」という動作も存在せず、その受動形が現れないのが当然のことである。しかし、日本語においては、(38)のように、「捕まえる」または「追う」という動作を前提にしなくても、「本来ある場所にいるべき人がその場所にいない結果、受動者が間接的に悪い影響を受けた」場合にも動詞「逃げる」が第三者受動文の述語動詞として用いられる。

### 7.3.3 まとめ

以上、形式と意味の面から日中語の第三者受動構文の構文的特徴について詳しく考察してきた。このように、第三者受動構文の構文的特徴において、日中語の間には以下のような共通点と相違点が見られる。

まず、共通点に関しては、

- 1) 日中語の第三者受動構文はともに一定の外部構造で用いられることが多く、それらの容認性が前後の文脈によって左右されやすい。こういった外部構造は主に先行文脈での副詞的要素及び後続文脈での結果状態を意味する成分などが挙げられる。そして、結果状態のうち、ある対象の位置・状態変化を表す具体的な物理的結果の意味はしばしば明示されるが、ある対象の感情変化を表す抽象的な心理的結果の意味は

含意にとどめ、明示しない傾向がある。

- 2) 日中語の第三者受動構文はともに主語が有情物に限らず、無情物も可能である。そして、行為主体が第一人称代名詞によって表される例文もまれに見られる。
- 3) 日中語の第三者受動構文はともに、主語と行為主体は主に人間関係や、競争関係、利害衝突の関係にあるものである。このように、何らかの関係にある参与者同士であってはじめて、行為主体に関わる事態により主語が何らかの影響を受けることが可能となるのである。
- 4) 情意性に関しては、日中語の第三者受動構文はともに、ほとんどは被害の意味を表すが、中立及び利益の意味を表す例文もまれに見られる。
- 5) 第三者受動構文の成立条件に関しては、日中語はともに、行為主体に関連する自律的事態が原因となり、間接的に主語にある位置変化や状態変化が生じるという因果関係の存在だと考えられる。
- 6) 使用要因において、日中語の第三者受動構文はともに、受影者視点、及び状態描写・性質叙述といった語用論的要因が挙げられる。
- 7) 述語動詞に関しては、一般的な動作、移動動作、心理現象を表す非能格自動詞、存在・位置、自然現象、状態変化、位置変化を表す非対格自動詞、及び作用、生産、移動、授受、言語活動、態度・感情、経験を表す他動詞は日中語の第三者受動構文の述語動詞として用いることができる。

また、相違点に関しては、

- 1) 単文では日本語は結果の意味が明示されなくても成立するが、中国語は結果の意味が明示されなければならない。つまり単文での結果の意味の明示化における義務性において日中語は明らかに異なる。
- 2) 結果の性質において日中語は異なる傾向にある。日本語の第三者受動文はほとんど「被害・迷惑」といった心理的な状態変化を表すが、中国語の第三者受動文はほとんど具体的な物理的な位置・状態変化を表す。
- 3) 使用要因において、中国語の第三者受動構文は行為者称揚といった語用論的要因によって用いられることがあるが、日本語ではそのような使用要因が見当たらない。
- 4) 第三者受動構文に入る動詞の範囲は中国語より日本語のほうが広い。他人と関係の

ある動作を表す非能格自動詞、出現消失、態度・感情、自然的な動き及び状態の持続を表す非対格自動詞、接触、知覚、所有の意味を表す他動詞は、すべて日本語においては第三者受動文になるが、中国語においては第三者受動文にならない。

## 7.4 日中語の第三者受動構文の事態把握

本節では、有情物主語と無情物主語との二つに分けて、自動詞による第三者受動文(90)-(93)を例に、日中語における第三者受動構文の表す事態把握を認知モデルで表す。

上述したように、日中語の第三者受動構文では、行為主体に関連する自律的な事態と主語指示物に起こる位置・状態変化との間には因果関係が存在する。こういった因果関係は直接的な物理力に比べて、間接的な影響であるため、図では Cause 節は点線で表す。

この影響の直接性・間接性を区別するか否かにおいて、本論文と谷口(2005)とは根本的に異なる。すなわち、谷口(2005)は因果関係と物理的な作用を区別せず、参加者がモノから事態へと拡張することによって、「僕は子供に泣かれた」のような第三者受動文は「彼が殺された」のような直接受動文から直接的に拡張されたものであるという結論に至ったのである。

一方、本論文は受動構文の体系全体を視野に入れて、因果関係と物理的な作用を区別し、参照点関係の関与の解消に伴い、受影者視点の拡張によって第三者受動構文は、直接的に直接受動構文から拡張されたものではなく、持ち主受動構文を経て拡張されたものだと主張する。なぜなら、参加者がモノから事態へと拡張することは、第6章で述べたように直接受動構文から持ち主受動構文へと拡張する過程ですでに生じ、そして直接受動構文よりも持ち主受動構文のほうが第三者受動構文と近い関係にあると考えるためである。こういった持ち主受動構文から第三者受動構文へと拡張する過程については、7.6 で詳しく論じる。

### 7.4.1 有情物主語の第三者受動構文の事態把握

まず、日本語の第三者受動文(90)の表す事象構造を見てみよう。

(90)僕はこどもに泣かれた。

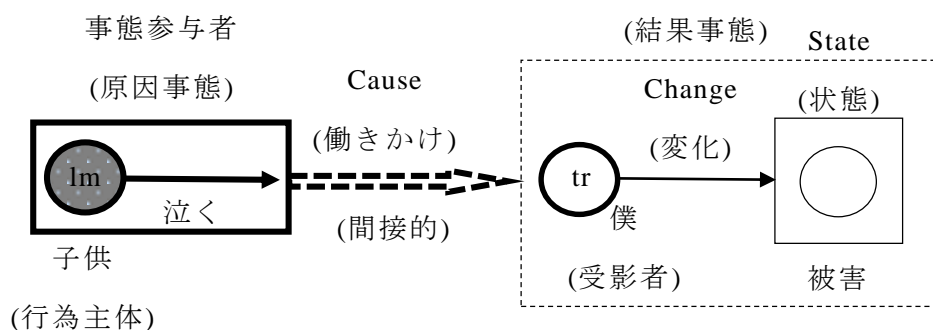


図 7-2 日本語における有情物主語の第三者受動構文の事象構造

(90)は「子供が泣く」という原因事態に含まれない「僕」は、当該事態により被害・迷惑を被ることを表す。主語指示物の当該事態による影響は間接的なものであるため、点線の二重矢印によって表す。また、被害の意味が明示されないため、図では Change-State 節は背景化される。

一方、中国語の第三者受動文(91)の表す事象構造は図 7-3 になる。

(91)夜里我被 婴儿 哭 得 睡 不着 觉。  
 夜に私受動 赤ん坊泣く 助詞 眠る できない 眠り  
 (私は夜中に赤ん坊に泣かれて眠れなかった)

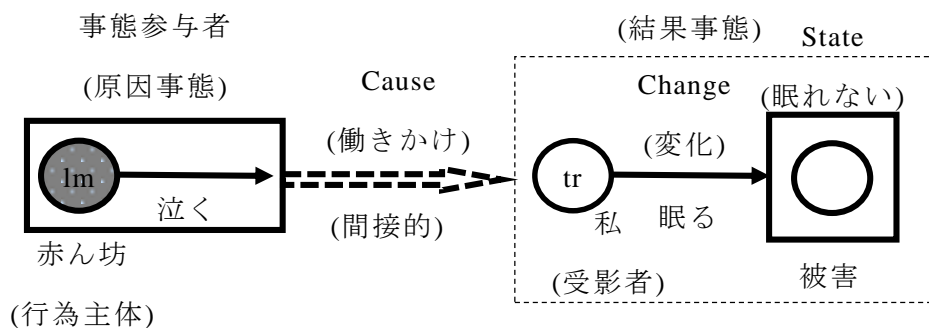


図 7-3 中国語における有情物主語の第三者受動構文の事象構造

図 7-3 は図 7-2 と同様、拡張的な使役事態を表すが、際立ちの面においては異なる。すなわち、(91)では被害の意味が明示されないため、図 7-2 では Change-State 節は背景化される。一方、(92)では被害の意味が「眠れなかった」によって明示されているため、図 7-3 では Change-State 節は前景になっている。

#### 7.4.2 無情物主語の第三者受動構文の事態把握

前述したように、日中語において無情物主語の第三者受動文は状態描写・性質叙述といった要因によって用いられ、中立的意味を表す。

(92) 旗が風に吹かれて、たなびいている。

[例(32)再掲]

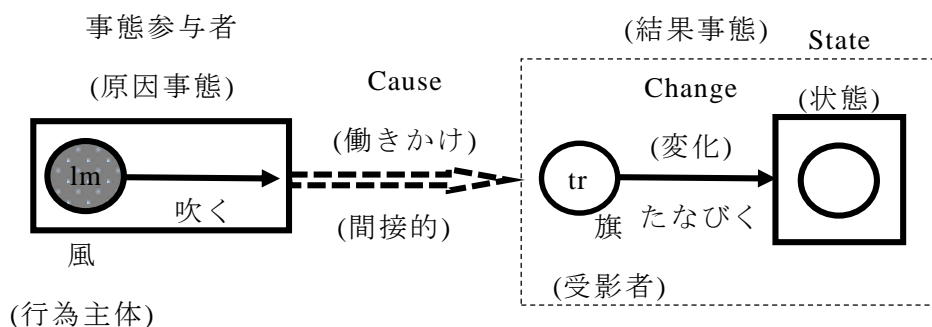


図 7-4 日本語における無情物主語の第三者受動構文の事象構造

(93) 但是 夏天 风 太 大， 广告 旗 很 容易 被 风 吹 得 也 也 夏 风 すぎ る 大 き い 广 告 旗 と て も や さ し い 受 動 風 吹 く 助 詞 卷 起 来 。

反 回 返 立 ち 上 が る

(夏は風が強いから、のぼり旗は巻き上がってしまうことが多い)

[例(44)再掲]

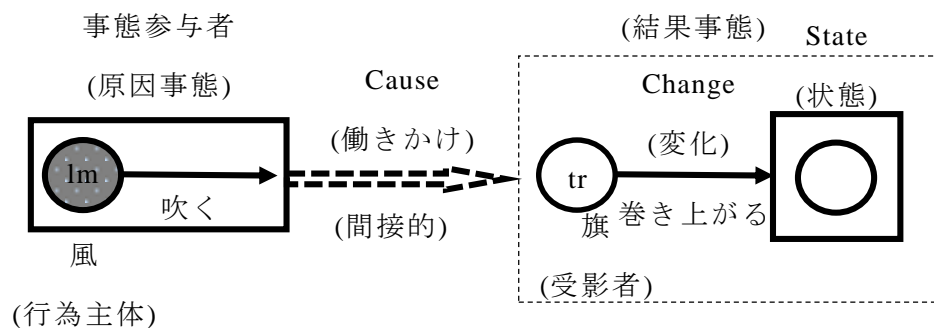


図 7-5 中国語における無情物主語の第三者受動構文の事象構造

図からわかるように、日中語における無情物主語の第三者受動文(92)-(93)は同じ事態把握を表す。(92)-(93)は「風が吹く」という原因事態により、主語指示物「旗」に「たなびく」、「巻き上がる」といった状態・位置変化が生じることを表す。原因事態のみならず、結果事態も明示されているため、図 7-4、図 7-5 では Cause-Change-State 節の全体は前景になっている。

### 7.4.3 まとめ

以上、有情物主語と無情物主語に分けて、日中語の第三者受動構文の事態把握を考察してきた。

日中語の第三者受動文はともにある事態の間接的な影響により、ある対象に位置・状態変化が起こるといった拡張的な使役事態を表すが、単文で被害の意味の明示化における日中語の相違によって、日本語は Cause-Change-State 節のうち、原因事態を表す Cause 節しか焦点化されないが、中国語は原因事態及び結果事態を表す Cause-Change-State 節の全体が焦点化される。

一方、無情物主語の状態・性質を述べるのに用いられる日中語の第三者受動文はともに現在の結果状態が明示されるため、Cause-Change-State 節の全体が焦点化される。

## 7.5 対訳データによる日中語の第三者受動構文の対応関係

前に述べたように、第三者受動構文に関する日中対照研究では、対訳資料によるものと



して、中島(2007,2012)、凌蓉(2005)が挙げられる。それらはいずれも事態把握と関連せず、単に日中語の第三者受動構文の成立条件や構文的特徴を考察しただけである。

そこで、本節は、日中対訳コーパスから収集した例文をデータとし、日本語の第三者受動文とその中国語訳、及び中国語の第三者受動文とその日本語訳はといったどのような対応関係を持っているのか、といった構文的特徴を分析した上で、受動事態に関する事態把握における日中語母語話者の相違点を解明する。

### 7.5.1 日本語の第三者受動文とその中国語訳

まず、日中対訳コーパスからとった日本語の第三者受動文とその中国語訳との対応関係を下表に挙げておく。

表 7-3 日本語の第三者受動文に対応する中国語訳(121)

中訳	受動文(18/14.9%)		非受動文(88/72.7%)				非対応 (15/12.4%)
	直接	間接	能動文(77/63.7%)		使役文	処置文	
		第三者	自動詞文	他動詞文			
数	3	15	41	36	7	4	15
%	2.5%	12.4%	33.9%	29.8%	5.8%	3.3%	12.4%

表 7-3 を見ると、日本語の第三者受動文に対応する中国語の第三者受動文の比率はわずか 12.4% であり、非対応と同じ比率で、能動文の比率と比べて、大幅に下回っていることがわかる。言い換えれば、日本語の第三者受動文のほとんどは中国語の能動文で表現するのである。

日本語の第三者受動文とその中国語訳との対応関係を考察する前に、まず一人称行為主体による第三者受動文について日中語の相違を指摘しておく。

前述したとおり、杉村(2014:27)は、一人称行為主体の受動文は中国語にあって日本語にないものとしているが、実は(94)-(95)のように日本語にも一人称行為主体の第三者受動文はまれに見られる。

(94)あたしに逃げられてそんなに困った？

[対訳 痴人の愛]

(95) そりゃあそうよ、あたしは意地が悪いから、来るなど云えば尚来るわよ。—それとも来られるのが恐ろしいの？

[対訳 痴人の愛]

(94)では一人称行為主体「あたし」が明示されているが、(95)では先行文脈で明示されたため、一人称行為主体「あたし」が明示されていない。(94)は「あたしが逃げる」ことにより、相手に「困る」といった心理的状态が変化することを表す。(95)は「あたしが来る」ことにより、相手に「恐ろしい」という心理的状态が変化することを表す。このように、第三者受動文の場合、高見(2011)でいう視点制約は、話者が主語指示物の受けた被害・迷惑の意味を強調するために解除される場合があるということがわかった。

行為主体が第一人称代名詞である第三者受動文は日本語においても、中国語においても存在するが、それらの意味合いは明らかに異なる。

(96) 我想 逃， 没 逃 脱， 被 他们 抓 回去， 又 打。

私 したい 逃げる ない 逃げる 離れる 受動 彼ら 捕まえる ていく また 殴る  
后来 到 了 河南 才 被 我 逃 出来 了。

その後 着く 完了 地名 やっと 受動 私 逃げる 出てくる 完了

(私は逃げたかったが、逃げきれず、また彼らに捕まえられて殴られた(直訳:彼らはまた私を殴った)。やがて、河南に着いてからやっと私が逃げた(直訳:彼らは私に逃げられた))

[例(46)再掲]

日本語の第三者受動文(94)は「あたしが逃げる」ということにより、主語である「あなた」は被害・迷惑を被ったことを表す。一方、中国語の第三者受動文(96)は「私が逃げる」ということにより、主語である「彼ら」は被害を受けたことを表すというより、むしろ「逃げる」という難しいことを実現した行為者「私」の努力を褒め称えることを表している。

このように、日中語において、第一人称代名詞の行為主体の第三者受動文は異なる要因がそれらの使用を動機付けている。すなわち、日本語では話者が第一人称代名詞の行為主

体に関わる出来事により主語指示物が被る被害・迷惑の意味を強調するといった受影者視点、中国語では話者が第一人称代名詞の行為主体への評価を行うといった行為者称揚によって、第一人称行為主体の第三者受動文が用いられると考える。

以下、日本語の第三者受動文とその中国語訳との対応関係の分析に入る。

### 1) 受動文

第2章で述べたように、受動とは影響を受ける参与者に焦点を置き、それをもっとも際立つ要素として選択し、その参与者に生じた変化過程または結果状態を捉える認知的営みのことである。よって、日本語の第三者受動文 121 例のうち、中国語では受動文と訳されるものは 18 例、14.9%を占めているということは、中国語訳文においても、概念化者である話者が影響を受ける参与者の視点から、当該使役事態を述べるという把握を行うものは日本語原文の約七分の一にすぎないということを表す。

#### 1-1) 直接受動文

(97)は「私はあなたに決め付けられる」のように、主語と行為主体とが対話する人間同士であり、「あなたが決め付ける」という事態から主語が迷惑・被害を受けるということを表している。

(97)「おまえオレに言いたいことがあるだろう」決めつけられてそんな気もする。

(“你是否有话要对我说?” 被你劈头一问，我倒觉得要说点什么)

[対訳 サラダ記念日]

中国語では、(97)の受動表現は「我被你劈头一问(私はあなたにいきなり聞かれる)」に対応しており、「问(聞く)」の表す動作の相手である「私」が主語に来るので、直接受動文となっている。(97)の中国語訳は受動表現が従属節に置かれ、結果の意味が後続する主節によって表されている。

#### 1-2) 第三者受動文

日本語の第三者受動文が中国語でも第三者受動文として対応するものは 15 例、12.4%ある。それらは主に移動を表す非能格自動詞(例:行く、来る、逃げる)、自然現象を表す非対格自動詞「吹く」によるものである。

7.3 で述べたように、中国語の第三者受動文は結果補語の明示化がもっとも大きな構文的特徴である。日中対訳コーパスから見ると、日本語の第三者受動文が中国語では第三者

受動文で表されるものは、その結果補語の表し方によって大きく二つに分けられる。

一つには、動詞や、前置詞句、語気またはアスペクト助詞などによって結果の意味が表されるものである。例えば、(98)-(99)のような例文である。

(98)今のは慥かに大ものに違なかったんですが、どうも教頭の御手際でさえ逃げられちゃ、今日は油断が出来ませんよ。

a.訳 1(刚才肯定是条大的。按主任您的本领，都被它跑掉了，今天可不能大意喽)

b.訳 2(这条鱼肯定是大个儿，凭教务主任这样的好手，竟也给逃啦，今天实在不能大意)

[対訳 坊ちゃん]

(99)そうして、すぐ失策ったと思いました。先を越されたなと思いました。

(于是我马上想到，糟了，给他抢在前头了)

[対訳 ころろ]

(98)は「教頭は魚に逃げられてしまった」のように、主語の「教頭」にとって、述語動詞の表す事態「魚が逃げた」が好ましくない、ということを表している。当該受動表現「逃げられてしまった」は中国語では、「被它跑掉了(魚に逃げられてしまった)」、「给逃啦(逃げられた)」に対応している。訳文の結果補語はそれぞれ動詞にアスペクト助詞がつく形式の「掉了(てしまった)」と助詞の「啦(語気助詞「了」と「啊 a」の合音で、「啦 la」と発音する)」によって表されており、これらの形式が削除されると、「被它跑」、「给逃」のように中国語の受動表現としては成立できなくなる。また、(99)の「先を越された」は中国語では「给他抢在前头了(直訳:彼に急がれて先にいられた)」と訳されており、訳文の結果補語が前置詞句である「在前头(先に)」によって表されている。その前置詞句が省略されると、「给他抢」は中国語の受動表現としては成立しない。

もう一つには、当該受動表現が従属節に置かれる場合、後続する主節によって結果の意味が表示されるものである。

(100)川沿いの道にはまだところどころに霧のきれはしが残りに、それが風に吹かれて山の斜面を彷徨していた。僕は道の途中で何度も立ちどまってうしろを振り向いたり、意味なくため息をついたりした。

(沿河边伸展的山路还断断续续剩有一些雾气，被风一吹，在山坡前彷徨不定。路上，我好几次停住脚回头张望，情不自禁地喟然叹息)

[対訳 ノルウェイの森]

(101)その人の前で、私に帰れなんて一すこし省慮の有るものなら、あんなことの言えた義理じゃ無かろう。ああいうことを言出されると、折角是方で思ったことも無に成ってしまう。

(当着他的面说要我回去，稍有考虑的人，是不会那么说话的。要是被你那么一说，我特意想到的事就全都完了)

[対訳 破戒]

中国語では、(100)の「霧が風に吹かれて山の斜面を彷徨していた」は「雾气被风一吹，在山坡前彷徨不定(直訳:霧が風に吹かれて山の斜面を彷徨していた)」、(101)の「お前にああいうことを言出されると、折角是方で思ったことも無に成ってしまう」は「被你那么一说，我特意想到的事就全都完了(直訳:お前にそのように言われると、折角是方で思ったことも無に成ってしまう)」に対応している。訳文では、受動表現「被风一吹(風に吹かれて)」、「被你那么一说(お前にそのように言われると)」が「一」という形式の従属節に置かれ、その結果の意味はそれに後続する主節、「在山坡前彷徨不定(山の斜面を彷徨していた)」「我特意想到的事就全都完了(折角是方で思ったことも無に成ってしまう)」によって表されている。結果の意味を表す節が削除されると、当該受動表現は従属節のみで、意味的に不完全な文となる。

## 2) 非受動文

日本語の第三者受動文が中国語では非受動文として対応するものは 88 例、72.7%にも達している。そのうち、自動詞文が 41 例、33.9%、他動詞文は 37 例、29.8%、使役文は 7 例、5.8%、処置文は 4 例、3.3%を占めている。つまり、日本語の第三者受動文はもっとも高い比率で中国語の自動詞能動文と対応している。

### 2-1)能動文

#### 2-1-1)自動詞文

日本語の第三者受動文が中国語の自動詞文で表されるものは主に、「行く/来る/逃げる」のような移動を意味する非能格自動詞、及び「吹く」のような自然現象を意味する非対格自動詞によるものである。訳文の自動詞文はほとんど(17)-(18)のように、原文の行為

主体を表す名詞が主語に来る、原文の述語動詞に対応する自動詞によるものである。

(102) ええ、大宮に行かれると、僕はもう話し相手がなくなります。

(对, 太宮一走, 我连个说话人都没有了)

[対訳 友情]

(103) 慄えるような冷たい風に吹かれて、寒威に抵抗する力が全身に満ち溢れると同時に、丑松はまた精神の内部の方でもすこし勇気を回復した。

(令人发抖的寒风不断地刮着, 丑松全身充满了抗寒的力量, 精神上也恢复了些勇气)

[対訳 破戒]

(102)の「大宮に行かれると」は中国語では「大宮一走(大宮が行くと)」、(103)の「冷たい風に吹かれて」は「寒风刮着(冷い風が吹いている)」と訳されている。訳文は、原文の行為主体である二格名詞句「大宮」、「冷たい風」を主語の位置に繰り上げ、原文の述語動詞「行く」、「吹く」に対応する自動詞を述語とする能動文である。

一方、(104)のように、日本語の第三者受動文における目的語名詞が主語に来る、原文の述語他動詞と自他対応の関係にある自動詞による中国語の能動文もまれに見られる。

(104) 尤もヒステリーを起されて、怪我でもさせられちゃ大変だけれど。

(不过歇斯底里发起来, 把我弄伤可就糟了)

[対訳 痴人の愛]

(104)の「ヒステリーを起される」は「歇斯底里发起来(ヒステリーが起こる)」に対応している。訳文は、原文の目的語名詞「ヒステリー」が訳文の主語に置かれ、その再帰他動詞「起こす」に対応する自動詞「发(起こる)」による能動文である。

### 2-1-2)他動詞文

日本語の第三者受動文が中国語において他動詞文として対応するものは37例、29.8%ある。そのうち、主に言語・態度、受け取り、作用を意味する他動詞によるものであるが、(105)-(106)のように非能格自動詞と非対格自動詞によるものもある。

(105) そうかしら。信じないわ。あなたはわりあい女から騒がれる方だと思うわ。

(是吗？我可不相信。我认为您这个人是会引起女人瞩目的)

[対訳 青春の蹉跎]

(106) ナオミは今しも、風呂の帰りに戸外の風に吹かれて来たので、湯上り姿の最も美しい瞬間にいました。

(因为洗过澡走回来时，受到室外风的吹拂，纳奥米的浴后风采此时此刻正处于最佳状态)

[対訳 痴人の愛]

中国語において、(105)の「引起女人注目(女の注目を引く)」は「女から騒がれる」に対応し、(106)の「受到室外风的吹拂(直訳:戸外の風からの吹きを受ける)」は「戸外の風に吹かれる」に対応する。(105)-(106)はともに訳文と原文の主語が同じであるが、述語あるいは述部が異なる。すなわち、(105)では原文が「騒がれる」という自動詞受動表現であるのに対し、訳文は「引起注目(注目を引く)」という他動詞能動表現である。(106)では原文が「吹かれる」という自動詞受動表現であるのに対し、訳文は「吹く」に対応する表現「吹拂」に語彙的受動の他動詞「受(受ける)」が付加するという形の「受到吹拂(直訳:吹きを受ける)」といった他動詞能動表現である。

また、他動詞による日本語の第三者受動文は原文と訳文の述語動詞の関係によって、三つのパターンに分けられる。

第一に、原文の述語動詞と訳文の述語動詞は意味的に対応する他動詞である。

(107)おやおや、とんだ御宗旨変えだ……そう、そのたびに主張を変えられたんじゃ、一体どちらを信じていいのやら、分らなくなってしまう。

(啊呀啊呀，怎么啦，您的宗旨改变了嘛……是呵，上回又改变了主意吧，真不清楚究竟该相信什么)

[対訳 砂の女]

(107)の「主張を変えられた」は中国語では「改变了主意(主張を変えた)」と、原文の述語動詞と同じ意味を表す他動詞「改变(変える)」による能動文に対応している。

第二に、訳文の述部は意味的に原文の述語動詞に対応する動詞、あるいは動詞性名詞に語彙的受動の他動詞が付加する形式である。

(108)障害者だからといって、いじめを受けたこともなければ、何かを制限されたという記憶もない。

(作为一名残疾人，我从来没有遭受过别人的欺负，也从来没有受到过这样或那样的限制)

[対訳 五体不満足]

(108)の「何かを制限された」は「受到这样或那样的限制(何かの制限を受けた)」と、原文の述語動詞に対応する名詞「制限」を語彙的受動の他動詞「受(受ける)」の目的語とする形で表されている。

第三に、訳文と原文の述語他動詞は「聞く-述べる」のような正反対の方向、あるいは反義関係にあるものもまれにある。

(109)今回のように、子供たちの好奇の的になり、あれこれと率直な感想を述べられるのは、何もまことなことではない。が、それに対して「いいんだよ」というようなことを言ったのは、彼が初めてだった。

(我的存在不知引起多少人好奇的联想，我也不止一次听到过率直的话语，但那些率直的话语令人难堪者多，像今天这个孩子说出这样的话，我还是第一次听到)

[対訳 五体不満足]

(109)の「率直な感想を述べられる」は中国語では「听到率直的话语(率直な感想を聞く)」に対応し、訳文の述語他動詞「听(聞く)」と原文の述語他動詞「述べる」は、一つの事態をどちら側から表現するかで異なる表裏一体の表現で、一方が述べれば、他方は聞く。

## 2-2)使役文

日中対訳コーパスでは、日本語の第三者受動文が中国語では「使/叫/让」という使役形式がつく使役文で表されるのは7例ある。そのうち、ほとんどは(110)のように他動詞によるものではあるが、(111)のように非能格自動詞と(112)のように非対格自動詞によるものも見られる。

(110)八千代は受付嬢に聞きとられぬように、低い声で言った。



(八千代压低嗓门，以不使传达处的少女听见)

a.不{ ○使/○被 }传达处的少女听见

[対訳 あした来る人]

(111)若し出来るなら彼等に感づかれないようにコッソリ証拠を掴んで来て、あとで彼等がどんなしらじらしい出まかせを云うか試してやりたい。

(可能的話，要悄悄地抓到证据，不让他们发觉，然后看他们怎样胡编乱造，当面撒谎)

a.不{ ○让/○被 }他们发觉

[対訳 痴人の愛]

(112)ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは薬だと思った。

(俺想：在茫茫的大海上，让海风吹吹，对身体是有益的)

a.{ ○让/○被 }海风吹吹

[対訳 坊ちゃん]

(110)-(112)はいずれも訳文の述語動詞が原文の述語動詞と同じ意味を表すものである。

(110)、(112)は訳文の述語動詞が原文のそれと同様に、それぞれ他動詞、自動詞であるが、(111)では感覚を意味する動詞は日本語では自動詞、中国語では他動詞となっている。

また、これらの訳文では、いずれも原文の主語名詞が主語に来る。つまり、こういった使役文の主語は使役者としても、影響を受ける受影者としても解釈できる。このことは、それぞれの使役形式「使/让」が「被」という受動専用の形式に置き換えられることからわかる。これは中国語の使役と受動の接近を表している。

一方、日本語の第三者受動文が中国語の使役文で表されるものには、上記の(110)-(112)と異なり、受動及び使役の意味をあわせ持つ形式による文が使役文としてしか解釈できないものもある。

(113)飯を炊くのが面倒なので、てんや物を取られては大変だから、私が御飯を炊いてやり、おかずを拵えてやることもある。

(她嫌做饭太麻烦，就要叫外面饭馆送来，这样花钱太多，我便有时也烧饭、做菜)

a.就要{ ○叫/○让/×被 }外面饭馆送来

[対訳 痴人の愛]

(114) そりゃあ、にらむだろう。ニカ月に一ぺんずつ金を取りに帰られたら。

(不高兴也是可能的吧，谁叫你两个月就回来要一次钱呢！)

a. 谁{ ○叫/○让/×被 }你两个月就回来要一次钱呢！

[対訳 あした来る人]

中国語では、(113)の「ナオミにてんや物を取られる」は「她叫外面饭馆送来(直訳:彼女は飲食店に店屋物を届けさせる)」、(114)の「ニカ月に一ぺんずつ金を取りに帰られたら」は「谁叫你两个月就回来要一次钱(直訳:誰かがお前にニカ月に一ぺんずつ金を取りに帰らせる)」に対応している。それらの「叫」が「让」という使役形式に置き換えられ、「被」という受動形式に置き換えられないため、(113)-(114)の訳文はともに使役文としか解釈できない、ということがわかる。

### 2-3)処置文

日本語の第三者受動文が中国語では「把」処置文によって表されるものは4例ある。それらは非能格自動詞、非対格自動詞及び他動詞のいずれによるものもあり、中国語訳は原文の行為主体を表す名詞が主語に来る処置文である。例えば、(115)のようなものである。

(115) このまま芳子をつれて帰られても、君は一言も恨むせきはないのですのに、三年待とう、君の真心の見えるまでは、芳子を他に嫁けるようなことはすまいと言う。  
(如果就这样把芳子带回去，你也无可抱怨。尽管如此，仍然等你三年，在看到你的真心之前，说好不把芳子嫁给他人)

[対訳 布団]

(115)の「お父さんに芳子をつれて帰られる」は中国語では「芳子父亲把芳子带回去(お父さんが芳子をつれて帰る)」に対応している。訳文では、原文の行為主体を表す二格名詞「お父さん」が主語の位置に来る「把」構文である。

以上、日中対訳コーパスから収集した日本語の第三者受動文とその中国語訳との対応関係を考察してきた。要点をまとめると、以下のようになる。

第一に、日本語の第三者受動文は、移動を意味する非能格自動詞、及び自然現象を表す

非対格自動詞によるものが中国語の第三者受動文と対応する場合はあるが、ただ 15 例、約八分の一に止まっている。そして、日本語原文で明示されない結果の意味は中国語訳文では明示化される。

第二に、日本語の第三者受動文 121 例のうち、中国語では能動文、使役文及び処置文といった非受動文となるのは計 88 例、72.7%にも達している。つまり、日本語の第三者受動文の七割強は中国語では、概念化者である話者が影響を受ける側ではなく、影響を与える側、または経験主体、変化主体の側から当該事態を捉えて言語化するのである。このように、日中語母語話者は行為連鎖の末尾と先頭とのいずれかを際立つ要素とする選択の傾向が異なる。日本語母語話者は行為連鎖の末尾にある参加者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にあるが、中国語母語話者は行為連鎖の先頭にある参加者をもっとも際立つ要素とする選択の傾向にある。

第三に、日本語の第三者受動文が中国語の使役文によって表されるものは少ないが、そのなか、原文の受影者を表す主語名詞が訳文の主語に来る使役文は、実は使役と受動との両方の意味としても解釈できる。このように、中国語において使役と受動との意味的接近のために、日本語の第三者受動文は受動文ではなく、使役文で表現されることができる。

### 7.5.2 中国語の第三者受動文とその日本語訳

日中対訳コーパスからとった中国語の第三者受動文とその日本語訳との対応関係を下表に示す。

表 7-4 中国語の第三者受動文に対応する日本語訳(17)

日訳	受動文(5/29.4%)		非受動文(3/17.7%)		非対応 (9/53%)
	直接	間接	能動文	使役文	
		第三者	自動詞文		
数	3	2	2	1	9
%	17.6%	11.8%	11.8%	5.9%	53%

表 7-4 を見ると、中国語の第三者受動文に対応する日本語の第三者受動文の比率は

11.8%に過ぎず、直接受動文ほど高くなく、非対応の比率と比べて、大幅に下回っているということがわかった。換言すれば、中国語の第三者受動文のほぼ半分は日本語では非対応となっているのである。

### 1) 受動文

中国語の第三者受動文 17 例のうち、受動文は 5 例、29.4%を占めている。受動文のうち、直接受動文が 3 例、17.6%、第三者受動文が 2 例、11.8%と極めて少ない。

中国語の第三者受動文 17 例のうち、日本語の受動文と訳されているものは 5 例、29.4%を占めているということは、日本語訳文においても、概念化者である話者が影響を受ける参加者の視点から、当該事態を述べるという把握を行うものは中国語原文の三割弱に止まっているということを示す。

#### 1-1) 直接受動文

原文の第三者受動文と訳文の直接受動文は、それらの述語動詞の意味関係によって、二つのタイプに分けられる。

一つには、訳文の他動詞は原文の自動詞の表す意味を含意し、両者は自他対応の関係にあるものである。例えば、(116)-(117)のような例文である。

(116) 有的新娘，被轿子颠得大声呕吐，脏物吐满锦衣绣鞋；轿夫们在新娘的呕吐声中，获得一种发泄的快乐。

(花嫁のなかには輿に揺られてゲーゲーとはき、晴れ着を汚物だらけにしてしまう者もいた。花嫁がはくのを聞きながら、人足たちはあるカタルシスの喜びを得る)

[対訳 紅高粱]

(117) (前略) 骡子驮着母子俩，在高粱挟持下的土路上奔驰，骡子跑得前仰后合，父亲和奶奶被颠得上蹿下跳。

(母子を乗せた騾馬は、左右から高粱が迫る田舎道をつっ走る。騾馬はぎくしゃくした足どりで駆け、父と祖母は跳びはねるように揺られた)

[対訳 紅高粱]

(116)、(117)の「被(受動標識)+颠(揺れる)」という第三者受動表現は、日本語では「揺られた」と直接受動文に対応している。原文の自動詞と訳文の他動詞は自他対応の関係を持つものである。つまり、中国語における非対格自動詞による第三者受動文は、その自動詞

に対応する他動詞が日本語に存在すれば、訳文では、その他動詞による直接受動文で表現されることはある。

もう一つには、訳文の他動詞は原文の述語自動詞と異なる意味を表すが、原文の結果補語である自動詞の表す意味を含意するものである。例えば、(118)のようなものである。

(118) 被吵醒的人都从窗口看看雨势大小，浑身上下挠一阵再躺下，骂第一个人多事，吵了大家的好觉。

(起こされた者は窓から雨脚を確かめ、全身くまなくボリボリ搔くと、最初に叫んだ奴が余計なことをしなければいい夢を見ていられたのにと文句を言う)

[対訳 插队的故事]

(118)の「被吵醒(騒がれて目が覚めた)」は日本語では「起こされた」と訳されており、訳文は原文の結果補語を表す自動詞「醒(覚めた/起きる)」の意味を含意する他動詞による直接受動表現である。つまり、中国語における非能格自動詞による第三者受動文は、その結果補語を表す非対格自動詞に対応する他動詞が日本語に存在すれば、訳文では、その他動詞による直接受動文で表現されることはある。

### 1-2) 第三者受動文

前述したように、中国語の第三者受動文には、生理現象を表す非能格自動詞によるものが存在する。こういった第三者受動文は日本語では、第三者の受動文に訳されているのが2例ある。

(119) 周氏 被 鸣凤 这一哭 引起了 自己的心事。她看见那个跪在她面前把头俯在她的膝上哀哀哭着的少女，也觉得凄然。

(周氏は鳴鳳に泣かれて自分も悲しくなり、自分の前にひざまずいて、膝に泣きふしている少女を眺めて心が傷んだ)

[対訳 家]

(120) 觉慧 被 他们 笑得 有点发恼了，动气地答了一句：“无论如何，‘黑狗’总比李医生好，李医生不过是一位绅士。”

(觉慧は笑われてちょっと怒った様子でこう答えた。「なんていったってブラッグ・ドッグはリヴズイ医師よりはいいよ。リヴズイ医師は一個の紳士にすぎないからな」)

(119)の「周氏被鸣凤这一哭」は「周氏が鳴鳳に泣かれて」、(120)の「觉慧被他们笑」は「觉慧が笑われて」と日本語では、第三者の受動文に対応している。このような第三者受動文は、主語と行為主体は近くにいる、何らかの人間関係を持つ存在であり、主語がそれ自体に関わる行為主体のある出来事により、受けた影響・被害は、「引起了自己的心事(自分も悲しくなる)」、「有点发恼了(ちょっと怒った)」のように受動節に後続する表現によって明示されている。

このように、行為主体の生理的状态変化により、それに関連する人物が被害を受ける、という意味は、中国語において第三者受動文で表現することができる。このような第三者受動文は日本語の第三者受動文に対応することはある。

## 2) 非受動文

中国語の第三者受動文が日本語では非受動文として対応するものは3例、17.7%を占めている。そのうち、自動詞文が2例、11.8%、使役文は1例、5.9%を占めている。

### 2-1)自動詞能動文

日中対訳コーパスでは、中国語の第三者受動文が日本語では、自動詞能動文と対応するのは以下のようなものである。

(121)我一页页地翻看着书里的插图，心中立刻被喜悦涨满了。多好啊，我又有书读了！

(順にページをめくって挿し絵を眺めると、うれしくてワクワクしてきた。また本が読める!)

[対訳 轮椅上的梦]

(122)他只点点头，拉了车就走；大家就惘惘然目送他。起先还知道那一辆是曾经跌倒的车，后来被别的车一混，知不清了。

(車夫はちょっとうなずいただけで、そのまま車を引いて行ってしまった。人々はそのあとをポカンと見送っていた。はじめのうちは、ころんだ車とれか見分けがつかないが、そのうちにほかの車とまぎれてしまって、区別がつかなくなった)

[対訳 彷徨]

(121)の「被喜悦涨满了(直訳:喜びに上がられて、心がいっぱいになってきた)」は「うれ

しくてワクワクしてきた」、(122)の「被别的车一混(直訳:ほかの車にまぎれられてしまう)」は「ほかの車とまぎれてしまつて」と対応している。(121)-(122)はともに非対格自動詞による第三者受動文であり、それらの日本語訳はともに自動詞能動文である。しかしながら、(122)が原文の述語自動詞に対応する日本語の自動詞によるものである一方、(121)は原文の述語自動詞に対応する自動詞が日本語には存在するにもかかわらず、原文の自動詞と異なる意味を持つ感情・心理を表す非対格自動詞による能動文である。

このように、原文では非対格自動詞による第三者受動文は日本語にそれに対応する自動詞が存在すれば、その自動詞による能動文と対応する場合もあれば、原文の自動詞と異なる意味を持つ自動詞による能動文と対応する場合もある。いずれも原文の第三者受動文と異なる視点から当該事態を表しているが、(122)のように当該事態から受けた影響が節で表示されることはある。要するに、非対格自動詞による中国語の第三者受動文が日本語では第三者受動文ではなく、能動文で表されるのは一般的である。

## 2-2)使役文

中国語の第三者受動文が日本語では使役文として対応するのは1例しかなく、極めて少ない。

(123)父亲听到爷爷被饼噎得哦哦地叫，看到那些棱角分明的饼块从爷爷的喉咙里缓慢地往下蠕动。父亲说：(後略)

(祖父は、餅を喉につかえさせてオウオウと叫んだ。角ばった餅のかたまりが、祖父の喉をゆっくりと下へ動いていくのが見えた。父が言った)

[対訳 紅高粱]

(123)の「被(受動標識)+餅(餅)+噎(つかえる)(直訳:餅につかえられる)」は日本語では「つかえさせる」と対応している。中国語の第三者受動文は、餅が喉につかえるということにより、祖父は被害を受けるという意味を表す。一方、日本語の使役文は、餅が喉につかえるという好ましくない事態を引き起こしたのが、祖父のせいであり、その責任を主語の祖父が感じているという意味合いを持っている。つまり、主語あるいは視点が同じであっても、中国語原文が主語を被害の受ける受影者として当該事態を述べるのに対し、日本語訳文はそれを当該事態の発生を食い止められなかった責任者として当該事態を述べる。

以上、日中対訳コーパスから収集した中国語の第三者受動文とその日本語訳との対応関

係を考察してきた。要点をまとめると、次のようになる。

第一に、中国語の第三者受動文は、生理現象を表す非能格自動詞(例:哭(泣く)、笑(笑う))によるものが日本語の第三者受動文と対応する場合はあるが、ただ2例、ほぼ一割に止まっている。

第二に、中国語の第三者受動文17例のうち、日本語では非対応となるのは計9例、53%にも達している。つまり、中国語の第三者受動文の半分以上は日本語では動詞述語文によって訳されていない。

第三に、中国語において非対格自動詞による第三者受動文は、日本語ではそれに対応する他動詞による直接受動文と対応するのがもっとも一般的であり、非能格自動詞による第三者受動文はその結果補語を表す非対格自動詞に対応する他動詞による直接受動文と対応することはある。つまり、原文と訳文はともに影響を受ける参加者を主語として当該事態を述べるが、中国語原文では主語の受ける影響が間接的であるのに対し、日本語訳文では主語の受ける影響は直接的である。

### 7.5.3 まとめ

以上、日中対訳コーパスより収集した日中語の第三者受動文とそれらの中国語・日本語訳との対応関係を考察してきた。要点をまとめると、以下ようになる。

まず、日本語と中国語の共通点は主として以下の二点にある。

- 1) 心理状態、移動を意味する非能格自動詞(例:泣く-哭、逃げる-逃)、及び自然現象を表す非対格自動詞「吹く-吹」による日中語の第三者受動文が対応することはあるが、それぞれの例文総数に対する比率が低く、ほぼ一割に止まっている。
- 2) 述語動詞の表す事態により、主語の受けた被害・迷惑の意味が明示化される第三者受動文は日本語においても中国語においても存在する。

また、日本語と中国語の相違点については、次の三点が言える。

- 1) 日本語の第三者受動文がもっとも高い比率(七割強)で中国語の能動文と対応するのに対し、中国語の第三者受動文は日本語では、もっとも高い比率(五割強)で非対応



となる。換言すれば、同じ事態を日本語母語話者はその事態に直接的に関わらない第三者を受影者として影響を受ける側から、中国語母語話者はその事態に関与する参加者を行為主体として影響を与える側から捉える傾向が強い。一方、中国語母語話者はその事態に直接的に関与しない第三者を受影者として影響を受ける側から捉える場合は、日本語母語話者はそのような捉え方によって把握を行わない。

- 2) 日本語の第三者受動文が中国語の使役文によって表されるものには、その使役形式が受動専用の形式「被」に置き換えることができるため、当該表現が使役文としても受動文としても解釈できるものが見られる。このように、同じ形式による使役と受動との意味的接近あるいは連続の現象は日本語には見当たらない。
- 3) 日本語では、概念化者である話者は主語指示物の受けた被害・迷惑を述べるため、第一人称行為主体の第三者受動文が用いられる。しかしながら、日中語の第一人称行為主体の第三者受動文は使用要因が異なる。日本語は受影者視点、中国語は行為者称揚によって用いられる。

## 7.6 おわりに

本章では、日中語の持ち主受動構文について、それらの構文的特徴及び事態把握における共通点と相違点を考察した。その結果は、次のようにまとめられる。

- 1) 形式的特徴に関しては、
  - (1) 日中語の第三者受動構文はともに一定の外部構造で用いられることが多く、それらの容認性が前後の文脈によって左右されやすい。こういった外部構造は主に先行文脈での副詞的要素及び後続文脈での結果状態を意味する成分などが挙げられる。そして、結果状態のうち、主語指示物の位置・状態変化を表す具体的な物理的結果の意味はしばしば明示されるが、主語指示物の感情変化を表す抽象的な心理的結果の意味は含意にとどめ、明示しない傾向がある。
  - (2) 単文では、結果の意味は日本語において明示されないが、中国語において明示されなければならない。つまり単文での結果の意味の明示化における義務性において日中語は明らかに異なる。
- 2) 意味的特徴においては、

- (1) 第三者受動構文の成立条件に関しては、日中語はともに、行為主体に関連する自律的事態が原因となり、主語指示物にある位置変化や状態変化が生じるといふ因果関係の存在だと考える。
  - (2) 日中語の第三者受動構文はともに主語が有情物に限らず、無情物も可能である。これに関連して、情意性においては、日中語の第三者受動構文はほとんど被害の意味を表すが、中立及び利益の意味を表す例文もまれに見られる。
  - (3) 日中語の第三者受動構文では、行為主体が第一人称代名詞によって表される例文もまれに見られる。しかしながら、それぞれの使用要因が異なる。日本語では話者が主語指示物の受けた被害・迷惑の意味を述べるため、第一人称行為主体の第三者受動文が用いられるが、中国語では話者が難しいことを実現した行為主体を称揚するため、第一人称行為主体の第三者受動文が用いられる。
  - (4) 日中語の第三者受動構文はともに、主語指示物と行為主体は主に人間関係や、競争関係、利害衝突の関係にあるものである。このように、何らかの関係にある参与者同士であってはじめて、行為主体に関わる事態により主語指示物が何らかの影響を受けることが可能となるのである。
  - (5) 述語動詞に関しては、一般的な動作、移動動作、心理現象を表す非能格自動詞、存在・位置、自然現象、状態変化、位置変化を表す非対格自動詞、及び作用、生産、移動、授受、言語活動、態度・感情、経験を表す他動詞は日中語の第三者受動構文の述語動詞として用いることができる。しかしながら、他人と関係のある動作を表す非能格自動詞、出現消失、態度・感情、自然的な動き及び状態の持続を表す非対格自動詞、接触、知覚、所有の意味を表す他動詞は、日本語においては第三者受動文になるが、中国語においては第三者受動文にならない。
  - (6) 結果の性質において日中語は異なる傾向にある。日本語の第三者受動文はほとんど「被害・迷惑」といった心理的な状態変化を表すが、中国語の第三者受動文はほとんど具体的な物理的な位置・状態変化を表す。
- 3) 使用要因において、有情物主語の第三者受動構文は日本語では受影者視点及び状態描写との二つが挙げられる、中国語では受影者視点と行為者称揚との二つが挙げられる。また、無情物主語の第三者受動構文は日本語では状態描写が挙げられるが、中国語では性質叙述及び受影者視点との二つが挙げられる。

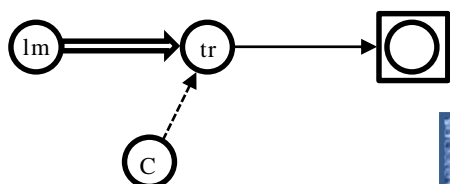
4) 事態把握に関しては、

- (1) 日中語の第三者受動構文はともにある事態の間接的な影響により、ある対象に位置・状態変化が起こるといった拡張的な使役事態を表す。
- (2) 有情物主語の受けた被害・迷惑の意味を述べるのに用いられる第三者受動構文は単文で結果の意味の明示化における日中語の相違によって、日本語は Cause-Change-State 節のうち、原因事態を表す Cause 節しか焦点化されないが、中国語は原因事態及び結果事態を表す Cause-Change-State 節の全体が焦点化される。
- (3) 無情物主語の状態・性質を述べるのに用いられる日中語の第三者受動構文はともに現在の結果状態が明示されるため、Cause-Change-State 節の全体が焦点化される。

- 5) 日中対訳コーパスから収集した日中語の第三者受動文とそれらの中国語・日本語訳との対応関係を考察することによって、心理状態、移動を意味する非能格自動詞(例:泣く-哭、逃げる-逃)、及び自然現象を表す非対格自動詞「吹く-吹」による日中語の第三者受動文が対応することはあるが、それぞれの例文総数に対する比率が低く、ほぼ一割に止まっている、ということがわかった。また、日本語の第三者受動文がもっとも高い比率(表 7-3 を参照)で中国語の能動文と対応するのに対し、中国語の第三者受動文は日本語では、もっとも高い比率(表 7-4 を参照)で非対応となる。換言すれば、同じ事態を日本語母語話者はその事態に直接的に関与しない第三者を受影者として影響を受ける側から、中国語母語話者はその事態に関与する参与者を行為主体として影響を与える側から捉える傾向が強い。一方、中国語母語話者はその事態に直接的に関与しない第三者を受影者として影響を受ける側から捉える場合は、日本語母語話者はそのような捉え方によって把握を行わない。

また、以上の考察により、第三者受動構文は直接受動構文ではなく、持ち主受動構文からの拡張であると見なすことができ、その拡張は事態把握のレベルで動機付けられている、ということが明らかになった。日中語において、持ち主受動構文から第三者受動構文へと拡張する過程は以下のように図式できると考える。

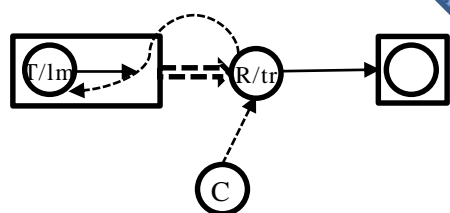
1. 直接受動:(1)彼が人に殺された



③参照点関係の関与によって、  
 a. 受動者から受影者へ視点の転換;  
 b. モノから事態へ影響者の拡張に伴い、直接から間接へ影響性の性質の変化

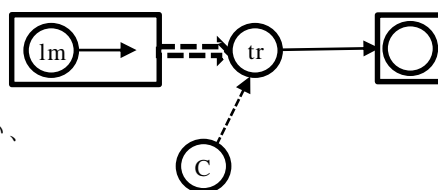
①モノからコトへ参与者の拡張

2. 主格の属格類の持ち主受動



②受影者視点の拡張に伴い、参照点関係の関与の解消

3. 第三者受動



(2)彼が息子に泣かれて眠れなかった

(3)彼が子供に騒がれて勉強できなかった

C = 概念化者

R = 参照点

T = ターゲット

-----> 心的走査

————> 変化

tr = トラジェクター

lm = ランドマーク

————> 直接的影響

-----> 間接的影響

————> 拡張経路(本論文)

————> 拡張経路(先行研究)

図 7-6 日中語の第三者受動構文の拡張過程

図 7.6 に示すように、第三者受動構文は影響者がモノから事態へと拡張することによって、直接的に直接受動構文から拡張する(①)といった谷口(2005)の考えには無理があるということがわかる。なぜなら、主語指示物の受けた影響は直接受動構文と第三者受動構文

とでは性質が異なるためである。こういった影響性の性質の相違については、柴谷(1978)は以下のように述べている(破線は筆者による)。

日本語の受動文のもう一つの分類は、受動文の主語の影響のされ方を基準とするもので、これによると受動文は「直接受動文」と「間接受動文」に分けられる。直接受動文は受動文の主語が直接的に他人の動作・行為の影響を受けたり、対象となっているという意味を表わすものである。(中略)一方、間接受動文は、受動文の主語が他人の動作や事物のなりゆきの影響を間接的に受けたり、感じたりするという意味を表わすもので、このタイプの受動文は対応する能動文を持っていない。

柴谷(1978:135)

つまり、厳密に言うと、主語指示物は直接受動構文では直接的に作用を受けるもの、つまり「受動者」であるが、第三者受動構文では間接的に影響を受けるもの、つまり「受影者」である。

よって、本論文では第三者受動構文は直接受動構文ではなく、持ち主受動構文から直接的に拡張すると主張する。すでに第6章で述べたように、参照点関係の関与によって、③a 受動者から受影者へ視点の転換、b モノから事態へ影響者の拡張に伴い、直接から間接へ影響性の性質の変化といった過程を経て、直接受動構文(例:彼が人に殺された)から主格の属格類の持ち主受動構文(例:彼が息子に泣かれて眠れなかった)へと拡張することができると考える。主格の属格類の持ち主受動構文から、受影者視点がさらに拡張することによって、参照点関係の関与が解消しても「私は子供に騒がれて勉強できなかった」のような第三者受動表現ができるようになったと考えられる。つまり、受影者視点の拡張に伴い、参照点関係の関与の解消(②)によって、主格の属格類の持ち主受動構文から第三者受動構文へと拡張するのである。第三者受動構文と持ち主受動構文は直接受動構文に比べて、ともにある事態により主語指示物が間接的な影響を受けることを表すが、両者は主語指示物と行為主体との間に参照点関係が関与するか否か、あるいは両者が広義的な所有関係にあるかどうか、という点で異なる。すなわち、主語指示物と行為主体が広義的な所有関係にあるのは持ち主受動構文であるが、そうではないものは第三者受動構文である。

最後に、本章の分析により、序論で挙げた第三者受動文に関する日本人・中国人学習者の誤用や中国語で編纂される日本語の教科書に見られる不自然な受動表現(124)-(126)に対

して、以下のように説明することができる。

(124){ ×因为被孩子来/○因为孩子来了 }，简直没法看书了。

(子供に來られて、勉強できなくなった)

[車純蓮 2012:16]<日本人の中国語学習者の誤用>

(125)台所には{ ×腐られた/○腐った }野菜しか残っていない。

[宋春雨 2014:22]<中国人の日本語学習者の誤用>

(126)リー：昨日、頭が痛くていで横になっていたんですが、外で道路工事を{ ×始めて  
/○始められて }、寝られませんでした。

山田：あ、そうでしたか。

[池上他 2009:92]<中国で編纂される日本語の教科書に見られる不自然な受動表現>

(124)、(126)はまさに日中語母語話者の第三者受動事態に対する事態把握の相違、つまり行為連鎖の末尾-行為連鎖の先頭といった視点選択の相違の現れである。一方、(125)の誤用は日本語の第三者受動構文の使用要因に関わると考える。

前述したように、移動を表す非能格自動詞は日本語においても、中国語においても第三者受動文の述語動詞として用いることができるが、(124)のように「来る」は日本語では第三者受動文になるが、中国語では第三者受動文にならない。「子供が来た」という原因事態により、主語指示物が「勉強できなくなった」ということを表すには、中国語では因果関係が「因为(から・ため)」という接続詞によって表われ、それに「孩子来了(子供が来た)」という自動詞能動表現が後続し、当該従属節に「简直没法看书了(勉強できなくなった)」という結果事態を表す主節が接続する形式になる。また、(126)ではコンテキストからわかるように、話者は頭痛がするので横になって休みたかったのに、外の道路工事の騒音で休むことができなかつたから不満だという情感を述べたかった。「道路工事を始められて、寝られませんでした」という第三者受動表現は道路工事という事態が出来し、それが主語指示物のマイナスの変化、すなわち不眠を誘発した、という話者にとって好ましくない事態であったことを表現することができるが、他動詞能動表現はそのような意味を表すことができない(池上他 2009:92)。この場合、中国語母語話者は日本語母語話者と異なり、第三者受動文ではなく、他動詞能動文で表すのが一般的である。

このような好まれる言い回しの相違は日中語母語話者の同じ事態に対する把握の相違を

表す。すなわち、自身の力が及ばない何らかの事態によって、話者に不愉快な気持ちを引き起こしたことを表す場合、日本語母語話者は主体的に二つの事態を関連付けて、間接的に影響を受ける受影者の視点から当該事態を捉える傾向がある。一方、中国語母語話者はわが事でも傍観者のように、客観的に因果関係にある二つの事態を自然発生の順序に並んで、行為主体の視点から当該事態を捉える傾向がある。

また、(125)は中国人の日本語学習者の誤用である。「腐る」といった状態変化を表す非対格自動詞は前述したとおり、日本語の第三者受動文の述語動詞として用いることができるが、(125)の状況では自動詞の受動表現よりも自動詞の能動表現のほうが適切であると考えられる。なぜなら、(125)はただ「野菜」の状態を客観的に述べるだけで、とりわけ「野菜が腐る」ことにより、ある対象が被害などの影響を受けたことを表さないためである。

「野菜」という名詞の連体節として「腐られた」よりも「腐った」のほうがふさわしいのである。要するに、日本語母語話者は自身の力が及ばない何らかの事態によって、ある対象に位置・状態変化が生じること、つまり因果関係にある二つの事態を、間接的に影響を受ける対象、いわゆる「受影者」の視点から述べる、といった把握を行うが、(125)のように因果関係が存在しない一つの事態を表す場合は、そのような把握を行わないのである。

## 第8章 結論

本論文は従来の日中語受動構文に関する対照研究とは異なり、認知言語学の立場から、受動構文を能動構文からの変形操作により意味を変えずに派生された構文ではなく、「有標の状態」という受動構文独自の意味機能を持つものと規定し、受動及び受動文をそれぞれ再定義することによって、日中語の受動構文の体系を捉え直し、本論文でいう「特殊受動構文」の位置づけ及び従来分類との対応関係を明らかにすることができた。

その上で、事例に基づき、日中語の特殊受動構文の構文的特徴を対照観察することにより、それぞれの事態把握の相違を明らかにした。また、日中対訳コーパスより取ったデータに基づき、日中語の特殊受動構文の対応関係を考察し、同一事態に対する異なる<好まれる言い回し>に反映する日中語母語話者の事態把握の傾向を解明した。さらに、以上の分析によって日中語において、事態把握のレベルで直接受動構文から特殊受動構文へと拡張する動機付け及び過程を明らかにし、日本人・中国人の中国語・日本語学習者の受動構文に関する誤用に対する説明を試みた。

以上の分析によって、主に自動詞から構成される中国語の新型受動構文は本質的に日本語の第三者受動構文と異なり、かえって日本語の使役受動構文及び持ち主受動構文と対応する受動構文であることがわかった。以下に、本論文の内容を構文的特徴、事態把握及び日中語母語話者の<好まれる言い回し>に反映する把握の傾向という順にまとめた後、日中対照の結果及び今後の課題について述べる。

### 8.1 本論文のまとめ

まず、日中語の特殊受動構文の構文的特徴における相違は主に以下の二点にある。

- 1) 使役受動構文では、日本語は使役行為及びその結果の両方が明示されなければならないが、中国語における通常の短縮形式型の強制類は使役標識が言語化されず、使役の結果のみが明示されれば成り立つ。また、中国語の新型受動構文は使役行為を表す元の述語動詞が明示されず、使役の結果を表す成分、またはその一部のみ明示すれば成立する。さらに、主体-活動関係にある持ち主受動構文では、日本語は述語



動詞と活動全体を明示しなければならないが、中国語の新型受動構文は元の述語動詞が言語化されず、活動の一部のみ明示すれば成り立つ。このことは中国語の文法では、文脈によって文法形式や言語形式が表出しなくてもよい、という「意合法」を主とする特徴を表している。

- 2) 特殊受動構文の三つのタイプ、つまり使役受動構文、持ち主受動構文及び第三者受動構文のいずれにおいても、日本語に比べて、中国語は単文では結果の意味が明示されなければ不自然、または非文になるのが特徴である。これは、日本語の受動構文は行為焦点であるのに対し、中国語の受動構文は結果焦点である、ということを示している。

次に、以上のような構文的特徴における日中語の相違は、日中語母語話者の受動事態に対する把握の仕方の相違、つまり使役事態のうち、「行為」(Cause 節)と「結果」(Change-State 節)との際立ちの選択の差異を示している。

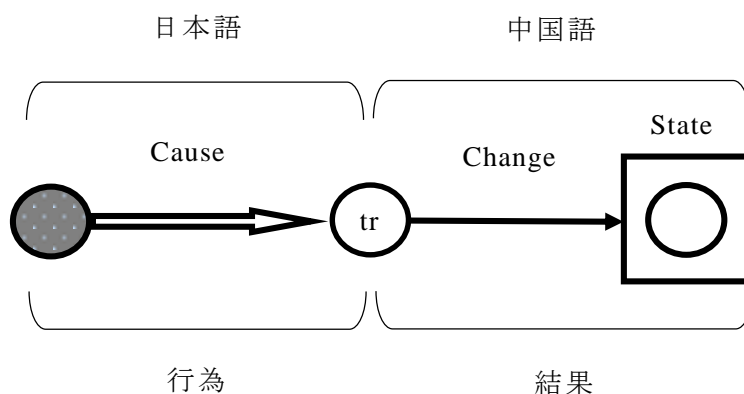


図 8-1 日中語母語話者の受動事態に対する把握の仕方の相違

すなわち、図 8-1 では、受動構文の表す Cause-Change-State という三つの節からなる使役事態のうち、日本語母語話者は Cause 節で表す原因事態に焦点が当たるのに対し、中国語母語話者は Change-State 節で表す結果事態に焦点が当たる。

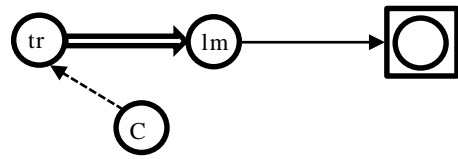
また、事態把握のレベルで、日中語はともに典型的な直接受動構文から特殊受動構文へと拡張する動機付けはそれぞれ以下の三つと言える。

- 1) 使役受動構文は直接使役から間接使役へと拡張することによって、直接受動構文から直接的に拡張する。
- 2) 持ち主受動構文は参照点関係が関与することによって、直接受動構文から直接的に拡張する。
- 3) 第三者受動構文は参照点関係の関与の解消に伴い、受影者視点がさらに拡張することによって、持ち主受動構文から直接的に拡張する。

日中語において、直接受動構文から特殊受動構文へと拡張する動機付けは同じであるが、拡張する過程においては共通点もあれば、相違点もある。直接受動構文から特殊受動構文へと拡張する過程を図式すると、以下のようになる。

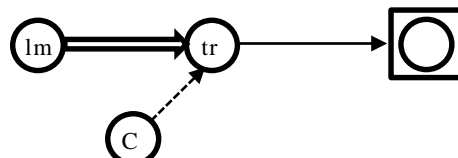
図 8-2、図 8-3 では、日中語は薄塗りの矢印で表す経路においては同じであるが、厚塗りの矢印で表す経路においては異なる。

1.能動:(1)彼女が彼を殺した



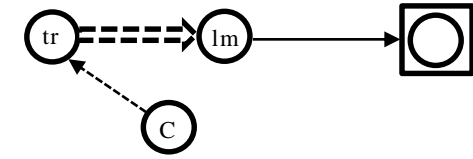
①動作主から受動者へ視点の転換

2.直接受動:(2)彼が彼女に殺された



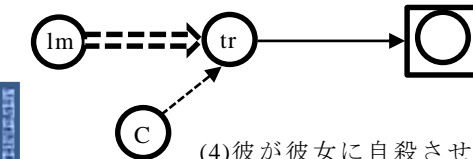
③直接から間接へ影響の拡張

3.使役能動:(3)彼女が彼を自殺させた



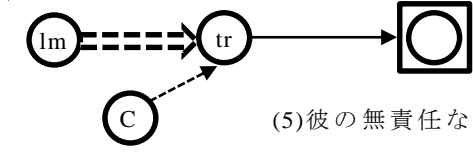
②使役者から被使役者へ視点の転換

4.使役受動の強制類



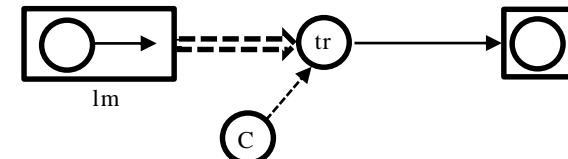
(4)彼が彼女に自殺させられた

5.使役受動の原因類(モノ使役者)



(5)彼の無責任な態度にはがっかりさせられた

6.使役受動の原因類(コト使役者)



(6)突然、彼が深夜に訪ねてきて、私はびっくりさせられた

C = 概念化者

R = 参照点

T = ターゲット

tr = トラジェクター

lm = ランドマーク

⑤モノからコトへ使役者の拡張

—————> 直接的影響

- - - - -> 間接的影響

- - - - -> 心的走査

—————> 変化

~~~~~> 同一指示

—————> 拡張経路(日中同)

—————> 拡張経路(日中異)

図 8-2 日中語の特殊受動構文の拡張過程

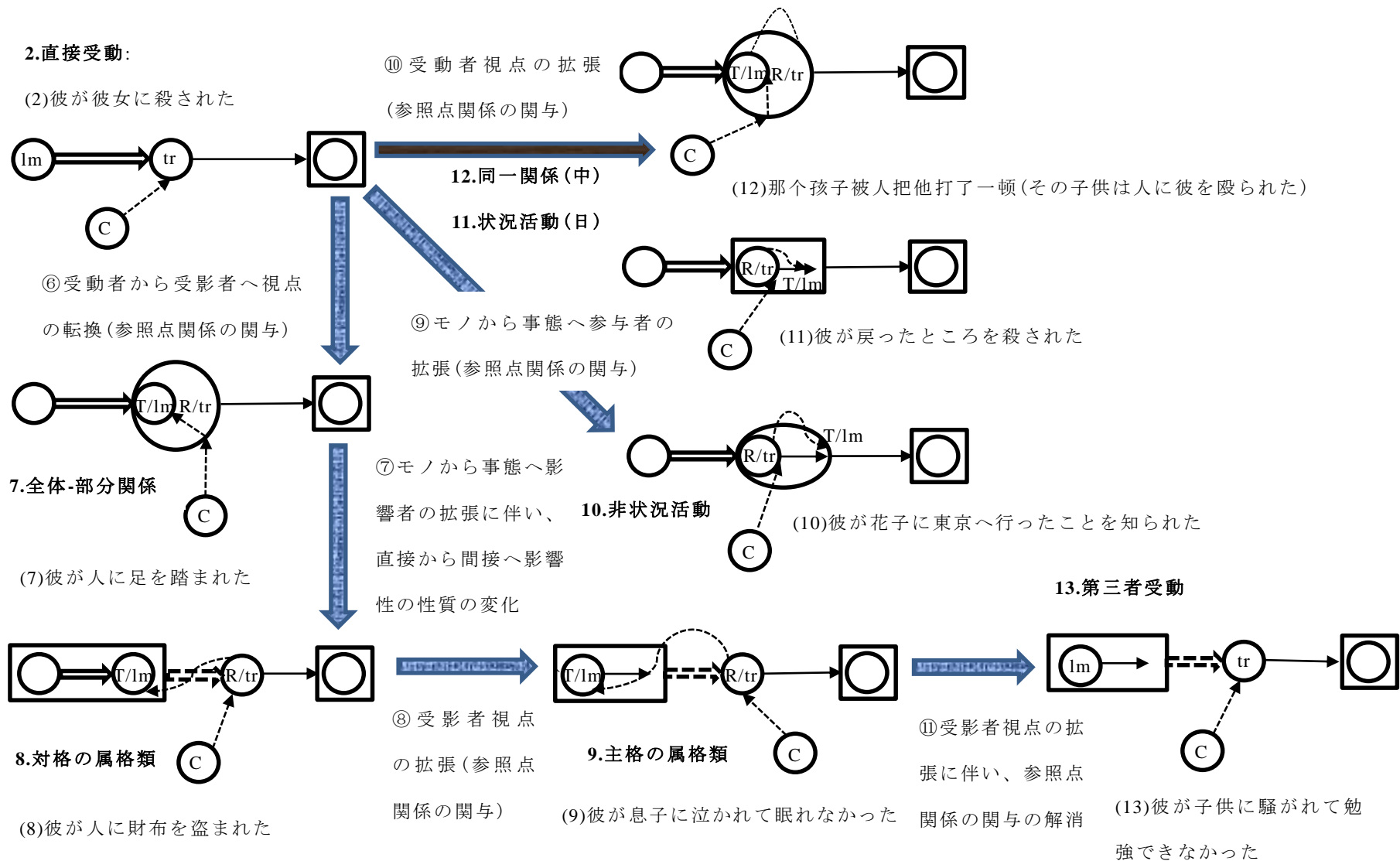


図 8-3 日中語の特殊受動構文の拡張過程(続)

日中語の特殊受動構文の拡張過程は具体的に以下のとおりである。

まず、使役受動構文の拡張過程に関しては、日本語においても、中国語においても、使役受動構文は直接的影響から間接的影響へと拡張する(③)ことによって、直接受動構文から直接的に拡張する。

使役受動構文の下位分類を詳しく見ると、使役受動構文は使役者が人からモノへと拡張する(④)ことによって、強制類からモノ使役者の原因類へと拡張し、さらにモノからコトへと使役者の拡張(⑤)によって、モノ使役者の原因類からコト使役者の原因類へと拡張する。事象構造において、こういったコト使役者の原因類の使役受動構文は第三者受動構文と連続体をなしている。すなわち、両者はともにあるコトの間接的な影響により、主語指示物に位置・状態変化が生じることを表すが、ランドマークとする参加者の性質が異なる。つまり、使役受動構文は出来事全体をランドマークとするのに対し、第三者受動構文は出来事のうちの行為主体をランドマークとする。

また、持ち主受動構文の拡張過程に関しては、日本語においても、中国語においても、持ち主受動構文は参照点関係の関与によって、直接受動構文から直接的に拡張する。その過程において、拡張の経路が異なる三つに分かれる。日中語は、1)の経路においては明らかに異なるが、2)-3)の経路においては同じである。

- 1) 参照点関係の関与のため、受動者視点が拡張する(⑩)ことによって、日本語は直接受動構文から状況活動の持ち主受動構文、中国語は直接受動構文から同一関係の持ち主受動構文へと拡張する。
- 2) 参照点関係の関与のため、参加者がモノからコトへと拡張する(⑨)ことによって、日中語はともに直接受動構文から非状況活動の持ち主受動構文へと拡張する。
- 3) この経路においては、また異なる三つの段階に分かれる。

まず、参照点関係の関与のため、視点が受動者から受影者へと転換する(⑥)ことによって、日中語はともに直接受動構文から全体-部分関係の持ち主受動構文へと拡張する。

また、参加者がモノからコトへと拡張に伴い、直接的影響から間接的影響へと拡張する(⑦)ことによって、日中語はともに全体-部分関係の持ち主受動構文から対格の属格類の持ち主受動構文へと拡張する。

さらに、受影者視点が一歩進んで拡張する(⑧)ことによって、日中語はともに対格

の属格類の持ち主受動構文から主格の属格類の持ち主受動構文へと拡張する。事象構造において、こういった主格の属格類の持ち主受動構文は第三者受動構文と連続体をなしている。すなわち、両者はともにあるコトの間接的な影響により、主語指示物に位置・状態変化が生じることを表すが、参照点関係の関与の有無においては異なる。つまり、持ち主受動構文は参照点関係が関与するのに対し、第三者受動構文は参照点関係が関与しない。

最後に、第三者受動構文の拡張過程に関しては、日本語においても、中国語においても、第三者受動構文は参照点関係の関与の解消に伴い、受影者視点がさらに拡張する(⑩)ことによって、持ち主受動構文から直接的に拡張する。

日中対訳コーパスから収集したデータの分析結果に基づき、日中語母語話者の<好まれる言い回し>及びそれに反映する把握の傾向は以下のとおりである。

まず、日本語の使役受動文は中国語では 55.1% (表 5-3 を参照)他動詞文、または 81.9% 能動構文(使役文と処置文も含む)、持ち主受動文は 52.3% (表 6-3 を参照)能動文(自動詞文と他動詞文を含む)、第三者受動文は 63.7% (表 7-3 を参照)能動文と対応する。一方、中国語の使役受動文は日本語では 48.1% (表 5-4 を参照)自動詞文、持ち主受動文は 71.6% (表 6-4 を参照)受動文、第三者受動文は非対応を除外すれば、半分以上(表 7-4 を参照)受動文と対応する。これは日中語における直接受動文の対応関係に関する中島(2007:67-68)の調査結果とほぼ一致している。こういった日中語母語話者の異なる<好まれる言い回し>、つまり受動文/自動詞文-能動文/他動詞文という相違は、行為連鎖の末尾の参与者-行為連鎖の先頭の参与者といった際立ちの選択の傾向を表す。

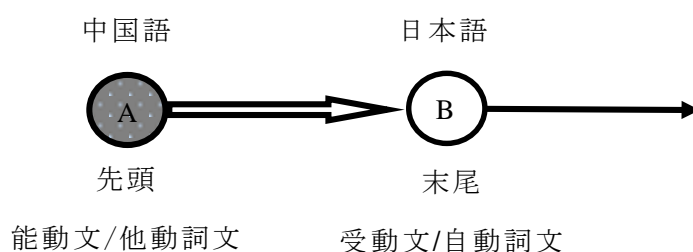


図 8-4 日中語母語話者の行為連鎖の参与者に対する際立ちの選択の相違

すなわち、図 8-4 では、行為連鎖の参与者 A と B のうち、日本語母語話者は行為連鎖の

末尾にある参加者 B をもっとも際立つ要素(tr)とする選択が強いのに対し、中国語母語話者は行為連鎖の先頭にある参加者 A を第一焦点参加者とする選択が強い。

また、日本語原文では特殊受動文は結果の意味が明示されないのに対し、その中国語訳文では受動文は結果の意味が明示されなければならない。一方、中国語原文では特殊受動文は結果の意味が明示されるのに対し、その日本語訳文では受動文は結果の意味が明示されなくてもよい。このような日中語母語話者の異なる<好まれる言い回し>、つまり結果非明示化-結果明示化という差異は、行為焦点-結果焦点といった際立ちの選択の相違を表す。

次に、日本語の持ち主受動文が中国語では受動文のうち、直接受動文と対応するのはもっとも高い比率である(表 6-3 を参照)。一方、中国語の持ち主受動文が日本語では受動文のうち、持ち主受動文と対応するのはもっとも高い比率である(表 6-4 を参照)。こういった日中語母語話者の異なる<好まれる言い回し>、つまり受影者主語-受動者主語という差異は、受影者視点-受動者視点といった視点の選択の傾向を表す。

さらに、日本語に特有の状況活動の持ち主受動文は中国語では持ち主受動文で表すと、非状況活動の持ち主受動文になる。このような日中語母語話者の異なる<好まれる言い回し>、つまり状況のヲ格を伴う形式-連体節を伴う形式という相違は、コト的把握-モノ的把握といった把握の仕方の差異を表す。

(1) だれか迎えに来ていないものでもなかったのに、二人が一緒だったところを見られるのを避けたわけであった。

<状況のヲ格を伴う形式>

(或许有人接站，俩人想避免被 人 看 见 同在一起的情景)

受動 人 見る 見える 共にいる 同じ所 の 情景

<連体節を伴う形式>

[対訳 あした来る人]

(1)は日本語に特有のヲ格を伴う形式の持ち主受動文であるが、中国語訳文では「被人看见同在一起的情景(二人が一緒だった情景を見られた)」といった助詞「的」を伴う連体節の形になっている。このような形式の相違は、日本語原文では「見る」の対象が「二人が一緒だった」という動的なコトであるのに対し、中国語訳文では「二人が一緒だった情景」という静的なモノである、といった出来事をコトとして捉えるか、モノとして捉えるかの差異を表す。

最後に、日本語に特有の状況活動の持ち主受動文は中国語では、(1)のような持ち主受動文以外、(2)のような直接受動文と対応することがある。一方、中国語に特有の同一関係の持ち主受動文は日本語では受動文で表すと、(3)のような直接受動文になる。

(2) 彼は(中略)だから、昨日戻ったところを殺された、ということになりますかね。

<目的語残存形式>

(因此，他昨天回来的时候被杀了)

<目的語非残存形式>

受動 殺す

[仁田 1992:327]

(3) 如同 一间房子那么大的货物(中略)终于 被 人们  
 まるで-のようだ 一間 家 ほど 大きい の 貨物 とうとう 受動 みんな  
把它 运 进了 那个新 修 起来 的 大库房 里。  
 処置 それ 運ぶ 入る 完了 あの 新しく 建てる て上がる の 大倉庫 に

<目的語残存形式>

(家ほどの大きさもあろうかというこの貨物は(中略)とうとうあのできたばかりの  
 大倉庫の中へ運びこまれた)

<目的語非残存形式>

[対訳 金光大道]

このように、原文と訳文はともに受動者主語ではあるが、訳文は原文と異なり、所有物を表す名詞(節)・代名詞を目的語として残存しない。こういった日中語母語話者の異なる<好まれる言い回し>、つまり目的語残存形式-目的語非残存形式という差異は、参照点関係の関与-参照点関係の非関与といった参照点関係の関与の仕方の相違を表す。

## 8.2 日中対照研究の結果

本論文の考察により、新たに明らかになったことは、以下のとおりである。

まず、言語データを分析・考察した結果、中国語は使役受動文を許容しない、または中国語に日本語の使役受動文に対応する文型はないといった定説には異論があるということがわかった。つまり、文法的振る舞い及び意味において、日本語の使役受動文に対応する文型は中国語に存在する。



- 1) 中国語では、日本語のように使役形式と受動形式の両方を備えた完全形式型の使役受動文は極めて少ないが、存在しないわけではない。一方、受動形式のみによって、使役受動の意味を表す、短縮形式型の通常の使役受動文及び新型の使役受動文のほうが一般的である。
- 2) 中国語の使役受動構文において、日本語と同様に、直接と間接に二分することができ、強制と原因の意味を表し、使役行為とその結果の両方が明示されなければならないものは存在する。一方、日本語に見当たらない用法、すなわち、完全形式型の持つ指示・許容類の用法、及び結果だけ明示されればよいもの、つまり短縮形式型と新型の用法も見られる。そのうち、指示・許容類の用法は中国語の使役受動文に特有のものである。
- 3) 位置・状態変化を意味する非対格自動詞(例:移動-移動する、発展-発展する、感動-感動する)による他動詞の代用形式(例:移動-移動させる、発展-発展させる、感動-感動させる)においては、日中語の間に明らかな相違が見られる。日本語は使役形式を持つが、中国語は使役形式が現れず、使役の意味が動詞の意味として語彙化されている。

また、日中語の持ち主受動構文に関しては、本論文の分析によって次の四点が解明した。

- 1) 中国語では、元の述語動詞が言語化されず、所有物を表す名詞節の一部しか表されない新型の持ち主受動構文もできるが、日本語ではこのように言語形式が一部しか表出しない持ち主受動表現は存在しない。
- 2) 中国語においては、語用論的要因によって、目的語残存の形式ではなく、受動者を導入する機能を持つ「把」を伴う形式の持ち主受動文が用いられる。日本語においては、目的語残存の形式しかなく、中国語の「把」を伴う形式の持ち主受動文に対応する形式が存在しない。
- 3) 日本語には、内的状況のヲ格・対格を伴う形式の持ち主受動文が存在するが、中国語にはこのような形式の持ち主受動文が見つからない。一方、中国語においては、同一指示の代名詞を「把」によって導入する形式の持ち主受動文は存在するが、日本語においてはこのような形式の持ち主受動文が見当たらない。

- 4) 持ち主受動文の使用要因に関しては、日中語はともに先行研究で指摘した構文上の制約及び受影者視点という二つに加えて、状態描写と受動者強調という二つの語用論的要因が挙げられる。また、先行研究で指摘した影響の直接性や主語指示物と目的語指示物との関連性はただ概念化者である話者が当該事態を把握する際に、受影者視点を取るのに関わる要素にすぎない。

さらに、日中語の第三者受動構文においては、以下の六点が明らかになった。

第一に、中国語において、「被」によって導かれる補文の事態が間接的影響の原因を表し、それに後続する結果を表す補語が「得」を伴う形式によって表される場合、自動詞の第三者受動文が成立することはできるという仮説が提起されている。しかしながら、中国語において、(4)のように「得」補語が伴わないにもかかわらず、第三者の受動文としてごく自然な受動表現がある。

- (4) 这次，又 被 那 只 狡猾 的 狐狸 逃 走 了  
今度 また 受動 あの 匹 ずる賢い の 狐 逃げる 去る 完了  
(今度、またあのずる賢い狐に逃げられてしまった)

[凌蓉訳 2005:102]

よって、中国語の第三者受動文の成立条件を以下のように修正すべきだと考える。すなわち、「被」によって導かれる補文の事態が間接的影響の原因を表し、その結果の意味が前後の文脈で明示されれば、第三者受動文は成立する。

第二に、日中語の第三者受動構文はともに一定の外部構造で用いられることが多く、それらの容認性が前後の文脈によって左右されやすい。こういった外部構造は主に先行文脈での副詞的要素及び後続文脈での結果状態を意味する成分などが挙げられる。また、結果状態のうち、主語指示物の位置・状態変化を表す具体的な物理的結果の意味はしばしば明示されるが、主語指示物の感情変化を表す抽象的な心理的結果の意味は含意にとどめ、明示しない傾向がある。

第三に、日中語の第三者受動構文に関する先行研究は、被害を含意する有情物主語のものに限られるが、実際の使用例からわかるように日中語の第三者受動構文はともに主語が有情物に限らず、無情物も可能である。これに関連して、情意性においては、日中語の第

三者受動構文はほとんど被害の意味を表すが、中立及び利益の意味を表す例文もまれに見られる。

第四に、日中語の第三者受動構文では、行為主体が第一人称代名詞によって表される例文はまれに見られるが、それぞれの使用要因が異なる。日本語では(5)のように、話者が主語指示物の受けた被害・迷惑の意味を述べるため、第一人称行為主体の第三者受動文は用いられるが、中国語では(6)のように、話者が難しいことを実現した行為主体を称揚するため、第一人称行為主体の第三者受動文は用いられる。

(5) あたしに逃げられてそんなに困った？

[対訳 痴人の愛]

(6) 我想 逃， 没 逃 脱， 被 他们 抓 回去， 又 打。

私 したい 逃げる ない 逃げる 離れる 受動 彼ら 捕まえる ていく また 殴る

后来 到 了 河南 才 被 我 逃 出来 了。

その後 着く 完了 地名 やっと 受動 私 逃げる 出てくる 完了

(私は逃げたかったが、逃げきれず、また彼らに捕まえられて殴られた。やがて、河南に着いてからやっと私が逃げることができた)

[魔方格 2015-06-09]

第五に、使用要因において、有情物主語の第三者受動構文は日本語では受影者視点及び状態描写との二つが挙げられる、中国語では受影者視点と行為者称揚との二つが挙げられる。また、無情物主語の第三者受動構文は日本語では状態描写が挙げられるが、中国語では性質叙述及び受影者視点との二つが挙げられる。

第六に、先行研究では、日本語の第三者受動構文は事態把握のレベルで、参与者がモノからコトへと拡張することによって、直接受動構文から直接的に拡張するとしているが、本論文の分析により、日中語の第三者受動構文はともに受影者視点の拡張と参照点関係の関与の解消によって主格の属格類の持ち主受動構文から直接的に拡張する、ということがわかった。

さらに、従来の研究では、日本語の受動文は視点制約に規制され、第一人称の行為主体による受動文は存在しないとされている。しかしながら、(7)-(8)に示すように、第一人称の行為主体による持ち主受動文及び第三者の受動文は日本語に見られる。つまり、日本語

の受動文では、話者が主語指示物の受けた被害・迷惑の意味を強調することによって、視点制約は解消されることがある。

- (7) つまり彼女のいつもの癖で、自分の家庭の内幕を私に知られるのが嫌さに、わざと何でもないような素振りを見せていたのです。

[対訳 痴人の愛]

- (8) そりゃあそうよ、あたしは意地が悪いから、来るなど云えば尚来るわよ。—それとも来られるのが恐ろしいの？

[対訳 痴人の愛]

最後に、先行研究では、日本語の間接受動構文はプロトタイプである直接受動構文からの拡張であるとしているが、使役受動構文も受動構文の体系に入れて、事態把握のレベルで全面的に日本語の受動構文の体系についての考察は存在しない。一方、中国語の受動構文に関しては、事態把握からの研究は見当たらない。本論文は事態把握のレベルで、日中語の受動構文の体系を考察し、認知モデルを用い、図で表すことを試みた。その結果、日中語の受動構文の体系では、直接受動構文から持ち主受動構文へ、さらに第三者受動構文へと拡張する方向、及び直接受動構文から使役受動構文へと拡張する方向との二つの経路において日中語は共通し、直接受動構文から状況活動の持ち主受動構文へと拡張する方向、及び直接受動構文から同一関係の持ち主受動構文へと拡張する方向との二つの経路において日中語は異なる、ということがわかった。さらに、日中語において、コト使役者の原因類の使役受動構文と第三者受動構文は事態把握のレベルで連続性をなしているということもわかった。

### 8.3 本論文の意義及び今後の課題

日中語の受動構文について、従来、「能動構文-受動構文」の対立がその基本的な現象であるとされてきた。しかし、一言受動文といっても、「山本は仏像の魅力に強く惹きつけられた-×仏像の魅力は山本を強く惹きつけた」、「九岁的妹妹被人贩子卖给了别人(九歳の妹が人さらいに売られてしまった)-×人贩子卖九岁的妹妹给了别人(人さらいが九歳の妹を売った)」のような、受動-能動の対立が成り立たない受動文も存在している。そのため、日中

語の受動構文を対照する際に、受動-能動の対立が成立しない現象を視野に入れ、日中語の受動構文の体系を捉え直すことが重要である。また、受動構文に関する日中対照研究では、そのほとんどが構文的特徴に関するものであり、そのような構文的特徴に反映される日中語母語話者の事態把握の仕方の相違に言及する研究は極めて少ない。さらに、こういった受動構文の構文的特徴に関する従来の研究は、文法的あるいは意味的に問題がある受動文については説明することができるが、文法的にも意味的にも十分な受動文の不自然さに対しては、適切な説明を与えることができない。このように、受動構文に関する研究の成果を教育現場で生かすために、単に当該構文の構文的特徴の相違を解明することだけでは不十分であり、母語話者と学習者それぞれの事態把握のあり方を解明しなければならない。

本論文は、認知言語学の理論を用い、構文的特徴及び事態把握の面から、日中語における使役受動構文、持ち主受動構文及び第三者受動構文を検討し論述したものである。本論文の意義は次のようにまとめられる。

まず、認知言語学は、意味を概念化と見なす。概念化とは、把握事態に対する解釈であり、従って、意味とは捉え方である。こういった認知言語学の立場に立てば、日中語の受動構文の体系間の異同点を見出すには、それぞれの事態把握における相違を明らかにしなければならない。目下、日中語の受動構文に関する研究において、使役受動構文を含んだ日中語の受動構文の体系を全面的に事態把握のレベルで検討し、認知モデルで図式する考察は、本論文がはじめてである。このような分析によって、日本語では、第三者受動構文は確かに事態把握のレベルでプロトタイプである直接受動構文からの拡張だと言えるが、それは直接的に直接受動構文から拡張するのではなく、持ち主受動構文から直接的に拡張するのである、ということがわかった。

また、研究方法の面において、本論文は従来の日中対照研究と異なり、日中対訳コーパスを十分に利用し、受動構文の構文的特徴のみならず、それに反映する事態把握も考察する。両者の相互補完と裏づけを図り、それを通して、より説得力のある研究結論を引き出した。

最後に、本論文は研究成果の実用的価値を求めている。従来の日中対照研究は、受動構文の構文的特徴からの考察しかないので、文法的あるいは意味的に問題がある受動文については説明できるが、文法的にも意味的にも十分な受動文の不自然さに対しては、適切な説明を与えることができない。一方、本論文は構文的特徴と事態把握との両方を考察することによって、日中語の特殊受動構文の構文的特徴の相違、さらに母語話者と学習者それ

それぞれの事態把握のあり方を明らかにすることができた。こういった日中語の特殊受動構文に関する研究の成果を教育の場で生かすことを期待している。

本論文では、日中語教育への応用を視野に入れ、認知言語学の観点から、日中語における特殊受動構文、つまり使役受動構文、持ち主受動構文及び第三者受動構文の形式的特徴、意味的特徴及び事態把握の仕方の相違、特殊受動構文の拡張過程及び動機付けを中心に考察を行った。以下において、本論文の限界を指摘するとともに、今後に残した課題の一端を述べておきたい。

第一に、本論文は直接受動構文を除外した特殊受動構文、つまり使役受動構文、持ち主受動構文及び第三者受動構文を考察対象として、それらの構文的特徴及び事態把握について詳しく考察を行った。しかしながら、プロタイプである直接受動構文においても、対格・与格・奪格名詞が主語に立つ、多様な性質の異なるものが存在する。これらも研究対象として、今後の更なる考察によって、日中語の受動構文の体系をより細緻的、合理的ものに改善していきたい。

第二に、本論文は日本人・中国人向けの中国語・日本語教育への応用を視野に入れるため、位置・状態変化を意味する非対格自動詞(例:絆-転ぶ、移動-移動する、発展-発展する、感動-感動する)による他動詞の代用形式(例:絆-転ばす/転ばせる、移動-移動させる、発展-発展させる、感動-感動させる)における日中語間の形式的相違を指摘したが、このような他動詞の代用形式は中国語に関する研究ではほとんど自他同形の他動詞としており、日本語ではそれに対応する動詞の多くはサ変動詞である。こういった他動詞の代用形式は通常の語彙的他動詞とはいかなる点で異なるのか。また、日中語において、それらはいかなる場面・状況で使用されるのか。これらの問題は今回の考察では取り扱っておらず、今後の研究においてさらに考察を続けて行きたいと考えている。

第三に、本論文は日中語の特殊受動構文の形式的特徴とは何か、そのような形式的特徴に反映される意味の相違、日中語母語話者の受動事態に関する把握の差異とは何か、日中語特殊受動構文の拡張の動機付けとは何か、といった問題を明らかにした。しかしながら、そもそもどうして日本語は受動構文が自然なのか、一方、中国語は能動構文が好まれるのか、という問いに回答を与えることができなかった。今後は、池上(1981)のアプローチを参照しつつ、言語と文化の類型論的分析から考察を続け、新たな進展があることを期待している。

第四に、本論文は日本人・中国人向けの中国語・日本語教育への応用を視野に入れ、特殊

受動構文に関する研究の成果を教育の場で生かすために、構文的特徴の相違のみならず、日中語母語話者と学習者それぞれの事態把握のあり方、つまり意味づけから、言語化に至る過程、及び両者における違いまでを明らかにした。しかし、実際に教える時、学生たちはおそらく事態把握という概念について全く知識を持っておらず、難しい文法知識もわからないであろう。今後は、池上他(2009)の考えを参照に、教科書の例文と解説、イラスト・絵教材の描き方などの面から、本論文の成果を教育現場に生かせる方法について研究を進めていきたいと考えている。

## 参考文献

### 日本語の文献

- 相原茂,楊凱榮.(1990). 自動詞・他動詞—中国語と日本語. 国文学解釈と鑑賞 55(1), 123-128.
- 庵功雄,高梨信久,中西久実子,山田敏弘(著),松岡弘(監修).(2000). 初級を教える人のための日本語文法ハンドブック. 東京: スリーエーネットワーク.
- 庵功雄,高梨信久,中西久実子,山田敏弘(著),白川博之(監修).(2001). 中上級を教える人のための日本語文法バンドブック. 東京: スリーエーネットワーク.
- 庵功雄.(2012). 新しい日本語学入門—ことばの仕組みを考える(第2版). 東京: スリーエーネットワーク.
- 池上嘉彦.(1981). 「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論—. 東京: 大修館書店.
- 池上嘉彦.(2003). 言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(1). 認知言語学論考(3), 1-49. 東京: ひつじ書房.
- 池上嘉彦.(2004). 言語における<主観性>と<主観性>の言語的指標(2). 認知言語学論考(4), 1-60. 東京: ひつじ書房.
- 池上嘉彦.(2009a). <イマ・ココ>にこだわる日本語話者の「語り」に関するコメント. 日本認知言語学会論文集(9), 588-590.
- 池上嘉彦.(2009b). 認知言語学における<事態把握>—<話す主体>の復権. 言語(10), 62-70.
- 池上嘉彦,守屋三千代(編著).(2009). 自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて. 東京: ひつじ書房.
- 池上嘉彦.(2010). 発表内容の背景についての補足的コメント. 日本認知言語学会論文集(10), 707-709.
- 池上嘉彦.(2011). 日本語と主観性・主体性. 澤田治美(編). 主観性と主体性, 49-67. 東京: ひつじ書房.
- 石村広.(2005). 類型特徴から見た中国語の受動文. 生城文藝(192), 128-142.
- 上原聡.(2001). 言語の主観性に関する認知類型論的—考察. 日本認知言語学会論文集(1),



1-11.

- 上原聡,熊代文子. (2007). 音韻・形態のメカニズム—認知音韻・形態論のアプローチ. 東京: 研究社.
- 于康. (2012). 「目的語残存受身文」における目的語残存の条件について—中国語との対照という視点から. 国文学攷(214), 1-14.
- 鵜殿倫次. (2005). “間接受動文”と二重目的語文の受動化—中国語のヴォイス(2). 愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)(37), 409-430.
- 王垂新. (1990). 日本語と中国語のヴォイス—受身表現の場合—. 国文学解釈と鑑賞 55(1), 129-135.
- 王安. (2008). ヴォイスの側面から見た感情表現の認知構造—日中両言語における感情の自発性の捉え方を対照して—. 日本認知言語学会論文集(8), 307-315.
- 王忻. (2012). 日中事態把握の違いによるヴォイスカテゴリーにおける誤用. 漢日対比言語学研究(協作)会,杭州师范大学日语系(編). 漢日語言対比研究論叢(第3輯), 20-31. 北京: 北京大学出版社.
- 大河内康憲. (1974). 被動が成立する基礎—日本語などとの関連で. 中国語学(220), 1-12.
- 大河内康憲. (1983). 日・中語の被動表現. 日本語学(4), 31-38.
- 奥津敬一郎. (1967). 自動化・他動化および両極化転形. 国語学(70), 46-60.
- 小嶋栄子. (1994). 使役うけみ文について—その意味と用法—. 日本語学科年報(15), 17-39.
- 温琳. (2011). 現代中国語における特殊なヴォイス構文の意味と論理構造—「被…把…」構文及び「把…被…」構文を例として—. 国際交流学部紀要(13), 195-212.
- 影山太郎. (1993). 文法と語形成. 東京: ひつじ書房.
- 影山太郎. (1996). 動詞意味論—言語と認知の接点. 東京: くろしお出版.
- 影山太郎. (2006). 日本語受身文の統語構造—モジュール形態論からのアプローチ. レキシコンフォーラム(2), 179-231.
- 勝川裕子. (2004). 現代中国語における「領属関係」の定義とその分類. ことばの科学(17), 185-199.
- 勝川裕子. (2008a). 現代中国語における領属モデル. 多元文化(8), 333-348.
- 勝川裕子. (2008b). 現代中国語における領属タイプと不可譲渡性. 言語文化論集 29(2), 391-404.
- 勝川裕子. (2013). 現代中国語における「領属」の諸相. 東京: 白帝社.

- 加納光,平井勝利.(1994). 現代中国語における「使」,「让」,「叫」を用いた使役表現の考察. 四日市大学論集 6(2), 91-109.
- 川村大.(2012). ラル形述語文の研究. 東京:くろしお出版.
- 岸本秀樹.(2013). 日本語二重目的語動詞の所有者制約と受身化. レキシコンフォーラム(6), 203-227.
- 吉紅.(2009). 現代日本語の間接受け身文についての考察. 上海外国語大学修士論文.
- 木村英樹.(1992). BEI 受身文の意味と構造. 中国語(389), 10-15.
- 木村英樹.(2000). 中国語のヴォイスの構造化とカテゴリー化. 中国語学(247), 19-39.
- 金田一春彦.(1988). 日本語(下). 東京:岩波書店.
- 工藤真由美.(1990). 現代日本語の受動文. 言語学研究会(編). ことばの科学(4), 47-102. 東京:むぎ書房.
- 久野暉.(1978). 談話の文法. 東京:大修館書店.
- 熊代敏行.(2002). 参照点. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 88-89. 東京:研究社.
- 黒田弘美.(2013). 日・中における被害・迷惑にかかわる受身と放任・許容の使役の接近性について—認知類型論的立場からの分析—. 日本認知言語学会論文集(13), 384-394.
- 黒田弘美.(2014). 日中における持ち主の受身の表現方法の違いについて—認知類型論的立場からの考察—. 日本認知言語学会論文集(14), 581-586.
- 小泉保,船城道雄,本田晶治,仁田義雄,塚本秀樹.(1989). 日本語基本動詞用法辞典. 東京:大修館書店.
- 小泉保.(1993). 日本語教師のための言語学入門. 東京:大修館書店.
- 近藤安月子,姫野伴子.(2007). 参照点としての「私」と自己中心的な「私」. 日本認知言語学会論文集(7), 583-590.
- 近藤安月子,姫野伴子.(2008). 日本語教科書に見る事態把握の傾向—中国で出版された教科書を例として—. 日本認知言語学会論文集(9), 296-306.
- 近藤安月子,姫野伴子,足立さゆり.(2009). 中国語母語日本語学習者の事態把握—日中対照予備調査の結果から—. 日本認知言語学会論文集(9), 1-10.
- 近藤安月子.(2009). 4.9「飛んでいる飛行船が見えます」(事態まるごと—1). 池上嘉彦,守屋三千代(編著). 自然な日本語を教えるために—認知言語学をふまえて, 113-118. 東京:ひつじ書房.
- 近藤安月子,姫野伴子,足立さゆり,王安.(2010). 中国語母語日本語学習者の事態把握—日本

- 語主専攻学習者を対象とする調査の結果から一. 日本認知言語学会論文集(10), 690-706.
- 近藤安月子, 姫野伴子, 足立さゆり. (2014). 日本語学習者と日本語母語話者の事態把握の傾向差と相対的距離—中国語母語および韓国語母語学習者を対象に一. 日本認知言語学会第 15 回大会 Conference Handbook, 247-250.
- 斉木美知世, 鷲尾龍一. (2012). ヴォイスの複合. 影山太郎, 沈力(編). 日中理論言語学の新展望 3 語彙と品詞, 1-49. 東京: くろしお出版.
- 佐治圭三. (1992). 外国人が間違えやすい日本語の表現の研究. 東京: ひつじ書房.
- 志波彩子. (2015). 現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル. 大阪: 和泉書店.
- 柴谷方良. (1978). 日本語の分析. 東京: 大修館書店.
- 柴谷方良. (1997). 「迷惑受身」の意味論. 川端善明, 仁田義雄(編), 日本語文法 体系と方法, 1-22. 東京: ひつじ書房.
- 島田昌彦. (1979). 国語における自動詞と他動詞. 東京: 明治書院.
- 菅井三実. (2002a). 解釈/捉え方, 解釈する. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 20-21. 東京: 研究社.
- 菅井三実. (2002b). 概念主義. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 23. 東京: 研究社.
- 杉村博文. (1992). 遭遇と達成—中国語被動文の感情的色彩—. 大河内康憲(編). 日本語と中国語の対照研究論文集(下), 45-62. 東京: くろしお出版.
- 杉村博文. (1994). 中国語文法教室. 東京: 大修館書店.
- 杉村博文. (2014). 中国語の受動構文: 視点の対照研究の観点から. 日本中国語学会第 64 回全国大会予稿集, 26-29.
- 杉村博文. (2015). 袁毓林「汉语意合语法的认知机制和描写体系」. 中国語学(262), 31-56.
- 杉本武. (1999). 「雨に降られる」再考. 文藝言語研究・言語篇(35), 49-62.
- 孫艶華. (2001). 中日使役表現の対照研究—「セル・サセル」と「使, 令, 叫, 讓」との対応関係. 日本文化研究(13), 19-35.
- テイラー, ジョン R, 瀬戸賢一. (2008). 認知文法のエッセンス. 東京: 大修館書店.
- 高見健一. (1995). 機能的構文論による日英語比較—受け身文, 後置文の分析—. 東京: くろしお出版.
- 高見健一, 久野暉. (2000a). 日本語の被害受身文と非能格性(上). 言語 29(8), 80-91.
- 高見健一, 久野暉. (2000b). 日本語の被害受身文と非能格性(中). 言語 29(9), 80-94.

- 高見健一,久野暉. (2000c). 日本語の被害受身文と非能格性(下). 言語 29(10), 70-88.
- 高見健一,久野暉. (2006). 第 8 章 使役受身文. 日本語機能的構文研究, 213-239. 東京: 大修館書店.
- 高見健一. (2011). 受身と使役—その意味規則を探る—. 東京: 開拓社.
- 高橋太郎. (2003). 動詞九章. 東京: ひつじ書房.
- 田中真理. (2010). 第二言語としての日本語の受身文の習得研究—今後の研究の可能性—. 第二言語としての日本語の受身文の習得研究(13), 114-146.
- 谷口一美(著). 原口庄輔,中島平三,中村捷,河上誓作(編). (2003). 認知意味論の新展開: メタファーとメトニミー. 東京: 研究社.
- 谷口一美. (2005). 事態概念の記号化に関する認知言語学的研究. 東京: ひつじ書房.
- 陳潔羽. (2013). 持主受動文における目的語の繰り上げ—中日対照の立場から—. 漢日対比言語学研究(協作)会(編). 漢日語言対比研究論叢(第 4 輯). 北京: 北京大学出版社, 57-72.
- 趙穎. (2012). 間接受身文についての日中対照研究. 湖南大学修士論文.
- 張志軍. (1994). 「叫、让」と「せる、させる」のずれ. 経営研究 8(2), 337-351.
- 張麟声. (1997). 受動文の分類について. 現代日本語研究(4), 1-14.
- 張麟声. (2001). 日本語教育のための誤用分析—中国語話者の母語干渉 20 例—. 東京: スリーエーネットワーク.
- 張瑜. (2011). 日本語と中国語のヴォイスにおける“責任遡求”に関する研究. 山口大学博士論文.
- 鄭聖汝. (2006). 韓日使役構文の機能的類型論研究—動詞基盤の文法から名詞基盤の文法へ—. 東京: くろしお出版.
- 角田太作. (2009). 世界の言語と日本語:言語類型論から見た日本語. 東京: くろしお出版.
- 坪井栄治郎. (2002). (動的)用法依存モデル. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 250. 東京: 研究社.
- 丁意祥. (1995). いわゆる<持ち主の受身>について—非分離性関係の受身について—. 現代日本語研究(2), 103-120.
- 丁意祥. (1996). 直接受身としての<非分離性関係の受身>. 日本学報(15), 47-63.
- 丁意祥. (1997). 間接受身文に関する一考察. 日本語教育(93), 85-96.
- 丁意祥. (2004). 意味素性から見た使役受身. 日本語文学(23), 145-163.

- 丁意祥. (2005). 使役受身文の意味的な特徴および下位タイプについて. 日本学報(65), 225-239.
- 鄭曉青. (1996). 中国語と日本語の受け身文—動詞のボイスの研究のために. 国文学解釈と鑑賞(7), 78-85.
- 寺村秀夫. (1982). 日本語のシンタクスと意味 I. 東京: くろしお出版.
- 富田英夫. (2007). 日本語文法の要点. 東京: くろしお出版.
- 中島悦子. (2007). 日中対照研究 ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発—. 東京: おうふう.
- 中島悦子. (2012). 日中対照研究「ヴォイス」—受身を中心として—. 日中対照言語学会(著). 日本語と中国語のヴォイス, 1-19. 東京: 白帝社.
- 中村祐理子. (2002). 中級学者の受け身文使用における誤用例の考察. 北海道大学留学生センター紀要(6), 21-36.
- 中村芳久. (2004). 認知文法論. 東京: 大修館書店.
- 中村芳久. (2009). 認知モードの射程. 坪元篤朗, 早瀬尚子, 和田尚明(編). 「内」と「外」の言語学, 353-393. 東京: 開拓社.
- 西尾寅弥. (1982). 自動詞と他動詞—対応するものとしなないもの—. 日本語教育(47), 161-179.
- 仁田義雄. (1991). ヴォイス的表現と自己制御性. 仁田義雄(編). 日本語のヴォイスと他動性, 31-57. 東京: くろしお出版.
- 仁田義雄. (1992). 持ち主の受身をめぐって. 藤森ことばの会(編). 藤森ことば論集, 323-354. 大阪: 清文堂.
- 仁田義雄. (1997). 日本語文法研究序説. 東京: くろしお出版.
- 仁田義雄, 益岡隆志(編). 仁田義雄, 村木新次郎, 柴谷方良, 矢澤真人(著). (2000). 文の骨格. 東京: 岩波書店.
- 野田尚史. (1991a). はじめての人の日本語文法. 東京: くろしお出版.
- 野田尚史. (1991b). 日本語の受動化と使役化の対称性. 文藝言語研究・言語篇(19), 31-51.
- 野村益寛. (2002). 換喩/メトニミー. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 35-36. 東京: 研究社.
- 日本語記述文法研究会(編). (2009). 現代日本語文法(2). 東京: くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会(編). (2010). 現代日本語文法(1). 東京: くろしお出版.

- 早津恵美子. (1987). 他動詞と自動詞の対応について. 東京外国語大学修士論文.
- 早津恵美子. (1989). 有対他動詞と無対他動詞の違いについて. 言語研究(95), 231-256.
- 早津恵美子. (1997). 使役動詞の認定をめぐって(1)―形態面の問題―. 環太平洋の言語(3), 163-182.
- 潘宁. (2013). 使役表現的日中対照研究―「させる」と「叫, 让, 使」の対訳を中心に. 上海外国語大学修士論文.
- 裴銀貞. (2004). 所有物主語の受身文と持ち主の受身文の比較―共起要素及び意味的特徴の比較を中心に―, 31-44. <https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=repository...item...>  
(2015/11/18 参照)
- 星英仁. (2011). 間接受身文の事象と統合構造について. 影山太郎, 沈力(編). 日中理論言語学の新展望 I 統語構造, 1-32. 東京: くろしお出版.
- 堀川智也, 森篤嗣, 栗原由加. (2003). 事態把握の相違に基づく日本語受身文の分類. 日本語・日本文化研究(13), 29-38.
- 前田直子. (1989). 「使役受動態」の意味と用法. 言語・文化研究(7), 25-32.
- 益岡隆志. (1982). 日本語受動文の意味分析. 言語研究(82), 48-64.
- 益岡隆志. (1987). 命題の文法. 東京: くろしお出版.
- 益岡隆志, 田窪行則. (1992). 基礎日本語文法(改訂版). 東京: くろしお出版.
- 町田章. (2004). 日本語被害受身文と参照点構造. 日本認知言語学会論文集(4), 392-401.
- 町田章. (2005). 日本語被害受身文の間接性と概念化―認知文法的アプローチ. 語用論研究(7), 45-62.
- 町田章. (2007). 視点制約と日本語受動文の事態把握. 河上誓作, 谷口一美(編). ことばと視点, 104-118. 東京: 英宝社.
- 町田章. (2011). 日本語受身文の分化と客体化―経験主発生の認知メカニズム―. 日本英文学会北海道支部第 56 大会招聘発表レジュメ, 1-5.
- 町田章. (2012). 主観性と見えない参加者の可視化―客体化の認知プロセス―. 日本認知言語学会論文集(12), 346-258.
- 三上章. (1953). 現代語法序説. 東京: くろしお出版.
- 三宅登之. (2004). 使役動詞“使”がとる主語の認知論的解釈. 言語情報学研究報告(3), 11-27.
- 村上三寿. (1986). うけみ構造の文. 言語学研究会(編). ことばの科学(1), 7-87. 東京: むぎ書房.

- 村上三寿. (1997). うけみ構造の文の意味的なタイプ. 言語学研究会(編). ことばの科学(8), 103-149. 東京: むぎ書房.
- 村木新次郎. (1991). 日本語動詞の諸相. 東京: ひつじ書房.
- 望月八十吉. (1974). 中国語と日本語. 東京: 光生館.
- 桃内佳雄. (2004). 謙渡不可能な所有関係の表現に関する対照的な考察. 北海学園大学工学部研究報告(31), 135-146.
- 森田良行. (1977). 基礎日本語: 意味と使い方. 東京: 角川書店.
- 守屋三千代, 徐愛紅. (2012). <事態把握>と語順をめぐる日中対照研究—それぞれの話者は事態のどこから言語化するか—. 漢日対比言語学研究(協作)会, 杭州师范大学日语系(編). 漢日語言対比研究論叢(第3輯), 196-205.
- 森山卓郎. (1988). 日本語動詞述語文の研究. 東京: 明治書院.
- 山内潤子. (2007). 使役受身文に関する一考察—人間の人間による使役文(意志動詞)からなるもの—. 日語日文学研究(61), 197-213.
- 山内博之. (1997). 日本語の受身文における「持ち主の受身」の位置づけについて. 日本語教育(92), 119-130.
- 山下好孝. (2001). 迷惑受け身のプロトタイプ. 北海道大学留学生センター紀要(5), 1-15.
- 山梨正明. (2009). 認知構文論—文法のゲルタルト性. 東京: 大修館書店.
- 山根史子. (2004). “EVENT1+弄得+EVENT2”における“弄”のプロファイル機能. 言語情報学研究報告(3), 45-65.
- 楊凱榮. (1989). 日本語と中国語の使役表現に関する対照研究. 東京: くろしお出版.
- 楊凱榮. (1992). 文法の対照的研究—中国語と日本語. 山口佳紀(編). 日本語と日本語教育(5), 312-340. 東京: 明治書院.
- 楊彩虹. (2009). 中国語受身文の成立条件: 日本語との対照研究を通して. NEAR conference proceedings working papers 国際大学, 1-23.
- 吉村公宏. (2002a). 構文スキーマ. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 77-78. 東京: 研究社.
- 吉村公宏. (2002b). プロトタイプ. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 224-225. 東京: 研究社.
- 吉村公宏. (2002c). 因果連鎖. 辻幸夫(編). 認知言語学キーワード事典, 15. 東京: 研究社.
- 李彦. (2009). 日中受身文に関する対照研究—母語干渉を中心に. 重慶大学修士論文.

- 陸艺娜. (2011). 日中両言語における受動文体系の対照研究:事象構造の観点から. 金沢大学大学院人間社会環境研究科博士論文要旨, 9-15.
- 李臨定(著). 宮田一郎(訳). (1993). 中国語文法概論. 東京: 光生館.
- 李麗萍. (2014). 中国語の新型自動詞受動表現「被自殺」について—使用基盤モデルの視点から—. 日本認知言語学会論文集(14), 139-148.
- 李麗萍, 上原聡. (2014). 中国語における二種類の他動詞受動構文に関する研究. 国際文化研究(21), 85-98.
- 李麗萍. (2015). 『新編日語』(修訂本)における受動表現に関する一考察. 日本語教育・日本学研究—大学日語教育研究国際研究会論文集(出版中).
- 林晓玫. (2007). 日本語の受動文の中国語訳と現れる問題点—『心』と『雪国』に見られる例. 福建師範大学修士論文.
- 林璋. (2010). 中日両言語における動作主主語受動文. 日中言語研究と日本語教育(3), 13-22.
- 梁爽. (2009). <事態把握>と「語り」をめぐる日中両国語話者の相違—「笑い」を中心に—. 日本認知言語学会論文集(9), 584-587.
- 凌蓉. (2005). 受身文と“被”構文に関する対照研究. 上海外国語大学博士論文.
- 梁麗平. (2013). 日本語の使役受身表現の意味用法及びその日中機械翻訳規則に関する研究. 広西大学修士論文.
- 渡辺昌之. (1991). 現代日本語動詞の自他の対応<資料>. 春日正三先生還暦記念「ことばの論文集」刊行会(編). 春日正三先生還暦記念 ことばの論文集, 93-116. 東京: 双文社.

## 中国語の文献

- 柴东英. (2012). 标记视角下“被”“把”同现句研究. 辽宁师范大学硕士论文.
- 车纯莲. (2012). 对日学生被动句偏误分析. 华中科技大学硕士论文.
- 陈长书. (2012). 2009年以来流行语“被XX”结构的传播和发展. 东方论坛(6), 106-109.
- 陈文博. (2010). 汉语新型“被+X”结构的语义认知解读. 当代修辞学(4), 80-87.
- 陈小红. (2007). “了<sub>1</sub>”、“了<sub>2</sub>”语法意义辨疑. 语言教学与研究(5), 54-60.
- 陈小红. (2011). “了<sub>1</sub>”、“了<sub>2</sub>”的句法位置. 南阳师范学院学报(社会科学版)(4), 47-51.
- 池昌海, 周晓军. (2012). 新“被+X”结构及其生成机制与修辞意图. 福建师范大学学报(哲学



- 社会科学版)(4), 53-61.
- 邓思颖. (2006). 汉语被动句的三个句法问题. 刑福义(主编). 汉语被动表述问题研究新拓展, 92-99. 武汉: 华中师范大学出版社.
- 丁力. (2011). 变异“被”字句的异质感受与文化信息. 汉语学报(4), 53-58.
- 丁声树. (1961). 现代汉语语法讲话. 北京: 商务印书馆.
- 范晓. (1998). 汉语的句子类型. 太原: 书海出版社.
- 范晓. (2000). 论“致使”结构. 中国语文杂志社(编). 语法研究和探索(10), 135-151. 北京: 商务印书馆.
- 范晓. (2006). 被字句的谓语动词的语义特征. 长江学术(2), 79-89.
- 方霁. (1999). “了 1”、“了 1”的定位. 陆俭明(主编). 面临新世纪挑战的现代汉语语法研究: '98 现代汉语语法学国际学术会议论文集, 577-585. 济南: 山东教育出版社.
- 方林刚. (2011). 新被字句的选择性继承和创新. 重庆师范大学学报(哲学社会科学版)(3), 111-117.
- 郭栩. (2013). 日本学生学习“被”字句习得偏误分析和教学对策. 湖南师范大学硕士论文.
- 何洪峰, 彭吉军. (2010). 论 2009 年度热词“被 X”. 语言文字应用(3), 82-88.
- 侯精一, 徐枢, 张光正, 蔡文兰(编). 田中信一, 西槇光正, 武永尚子(訳). (2001). 中国語補語例解. 北京: 商务印书馆.
- 胡附, 文炼. (1990). 现代汉语语法探索(新 1 版). 北京: 商务印书馆.
- 黄伯荣, 廖序东. (2002). 现代汉语(下). 北京: 高等教育出版社.
- 黄晓兵, 池田尚志. (2008). 日中机器翻译中的使役句及使役被动句的处理方法. 第四回全国机器翻译检讨会会议论文集, 246-254.
- 李丽萍. (2014). 从认识语言学视角看两类被动结构. 东北大学中国語学文学論集(19), 79-91.
- 李临定. (1980). “被”字句. 中国语文(6), 401-412.
- 李临定. (1986). 现代汉语句型. 北京: 商务印书馆.
- 李临定. (1990). 现代汉语动词. 北京: 中国社会科学出版社.
- 李临定. (1994). 李临定自选集. 郑州: 河南教育出版社.
- 李人鉴. (1980). 关于“被”字句. 扬州大学学报(人文社会科学版)(2), 69-75.
- 李珊. (1993). 现代汉语被字句研究. 北京: 北京大学出版社.
- 李伟大. (2010). 完全被动句探赜. 长春大学学报(9), 49.
- 廖真辉. (2002). 汉日被动句对比分析及指导法研究. 西南交通大学硕士论文.

- 刘红妮. (2010). “被 XX” 新词的多角度考察. 汉字文化(3), 49-53.
- 刘杰, 邵敬敏. (2010). 析一种新兴的主观强加性贬义格式“被 XX”. 语言与翻译(1), 26-30.
- 刘月华, 潘文娉, 故鞞(著). 实用现代汉语语法(增订本). 北京: 商务印书馆. 相原茂(監訳), 片山博美, 守屋宏則, 平井和之(訳). (1988). 現代中国語文法総覧(上). 東京: くろしお出版.
- 刘月华, 潘文娉, 故鞞(著). 实用现代汉语语法(增订本). 北京: 商务印书馆. 相原茂(監訳), 片山博美, 守屋宏則, 平井和之(訳). (1991). 現代中国語文法総覧(下). 東京: くろしお出版.
- 刘宗开. (2011). “被 XX” 构式和传统汉语被动结构的对比研究. 高等函授学报(哲学社会科学版)(6), 46-47, 72.
- 陆俭明. (2004). 有关被动句的几个问题. 汉语学报(2), 9-15.
- 吕佩. (2013). “被 XX” 组合研究综述. 菏泽学院学报(5), 66-69.
- 吕叔湘. (1965). “被” 字句、“把” 字句动词带宾语. 吕叔湘(著). (1984). 汉语语法论文集(增订本), 200-208. 北京: 商务印书馆.
- 马静. (2013). 新“被 XX” 结构概述. 焦作大学学报(3), 14-16.
- 马庆株. (1992). 汉语动词和动词性结构. 北京: 北京语言学院出版社.
- 牛顺心. (2004). 汉语中致使范畴的结构类型研究. 上海师范大学博士论文.
- 潘海华, 韩景泉. (2008). 汉语保留宾语结构的句法生成机制. 中国语文(6), 511-576.
- 彭利贞. (1993). 论使宾动词. 杭州大学学报(2), 124-133.
- 彭利贞. (1996). 论使役语义的语法表现层次. 杭州大学学报(4), 101-106, 119.
- 彭咏梅, 甘于恩. (2010). “被双”: 一种新兴的被动格式. 中国语文(334), 57-58.
- 任荣华. (2011). 新型被动结构“被 V 双” 的传播与认识角度研究. 华中师范大学硕士论文.
- 杉村博文. (1999). 论现代汉语表“难事实实现”的被动句. 陆俭明(主编). 面临新世纪挑战的现代汉语语法研究: '98 现代汉语语法学国际学术会议论文集, 350-363. 济南: 山东教育出版社.
- 杉村博文. (2003). 从日语的角度看汉语被动句的特点. 语言文字应用(2), 64-75.
- 尚来彬. (2012). 主观强加事件否定构式“被 X”. 辽宁教育学院学报(5), 80-82.
- 邵敬敏. (1983). “把” 字句与“被” 字句合用小议. 汉语学习(2), 65-68.
- 沈家煊. (2010). 世说新语三则评说——被自杀、细小工作、有好酒. 当代修辞学(4), 93-95.
- 施春宏. (2013). 新“被” 字式的生成机制、语义理解及语用效应. 当代修辞学(1), 12-28.

- 宋春雨. (2014). 日语被动句的误用研究. 哈尔滨理工大学硕士论文.
- 宋绍年, 李晓琪. (1999). 汉语动态助词“了”研究的回顾与前瞻. 陆俭明(主编). 面临新世纪挑战的现代汉语语法研究: '98 现代汉语语法学国际学术会议论文集, 562-567. 济南: 山东教育出版社.
- 陶琴. (2007). 中高级日本留学生汉语被动句的习得研究. 华东师范大学硕士论文.
- 王春杰. (2012). 认识视角下新“被 XX”的语义特征. 广西教育学院学报(1), 71-75.
- 王开文. (2010). 表示反讽的非及物动词被字结构. 语言教学与研究(2), 77-83.
- 王黎今. (2012). 日汉语被动句识解对比研究. 日中对照言語学会(著). 日本語と中国語のヴォイス, 115-127. 東京: 白帝社.
- 王力. (1944). 中国语法理论(上). 上海: 商务印书馆.
- 王力. (1954). 中国现代语法(上). 北京: 中华书局.
- 王力. (1957). 汉语语法纲要. 上海: 新知识出版社.
- 王力. (1958). 汉语史稿(中). 北京: 科学出版社.
- 汪敏峰. (2011). 新格式“被 xx”的词化和演进. 安庆师范学院学报(社会科学版)(2), 52-56.
- 王淑华, 杨仁君. (2011). 关于“被自杀、被就业”等的语言学考察. 宁夏大学学报(人文社会科学版)(7), 44-50.
- 王学群. (2012). 中国語の“被留学”について. 日中对照言語学会(著). 日本語と中国語のヴォイス, 267-282. 東京: 白帝社.
- 王寅. (2011). “新被字构式”的词汇压制解析——对“被自愿”一类新表达的认识构式语法研究. 外国语(3), 13-20.
- 吴凌非. (2002). 论“了<sub>1</sub>”和“了<sub>2</sub>”. 语言研究(1), 23-27.
- 萧国政. (1999). 现代汉语句末“了”意义的析离. 陆俭明(主编). 面临新世纪挑战的现代汉语语法研究: '98 现代汉语语法学国际学术会议论文集, 568-576. 济南: 山东教育出版社.
- 徐杰. (1999). 两种保留宾语句式及相关句法理论问题. 当代语言学(1), 16-29.
- 徐杰. (2006). 被动句与非宾格句式的一致与差异. 邢福义(主编). 汉语被动表述问题研究新拓展, 409-422. 武汉: 华中师范大学出版社.
- 徐来娟, 杨炳钧. (2012). “被 X”格式的层次体系. 语文建设(12), 39-42.
- 闫娇莲. (2008). 现代汉语中“被”“把”同现套用句分析. 辽宁师范大学硕士论文.
- 杨朝丹. (2011). 新兴网络流行语“被 XX”的构式研究. 辽东学院学报(社会科学版)(5), 72-75.
- 杨巍. (2012). 另类“被 XX”格式语义及应用分析. 常熟理工学院学报(哲学社会科学)(3),

91-95.

- 杨炎华. (2013). “被+XX”的句法化及其词汇化. 汉语学习(3), 60-68.
- 于康. (2009). 日汉所有关系被动句与所有物共现的语义条件. 日语学习与研究(4), 2-9.
- 于康. (2013). 三价动词“保留宾语被动句”中的保留宾语的条件——从汉日对比的视角出发. 日语学习与研究(4), 8-13.
- 袁毓林. (2015). 汉语意合语法的认知机制和描写体系. 中国语学(262), 1-30.
- 张国宪. (2006). 补语的句位义探索——关于非可控义. 日中对照言語学会(著). 中国語の補語, 158-179. 東京: 白帝社.
- 张建理,朱俊伟. (2010). “被 XX”句的构式语法探讨. 杭州师范大学学报(社会科学版)(5), 120-123,128.
- 张黎. (1994). 文化的深层选择: 汉语意合语法论. 长春: 吉林教育出版社.
- 张黎. (1997). 什么是意合语法? ——关于意合语法的讨论之一. 汉语学习(1), 58-61.
- 张黎. (2006). 汉语的动相——从补语问题谈起. 日中对照言語学会(著). 中国語の補語, 180-192. 東京: 白帝社.
- 张黎. (2012). 汉语句式系统的认知类型学的分类——兼论汉语语态问题. 日中对照言語学会(著). 日本語と中国語のヴォイス, 211-229. 東京: 白帝社.
- 张媛. (2012). 认知语法和构式语法关照下的“被”字构式解析. 山东外语教学(4), 49-55.
- 赵艳梅. (2012). 新被字句的句式变异和语义隐略. 南京理工大学学报(社会科学版)(4), 87-92.
- 郑庆君. (2010). 流行语“被+XX”现象及其成因. 西安外国语大学学报(1), 41-44.
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室. (2012). 现代汉语词典(第6版). 北京: 商务印书馆.
- 周红. (2004). 现代汉语致使范畴研究. 华东师范大学博士论文.
- 周上之. (2006). 汉语离合词研究——汉语语素、词、短语的特殊性. 上海: 上海外语教育出版社.
- 朱德熙. (1982). 语法讲义. 北京: 商务印书馆. 杉村博文,木村英樹(訳). (1995). 文法講義——朱德熙教授の中国語文法要説一. 東京: 白帝社.

## 英語の文献

- Bybee, Joan L. (1985a). *Morphology: A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.

- Bybee, Joan L. (1985b). Diagrammatic Iconicity in Stem-inflection Relations. Haiman, John(ed). *Iconicity in Syntax*, 11-47. Amsterdam: John Benjamins.
- Croft, William. (1991). *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- C.-T. James Huang, Y.-H. Audrey Li, Yafei Li. (2009). *The Syntax of Chinese*. New York: Cambridge University Press.
- Givón, T. (2006). Grammatical relations in passive clauses. Werner, Abraham. Larisa, Leisiö(ed). *Passivization and Typology*, 337-350. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Goldberg, Adele E. (1995). *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press. 河上誓作, 早瀬尚子, 谷口一美, 堀田優子(訳). (2001). 構文文法論—英語構文への認知的アプローチ. 東京: 研究社.
- Heine, Bernd. (1997). *Cognitive Foundations of Grammar*. New York: Oxford University Press.
- Klaiman, M. H. (1991). *Grammatical voice*(Vol 59). Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George. Mark, Johnson. (1980). *Metaphors We live by*. Chicago: University of Chicago Press. 渡部昇一, 楠瀬淳三、下谷和幸(訳). (1986). レトリックと人生. 東京: 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. (1982). Space Grammar, Analysability, and the English Passive. *Language*58(1), 22-80.
- Langacker, Ronald W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar*(Vol I). *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1990). Setting, Participants, and Grammatical Relations. Savas L. Tsohatzidis(ed). Meanings and Prototypes. *Studies in Linguistic Categorization*, 213-238. London: Routledge.
- Langacker, Ronald W. (1991). *Foundations of Cognitive Grammar*(Vol II). *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1993). Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics*(4), 1-38.
- Langacker, Ronald W. (2000). A Dynamic Usage-based Model. In Michael Barlow and Suzanne Kemmer(ed). *Usage-based Models of Language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications. 坪井栄治郎(訳), 坂原茂(編). 動的使用依拠モデル. 認知言語学の発展, 61-143. 東京: ひつじ書房.

- Langacker, Ronald W. (2008). *Cognitive grammar : a basic introduction*. Oxford : Oxford University Press. 山梨正明(監訳).碓井智子,大谷直輝,木原恵美子,児玉一宏,中野健一郎,深田智,安原和也(訳). (2011). 認知文法論序説. 東京: 研究社.
- Lindsay J. Whaley. (1997). *Introduction to typology : the unity and diversity of language*. Thousand Oaks, Calif. : Sage. 大堀壽夫,古賀裕章,山泉実(訳). (2006). 言語類型論入門—言語の普遍性と多様性. 東京: 岩波書店.
- Sansò, Andrea. (2003). The network of demotion: towards a unified account of passive constructions. Jaszczolt, K. M. Turner, Ken(ed). *Meanings through language contrast*(Vol I), 245-260. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Shibatani, Masayoshi. (1976a). Causativization. M.Shibatani(ed). *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, 239-294. New York : Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi. (1976b). The Grammar of Causative Construction: A Conspectus. M.Shibatani(ed). *Syntax and Semantics 6: The Grammar of Causative Constructions*, 1-40. New York : Academic Press.
- Shibatani, Masayoshi. (1985). Passive and Related Constructions: A Prototype Analysis. *Language*(61), 821-848.
- Shibatani, Masayoshi. (1990). *The Language of Japan*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Stein, Gabriele. (1979). *Studies in Function of Passive*(Vol 97). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

## 言語資料

百度 <http://www.baidu.com/>

現代日本語書き言葉均衡コーパス『小納言』(国立国語研究所) <http://www.baidu.com/>

グーグル <https://www.google.co.jp>

日中対訳コーパス(北京日本学研究中心センター 2002 第1版)

北京大学汉语语言学研究センター語料庫(北京大学汉语语言学研究センター)

[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus)

## 謝辞

本論文の完成にあたり、ご指導とご支援をいただいた多くの方々に謝意を表します。

東北大学国際文化研究科言語文化交流論講座には、2012年4月から4年間お世話になりました。4年間の間に、先生方をはじめ、諸先輩方からご助言ならびに建設的なコメントを絶えずいただくことができました。とりわけ主指導教官である上原聡教授には、本当にお世話になりました。東北大学国際文化研究科言語文化交流論講座で認知言語学を学ぶ機会を与えていただき、研究姿勢から論述の細部に至るまで、学究の道の本義を示していただき、やさしくご指導いただきました。また、研究面だけでなく、精神面でも支えていただき、研究で挫けそうになった時にいつも心温まるご教示をいただきました。さらに、研究のみならず、留学生活に関してもさまざまな面において貴重な助言をいただきました。博士後期課程の入学から、博士論文執筆、完成に至るまで、いつも温かく励ましてくださった上原先生への感謝の気持ちは、言葉では言い尽くせないです。

副指導教官である同講座の江藤裕之教授、副島健作准教授には、ご多忙の中、本論文について大変有益なご指導とご助言をいただきました。ここに深く感謝の意を申し上げます。また、言語コミュニケーション講座のナロック・ハイコ准教授には、論文審査の際に談話の視点から貴重なご指摘をいただき、心より感謝申し上げます。

岡山大学大学院社会文化科学研究科の王安准教授には、本論文について多くのご意見のほか、研究者の先輩として心温まる励ましのお言葉をいただき、厚く御礼を申し上げたいと思います。また、博士後期課程において、多くのご支援とご指摘をくださった同講座の長友雅美教授、佐藤勢紀子教授にも心より感謝の意を表します。

また、2010年9月に来日してから東北大学の入学に至るまでの1年間半の間に、早稲田大学大学院文学研究科の楊達教授には大変お世話になりました。研究のみならず、生活の面においても多くの貴重な助言をいただきました。また、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科の伊藤さとみ准教授のご講義では、形式意味論について考える機会を得て、多くのことを学びました。日々、私を啓発してくださった楊達先生と伊藤さとみ先生に心より深く感謝いたします。

同講座の大友沙樹先輩、大槻くるみ様、及び早稲田大学大学院文学研究科の齊藤遥先輩

に、日本語のチェックや研究方法についてさまざまなご意見、アドバイスをいただき、深く感謝の意を申し上げます。また、同講座の葉秉杰先輩、趙宏杰先輩には、論文の執筆などについてご助言、アドバイスをいただき、厚く感謝の念を表します。

さらに、私が研究に専念できるよう奨学金を提供してくださった日本政府文部科学省と中国の留学基金委に対し、心より感謝を申し上げます。非常に恵まれた研究環境のおかげで、異国にいながらも心細く感じることもなく、充実した研究生活を送ることができました。

最後に、私の留学生生活をずっと応援し、いつも温かく見守ってくれている杭州師範大学の嚴軍教授、両親、兄弟、夫と娘に心より感謝いたします。